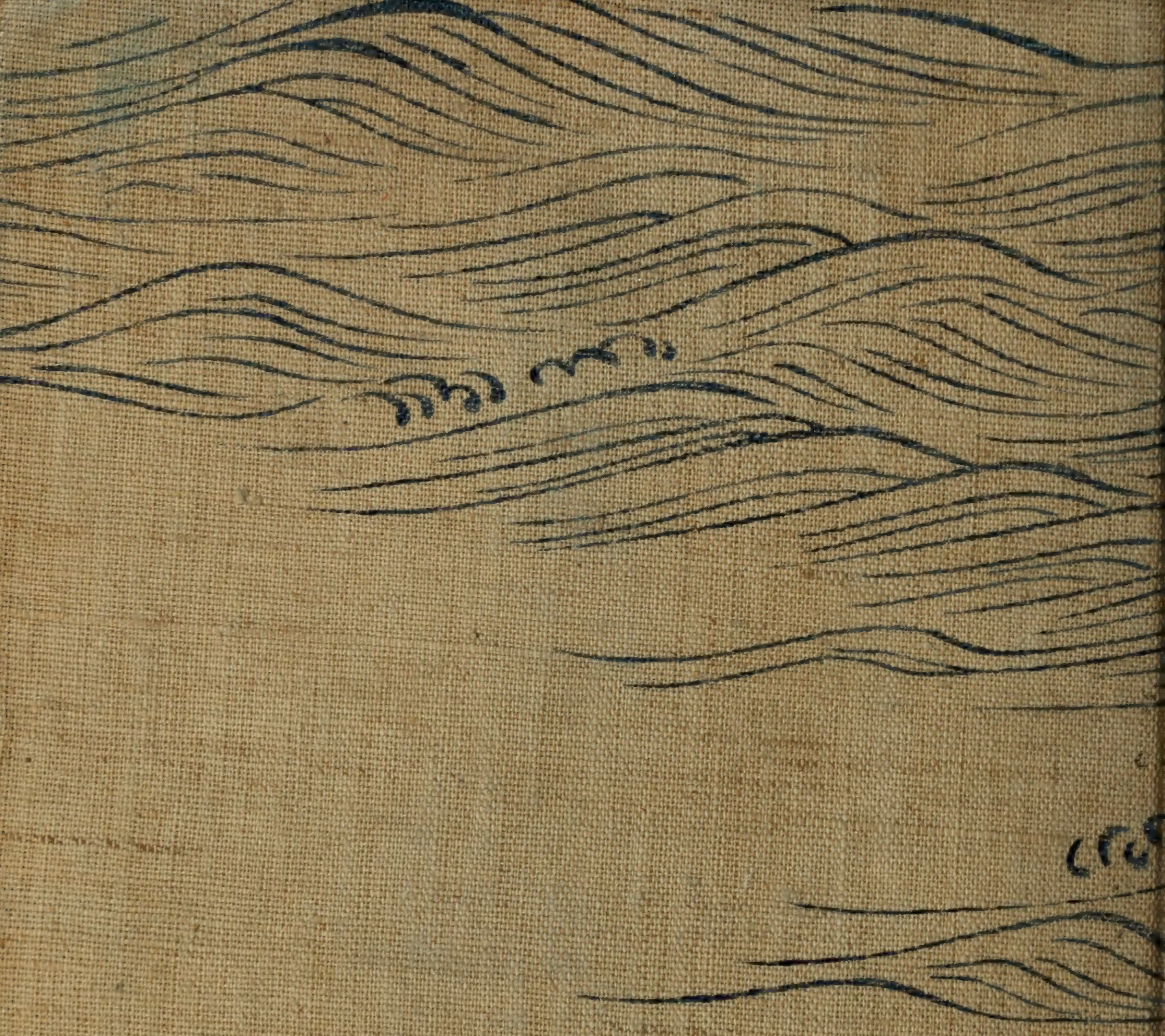




黙阿弥全集

第廿一巻

解説

默阿彌筆報條（告條、引札）の原稿。筆蹟から推せば明治以前のものである。作者の書いた引札は約三百種に上るであらう。時としてかういふ原稿がそのまゝ版下となつたこともあるが、多くの場合梅素玄魚氏によつて版下が書かれた。其水は言ふまでもなく默阿彌の俳名である。次のやうに讀まれる。

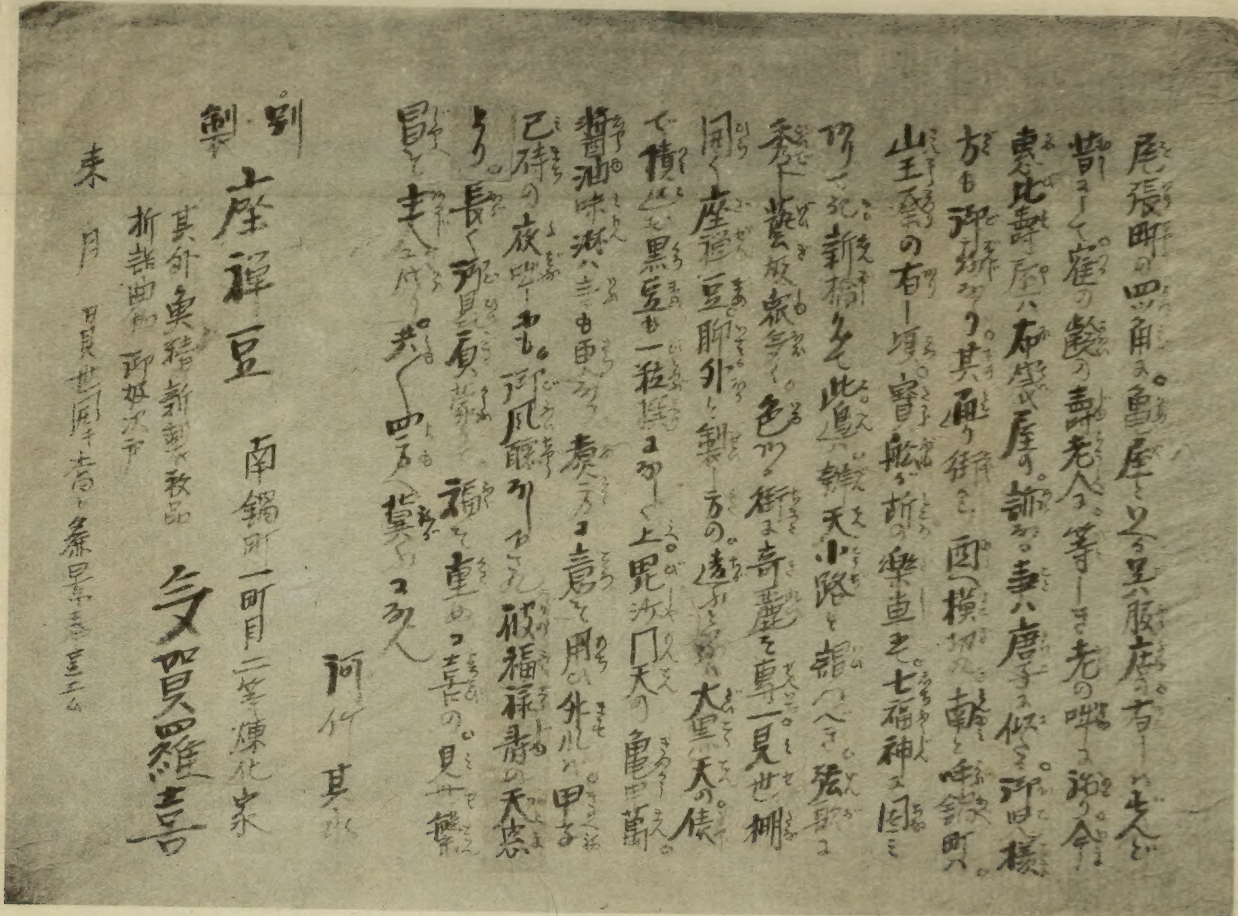
尾張町の四つ角に。龜屋といへる吳服店の。有しはずんど昔にして。鶴の齡の壽老人に。等しき老の咄しに殘り。今惠比壽屋は布袋屋の、跡なる事は唐子に似たる。御兒様方も御存なり。其通り街から西へ横切れ。南と呼鍋町は。山王祭の有し頃。寶船が所の樂車にて。七福神に因みありてか。折橋かけて此邊は。辨天小路と謂つべき。弦歌に秀し藝妓衆多く。色ある町に綺麗を專一。見世棚開く座禪豆。聊外と製し方の。違ふといふは大黒天の。俵で積込む黒豆も一粒撰になした上。毘沙門天の龜甲萬。醬油味淋は言も更なり。煮方に意を用ひ升れば。甲子己待の夜咄しにも。御吹聽なし下され。彼福祿壽の天窓より。長く御贔屓蒙りて福を重ぬる喜の。見世繁昌を主人に代り。共〳〵四方へ冀ふになん。

河竹其水

別製座禪豆　南鍋町一町目二等煉化家　多賀羅喜

其外魚精の新製數品折詰曲物御好次第

來月　日見世開き當日粗景奉呈上候



別製
座禅豆
南鍋町一町目




小猿忠次
河原崎権十郎
百性市兵衛
市川小團次



河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集

第廿一卷

東京
春陽堂刊行

默阿彌全集 第二十一卷目次

挿繪目次

御覧願婦見月盛久龜野草双紙

前編　緑林茂る妙香山に
　　　蝦蟇の妖術

後編　白浪寄る市振濱に
　　　大蛇の怪異

月の鏡に畫面を寫して
名題も其儘雁金の續狂言

兒雷也豪傑譚

初日『兒雷也』は、嘉永五年七月、作者三十七歳の時、河原崎座に於て上演された。豐芥子の歌舞伎年代記には次の如くに述べられてゐる。「繪入讀本兒來也物語十册感和亭鬼武（北馬畫）文化四卯年浪華芝居にて脚色、三代目市川團藏自來也大當り是より市紅家之狂言となす、偏に鬼武の手がらといふべし。其後天保十亥芝和泉屋市兵衞より美圖垣笑顏此作意に假用して盗賊自來也を田舍源氏の光氏の優姿になし出版せしに大當り無程笑顏死去す溪齋英泉筆を取しに是も遠行し嘉永三春柳下亭嗣作して今盛に行はる。鬼武の自來也を當世姿に直せしは美圖垣のはたらきと言ふべし、此度新狂言に仕組彼是添削して大當りを取しに能進齋の筆意格別にして諸見物感心せしなり」と。能進齋は作者默阿彌の事で、本來種員と交際があつたので、「第十編までを大道具大仕掛に取仕組御覽に入れ」たので、評判になり、草取紙も一層世に行はれるやうになつた。藤橋のダンマリ、八鎌鹿六邸の場など特に喝采されたといふ。

書卸しの時の役割は八代目團十郎（兒雷也）、嵐璃寛（高砂勇美之助）、市川九藏（仙素道人、夜叉五郎、持丸富貴太郎）、岩井粂三郎（妖婦越路、傾城あやめ、照田）、淺尾奥山（熊手屋慾四郎、八鎌鹿六）、市川團之助（畑作娘みゆき、太郎女房おしづ）、市川猿藏（熊手屋娘たかれ、月影深雪之助）等。

挿繪にしたのは、豐國筆藤橋ダンマリの場並に兒雷也に扮した九世團十郎の舞臺寫眞である。

大正十五年五月

編者誌す



兒雷也豪傑譚語（兒雷也―四幕）

序幕

妙高山術讓りの場
藤橋だんまりの場

〔役名――首領兒雷也、高砂勇美之助、夜叉五郎、仙素道人、杣四人、妖婦越路、田舍娘小草。〕
（妙香山術讓りの場）――本舞臺一面の山幕、杉の大樹同じく釣枝、すべて越後國妙香山麓の體。こゝに杣四人腰に斧をさし、杉の下に雨宿りして、煙草を呑み居る。山颪にて幕明く。

杣一　何と、今の雨は強い降りであつたなう。
杣二　まだ春だといふに、とんと夕立のやうだ。
杣三　此の雨で雪が解けたら、ちつとは暖かになるであらう。
杣四　まだ〳〵、梅の花が咲くうちは、暖かにならねえ。
杣一　雨が晴れたらば、まだ日が高い、ひと當りやつて行かうか。
三人　それがいゝ〳〵。（ト枯枝を集め火を焚きつける。）
杣二　ときに、此間から評判の、兒雷也といふ泥坊が、此の越路へ入り込んださうだな。

杣二　話しを聞くに、まだ若い奴ださうだが、手下の五六百人もあるさうだ。
杣四　その兒雷也といふ泥坊は、信濃者ぢやあねえか。
杣一　たしか鼠の宿の、持丸長者の所に居た若い衆だといふことだが、いつの間にか大泥坊になつたやら、押込みにもはひるといふことだ。
杣二　どんな大泥坊でも、こちとらのやうに、錢金が無けりやあ、怖い事も恐ろしい事もないな。
杣三　イヤ〳〵、錢金が無くても、怖い事があるぜ。
杣二　そりや何が〳〵。
杣三　此頃妙香山(一)谷川へ、二抱へ程もある蟒が出るとよ。
杣二　ヤア、そいつは怖い話だ。
杣四　何の、貴樣なんぞはそんなに怖がる事はねえ。
杣一　さうよ、呑む事にかけちやあうはゞみより上手だらう。
杣二　違えねえ。昨日も布子を呑んでしまつた。
皆々　ハヽヽヽ。
杣一　ときに皆の者、此の妙香山の絶頂に何か怪しき奴があつて、折々影を見せるさうだ、たしかに此

奴兒雷也の餘類か、但しは尾形の餘類であらうとの事、そやつを召捕れば、一廉の褒美を下さらうとの事ぢや。

杣二 ヤア、そいつア旨い話しぢや。

杣一 隨分ともに、みんなぬからぬやうに、合點か。

杣三 イヤモウ、金儲けなら後へは下らぬこちとら。（ト杣の一空を眺めて、）

杣一 サア〳〵雨が止んだ、出掛けようぢやあねえか。

杣二 早く仕事をしまつて、晩にはうはゞみとせうか。

杣三 又どぶろくか。

杣四 よく呑み度がる奴だ。サア〳〵行かう〳〵。

ト山おろしにて、四人下手へはひる。知せにて、山幕切つて落す。

（山中一ッ家の場）——本舞臺三間の間中足の二重、綺麗なる藁葺の屋根、栗丸太の柱、向う鼠壁三方伊豫簾、左右柴垣、櫻の立木、日覆より釣枝舞臺前に山吹、四ツ目垣、いつもの所枝折戸、すべて此の道具誂へあり、山颪一セイにて道具留る。

唄〽世にすねし深山櫻の一入に、作らぬ姿美しき今を盛りの一重咲き、

ト御入りの合方になり、伊豫簾を捲き上げる。内に妖婦越路さらげ島田、好みの拵らへにて本を讀み居る。合方。

越路　遠近のたつきも知らぬ山中に、時さへ知らぬ白妙の雪の消ゆるを春と思ひ、木々の紅葉で秋を知る、浮世放れし山住みに谷の谺のその外は、誰か我名を呼千鳥、覺束なくも鹿の音や、ましらの聲を友となし浮世忘るゝ身の樂み、住めば何處も都とは、ハテよう言うたものぢやなア。

ト花道より、田舍娘小草、中振袖にて、草苅籠を脊負ひ出て、本舞臺へ來て。

小草　姉樣、やうやく今歸りました、さぞお淋しうござりましたらう。

越路　おゝ待兼ねました、サア／＼爰へ／＼。

小草　アイ／＼。（ト二重へ上り、）モウシ姉樣、もう追つけ入相、圍爐裏へそだをくべませうか。

越路　おゝ、よう氣が附いた、もう日の暮れるに間もあるまい。圍爐裏へ罐子をかけてたも。

小草　アイ／＼。

越路　どれ、讀みさしへ枝折して、夕飯の支度しませうか。

〽八重九重の都にも、まさる山路の花の色、あかぬ眺めに分け入りて、

ト合方、越路本に枝折して花を眺める。小草は圍爐裏の鑵子を自在にかけ、柴を焚く。本釣鐘やはり合方にて花道より兒雷也、袴大小深編笠を持ちて出で來る。

〽行方何處と遠山鳥の、尾さへも霞む花吹雪。（ト風の音にて、花ちら／＼と散る、兒雷也花道にて思入。）

兒雷　雪ならば幾度袖を拂はんと、詠ぜし歌も思ひ出す、越の深山の花吹雪、實に雪の日も斯くやらんハテ一入の眺めぢやなア。（ト本舞臺を見て、）花に浮れて思はずも、迷ひ入つたる妙香山、人家稀なる山中に、實に珍らしきあづま家は浮世をさけし隱者なるか、何にもせよ麓へ下らば餘程の道幸ひ今宵の宿りを賴まん、さうぢや／＼。

〽拂ふ袂の袖筐、たづさへて柴の戶ほそにたゝずみて。

此の家の內へ案內申す。

越路　コレ小草、表へ誰やらござんした、見ておじや。

小草　アイ／＼。（ト枝折戶の傍へ來て、）どなたでござります。

兒雷　春の日永のつれ／＼に、櫻狩してうか／＼と、家路を忘れし者、一夜の宿をお賴み申す。

ト小草こちらへ來て、

小草　姉さん、聞かしやんしたかえ。
越路　おゝ聞きました〳〵。（ト二重よりおりて、）何れのお方か知らねども、それは嘸かし御難儀ならん
　然し山家の事なれば、夜の物の御不自由を、お厭ひなくばお宿をばお貸し申しませう。
兒雷　それは早速忝い、宿りをお貸し下さらば、簀の子の端でも苦しうござらぬ。
越路　それ、御承知ならば、サア〳〵、是れへ。
兒雷　然らば御免下されい。
　〽頼む小蔭の花の香に、浮れ心の時めきて、
　ト兒雷也内へはひり、越路を見て兒雷也うつとりと思入。
越路　エヽ。
　テモ美しい。
兒雷　イヤ、山櫻ぢやなア。
　〽迷ひし道も又迷ふ思ひの色ぞ縁の端。（ト三人二重へ上り、よろしくある。）
越路　コレ小草、澁くともお茶一つ。
小草　アイ〳〵。

兒雷　アイヤ、必ずお構ひ下さるな。（ト小草茶をくみ差出す。）ヤレ〳〵嬉しや、宿を貸して下さらずば、木の根を枕と思ひしに、かゝる情に預かりて、誠に案堵致してござる。

越路　御宿申したばかりにて、人里遠き山家なれば、おもてなしさへ心に任せず。

兒雷　イヤ〳〵珍味厚味の馳走より、はるかにまさる此の澁茶。

越路　とは言へ何ぞおもてなしに。おゝそれ〳〵、山家のつれ〴〵お慰み。コレ小草、常々そなたが唄ふ鄙びた節もお慰み、唄うてお聞かせ申しやいなう。

小草　アイ〳〵。

越路　とても の事に踊りもとも〴〵。

小草　そんなら踊りながら、唄ひませう。

兒雷　サア〳〵、所望ぢや〳〵。（ト小草、染めの手拭を冠り、前へ出る。）

唄〽村で一番庄屋殿の娘、花の姿に若い衆達が、手折り焦れて袖褄引いて太鼓鳴子で張番が附いた、太鼓と鳴子の音が、でん〳〵がら〳〵どんがらが〳〵、引かねば音もよし袖や褄わけもなや。

ト よろしく振あつて納まる。

よウ〳〵、面白い事でござつた。
越路　イヤモウ、お恥かしうござります。
兒雷　年端も行かぬに、なか〳〵感心な事でござる。
小草　有難う存じまする。
越路　サア、日も暮るゝに間もあるまい、そなたは早う内へ戻りや。
小草　アイ〳〵。
兒雷　スリヤそれなる少女は外々より。
越路　此の山の麓より、毎日遊びに參りまする。
兒雷　ハテ、子供の足で餘程の道を。
越路　何のまア、田舍に育ちますれば、隣り歩きでござりまする。
小草　そんなら姉さん、又あした參りませう。
越路　オヽ怪我せぬやうに早く行きや。
小草　アイ〳〵。
〽おさり小鳥もねぐら啼き、麓をさして急ぎ行く。

トかすめて山おろし、小草籠を脊負ひ、花道へはひる。

兒雷 さて計らずも道に迷ひ、かゝる所に宿りをなすは。

越路 これも深山の櫻故、いぶせき賤が羽生の小家。

兒雷 一樹の蔭の花の宿。

越路 一河の流れも千々の縁。

兒雷 思ひ掛けなく、今宵は夜と共。

越路 隣り知らずに、

兒雷 打ちくつろいで

二人 話しませう。

唄 〽いつしか心置く霜に、解けて流れの水ぬるむ。

ト兩人思入。越路誂へのかまから行燈へ火をともす。

兒雷 まづ聞き度きはぬしの身の上、斯る深山にたゞ一人浮世をのがれて居らるゝは、いかなる譯か苦しからずば物語られよ。

越路 そのお尋ねにほだされて、お話し申すも涙の種、思ひ出せば五ツの年、父母共にみまかりて力と

すべき人もなく、此の深山路に住居して心細くも朝夕の煙りの代に糸車、くりなれし身の甲斐もなく、いつしか髪のかざりも亂れしまゝ、曇る鏡に我影の寫るを親と語らうて、徒に年月送る身を、不便と思うて下さりませ。

兒雷　聞くも哀れな物語り、さこそと心察しやられ、思はず袖を濡らしてござる。

越路　よしない事をお話し申し、山路の憂さは晴らさいで、却つて哀れを添へまして、粗相な事を致しました。サア／＼晝のお勞れ休め、早うお休みなされませ。（ト立掛るをとめて、）

兒雷　アイヤ、暫く。

越路　御用でござりまするか。

兒雷　サア、今の話しを聞くに付け、我身の上も一通り。（ト、妖婦行かうとするを入替り留めて、）聞いて下され。（ト合方、兒雷也思入あつて、）何をか包まんそれがしは、隣國信濃更科家へ仕官致す者なるが所用を兼ねて此山に櫻狩りして思はずも、此の山中に分けのぼり、道に迷ひて日暮に及び、一夜の宿りを頼みし折、ふとそもじの容貌に心迷ひて、便りもあらばと思ふ折柄、今の話しを聞くに彌増す我思ひ、越の白根の胸の雲、晴らしてたもる心あらば、國へ伴ひ宿の妻、色よき返事を聞かせて下されい。

〽花の宿りの下伏に露の情のあるならば、濡れなんものと寄添うて、亂れかゝりし仇名草。

ト兒雷也妖婦に寄添ひ、よろしくある。

越路　賤しい此の身をそのやうに、呉々も云うて下さりまするは、冥加ないとはいひながら、私があなたへ御返事は。

〽仇し心を打ちつけに、云はぬと云ふに彌増す花の。

ト妖婦思入あつて、下手臺賓木の櫻の技を折つて來て、兒雷也に差しだし。

コレ御覽じて下さりませ、深山櫻は深山にて、見れば風情もある樣なれど、都へうつさば色香も薄く、いかで眺めになりませう。

兒雷　イヽヤ、都の花にもまさりし深山木、是非とも手活に所望がしたい。

越路　スリヤ、花守りの無き身故。

兒雷　望みかゝりし上からは。

越路　許しなくとも。

兒雷　手折つて手活に。

越路　花に嵐でござんすわいなア。

〽つれなく歸る越路潟。

ト唄の切にて、越路振切り行きに掛る、兒雷也刀を拔きかける。越路見て行燈へ手をかけ、兩人思入、替つた合方になり、越路思入あつて行燈を下手へ持來り、以前の本を取つて讀む。兒雷也むつとせし思入

兒雷　合點の行かぬ女が振舞、察する所狐狸妖怪の、我をたぶらかさんとの仕業なるか。それとも誠の女ならば、一旦申し掛けたる武士の意地、我が望みを叶へくれるか、返答に依ては、生死の境。サヽどうぢや〳〵。

〽木陰に勇む若駒の、引止めらるゝ片手綱、櫻の嵐花吹雪月も眺めの春の夜の、色氣調ふ風情なり。

ト早めたる合方、兒雷也刀を拔き振上げる、越路見向きもせず、誂への籠枕を打割り、中より小筒鐵砲を出し、筒先きを兒雷也に向け、本を讀み居る、兒雷也びつくりして切らうとしても切れぬ思入。

兒雷　ヤア怪しき女が不敵の振舞、イデ此の上は。

ト又刀を拔かうとする、ドロ〳〵になり、兒雷也の五體すくみ、動かれぬ思入、越路見て、

越路　愚かの引行。（ト合方になり、）いか程武勇烈しくとも、我に對して無益なり、なか〳〵大事を抱へ

し身にて、女に心を動かす事、是大丈夫の魂ならず。我御身に語るべき仔細ありて、此の所へ招きたり。今改めて對面なさん。

兒雷 何を小しやくな。

トとゞ刀を抜き切つて掛るを、あちこちと身をかはし、大ドロ〳〵にて、眞中の壁へはひる。兒雷也苦しみ、舞臺能き所へもんぜつする。大ドロ〳〵、知らせにつき舞臺一面居所替りになる。

（山中術譲りの場）＝本舞臺二重欄間を引上げ、杉の釣枝に替り、左右の柱杉の立木に替る。正面の襖引抜き深山の岩組、杉林になる。蹴込み打返し岩組に替り、上下とも岩組の張物、二重眞中に大いなるがま石を押し出す。總て好みの通り、道具留ると、ドロ〳〵、竹本になり、

〽怪力亂神は語らずといへども、怪異不思議の無きにもあらず、妖魔の所爲か目前に、賤が伏屋も雲霧と消えて跡なき妙香山、梢にあらき小夜嵐、ぞつと身に泌み心附き、

トドロ〳〵にて、兒雷也心附き邊りを見廻し。

兒雷 ヤヽ、今までありし賤ケ家と、共に妖婦の影もなく、木立するどき此の深山、ハテ心得ぬ。

〽あたり見廻す後の方、

道人　尾形弘行々々。

〽呼はる聲に。

兒雷　ヤア、聲あつて形なく、我が本名を呼び立つるは。

〽合點行かずと窺ふ折柄、又もや山谷鳴動して、かたへの岩石二つに割れ、現はれ出し異形の道人、弘行きつと打見やり。

ト大ドロ〳〵、がま石二つに割れ、中より仙素道人白髮かづら、木の葉を着たる好みのがま仙人の拵へ、頭へがまを載せ、岩臺の上に住ひゐる、兒雷也見て。

頭はおどろの白髮に、凡眼ならぬ異形の老人、そも御身は何人なるや。（ト床の合方、こだま入り）

道人　我こそは此の山に數百年の星霜を經て、霞を呑み年久しく霧を起し、雨を呼び、雲に乘じて宇宙の間を飛行なす事自由自在、又平地を大海となすがまの妖術を行ふ、仙素道人といふ者なり。

〽聞くに弘行頭を下げ。

兒雷　ム、、凡人ならずと思ひしに、仙素道人にてありけるか、さては今の賤の女は。

道人　汝が武術を試さんと、我妖術のなす所。

兒雷　シテ何故に某を、此の所へ招かれしや。

道人　ホヽテ不審な尤も、今其方兒雷也と異名を呼んで盜賊なし、軍用金を集むれども、非義非道を働かず、富みたる者の金銀を奪ひ、貧しき者に施す心底、感ずるにあまりあり、大望成就の助けにと我行ふ妖術を傳へん爲め、又二ツには、汝が父たる尾形弘澄、無念の最期遂げたるあらまし、告げ知らさんと招きしぞ。

兒雷　スリヤ此の場にて、父の最期のあらましを。

道人　語り聞かせん承れ。

〽語り聞けんと座を構へ。

汝が父たる尾形左衞門弘澄は、はるかに遠き筑紫潟益城郡の城主にして、四海に心を掛けたれども事成らずして半途に落命、イデ其頃は應永五年の末つ方秋の事なりしが、謀叛のきざし早はて鎌倉管領の嚴命うけ、その頃都在番たる月影照時更科雅光討手を蒙り、筑紫に向ひ合戰數度に及びし所、無慚や尾形は兵糧盡き、飢渇に及ぶその虚をはかり。

〽稻麻竹葦と押し寄する、さしもの尾形も敵しがたく、鬼神の荒れたる勢ひに、近づく敵も無かりしに。

運の盡きか弓矢一ツ飛び來り、無慚なるかな弘澄が、頭にはつしと立つ。

〽よろめきながら廣緣先に、突立ち上り。

ヤア尾形左衞門弘澄が、最期の程を見物せよと。

〽大音聲に呼はつて太刀取直し腹に突き立て、血走る眼に齒がみをなし、終に空しく成り果てたり。

其時汝は三歳にて、畑作が懷ろに抱かれ、虎口をのがれ民家に下り、人となつたる年月を、算へて見れば早二十歳の昔語りとなつたるか、思へば夢の世の中ぢやなア。

〽今見る如き物語り、兒雷也思はずこぶしを握り。

ト仙素道人よろしくある、兒雷也無念の思入。

兒雷　その古を目前に、見るにもまさる御物語り、父が敵は更科月影、見よ〳〵今に旗擧げなし、當家を始め鎌倉管領討亡し、修羅の御無念晴らさせ申さん、思へば無念、口惜しやなア。

〽血走る眼に無念の形相、異人ははたと小膝を打ち、

道人　ホヽヲ勇ましゝ〳〵、さりながら、我が行ふ術を讓り與へん。是を行ひ助けにせよ。

兒雷　スリヤ妖術を、お讓り下されんとな。

道人　その身を清めて會得せよ。

兒雷　ハッ。

〽かたへの岩角こぶしを以て、ちやうと打割り清めの切火、打ちかけ〳〵祕密の九字を切り、

ト道人座したるまゝ岩臺の角を打割り、兒雷也の身體へ切火を打ち、九字を切る。兒雷也道人と向ひ合ひ、同じやうに九字を切る。

道人　南無さつたるま、ふんだりぎや。

兒雷　南無さつたるま、ふんだりぎや。

道人　守護せうでん。

兒雷　守護せうでん。

道人　はらいそ〳〵。

兒雷　はらいそ〳〵。

〽傳うる術の奇特にて、ウンとばかりに悶絶なせば、

ト大ドロ〳〵にて、空より誂への星をあひ引にて兒雷也の後へ引いて取り、掛ろんせうにて兒雷也悶絶する。

道人　會得なせしか、コリヤ弘行。

〽呼はる聲に心附き。（ト道人活を入れる、ドロ〳〵にて兒雷也心附き、）

兒雷　ムヽ、物はためし。

〽以前の岩を前に直し。

南無さつたかまふんだりぎや、守護せうでんはらいそ〳〵。

〽祕文を唱へ印を結べば、不思議や岩角蛙に變じ飛交ふ様に横手を打ち。

ト兒雷也九字を切ると、ドロ〳〵にて件の岩仕掛にて蛙となり飛ぶ。

ハヽア、かゝる妖術受けつぐ上は、龍につばさを得たる心地、アラ嬉しや悦ばしやなア。

〽悦び勇めば、道人重ねて、

道人　此の妖術を行ふ時、彼の盲蛇と唱ふる双頭の青蛇の、血汐を服する時は、忽ち術の破れとなる、恐るべし〳〵。然るに此の程黒姫山より、年經し大蛇夜な〳〵丑滿つ過ぐる頃、彼の谷間より爰に來たり、我を惱ます事しば〳〵なり、是を討たんには、人力ならでは退治難し、汝師弟の因を思はゞ、大蛇を討ちて我を助けよ。

兒雷　ハツ、仰せにや及ぶべき、たとひ年經る大蛇にせよ、飛道具にて打取らんな、此の弘行が手裏にあり。

道人　ホヽオ恩義を忘れぬ汝が誠忠、今より影身に附添うて、猶行末を守るべし。
兒雷　スリヤ影身に添うて大望の、助けとなつて下されんとな、チエ、忝ない。
道人　猶も祕文を記せし一卷、今より汝に讓り與へんと
〽一卷を取出し、渡せば弘行押し頂き。
と道人懷中より一卷を出す、薄ドロ〳〵、仕掛にて、件の一卷兒雷也の手へ來る。
兒雷　スリヤ、是が。
ト一卷を開き見ろ、上下メリヤス、兒雷也祕文をよく〳〵見て、所々是はといふ思入、道人敎へる思
入あつて、
道人　會得なせしか。
兒雷　ムヽ。
道人　會得致さば、試みよ。
〽心得たりと立上り、又もかたへの岩角打ちかき、
ト兒雷也二重へ上り、下手の岩角を扇にて打ちかき、前へ置き、祕文を唱へ九字を切る。
兒雷　ハツ。

南無さつたるまふんだりぎや、守護せうでん〳〵。

〽授くる呪文唱ふれば、忽ち怪しの鳥と變じ、虚空はるかに飛行する妖魔の術ぞ、

ト兒雷也印を結ぶ。ドロ〳〵にて、件の岩仕掛にて山鳥と變じ、合引にて引上げ、中空にて舞ふ。道人三匹の蛙をかゝへて立身、兒雷也は卷をサツと開き、兩人鳥を見上げ、きつと思入。三重誂への鳴物になり、兩人を載せたまゝ、此の道具一面にせり上る。と能き程に、山幕を振冠せ、兩人を隱す、山おろしはげしく、ばた〳〵にて、上手より以前の杣四人ながら風に吹き落されし體にて出來り、一人舞臺にてかへりながら出る。

杣一　ヤレ〳〵、今の風は恐ろしい風ぢやあないか。

杣二　恐ろしいの恐ろしうないのと、あのがけぶちから、此の谷底まで吹落された。

杣三　何にしろ怪我がなくつてよかつたが、たゞ事ではないぜ。

杣四　又誰ぞ山神の谷で、出合ひでもしやアしねえか。

杣一　何でも一通りの風ぢやアねえ、鼻高樣でも怒らしやつたか。

杣二　但しさつき噂をした、うはゞみでも出かけたのか。

杣三　さういや生臭い風だ、アヽうはゞみに違ひない。

杣四　イヤ、そいつァ大變だ、呑まれないやうに用心しろ〳〵。

ト風の音はげしく、空より色々の鳥舞下りる。

杣一　アレ〳〵、ねぐらを放れて色々の鳥が。

杣二　ほんに、うろ〳〵舞うて居るは。

杣三　風に羽がひが利かねえのか。

杣四　何にしても珍らしい。

四人　こいつァけぶな事だなア。（ト山おろし、早笛になり、上手岩蔭より大きなるうはゞみ頭を出す、四人見て。）そりやうはゞみだ、逃げろ〳〵。

ト四人あわてながら花道へ走りはひる。うはゞみ舞ひ居る鳥を見上げ、口を明けて行く、鳥仕掛にて羽交切れて、ばつたり落ちる。風の音打上げ、大ざつまになる。

大ザツマ〽それ岩石嶮岨にして道せまく、行きなやむ妙香山の九十九折、苔むす谷の碧潭に、年經る大蛇わだかまり、空飛ぶ鳥も忽ちに、毒氣に弱る有樣は、物凄くも又恐ろしい。

ト早笛になり、岩かげよりうはゞみ段々と出る。よき程に、本鐵砲の音、ぽんせう火澤山、うはゞみに當り、ばつたり落入る。早笛打上げ、山幕切つて落す。

（藤橋ダンマリの場）――本舞臺三間の間藤橋、上下嶮岨なる岩組、うしろ黒幕、上の方一間の猪小屋、下の方藪疊、諸所に松の立木、日覆より釣枝、上手霞付きの岩組、すべて妙高山の麓藤橋の體、眞中に兒雷也、大百日、着附袴、陣羽織、附太刀、雲面の兒雷也の拵らへにて、鐵砲を突き、谷底を見込み居る見得、誂への道具、鳴物にて道具留る。

兒雷　たしかに手ごたへ、心地よやなア。

トきつと思入れ、風の音はげしく、下手の藪より指金の小鳥大分舞ふ。下手藪疊を押し分け、高砂勇美之助、着込み鎧下、武者だち、附太刀、鹿の頭を冠り、竹弓を持ち半身出る。是と一時に猪小屋の筵を引きちぎり、夜叉五郎、大百日、糸だて丸ぐけ、大小にて出で、三人一時の見得。誂らへの鳴物になり、兩人窺ひ寄つて兒雷也と行當り、鐵砲と弓とをかせにダンマリの立廻りよろしくあつて、五郎勇美之助刀を拔き兒雷也へ切つてかゝる。兒雷也印を結ぶ、ドロ〳〵にて兩人たぢ〳〵となる。兒雷也そのまゝ藤橋の眞中へ消える。掛煙硝立上り、兩人顏見合せきつと見得。鳴物替つて兩人立廻りよき程に縫ひぐるみの蝦蟇出て、此の中へはひり、兩人蝦蟇をかせに立廻り、トゞ兩人一時に蝦蟇を蹴返す　橋の上より切穴へ落ちる、兩人谷底を見込むと、ドロ〳〵になり、後ろ黒幕を切つて落す奥深に山の書割、空へ火入りの虹あらはれる、兩人是を見上げ左右へ別れ、足を踏み出すを、木の

かしら、上手に五郎刀をかつぎ、勇美之助刀を差付け、兩人引ばりの見得にて、よろしく、

ひやうし幕

ト此の幕誂への遠山櫻の花見幕、ドロ〳〵にて幕の引付より、以前の蝦蟇出て花道へ行き、切穴の上へ乘ると、ドロ〳〵にて蝦蟇をせりおろし、掛煙硝立つ。やはりドロ〳〵、件の切穴より兒雷也棒茶せん、紫の鬘頭巾、羽織、衣裳、大小、庭下駄、好みの拵らへ、すつぽんにて現はれる。此の時兒雷也の上へ合引にて蝶二羽舞ふ、兒雷也是を見上げながら、懷ろより口紅の長文を出し、さつと開き是をキツカケに誂らへの唄になり、賑やかなる鳴物になり、兒雷也文と蝶とを見ながらよろしく花道へはひる。鳴物打ち上げ踊り地にてつなぎ、道具出來次第、知らせにつき、道具幕を切つて落す。

二幕目　新潟熊手屋の場

同返し　同海上元船の場

〔役名〕——更科都守之助實は兒雷也。太鼓持八百八、同八後平、牛の彌忠太、宿屋手代庄八、八鐘庄六、熊手屋歌四郎、富貴太郎、捕手、組子、遣手お爪、新造、仲居おそ澤、おつぎ、新造四花、同小

ぎく、同早百合、禿しげり、傾城あやめ太夫、娘たがれ等。）

（新潟熊手屋の場）――本舞臺二重正面長のれん、上手一間の障子屋體、一面に雪降り、下手格子、いつもの所門口、熊手屋といふ掛行燈、櫻の立木、同じく釣枝、すべて新潟揚屋店先の道具、踊り地にて幕明く。と仕出し大勢出て、

仕〇　何と久太、けふはきつう冷えるでないか。

仕□　サアかういふ日は、鴨でもしめて、きゆうと一杯やり度いものぢやなア。

仕△　オヽソレ〳〵、そんならおれの内で、暖かいものでやらうか。

仕〇　イヤ〳〵、貴樣の所より、此の熊手屋の臺所ではどうであらう。

仕△　それがよい、サア〳〵來やれ〳〵。（ト下手へはひる。お光お次お竹お松出來り、）

お光　サア〳〵皆さん、爰で暫く暢氣をせうではないかいなア。

お次　それがよからうわいなア、然し今日は更科のお殿樣が、太夫樣と一緒に濱手の別莊へ雪見にお越しなされたが、モウ程なうお歸りに間もあるまい。

お松　イヤモウ、こちの旦那程意地の惡い怖いお方はない、又アノ更科のお殿樣は、それは〳〵お情深いお殿樣、それに引かへ此の間から、アノ放れ座敷に居續けの、彌忠太樣とやらいふ田舍大盡。

お竹　そりや知れたこと、お殿様はお大名、彌忠太様は田舍侍、すつぽんとお月様ほど違ふわいなア。

お光　是はしたり、お客の事は云はぬもの、旦那のお耳にはひつたら大抵の事ではない、チトたしなんだがよいわいなア。（ト奥より男一人出て來て、）

若菜　今奥の二階から見た所が、もうそこへお殿様がお歸りなされますぞえ。

皆々　マア、そんなら殿様が。（ト向うを見て、）

お光　オヽ、向うからお殿様が、太夫様と一緒にお歸りなされるわいなア。

皆々　それ〳〵、殿様のお歸りぢや〳〵。オヽイ〳〵。

ト誂への鳴物になり、花道よりあやめ太夫、傾城裲襠駒下駄にて、太鼓持八太八長柄をさしかけ、八後平四ツ這ひになり、脊中に碁盤をくゝりつけ、新造小ぎく碁笥を持ち、八後平の首へ紅の紐を付け引いて出て、兒雷也中月代棒茶筅、衣裳、羽織、小さ刀、庭下駄、好みの畫面の拵らへ、新造口花振袖新造にて、長柄をさしかけ、禿しげり碁笥を持ち、新造早百合、刀を持ち、他の新造塗盆に雪の蛙を載せ持出る。近習四人煙草盆、脇息、刀掛、褥を持ち、仲居遣手附き、花道にて、

兒雷　越路は雪の名所と、櫻に積る銀世界。

あや　君が情に幾夜半も、わけて嬉しく白雪の、木毎に咲けるむつの花。

八太　蛇の目をあけて我物と、思へばかろき傘の雪。
八後　碁盤を脊中に四ツ這ひは、犬の足跡雪の梅。
小菊　結び付けたる紅紐の、引手もたゆき雪車。
口花　いやなお客を振行くは、差掛け金の花吹雪。
しげ　黒と白との雪衣。
早百　まだ春寒き駒下駄に、雪の素足を踏み出し。
大和　ほんにつかねし白雪の初蛙。
近一　うまく持てゝも振られても、通ひ來る〳〵雪の廓。
近二　九年面壁居續けに、尻を据ゑたる雪だるま。
近三　二つ枕に三つ蒲團、しつぽり解けた雪の肌。
近四　惚れた〳〵と雪棹の、長く延した鼻の下。
お光　まだ春寒き駒下駄を、直した後の雪見酒。
お次　ついでこぼるゝお手許も、拂はでそつと笹の雪。
お竹　出すとはいへどつかみ手が、御祝儀澤山雪の山、すべらずこけぬお大盡樣。

しげ　アイー。

あや　しげり、おぢや。

皆々　行かうわいなア。

兒雷　そんなら、太夫。

皆々　まづ〳〵揚屋へ。

ト右の鳴物にて居直り、兒雷也あやめ太夫上手へ住ふ、女形婆盤を解き兩人の眞中によろしく住ふ。
踊り地になり。

兒雷　コレ太夫、此の頃より降り續く雪を幸ひ居續けに、熊手屋の濱手の別莊、佐渡を見渡した雪景色よい眺めであつたなう。

あや　殿樣のおつしやる通り、内の庭とは事變り、面白うござんしたわいなア。

近一　濱手の庭の雪打に、新造江花がすべつたり。

近二　あを向けにどつさりと、どこも彼處も眞向きの開帳。

江花　わちき獨りを大勢して、ひどい目に、覺えて居なさんせ。

早苗　其雪打は何處へやら、おいらんと殿樣が碁に打入つてのお樂しみ。

大和　四角四面の碁盤の上、お手が冷たうなり相なもの。
お竹　お歸りまで勝負がつかず、八後平樣の脊中へ碁盤をくゝりつけ、
八太　雪の中を歩きながらも、引くのつくのとばちく。
八後　四ツ這ひになつて八九丁、腰がめりく致します。
兒雷　イヤモウ辛抱のない奴ぢや、晉の世の寸質といふものは、石寶山にて仙人の碁を打つを、たゞ一番と眺めて居る內、突いて居た斧の柄が朽ちたとある、それほどに氣を長うせねば面白からぬもの、何と太夫、勝負をつけて見ようではないか。
あや　さいなア、こちらは面白うござんすが、皆さんが濟まぬ顏つき、コリヤ後の事にして酒事がようござんせうわいなア。
八太　左樣ともく、碁に打入つておいでなすつては、御酒宴が始まらぬ。
八後　何ほう雪の景色がよくても、御酒がなくてはお慰みになりませぬ。
兒雷　然らば皆の者が勸めに任せ、奥の座敷で酒と致さう。
八太　そりや、御酒宴だく。
兒雷　サア太夫も一緒に。

あや　そんなら殿様。
皆々　サア、おいでなされませ。
ト唄になり、兒雷也始め皆々奧へはひる。と花道より富貴太郎、羽織着流し、一本ざし手拭な冠り、下駄がけ、田舍大盡の拵らへ、宿屋の手代付いて出來り、
手代　モウシ、旦那樣、音に聞えし新潟の繁昌、賑やかな事でござりませう。
太郎　聞きしにまさる繁華な色里、さうして熊手屋といふは、何處でござる。
手代　ハイ、熊手屋は向うの一番大きな家でござります。
太郎　どうぞ早く案内を賴み申す。
手代　ハイ〳〵畏りました、サアお出でなされませ。（ト兩人本舞臺へ來て、）コレ〳〵、お賴み申しませう。お客をお連れ申して來た。
ト踊り地にて、奧より仲居お光出て、
お光　これは〳〵、ようお出でなされました。サア〳〵こちらへお通りなされませ。
お次　サアあなた、おれへお通りなされませ。
太郎　そんなら許さつしやれ。（ト上手へ住ふ。）

手代　ときに仲居衆、此のお客様は信州のお大盡様ぢや、此の熊手屋のあやめ太夫を買ひ度いとおつしやる故お連れ申した、よろしく頼みます。

お次　それはまア〳〵、よう入らしやいました、モウシ〳〵お爪どん〳〵。

お爪　アイ〳〵、何でござんすえ。（ト奥より出て來る。）

お光　モウシ此のお客様が、あやめさんをお名ざしでお出でなされました。

お爪　何ぢや、あやめさんをお名ざしぢやとか。（ト太郎を見て、）これは〳〵あなたよう入らつしやいました。誠にお氣の毒でござりますが、おやめさんは信州更科家の若殿様が此の間からの御逗留で、揚詰めでござりまする。どうぞ外の太夫さんになされて下さりませぬか。

太郎　その更科家といふは、手前共が國の領主、更科郡守之助殿、越後遊覽と聞いたが、扨は此の家に逗留してあやめ太夫を揚詰とあれば、こつちも又外の太夫は望みにない。いかに大名でも、一生爰に居續けでもあるまい。更科が大名ならこつちも持丸の富貴太郎というて、鼠の宿の大庄屋、郡守殿が歸るまで逗留する程に、あやめ太夫を買はせて下され。

お爪　それはもうお安いことゝ、お殿様がお歸りの上はあなたへお出し申さいで何と致しませう。コレ仲居衆や、結構なお大盡様、早う御酒を持つて來なさんせ。

お次　アイ〳〵、合點でござんす。モウシ〳〵、皆樣お客樣でござんすぞえ。（ト云ひ乍ら奧へはひる。）

お爪　モウシお宿の御手代さん、あなた御苦勞でござります。

ト奧より仲居、肴、銚子などを持らでゝ並べる。

サア〳〵あなた、召上られませ。（ト捨ゼリフにて、酒盛りになる、奧より八太八八後平出て、）

二人　これはお客樣、ようこそいらつしやりました。

太郎　イヤア、大分大勢出かけたが、さうしてお手前達は。

お光　アイ、此の二人は太鼓持さんぢやわいなア。

太郎　なに、太鼓持、アゝ聞えた、雷の供でもする人か。

お次　イヱ〳〵、太鼓持といふは、お客の座敷で藝當をする者でござりまする。

太郎　アゝ男藝者か、よし〳〵、サア一つ呑まつしやれ。

八太　これは〳〵有難山の鳶烏とは、どうで有馬の水天宮々々。

八後　やかましい、どれ、私も頂戴鏡立と致しませう。

太郎　イヤ、誠によく喋べる藝者だ。ハゝゝゝゝ。

八後　さうしてお大盡のお合方の、太夫樣はどなたでござりまする。

お竹　サイナア、あやめさんがお名ざしで、揚詰のお客がお歸りまで、御逗留ぢやわいなア。
八太　それは誠に御執心な事でござりますな。
お竹　其やうにおつしやる事なれば、お座敷ばかり勤めて、お逢はせ申しませうが、其替り皆の者へ御祝儀がなければ、なア皆さん。
皆々　左樣々々、何でも御祝儀が肝腎でござります。
太郎　なに祝儀か、承知いたした。何分賴みます／＼。（ト辭儀をする。）
お爪　モウシ／＼貴方がお辭儀をなさるのぢやござりませぬ、皆の者へ花をおやりなさるのでござりまする。
太郎　なに、花をやれ、花でよからうかな。
お爪　エヽモウ、花といふのは、御祝儀の事でござりまする。
太郎　なに、祝儀の事を當所では、御辭儀と申すか、そんなら早くさういへばよい事。よい／＼その祝儀の金は澤山ある。コレ、そこな女の番頭、盆を貸して下され。
ト塗盆を出す、太郎打違より二十五兩包みを出して二ツに切り、盆の上へばら／＼と明けて。
サア、是でよいやうに賴みます。



お爪　是はまア澤山に、モウシどなたも旦那の御祝儀、私が預かつておきますぞえ。

皆々　ヘイ〳〵、旦那有難うござり升する。（ト皆辭儀をする。）

太郎　ハア丶、是がお辭儀ぢやな。

皆々　左樣でござりまする。

太郎　イヤ、高いお辭儀ぢや、ハ丶丶丶ときに、かうお辭儀をさせたからは、どうぞあやめ太夫にちよつと逢はせてくりやれ。

お竹　イヤモシお客樣、お辭儀が濟んだら、あなたのやうなおなりでは、太夫に逢はされませぬ。

太郎　なに、此のやうななりではいけませぬかな。

八太　左樣でござりまする、あやめ太夫樣をお呼びなされまするはお遊びの大盡姿、何ぞ紫やうのちり取かづきが入りまする。

太郎　ハテ、紫の冠り物、かうツと。（ト思案して、）おつとあるぞ〳〵。（ト懐より紫の袱紗を取出し）是ではどんな物ぢや、間に合ふまいか。

お竹　是は丁度ようござりまする。コレ八太八さん、お前がそこへよいやうにして上げなんせ。

八太　畏りました、サア〳〵旦那、是をお冠りなされませ。

太郎　よろしう頼みます。(ト八太八手傳つて、よろしく冠せる。)

皆々　イヤ、誠にお大盡の拵へ、めつぱうでござりまする。

太郎　イヤモウ、太夫を買ふのは、大抵骨の折れる物ぢやなう。

お次　サア〳〵、是から放れ座敷で、太夫樣のお出でをお待ちなされませ。

太郎　そこへよいやうに頼みますわえ。

お竹　それ仲居衆、御酒宴の用意はよいかや。

二人　よろしうござりまする、そんならお大盡樣。

太郎　案内しやれ。

皆々　サア〳〵、お出でなされませ。

ト騷ぎ唄になり、皆々奥へはひる。これにて踊り地にて道具廻る。

〔同奥手塀外の場〕――本舞臺一面の黑塀、眞中切戸口の出はひり、塀の上二階の手摺、障子立切りありすべて雪持にて、雪おろしにて道具留る。と松蟲入り、順禮唄になり花道より順禮惠吉、若衆かつら、笈摺を脊負ひ、菅笠柄杓を持ち出で、花道にて。

惠吉　そも〳〵故郷を出てより、爰に四五日彼處に十日、算へて見れば早半年、亡き兩親の菩提の爲め、納める札の道はかも、雪にこゞえて越路方、一人旅の悲しさは、餘所の軒端や森影に夢も結ばぬ夜もすがら、持病の癪の折惡く、所柄とは云ひながら此のまア雪の降る事わいなア。（トこなしあつて、）おゝ向うに見えるは新潟の廓とやら、彼處へ行つて報謝を願はうわいなア。

ト癪に惱みしこなしにて、本舞臺へ來て、

一人旅の西國順禮でござりまする、御繁昌の旦那樣、御報謝をお願ひ申しまする。

ト雪おろし、騷ぎ唄にて花道より、熊手屋慾四郎、頭巾合羽傘下駄にて出て、

慾四　アヽ降るわ〳〵、いかに越後は雪國とは云ひながら櫻が咲くに此の大雪、もういゝ加減に止まないか。

ト本舞臺へ來る、順禮見て。

惠吉　モウシ旦那、順禮に御報謝お願ひ申します。

慾四　なに、報謝だ、べらぼうめ、生れついて手の內なんどをやつた事はねえ、小面倒な、通れ〳〵。

惠吉　雪は降ります、日は暮れます、どうぞ、お慈悲をお願ひ申します。

慾四　エヽうるさい、通れといふにきり〳〵とうせやァがれ。

惠吉　ハイ／＼、參りますが此の大雪に手足がこゞえて步かれませぬ、どうぞ少しの間此のお庭の傍にお置きなされて下さりませ。

慾四　どうして／＼、どこの馬の骨やら知れない乞食め、どうでろくな奴ぢやァあるまい、置く事はならねえ、あつちへ行け／＼。

惠吉　左樣ではござりませうが、どうぞお慈悲に少しの間。

慾四　エヽうるさいがきだ、きり／＼と通りやアがれ。

ト唄になり、慾四郎惠吉を蹴飛ばし、切戶口へはひる、惠吉起上り、

惠吉　エヽ情を知らぬ人ぢやなア。（トぢつと思入、いきな合方、雪おろし、雪しきりに降る、）噂に聞いた新潟の色町、こつちの難儀も知らず、あの騷ぐ事わいの、四五日の大雪に持病の癪が胸先へさし込み、一足も步かれぬ、何處の宿を賴んでも、獨り旅は泊めてはくれず、人の軒下へ寐ようと思へば、今の樣に踏まれたり叩かれたり、やがてもう日も暮れる、行き度うても足は立たず、アイタタヽヽ。

ト惠吉苦しき思入、騷ぎ唄になり、二階の障子を引拔く、爰に娘高根、振袖娘の拵へ、新造早百合大和居る。

早百　モウシ高根さん、かう見晴らした雪の夕暮。

大和　花も柳も白妙の、よい眺めでござんすなア。

高根　さいなア、私等は此の雪を面白う眺めて居れど、アレ見やしやんせ、此の塀の外に居る若い順禮さん、雪にこゞえて苦しむ樣子、助けてやり度いものなれども、常から邪險なまゝしい父さん、お耳に入つたらどのやうなお叱り受けうも知れぬ、可愛さうな事ぢやないかいなう。

早百　ほんに、あなたのおつしやる通り、人を救ひ救はるゝ、報いはあると聞きました、どうぞ、助けてやり度いもの。モシ、よい事がござんする、旦那樣に知れぬやうにして、モウシ。（ト囁く。）

高根　そんなら父さんに聞えぬやうに、必ずお前を頼んだぞえ。

早百　合點でござんす、コレ大和さん。（ト大和に囁く。）頼んだぞえ。

大和　アイ〳〵。（ト合方にて早百合下手へはひる。）そんなら私は內證へ行つて、氣を附けて居ますぞえ。

高根　どうぞ、父さんの傍に居て下さんせ。

大和　アイ〳〵。

ト大和下手へはひる。雪おろし合方、切戸口より早百合蛇の目傘をさし、庭下駄にて出て。

早百　コレ順禮のお若衆さん、いつまでもそこに居ると雪にこゞえて死なうも知れぬ、こちの內の娘御

さんの御親切で、人の見ぬ間に、私と一緒にこちへござんせ。

惠吉　ハイ〳〵、どなたか存じませぬが、おやさしいお詞、持病の癪で足は立たず、雪にこゞえて、死ぬる事かと、悲しうござりました、有難う存じます。（ト悦んで立たうとし、よろ〳〵としてこける。）

早百　アヽコレ、危ないわいなア。（ト手を取つて、）何處も痛みはせぬかえ。

惠吉　イエ〳〵、怪我は致しませぬ、左樣なら御一緒に。

早百　サア、こちへ來なさんせいなア。（ト唄になり、早百合連れて切戸口へはひる、高根思入あつて、）

高根　何處の人か知らねども、賤しからざる詞の端、我身の上につまされて不便な事と思ふにつけ、心よからぬまゝしい父樣生さぬ仲とて非道な折檻、辛抱するも家の爲め辛い悲しい其中に、此の頃家へ御逗留の更科家の殿樣、女たらしのお姿を一目見るより心の迷ひ、あやめさんは羨しいあんな殿御と添伏しは、女に生れた身の果報、せめてこちにおいでの內、お顏を見るが私の樂しみ、ほんにはかない身の上ぢやなア。

トぢつと思入、此の內早百合出て來て。

早百　モウシ、順禮殿は人の見ぬやう、新部屋へ忍ばせておきましたぞえ。モシ高根さん、旦那がお呼びなさんす。モシ高根さん。（ト大きく言ふ、高根びつくりして、）

高根　エヽ、びつくりするわいなア。
早百　旦那がお呼びなさんす、ちやつとおいでなさんせいなア。
高根　忙しない今行くわいなア。（ト思入、此の騷ぎ唄にて此の道具廻る。）

（同放れ座敷の塲）――本舞臺三間の間二重屋體、見附張交襖、上手床の間、掛物、柱掛けに手拭を掛け、錦木の繪畫いてある。この續き違ひ棚の書割、兩方落間、植込、燈籠、すべて放れ座敷の體、富貴太郎酒宴の體、仲居お光お次酌をして居る。遣手お爪、宿屋の手代も居り、踊り地にて道具留る。

お爪　これ仲居殿、お客樣に御酒をお勸め申して、御機嫌を取らしやんせいなア。
お光　最前からお勸め申して居るけれど、
お次　御客人は御酒がお嫌ひと見えるわいなア。
八後　ときに旦那、いづれの國でも色里は別なものでござりませうがな。
太郎　俺の在所と違ひ、賑やかな事ぢや。
お爪　その賑やかといへば、表のお座敷、昨日から舞ふやら唄ふやら氣儘氣隨のとび次第、ほんに面白さうな事ぢやわいなア。

太郎　サア餘所は面白さうに騷いで居るが、おりやとんと面白うないわい。（ト、ふさいで居る思入。）

八太　是お爪どん、ちッと跡先を見て物を云はんせ。旦那が此の熊手屋へござつたは、あやめ太夫を執心で無いか、それに肝腎な太夫は來ず、よそのざわつき、そんな事はほつておいて、旦那のお氣に入るやうにしたがよいわいの。

お光
お次　サア、それはさうぢやけれど。

お爪　何を云うても更科家の、お殿樣が揚詰の事なれば、私の思ふ樣にもならず、お氣の毒な事でござんすなア。

太郎　氣の毒といふ事知つて居るか、いかに田舍者ぢやというてそりや花ぢや祝儀ぢやのと、取るだけ取りむしつておいて、直に太夫に逢はする事か、最前から餘程になるに、コリヤどうするのぢや。

手代　これ程思ひ込んでござるもの、お爪どの、お前の働きでどうぞ仕樣は無いかいなア。

お爪　それ程太夫樣に逢ひ度がつてござるものを、此儘捨ておいては、情知らずといふもの、私も熊手屋のお爪と云はれては、女子仲間の達者者、一番あやめ太夫を、私が顏で買つて來て、逢はせませうわいなア。

太郎　そいつはえらいわく〳〵。早う賴む〳〵。

お爪　合點でござんす、ドレ私が手際を見せうわいなア。（ト唄になり、奥へはひろ。）
太郎　あいつはよッ程、氣の利いた奴ぢや。
お光　サア〳〵、太夫さんがおいでなさるとあるからは。
お次　前祝ひに一ッお上りなされませ。
手代　さすがはお爪ぢや、口も八丁手も八丁といへば定めて太夫を連れて來るに違ひない、其代り旦那お辭儀はよろしうござりませうなア。
太郎　又れこか。（ト金を出して）コリヤ針を藏に積んでも堪るものぢやないて。是を進上する程に、早う太夫の事を頼みまする。（ト手代取つて。）
手代　イヤ呑込みました、ちつとも早うお爪に渡して、太夫に逢はせて、働きぶりを見せにやならぬ。
太郎　それが肝腎かなめの大事。
手代　よろしうござりまする、暫らくお待ちなされませ、直ぐにお逢はせ申しませう。コレ仲居衆、お前方も共々お爪に加勢して、太夫を連れてござんせ。
お光　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。
お次
手代　そんなら旦那、暫らくお待ちなされませ。

ト唄になり、手代仲居奥へはひる。太郎殘りて思入。

太郎　昔からいふ通り金の世界と廓の遣手程金をほしがる物はないといふが、違ひなしぢや。（ト奥にて。）

お爪　サア〳〵太夫さん、ちやつとお出でなさんせいなア。（ト太郎びつくりして。）

太郎　ヤア〳〵〳〵、アノ聲は、今爰へ太夫を連れて來るやうす。コリヤ爰らへ坐らうか、イヤ〳〵爰はあんまり高上り、何處らがよからうぞ。（ト又下手へ來て、）先づ爰等に極めておかうわい。

ト　よろしくこなしあつて、待つて居ると、摺鉦入りの合方になり、あやめ太夫補襠にて、遣手仲居附いて出る、よき所へ坐り。

お爪　モウシお大盡樣、太夫さんをお連れ申したぞえ。

太郎　なに、太夫殿がわせられた。（ト顔を見て、）へ丶丶丶丶ハ丶丶丶丶、さて太夫殿、私は遙か遠國者でござるが、はる〴〵海上を渡つて來ましたは、こなさんに近附になり度いばかり、是から心安う附合うて下されや。

お爪　モウシ太夫樣〳〵アノお大盡が、お前をお名ざしのお客、ちやつとお傍へおいでなさんせ。

あや　不束な私を、其樣に思うておいでなさんしたお志し、お嬉しうござんすわいなア。

太郎　イヤ其方よりこつちがお嬉しう存じますわい、ようまア顔を見せて下さつた、然しよもや違ひは、

（トよく〳〵見て、）ム、さうぢや、やつぱりさうぢや、いつぞや見た時より、一際見上げた傾城姿。テモ美しい事ぢやなア。

あや　何を云はしやんすやら。

太郎　成程譯を云はねば合點が行かぬ筈、何を隱さう、其譯といふは。ときにさうぢや、太夫樣にチト折入つて話し度い事があれば、暫らく次ぎへ。

お爪　ハイ〳〵畏りました、したがお大盡樣、私が働きで太夫樣を逢はしたからは、それ。（ト辭儀して、）なア、モウシ。

太郎　チツト、承知ぢや、待て〳〵。（ト金をやる。）

お爪　大きに有難うござりまする、そんなら皆さん。

皆々　サア〳〵、行きませう。（ト皆々奥へはひる。）

太郎　アイヤ太夫、あたりの人を遠ざけて、云はねばならぬ事がある。

あや　初めて逢うたお前が私へ。

太郎　云はねばならぬ一通り、とつくりと聞いて下され。（ト替つた合方。）コレ太夫、そなたは覺えあるまいが、いつぞや碓氷峠の麓にて、おとわといへる木賃宿、泊り合せし旅商人恥かしながら其時

に、ふつとそなたを見染めたれど、急ぎの旅の事なれば、心は跡へ鎌倉へ下つて用事も調ひて、戻りに寄つて樣子を聞けば、此の新潟へ勤奉公と、聞いて力は落ちたれど、女郎となれば一夜妻金さへあれば我物と永の旅路のいとひなく、はる〴〵尋ねて來たのぢやわいの。

あや　そんならお前は私の家へ、いつぞや泊りなさんした、旅のお方でござんしたかいなア。

太郎　在所に居た其時と又一人の廓風俗、惚れて〳〵惚れ拔いた、これ程思ふわしが眞實、何と憎うはあるまいがの。

あや　お志しは嬉しいが、私しや可愛い男がござんす、外のお客はいやぢやわいなア。

太郎　情を商ふ芸傾城、外の客がいやぢやとは。

あや　たとひ賤しい勤めはすれど、實を盡す男は一人、堪忍して下さんせいなア。

ト立たうとするを、太郎とらへて。

太郎　アイヤ情ないぞやあやめ太夫、夜每に替る多くの客、可愛い男もあらうなれど、是程まで思ひ詰め新潟三界まで尋ねて來た、心を不便と推量して、色よい返事をして下され。

あや　それ程までに云はしやんすお前の眞實、私の心は、チヽそれ〳〵。

ト合方替つて、硯箱を持つて來て、太郎の持ちたる錦木の畫いたる扇を取り、是へ歌を書いて差出し。

モウシ、これ讀んで下さんせ。

太郎 『陸奥のおだへのはしやいかならん、

あや 文見たかへて心まどはす。』

太郎 此の錦木は陸奥にて、戀の叶ふか叶はぬか、印しに立つる錦木の、おだへの文字は男絶えと書くと聞く。

あや サア、それが私の心の陸奥。

太郎 エヽそんな難かしい事云はずと、どうぞ色よい返事を爰で。(トずつと寄るを押へて。)

あや あゝモウシ、歌の心をとつくりと、(ト又寄るを)男絶えの橋で、ござんすわいなア。

トあやめ太夫振切つて顔を隱す、太郎ちつと思案の思入、是を唄になり、あやめ太夫奥へはひる。跡宮貴太郎思入あつて。

太郎 大枚の金を蒔き散し人にも言はれぬ今の仕儀、此のまゝ國へ去なれもせず、コリヤ一思案せにやならん。(ト此の時奥より八太八出て。)

八太 モウシ旦那、太夫樣は何處へ行かつしやりました。

太郎 何處へいたか、俺が知つた事かい。

八太　ヘンさては手水にでも、お出でなされたか。

太郎　エヽ今頃、誰が手水遣ふもので。

八太　是は情ない、私は太夫さんを貰ひに來ましたのぢや。

太郎　何ぢや、貰ひに來た、阿房らしい。

ト立つて行かうとする、八太八紙入を拾ひ、

八太　モシ、紙入が。

ト出すを引たくり、あたまを叩くを木の頭、八太八呆れしこなし、此の模樣よろしく道具廻る。

（同奥座敷の場）――本舞臺三間の間二重舞臺、正面腰高障子、上下兩方とも障子屋體、二重に兒雷也、褥に坐り、傍にあやめ太夫、平舞臺に近習四人、新造四花、仲居お光、お次、酒肴を取散らし酌をして居る。八後平赤前垂をかつぎ、扇を頭に當て踊り居る、石橋の切れにて道具留る。

近習　ヨウ〳〵〳〵。

近一　八後平が所作事大出來々々。

近二　褒美には、大きな物で呑みやれ〳〵。

八後　ヘイ〳〵、お褒めのお詞、有難うござりまする。

近三　これからは八太八の藝當、所望致し度い。

近四　コリヤよからう〳〵、八太八々々。

八太　ヘイ〳〵〳〵。（ト出て來る。）

近三　手前も早く、踊つた〳〵。

八太　私は踊りより團子の曲喰を致しまして、お目に掛けませう。

あや　そんな事を云はずと、四花さんの相手になつてやりなさんせいなア。

四花　ヲヤおいらん、わちきは八太八なんぞの相手になる踊りぢやありませんよ。

八太　嫌はれて、丁度こつちも仕合せサ。

四花　ヲヤ、憎い口だなう。

ト踊り地になり、ばた〳〵にて下手より、娘高根惠吉逃げて來る、慾四郎縫ぐるみを持ち、追駈け出る、早百合留めながら出て、

早百　旦那樣、まア〳〵御料簡なされませ〳〵。

慾四　ヤイ、あまめ、乞食め、うぬどうするか見やあがれ。

惠吉　ハイ〳〵御免なされて下さりませ。（トひれ伏し詫びる。）

慾四　やかましいわい、爰はお客の座敷だ。こつちへうせ居れ。

　　　ト引立てようとするを、あやめ太夫見て、

あやめ　お前は旦那さん、高根さんを可愛さうに、皆樣留めて上げなさんせ。

皆々　旦那樣、御料簡なされませ。

慾四　エヽ女郎留めな、サアあゆめ、うせをれ。

近一　コリヤ〳〵、其方は此の家の亭主慾四郎でないか、見れば當家の娘といひ今一人は年若な順禮。

近二　仔細は何か存ぜねども、尾籠の振舞。

近三　殊に御前が御遊興の、席をも憚らず。

近四　無禮の段々慮外千萬。

四人　たしなみをらうぞ。

慾四　へイ〳〵、大切なる御前のお座敷へ、踏込みましたる無禮の段、眞平御免下さりませ。

兒雷　スリヤ其方が此の家の主人慾四郎よな、娘高根と今一人笈摺かけし袖乞を、折檻なすは如何なる事ぢや。

慾四　これは恐れ入りましたるお尋ね、お聞きなされませ。何處の馬の骨か知れぬ乞食めを引きずり込みまして、新部屋に隱して、此のあまめが飯を運んで喰せまする、大方こいつめと乳くり合ひ、親の顏へ泥を塗るふんばりあまめ。ヤイ乞食め、わりやいつたい何處の奴ぢや、大方泥坊の相ずりであらう。サア、有樣にぬかし居れ。

惠吉　アヽ申し、私は左樣な者ではござりませぬ。西國順禮でござりまする。どうぞお許しなされて下さりませ。

慾四　ヤイ、あまめ、うぬが引きずり込んだどう乞食め、大方身許を知つてうせたであらう。サア、有樣にぬかしをれ。（ト高根を打つ。）

高根　イエ〳〵、雪にこゞえて可愛相ぢや故内へ入れたばかり、どうして私が存じませう、堪忍して下さんせ。

早百　旦那樣内へ入れたは私が業、高根さんではござんせん。御堪忍をなされて下さりませ。

慾四　エヽやかましい、此のあまめには仕樣がある、奥へ連れていて番をしろ。

早百　ハイ〳〵畏りました、サア高根さん、お出でなされませ。

ト早百合高根を連れて奥へはひる。

慾四　ヤイ乞食め、うぬ身許の白狀せねば、くゝし上げても言はさにやならぬ。サア此方へうせをれ。

ト引立てる。

兒雷　コリヤ、慾四郎待て。

慾四　御前、何故お留めなされまする。

兒雷　最前より見受くる所、怪しき者とも見えず、順禮も高根が實心が却て徒となり、憂目を見るも不便なり、コリヤ近う。(ト近習一を招き囁く。) よきに計らへ。

近一　畏つてござりまする。(ト手箱より袱紗包みの金を出し、慾四郎の前へ置き、) 御前より下され物、頂戴致しやれ。

慾四　スリヤ、此の品を御前様が。

兒雷　今宵此の家を騷がせし順禮、予が遊興の妨げとなり面白からず、物置部屋に留め置きて、一夜明けなば追拂へよ、娘が仕出せし今宵の始末、扱かひがてらに其金にて笑ひにせよや、慾四郎。

慾四　これは〳〵、恐れ入つたる其お詞、仰せの如く計らひませう。命冥加な順禮め、コレ女郎、こいつめを薪部屋へ連れて行け。

四花　アイ〳〵、サア私と一緒に順禮さん。

惠吉　重々厚きお情、エヽ有難う存じます。
近一　物數言はずと、早々此の場を。
四花　サア、來なさんせいなア。（ト踊り地にて、四花順禮を連れ奥へはひる。）
あや　どうなる事と案じましたに、殿樣のお情、有難うござんすわいなア。
慾四　コレ、あやめ、今宵の御禮はおぬしから、隨分御前を大切に、
あや　最前から餘程の御氣鬱、私が座敷で、なア皆さん。
八後　御座所を變へて今一獻。
近一　夜も深更に及びますれば。
八後　お床入りがよろしうござりませう。
兒雷　左樣致さう、サア太夫。
あや　殿さん。
慾四　御機嫌よろしう。
兒雷　慾四郎、大儀であつた。
ト唄になり、兒雷也慾四郎顏見合せ、あやあ太夫の手を取り、皆々附添ひ奥へはひる。慾四郎殘つて、

愁四　此の程より逗留なす、更科都守之助と僞はる曲者、今くれたる袱紗包みで、仔細が、（ト袱紗包みを明ける、中より煙草入出る。）コリヤコレ、覺えの煙草入。

ト奥へ思入、下手より彌忠太、半太股引大小にて窺ひ出て、

彌忠　愁四郎、是に居たか。

愁四　あなたは陣代鹿六様の御家來、彌忠太様。

彌忠　コリヤ、（ト踊り地になり、）かねて月影家の嚴命受けられし、八鎌鹿六殿の下知に從ひ、遊客となつて入込み居るも、盜賊兒雷也詮議の爲め。

愁四　更科家の殿と僞り、逗留する曲者がお尋ね者の兒雷也、今彼めが渡したる此の煙草入、いつぞや鼠の宿にて畑作を殺した時、落しておいた煙草入、我を親の敵と悟りわざと渡した不敵者。

彌忠　此の家の内にあるからは、袋の鼠網の魚、さりながら兒雷也めは蝦蟇の妖術にて、姿を隠すと聞及ぶ、取逃しては一大事。

愁四　お氣遣ひなされまするな、抱へのあやめに現を拔かしをれば、彼れに云ひつけ手引きさせ、召捕る手段。

彌忠　出かした、身共は矢張り遊客の體にて、一間に忍び。

慾四　何かの事は今宵の内。
彌忠　然らば慾四郎。
慾四　彌忠太樣。
ト此の時屋體より惠吉、藁苞を抱へ窺ひ居て、兩人顏を見合せ、障子をしめる。慾四郎思入。
サア、お越しなされませ。
ト唄になり、兩人はひる。奥より早百合高根出て來て。
高根　早百合さん、私しやどうせう〳〵ぞいなア。
早百　サア〳〵、よいわいなア。何も是がアノ順禮さんと、みだらな譯があるといふではなし、可愛さうなと思うてさしやんした事、折惡しう旦那さんのお目に留うたが、互ひの難儀。
高根　それにつけてもあのお殿樣、おやさしい、私の難儀となつた時扱ひとやらのお金をば、父さんにたんと下さんしたばかりに、父さんの機嫌も直り。
早百　事無う納まつたは納まつたもの〻、モシ高根さん、コリヤ殿樣にたんとお禮を言はねばならぬわいなア。
高根　さいなア、お禮を致し日頃から、戀しう思ふ殿樣、今のお情見るにつけ、私しや思ひが増すわい

なァ。
早合　そりや私が常からよう知つては居れど、あの意地の悪い旦那殿といひ、あやめさんの大事の殿樣、モシひよつとゝ思うて居たが、もうかうなつた上からは、跡は私が吞込んで居る程に、幸ひ今あやめさんは内證に居やしやんす程に、殿樣のお居間へ行つて今の禮を云はしやんせいなァ。
高根　それでも私しや、恥しいわいなァ。
早百　何の恥しい事があるものかいなァ。今のお禮を云うた上そこはお前の仕こなしで、日頃の思ひを、なァモシ、いつそ私が連れて行て上げうわいなァ。
高根　そんならお前が、首尾して下さんすかえ。
早百　するとも〳〵、サァあやめさんが居やしやんせぬ内に、ちつとも早う。
高根　それぢやというて。
早百　ハテ此の子としたことが、其樣に氣の弱い事で人の殿御が取られるかいなァ、サァ〳〵ちやつと。
高根　そんならお前を賴んだぞえ。
早百　ハテ、吞込んで居るわいなァ。
高根　とは云ふものゝ、モシひよつと、此の事がとゝさんや、あやめさんに知れた其時は。

早百　ハテ後は野となれ山々の、積る思ひを打解けて。
高根　結びの神の早百合さん。
早百　高根さん。
高根　エヽ、嬉しいわいなア。
ト拜むを木の頭にて、獅子とらでんのかゝりになり、此の道具よろしく廻る。
(同あやめ部屋の場)――本舞臺平舞臺、正面床の間違ひ棚、上手下手障子屋體、あやめ部屋の體、爰に六枚屛風を引いて、絹夜具の上に兒雷也坐り、煙草を呑み居る。傍に行燈、石橋の合方にて道具留る。と下手より高根の手を引いて早百合出て來る。
早百　サア〳〵、ちやつとお出でなされませいなア。(ト兒雷也の傍へ來て、)モウシ殿樣、まだお休みではござりませぬかえ。
兒雷　オヽそちや早百合か、まだ外に誰やら來やつたでないか。(ト高根を無理に前へ突出し。)
早百　ハイ、高根さんでござります。サアそこへ出て、ちやつとお禮を。
兒雷　何ぢや高根か、コリヤ珍らしい、サア爰へおぢや〳〵。

高根　最前あなたのお情の、御禮を申上げ度さに、やうやく參りましてござりまする。

兒雷　スリヤ、予に禮が言ひ度さに、ようおぢやつたなう。

早百　モウシ高根さん、おいらんは内證へ行かしやんして、人目のない内殿樣へ、積る思ひを、サア積る御禮を、なァ高根さん、ゆるりと御禮を。

ト唄になり、百早合下手へはひる。後合方高根兒雷也を見て恥かしき思入。

兒雷　コレ高根、そなたにちと尋ね度い事がある。丁度幸ひ、爰へおぢやく。

高根　イエ私は是がよろしうござります。

兒雷　なに恥しい事がある、爰へおぢや、ハテまア、おぢやといふに。

高根　ハアイ。（ト是にて獨吟になる、高根そつと蒲團の傍へ來る。）

兒雷　初花の若枝の梅、手活の花に手折らす心は無いか、どうぢやく。

高根　勿體ない仰せ、お詞かはすさへ憚りあれど、先程のお惠み、あの順禮と私とが憂目を見ず、父上に御賜物下されし御禮申上げん爲め、お傍へ參りし不束者、田舍育ちの私故、おなぶり遊ばすお戯れ、お恥しう存じます。

兒雷　何のなぶらう大眞實、浮川竹の傾城は、誠少なきものなれども、時の興にはよき慰み、それに引

かへおことが親切、雪にこゞえし順禮を、助けし實意に一入執心、戀に積りし今宵の雪、解けて逢ふのはコレ高根、予に思ひを晴らさせてくれいやい。

ト又獨吟にて、高根を無理に引寄せようとする。

高根 お志しは有難うは存じますれど、斯ういふ所をあやめさんが、見附けたならば、大抵な事ぢやござりますまい、お許しなされて下さりませ。

ト又獨吟にて逃げるを、長煙管にて振袖を押へて。

兒雷 コレ待ちやれ、戀路は戀路まだ外に、そなたに問ひ度い事がある、爰へおぢや。

高根 シテ私へ、お尋ね遊ばす其の御用は。

兒雷 又新らしき問事ながら、おことは慾四郎の實子ならず、此の熊手屋へ入夫とて、まゝしき仲とあやめが噂、何處の誰といふ事をそちに詳しく尋ね問ひ、心に符合する時は、是に增したる悦びなし、包まず云うてもらぬか。

高根 仰せの如く父が此家へ參りしは、やぞへて見れば八年以前、此の新潟で喧嘩沙汰、鎭める渡世に強右衛門と云ふ者ありて、それが世話して此の家に入夫、生れは信濃の人にて、賭物を業として世にいふ惡者付合のみにて、其名は樋かがん八とやら。

兒雷　たとひ以前は惡者にもせよ、よき身代に仕上げたる恩義あれば、隨分大事に孝行しやれ。

高根　有難う存じます、世に便りない私が身の上。

兒雷　其しほらしさに。（ト又獨吟になり、高根を無理に蒲團の上へ引上げる。）

高根　勿體ない事ながら、始めてお目もじせし時から、私やあなたに。

兒雷　惚れたと申すか。

高根　ハイ。（ト顏を隱す。）

兒雷　スリヤ、眞實に。

高根　殿樣。

兒雷　コリヤ。

ト獨吟になり、高根兒雷也に寄り添ひ、屛風を引廻し、廻文狀を落す、獨吟の切れ、あやめ太夫出て、廻文を拾ひてはひる。

四花　お爪どん〳〵。（ト下手より四花酒に醉ひし思ひ入にて出來る。）あゝほんに思ふ事儘ならぬとは、よう云うた事ぢやなア。最前のお客さんが、あやめさんに惚れて逢ひ度いとの事、斯う見た所どうやらほどのよさゝうなお方、私を替りにして寐てくれたらよいになア。私ぢやとて太夫樣ぢやとて

あんまり違うた事もあるまいに、あゝ辛氣な事ぢやなア。

ト よろしく思案する內、屛風の內へ心づき、よろしくこなし。

お次 もし四花さん〱〱。（ト呼びながら下手よりお次出る。是にて四花心附き。）

四花 エヽ、びつくりするわいなア。

お次 びつくり所ぢやござんせぬ。やり手のお爪どんが、やかましう呼んで居やしやんすによつて早うござんせ。

ト 又屛風の傍へ行く。

何であらうと、早うござんせ。

四花 イヽエ私やちよつと。

お次 ハテまア、ござんせいなア。

四花 マヽ忙しない。

ト 唄になり、無理に引ぱりはひろ、此の模樣踊り地にて、よろしく道具廻ろ。

（同小座敷の場）――本舞臺三間の間二重、正面茶壁、床の間、違ひ棚、下手丸窓、上手落間、すべて

小座敷の體、短檠を灯しある、時の鐘にて道具留る。と慾四郎あやめ太夫を連れて出て。

あや　モウシ旦那さん、放して下さんせいなア。私や口惜しいわいなア。

慾四　オヽ尤もだ／＼、俺が云うて聞かせる事がある、まア下に居やれ。（ト無理に下に置き合方。）娘高根と都守之助が様子を見て、心に怒る嫉妬の有様、勤めの身には見上げた、其の心底を見た故に、そちに竊に頼みがある。

あや　改まつて旦那様、私に頼みとおつしやるは。

慾四　外でもない、そちがかね／＼知つて居るまゝ子の高根、都守之助と添伏しの折を窺ひ人知れず、此の短刀で殺してしまへ。（ト腰にさしたる短刀を出す。）

あや　そんなら、あの、高根さんを。

慾四　オヽ、さすれば戀の遺恨も晴るゝ道理、まだ其上に手引をしろ。

ト兩人上下へ別れてはひると、奥より富貴太郎出て來て。

太郎　今後で聞いて居たが、テモ恐ろしい嫉妬深いあやめ太夫、あれ程までに先きの男に惚れて居るからは、俺が心には隨はぬ筈、さうとも知らずはる／＼と、新潟三界尋ねて來たが、今更思へば恥かしいわえ。（トこれより床の淨瑠璃になり、）

竹本 〽獨りごちする足許に、落ちたる一通手に取上げ。(トあやめの落せし廻文を見附け、取上げて、)

コリャ何ぢや、様子が有りさうな此の手紙、定めてあやめが落したのであらう。拾うておいてあやめに困らせてやるが、せめてもの腹いせ、さうぢや〳〵。

〽何心なく懐ろへ、納める折から後ろより。(ト太郎廻文を懐中する、此の時上手より四花出て)

四花 モウシお客さん、あやめさんは、どうでもお前を嫌うてゐさんすから、やつぱり私を抱いて寐やしやんせ。

太郎 エヽ、化物め、そこどころでは無いわえ。

ト四花抱付くを、太郎振放して煙草盆の火入を打付けて上手へはひる。四花灰が目へはひりし思入。捨ぜりふにて跡より追つてはひる。これにてよろしく此の道具廻る。

(元のあやめ部屋の場。)本舞臺元のあやめの部屋へ戻る。屏風引廻しある、時の鐘にて道具納まる。とすぐに竹本になり、

〽更け渡る遠寺の鐘と諸共に何處よりか怪しの小蛇、屏風の中へ這ひ入れば兒雷也小蛇をぢつと見て、

ト薄ドロ〳〵、蛇さし金にて屏風の中へはひる。屏風をはれ退け、床の上に兒雷也、件の蛇に目を附

け、きつと思入、ドロ〱早間、床のメリヤス。

兒雷　ハテ心得ぬ、時は春の末ながら雪まだ深き夜陰に及び、怪しき小蛇の振舞、假寐の夢の幻なるか、イデ打殺して。

〽持つたる煙管に蛇の頭打つよと見えしが忽ちに、かき消す如く失せにけり。

ト兒雷也煙管にて、蛇を打つ、ドロ〱にて消える。

それがしが勇氣に恐れ、消え失せたるか、何小ざかしい。

高根　アレエ。（ト薄ドロ〱にて高根うなされる、兒雷也思入あつて。）

兒雷　コレ高根、どうしやつた、氣をたしかに、コレ高根。

〽高根々々とゆり起せば、夢のなかばにすがり附き。（高根飛び起き兒雷也にすがり附き。）

高根　あなたは、殿樣。

兒雷　高根、そなたは夢でも見たか。

高根　アイ、どうやら何處からか蛇が來て、私を睨んだ怖さ。今に目先に見えますわいなア。

兒雷　なに、蛇が來た。さてこそ今の。

高根　エヽ。

兒雷　イヤ、何も蛇かその樣に、怖い事があるものか。
高根　モウ〳〵私しや、怖うて〳〵、ひつたり汗になりましたわいなア。
兒雷　其の汗は夢ではない、今床の内でしつぽりと、私がかゝせた汗ぢやわやい。
高根　モウシ、必ずともに。（ト寄り添ひ。）
兒雷　何の見捨てよいものかいなう。
高根　エヽ、お嬉しう存じまする。
〽抱きしめたる初戀に、幾代の契り結ぶらん、屛風の外に窺ふあやめ、二人が中につツと入り。
ト兒雷也高根を引寄せる、下手の障子をあけ、あやめの額に薄疵附いたる體、此の樣子を聞き居て、ツカ〳〵と出て兩人を引分け、
あや　モウシ高根さん。
高根　お前はあやめさん。
あや　あんまりぢやわいなア。（ト口惜しき思入、額の疵を押へていふ。）
高根　コレあやめさん、あんまりとは、何があんまり。

あや　アノ白々しい顔わいなア。私が聞いて居るとも知らず、屏風の内で、あた舌たるいコレ高根さん、お前はなア〳〵。人の大事の殿様を、寐取るといふ事があるものかいなア〳〵。

高根　モウシあやめさん、めつたな事を云はしやんすないなア、私は其様な事を。

あや　ないとは云はさぬ、必ず見捨て下さんすなと、云うたぢやないかいなア。

兒雷　イヤ、そりやそなたが聞様が悪いのぢや、まゝしい親の便りない身の上、不便をかけて見捨てくれなと、なう高根。

あや　それ其様に高根さんを、庇はしやんすが腹が立つ、どうせうぞいなア〳〵。（トロ惜しき思入。）

兒雷　コレあやめ、そなたの顔の其疵は。

あや　サア、是もお前の邪險なしもと。

兒雷　ヤヽ。

あや　ほんに邪險なお前の心、あのこゝな嘘つき男め。

兒雷　コレあやめ、何で身共が嘘付ぢや。

あや　嘘付きであるまいか、私を騙して高根さんと深い仲、まだ其上に更科都守之助とは僞り、實は盜賊兒雷也さん。

兒雷　あゝコレ、めつたな事を。
あや　何と覺えがござんせうがな。
〽云ふにこなたは、思案を極め。
兒雷　成程樣子知つたとあれば、何を隱さう泥坊だ。
兩人　エヽ。
兒雷　當時世界に隱れの無い、人も恐るゝ兒雷也とは、俺が事だ。
高根　そんならお前が。
あや　いよ〳〵違はぬ。
兒雷　泥坊と聞いたらば、おぬし達は愛想が盡きるであらう。
高根　いえ〳〵、たとひ恐ろしいお方でも。
兒雷　女房となるか。
高根　アイナア。
あや　それ見なさんせ、現在私が聞く前で、女房になるといふぢやないか。
高根　アイ、もうかうなつた上からは、私が殿御でござんすぞえ。

あや　エヽおかしやんせ、言交したは私が初手、めつたにさうはならぬわいなア。
高根　イエ〳〵お前は勤めの身、定まる夫ぢやござんすまい。
あや　さう云はんすりやお前こそ親の許した仲ではなし、さうむたいにはさせぬわいなア。
高根　イヽエ、私が。
あや　イヽエ、私が殿御と定めた。
二人　兒雷也さん。
〽思ひ知れよと飛び掛るを、へだつる兒雷也逃げ行く高根、もぎとる刃物手がそれて、高根が咽に突き立てたり、兒雷也驚き、
兒雷　ヤヽヽ、もぎ取るはずみに不便や高根を。
あや　戀の敵は今目前、此の上は訴人して、日頃の恨みを晴らさでおかうか。
〽と怒りの面色、兒雷也不審と打眺め、
兒雷　ハテ心得ぬ、是まで馴染みし其方なれば、嫉妬の念はさる事ながら、日頃の恨みを晴らさんとは、何故あつて某に。
〽云ふに此方は聲しはがれ、

あや　おろかや兒雷也、あやめが五體借り受けしは、妙香山にて汝が爲めに、一命終りし大蛇が一念。
兒雷　何と。
あや　生き替り死替り、恨みを晴らさでおくべきか。
兒雷　スリヤ、妙香山にて退治したる大蛇の一念、あやめの嫉妬を幸ひに皮肉に分入り、此の兒雷也に仇なすよなア。
あや　云ふにや及ぶ、思ひ知らせん、待つて居よや。
兒雷　モウ此の上は是非に及ばぬ、觀念なせ。
〽觀念せよと切込めば、大蛇が恨みあやめが執着、邪魔な女と兒雷也が、あやめが肩先き切付くればその手に縋り。
あや　エヽ口惜しや、殺さば殺せこの一念、恨みを晴らさでおくべきか。
兒雷　しみしつこい其の恨み。とはいふものゝ宿世いかなる業因にて、大蛇が爲めに無慙の最期、まだその上に高根まで。
高根　お手に掛るは私が本望、どうぞ未來は。
兒雷　云ふにや及ぶ、あやめとても其通り、大蛇が一念立ち去らば、未來は必ず一蓮托生、兩人共に發

起なせ。

〽始めの情今の仇、刃の露とあやめ草消えてはかなく。

ト此の淨瑠璃にて、薄ドロ／＼、あやめの後より以前の蛇外へ引取る。兒雷也是をきつと見る。兩人苦しむ。よろしく此の道具廻す。

元の小座敷の場。爰に彌忠太前のなりにて、四天の捕手四人附添ひ、下手に慾四郎控へ居る、踊り地にて道具留る。

彌忠　如何に慾四郎、盜賊兒雷也召捕る手段調うたか。

慾四　其儀は豫ねて鹿六樣のお指圖の通り、取計らひおきました。猶今又宵此の家に逗留の鼠の宿の鄉士の悴富貴太郎といふもの。金錢を蒔き散しおごりの體、彼奴も正しく兒雷也が同類の者に相違なし。

彌忠　然らば身共は、富貴太郎を召捕つて手柄になさん、其方は兒雷也めを、取逃さぬやう合點か。

慾四　氣遣ひなされず、少しも早く。

彌忠　家來來れ。（ト鳴物にて、捕手附添ひ上手へはひる。）

慾四　此の上は鹿六殿の旅宿へ立越え、何かの手つがひ、それ。

兒雷　ヤア〱、〱立たんとする、後ろの方。（ト愁四郎行かうとする。）

〱と聲かけて悠々と、一間を出る兒雷也を、愁四郎きつと見て。

ト奥より兒雷也以前の塗盆へ、雪の蛙を乘せ持ち出ろ、愁四郎見て、

愁四　さいふ汝は、更科都守之助とは僞り、實は盜賊の張本兒雷也、そこ一寸も動くまいぞ。

兒雷　ホヽヲ、しほらしき一言、其方に改めて對面さする者こそあれ。ヤア〱深雪、早や來れ。

惠吉　はア。

〱はツと答へて立出る、深雪を見るに不審顏。

ト下手より惠吉、藁苞を持ち、以前の近習四人盜賊のなりになり、附添ひ出て控へろ、愁四郎見て。

愁四　ヤア順禮のわつぱといひ、近習の奴等の此の體は。

近一　近習となつて姿を替へ、此の家へ入込みしは、うぬが素性を探らん爲め。

近二　お頭の言附で、深雪殿を順禮に拵へ。

近三　此の家へ引寄せたるも、かねての云ひ合せ。

近四　何と膽がつぶれうがな。

慾四　まてく、其順禮の小わッぱを深雪とは合點が行かぬ、樣子はどうだ譯が聞き度い。

兒雷　ホヽヲ、其仔細語つて聞かさん。（ト合方になり）八ケ年以前信濃の國にて、其方がん八といひし時、養父畑作を手に掛けし覺えあらん。

惠吉　兄樣のお情にて、斯くくせよと順禮姿、無慈悲の惡口、苦界の勤めも汝が業、恨み重なる父樣の敵、サア、尋常に勝負々々。

慾四　猪口才な其一言、町人風情の慾四郎、仇を報はん其爲めに我家へ入込み、盜賊兒雷也の助太刀せんとは、ハテ仰々しい。

近一　ヤア其方如き匹夫下郞は、お頭が手を下すまでもなし。

近二　妹深雪殿、女の小腕の事なれど。

近三　後詰は我々控へをれば。

近四　心をはげまし深雪殿。

ト白囃子になり、深雪苞より一腰を出し、眞中へ出ろ、慾四郎不承々々に一腰持出で。

惠吉　日頃ねらひし父上の敵、サア尋常に勝負々々。

慾四　寢耳に水の敵討、不便ながらも返り討だ。

惠吉　小癪な詞、イザ。

慾四　イザ。

兩人　イザ〱。（ト白囃子にて、兩人立廻りある。）

〽慾四郎に切立てられ、危ふき深雪兒雷也が、雪の蛙を打付くれば、不思議や數多の蛙と變じ、慾四郎に飛び付けば五體すくんでたぢ〱。すかさず深雪が附入つて肩先き深く切下げられ、よろめく脇腹一とゑぐり、倒るゝ所を乘つ掛り、止めの刀に息絶えたり。

ト惠吉危ふくなるを兒雷也雪の蛙を取つて打附ける、ドロ〱にて、さし金の蛙數多慾四郎に取りつき、慾四郎働かれぬ思入、惠吉慾四郎を切倒し止めをさす。

惠吉　父の敵覺えたか。

兒雷　ホヽヲ、日頃の本望出かした〱。

〽かゝる折柄蓑笠に、姿を隱し深山のがけ藏、息を切つて駈け來り、

ト花道よりばた〱にて、がけ藏盜賊のなり、蓑笠にて走り出て來る。

がけ　お頭、是にござんしたか。

兒雷　其方は深山のがけ藏、何事だ。

がけ　されば〳〵、お頭の指圖の通り、手番ひ萬端上首尾にて。

〽商ひ船にやつしたる、兼て用意の親舟は、陸を放れてはるかなる、沖へ漕ぎ出て碇を上げ、合圖を今やと待つ前に。

此の新潟の出口々々の海上に。

〽十八九艘の大舟小舟、ヤツシイ〳〵と苫かけ並べて風待つ樣子。

もしお頭や我々が、身の上ではあるまいか、必ず油斷さつしやりますな。

〽油斷あるなと言ひければ。

兒雷　それこそたしか陣代鹿六が合圖にて、月影家のへな〳〵武士、たとひ數萬艘にて取卷くとも、我が妖術にて切拔けん事心安し、汝は妹深雪を竊に伴なひ、かねての手筈にて。

ト兒雷也がけ藏に囁く、皆々囁き合ひ。

皆々　心得ました。

深雪　そんなら私は、これより舟場へ、シテ兄上には。

兒雷　我は一先づ姿を隱し、鹿六めをおびやかして慰まん。それ者共。

皆々　はア〳〵。（ト兒雷也皆々奥へはひる、太郎出てあたりを見てこなし。）

太郎　ヤレ〳〵、今日はえらい目に逢うた、心柄とは云ひながら、海山越えて新潟三界まで來て、大枚の金を蒔き散らし、肝腎の太夫は一つに寐てくれぬのみか、かてゝ加へて兒雷也の詮議とやらで家内の者は、上を下への騷動、惡い時に來合して、是がどうなるものだ。(トこなし、廻文を出して、)それはさうと、最前拾うた此の文は、太夫が癡話文ぢやと思ひの外、盜賊仲間の廻文狀、こんな物持つて居て、どんな疑ひ掛らうも知れぬ。いつそ處等へ放つておかうか。(ト廻文を放らうとして、)イヤ〳〵、俺が爰へ放つた事誰ぞが見付けては、それが却つて掛り合ひになる故、いつそ川へ流してしまはうか。但し俺が肌に附けて、しつかり持つて居ようか。(ト思入あつて。)コリヤ思はぬ心配が出來て來たわい。

トあたりへこなし、此の前下手より、彌忠太捕手を連れ出掛り聞いて居て。

彌忠　者共、そりや。

捕手　動くな。

太郎　コリヤ私に、何科あつて此の狼藉だ。

彌忠　ヤア、狼藉とは野太い奴、(ト云ひ乍ら廻文狀を見て、)さてこそ怪しい、其一品。

ト引たくり見て、

さてこそ〳〵、コリヤコレ盜賊仲間の廻文狀、是を所持する上からは、いよ〳〵兒雷也が餘類の者、それ者共ぬかるな、からめ捕れ。

皆々　はッ、御上意。（ト取卷く。）

太郎　まア〳〵待つて下さりませ、私は左樣な者ぢやござりませぬ。何を隱しませう、私は富貴太郎と申しまして、信州鼠の宿の郷士の悴に相違ござりませぬ、どうぞ御免なされて下さりませ。

彌忠　その兒雷也は信州鼠の宿の生立といひ、云拔ならぬは此の廻文狀、いかやうに申しても、盜賊の云拔けならぬと思へ。

太郎　スリヤ其の廻文狀とやらを、持つて居ります故。

彌忠　知れたことだ。

太郎　ひよんな物を拾うたばかりに、身に覺えの無いお疑ひ、是といふもよしない女に心迷ひ、此の家に來たは俺が誤り、今で思へば口惜しい。

彌忠　ヤア、誠しやかに身共を僞り、此の場を脫れんとは野太い奴、かゝる證據のある上は、尋常に繩にかゝれ。

太郎　いえ〳〵、たとひ證據があらうがあるまいが、めつたに繩にはかゝりませぬぞ。

彌忠　ヤア、しぶとい盗賊め。それ、引きすえい。

皆々　はッ。（トバタ〳〵と取巻くを引退け、）

太郎　たとひお役人でも、理不盡の事なされますと、ぢつとしては居りませぬぞ。

彌忠　コリヤ、手向ひ致すか。

太郎　ヲヽ、一生懸命、怪我なされますな。

彌忠　憎い盗賊、物を云はせず引くゝれ。

皆々　はッ。

ト是より誂への鳴物になり、いろ〳〵世話立の立廻りよろしくあつて、トヾ太郎を取つて伏せ。

捕つた。

ト押へる、太郎身をあせる、此の見得よろしく。此の道具廻る。

（同裏手の場）――本舞臺平舞臺、一面の黒塀、忍び返し、兩方柴垣松の大樹、日覆より釣枝、眞中に誂への大石、仕掛あり、一面に雪持ち、舞臺一面に雪布を敷き、雪おろし、かすめたろドン〳〵にて道具留る。

ト石の鳴物にて、雪しきりに降る、花道より捕手六人、白四天襷鉢卷、中へ槍持出て舞臺にて嘶き合ひ、上下へ忍ぶと、時の鐘、三味線入り、本神樂凄き鳴物、上手柴垣より、兒雷也好みのなり、大小にて出る。是にて捕手槍を突出す、誂らへの鳴物になり、兒雷也六人を相手に立廻りよろしくあつて、ト、兒雷也眞中の石の上に坐り、印を結ぶと、ドロ〳〵にて、件の大石仕掛にて蟇の形となり眼を開き六人槍を突き掛ける、ドロ〳〵にて蟇口を明き、火焔を吐き、六人ぎよつとするを、兒雷也きつと見得、双方よろしく、大ドロ〳〵にて。

幕、ツナギにて引返す。

（返し）――新潟沖の場。本舞臺一面の浪幕、浪板舞臺前よりせり出す、花道へ浪幕を引き、浪の音ドロドロにて幕明く。と下手より、八鎌鹿六袴ぶつさき、大小、鉢卷にて、深雪に繩をかけ、船頭艫を押出し、眞中へ漕ぎ寄せる。早舟の心、早笛次第に止んで浪の音。

船頭　ヤレ〳〵旦那、何と恐ろしい事ぢやござりませぬか。

鹿六　イヤ恐ろしいとも〳〵、盜賊兒雷也めを召捕る手配り、彼れが乘つたる親船を數十艘にて取卷いたる折、惡風おそひて浪逆立ち、拔群なる大鱶鮫が現れ出で味方の舟は殘らず難船、身共も命危ふ

かりしを、其方の働きにて漸く是まで逃げ延びたり。ヤレ／＼大儀であつた／＼。

船頭　誠に一生懸命故命限り腕限り、押して／＼押し切りました。どうか風もおだやかになりました。

鹿六　モウやがて夜明前と見える、たとひ兒雷也めを取逃しても、彼が妹を召捕りし上は氣遣ひなし。ヤイ女郎め、兒雷也が隱れ家を眞直ぐに白狀しろ。

深雪　イエ／＼、私は何も存じませぬ、お許しなされて下さりませ。

島八　い、どうしぶとい女郎め、どうで一應ではぬかすまい。よい／＼、屋敷で引きすゑ云はして見せう、島六急げ／＼。

ト舟を上手へやらうとする時、薄ドロ／＼にて、右の舟段々逆に下手へ行く、鹿六見て、

船頭　心得ました、ヤッシイ／＼。

鹿六　コリヤ／＼島六、どう致すのだ、又舟が沖の方へ行くではないか、エヽ磯へ急げ／＼。（ト舟の艫を漕ぎやる。舟段々と下手へ行く。）コリヤ／＼情ない、やはり船が跡ずさりするわい、コリヤどうするのだ／＼。

島八　どうと云うても、船が云ふ事を聞きませぬ。ハテめんえうな。

鹿六　エヽ埒が明かぬ、ドレ身共が。（ト艫を引つたくり。）かうするのだ。

ト艫を押す、舟は下手へはひる、よろしくをかしみにて此道具廻る。

（同じく親舟の場）――本舞臺一面の浪幕、浪手摺、眞中に誂への大船、一面に苫をふきあり、浪の音にて道具留る。と浪の音、ばた〳〵にて、下手より鹿六の乘りし舟出て來る。

鹿六　ヤツシイ〳〵。（ト島八は深雪を引付ける、鹿六艫を押し出て來て。）

島八　旦那、又元の所へ參りました。

鹿六　何を言ふぞい、やうやく磯へ漕ぎつけた。

島八　デモ、アレ親舟が。

鹿六　なに親舟が、合點の行かぬ。

ト大船を見る、ドロ〳〵にて、苫一時に打返す、内に兒雷也百日かづら、船頭のなりにて、印を結び居る、深雪見て。

深雪　ヤア、お前は兄さん。

鹿六　扨てこそ曲者。

島八　たしかに兒雷也。

鹿六　島八、ぬかるな。(ト手早く舟へ乘移り、)兒雷也、覺悟。

ト切つて掛るを、印を結ぶ、ドロ〳〵にてたぢろぐ。此の時深雪繩解ける故、深雪大船へ寄らうとする。島八さゝへるを立廻りながら、品よく兩人大舟へ乘移る、鹿六見て、

鹿六　大事の人質。(ト深雪へ掛らうとするを、兩人突退け、)

兒雷　陣代鹿六たしかに聞け。(トきつとこなし、)我當所へ參りしは、金銀を奪ふにあらず、汝が荷擔人慾四郎といへるは、是なる深雪が親の仇、助太刀なして討たせしなり、我強盜の世渡りはなせども、濫りに人の命は取らぬ。然るに汝等我を討たんと、數多人數を以て追ひ來りて腕立てこそなかしけれ、最前の鰐鮫も我が妖術のなす所、汝等が命助けしは此兒雷也が仁義、此の山領主へ詳しく語り聞してよからう。

鹿六　ハヽア世に類ひなき大丈夫、仁義といひ勇氣といひ、噂に違はぬ兒雷也殿。救命の恩こそ忝なし、然らば此のまゝお別れ申す、おさらば。

ト目禮して、元の小船へ乘移る、兒雷也見て、

兒雷　かざりばかりの追從武士、ハテ命冥加な奴等だなア。

鹿六　御賢察の程恐れ入りまする。とは云ふものゝ八鎌鹿六とも云はるゝ武士が、盜賊風情に追ひ立て

られ、何たる因果の此のざまは。

兒雷　無念なか。（トきつといふ、びつくりして、）

鹿六　エヽ何の〳〵、拙者が爲めには命の親舟、長居は恐れ、子船の出ぬ内はやおさらばが、よからうよからう。

ト一聲浪の音にて、鹿六艫を押して、下手へはひろ。深雪いそ〳〵して、

深雪　危ふい所を、ようまア居て下さんしたなア。（ト此の時後から、）

鳥八　うぬ、けん妻。

ト引立てにかゝるを、兒雷也ちよつと立廻りて正面の浪手摺へ投込む。水煙り立つ。浪の音さし金にて鳥數多飛び去り、直ぐに小鳥數多飛交ふ、兒雷也きつと見る。是と一時に大舟を半分廻して、正面とも矢づゝを眞向きにして、向う舞臺前へ廻る程出す、是にて千鳥笛、兒雷也ツカ〳〵と右の矢づゝの所へ來て、きつと向うを見る。正面棧敷の上へ絹張の大きな旭日を出す。是にて。

兒雷　實に日の本の大湊、追風につれて十分に、ハテ勇ましい、（トとんと下に居るを木の頭。）入舟ぢやよなあ。

ト矢づゝの高欄にひぢを突き向うを見込む、此の見得よろしく波の音カケリにて、

三幕目

月影家詮議の場
八鎌鹿六邸の場
新潟浦刑罪の場

（役名――巫女寶子實は兒雷也、百姓勘右衞門、勘太、作兵衞、太四郎、牛淵彌忠太、下部久内同作内、若黨藪平、下女お虎、庄屋茂木兵衞、深見十左衞門、八鎌鹿六、女房おしづ、富貴太郎、中間大勢、家來大勢、捕手大勢、役人。）

（月影家詮議の場）――本舞臺眞中、冠木門、上手出這入り潜り門、左右塗塀、前に番手桶を積みたる用水、すべて月影家門前の體、爰に庄屋茂木兵衞、着附羽織、少し更けたる百姓のなり、女房おしづ石持やつしなり、百姓四人淺黄股引にて、皆々手を突き、願ひ居る見得、時の太鼓にて幕明く。

庄屋　ヘイ〳〵、お願ひでござります。

お靜　お取次ぎをお願ひ申し　する。

皆々　お願ひでござります〳〵。

ト口やかましく言ふ。これにて潜り門より、前幕の彌忠太、羽織袴股立を取り、大小十手にて、袴股立

の足輕二人六尺棒を持ち出る。

彌忠　ヤイ〳〵御門前でかしましい、鎭まり居らぬか、わいら爰を何處と思ふ、當國の領主月影家の御門前なるぞ、なぜ願ひ事があるならば、神妙に願ひ出ぬぞ。

皆々　へイ〳〵、恐れ入りましてござりまする。

彌忠　出訴の作法を存ぜぬからは、當國の者とは見えぬ、わいらは何處何れの者だ。

庄屋　へイ、私共は信州更科郡鼠の宿の者でござります、先達て新潟の揚屋におきまして、御當家の御家來八鎌鹿六樣に糺問を受けました、富貴太郎の儀に就きまして、御願ひがござりまして罷り出ました。則ち私は伯父茂木兵衛と申します者でござります。

お靜　又私は、太郎の女房おしづと申します者。

勘右　小坂の勘右衛門。

勘太　新田の勘太。

作兵　味噌畑の作兵衛。

太四　家中の太四郎。

勘右　村で小口も聞きますれば、何處の日待へ呼ばれましても、

太四　皆々上席を致します、顔役の者でござります。

作兵　御慮外ながらお心安う。

彌忠　ヤイ〱土百姓め默り居らぬか、日待に上席せうがしまいが、此方で存じた事か、いらぬ事をぬかさずと、願ひがあらば、宿役人を同道して參れ、左樣なければお取上げはないわえ。

足輕　立ちませい〱。

庄屋　イヽエ、左樣ではござりませうが、どうぞお取上げを。

皆々　お願ひ申上げます〱。

彌忠　ひつこい奴だ、ならぬと申すに。

庄屋　ではござりませうが。

皆々　お願ひでござります〱。

彌忠　エヽ立ち居らぬとぶちのめすぞ。

庄屋　イエ、お取り上げない内は、打たれましても。

皆々　立ちませぬ〱。

彌忠　それ、ぶちのめせ。

足輕　心得ました。

ト足輕兩人棒を持ち立掛る、百姓も同じく立掛り女房おしづ是を留める時の太鼓になり、花道より、深見十左衛門、上下大小にて、中間二人挾み箱、草履を持ち出て、花道にて。

十左　ヤア、かしましい。控へぬか。(ト皆々ためらふ、彌忠太見て、)

彌忠　ヤア、あなたは深見丹三郎殿。

十左　何事かは存ぜねども、門前をも憚からず、他聞の聞え控へいと云はゞ控へぬか。

ト彌忠太足輕下に居る、庄屋おしづ下手へ控へる、十左衛門舞臺上手へ行き、

コリヤ彌忠太、爭論致せしアノ者は、何者ぢや。

彌忠　ハツ、囚人富貴太郎の身寄の者にござりますが、無禮過言を申せし故、無據今の爭論。

庄屋　御門前も憚からず、御容赦なされて下さりませ。

ト十左衛門思入、中間挾み箱を直す、是へ腰を掛けて。

十左　コリヤ、それへ出い。

皆々　ハイ〳〵。(トおづ〳〵前へ出る。)

十左　それがしは八鎌鹿六と相役深見丹三郎と申す者、願ひがあらば何なりと申せ。

皆々　ヘイ〳〵、それは有難う存じまする。
十左　コリヤ、其方共は何處の者ぢや。
庄屋　ヘイ、私共は信州鼠の宿の、富貴太郎が伯父、茂木兵衛と申す者。
お靜　私事はお靜と申します、富貴太郎が女房でござります。
庄屋　其外村役人共にござります。
十左　シテ、願ひの趣きは。
庄屋　ヘイ、先達てお召捕りになりました、私の甥富貴太郎儀、兒雷也といふ盜賊とのお疑ひを受けまして、日毎の御詮議に逢ひますさうでござります。
お靜　私の夫富貴太郎は、持丸長者の悴にて、何不自由なく育ちし身の上、次第に家の衰へにその樣なお疑ひを受けましたかは存じませぬが、なか〳〵人樣の物を掠めます樣な、さもしい人ではござりませぬ。
庄屋　其の證據と申しまするは、兒雷也といふ盜賊は眼前外にござりまする。
十左　シテ、兒雷也は、いづれいづくに。
庄屋　即ち鼠の宿に居りました、畑作といふ浪人の悴、太郎といひし者でござりまする。

お靜　何卒此の者を御詮議下され、夫富貴太郎をお許しなされて下さりませう。
庄屋　へイ〳〵、私共も一緒に。
皆々　お願ひ申し上げまする。（ト十左衞門思入あつて）
十左　成程、先達て當國より盜賊兒雷也なりと相役八鎌鹿六殿召捕りてまゐられし、鼠の宿の富貴太郎とやら、日毎の詮議致せども、白狀致さぬ筈、兒雷也ならぬ事は一目見ても知れてあれど、爰に一ッ言譯の立ち難きは、今云ふ如く兒雷也も信濃の國鼠の宿の生立、彼と同國の其上に盜賊仲間の廻狀が富貴太郎の懷中にありしが詮議の的となり、所持せし仔細を尋ぬれども、只拾ひしとばかりにて云譯立たず、されば此の言譯立たざる內は、不便ながらも許されぬ。
庄屋　スリヤ、兒雷也と同國の上、盜賊仲間の廻文狀を持つて居たのが越度なりとお疑ひ。
お靜　その言譯の立ちませねば、お許しなされて下さりませぬか。
十左　天下の大法、是非なき儀ぢや。
庄屋　ソリヤまア、ひよんな事になつたなア。
お靜　モシ伯父樣、どうせう〳〵、どうせうぞいなア。（ト取すがり泣く。）
庄屋　ア丶、そなたより俺が、泣き度いわいなう。

十左　その歎きは尤もなれども、身に覺えなき事なれば、いつか其身の曇りも晴れ、天道眞を照し給ふ時節もあらん。
皆々　有難うござりまする。
庄屋　此の上のお願ひには、國をへだてゝ來りし我々。
お靜　一日なりともこちの人に、どうぞ逢はせて下さりませ。
庄屋　此の儀偏に、お願ひ申上げまする。
十左　ヲヽ尤もの願ひ、幸ひ今日八ツまでは某が掛り、富貴太郎を呼び出し、そちに逢はしくれん。
庄靜　スリヤ、お聞濟み下されて、
皆々　エヽ有難う存じまする。
彌忠　アイヤ、憚りながら丹三郎殿、盜賊富貴太郎身寄の者共、迂濶に門内へ。
十左　苦しうない白洲へ廻せ。
足輕　ハアヽ。
庄屋　左樣なれば、
皆々　深見殿。

十左　サア、身共と一緒に來やれ。

皆々　有難うございまする。

ト時の太鼓になり、皆々門内へはひる。調べになり、花道より藪平、袴大小若黨のなりにて出て來り、直ぐに本舞臺へ來て。

藪平　イヤ、俺の主人を惡くいふではないが、八鏕鹿六といふ名の通り、あの樣なやかましい人はない。然し女に優しいがまだしも取得だ、今も新潟へ迎ひに行つた寶子といふ巫女どのはびつくりする程いゝ女だ。おれも占ひは附たりで、大かたびりにこだはるのであらう。

トやはり調べにて、門の內よりおとら家中下女の拵へにて出來り。

とら　ヲヽ藪平殿。何をして居なさるのだ。

藪平　おとら殿か、何處へ行くのだ。

とら　何處へ行くものか、お前の歸りが遲い故、やれ見て來いそれ見て來いと、口やかましうおつしやる故、御門まで遠見に出たのサ。

藪平　そりやさぞやかましかつたであらう。

とら　大やかましの鹿六樣サ、さうして新潟の巫女さんは、一緒に來ずかえ。

藪平 今に跡から來る積り故、先へ歸つて來たのだ。

とら 其の巫女さんは、いゝ器量ぢやないかえ。

藪平 されば、よいのなんのといふのでない、アリャ占でよぶのでない。旦那は助平根性に違ひないぜ。

とら さういふ美しい巫女さんでは、てつきりさうでござんせう、私の樣なでも、月日の內には
いまに言ひこまつしやるかも知れないわな。

藪平 それぢやとて、おぬしは、小遣ひ錢には困りはせまい。

とら どうして／＼買喰ひの錢にも足りない、なんだといつて、一番が百ころりだ。

藪平 なげ込同樣だなア。

とら 違ひなし、アハヽヽヽ。

藪平 さア、叱られない內、早く歸らう。

とら なに早く歸つても遲く歸つても、どうで叱られるわい。

藪平 イヤ。惡い相手だ。（ト調べになり、兩人は內へはひる、これにて此の道具よろしく廻る。）

（八鎌鹿六屋敷の場）＝本舞臺三間の高二重、本緣附の白洲、軒口に浪に兎の紋つきし幕を張り、向う大紗綾形の襖、上下屋敷塀、すべて評定所の體、深見十左衞門二重眞中に居ろ。舞臺上手に彌忠太

足輕、下手に女房お靜、庄屋茂木兵衛、百姓四人控へ居る。時の太鼓にて道具納まる。

十左　それ、富貴太郎を呼び出し、アノ者共に對面致させい。

足輕　はツ。(ト此の時奥にて、)

鹿六　イヤ、對面罷りならぬ。(ト合方になり、鹿六着付、社袴、大小にて出る、十左衞門見て。)

十左　これは八鎌鹿六殿、お役目御苦勞に存じまする。

鹿六　イヤ、主命なれば、さのみ苦勞にも存ぜぬ。

十左　いかさま貴殿の御忠勤では、イヤそれは格別、只今此の者共に富貴太郎を對面させまするに何故あつてお止めあるぞ。

鹿六　さればでござる。盜賊を召捕りしは鹿六が手柄でござる、それを御自分が御勝手にたゞ一言の屆けなく、身寄に逢はすなどゝは、人もなげなる致し方、それ故お止め致してござる。

十左　イヤ御尤もにござれども、若輩ながら某も、詮議の役目承りて、卽ち今日八ツ時までは、富貴太郎は拙者が掛り、それ故貴殿へお屆けは申さぬ。まツた彼等に逢すも詮議の一ツの手立。

鹿六　ム、、彼等に逢はすが、何で詮議の手立でござる。

十左　御存じなくば、お話し申さうか。

鹿六　後學の爲め承はらう。
十左　昔唐土周の世にはいかなる五刑の罪人たりとも、地上へ規矩を畫きて入れ置き、妻子に介抱なさしむ、是文王の情の獄屋、その仁惠に罪人も白狀なさゞる事無きと聞く、まッその如く富貴太郎暫しなりとも獄屋を出し、彼れが女房に對面致させ、情を以て問糺す拙者が詮議は聖の敎へ、御批判ござらばお聞かせ下されο
鹿六　サア、それは。
十左　御批判ござるか。
鹿六　サア。
十左　サア。
兩人　サア〳〵。
十左　いかゞでござる、八鎌氏。
鹿六　ムヽ、七難かしい唐の引事、聞耳ござらぬ勝手にめされ。
十左　お構ひなくば、それ富貴太郎を呼び出せ。
足輕　はッ。（ト足輕はひろ。）

十左　唐土風の貴殿の詮議、なまぬるこくめされ、八ツの時計の鳴るを合圖に、日本風の手ひどい詮議拙者が手並見せてくれう。（ト時の太鼓にて、奥へはひる。）

足輕　きり／＼あゆめ。

ト說敎になり、上手より富貴太郎、五十日かつら、淺黃の着付、繩にかゝり、拷問に疲れし體、足輕繩を取り出る。

下に居らう。（トよき所に坐る、女房おしづ、庄屋見て、）

お靜　ヤア、こちの人。

庄屋　富貴太郎殿。

四人　ひどうやつれさつしやつたなア。（ト富貴太郎皆々を見て、）

太郎　ヲヽ女房お靜、伯父者人、村の衆、よう尋ねて來て下さつたなう。

お靜　エヽ逢ひ度かつたわいなう。（ト富貴太郎の傍へ行かうとするを、足輕へだてる。）

十左　イヤ、そち達には、用はない、次ぎへ立て。

足輕　アノ、我々どもに。

十左　立てと申すに。

足輕　へイ。（ト足輕皆々上手へはひる。）

十左　コリヤ靜とやら、最早や誰にも遠慮はない程に、夫の介抱いたしてやりやれ。

お靜　エヽ有難う存じまする。（ト富貴太郎の傍へ行き）モウシこちの人、逢ひ度かつた〱わいなア。

ト富貴太郎に取りすがり泣く、太郎思入あつて。

太郎　スリヤ丹三郎樣のお情で、そなたや皆の衆にお逢はせなされて下さりましたか。

庄屋　ヲヽ、あなたのお情で、逢はれるやうに、

皆々　なつたわいなう。

太郎　鹿六殿に引きかへて、お情厚き深見樣、御恩の程は忘れませぬ。

十左　暫しが程も身共が寸志、心置きなく對面致しやれ。

ト時の太鼓にて、十左衞門奥へはひる、跡を皆々伏拜み、

お靜　こちの人、情ないなりにならしやんしたなア。（ト太郎に取り付く、太郎思入あつて、）

太郎　ヲヽ女房ども面目ない〱わいなう。（ト合方）今更言ふも恥しい、ふとした女に心をかけ、我家を餘所に他國まで、色に迷うて浮れ歩き、親の貯へ金銀を徒に使ひし其罪で、滯留なせし新潟の、同じ揚屋へ入込みし、兒雷也といふ盜賊の廻文狀を拾ひ取り、兒雷也と疑ひ受け、獄屋の住居

に呵責の責、身に覺えの無い事を白狀せいと、鹿六殿の無慈悲の拷問、肉はたゞれ骨は挫け、アヽ此の苦しみを受けうより、いつそ死なうと思うたは幾度かなれども、さうした事なら女房や妹が世間の口の端、つながる身寄まで嘸や肩身が狹からうと、齒を喰ひしばつて今日の今まで、苦痛を怺えた甲斐あつて、そなたや伯父に思はずも息ある内に逢うたのが、此の世の思ひ出嬉しうござる。所詮私は責殺されるか、近い内に死ぬるであらう。是といふのも新潟のよしない女に迷ひし故、夫を大事と貞節なそなたに難儀を掛けると思や、おりや面目ないく〳〵。どうぞ堪忍してくれいやい。

お靜　アヽ申しこちの人、そりや何を云はしやんす、是が世間に無い事ぢやなし、てかけ妾はある習ひ、以前の持丸長者なら、一人は愚二人三人妾を置かうと儘な身の上、今は身貧に暮すとも、お前の好いた女郞なら、田畑を賣つて身請せうと、そこが男の效驗とやら、何の女房に遠慮が入らう、もう〳〵その樣な事、必ず云うて下さんすな。

庄屋　ヲヽそれにまだ、死ぬる〳〵と死に急ぎせぬがよい、元より知らぬ無實の罪、命助からいで何とせう。ハテ神も佛もござるわいなう。

お靜　其の神佛のお蔭であらう、お前の疑ひ受けなさんした兒雷也といふ盜賊の、素性が詳しう知れた

わいなア。

太郎 ムヽ、スリヤ兒雷也の素性が詳しう。

お靜 あいなア。

太郎 シテ、その者は。

庄屋 ヲヽ、外でもない在所に居た、畑作が忰太郎ぢやわいなう。

太郎 エヽ。（ト太郎びつくりのこなし。）そりやまア、ほんの事かいなう。

お靜 嘘のほんのと此の間、お前の妹御のおさじさんの所へ、その太郎の兒雷也が立派な侍姿にて、尋ねて來たる面ざしが、お觸の廻つた兒雷也の人相書に違はぬ故、お前の難儀を話した所、びつくりなして我と我兒雷也と名を明かし、鎌倉に行く其足を、すぐに越路へ取つて返し、お前の命を助けうと、此の新潟へ來たとの事。

庄屋 生立より才智に勝れたるあの太郎、殊には蝦蟇の妖術を、行ふとの事なれば、名乘つて出る氣か、但し又、外に手段のあることか。（ト此の内太郎ちつと思入。）

太郎 兒雷也といふ盜賊は、邪非道の盜みをせぬと人の噂、尤も孝心深きあの太郎、何で非道を働かん、察する所盜賊なすは、たしかに大望あるに違ひなし。（ト思入あつて。）我への義理に兒雷也が、名

乘り出でなばその身の望みも、コリヤ我身を捨ても。

二人　エヽ。

太郎　イヤ、我身の疑ひ晴るゝも追付け、今に御免になるであらう。

庄屋　ヲヽ、ならいでならうか、無實の罪、天道樣が見てござるわいなう。

お靜　どうぞ一日も早う御免になり。

太郎　今の苦患を昔語り。

庄屋　日待をよつてせうわいなう。（ト太郎わざと嬉しき思入にて、）

太郎　あゝ、何じややら氣が浮き〳〵と、どうやら赦免になつた樣ぢや。

庄屋　何しろ物は祝ひがら、

皆々　あア目出度い〳〵。（ト皆々悦ぶ、奥より十左衞門出來り、）

十左　コリヤ富貴太郎、身寄の者共最早八ツに間もなければ、鹿六殿の出席なき内、此の場を早く立歸れ。

皆々　ヘイ〳〵、畏りましてござりまする。

太郎　そんなら伯父じや人、隨分ともに。

庄屋　そなたも達者で、サア、お靜來やれ。

お靜　イヽエ私は。

庄屋　コリヤ、あなたのお情を無にしやるか。

ト庄屋お靜の手を取り立上る、太郎思入あつて、

太郎　あゝコレ、女房ども。

お靜　あい。（トツカ〳〵と傍へ來る、太郎ぢつと顏を見て、）

太郎　イヤサ、此の身の御免を、待つて居やれ。

お靜　ハアヽ。

ト時の太鼓になり、お靜しを〳〵と立つ、庄屋百姓附いて下手へはひろ。太郎跡を見送りて愁ひのこなし。

太郎　あゝ、何にも知らずに不便やなァ。（ト合方になり、太郎十左衞門に向ひ、）アイヤ、十左衞門樣へ申し上げまする。

十左　ヲヽ、何事ぢや。

太郎　是まで日每の拷問に、脫るゝだけはと包み隱しましたれども、火水の責に勝つたるあなたのお情

たゞ今白狀致しまする。盜賊の張本兒雷也は、此の富貴太郎でござりまする。

十左　ヤヽ、何と。

太郎　斯く名乘りまする上からは、一日も早く御法の通り、御刑罪に行はれ諸國に廻る兒雷也が詮議を許して下さりませ。

十左　イヤその白狀呑み込めぬ、兒雷也といふ盜賊は、畑作が悴なる卽ち太郎とやら、最前女房が訴へしに、今又汝が兒雷也と、白狀なすは合點行かぬ。

太郎　サアそのお疑ひは御尤もなれど、最前女房が訴へしは、夫の命助け度さ故、上を僞る女の淺はかその太郎といふ者は、親に孝心深き者、なか〳〵盜賊など致す者ではござりませぬ。

十左　ムヽ、シテいづれ何處にて、强盜なせしか、それ眞直に白狀致せ。

太郎　サアそれは。

十左　盜賊なせし證據なければ、兒雷也とは云はれまい。（ト此内後ろへ鹿六出て、）

鹿六　ヤア、いけ馬鹿々々しい深見氏、自身に白狀なしたるに、なぜ兒雷也とは云はれぬな。

ト足輕も出て控へる。

十左　たとひ白狀なせばとて、盜賊なせし證據なければ。

鹿六　證據は卽ち廻文狀、所持なし居つたがたしかな證據。
十左　ハテサテ貴殿は入らぬお世話、今日八ツまでは拙者が掛り、お構ひなくとお控へなされ。
鹿六　でも、餘りと申せば。
十左　ハテ、八ツまではお指圖御無用。
鹿六　ムヽ。（ト控へる、八ツの時計鳴る。）十左衞門殿、鳴りましたぞ〳〵。（ト大きな聲でいふ。）
十左　鳴りましたとは、何が鳴りました。
鹿六　八ツの時計が鳴りました、是からは拙者が掛り。
十左　御念に及ばぬ、イザ是へ。
鹿六　深見氏には、休息めされい。
十左　役目終らば、（ト太郎に向ひ、）コリヤ富貴太郎、生は難く死は易し、うろたへた事申すな。
鹿六　ハテ、八ツからは拙者が掛り、お構ひなくとお控へなされ。
十左　然らば是にて、見物仕らう。（トよろしく控へる。）
鹿六　ヤイ富貴太郎、いよ〳〵われが兒雷也と、自身の口から白狀致せし上は、われが手下幾人ある、
一一それ申せ。

太郎　サア、その手下は。
鹿六　いつれ何處に居るぞ、白狀いたせ。
太郎　サア。
鹿六　サア。
兩人　サア〳〵。
鹿六　何と。
太郎　イヤ存ぜぬ、手下の在所。
鹿六　ムヽ、云はずば火水の拷問でも、云はさにやおかぬ。
十左　スリヤ、此の上にも、火水を以て。
鹿六　見事白狀致させ見せう。
十左　拷問に疲れたる富貴太郎、荒き責苦に及びなば、白狀致さぬその內に、モシ責殺さば何を證據に何を以て手下詮議召さるゝぞ。
鹿六　ヤ。
十左　サ、そこを存じてお止め申すわ。

鹿六　ヤア、此の期に及んで手ぬるい〳〵、明六ツまでは身共が役目だ、お構ひあるな。ヤア〳〵申し付けたる水責の用意致せ。

足輕　はゝア。(ト足輕四人立掛り、太郎を引立てにかゝる、)

太郎　スリヤ、此の所にて私を。

鹿六　ヲヽ、水喰はせてほざかすのだ。

太郎　イヤ、たとひ水に溺るゝとも、手下の在所は存じませぬ。

鹿六　ヤア、しぶとい奴、それ竹階子にくゝりつけい。

足輕　はア。

ト四人立掛る、太郎を引据ゑ竹ばしごの上へあをむけに載せ荒繩にてくゝりにかゝる。ばた〳〵になり、下手より藪平走り出る。

藪平　お旦那へ申し上げます。

鹿六　何事ぢや。

藪平　先刻迎ひに參りました、新潟の見通しの巫女殿、只今參られましてござりまする。

鹿六　ムヽ、寶子が見えたとか。

藪平　左樣でござりまする。
鹿六　只今歸宅致すと申せ。
藪平　畏りました。
十左　シテ拷問は如何めさるゝ。
鹿六　身共は急に用事もござれば、今日の拷問は是れまで〳〵。
十左　スリヤ、お許しあつて。
鹿六　如何にも、我等の戀人。
十左　ヤ。
鹿六　イヤサ、兒雷也を引立てい。
足輕　ハア、立たう。

ト時の太鼓になり、足輕太郎を引立てる。太郎十左衞門に思入して・しを〳〵と立上る。鹿六衣紋を直し、につこりと思入し、十左衞門鹿六の顏を見るを、木のかしら、よろしく此の道具留る。

（八鎌鹿六屋敷の場）――本舞臺三間の間、二重屋體、正面一間の床の間、誂らへの楊柳觀音の掛物、

此の續き唐紙襖、上手障子屋體、下手黑塀、すべて鹿六宅の體、時の太鼓にて道具留る。

お虎　サア〳〵、ちよつと來て下さんせ。

ト奧より下女お虎、下部作內着付袴にて、連立ちて出る。

作內　コレ〳〵おとら殿、今日は御客來があるによつて、玄關先を片附けて居るに、ちよつと來いとは何の用ぢや。

お虎　サア、その客來といふのは、大方新潟の巫女さんでござんせうがな。それ故私しや腹が立つてならぬわいなア。

作內　そりや何を云ふのぢや、旦那が占うて貰ひ度い事があつて、巫女殿を呼びにやらしやつたが、それが又何で腹が立つのぢや。

お虎　サア、お前は何も知らしやんせぬによつて、さう思はしやんすも尤もぢやが、巫女さんを呼びにやつたのは、占ぢやござんせぬ、ありや戀でござんすわいなア。

作內　何ぢや巫女殿を呼びにやつたのは、戀ぢやとは、そりやどうして。

お虎　サア、最前藪小殿に尋ねたら、その巫女殿はそれは〳〵美しいとの事、それ故旦那が呼びにやつたは、戀に違ひはないと私の推量、今更になつて私を見捨ては濟まぬ〳〵。

作内　コレ〳〵お虎殿濟まぬと云はしやるが、その巫女殿に旦那が惚れたが、何で又濟まぬのぢや。

お虎　サア聞いて下さんせ、毎晩々々私の寐所へ旦那が這ひ込み、可愛い奴ぢやの見捨てはせぬのと、抱いて寐て下さんした故、ねむたい目を引明けてもうお出での時分と、待つて居た事は幾度か知れませぬ。それに今となつて私を振り捨て、巫女さんに見返るとはそりやみこえませぬ。蛙の行列みこう見ずとやられたが腹が立つ、私をみこゞろしにする心か、見事見返して見やしやんせいなア。

作内　ハヽア、さては旦那に振舞うて悋氣ぢやな、おぬしの顔で悋氣とは、まるでわやぢや。そんな事聞いて居る暇はない、ドレ、奥へ。

お虎　コレ、待つて下さんせ。

作内　イヤ、放せ〳〵。（ト振り切つて逃げてはひる、お虎跡を追駈け、）

藪平　サア〳〵、こちらへお通りなされませ。

ト合方になり、正面の襖より、藪平案内して、兒雷也舞衣、大口、黒塗り柄の幣を腰にさし、鈴を持ち、巫女寶子の拵へにて出て、上手へ坐る。藪平下手へ控へ。

主人役所に出勤致し居りますれば、暫らく御休息下さりませう。

兒雷　スリヤ、御主人には、御他出でござるかな。

お虎　只今お出での趣きを、知らせましたれば、最早歸宅致しますでござりませう。

トばた／＼になり、奥より鹿六あわてゝ出て來り、

鹿六　藪平々々、巫女殿はいづれにござる、寶子殿はどれにござる。

藪平　是においでなされまする。

鹿六　これ、いづれにござる。

藪平　是れにお出でなされまするト申すに。

鹿六　これとは、何處に。（ト兒雷也を見て、）ヲヽ、これにお居でなされましたか、あはゝゝゝゝ、（トよき所に住ひ、）これは／＼寶子殿には、ようこそ／＼御入來、千萬忝うござる。

兒雷　スリヤ、あなたが、御主人樣でござりまするか。

鹿六　如何にも、拙者八鎌鹿六でござる、以後はお心安う。

兒雷　此方よりも、お願ひ申しまする。

鹿六　コリヤ／＼、お茶はどうぢや。

お虎　只今差上げまする。

ト　お虎茶臺に茶碗を載せ持ち出る、鹿六引つたくり。

鹿六　コリヤ、お茶をなぜ上げぬのぢや。

お虎　あなたがお取りなされたではござりませぬか。

鹿六　何をあわて者めが。イザ粗酒一つお上り下され。

お虎　モウシ、そりや、お茶でござりまする。

鹿六　存じて居るわい。（ト鹿六兒雷也へさし出す、兒雷也取つて、）

兒雷　是は憚りでござりまする。

鹿六　コリヤ、お菓子を早く持て來ぬか。

お虎　ハツ。（ト後ろより菓子鉢に菓子を積み持つて來り、）差上げませうか。（ト鹿六見て、）

鹿六　エヽ、何故鹽燒を出さぬのぢや。

お虎　ありや御酒のお肴でござりまする。

鹿六　知れたことだ。

お虎　ハツ、お一つお取りなされませ。（トお虎兒雷也の前へ菓子を持つて行く。）

兒雷　必ずお構ひ下さりまするな。

鹿六　コリヤ〱、そち達は早く御酒の拵へをしたがよい。
二人　畏りました。
鹿六　コリヤ、お茶やお菓子と取違へるな。
二人　畏りました。（ト奥へはひる。）
鹿六　さて〱人を使ふは世話の燒けるものぢや、はゝゝゝ。（ト合方になり、）イヤナニ寶子殿、拙者今日其許を招待致せしは、チト占うて貰ひ度き儀あつてゞござるが、善は急げ早速お頼み申し度い。
兒雷　それはお心安い事でござりまする。
ト誂らへの合方になり、鹿六始終兒雷也に見惚れ、そは〱する。兒雷也こなしあつて、
もそつと傍へ、お寄りなされませ。
鹿六　傍へ寄つても、大事ござらぬか。（ト嬉しき思入にて兒雷也の傍へ寄る。兒雷也こなしあつて、）
兒雷　コリヤ、お望み事でござりますな。
鹿六　如何にも、望み事でござる。
兒雷　ちよつと御顔をお見せなされませ。

鹿六　あゝ、顔を御見せ申すのかな。（ト恥しき思入にて、兒雷也の方へ顔を向ける。）

兒雷　もそつとこちらを、お向きなされませ。

鹿六　ハッ、是でよろしうござりまするかな。（ト濟ました顔にて、兒雷也の方を向く、兒雷也見て。）

兒雷　お手をお出しなされませ。

鹿六　ハッ、手でござるかな。

兒雷　ズットお出しなされませ。（ト兒雷也鹿六の手を取り、ずつと引寄せる。鹿六ぞく〳〵する思入。）あなた、お望みは戀でござりませうがな。

鹿六　エヽ、（トびつくりして、）如何にも、戀でござりまする。

兒雷　一見見ても、戀と知れます。

鹿六　あゝ、穗に現はれしか、面目ない。

兒雷　イエ〳〵、鬼神をも取り挫ぐ猛き心の武士も、情を知るは戀の路、テモ優しい事でござりますなア。

鹿六　シテ此の戀は叶ひますかな。

ト兒雷也鹿六の手を取りしまゝさすり居る、鹿六嬉しき思入。

兒雷　イエ叶ひませぬ。
鹿六　エヽ、とくと占うて下さりませ。
兒雷　どう、占うても叶ひませぬ。
鹿六　ムヽ、シテ叶はぬといふ戀人を、寶子殿には御存じかな。
兒雷　存じて居ります、その戀人は。
鹿六　その戀人は。
兒雷　妾でござりませうがな。
鹿六　如何にも、そもじぢや、どうしてそれを。
兒雷　人の心を見通しにさすの巫女とも呼ばれ、招待さるゝ此の寶子、知らいで何と致しませう。
鹿六　さう知られては包むに及ばず、此の間新潟にてふと見染めし故、今日占をかこつけて我家へ呼びしは口說く爲め、情を知るは武士と今も今とて云はるゝに、何故戀が叶へられませぬな。
兒雷　目に諸々の不淨を見れど心に諸々の不淨を見ず。
鹿六　スリヤ、それ故に。
兒雷　此の戀ばかりは叶ひませぬ。

鹿六　いゝさすの巫女と云うたも、こりや違ひましたなア。

　　ト鹿六ほいなき思入。兒雷也床の間の掛物を見て。

兒雷　ヤヽ、床に掛けたるあの畫像は、昨夜計らず夢の内に見えし楊柳觀世音、今又是にて逢ひまゐらすは、此の身の嬉しさいかばかり。

　　ト畫像に向ひ思入。是にて左右の窓蓋をおろし、薄ドロ／＼になり、兒雷也掛物へこなしあつて。

ナニ、此の家の主人鹿六に、御佛の福を授け給ふとや。

　　ト是を聞き、鹿六合點の行かぬこなし。

鹿六　ア、コレ／＼寶子殿、そりや何を云はるゝのぢや。

兒雷　何を申さう、其許の信心怠りなきと見え、あれなる畫像の觀音より、福を授け給ふとある。

鹿六　エヽ。（トびつくり思入。）

兒雷　あれ見られよ、御佛の御手に捧げしあの壺は、福を授くる寶の壺。

鹿六　あの壺が、寶の壺とな。

兒雷　薩埵の感應ある時は、壺より水の湧く如く、金銀珠玉は心の儘、

鹿六　そりや誠の事か、嘘ではないか。

兒雷　嘘か誠か、これ見る前にて寶の壺を御渡し申さん。（ト掛物に向ひ、）イザ、其壺をお渡しあれ。

トドロ〲になり、掛物の前へ掛煙硝立ち、掛物の壺仕掛にて消える。誂らへのさし金の壺兒雷也の手へ來る。鹿六是を見てびつくりして、

鹿六　ヤア畫像の壺がおのれと抜け出で、寶子殿の手に渡りしは。

兒雷　是ぞ主人の信心と、一ツには妾が修行。

鹿六　ハヽア、かゝる尊き寶子殿へ戀慕なせしは身共が誤り、モウ〲戀はさつぱりと、此の後思ひ切りますれば、早く福を授けたまへ。

兒雷　圓通自在の佛の御惠み、御名を唱へて合掌あれ。

鹿六　南無楊柳觀世音菩薩、偏に福を授けたまへ〲、

ト鹿六拜むとドロ〲になり、兒雷也の持ちし福の壺より、仕掛にて金銀こぼれる。鹿六見てびつくりなし。

ヤヽヽ、コリヤ壺より金銀が湧き出せしか、ヱヽ有難や、南無楊柳觀世音〲。

トバタ〲にて、奥より藪平お虎作内久内皆々出て。

藪平　ヤア〲、コリヤ、家中が金だらけ。

お虎　爰に三兩彼處に五兩。
作内　是が無間の金といふのか。
久内　ひろに成子かみゝずに成子が。
藪平　だんないく。
皆々　拾へく。
ト拾ひに掛る、鹿六金の上へ兩手をひろげ、覆ひになり。
鹿六　ヤアく、わいら憎い奴、身共に授かる此の金銀、一歩たりともわいらが使ふか、モシくすねると罰が當るぞ。
皆々　ヤアくく。（ト後ずさりする。）
鹿六　ア、有難いく、手箱をもてく。（ト拾ひ集めて手箱へ入れる。）
兒雷　此上にも、如何なる事でも願ひを上げなば、冥助あらん、いよく信心はげみ給へ。
鹿六　ナニ、まだ此の上にも信心なし、觀音へ願ひを上げなば、福を授け給ふとか。
兒雷　妾が夜陰に行をなし、丹誠をぬきんで祈りなば、圓通自在の通力にて、世界の黄金を爰に招かん
然しそれをなすには所持の黄金の有りたけを、床に飾りて燈明を數多照らし、黄金を祀る時は

此方の金の精氣に引かれ、餘所の黄金は玉となり、爰へ飛び來る事神速なり、是皆妾が欲にはあらず、日頃信心渇仰する故に福分を授くるのみ。モシ又それも黄金を惜しみ、此の祀りを疑ふ者は觀音薩埵の憎しみにて、餘所へこちらの精氣を引かれ、忽ち黄金を失ふ御罰。

鹿六　かゝる不思議を見る上は、何しに疑ふ事あらん。敎へのまゝに我が所持の金を殘らず爰へ積まん必ず福を授け給へ。

兒雷　今の詞を信じ給はゞ、是より直に燈明の用意をなして祀られよ。妾が祈念のその内に一度に燈明消ゆるなり、其時黄金集まれば、いよ〳〵信心はげみ給へ。

鹿六　委細承知致してござる。まだその上に授かるとは有難い〳〵。コリヤ〳〵お虎そちは年德へ捧ぐる燈明臺、早く是へ持て。

お虎　畏りました。（トはひろ。）

鹿六　藪平、二人連にて、藏の内に入れてある、二千兩を是へ持て。

藪平　畏りました。（ト二人奥へはひろ。）

鹿六　あゝ、金銀がふえるとは有難い〳〵。是も偏に君の御情、何と御禮を申さうやら、あゝ有難い。

ト此の内お虎燈明を多く灯し、持ち出て床の間へ飾る。

あゝ是でよい〱、人の家は金がふえると、明るくなるといふが違ひない、あゝ有難い〱。

ト藪平作内久内千兩箱を二つ持ち出る。

鹿六　あゝ、それでよい〱。
藪平　イヤナニ、お旦那少々ながら、私共所持の金子がござれば。
お虎　そこへ一緒に祀り込み、どうぞふやして下さりませ。
鹿六　どうして〱たゞはならぬ、二割の禮をよこすなら、末の方へおいてやらう。
藪平　イヤモウ、二割が三割でも、
四人　お禮はきつと致しまする。
鹿六　ナニ、禮をするとか、有難い〱。
藪平　左樣なら、私のが二歩と六百ござりまする。
お虎　一歩二朱と二百五十は、私のでござりまする。
作内　僅かながら私も、そこへ載せて下さりませ。
久内　私共も共々お願ひ申しまする。（トめい〱床の間へ飾る。）
鹿六　サア〱是で金が揃ひました、早う祈をお願ひ申します。

四人　私共もとも〳〵お願ひ申します。

兒雷　黄金惜しまず積まれしからは、觀音薩埵の功力にて、世界の黄金を此處へ寄する。さらば祈念に掛りませう。

ト祝詞になり、薄ドロ〳〵にて、兒雷也幣を取り、口の内にて祝詞を上げる、皆々觀音を拜み。

鹿六　南無楊柳觀世音、早く福を、此の家の鹿六へ、黄金を授け給へ〳〵。

皆々　授けたまへ〳〵。

ト是を皆々くり返し云ふ、よき程に本釣鐘を打ち、是をキツカケに燈明の灯り一時に消える。

鹿六　そりや燈明が消えたは、有難い〳〵。

皆々　有難い〳〵。

ト皆々平伏して一心に拜む、二度目の鐘にて誂への凄き合方になり、兒雷也きつと思入、ずつと立ち素綱好みの鬘になり。

兒雷　コリヤ鹿六、汝が邪非道を憎み、爰に飾りし二千兩は、盜賊兒雷也が持つて行くぞ。

ト鹿六皆々一心に拜み、此聲聞えぬ思入。

鹿六　黄金が寄つて來るとは、忝けない〳〵。
兒雷　イヤサ、此の金持つて行くぞ。
鹿六　そりや、又寄つて來るとは、有難い〳〵。
皆々　有難い〳〵。
　ト兒雷也千兩箱を持ち、悠々と行きに掛り、思はず作内に躓く、作内心附き。
作内　うぬ、寶子めゝ
　ト作内千兩箱に手を掛ける、兒雷也につたりとして振拂ひ、ムゝと當てる。是にてワツと立ちすくみになる。兒雷也ツカ〳〵と、花道よき所まで行き、エイと氣合を掛ける。作内見事にかへる。
兒雷　大べらぼうめ。ハヽヽ、ハヽヽヽ。
　ト笑ひてこなし、是を誂らへの鳴物になり、兒雷也花道へはひろ。皆々心附かず。
皆々　アヽ有難い〳〵。
鹿六　コリヤ〳〵皆の者、モウ餘程たつた時分、灯しを持て〳〵。
お虎　ハイ〳〵。（トさぐりながら奥へはひり、手燭を持ち出て來る。）
鹿六　定めて大層寄つたであらう、有難い〳〵。

ト お虎、藪平床の間を見て、

二人 ヤア 床に飾つた二千兩がござりませぬ。

鹿六 ヤア〳〵。（トびつくりして、床の間を見て、）オヽ、金がないわい。

ト呆れしこなし、此の時薄ドロ〳〵になり、正面の掛物兒雷也といふ三字に替る。

藪平 まだ〳〵そればかりぢやござりませぬ。

お虎 巫女殿もなければ、

四人 觀音樣もござりませぬ。（ト鹿六床の間をよく〳〵見て、）

鹿六 ヤヽヽ、觀音の形は消え、兒雷也の三字となりしは、コリヤどうぢや。

藪平 コレ〳〵、此の騷動に氣の附かぬとはどうしたものだ、これ氣を附けい〳〵。

ト皆々作内をゆすぶる、作内心附き。

作内 モシ〳〵旦那、たつた今巫女樣が千兩箱を持つて行くから、私がやるまいと捉へましたら、手を出さずウンといつたばかりで、地響きがして、此の横腹が痛い〳〵。

鹿六 扨は盜賊兒雷也に欺かられ、盜まれしか、いま〳〵しい。（ト腹の立つ思入にて、）よし〳〵、此の返報は富貴太郎め、兒雷也と名乘りしこそ幸ひ、夜が明けなば濱邊へ引出し、首ぶツ放して兒雷

也に、欺かられたる腹を癒ん。それにしても金を入れし、手箱を持つて來い〳〵。

お虎　ハイ〳〵、畏りました。（ト手箱を持つて來る、鹿六取つて、）

鹿六　ドレ〳〵改めてくれん。（ト手箱を明ける、以前の金殘らず木の葉になる。）ヤア、最前の金は殘らず。

藪平　木の葉になつたわ。

四人　有難い〳〵。

鹿六　これも、彼奴の仕業であつたか、エヽいま〳〵しい。（ト木の葉を打付ける、）觀世音より授かりし壺を持て〳〵。

藪平　ハイ〳〵、畏りました。（ト渡す、鹿六見て、）

鹿六　ヤヽ、コリヤ觀世音より授かりし壺ではなうて。

藪平　薄汚ない油壺。

鹿六　アヽ、いま〳〵しい。

ト壺を打付ける、壺二ツに割れる、內よりさし金の蛙出て、飛び歩く、蛙の啼き聲に皆々見て。

四人　金が蛙に化けました。

鹿六　人が見たら蛙になれか、エヽいま〳〵しい。

ト薄ドロ〳〵、蛙の聲にて、さし金の蛙皆々を追ひ廻す。是にて四人逃げてはひる。鹿六殘りて思入、時の鐘にて、よろしく、

ひやうし　幕

（新潟浦刑罪の場）――本舞臺平舞臺、正面浪の遠見、三段に浪手摺、眞中松の大樹、同じく釣枝、上下に竹矢來、すべて新潟濱手の模樣、浪の音にて幕明く。

ト直ぐ竹本になり。

〽別れ行く爰は所も新潟の、寄邊定めぬ捨小舟、今日の出汐が出切りの科人、夫婦の別れ暇乞顏をみぎはの濱傳ひ、涙は先へ女の足、伯父がいたはりやう〳〵と、此方をさして走り來る、

ト花道より庄屋茂木兵衞、女房お靜出て、直本舞臺へ來て思入。

庄屋　あゝ嬉しや、まだ富貴太郎は引かれて來ぬさうな。

お靜　どうぞ息ある內に、今一目逢ひ度うござんすわいなア。

庄屋　モウ來るに間もあるまい、暫く是で待つて居よう。

〽あたり見廻し幸ひと、お靜を此方へ沖の石、今か〳〵と延び上り、待たるゝよりも待つ辛

さ袖は涙の一絞り、やう／＼そつと顔を上げ。

お靜　モウシ伯父樣、聞えぬはこちの人、どういふ譯か兒雷也と身に覺えもない名を名乘り、けふ此の濱で仕置に逢ふとは、いかなる天魔の魅入れなるか、跡に殘りし女房に、嘆きを掛けるはあまりと云へば胴慾な。

〽聞えませぬとばかりにて、又も涙にくれけるが、庄屋も涙の目をこすり。

庄屋　オヽ尤もぢや／＼が、是も前世の約束事、たとへば元のない事でも自身に白狀した上は、神佛の御惠みにてお助けあらば知らぬ事、もう人手では助けられぬわいなう。

お靜　そんなら爰で顏見るが、此の世の別れになりますかいなア。アイタヽヽ。

〽女心のやる方も、胸にさし來る持病の癪、庄屋は見るよりうろ／＼眼、

庄屋　ヤア、コリヤどうした／＼、扨は持病の癪でも起つたのか、ヤレ／＼こりや大變だ、折惡く藥はなし、どうしたらよからうぞ、と云うて去なれもせず、又爰に斯うしておかれもせず、（ト邊りを見廻し、）オヽさうぢや、富貴太郎が爰へ來るからは、いつそあの松蔭で、養生するがよい、サア立たう／＼。

ト引立てにかゝる。

お靜　アイタヽヽヽ、時も時とて意地の惡い、此の胸先へさし込んで。

庄屋　おゝさうであらう〱、したが術なからうがこつちへ來い。ドレ、おれが肩を貸してやりませう。

〽無理に引立て介抱し、小影へこそはたどり行く、程なく爰へ引汐の居所の歩みか我影も一足づゝに消えて行く、無實にあらぬ荒繩の身にかゝりたる涙の雨、科あら繩に高手小手、先へ拂はせ八鎌鹿六。

ト花道より、太郎荒繩にかゝり、役人棒を持ち引立て來る。跡より鹿六ぶつさき袴にて、家來を連れ出て來る。

足輕　下に居らう。

〽主の權威に高々と床几に腰をしつかとかけ、

鹿六　ヤイ信濃の國鼠の宿の生立、盜賊の張本兒雷也、汝これまで强盜なせし罪科輕からず、重き刑罰に行ふべき所、御慈悲を以て今日此の所にて死刑に行ふ、有難くお請け致せ。(ト太郎思入あつて、)

太郎　ハヽ、刑罪を受けまするも、是まで盜賊なしたる罪科、疾より覺悟致し居りますれば、片時も早く御法の通り、お仕置下されませう。

〽云ふ聲さへも細々と、今にも消え行く風情なり、遠目にそれと女房庄屋、あわてふためき

足も空、心も空に聲限り、マア〳〵待つてと走り付き、其まゝ磯邊にドウと伏す。

兩人　おゝ待つて下され。

お靜　どうぞ夫の息ある内、

庄屋　一目逢はして下さりませ。

〽御慈悲々々とばかりにて、涙も聲もいで兼ねる心の内こそあはれなり、富貴太郎はたゞ觀念の目を閉ぢて吐息つく〴〵、鹿六立出で、

鹿六　ヤイ、兒雷也が女房、伯父、又妨げにうせをつたか。

庄屋　イエ〳〵妨げは致しませぬが、せめて此の世の思ひ出に。

お靜　夫婦の別れ水杯を、お許しなされて下さりませ。

鹿六　ヤア、杯などゝは野太い事を。

兩人　サヽ、さうではござりませうが。

鹿六　達て申さば同罪だぞ。

〽時の横納言方も、永き別れの暇ごと、猶も手をつき。

庄屋　成程科人に暇乞など、申す事はなりますまいが、そこがお情といふもの。

お靜　夫がお仕置になりました跡で、たとひ私等の命を取られましても、さら〳〵恨みとは存じませぬお慈悲にどうぞ、モウシ。

〽思ひ込んだる願ひの筋、流石の八鎌も少しは和らぎ。

鹿六　フム、何といふ、そりやうぬらが命を取られても、ア、科人に暇乞が致し度いとか。

庄屋　ハイ〳〵、どうぞお慈悲。

お靜　お情でござりますわいなア。

鹿六　ム、、仕方がない、左程に申す事なれば、身が格別の情を以て、暫しの猶豫致してくれう。有難く三拜して、とつとゝ早う暇乞しろ。

〽聞くに二人は嬉しさの足もわな〳〵身も震はれ、心は先へ取付いて、變る夫の俤を見る目先立つ涙より、外に詞は無かりしが、やう〳〵心取り直し、さも恨めしげに夫の顔、まもり詰めたる涙聲。

お靜　エ、聞えぬぞやこちの人、お前命が二ツあるかいなア。いつぞや鎌倉へ行かしやんして、半年ばかり逗留の長い月日を情ない、指折かぞへ待つ甲斐も、たま〳〵戻つてござんしたら、打つて變つた墨附のほんにつきほも何ぢややら、そのまゝ國を出やしやんして、皆目便り音信も。

〽泣き明したる一人寐の、ほんにつれない男めと、思ふも矢つ張り戀しさの、思ひあまつて持病の癪。

雨の夜雪のあしたには、今はどうして居さんせう、モシ病み煩ひは出やせぬかと、女心のやるせなさ、こつちの思ふ樣にもない、あんまり氣強い胴慾ぢや、ちつとは私の身にも、なつてくれたがよいわいなア。

〽口說き立てたる恨み泣き、聞く度々に富貴太郎は面目涙の男泣き、喰ひしばる程目の先へ露かあらぬか一雫、膝に消え行く玉の緒も、無常を夢に現はせり。

太郎 その恨みは疾より覺悟のこの兒雷也、たゞ何事も約束と、思ひあきらめ亡き跡の回向を必ず賴むぞよ。

〽餘所の時雨を身に受けて、しめり勝なる詞の内、伯父は聞きかねお靜を引退け。

庄屋 コリヤ富貴太郎、そりや何を云ふのぢや、そりや何を。いゝやいなう、言ふ事と云はぬ事があるコリヤてつきりと血迷うたのぢやの。

お靜 さうでござんす、コリヤ大方氣が違うたのでござんせう。常から正直一遍のこちの人故、覺もない兒雷也とやらが同類かと、疑ひかゝつて御詮議に逢ひ、それで大方氣が違うたのでござんせう

これ〳〵富貴太郎殿、大事の所ぢや、氣を慥に持つて下さんせ。

太郎　イヤ氣も違はぬ、血迷ひもせぬ、兒雷也ぢや。

兩人　エヽ。（ト大きにびつくりする。）

太郎　サア、兒雷也には、命の恩がある。

兩人　ヤ、何と。

太郎　イヤサ、女の知つた事ぢやない、ぐづ〳〵云はずと早歸れ。

〽口には云へどこれが此の世の別れぞと千萬無量の物思ひ、聞く女房はあられぬ思ひ。

お靜　女の知つた事ぢやない、ぐづ〳〵云はずと去ねとは、そりや胴慾ぢや〳〵。たとひ知つても知らいでも大事の〳〵こちの人、私や何ぼうでも殺しはせぬ。それともお前が死なしやんすれば、私を先へ殺して下さんせ。國へ去ぬのは悲しうござんすわいなア。

〽我身をとんと夫の膝放れ難なき愛着の輪廻の綱に身をからみ、正體もなき有樣に富貴太郎も持て餘したる此方には、鹿六ほとんと退屈顏。

鹿六　ヤイ、其處など女郎め、情を掛けてやれば、附上りのした不屆き者、百萬だら悔んでも歸らぬ科人、時刻が延びる、きり〳〵立たうぞ。

お靜　イエ〳〵、たとひいかやうにお叱り受けうとも、是がどうして去なれませう。めつたに去にはせぬ、去なぬ〳〵。

太郎　ハテ聞譯の無い、去んでくれ。（トお靜を振放して、）エヽ、歸れといふに。（トきつといふ、やはりお靜取付き居る故、）イザ、お構ひなくとも、片時も早う。

鹿六　オヽ、よい覺悟だ。

足輕　キリ〳〵立ちませい。

二人　そんならどうでも。

鹿六　オヽ、水杯をせぬ替り、

〽云ふより早く足輕共、泣き入るお靜をあらけなく、無理に引退けかけへだて、用意もかね土壇の内、引据える間も後には、物の哀れも穴鎌鹿六。

ドレ、打ち落してやらうわい。

〽すらりと引拔く氷の刃、傍にお靜が消え入る思ひ、富貴太郎は一心に唱ふる唱名彌陀佛の誓ひに洩れぬ極樂の、上見ぬわしの二河白道、俄に大風頂きにあなやと見る間も荒鷲の蹴爪にかけて鹿六を肩先かけてばらりずん、五體を朱に氣味よき最期、こはそも如何にと驚く家

來、此方にありし富貴太郎もいつの間にかは大空へ、あれよ〳〵と庄屋お靜心も空にへだたりし雲井遥かに。

ト三重になり、よろしく一聲、風の音にて山幕を振冠せる。と下手より以前の家來、皆々逃げて出て來て、

家〇 何と、思ひがけないけふの騷動、どこも怪我はなかつたか。

家△ イヤモウ、何が恐ろしい風が吹いて來たと思うたら、大鷲が飛んで來て。

家□ 科人を何の苦もなう一つかみに、大空へ飛び行きしは。

家◎ 何でも怪しいあの大鷲、見附け次第に討取つて、御褒美にあづかり度いものぢや。

家〇 オヽさうだ〳〵、これから鷲の在所をさがし出さん、いづれもござれ。

皆々 サヽ、お越しなされい。

ト皆々上手へはひる。よろしく山幕切つて落す。

本舞臺一面岩組、後ろ黒幕、眞中に杉の大樹、日覆より釣枝、此の杉のよき所に大鷲羽を休め居る。下手に太郎、氣を失ひ居る體、山おろしにて、よろしく留る。

〽慕ひ行く氣も魂もあら鷲にさらはれし身の夢現、行方深山の峯つゞき、山又山のつゞら

折、命をからむ蔦かつら、暫しは羽根を休らひぬ、いつの間にかは兒雷也が姿あり〱目の
先に、以前の鳥は何處へやら、まこと妖術の不思議なり。
トドロ〱になり、上下より子役の蛙二疋出て、太郎に活を入れ、直にはひる。鷲を割つて兒雷也好
みのなりにて出る。

兒雷　心が附きしか、富貴太郎殿。

ト云はれてやう〱人心、吐息つく〱不思議さに、邊り見廻し五體を眺め。

太郎　ヤヽ、我は鷲にさらはれて、命取られしと思ひの外、さては存命にてあつたるか、トシテ我名を呼
びし御身は何人。

兒雷　見忘れありしか太郎殿、我鼠の宿にありし時、養父畑作殿永のいたつき色々との厚き御世話、高
金の藥を貢いで下されし大恩、忘れはおかじ太郎殿。

ト云ふに富貴はいぶかしく、怖々ながら兒雷也を、ためつすがめつ打眺め、少しは心おし鎭
め。

太郎　幼な顏に覺えある、御身信濃にありし時竹馬の友と結びしが、御身も無事で重疊々々。

兒雷　昨日今日と思ひしに、國を立出で、早や十年餘り、緣盡きずして、

太郎　不思議の對面、
兒雷　富貴殿、
太郎　太郎殿、
兒雷　懷かしう、
兩人　ござるわいなう。
〽幼馴染のなつかしく、嬉し涙ぞ露時雨、たもち兼ねたるばかりなり。
太郎　面目もなき此の有樣、父上此の世に居ます時は、持丸長者と云はれし身が、ふとした女に心をかけ、國を立出で新潟へ來り、熊手屋にて遊びし折、其女が落せし文を拾うて見れば、文にはあらで盜賊の疑ひ受けて獄屋の責。それは兎もあれ妹の深雪殿は息災でござるか、又何故御身盜賊の首領となりしぞ、その仔細は。
兒雷　我信濃の國を立出しより、山間に身を忍び盜賊をわざとなし、今海内に隱れなき蝦蟇の妖術を行ふ兒雷也といふ首領となりしも、大望志望あつての事、まつた此の程新潟へ入込みしは、養父畑作が敵がん八を討たん爲め、卽ち熊手屋慾四郎と變名なし、彼の地に居るは幸ひに妹に敵を討たせんばつかり、更科都守之助と僞りて首尾よく敵がん八を助太刀なして妹に討たせし折、陣代鹿

六我を捕へんと入込みしを妖術を以ておびやかし、それより鎌倉へ趣かんと信濃路へさしかゝりしが、譬の如く故郷忘じ難く鼠の宿を通りしに、計らず妹御に出逢ひ、御身の無實に苦しむ事をつぶさに聞いてびつくり、我恩ある其の人に獄屋の苦しみ受けさしたるかと、直に越路にとつて返し、兒通しの巫女と姿を變へ、再度鹿六をおびやかし、今日又御身の危急をば鷲となつて助けしも、是皆妖術のなす所、さるにても合點の行かぬは、身に覺えなき無實をうけ、自ら兒雷也と名乘り、斯く刑罪に逢はれし仔細は。

太郎　サア、先達て新潟にて捕はれてより昨日まで、身に覺えなき事故知らぬと云張り呵責を受けしが昨日女房や伯父に逢ひ、兒雷也といふ盜賊は畑作が悴太郎と聞き、さてこそ幼立より世の常ならず、察する所大望あつて盜賊の疑ひ受けしものと御身の胸中察せし故、我兒雷也と僞りて刑罪を受けたるは、七年以前我家へ摺針太郎といふ盜賊込入つて、其の折親子四人一命を取らるゝ所であつたるを、御身が鋭き働きにて寶も取られず命も助かり、云はゞ命の親たる故、所詮鹿六が非道の責に命を取らるゝ程ならば、兒雷也となり刑罰うけ、御身が詮議をゆるがせにせんと、まツかくなせしはその以前、受けたる恩を報ぜん爲め。

兒雷　ホヽヽ、命を捨て我詮議ゆるがせにせんとのお志しか、エヽ、忝い。

太郎　それも又御危急をば御身の情に助けられ、其の場を脱れし上は、いつか御恩を送るべきや。
兒雷　アイヤ、その御禮は身共が先年受けし、高恩のある太郎殿。
太郎　イヤ、その高恩は私が。
兒雷　イヤ、その禮は身共より。
太郎　ハテ、命の親の兒雷也殿。
兩人　チエ、忝い。
〽互ひに恩義と情の返禮、悦び合ふぞ殊勝なり。
兒雷　一先づ故郷へ立歸り、いづれへなりと縁ある方へ、暫しその身を忍ばれよ。（ト懐中より袱紗包みを出し。）些少なれども、旅の路用に。
太郎　スリヤ、此の金を、エヽ忝い。（ト金を頂き懐中なし、）シテ兒雷也殿には、是よりいづれへ。
兒雷　先づ鎌倉へ志し、彼の地に足を止むる心。
太郎　鎌倉には我も親しき知るべあれば。（ト捕手窺ひ出て、）
捕手　お尋ね者の盜賊。（ト兒雷也にかゝるを、よろしく止めて、）
兒雷　それ。（ト懐中より鑑札を出して投げる。）

太郎　これは。(ト太郎取つて、)
兒雷　それぞ諸國の往來切手。
太郎　何から何まで、チエ、忝い。
兒雷　隨分御無事で。
太郎　こなたも堅固で。
兒雷　おさらば。
太郎　さらば。
〽夕告鳥の　忽に、虛空はるかに舞ひ上れば、互ひに見上げ見下して、雲か霞か花吹雪、立別れてぞ。(ト大ドロ〳〵にて、兒雷也鷲に乘り、空へ上る。太郎見上げる、よろしく三重にて、)

幕

大詰

月影家奧殿の場
國分寺山門の場

〔役名〕——比企藏人賴貞實は兒雷也、月影深雪之助、妹照田實は田每姬、蒲原與七郞、椎谷軍八、月

影彡八郎、高砂勇美之助、田毎姫實は妹照田、腰元、捕手、軍卒、侍等。」

（月影館の場）——本舞臺正面に畫襖、四間の上段の間、爰に上下の侍○△二人坐り居て、管絃にて幕明く。

侍○ 文吾殿、今日は鎌倉より御上使御入來との先ぶれ。

侍△ それ故家中一統、未明より相詰めよとの儀でござる。

侍○ 隨分粗相なきやうに、萬端に御心をば。

侍△ 御同然にござる。然し詰所へ參らうではござらぬか。

侍○ 左樣仕りませう。サヽ、御同伴仕りませう。（ト管絃にて上手へはひる。）

呼び 御上使の御入り。

ト是にて奥より、月影深雪之助長上下小さ刀、椎谷軍八上下、諸士二人、跡より田毎姫實は照田振袖にて、妹照田實は田毎姫、腰元にて出來る。

深雪 管領家より御上使御入來。

軍八 いづれもお出迎ひ。

皆々 畏つてござりまする。

呼び　御入り。

ト太鼓、謠になり、花道より比企藏人實は兒雷也、長上下、小さ刀、跡より小姓二人紫袱紗にて刀を持ち、附き出て花道にて、

兒雷　鎌倉管領持氏卿の上意を蒙り、比企藏人賴貞是まで來着致してござる。

深雪　これは〳〵賴貞殿には、遠路の所御苦勞千萬、即ち月影郡領が嫡子深雪之助照義。

照田　更科左衛門が娘田每。

田每　同じく近臣葛飾勇美之助が　妹　照田。

軍八　當家の家臣椎谷軍八。

侍○　三國藤六。

侍△　輿坂甚藏。

軍八　其外近臣腰元まで。

深雪　これまでお出迎ひ。

皆々　仕つてござります。

兒雷　深雪之助殿始め、方々の出迎ひ、祝着に存ずる。

深雪　何はともあれ、御上使様には。

軍八　設けのお席へ。

皆々　お通り下さりませう。

兒雷　役日なれば、上座御免。（ト右の鳴物にて本舞臺へ來り、二重へ合引に掛り、皆々並よく並ぶ。）

深雪　父郡領照時折惡しく所勞によつて、お出迎ひも仕らず、失禮の段御容赦あつて、上意の趣き仰せ聞けられ下さりませうならば。

照田　自分始め。

軍八　家中一統如何ばかりか。

深雪　大慶至極に。

皆々　存じ奉りまする。（ト合方になり。）

兒雷　上意の趣き餘の儀にあらず、先達て尾形征伐の折から、月影更科互ひに意趣を差挾む由さるによつて此度更科の息女田毎姫と縁組をなし、當家と和睦調へよと管領家の御取持、有難く御請け申してよからう。

深雪　コハ管領職のお取持にて、身不肖の某へ。

照田　不束なる自らを冥加に餘る御媒。
軍八　和睦を結ぶ婚姻は、當家の殿は申すに及ばず。
田毎　家中を始め私共まで。
深雪　管領の御仁惠、
皆々　有難く存じ奉ります。
兒雷　まつた足利の御内意は、月形の印披見致し參るべしとの御内意なり。（ト深雪之助思入あつて、）
深雪　ハツ、管領の嚴命とあれば、是を否むにはあらざれども、元月形の印は尾形の重寶九州征伐の其砌り更科殿分捕りなし、管領家へ差上げしを、當家へお預けありし故、それを遺恨に兩家の確執、今此の席でその印を、御披見あらば又元の、恨みの種を蒔く道理、日あらず某鎌倉へ月形の印持參せん。何卒澄みたる水の濁らぬやう、御賢察願ひ上げ奉る。
兒雷　それがし上使の役目なれば、月形の印急ぎ内見致さう、モシ又延引のその時は、謀叛を起す底意ならんと御疑念あらば如何なすぞ。
深雪　御疑念あらば何か厭はん、只今是にて御覽に入れん。
（ト此の時バタ〳〵にて、蒲原與七郎、大小上下、肩衣脫ぎかけ、ツカ〳〵と出て花道にて、）

與七　ハツ、若殿へ申上げます。一大事でござりまする。

深雪　ヤア、其方は蒲原與七郎。

皆々　一大事とは。

與七　ハツ、拙者お預かりの乾の御寶藏へ盜賊入つて、祕めおきし尾形の重寶月形の印、紛失致してござりまする。

深雪　スリヤ、只今御上使へ、御覽に入るゝ月形の印、

皆々　盜賊が入つて紛失とな。（ト皆々思入、軍八ツカ〳〵と與七郎を引付け。）

軍八　與七殿、イヤサ與七郎、お手前何と心得てござる、寶藏を守護なしながら、祕めおく重器を奪はるゝとは、其身の役目の怠り故、今月形の印なき時は、殿の御身にかゝる大事、何故切腹なして申譯を致さぬぞ。イヤサ、腹の切りやう御存じないか、但し命が欲しいか、言はう樣なきうつけ者めが。

ト突放す、與七郎思入あつて、

與七　イヤ、仰せまでも候はず、其場を去らず切腹と存ぜしかど、此の事を申さんばかりに惜しの猶豫只今此場で申譯。（ト刀に手を掛ける。）

照田　ソレ、照田、留めやれ。
田毎　ハッ、與七郎殿、お待ちなされませ。
與七　申譯の切腹、必ずお留め下さりますな。
田毎　左樣なれども、姫君樣の御意、まア〳〵お待ちなされませ。
軍八　ヤア、大切なる月形の印紛失させし與七郎の、何故切腹をお止めなさるゝ、女の差出た所でござらぬ、控へてござらつしやれ。
照田　コレ軍八、御上使の御前を憚り、妾が止めしに、其方何故詞を返すのぢや。
田毎　姫君樣の御意でござりまする。
軍八　ムヽ。（ト控へる。）
兒雷　月形の印紛失とあらば、管領家への申譯は。
深雪　サヽ、其の申譯は。
兒雷　上へ對して言譯あるか。
深雪　サア、それは。
兒雷　但し謀叛の兆しあつてか。

深雪　サア。

兩人　サア〳〵。

兒雷　返答は、ナヽ何と。

勇美　アイヤ、其申譯暫らくお待ち下さりませう。

皆々　何と。

ト中の舞になり。花道より勇美之助衣裳、上下、大小にて出て、花道に留る。

軍八　貴殿は高砂、

皆々　勇美之助殿。

勇美　ハツ、管領家の御上使比企の藏人頼貞殿には、遠路の御入來御苦勞千萬に存じ奉ります。卽ち某こそ高砂勇美之助、參上仕つてござりまする。

兒雷　ムヽ、スリヤ其方が高砂勇美之助とな。許す、近う。

勇美　御免。(ト本舞臺へ來る。)山家育ちの無骨のそれがし、爾今お見知り下されませう。

兒雷　何は格別管領家への申譯、いよ〳〵貴殿が御返答申さるゝぢやまで。

勇美　ハツ、先年尾形征伐の砌りより、軍功を爭ひ不和となつたる月影更科、此度管領家の御媒介にて

和睦を結ぶ因みの婚姻、然るに御內見に入るべき月形の印紛失なせしは是輕からざる一大事、管領家への申譯、卽ち當家の浮沈の瀨戸、暫時御猶豫下さる樣、婚儀を結べば一家の更科、何卒御上使樣の御仁情、偏に願ひ奉る。

兒雷　何さま、卽答にも相成るまい、今夕酉の上刻まで、上使の寸志猶豫致さん。

勇美　スリヤ、御猶豫をなし下されますとや、早速の御許容、有難う存じ奉ります。

深雪　暮六ツまでは餘程の間、賴貞殿には御座を替られ、

軍八　御休息あつて、

皆々　然るべう存じ奉りまする。

兒雷　何さま、暫時休息。

勇美　左樣ござらば。

深雪　賴貞殿。

兒雷　然らば、方々。

皆々　先づ入らせられませう。

ト唄、管絃になり、皆々奥へはひる。跡に勇美之助深雪之助殘り、こなしあつて。

深雪　勇美之助殿。

勇美　ア丶コレ、（ト合方になり、）今鎌倉の御武徳にて、四海治まる泰平に兩家の不和を管領の、御媒にて和睦の婚禮、その上使たる賴貞殿月形の印內見は、何共以て心得ず、それ故それがし、（ト思入あつて深雪之助に囁く、）

深雪　スリヤ、月形の印紛失は。

勇美　アイヤ、竊に〳〵。

ト又囁く。中の舞にて、此の道具よろしく廻る。

（同月影館の場）＝＝本舞臺三間の間高二重、本緣附、襷欄間、一面に御簾上げおろしあり、正面金襖、上下網代塀、柴垣、櫻の立木、櫻の釣枝よろしく、琴唄にて道具留る。とばた〳〵にて、權平袴股立頬冠り、大小にて出て來て、邊りを窺ひ、上手へ礫を打つ、軍八出て來て。

軍八　權平か。

權平　これ。（ト押へ、あたりを窺ひ思入あつて、）シテ、賴みおいたる一品は。

權平　まんまと首尾よく、手に入れました。

ト懷より蒔繪の箱を出す、軍八取つて、

軍八　オヽ、出來した〳〵。紛ふ方なき月形の印、最前蒲原與七郎が紛失なせしと云ひし故、汝が奪ひ取りしと覺り、持參致すを相待ち居つた。

權平　乾の隅の寶藏、晝も小暗き木立故、それを幸ひ壁をこぼち、なんなく忍んで奪ひしその一品。

軍八　我手に入りし上からは、此の身の出世によき手づる。

權平　シテ、拙者めは。

軍八　人目に掛らぬ、其内に。

權平　左樣なれば、軍八樣。

軍八　權平行きやれ。

權平　ハッ。（ト權平下手へはひる。軍八思入あつて、）

軍八　尾形の重寶月形の印、是をおとりに、望を叶へん、オヽさうだ。（ト行掛ける、下手より與七郎窺ひ出て、）

與七　軍八殿、待つた。（ト鐺を取り、留める。）

軍八　わりや蒲原與七郎、何故留める。

與七　何故とは知れた事、紛失なせし月形の印、此の與七郎に渡さつしやい。

軍八　イヤ、月形とやら鎌形とやら、身共は知らねえ覺えはない。

與七　イヽヤ覺えないとは云はさぬ。最前からの樣子、殘らず後ろで聞いて居た。

軍八　ムヽ、それ聞かれたら生けてはおかぬ。

與七　何を小しやくな、キリ〳〵渡せ。

軍八　見事取るかよ。

與七　おんでもない事。

軍八　何を。

ト早笛になり、兩人件の箱をかせに立廻り、ト、軍八與七郎を當て、下手柴垣へはひる。與七郎心付きて。

與七　チエヽ、殘念な、不覺を取りしか、跡追かけて、おゝさうだ。

ト逸散に花道へはひろ。軍八柴垣より出て向うを見て思入、後ろの簾を卷上げると、内に兒雷也立身にて、窺ひ居る、軍八見て。

軍八　ヤ、賴貞樣には是にお出でなされましたか、最前より御氣鬱と存じ、お慰みにもならうかと御覽に入れ度き一品がござりまする。

兒雷　披見なさん。

軍八　御意に叶ふか叶はぬか、拙者が心を籠めし一品。（ト右の箱を渡し、）それぞ先年九州にて、亡び失せたる尾形の重寶、軍勢催促の月形の印、是を拙者が手柄始めに、貴殿の手下にして下され。

兒雷　何と。

軍八　イヤサ、お隱しめさるは尤もだが、手下にならうと望むからは、まだ〳〵是ばかりでない、誠は先年九州にて亡び失せたる尾形の餘類、それ故無念を晴らさんと、より〳〵叛逆謀叛の企て、軍勢催促になくて叶はぬ家の重寶、月形の印奪ひ取らん爲め、上使と僞り當家へ入込みし事を、知り拔いて居る此の軍八、サア此の一品を手柄始めに、手下にして下さるか、但しはして下さらぬか、如何でござる兒雷也どの、有無の返事を聞して下され。

ト兒雷也の傍へ詰め寄る、兒雷也ずつと立つて胴切にする、此の時後ろの襖を開けて照田出て是を見てびつくりする。兒雷也刀を納め、件の箱を懷中する、此の時兩人顏見合せ。

照田　あなたは御上使、賴貞樣。

兒雷　シテ、そなたにはいつの間に。

照田　サア自らが參りましたは、チトあなたへお願ひがござりまして。

兒雷　なに、それがしへ願ひとは。（ト合方になり、）

照田　申すも恥かしき事ながら、最前あなたの御入りの時、フトお姿を見上げたのが、此の身の因果お見染め申し、とても殿御を持つならば姫御前の身の果報ぞと、心迷ひて思ひしかど、道に背きし事故に我身で我身を戒めて幾度思ひ直しても、思ひ切られぬはかなさに、恥かしい事ながら、打付けて云ひ出すからは此の願ひ、叶はぬ時はそのまゝに髪をおろして尼となり、一生殿御は持たぬ心。道にそむきし事ながら、斯程に思ふ自らを少しは不便と思召し、願ひを叶へて下さ れいなア。

兒雷　ハテ、思ひも寄らぬ姫が願ひ、假初ならぬ管領の御仲立、不義とや言はん不孝の汚名、たしなみめされ。

照田　サア、その不義不孝も辨へぬではなけれども、思ひ切られぬ戀慕のきづな、無理とは知れど此の願ひ、どうぞ叶へて下さりませ。

兒雷　アイヤ如何やうに云はるゝとも、此の願ひ叶へられぬ。（ト兒雷也ずつと立つて）

照田　そりや、どのやうに申しても。

兒雷　思ひ切られよ田毎姫。

照田　ハアヽ、此の上はさうぢや。（ト自害しようとする。）

兒雷　イヤコレ、待つた。

照田　イエ〳〵、生きて詮ない自らが身の上、留めずと死なして下さりませ。

兒雷　スリヤ、命に代へても。

照田　どうも思ひ切られませぬわいなア。（ト兒雷也思入。）

兒雷　是非に及ばぬ。其の親切にほだされて。

照田　自らがお願ひを。

兒雷　不義の汚名を受ける心。

照田　エヽ、お嬉しう存じまする。（ト寄り添はうとする、奥より田毎姫出て、）

田毎　姫君には、どれへお越しでござりまする。（ト云ひながら見て、）オヽ、是にお渡りでござりましたか、大殿樣のお尋ね、ちやつと奥へお越しなされませう。

照田　イヤ、自らはちと爰に。（ト兒雷也へ思入し）

田毎　御用の程は存じませぬが、まアお越し遊ばしませう。

照田　それぢやというて。

田毎　ハテマア、お越し遊ばされませう。

照田　エヽモウ、つツと何ぢやぞいなア。

ト唄になり、兒雷也へ心を殘し追ひ立てられ奧へはひる。跡に兒雷也こなしあつて。

兒雷　姫の自害を止めしも、まさかの時は、（ト奧へ思入。）一先館を、フム（ト人質といふ思入、サヤン〲とセツの時計鳴る。）最早酉の刻、多聞頭殿いづれにござる、返答を承はらん。

勇美　ハツ、只今御返答仕らん。（ト序の舞になり、勇美之助長上下にて出來り、）これは〲御上使樣には、先刻より御退屈、月形の印只今御内聞に入れ奉らん。ヤア〲深雪之助殿、月形の印持參めされ。

深雪　ハア〲。

勇美　先刻紛失と申せし月形の印、早速手に入り候故、御内見に入れ奉る。ソレ、深雪之助殿。

深雪　ハア。

ト深雪之助三方に、印籠、紫袱紗に包みしを持ち出て、兒雷也の傍へ持行く、兒雷也合點の行かぬ思入。

御上使樣、イザ御内見下さりませう。

兒雷　ドレ。（ト取上げ袱紗を取退け、）ヤヽ、コリヤ月形の印とな。

勇美　見忘れられしか貞頼殿、いつぞや箱根にて病に苦しむ野伏りに、御身が與へし印籠なるわ。
兒雷　ヤ、、何と。（ト肥前節やうの合方になり、）
勇美　まだその時は春の末、殘んの雪の小地獄谷。
兒雷　遠寺の鐘も小夜更けて、傾く月の山ふところ。
勇美　數多の手下が附き隨ひ。
兒雷　菰を冠りし野伏りの。
勇美　命を救ひ取らせんと。
兒雷　印籠與へし慈悲心も。
勇美　さてこそ其夜の盜賊か。
兒雷　非人でありしか。
勇美　思ひ掛けない。
兒雷　替つた所で、
兩人　逢うたよなア。
勇美　いかに兒雷也、斯く現はるゝ上からは、本名名乘つて繩に掛れ。

兒雷　ヤア、事々しき勇美之助、黒姫山の盗賊兒雷也杯とは、何のたは言。

勇美　イヤ、汝いか程包み隠すとも、月形の印は尾形の重寶、それに心を掛くるは正しく曲者、先刻館へ來りしより、只者ならずと察せしかど、さあらぬ體にもてなし、そちが俗姓さぐらん爲め。

深雪　すべて盗賊は金銀に、目をかくるに何故あつて、尾形の重寶に望を掛けしぞ。

兒雷　金銀衣服はいふに及ばず、天下に名高き寶と聞けば、奪ひ取るは盗賊の習ひ。（ト懐中より以前の箱を出して、）如何に勇美之助、我が本心を探らん爲め内見の折紛失を云ひしも僞り、又軍八が奪ひしも僞り、裏の裏行く手立を以て、我を如何程はかるとも、我又汝を計る智あり、ハテ、小ざかしい。

ト右の印を打付ける、印二つに割れる。勇美之助それを取つて。

勇美　エヽ。

ト件の印を欄間の額へ打付ける、掛煙硝立つ。是をキツカケに、遠寄せになる。

兒雷　ヤア、あの鐘太鼓は。

勇美　汝を取巻く。

深雪　かねての手筈。

勇美　最早や叶はぬ。
皆々　覺悟せよ。
兒雷　ムヽ、ハヽヽヽ、たとひ何萬騎にて取卷くとも、愚かな事を。
勇美　ソレ、者共。
捕手　ハアヽ。（ト襷鉢卷の捕手六人出て、）覺悟。
ト兒雷也を取卷く、兒雷也印を結び、ドロ〳〵にて、うしろの襖へでんがくにて消える
勇美　ヤア、扨は妖術にて姿を隱しよなア。（ト奥より多八郎出來り、）
多八　ヤア、斯くおらんと察せし故、病氣と云ひたて引籠りしに、此の有樣は。
勇美　拙者は是より國分寺の、奥山口へ駈け向ひ、兒雷也を召捕る用意。
深雪　ちつとも早う。
勇美　直ぐさま是より。
多八　行きやれ。
勇美　はツ、それ。（ト早舞にて、花道へ走りはひる。）
深雪　シテ、某は。

多八　汝は是より大手に馳せ向ひ、軍兵引連れ國分寺を、取卷く用意。
深雪　委細畏つてござりまする。
多八　予は舘に引籠り、諸士を引連れ跡より後詰め致さん。
深雪　然らば拙者は。
多八　急げ〳〵。
深雪　はア。（トどんちやんはげしく、下手へはひる。）
多八　何かの手筈是でよし〳〵、大敵を恐るべからず小敵を侮らずとは、此處の事、それにつけても勇美之助。ハテ、勇ましき、（と思入するを木のかしら。）武士ぢやなア。
ト向うを見込む。やはりどんちやんにて、淺黄幕を振り冠せる。
（同奥殿の場）――本舞臺上手二間の間高二重。御殿造り黑塗りの高欄、一面の御簾、奥庭の遠見櫻の林、日覆より櫻の釣枝、柴垣石燈籠よろしく。道具出來次第淺黄幕を切つて落す。ト上手より腰元六人、各〻紫鉢卷襷にて十手を持ち出て。
五人　松枝殿。

腰〇　これ。（ト皆々囁き合ひ。）忍ばつしやれ。
五人　心得ました。
ト兩方へ忍ぶ、本釣鐘、凄き合方になり、眞中柴垣を破り照田好みのなり、一腰をさし窺ひ出る此の時月を出す。
照田　二十日の月の雲間を洩れ、今宵も最早子の刻過ぎ、夜半に紛れて舘を拔け出で、兒雷也樣の跡を慕うて此の身の願ひ、見咎められぬその内に、築地を越えて、ヲヽ、さうぢや。
ト思入、此の時六人ばら〳〵と出て、照田を取卷き、
六人　姫君、やらぬ。
照田　コリヤ自らを、何としやる。
腰〇　何とするとは情ない、主ある御身でありながら、盗賊をお慕ひある不義の科、それ故捕手に來りし私共。
六人　姫君お覺悟なされませ。
照田　ヲヽ、濡れぬ先こそ露をも厭へ、一旦思ひ染めしからは、世に恐ろしき盗賊も、何の厭はう厭ひはせじ、よしや鬼神と言はるゝとも、女の一念添はいでおかうか。

腰〇 モウ此の上は、是非に及ばぬ、それ、皆さん。

五人 心得ました。姫君やらぬ。

照川 何を小しやくな。

トドン〳〵にて、皆々打つて掛るをちよつと立廻りあつて、誂への唄入りの鳴物になり、照田一腰を抜きはげしく立廻り、よき程にドロ〳〵になり、上手より兒雷也着附四天のなりにて出て來る、照田見て。

照田 ヤア、あなたは兒雷也さん。(ト行かうとする。)

皆々 やらぬ。

ト捕手かゝるを、兒雷也しづ〳〵と眞中へ來る、捕手照田をやるまいと、きつと圍ふ、兒雷也印を結ぶ、皆々同志討の立廻り、照田嬉しき思入。

照田 ようまアあなたは。

兒雷 コリヤ、一先づ爰をのがれ。

照田 そんなら一緒に。

兒雷 おゝ。

ト手を取り、印を結ぶ。女形皆々行かうとしても行かれぬこなし、此の兩人大ゼリにて消える、皆々びつくりして。

腰〇　アレ〳〵、お姫樣も御一緒に。

六人　いづれへか。

ト皆々ツカ〳〵と行き掛ると、蛙二匹飛んで出て皆々に飛び掛る。是にて皆々逃げ廻り、トヾ逃げてはひる。能き程に上手御簾を卷き上げる。勇美之助好みのなり傍に盆石ある。勇美之助それを取つて投る。蛙目をあき、口より花火をふく、勇美之助きつと見て。

勇美　ハテ恐ろしい。（ト木のかしら。）妖術ぢやよなア。

トきつと見得、ドロ〳〵にてよろしく、

ひやうし　幕

トツナギにて引返す。本舞臺一面の淺黄幕、櫻の釣枝、禪の勤にて幕明く。と下手より花四天の捕手大勢出て、

花一　いかにかた〳〵、此の程月影家へ御婚姻ありし、田舎姫樣を奪ひし、

花二 黒姫山の盗賊兒雷也、此の國分寺の山門に、姫諸共に隠れ住むよし。

花二 それ故高砂勇美之助様の仰せを受け、取巻きに参りし我々共。

花四 アノ兒雷也といふ盗賊は、蝦蟇の妖術行ふ曲者。

花五 千變萬化に姿を變れば、なか／＼一筋縄では行かぬ奴。

花六 不意に討入り度を失はせ、其の虚に附入り搦め捕らん。

花一 方々、油斷めさるな。

皆々 心得ました。

花一 いづれもござれ。

ト禪の勤にて、皆々上手へはひる。本釣鐘、琴唄一くさりあつて、琴入り本行の禪の勤になり、トヒヨを冠せ、空より雁三羽舞ふ、よき程に淺黄幕切つて落す。

（國分寺山門の場）――本舞臺三間の間極彩色朱塗りの山門、めつき金物つき、空より一面の糸櫻見事に、爰に兒雷也どてら、しごきなりかい卷を引きかけ、立身にて上手に居る。下手に照田振袖姫のなり。琴を調べて居る。此の見得、大鳴物にて道具留る。

兒雷　今を盛りと咲く花に、霞む日影も山の端へ、早や入相の鐘の聲。
照田　木の下風も寒からで、行方いづくと白妙の空に知られぬ花吹雪。
兒雷　降り積む雪の信濃路や、峯を越路の山々へ。
照田　故郷の空なつかしく、花を見捨て歸る雁。
兒雷　それにはあらで故郷の家路忘るゝ今の身は。
照田　曉知らぬ眠りさへ。
兒雷　晝と夜なる境界は。
照田　浮世を忍ぶ白浪の。
兒雷　寄る邊定めぬ花の宿。
照田　暮るゝを惜しむ山寺に。
兒雷　ハテ面白き。
二人　眺めぢやなア。

ト琴唄の切れにて、雁を引いて取る。本釣鐘誂への合方になり、兒雷也長煙管にて煙草を呑みながら。

兒雷　譬の通り故郷忘じ難く、越路へ歸る雁を、見るにつけても田毎姫、よしなき我を慕ひ來て、此の山寺の假住ひ、嘸や物うき事であらう。

照田　其雁とは裏表、故郷の空をよそになし、住めば都の山寺を、何の物憂く思ひませう。

兒雷　左程慕ふ心に惚れ、不義の汚名も厭はずに、今更思へば兩親の我を恨むはいかばかり、それと察して更科へ、今宵竊に送り返さん。

照田　スリヤ、父母の恨みをば、推量あつて自らを返したまはるとか。

兒雷　是も越路へ雁の、返るを悟り信濃路へ、おことを返す我情。

照田　そのお情があるならば、故郷へ返したまはずとも、此の身の願ひを叶へてたべ。

兒雷　そのお詞はさる事ながら、おぬしと枕は替されぬ。

照田　そりや何故に。

兒雷　此の歌を吟じて見よ。

ト懐より短册を出して、照田に渡す、取つて見て。

照田「伯母捨ての山路に掛る雲晴れて、田毎に寫る更科の月」これは。

兒雷　空なる月も水なる月も、形は同じ田毎の月。

照田　エヽ。

兒雷　田毎姫と僞りしは、勇美之助が妹照田、何と違ひはあるまいがな。

照田　エヽ、どうしてそれを。

兒雷　知らでならうか、妖術にて、萬通得たる此の兒雷也。

照田　女心の淺はかに、御身を僞はる妾こそ、いかにも勇美之助が妹照田、兄勇美之助が計らひにて、姫君樣に入替り、わざと戀慕の體になし、此の身は計りおほせしと思ひの外、厚き情の兒雷也殿へ何面目、是まで僞はりし罪科は、せめて妾の首打つて、恨みを晴らして下さりませ。

ト照田兒雷也へ身を向け、覺悟の體、兒雷也思入あつて、

兒雷　イヤ、たとひ僞り忍ぶとも、主人に替る忠義の其方、何とて首を討つべきぞ、早く歸れ。

照田　スリヤ此儘に更科へ、妾を返したまふとか、斯程義心の兒雷也殿が、何故謀叛を企て給ふぞ。

兒雷　謀叛も亡き父の、修羅の亡執晴らさん爲め。

照田　エヽ。

兒雷　片時も早う送り返さん。

照田　スリヤ、どうあつても妾をば。

兒雷　いそふれ照田。

照田　はい。

ト兒雷也印を結ぶ、ドロ〳〵になり、照田そのまゝ花道宙引にて、能き所まで行き、すつぽんにて後へ上下の侍出て長柄の傘をさしかける。照田思入あつて。

照田　マア〳〵、歩むともなく中空に、見馴れざる供の從ふは。

兒雷　此の兒雷也が行ふ妖術。

照田　スリヤ、妾が路次を。

侍皆　警固の我々。

照田　ハテ、希代な術もある物ぢやなア。

皆々　姫君のお立ち。

トドロ〳〵誂への、唄になり、賑やかな鳴物にて照田行きかける。切穴より行列の供廻り追々出て照田の跡に附き、花道へはひる。兒雷也是を見送り居る。鳴物打上げ、風の音トヒヨになり、上下へさしがれの小鳥立つ、兒雷也見て。

兒雷　野に伏勢ある時は、歸雁列を亂すとかや。それにはあらず數多の小鳥、ねぐらを放れて啼き立つ

るは、我を窺ふ者ありてか。

ト山門の扉開き、勇美之助好みのなりにて出て。

勇美　如何に兒雷也、汝誠の勇あらば、卑怯の術を行はず、追手に向ひし勇美之助と、今尋常の勝負致せ。

兒雷　ムヽ、敵に取つて不足なき、望む所の相手勇美之助、いかにも此の場で勝負なさん。

勇美　兒雷也やらぬ。

兒雷　ならば手柄に、からめて見よ。

勇美　サア。

兩人　サア〳〵。

ト兩人立廻り、きつと見得、知らせにて此の道具せり上げになり、山幕附いて上る。鳴物になり、山幕切つて落す。

(國分寺境内の場)――本舞臺向う打拔き、櫻山の遠見、釣枝見事に、所々に大篝、爰に兒雷也大百日四天好みのなりにて拔身をかまへ、きつとなつて居る。軍兵大勢長柄にて取巻き居る、此の見得よろ

しく、遠寄せばたくにて、道具留る。と軍兵皆々立廻り、花道際まで追ひ行き、逃げてはひる。さしがれの矢飛び來るを、兒雷也取る。皆々出て來る。

多聞　エイ。

兒雷　ヤア、役にも立たぬほてゝんごふ、何奴なるぞ。

多門　イヤ、その矢の主は月影多聞之頭照景。

照田　高砂勇美之助が妹照田。

與七　蒲原與七郎照忠。

多聞　改めて見參。

皆々　見參。

トどんちやん、打込みになり、上手より多聞三郎着付長上下鉢卷、跡より照田、長刀を持ち、好みのなり、下手より與七郎、長袴鬘、卷鉢、槍を持ち、跡より軍兵大勢、高張り提灯を持ち出る。

多聞　如何に兒雷也、汝いかほどの妖術ありとも、邪は正に敵し難しの諺。

與七　最早此の上は尋常に、尾形の餘類と名乘つてよからう。

兒雷　ヤア、我が俗稱を尾形などゝは。

多聞　如何に兒雷也、汝いか程包むとも、最早逃さぬ。者共、そりや。
皆々　はア、。
ト軍兵取巻き、立廻つて花道へ追ひ行き、よき所にてきつとなる。
勇美　ヤア〳〵兒雷也、そこ一寸も動くな。
兒雷　ヤ、、何と。
トカケリになり、花道より、勇美之助手槍を持ち出て、兩人きつと見得。
勇美　いかに兒雷也、最前一時に勝負を決せんと思ひの外、汝が手下にさゝへられ、空しく其の場は別れ再度の勝負、此の勇美之助が手練の槍先、受けらるゝなら受けて見よ。
ト是にて本舞臺へ押し戻し。
多門　此の上は尋常に、本名を名乘つてしまへ。
兒雷　ホウ、左程本名聞き度くば、名乘つて聞かさん、我こそは筑紫の城主、尾形弘行なるわ。
皆々　さてこそな。
多聞　此の上は心を改め。
皆々　降參致せ。

兒雷　ヤア、降參なぞとは何のたは言、一旦思ひ立つたる大望。
與七　たとひ此の場は見逃すとも。
多聞　重ねて出逢ふ其時は。
勇美　越の白根に降り積る。
照田　雪にすゝぐの聲あれば、
深雪　時節を待つて一戰なさん。
勇美　互ひの勝負は、
皆々　戰場々々。
多聞
深雪　まづ、それまでは。
兒雷　さらば。
皆々　さらば。（ト皆々きつと見得、軍兵ばら〳〵と取巻き、）
皆々　動くな。
ト兒雷也を取巻き、どんちやんにて、きつと皆々引張りの見得よろしく。
幕

兒雷也（終り）

小春穩沖津白浪

當時流行 東海道茶店聞書

世話講談

登り下りの旅人が噂に駿河三河路や遠州灘の沖越えし義賊の張本日本駄右衛門然も手下は大船に法の姿も心は鬼地獄話で世を渡る熊野比丘尼の舟玉お才互ひに化す芒原小狐禮三が通力にて月雪花を三浦屋の花月深雪はむつまじく朋輩仲もよし原に忍び廓の數馬之助留る左門が異見さへ糠に釘貫弓平がやたけに思ふ百兩の金調へて身の詫と膈の病に日を限る命を賣て自殺の幸兵衛言合さねど妻も亦法度を破る罪科に憂を重ねて浮死骸跡に殘りて詮方もなく〳〵弔ふ三太兵衛が袖に時雨の古寺に敵の爲に與之助が生身の脂しぼらる〻阿鼻燒熱の苦しみも助る秋葉の靈驗記

『小狐禮三』は元治元年十一月、作者四十九歳の時、市村座に稿下された。「語り」の中にも斷つてある通り、講談を材料にしたもの。小狐禮三と舟玉お才といふ俠盜と毒婦とを花形とした此の作は、一面幕末の世相を說明してもゐる。矢倉澤のダンマリが特に好評で、再演されたことがあるくらゐなもので、世に廣く行はれてゐない。けれども一貫した世話講談式の興味がある。小團次菊次郎中心の世話物の一である。

書卸しの時の役割は市川小團次（盜賊日本駄右衛門、玉島幸兵衛）、尾上菊次郎（盜賊舟玉お才、幸兵衛女房おきぬ）、市村家橘（盜賊小狐禮三）、關三十郎（百姓三太兵衛）、坂東三津五郎（傾城みゆき、足利の息女齋姫）、中村福助（月本數馬之助、同圓秋）、市川米十郎（奴弓平、駄右衛門手下虎丸）、坂東又太郎（遣手おいゝめ）、市川米五郎（三上一學、月の輪の熊藏）、坂東三八（花田六之進）、市川團八（奥女中高瀨）等であつた。

挿繪にしたのは、初演當時の繪草紙の一部分である。

大正十五年五月

編者誌す



小春穩沖津白浪（小狐禮三――五幕）

新清水の場
同客殿の場
月本館の場

序幕

〔役名――月本數馬之助、月本圓秋、荒木左門之助、三上一學、花田六之進、諸士、同宿天錦坊、奴弓平。齋姫、大磯の傾城花月、奥女中關屋、腰元高瀬、新造花川、同寄路、腰元早咲、同冬木、同紅葉、茶屋女房お勝、禿彌生、女小姓等。〕

（新清水の場）――本舞臺三間の間清水の舞臺、眞中に石段朱塗りの廻廊、觀世音の額、何れも見事に飾りつけ、平舞臺、出茶屋、内に障子建切り出はひりあり、軒先に團子提灯を掛け、床几二三脚並べあり、所々に返り咲の櫻の臺幹、日覆より同じく釣枝、總て新清水の體、爰に同宿天錦○△の三人竹箒、水手桶を持ち、掃除をして居る、此の見得よろしく、双盤にて幕明く。

天錦　何と、小春日とはいひながら、穩かない、天氣ぢやあねえか。

△　今年はいつもより暖かなせるか、地内の櫻はみんな返り咲きだ、斯うして居ると、まるで春めい

て居るではないか。

□　それはさうと、けふは月本の若殿數馬之助樣が、御參詣といふことだの。

天錦　さうとも〳〵、月本家の重寶胡蝶の香合を持つて來て、御祈念をなさるのだ。

△　その御祈念といふのは、どういふ譯だか、誰か譯を知つて居るのか。

□　そりやあ天錦坊に、聞いて見るがいゝ。

天錦　さう聞きたがるなら、言つて聞かさうが、かういふ譯だ。

兩人　どういふ譯だ〳〵。

天錦　此度東山義政公が大茶の湯の催しをなすつて、諸家樣から重器を献上するといふことで、月本樣のお家の重寶といふのが胡蝶の香合だ、そこで其寶物を献上するに就て猶も武運長久の爲め、この清水に於て奉幣祈念があるのだ。何と大名といふものは、念の入つたものではないか。

△　成程、それで樣子が分つた。

□　それぢやあ其寶物を、數馬之助樣が御持參なさるのだの。

天錦　さうとも〳〵、最う御參詣に間もあるまい。

△　最う掃除も行屆いたから、御供所の部屋で一杯やらうか。

兩人 それがよからう〳〵。（ト此時花道の揚幕にて）
呼び 若殿の御參詣。（ト呼ぶ）
天錦 そりやもう、お入りの知らせだ、方丈樣へ此由を申し上げねばならぬ。
□ それから跡でゆつくり一杯。
△ よく吞みたがる人ぢや。
天錦 さあ〳〵、ござらつしやい〳〵。
ト双盤にて、皆々下手へはひる。と直に唄の入りたる出の鳴物になり、花道より數馬之助、羽織衣裳袴大小のこしらへ、次に左門之助上下衣裳大小にて、三方の上へ錦の袱紗に包みし香合を載せ持ち出來る。其次に一學上下衣裳、六之進、諸士三人、皆々上下衣裳にて出る、跡より弓平糯子奴、簀流し一本差しにて出來り、花道に留り、
數馬 落花枝に返らず、破鏡再び照らさずと謠曲には物したれど、再び花の盛りを爲す、實にや小春の返り咲き、また彌生とは事替り、靜けき花の盛りぢやなあ。
左門 大悲の庭の花の宴、武運も開く櫻の下、お供に列なる我々の、氣も晴れ渡る小春凪。
一學 役目大慈の靈前にて、奉幣祈念の大役も、厚き仰せの小六月。

六之　身不肖なれどもそれがしも、家名の花田咲き初めし、まだ初冬の不束もの。

一　冬の花見も妙法の、會式櫻の神無月。

二　櫻鯛ともいふしほの、列なるなつも夷講。

三　其の手料理の木のもとは、汁も鱠もさくらかな。

弓平　彩どる餅の海鼠襟、酒なら僅か二合半、ごんと突き出す花酒の冷でもござれ清水の、音羽の瀧水櫻色。

左門　何はしかれ、我君樣には、設けのお席へ、

一學　先づ、

皆々　入らせられませう。

ト右の鳴物にて、皆々舞臺へ來り、數馬之助眞中の床几へ住ふ。上手に一學女形居並び、下手に左門之助、六之進、敵役三人皆々よろしく住ひ、數馬之助思入あつて、

數馬　此度家の重寶たる胡蝶の香合、當觀世音の靈前にて奉幣祈念勤むるも、一方ならぬ予が大役。

一學　それゆゑにこそ我々はじめ、此身を清めけふのお供。

左門　首尾よく御祈念相濟むまでは、若殿樣も御心勞の程、推察の申し上げまする。

弓平　此下郎なども、未だ若殿御幼年の砌りよりお側去らずの御奉公、恐れ多い事ながら朝な夕の神いぢりも、たゞ若殿樣の御成長を、祈りますより外はござりませぬ。此上ともに左門樣、六之進樣お目掛けられて下さりませ。

左門　下郎に似合はぬ其方が忠勤、老臣方もお褒めなさるゝ、又今日は別しての御役目なれば、中間小者に至るまで粗忽なきやう、其方心得、申し附けてよからうぞや。

弓平　畏つてござりまする。

六之　然し御祈念の時刻は申の上刻、暫時の間此處にて御氣鬱をお慰め遊ばし、櫻の盛りを御覽なさるも御一興にござりませう。

一學　これさ六之進どの、そりや何を仰せらるゝ、櫻の盛りの御一興のと、そりや平生の花見の事だわ今日は御遊興ではござらぬぞ、若殿にも大切の御役目、たとひ時刻が早いにもせよ、靈前にて拜禮なし無事を祈るが上への忠勤、ちと場所がらを辨へさつせえ。

六之　仰せなくとも若輩ながら、其位な事は承知いたして罷りあれど、お氣を鬱すはお毒と存じ、それゆゑお勸め申すのでござる。（下少しむつとして言ふ。）

一學　えゝ、默らつせえ、御遊興をなされてよくば、此一學が申し出るに、其方の差出る所ぢやないわ

え。

一　こりや一學どのゝ仰せが至極御尤も、忠勤を勵むものは、さうなうてはならぬこと。

二　うはべを繕ふお髭の塵、お若い殿と思ふゆゑ、御遊興の御酒宴のと、

三　武士に似合はぬ追從輕薄。

一　然し花田氏のやうに、胡麻を摺るのが當世でござらう。

兩人　左樣でござる。

六之　追從武士とは誰がこと、媚び諂ひなす六之進ではござらぬわえ。

ト六之進口惜しき思入にてきつとなるを、左門之助支へて、

左門　あこれ、何れもお鎭まりなされい、今日は大切の御祈念、双方ともに君を大事と思へばこそ、斯く詞の行違ひ、先々お鎭まり下されい。

六之　それぢやと申して。（ト息込むを、）

左門　ハテ、御前でござりまするぞ。（トきつと押へる、六之進はツと控へる）

數馬　皆の者が心配いたすも主家を大切に思へばこそ、家來の忠義は主家の譽れ、故なく祈念も相濟みなば、双方とも爭ひなきやう、左門其方取計らうてよからう。

左門　有難き若殿の仰せ、委細畏つてござりまする。
一學　六之進どの、身共が詞の申し過ぎ、必ずお氣にさへられな、貴殿の爲を思へばこそ、心得違ひをさつしやるな。
六之　數なりませぬ我々へ、有難きお詞、恐入り奉つりまする。（ト一學思入あつて、）
數馬　此上ともに忠勤を相勵みなば、兒圓秋公も嘸かし悅び、何は然れ香合を靈前へ相供へ、猶も祈念を營まん。
左門　何さま、最早時刻に間もなければ、各々方にも拜殿へ。
皆々　我々どもゝ共々に、
數馬　兄上の代參とあれば、皆も一緒に。
一學　若殿の御參詣。
左門　先づ。
皆々　お越しあられませう。
ト唄になり、數馬之助先に皆々附いて石段を上り上手へはひる。跡に一學殘り思入あつて、
一學　先づ是れからはこつちの魂膽、あの香合を靈前へ供へさせ、祈念の内にちよろまかさせ、身共が

ぼつぼへ納めるわ。そこで紛失と騒ぎ立てるわ。數馬之助は役目の越度、直に此場でお拂ひ箱、それから跡はこの一學、あの香合を種にして奇々妙々の工風、是れからが狂言の本筋だわえ。
ト思入、此時後より一、二、三、下り來り、
三人　一學さま。（ト大きく言ふ。）
一學　えゝ、びつくりするわえ。（ト合方。）
一　三上氏、かねがね申し合せし通り、今日こそは手筈の上首尾、あの香合をせしめる一段、
二　貴殿の御工夫は、如何なさるゝ、
三　御所存で、
三人　ござりまするな。
一學　何れも御心配なさるゝな、そこに拔目はござらぬわえ。
一　その拔目ない御手段はな。
一學　お聞きなされ、かねて同腹中の腰元高瀨、かれに篤と申し含め、今日祈念の折を窺ひ、きやつが香合を着服して、此一學に渡す手筈、何と妙計でござらうがな。
一　いや大膽御趣向、感心な仕つた。

二　あの高瀨もなか〳〵拔目のない奴、隨分使つた女でござる。
三　然しあの面相で、色深いのが玉に疵でござる。
一　何の彼のと又貴殿は、一口上りはなさらぬか。
三　如何な拙者もあればかりは、お斷りでござる。
三人　はゝゝゝ。
一學　いやなにいづれも、右に就て種々御談合申さねばならぬ儀もござれば、別當方にて密談の仕つらん。
一　何さま、御同伴仕りませう。
二　左樣なれば、一學どの。
一學　さゝお越しなされい。
三人　先づ〳〵。

ト大拍子になり、一學先きに三人附いて上手へはひる。唄大拍子になり、花道より齋姬、吹あげ鬢廣振袖打掛衣裳姬のこしらへ、其跡へ女小姓二人、奧女中伏屋、早咲、冬木、紅葉腰元の裝、高瀨の腰元附添ひ出來る、東の假花道より傾城花月、島田鬘大磯の女、餘所行の裝、花川雪路新造のなり、禿彌

生、跡よりお勝茶屋女房のこしらへ、いづれも餘所行きのなりにて出來り、双方よろしく花道へ留り、

齋姬　あだにのみ移らふ色の辛ければと、花によそへし言の葉も、何れ散るべき小夜嵐。

花月　心は一重八重櫛の寐亂れ髪の睦言も、色に出端の餘所行き姿。

花川　歸り咲きとは言ひながら、心も春めく大悲のお庭、夕ぐれなゐの新清水。

雪路　思ふお方と逢初めの、淺黄櫻の香も深う、結ぶ心に願籠めて、

花月　一つ叶へば又二つ、

花川　三つ四つ五つ、

お勝　睦言の、口說の種を、ナア皆さん。

伏屋　姬君さまには櫻の下へ。

花川　花を見ながら彼の君を。

花月　そんなら皆さん、あの木の下で、

伏屋　姬君さま。

花川　おいらん。

皆々　先づ入らせられませう。

皆々　さあ、ござんせいなあ。

トやはり右の鳴物にて、双方皆々本舞臺へ來り、舞臺にて花月、齋姫双方より顔見合せ、どちらも美しいといふ思入にて入違ひ、よろしく上下へ別れ床几にかゝる。

伏屋　何とまあ、小春とは申しながら、ようまあ咲いたではござりませぬか。

花川　モウシおいらん、珍らしい櫻の盛りではござんせぬかいなあ。

雪路　とんと春先のやうでござんすわいなあ。

お勝　あの舞臺の上の花盛り、爰へ上つて方々を見たならば、よい眺めであらうわいなあ。

花川　ほんにさうでござんす。おいらんあそこへ上つて見やしやんせいなあ。

花月　わたしや花より、かのお方を、爰で待つて居るわいなあ。

雪路　上から見て居ても、知れるわいなあ。

ト無理に花月を引ッ立て、石段の上へあがる。高瀬あちこちと見て、

高瀬　まあ〱御覽じませ、あちらが一重こちらが八重。

早咲　綺麗な事では、

皆々　ないかいなあ。

齋姫　四邊の花の盛りをも、わらはが目には紅の焔と見ゆる心の苦しさ、忌はしの櫻の盛り。

關屋　又其やうな事御意遊ばす、外珍らしい地主の櫻、今當所へ御參詣も姉上さまの御代參、又二つにはあなた樣の、お鬱ぎ遊ばす御病症ゆゑ、お氣晴らしの爲め今日の御參詣。

早咲　左樣でござりまする、お年若な姫君樣、御殿にばかりおいで遊ばすゆゑ。

冬木　お氣の晴れる事がござりませねば、御保養がてらの思ひ立ち。

紅葉　此花を御覽じてお歌でも遊ばしたら、少しはお氣の結ぼれも、

伏屋　おとけなさるでござりませう。

高瀬　ほんに左樣でござりまする。唄は心の開くもの、私などは其うちに聲がよろしうござりますゆゑ豐後新内そゝり節、そのうちにも端唄がいつも得手ものでござりまする。チヽチン〳〵、オイ、

〽我がもの。(ト唄ひかける。)

關屋　これはしたり高瀬さま、何をおつしやりまする。

高瀬　それでもお氣晴らしに、唄をうたひまする。

關屋　その唄ではござりませぬ。姫君樣のは三十一文字でござりますわいなあ。

高瀬　おや違ひましたかいなあ、ホイ、面目ない。

早咲　ほんになつかしい高瀬さん。
皆々　ほゝゝゝ。（ト此内花月花川、皆々上より下りて來り、下手へ來て、）
皆々　よい眺めではござんせぬかいなあ。
花月　わたしやそれより數さんの事が、氣になつてならぬわいなあ。
花川　さあ、それぢやによつてけふは家の嘉例の夷講、親方さんに無理いうて、なアお勝さん。
お勝　さうでござんすとも、けふは數さんが此の清水へお出でとのこと。
花川　さいなあ、その事を仲居衆に聞いたゆゑ、おいらんの餘所行き、數さんのお出でを待つて、もしおいらん、恨みをいうたがよいわいなあ。
花月　それぢやというて、數さんがお出でとは聞いたれど、どうしてお目に掛らうやら、氣が揉めてならぬわいなあ。
花川　其事は氣遣ひしなさんすな、昨日わたしが內證で處を知らせておいたれば、お前の來るのをあつちでも、心待ちに待つてぢやわいなあ。
花月　そんならお前殿さんの所へ、文で知らせて下さんしたかえ。
花川　そこに如在はないわいなあ。

花月　え丶も嬉しい、花川大明神さま。
お勝　もしおいらん、逢つたらたんとおしげりなんせ。
花月　お勝さん、弄つてくんなますな。
花川　あれ、けふは廓詞は禁制ぢやわいなあ。
花月　ほんに、さうであつたわいなあ。
　　ト此うち齋姫はじめ腰元皆々、花月の樣子を見て、あれが彼の傾城だといふ思入あつて、腰元皆々囁くこと、齋姫思入あつて、
齋姫　てもまあ美しい、我君樣を寐取られし、憎しと思ふ心の念も。
關屋　何とおつしやります。
齋姫　さあ、お迷ひなさるも、お道理ぢやわいなう。
關屋　そんならあれが大磯の。
腰元皆々　かのでござりますわいなあ。（ト此うち花川も姫君であつたかといふ思入あつて、花月に囁く。）
花月　そんなら、あなたが。（ト思はず大きくいふ。）
花川　もし、靜かに言ひなさんせいなあ。（ト此時時の太鼓の頭を打込む、是れにて皆々びつくりして、）え丶

も、だしぬけにびつくりしたわいなあ。

關屋　あのお太鼓は御祈念の知らせ、姬君樣には暫時の間別當方にて、

早咲　御休息遊ばしませ。（トいへど齋姬、花月なぢつと見て居る。）

腰元皆々　モウシ姬君樣。（ト大きくいふ、是れにて齋姬心附き、）

齋姬　仰山な聲ぢやわいなう。（ト思入あつて、）と心でそらす執着も、

關屋　えつ（ト齋姬顏見合せ、）

齋姬　身は煩惱の、犬ぢやなあ。

ト齋姬よろしく思入あつて、唄になり、花月も是れを見送り思入、腰元皆々附き、こなしあつて上手へはひる。花月もほつと思入。

雪路　ほんにけふはおいらんの、いつにないお顏附き。

花月　モウシ、花川さん、わたしやもう殿さんに、逢はれぬかと思へば、鬱いで來たわいなあ。

花川　えゝも、素人衆か何ぞのやうに、ても氣の弱い。

花月　それでもどうやら。

花川　何であらうと、わたしに任せておきなさんせ、よいやうにするわいなあ。（ト花川、彌生を呼び嘯く

彌生吞込み、）早う行て來や。

彌生　あアい。（ト長く返事をする。）

花川　あれさ、其樣に長く返事をするではないわいなう。（ト是にて彌生石段を上り、上手へはひる。）モウシ、おいらん、今彌生に言附けて、弓平さんを見せにやつたれば、沙汰が知れるわいなあ。

花月　そんならあの、弓平さんを。

花川　あいなあ。

花川　嬉しうござんすぞえ。（ト此時舞臺の上手にて、）

弓平　これさ〳〵、どこまでおれを引つ張つて行くのだ。

彌生　何であらうと、ござんせいなあ。

ト太鼓入り、合方になり、以前の弓平彌生に引ッ張られて出來り、皆々を見て、

弓平　や、これは〳〵大磯の太夫さん、おゝそちらに居るは花川どの、お勝どのも同道で、はゝあ、けふは餘所行きで、此の清水の歸り咲きを見物ぢやな。

花月　いゝえ、花見ではないわいなあ。

弓平　花見でなくば、何しに爰へ。

花月　何しにとは弓平さん、わたしや數さんに逢ひに來たのぢやわいなあ。
弓平　いやはや途方もない、けふは若殿樣は物見や遊山ではござらぬ、大切なお役目ぢや、それに老臣方も來てござれば、お前方が來たことでも知れて見さつせえ、大事だ、まあ〳〵今日は逢はれぬ逢はれぬ。
花月　其やうな意地の惡いことを言はずと、どうぞ逢はせて下さんせいなあ。
弓平　どうして〳〵、今日は無駄だ、歸らつせえ〳〵。
花川　モウシ弓平さん、お前も粹でもござんせぬなあ。
お勝　どうぞそんな堅い事を言はいで、ちよつとの間の事なれば、お前首尾してあげて下さんせいなあ。
花川　お前も知つての通り、出ることならぬ廓をば、親方さんに譯いうて爰まで來たも、殿さんに、おいらんが逢ひ度いばつかり、お前も戀を知らぬか何ぞのやうに、むづかしからうが弓平さん、そこをお前の働きで。
弓平　これはまた迷惑千萬。どうか明日の事にはなるまいか。
花川　どうしてそんな事がなろりかいなあ、其樣な事を言はずとも、首尾してあげて下さんせいなあ。
花月　モウシ弓平さん、拜むわいなあ。（トこれにて弓平迷惑なる思入。）

弓平　そんならどうでも、御免は叶はぬかな。
花川　えゝも、少しも猶豫はならないぞ。（ト花川しかつめらしく言ふ。）
弓平　へい〳〵、承知仕つてござりまする。
花川　早く行きや。
弓平　えゝ、おきやあがれ。（ト花川を突き飛ばす。）
花川　常談ではない、お願ひぢやわいなあ。
弓平　仕方がねえ、それぢやあまあ、どうかして見ようが、長くはならねえぜ、ちよんの間だが承知だらうな。
花川　ちよつとでも、數さんに逢へさへすればよいのぢや程に、そんならきつと頼んだぞえ。
弓平　まあ、やらかして見ようわえ。
花川　どうぞ頼んだぞえ。
弓平　合點だ〳〵。
　　トやはり合方になり、弓平石段の上へあがり掛ける、皆々捨ゼリフにて頼む。此時奥にて、
數馬　弓平はいづれに居る、弓平〳〵。

弓平　や、あのお聲は旦那樣、ねい〳〵、是れに居りまする、只今それへ。（トやはり合方にて、以前の數馬之助出來り、舞臺の上にて、）これは〳〵旦那樣、只今一寸用事がござりましてお側を明けましてござりまする、眞平御免下さりませ。

數馬　これ〳〵弓平、もう太夫は參つて居るか。

弓平　え、何とおつしやりまする、そんならあなたは御存じで。

數馬　知らいでならうか先刻より、拜殿に祈念はいたし居つたれど、そればかりを待つて居たのぢや。

　　ト此せりふを言ひながら、平舞臺へおりる、花月數馬之助に縋り、

花月　モウシ數さん、逢ひたかつた〳〵、逢ひたかつたわいなあ。

數馬　これ〳〵、あんまりさう寄つて貰ひますまい、此頃聞けば、どこぞの客に面白い事が出來たといふ事、それぢやによつて、そつちから袖にされぬ其うちに、わしの方から足を拔くのぢや、おゝ怖いこと〳〵。（ト退きにかゝるを花月すがつて、）

花月　もし、そりやあんまりでござんすぞえ、外に客が出來たとは、そりやお前誰さんに聞かしやんしたえ。（ト數馬之助の側へぐつと寄る。）

數馬　聞いたとも〳〵、そりや何に聞いた。

花月　誰に聞かしやんしたえ。

數馬　あのそれ、何ぢや。

花月　聞いた者を言はしやんせ、誰でござんす〳〵。（トせり詰める、數馬之助ぐつと詰つて、）

數馬　やつぱり、わしに聞いたのぢや。

花月　何を言はしやんすぞいなあ。お前此頃の足の遠さ座敷へ出ても氣に掛り、幾度文を屆けても何の返事もないゆゑに、焦れて爰まで來たものを、よう來てくれたと言ひもせず、恨みを聞く覺えはござんせぬ、そりや聞えぬわいなあ。

ト數馬之助の膝に縋り泣伏す。數馬之助困つたる思入、花川前へ出て、

花川　モウシおいらん、たんと恨みを言うてあげなさんせ、殿さんが今のやうに言ひやさんすも、久し振りの口説の種、それが可愛い證據ぢやわいなあ。（ト花月を無理に數馬之助へ突き附ける。）

數馬　これ〳〵太夫、さう眞劍になられては、困り切るわえ。今のやうに言うたのはみんな嘘、そなたの心を引いて見たのぢや、堪忍しや〳〵。これ花月、何とか物を言やいなう。

花月　そんなら今のは、ほんまではござんせぬか。

數馬　嘘とも〳〵、大嘘ぢやわいなう。

花月　それでわたしも落着いたわいなあ。
數馬　そなたの顏を見たゆゑに、わしも落着いた。
花月　あれ又、程のよい事ばつかり。
數馬　程ではない、眞實ぢや。
花月　あのほんまに。
數馬　おいなう。
花月　おゝ嬉し。（ト數馬之助の手を取る。弓平はこれを見て、）
弓平　いやはや、何の事だ、殿樣をお呼び申さうと、いろ〳〵心配をして居たが、これぢやあ何の造作もない。
花川　話しが早いぢやないかいなあ、もう斯うなつたらこつちのもの、モウシおいらん、數さんをちよつとあそこの茶屋の內へ。
弓平　成程そこらが上分別、旦那樣にも、それ太夫を連れて。
數馬　それぢやといふて。
花月　えゝも、よいわいなあ、たまつた話しがたんとござんす、ちよつと行て下さんせいなあ。

數馬　どうやら、かう改まると、間が惡いもの、弓平少しのうちはよからうか。
弓平　よいどころではござりませぬが、ちつとばかりでござりますぞえ。
花月　直に歸して上げるわいなあ。
花川　さあ話しが出來たれば、ちつとも早く。
弓平　さあ〳〵、これから、（ト花月數馬之助出茶屋の內へはひる。）二番目ぢや。（ト障子を入れる。）やれやれ大骨折であつた、花川どの、御苦勞々々。
花川　これでわたしもおいらんに、賴まれた甲斐がござんす。
お勝　わたしは此內この子を連れて、奧山へ行つて來るぞえ。
花川　そんなら、さうして下さんせいなあ。
彌生　花川さん、行つて來るぞえ。
雫路　もしえ、するな譯でござんすなあ。
花川　えゝも、早う行つてくんなんし。（トお勝彌生上手へはひる。花川思入あつて、）モウシ弓平さんえ。
弓平　何だ。
花川　久しぶりでござんすな。

弓平　久しぶりがどうしたのだ。

花川　えゝも、眞面目になつてさ。（ト弓平を抓る。）

弓平　あいたゝゝゝゝ。はゝあ、少しござつたな。

花川　まあ、ござんせいなあ。（ト手を取る。）

弓平　どこへ行くのだ。

花川　あの蔭の茶屋へ。

弓平　えゝ、手めえまでが同じやうに。（ト袖を拂ふ。）

花川　まあ、いふ事を聞かしやんせいなあ。

ト唄になり、兩人思入あつて下手へはひる。是れにて此道具廻る。

（清水寺　別當　客間の場）――本舞臺三間の間一面の平舞臺、向う大形の襖上下折廻して同じ形の襖、出はひりあり、大欄間をおろし、よき程に莫大なる衝立、總て清水寺別當客間の體、爰に以前の早咲、冬木、紅葉の腰元居並び居る、音樂にて道具留る。

早咲　モウシ、さつきの女子を見やしやんしたかいなあ。

冬木　さいなあ、あれが若殿樣がお通ひ遊ばす、花月とやらいふ傾城でござりますといなあ。

紅葉　數馬樣のお迷ひなさるもお道理、よい器量ではないかいなあ。

早咲　けふこのお寺へ見えたのも、若殿のお出でのことを知つて逢ひに來たのでござりませう。たゞお可愛さうなは姬君さま、嘸悔しい事でござりませうわいなあ。

冬木　下々の者ならば、かぶりついて遣りたい所。

紅葉　そこを辛抱なされるといふは、上つ方は格別なもの、又若殿樣も若殿、あの美しい姬君をお嫌ひなさるといふも、情知らずでござんすなあ。

早咲　それにお聞きなされませ、大殿樣にも傾城の事を御存じで、きつい御立腹なされておいで遊ばすとのこと。

冬木　それにつけても姬君さまは、御不便でござりますわいなあ。

ト琴唄の合方になり、正面の襖を開き、以前の關屋、齋姬の手を取り出來り、跡より○褥脇息を持ち、女小姓附いて出來り、眞中へよろしく住ひ、

早咲　これは〳〵姬君樣には、御病中と申し、

冬木　路次のお疲れ、

紅葉　憚りながらお案じ、

皆々　申し上げまする。

齋姬　ほんによう尋ねてたもる、氣分に替りはなけれども、氣が浮いてならぬわいなう。

紅葉　モウシ姬君樣それもお心の持ちやうでござりまする、ちと何ぞお心の浮きますやうに、お狂言師でも召しまして、芝居事でも御覽じ遊ばしたら、又お氣が晴れませうわいなあ。

齋姬　何も見たうはない、只朝夕の樂しみは、佛へ捧げる觀音經を、讀誦するより外にないわいなう。

關屋　モウシ姬君さまえ、かう申してはお氣に障るかは存じませねど、かねて此關屋が申し上げます通りお心鬱ぐはお道理にござりますれど、若殿樣のお身持もやがての事にお直り遊ばし、其時こそはお目出たうお取り結びもござりませう程に、それを樂しみにお體を大切に遊ばすが、お父上樣への御孝養でござりまする。

齋姬　いつに替らぬそちが親切、忘れは置かぬぞや。これ關屋、みづからが心の内は、(ト思入あつて、)これ、料紙を持ちや。

○　畏りました。

ト本調子の合方になり、○料紙硯を持つて來て、齋姬の前へ置く。齋姬短册を取り上げ、歌を書いて、

關屋「執着の心や娑婆に殘るらん、吉野の櫻更科の月。」すりや、どうあつても。
皆々　姫君樣には。
齋姬　戀しと思ふ我君樣、父上樣にお願ひ申しやう〳〵望みが叶ひて輿入れなせしは去年の秋、一歳あまり居るうちもたゞみづからをお嫌ひ遊ばし、あの傾城の花月とやらにお馴染みなされ、遂に一度の添臥しも、（ト思入あつて、）そりや御無理とは思ひませぬ、世間知らずの不束者、今日も今日とて、花月とやらを一目見るより女子でさへ、美しいと思ふもの、お迷ひなさるもお道理ぢやわいなう。君傾城とはいひながら、お奥にお持ちなされても、恥かしからぬあの器量、戀し床しの念も捨て、花月とやらに殿樣を此末長くお添はせ申し、嫌はれし此身は因果墨染の尼となり、假令お嫌ひなされても、一旦定めし我夫の行末守る尼法師、心を定めて居るわいなう。
關屋　それ程に思し立つ憚りながら御心の內が。
早咲　おいとしう、
皆々　ござりまする。（ト合方になり、下手より以前の六之進出來り、齋姬を見てはッと平伏なし、）
六之　これは〳〵、姬君さまには今日の御參詣、御苦勞に存じまする。何れの方も嘸かしのお疲れ、ゆる〳〵御休息なされたがようござる。

關屋　有難う、

皆々　存じまする。

齋姬　花田六之進、今日の介添、其方の心勞、みづからも察しまするわいなう。

六之　はゝ有難き其のお詞、最早只今祈念の最中數馬之助樣にも御機嫌よろしく、拜殿に於て御寶守護の御役、夕刻までには御歸館にござりまする　承はれば姬君には此程より、御不快とのこと、如何にござりまする。

齋姬　案じる程の事でもない、當分の事ぢやわいなう。

六之　左樣にござりまするか、若輩者の拙者めが、何か高慢なことを申し上ぐるやうにはござりますれども、病は氣から生ずると申しますれば、何やかやお心苦しき事もござりませうなれど、お心廣うお持ちなさるゝがよろしうござりまする。

關屋　左樣にござりまする、きな〳〵思召しましては、お身のお毒でござりまする。

齋姬　これ六之進、さうして兄上圓秋樣、いつぞやより數馬之助樣の御放埒御立腹でありしとのこと、御機嫌は直りしかや。

六之　左樣にござりまする、大殿にも殊の外なる御立腹、今日胡蝶の香合御祈念のお役目、首尾よう相

濟み其上にて、御心を入替へられ、姫君さまと御婚姻御取結び遊ばせば、是れに過ぎたる悅びなし、萬一それを否みたまはゞ御父上管領細川公へ對し、何を以て言譯なさん、斯くなる時は七生までの御勘當と御心定めし殿のお詞。

齋姬　そんならお詞背く時は、あの數馬樣には御勘當とや。

鬪屋　どうぞ若殿をお諫め申し、其やうな事にならぬやう、いたし方はござりませぬかいなあ。

六之　お氣遣ひいたされな、御發明なる若殿樣、篤と御異見申し上げなば御心も直るは必定、此儀はまた老臣どもにて相談の上、取り計らひますれば御心配なされまするな。

齋姬　それぢやというて、萬一其やうな事のある時には、生きて居る氣はないわいなう。

鬪屋　又其やうな事ばかり、たゞ何事も六之進さまが。

六之　よい御左右を申し上ぐれば、此上ともにお身を大切、御養生が肝要でござりまする。（ト此時七ツの鐘鳴る。）ありやもう七ツ。（ト皆々思入あつて、）

齋姬　果敢ない命ながらへて、一時づゝに迫る身の、

六之　日も落方と鳴る鐘も、

皆々　憂き日を告ぐる胸の內。

齊姬　あゝ、諸行無常の。（ト脇息を脇へやるを道具替りの知らせ）鐘の音ぢやなあ。

ト皆々思入よろしく、合方にて道具廻る。

（元の清水の場）＝本舞臺元の清水の道具に戻る。と爰に以前の一學立身、腰元高瀬一學の袖に縋り思入あつて、

一學　これ〳〵、みんなそなたが尤もぢやが、爰を放してくれ〳〵。

高瀬　いえ〳〵、色よい返事を聞かぬうちは放さぬ〳〵、モウシ一學さん、わたしや心があればこそ、お前の頼みの一大事、あの數馬之助が拜殿に見えぬのを幸ひ、わたしが香合をちよろまかしお前の手へ渡したも、わたしが望みが叶へたさ、情と思うて一學さん、此の戀叶へて下さんせいなあ。

一學　成程そなたの親切は屆いて居る。それまでに思うてくれる志し、何の無足にしようぞい。

高瀬　えゝ嬉しうござんす、無足にせずば、つい爰で。（ト一學に寄り添ふ。）

一學　これ〳〵、今というてはあんまり早急、どうで晩の事にして、御殿の首尾を見合せて、部屋でこつそり。（ト逃げにかゝる。）

高瀨　いえ〳〵、もう斯う上氣して來ては、人が見ても構ひませぬ、晩の事は扨おいて、ちつとの間も待たれはせぬ、つい爰で。

ト取り縋るを拂つて逃げる。高瀨は是れを追廻す。此時後より以前の近侍二、三出來る、高瀨一學と心得、二にかぢり附く。

二　これ〳〵高瀨どの、どうするのだ〳〵。

高瀨　おや、お前は彌藤次さん。

三　先々高瀨どの、鎭まらつせえ〳〵。

高瀨　いえ〳〵一學さんが聞えぬゆゑ、鎭まられませぬわいなあ。

二　これ〳〵それには何ぞ譯があらう。先々靜かにしたがよい。一學殿、貴殿も隨分物喰ひがようござるな。

一學　面目次第もござらぬ。

三　猪鍋か豚鍋、茶喰の代りでござるな。

一學　然し是れからは、あつたまつてようござる。（ト是れにて高瀨むつとして、）

高瀨　おい、わたしや豚でござんす、豚どこではない虎でござんす、虎ぢやによつて氣が荒いぞえ。

ト一學へかぶりつく。

一學　これさ、虎でも象でもよいから、料簡さつしやいく。

高瀨　何ぢや、象ぢやとえ、あい象でござんす、象ぢやによつて鼻息が荒いぞえ。象ぢやく虎象ぢやわいなあ。（トきつといふ、二宥めて。）

二　これく高瀨どの、そなたの戀はわれくがきつと叶へて進ぜる程に、どうぞ我等に預けて下さい。

高瀨　そんならきつと叶へておくれかえ。

三　叶へるともく、そこが武士に二言なしだ。

高瀨　そんならきつと預けたぞえ。

兩人　しつかりと預かり申した。

二　ときに一學どの、貴殿に申さねばならぬ事が出來申した。

一學　そりや何事でござる。

二　只今下郎が知らせには、かねて貴殿が御執心の三浦屋の花月めが、數馬之助に逢はんため、先刻爰へ參りしとの事。

一學　なに、花月太夫が是れへ參つたとな。

高瀨　それではやつぱり外の女子を。

二　これさ、これは話しでござる。

三　たゞ參つたばかりではござらぬ、數馬之助とたゞ二人、これなる茶見世で大膽にも、ちゝくり合つて居るとのこと。

二　それゆゑわざ〳〵兩人して、お知らせ申しに參つてござる。

一學　なに、此所でたゞ二人、どぶさつて居ると申さるゝか。

兩人　如何にも、左樣でござる。

一學　如何にしても憎い奴、佛の庭を穢すといひ、此一學がかねて心を、いやさ、爰等まで來て出逢ふとは、言はうやうない橫道者、御兩所、きやつら二人を此所へ引摺り出してござらつせえ。

ト氣を急いていふ。

兩人　心得申した。

トばら〳〵と上手へ行き、出茶屋の障子を明け、兩人內へはひる、直に三出で見事に轉る、跡より以前の左門之助出來る、一學高瀨びつくりして。

一學　やあ、二人の者と思ひの外、貴殿は荒木。

皆々　左門どの。

　　ト三振拂ふて刀の柄へ手を掛けるを、左門之助扇にて拂ひ、どつかりと坐る、左門之助思入あつて、

左門　御兩所、何意趣あつて此左門へ、かゝる狼藉働きめさる。

二　さあ、是れはあの、ものでござる。

左門　如何でござる、今拜殿にて御祈念の其間暫時休息いたさんと借り受けたる拙者が居間、泥脚踏ん込み、失禮至極、外の者なれば刀の手前料簡ならねど、皆月本家の祿を食む朋輩なれば差許す、以後をきつと愼みめされ。

二三　はゝゝ。（ト面目なき思入、左門之助思入あつて、）

左門　一學どの、左樣なものではござらぬか。

一學　成程、左樣なものでござる。（ト空うそぶいて居る、此時ばた〳〵になり、上手にて、）

一　さあ、うせをらう〳〵。（ト以前の一、數馬之助と花月を引立て出來り、皆々の前へ兩人を据ゑる。左門之助見てびつくり思入、前へずつと出て、）いやなに左門どの、若殿花月が吹替で、いくら貴殿があらがうても裏から廻つて此の如く、櫻の下の幕の内で、二人がいちや〳〵ひそ〳〵話し、一學さまこ

りや此儘にはなりますまい。(下一學前へ出て。)

一學　いやなに、左門どの、只今仰せらるゝには同家中の者ゆゑに料簡すると仰せられし潔白のお詞。御覽なさるゝ通り、大役を蒙りながら遊女賣女を引きずり込み、一方ならぬ大切なる祈念の庭を穢されしは、捨ておかれざる二人が大罪、こりや潔白に罰せずばなりますまい。

數馬　皆の者の目にかゝり、面目もなき此身のしだら。

花月　どうぞ此儘見のがして下さんせいなあ。

一學　えゝ、ならぬ事だ、可愛さ餘つて憎さの譬、いやなに若殿、傾城狂ひも場所による。それにあなたは細川家の姫君と、婚姻の取り結び、最早お輿入れも濟んで御殿にお越しなさるれど、これを嫌つて花月めに現をぬかし、惡事千里と此事が細川家へ聞えなば、其許ばかりの難儀ぢやござらぬ、殿園秋公にお祟りの掛ることだわ。

一　それをうか〳〵鼻毛をよまれ、金で自由になる遊女を、

二　こんな所まで引き出し、身の程知らぬたはけたこと、

三　女郎は勤めと思はうが、あんまり横道過ぎまするわ。

高瀬　ほんにおいら傾城どのも、數多の客を取りながら、それでも足らいで餘所行きの先まで稼ぐとは、

きつい腎張り女ぢやなう。

一學　なに左門どの、此の潔白は如何なさるゝ御所存ぞ。

左門　其儀は。

一學　いやさ、身共が成敗いたさうか。（ト立ち上るを、）

左門　さあ、それは、

一學　如何でござる。

左門　さあ、

一學　さあ、

兩人　さあ〳〵。

一學　きつと成敗いたさにやならぬ。

トきつといふ。左門之助ぢつと思入、數馬之助も思入、花月ハヽアと泣き落す。此時ぱた〳〵になり。石段の上より同宿走り出來り、

同宿　はツ、申し上げまする。

一學　何事ぢや。

同宿　只今方丈祈念も終り、御寶の箱を靈前に供へんと存ぜし所、御寶の香合が相見えませぬやうにござります。(ト言ひ捨てゝはひる。皆々びつくり思入、數馬之助驚き、)

數馬　なに、香合が見えぬとや。

左門　紛失なしては御家の大事。(ト立ち上るを、)

一學　これ左門どの、何れへお越しなさる。

左門　はて、知れたこと、大事のお寶の香合、打捨ておかれぬ一大事。

一學　これさ、馬鹿も休み／＼言はつせえ、紛失なしたる香合が、石や瓦を見るやうに、そこらあたりに轉げて居やうか。

數馬　これ左門、香合紛失なしたりと、どう言譯の仕樣があらう。

一學　とぼけさつしやるな數馬之助殿、きり／＼爰へ出しておしまひなされませ。

數馬　出せといふは、そりや何を。

一學　お家の重寶、胡蝶の香合。

數馬　何と言やる。それをわしが知る程なら、此の心配はさせぬわいなう。

一學　いゝやさうは拔けさせませぬ。傾城花月に現をぬかし、揚代其外遊びの入用、事が缺けての分別

から、あの香合をちよろまかし、榮耀に遣ふ下心、それに相違はござるまいが。

數馬　どうしてまあ大それた、其樣な事が出來るものかいなう。

一學　いや〱、おつしやるな若殿、それに相違はござらぬわえ。（ト左門之助思入あつて、）

左門　一學どの、そりやお詞が違ひまする、此度御寶奉幣祈念の大役蒙る數馬之助樣、香合に胤胤があれば其身の科、おのれと科を負ふやうなもの、其香合を紛失させ、榮耀になされう筈はござらぬ。

一學　默らッせえ、左門どの、是れが越度であるまいか、假令おのれが取らぬにもせよ、それ程大切な役目なれば、なぜ靈前にて、きつと守護はいたさぬのだ。

一　左樣々々、女狂ひにうそ〱と、穴ッぱひりをなさるゆゑ、こんな事が出來ますわ。

二　其役を蒙れば假令人に盗まれても、おのれが取つたも同じこと。

三　何れにしても、罪はのがれぬ。

四一　さあきり〱と。

四人　白狀さつせえ。（ト皆々きつと言ふ。合方になり、奥より以前の六之進出來り、）

六之　先づ暫く何れもさま、假令若殿の役目なりとも、お側に附添ふ拙者めが、寶紛失いたせしを心附かぬは身共が越度、其の罪科は此の六之進、若殿樣には御存じないこと。

一學　えゝ忠義顏してつべこべと、其罪を引受けようと如何程に申しても、若殿の罪科はのがれぬ。いやなに軍平どの、此趣きを逐一に、殿圓秋公へお知らせ申してござらつせえ。

一　心得申した。（ト立ち上る。）

數馬　これ軍平待ちや、其事を兄上樣へ申し上げては、

一學　えゝ、これ程のこと、私には相濟み申さぬ、急いでござれ。

數馬　まあ〳〵待つて。（ト一に縋るを振拂ひ、）

一　えゝ、お放しなされい。（ト逸散に花道へはひる。數馬之助ぢつと思入、六之進思入あつて、）

六之　寶紛失は、拙者の越度、さうぢや。

ト刀の柄へ手をかけ、切腹しようとするを、左門之助花月双方より留めて、

花月　まあ〳〵お待ちなされませ。

左門　早まりめさるな。

六之　左門どの。お留め下さるな、拙者が切腹いたさねば、若殿樣のお身の上。

左門　いやさ、生は難く死は易し、又分別もござらう程に。

六之　それぢやと申して。

左門　はて、お止まりなされいと申すに。（ト是れにてぢつと下に居る。）
一學　いくらじたばた騷いでも、若殿の大罪はのがれぬ所だ。さあ若殿、私ならぬ將軍家への申譯、切腹して、言譯召され。
數馬
花月　えゝ。（トびつくりする、左門之助思入あつて、）
左門　いや、私に切腹は相成りますまい。
一學　又口出しをさつしやるか、何で切腹がなりませぬ。
左門　假令寶紛失にもせよ、一應も再應も詮議をなしたる其上にて、いよ〳〵紛失と極らば、お上へ達し御沙汰を待ち、切腹なすはお上のお指圖。
一學　いや、生ぬるい其一言、いくら詮議めされても、寶の出やう筈はござらぬ。
左門　なに寶の出ぬと、貴殿極めて仰せらるゝは、然らば貴殿御存じか。
一學　や。
左門　先づ、お靜になされませ。（ト數馬之助思入あつて、）
數馬　これ左門、かゝる越度となる上は、屋敷へとては歸られず、爰より直に此身を忍び、寶の詮議をする所存。

左門　何さま、それも御尤も、かゝる椿事の出來たる上、圓秋公のお耳へも入つたる上は、是れより暫時御身を忍び、又兎も角も身共が胸に。
數馬　此上ともに、賴むぞや。
左門　六之進どの、歸宅をなして萬事を計らひ、
六之　萬事よろしう賴み存ずる。
一學　成程寶を失ひのめ〳〵と、屋敷へとては歸られまい、逐電するとはよい分別、いや又九郎どの五平太どの、若殿はじめ傾城花月、此場をきり〳〵追ひ立てなされい。
三　心得ました、若殿、お立ちなされい。
二　傾城花月、きり〳〵立て。（ト引立てる、花月思入あつて、）
花月　あい、立ちますわいなあ。（ト立上り、）モウシ一學さん、お前も滿更知らぬ人でもござんせぬ、あの殿さんがいとしさに爰まで逢ひに來たわたし、それゆゑにこそ數さんのお身の難儀となつたるゆゑ、お氣の毒とも悲しいとも言ふに言はれぬ場所なれど、もう殿さんは追出され、お屋敷へは歸られぬと科の極る上からは、口廣い事をいふやうなれど、此數さんは不自由なく、わたしが世帶をするわいなあ。學さん、此お禮はきつと言ふぞえ。

一學 え〻引かれもの〻小唄とやら、こま言ぬかさず、早く立て。
花月 さあ、殿さん、わたしと一緒に。
數馬 あ、わが身の不肖とはいひながら、斯かる目に逢ふといふも、皆兄上へ不孝の罰。
左門 世の盛衰とはいひながら、のがれがたなき災難も、
六之 日頃信ずる神佛の、お救ひとてもなき事か、
花月 それもやつぱりわたしゆゑ。
數馬 斯く成行くも身の不運。（ト又口惜しき思入。）
左門 あいや、路次の警護は、
六之 我々兩人。
一學 いや一ッ穴の者ばかり、手放しては心許ない、御兩所共に附添ひ行き、必ず早まつた事いたされな。
兩人 心得ました。
數馬 とはいへ、此儘。（ト思入。）
左門 先づ、お越しあられませう。

ト三重模様の合方になり、數馬之助花月思入あつて先きに立ち、跡より左門之助六之進よろしく思入、一學と顔見合せ、よい氣味といふ思入にて、附添ひ花道へはひる。跡一學殘り、思入あつて合方になり。

一學　何といづれも、身共が奇々妙々の計略は、如何でござる。
兩人　誠に恐入つてござる。
一學　何は然れ此圖を拔さず、圓秋めをなきものとなし、月本家を横領なさん、さうなる時は各々も、
一　立身出世は瞬くうち、
二　然らば我々は、
三　直に歸りて隙を窺ひ、
兩人　圓秋めをたつた一打ち。
一學　お出來しなされた御兩所方、必ずともにぬかり召さるな。
兩人　心得ました。
一學　早く〳〵。（ト兩人下手へ逸散にはひる、一學殘り思入。）へゝえ、思つた通りにあの數馬之助に罪を負はせ、かの一物は身が卷き上げ、郡領殿へ差上ぐれば、金はまんまとせしめる手段、さうなる

時はあの花月、いやでも應でも身請けなし、四の五のなしに御新造さま。斯うも運よく行くものか。どりやそろ〳〵と參らうか。（ト花道へ行きかける、此時石段の上より以前の弓平出來り、）

弓平　一學さま、ちよつと待つて下さりませ。（ト是れにて一學思入あつて、）

一學　こりや弓平、何ぞ用か。

弓平　へい、御苦勞ながらちよつと爰まで。（ト是れにて一學舞臺へ來り、）

一學　來たが、何だ。

弓平　へい、別儀でもござりませぬが、只今ちよつと承はりました所、うまさうなお話し、此下郞にも半口乘せて下さりませ。

一學　何の事だと思つたら、半口乘せてくれろといふのか、これ此一學は賴母子講は賴まぬわ。無駄な頰桁たゝかずとも、手前の主人は梵天國、早く跡から追ひ附いて、浪人者の供でもいたせ。

弓平　お供をするは下郞の役、其お指圖は受けませぬ。小蔭で樣子を聞いたゆゑ、花月どのゝ新造花川裏から廻つて仔細を告げ、跡に殘つた此下郞は、お手前さまに詮議があるのだ。

一學　いや、口の横に切れたまゝ、樣々な戲言、身共へ詮議は何が詮議だ。

弓平　とぼけさつしやるな、數馬之助樣を罪に落した寶の香合、きり〳〵爰へ出してしまへ。

一學　それを身共が、知るものか。

弓平　いゝや知らねえとは言はさねえ、自分の口からうか〳〵と吐かすを聞いた弓平が、腕に覺えの五人張り、的は外さぬ地獄耳、斯う聞き込んだら少しでも、ねらひの外れる事はねえ、もう是れまでと往生して、きり〳〵爰へ出さつせえ。

一學　それ、聞かれたら。

ト刀を拔き、弓平に切つて掛かる。弓平も拔き合せちよつと立廻り、見得より誂への鳴物になり、石段を遣ひ立廻りよろしくあつて、よき見得にて早めたる双盤になり、此道具廻る。

（月本館塀外の場）‖本舞臺一面網代塀、上手に紅葉の立木、日覆より同じく釣枝、風の音にて道具留る。と上下より□○紺看板の中間にて、弓張六尺棒を持ち出來り、舞臺にて行き合ひ、

□　いや關助、御苦勞だな。

○　貴樣も今夜は番に當つたか。

□　昨夜頼み合つたので、今夜になつたのよ。

○　それはさうと、けふはとんだ事が出來たぢやあねえか。

□ さういふ話しだ。大切な香合が清水で紛失したとのこと、何でも常事ぢやあねえの。
○ それに附いて若殿は、其場から逐電ださうだの。
□ その寶はなか〳〵大切な物だから、紛失させてはお上に濟まねえと、其事を聞くと大殿圓秋さまは、御別殿へ引籠つて、無言の行をして居るさうだ。
○ 何でも穩かでなくつちやあいけねえぜ。
□ ごたつきは眞平だ。
○ 一廻り廻つたら、白馬とやらかさうか。
□ それがいゝ〳〵。
○ そんなら可內。
□ 後に逢はうぜ。
兩人 火の廻り〳〵。（ト上下へ別れてはひる、知らせに附き、立木を消し、此道具引いて取る。）

（月本館別殿の場）――本舞臺高足の二重、本緣黑塗りの高欄附いた透き欄間、下手網代塀、柴垣、上手奥庭の遠見、やはり柴垣、紅葉の立木、同じく釣枝、屋體の見附銀襖、上手床の間へ觀音像の掛物

をかけ、前側へ塗骨の障子を閉切り、總て別殿の模樣風の音にて道具留る。と鳴物打ちあげ、大薩摩やうの獨吟になり、正面の障子を引拔く。内に圓秋前茶筅小忌衣殿のなり少し更けたるこしらへにて、高麗緣の二疊臺の上へ住ひ、前の經机の上に經卷を並べ香を焚き經卷を開き是れを持ち、左右へ菊燈臺を照し無言の行の體、二の句の唄になり、上下柴垣の内より、二、三の黑四天同じく覆面頭巾、拔身にて忍びのこしらへ、上下より窺ひ出て二重へ上らうとする。此時圓秋目を開き思入、是れにて又兩人は忍ぶ。圓秋はこれに構はず經文を讀誦する思入。これにて兩人窺ひ〳〵二重へ上り、圓秋の左右より切込む、これを居ながら唄のうちあしらふ立廻りいろ〳〵あつて、トヾ三を膝に敷き、二を捻ぢあげる。これにて唄一杯に切れる。是れをキツカケに時の鐘、下手より左門之助、庭下駄雪洞を持ち出來り、平舞臺へ手を突き、

左門　御前樣。（ト圓秋思入あつて、）

圓秋　今鳴る鐘は最早丑三つ、我願望も滿つる刻限。

二　何を。

ト又振り解いてかゝり、ちよつと立廻つて三を下へ投げる。左門之助扇にて是をあしらひ、三を當てる、圓秋二を捻伏せ、

圓秋　不所存とはいひながら、たゞ不便なは數馬之助。

左門　それ故にこそ君の御心勞、お察し申し上げまする。（ト此時以前の一袴なりにて窺ひ出て、）

一　左門覺悟。

ト切つてかゝるを、左門之助ちよつと立廻り、此時一密書を落す。左門之助取上げるを、それをと掛かるを、密書を啣へ押へて、

左門　御前樣、こやつは如何計らひませう。（ト圓秋思入あつて、）

圓秋　切つてしまへ。

左門　はツ。（ト一を突き廻し、切つて掛るを、左門之助早切りに拔打に切下げる。）

圓秋　見事。

ト立ち上る。二組附くを振り解いて見事に投げる、二ぽんとかへり、其上へ經机をおく、左門之助は密書を開く、双方見合つて木の頭。左門之助は讀みながら頷く。圓秋は經机へ臂をかけ感心の思入此の見得よろしく早めたる合方にて、

ひやうし　幕

二幕目

矢倉澤孤家の場
足柄越山中の場

（役名――獵師牙藏、日本駄右衞門、賤の女胡蝶實は小狐禮三、屋敷飛脚早助、修行者妙典實は女盜賊船玉お才等。）

（幕外の場）――本舞臺跡へ下げて一面に雪の積りし山幕、上の方杉の立木、日覆より同じく釣枝、爰に○△□の百姓三人、股引尻端折り百姓なりにて鉦太鼓を持ち、立ち掛り居る、幕の内より山おろし、迷子の〳〵三太郎やアいといふ聲にて幕明く。

○ 何と新田の三太郎は、何處へ行つて居るだらう。

△ あいつは不斷間拔けだから、神隱しにでも逢つたか知らぬ。

□ どうで知れる事ぢやあねえ、一服やつて行かうぢやあねえか。

○△ それがいゝ〳〵。（ト三人岩臺へ腰を掛け、摺火打にて煙草を吞む）

□ そりやさうと、えらく寒いぢやあねえか。

○ いやもう、寒くなる筈だ、秩父の山が白くなつた。

△今年やあ雪の降りやうが早い、又來年も豐年だな。

□近年のやうによく出來ちやあ、百姓丸儲けだ。

○何でも稻の出來のいゝのは、稻荷樣のお蔭だから、お祭りを立派にするがいゝ。

△所があの稻荷樣の御機嫌の惡い事でもあるか、此間から此邊で幾人狐に化されたか知れねえ。

□たゞ化されるばかりならいゝが、持つて居る金を取られるから油斷のならねえ事だ。

○二朱でも金を持つて居るなら、日が暮れてからは歩かねえがいゝ。

△人の事よりこなたなざあ、大金持だから歩かつしやんな。

○なんのおれが金持ちだらう、百の錢にも困るから、狐でも狸でも怖かあねえ。

□いや〳〵怖くねえことはねえ、こなたの睾丸は大きいから、油斷をさつしやんな。

△さうさ、狐は金だと思ふだらうし、狸は仲間だと思ふだらう。

□さういつても、こなた大きな睾丸だ。

○止せエ外聞の惡い、御見物が本當だと思はア。

兩人　はゝゝゝゝ。

ト山おろし、岡崎女郎衆の合方になり、花道より早助、紺看板胸當一本差し脚絆草鞋、小田原提灯な

提げ、ぶら〳〵出來り、

早助　はゝあ、夜道といふものはさつぱりはかの行かねえものだ、大磯で晝飯を食つて、それから歩き通しだが、まだ小田原へ出ねえが、どうしてこんなに遲くなつたか、さつぱりおれにも分らねえ（ト言ひながら舞臺へ來り、）これ〳〵、そこに居るは所の者か。

○　はい、わしらは此の矢倉澤の者だが、

へ　何ぞ御用でござりますか。

早助　いや外の事でもねえ、おれは小田原へ行くのだが、まだよッ程あるかな。

○　なに、小田原へ行きなさるのだえ、そりやあ道が違ひました。

□　跡へ返らにやあ、小田原へは行かれませぬ。

早助　なに跡へかへれ、馬鹿なことをいふ、主人の用で夜を日についで、播州まで行くものだ、跡へ返つてなるものか。

○　それでも道が違つて居るから、跡へ返らねば行かれませぬ。

早助　まだ〳〵申すか、急用なれば、一寸でも跡へ返つては主人へ濟まぬ。

ト言ひながらぶら〳〵東の假花道へかゝる、三人は跡を見送り、

○　いや、強情な奴もあるものだ、道が違つて居るといふに。
△　主人の川が遲くなるといふに、違つた方へやつぱり行くとは。
□　いや、分らねえ奴もあればあるものだ。（ト此うち早助土間を渡り、花道から舞臺へ來り、）
早助　これ〳〵、小田原へはよッぽどあるかな。
○　おや又今の奴さんだ、どこを廻つて來なすつたか。
△　小田原はあとの方だから、早く跡へ返んなせえ。
早助　えゝ主人の急用、跡へ返つてなるものか。（ト早助言捨て又東の假花道へ掛る、三人思入あつて、）
○　フヽウ、今の奴はをかしいぜ、何でも化されて居るに違ひねえ。
□　こつちで尋ねる三太郎も、化されて居るも知れねえ。
△　何にしろ更けねえうちに、もう一遍捜して歸らう。
三人　迷兒の〳〵三太郎やアい。

ト山おろし、鉦太鼓を叩き上手へはひる。早助又土間を渡つて花道から舞臺へ來り、

早助　爰に悪い狐があつて、よく人を化すさうだが、今道を聞いた百姓めら、急の使ひで行くといふにやたらに跡へ返れ〳〵といふ、あいつらは狐ではなかつたか、あれが間抜けだと化される所だ。

(ト眉毛へ唾を附ける思入、此時風の音になり、上手へ縫包みの狐一疋出る、早助是れを見て、)やあ、これは〳〵美しい娘だ、年の頃は十六七、眞なしの當世島田、油の匂ひがぷん〳〵と、いやこてえられぬ話しだ。(ト狐の側へ來り、)もし姉さん、お前は一人かえ、なに、連れがあつたが、途中ではぐれて一人で道が怖いから、おれに送つてくれといふのか、おッと、そつちで頼まずともこつちで送つて上げたいのだ。なに、おれに何處へ行くといふのか、主人三上一學さまの使ひで、鎌倉から遙々播州まで行く者だ。則ち用といふは是れだ。(ト懷から袱紗包みの香合を出し、)これは月本家の寶物で、胡蝶の香合といふものだ。何を隱さうおれが主人の一學さまが盜み取り、持つて居るのはけんのんゆゑ、播磨の郡領さまへ預けに行くのだ。なに此香合がほしい、ほしくばおぬしに遣らうけれど、魚心あれば水心、おれが言ふことを聞くならば、後とも言はず直にやるがどうだどうだ。(ト手をとり)このまア色の白いこと、そしてむく〳〵やは〳〵と、さはり心のいゝことは(ト頰へあて夢中になりし思入。)なに、おぬしのいふ通りになつたらいふ事をきくとか。オヽなるとも〳〵、サアどうともしてくれ〳〵。(ト狐にもたれかゝる。)ナニ帶紐といて裸になれ、扱はしつかり肌と肌、といふ積りか。(ト早助着物をぬぎ、襦袢一つになり、狐に寄添ひたはむれる思入。)ナニおれが眉毛が太い。これは生れ付だから仕方がないが氣に入らずば剃つてしまはう。何の造作も

ない事だ。（ト脇差しの小刀をとり、片眉毛を剃り落す）ナニとてもの事に坊主になれ、チツト奴が嫌ひなら、剃り落して坊主になる、何でもおぬしのいふなり次第だ。（ト此内早助捨ゼリフにてだんだんにそり落して、青坊主になる思入あつて、）これでどんなにたはむれても、髪のこはれる氣遣ひがない、とてもの事の剃りついでに、もうどこも剃る所がないか、ナニ、口中のちぎりをするに鼻が邪魔になるから剃つてしまへ、オツト合點だ／＼。（ト小刀にて鼻をそり落し、のり紅になり、）アイタアイタ。

ト早助ひつくりかへる。ドロ／＼にて、狐香合をくはへ下手へはひる。上手より以前の百姓三人出來り、

○ そりやこそ、さつきの奴が化されたのだ。

三人 コレ、性根を付けさつせえ／＼。

ト三人早助を起し介抱する、早助鼻を押へ起上り、

早助 アヽひたい／＼。（ト鼻へぬける思入、きよろ／＼と我がなりを見て、）こりやハアどうふたのだ。

△ モシ／＼、お前は狐に化されなすつたのだ。

早助 ナニ、狐に化された。

□ さつき迄は奴さんだつたが、何で坊主になんなすつた。

早助 エヽナニ、坊主になるものか。（トいひ乍ら天窓をさぐつて見てびつくりなし、）ヤア、こりや大變だ大變だ、オヽ情ない、何でこんなあたまになつた、ハアヽヽヽ。（ト天窓を押へて泣く。）

○ これさ〳〵、今更いつても仕方がねえ、早く着物を着て、

三人 歸りなせい〳〵。

早助 御親切は有難うはござりますが、どう詫びても歸られませぬ。

三人 なぜ、歸れぬのだ。

早助 主人から預つたたいべつな香合を盗まれてひまつたからは、此儘屋敷へ歸られません、どうかして下さりませぬか。

○ どういつても仕方もねえが、袖振り合ふも他生の縁、まさか見捨てゝも行かれまい。

△ 掻ゞかきといふでもねえが、ふが〳〵になつた上坊主になつてしまつたからは、村の歩きにも使はれねえ

□ 法衣の奉加をしてやるから、堀の内道へ行くがいゝ。

○ 成程こりやあいゝ思ひ附きだ。

早助　何分よろひくお頼み申します。

△　それぢやあおいら達と一緒に來さつしやい。

早助　あひがたうござります、これとひうのもおそひさまの御利益、南無妙法蓮べきやう〳〵。

三人　南無妙法蓮華經々々々々。

ト迷子の太鼓を叩き、早助先きに三人附添ひ、山おろし題目太鼓にて花道へはひる。知らせに附き、山幕切つて落す。

(矢倉澤一ツ家の場)――本舞臺眞中に二間常足の二重、藁葺き屋根、向ふ崩れたる鼠壁、伊豫簾をおろし、上の方一面に雪の積りし山の張物、下の方吉野(二階棧敷)の上に岩穴、是れより舞臺へなだらの雪山、向う雪の遠山、杉の立木、日覆より同じく釣枝、舞臺前雪板、總て矢倉澤一ツ家の體。雪降りの山おろしにて、道具納まる。とおろし打上げ、本釣鐘、唄淨瑠璃になり、

〽杣人の通ふ道さへ埋もれて、往來途絶えし雪の山、吹雪に交る鐘の音に、寒さましらの聲かれて、谺に響く賤の庵。

ト本釣鐘を打上げ、こだまの合方になり、正面の伊豫簾を卷き上げる、眞中に自在竹をつるせし居爐

襖へ鑵子を掛けあり、此傍に籠へ入れし茶碗、柄杓など並べ、竹の燈臺へ明りをとぼし、胡蝶實は禮三草束ねの島田髷、好みの田舎模様の着附、絲車を取り居る、花道よりお才、鼠の頭巾、同じ着附、同じ手甲脚絆、草鞋、修行者のこしらへ、網代の笈を背負ひ、丸木仕込みの杖を突き出來り、花道へ留り、行き惱みたる思入あつて、

禮三　里と違うて深山路は、雪に問ひ來る人もなく、心細さに手馴れたる賤の車を夜るの友。

お才　廻る月日も修行者の、一所不住に定めなく、徒に越路や筑紫潟、身は雲水の旅の空。

禮三　父母とても過ぎ行きて、便りもあらぬ身にしみ〴〵、

お才　過ぎこし方を思ふに付け、憂きこと積る雪の暮、

禮三　頼みなき世に埋もれて、

お才　鳥も通はぬ山中へ、

禮三　覺束なくもたゞ一人、

お才　思へば果敢ない、

兩人　身の上ぢやなあ。

〽榾の火影に軒端のみ、解けて氷柱のきら〳〵と、いとゞ身に沁む小夜嵐。

ト此うちかすめて雪おろし、禮三は絲を取り居る、お才は歩みなやみたる思入にて、舞臺へ來り門口にて、

お才　此家の内へ御案内申しまする。

禮三　はい、御案内とは、どれからお出でなされました。

お才　御覽の通り私は諸國を廻る熊野比丘尼、此の大雪に難儀いたしますれば、暫しの宿りを御無心申しまする。

禮三　それは何よりお安いこと、御遠慮なくとも、さあ〳〵是れへ。

お才　左樣なれば、御免なされて下さりませ。

〽笹の葉末の雪落ちて、迷ふ塒に啼くや小雀。

ト此うちお才内へはひり、草鞋を取り笈をおろす。

禮三　洗足の水を上げませうか。

お才　いえ〳〵、雨と違うて雪ゆゑに、少しも汚れはいたしませぬ。

禮三　嘸お寒うございませう、さあ〳〵是れへ來て、おあたりなされませ。

お才　有難うございまする。

ト六部三重の合方になり、お才二重へ下り、禮三手の附きしぼくの煙草盆を出し、

禮三　さあ、お煙草をお上りなされませ。

お才　いえも、お構ひなされて下さりますな。

禮三　いえ〳〵、お構ひ申したうても山家のことゆゑ、御馳走は焚火ばかりでござります。

ト粗朶を囲爐裏へ入れてあたりながら、

禮三　さうして尼御さまは、どれからどれへお出でなされまする。

お才　此間まで武藏から相模の方に居りましたが、甲斐の國に知邊がござりますゆゑ、それへ便つて參りますので、足柄越えをいたしまする。

禮三　それは〳〵、此の大雪に山から山の足柄越え、嘸御難儀でござりませう。

お才　その難儀をいたしまするも、やはり修行でござりまする。見ますればたゞお一人、親御さまはお留守でござりますか。

禮三　はい、左樣でござりまする。

お才　よくまあ淋しい山中に、たゞお一人でおいでなされまする。

禮三　さあ、住めば都で淋しい事もござりませぬ。ほんに、今承りますれば熊野比丘尼とおつしやりま

したが、それでは大方お前さまは、地獄の畫解きをなされませうな。

お才　はい、後生をすゝむる其爲に、一百三十六地獄の畫解きをいたして歩きますが、よう御存じでござりますな。

禮三　亡くなつたかゝさんの、話しに聞いて居りました。

お才　一樹の蔭一河の流れ、これも値遇の緣なれば、御馳走のお禮がてらに、地獄變相の畫卷を只今御目に掛けませう。

禮三　それは、有難うござりますわいな。

ト地藏經の合方、鉦入りになり、お才笈の内より地獄の畫卷を出し、開き見せ、

お才　さあ、とつくりと御覽じろ。

禮三　ても恐ろしい地獄の有樣。（ト禮三ぢつと見る、お才思入あつて、）

お才　此の眞中が閻羅王、右と左りが五道の冥加、見る目嗅ぐ鼻、三途の脫衣婆、こちらの山が劍の山又こなたの山が針の山、娑婆にて惡業なせし者は、此の淨玻璃の鏡にうつり、業の秤に掛けられて、等活黑繩阿鼻焦熱、晝夜をわかず鬼畜の呵責に、かゝる來世の苦患を思ひ、此世で惡い事すなと有難い佛の敎へ、惡い事は出來ませぬな。（ト兩人氣味合の思入。）

禮三　ほんに書で見てさへも身の毛立ち、怖いことでござりますわいな。

お才　まだ〳〵これは來世の事なれど、現世の地獄の獄屋の呵責、偸盗邪婬を犯す者は、忽ち見る目嗅ぐ鼻の目に掛り、いか程包み隠すとも明らかなる淨玻璃の鏡に掛けられ科顯はれ、業の秤で輕重極り、畜生道の馬に乗り八寒地獄の氷の刃、焦熱地獄の火にかゝり、死する者もまゝあれど、十が九ツ皆盗人。

禮三　えゝ。（ト禮三ぎつくり思入。）

お才　おゝ、その盗人で思ひ出せしは、今爰へ來る道すがら何れで盗んで來たことか、狐が怪しき物を啣へ逃げ來る途端、から〳〵と夜風に鳴子の繩が切れ落ちたる音に驚きて、啣へし物を取落し、跡をも見ずに逃げました。

禮三　して、其狐の啣へし物は。

お才　さあ、地獄の沙汰と下世話でいふ、金かと思へば香合にて、其儘置けば此雪に、埋もれてしまふゆゑ、鳴子と共に私が拾うて爰へ持つて參りました。

（ト懐より小さき鳴子と、以前の香合を出す、禮三思入あつて、）

禮三　そんならそれを狐めが、あゝ鈍な奴でござりましたなあ。

お才　定めて取られし者は、近所のものでござりませう、こちらへお預け申しますから、主が知れたら
其人に、お渡しなされて下さりませ。

禮三　はい〳〵、わたしがお預かり申しました。

お才　えゝ、人目に掛るやう、鳴子と共に此香合を、爰へ吊しておきませう。

ト以前の煙草盆の手へ鳴子と香合の包みを結びさげ、狐罠と見える仕組み、

禮三　そんなら袱紗の、其中は、

お才　明けては見ねど、金目な品、

禮三　正しく胡蝶の。

お才　やゝ。

禮三　いえ、故郷を離れて遠い旅、定めしお草臥れでござりませう、むさくるしくとも、奥の一間で。

お才　左様なればお詞に、甘へまして暫しのうち。

禮三　御心置きなく尼御さま。

お才　どれ、御造作になりませうか。（ト合方になり、お才暖簾口へはひろ。禮三殘りて、）

禮三　今の尼御が携へしは、これぞ望みの。

ト雪おろしになり、禮三狐の思入にて、香合へ手を掛けようとする、此時本鐵砲の音して、禮三びつくりなし、ドロ〳〵にて壁へ消える。跡時の鐘、凄味の合方になり、下手岩穴より、牙藏ほくそ頭巾手甲山袴附、一本ざし雪沓、獵人のこしらへ、鐵砲の光りに人影うつるゆゑ、思入あつて窺ふ。牙藏舞臺へ來り、件の香合へ手を掛ける、お才奥より出てこれを留める、ちよつと立廻り、牙藏香合を取上げる、お才これへ手を掛け、トヾ眞中へ落し、左右へ別れてきつと見得、大ドロ〳〵、此道具ひしぎになり、居所替りに替る。

(足柄越山中の場)——本舞臺上の方中足九尺の座禪堂、茅葺き屋根、正面蔦の絡みし鼠壁、崩れる仕掛あり、軒口古びたる座禪堂といふ額、正面一面に芒原、下手蔦の絡みたる杉林、うしろ山の張物、上下同じく芒原、後切出し足柄山の遠見、總て足柄越山中の道具よろしく納まる。と誂への鳴物、ドロ〳〵にて、眞中の芒原より、禮三飛んで出て、香合を取上げる。牙藏お才左右より手を掛ける。三人これにて立廻つて、禮三牙藏を突く。これにてたぢ〳〵となり、牙藏上手の座禪堂の壁へぶッつかる。これにてばら〳〵と壁少し崩れかゝる。禮三お才香合を枷に立廻る。牙藏此中へ割つてはひるを投げ退ける。牙藏猿返りにて、正面芒原の内へかへり込み兩人立廻る。此内ばら〳〵

と上手の壁崩れる、正面より○獵人の吹替にて窺ひ出で、禮三に組附くを振り解き、投げのけ、お才と引張りの見得。此時壁の崩れより駄右衛門、黒の頭巾墨の衣、晒しの手拭を拂子のやうに持ち窺ひ居る。これより鳴物替つて、駄右衛門出で三人立廻りよろしくあつて、香合禮三の手に入り押し戴く雪おろしドロ〳〵になり、禮三芒原へ消える。是れと一緒に駄右衛門頭巾を取る。大毬栗の鬘、上着引抜き、錦の袈裟と見ゆる法衣仕立の四天、仕込杖を持ち、双方きつと見得。探り合ひの立廻り、此中へ○の順禮割つてはひり、よき程に灯入りの月を引き出す。是れにて兩人拔合せ、烈しき立廻り駄右衛門○を切り、ぽんと返るを木の頭。これにて芒原より雁大分引き上げる。駄右衛門、お才羽音に驚き雁を見上げる、山おろし、カケリ寺鐘にてよろしく、

ひやうし幕

ト此幕櫻の道具幕にて、花道へ菜の花の土手板を出し、兩棧敷の覆を打返しにて枝垂柳をふり出し、ドロ〳〵になり、花道へすつぽんにて、禮三百日鬘好みの四天裝にて、件の香合を喞へ出で押し戴き指金の蝶二羽、香合の奇特にて舞ふ。禮三これへ思入あつて、香合を懷へ入れきつと見得、誂へ派手なる鳴物になり、蝶へ目を附け、狐六法にてよろしく花道へはひる。知らせに附き、跡シャギリ。

三幕目

大磯三浦屋の場
同　八町畷の場

〔役名〕――日本駄右衛門、日本数馬之助、奴弓平、遣手お爪、三上一學、三浦屋若い衆小助、鮫島五平太、石川傳吉、三浦屋の若い衆、火の番、駕舁、非人、黒鴨友平、八重垣禮三郎實は小狐禮三。地藏尊の御夢相實は船玉お才、傾城深雪、茶屋娘お山。花月の番頭新造花川、深雪の番頭新造竿野、茶屋の下女、禿彌生、傾城花月等。〕

〔三浦屋格子先の場〕――本舞臺三間の間朱塗りの大格子、上の方一間の入口、三浦屋といふ柿の長暖簾を掛け、下の方用水桶番手桶を積み、總て大磯三浦屋格子先の體、爰に長床几を二脚並べ、上手に一學、羽織着流し大小、五平太、傳吉着流し大小にて床几に掛け、下手にお爪更けたる遣手のこしらへにて立ち掛り居る、小助若い者にて床几に掛け居る、此見得吉原雀の唄にて幕明く。と右の合方流しにて、

一學　これお爪、かねてそちに頼み置く、花月の事はどうしてくれる。

お爪　ほんにお前さんも氣の短い、色戀がさう急に出來ますものかね。

五平　これ〳〵お爪、そりや何を言ふのだ。此秋から三月越し、振られ通すを合點で通ひめさるゝ三上氏。
傳吾　常平生なら何事も、氣の短い一學どのが、戀ならばこそ此やうに、氣を長く待たるゝのだ。
一學　どうかそちの働きで、手に入れるやうにいたしてくりやれ。
お爪　氣を長くさへお待ちなされば、きつとお手に入りませう、お前さまを振つたのも、元はといへば月本の若殿がござるゆゑ。
小助　その數馬さまも先達て、香合とやらをなくした科で、兄御さまから勘當受け、今ぢやあ奴弓平と裏借家にかすかな暮し、替つた話しぢやあござりませぬか。
一學　それも聞けば、皆花月が仕送りをするとやら、聞くのさへ胸の惡い話しだ。
五平　同じ人間に生れながら、女に貢ぎを受けるなどゝは、どんな月日の下に生れたか。
傳吾　われらなどは一生涯、夢に見る事も出來ぬて。
一學　何にしろ數馬之助が通つてはむづかしいが、どうか彼奴の來ぬやうにいたし方はあるまいか。
お爪　そこに如在はござりませぬ、兄御の勘當受けてから百兩餘り揚代の、滯りを幸ひに二階を堰いて置きましたから、もう來ることは出來ませぬ。

小助　もし又こつそり裏茶屋などで、逢うたが最後、二度と再び廓へ顔の出されぬやうに、恥面かゝして遣ります。

お爪　假令朋輩や番頭が、絲を引いて逢はす氣でも、そこは二人が見る目嗅ぐ鼻。

小助　二階の締りはお爪どん、見世には小助が居るからは、格子で話しもさせませぬ。

一學　さういふ事では大丈夫、身共が願ひも叶ふであらう。

お爪　去るものは日々に疎しと、今においらんも寐返り、あなたに惚れるに違ひはない。

小助　戀は何でもおたいこが肝腎、無暗にあなたを褒めそやせば、つい氣の替るものでござります。

一學　何分ともに二人へ頼み、規模はしつかりする程に、花月が身共が手に入るやう。

お爪　そこはあなたの規模次第で、小助どんと二人して、

小助　きつとお手に入れませう。

一學　それは何より忝けない。

五平　先づ前祝ひに二階へ上り、

傳吾　色氣より喰氣のわれ〳〵。

一學　精氣を増すやう鰻としよう。

小助　そこらが筋でござりませう。
一學　そんならお爪。
お爪　さあお出でなさいまし。
　ト名古屋名物の唄にて、一學先きに五平太、傳吉、お爪附いて暖簾口へはひる。小助殘り、
小助　今夜はまた深雪さんの所へ、八重垣さんがお出でなさるが、又二階が騒ぎだらう、ほんに男が若手のきゝ者に、太夫元にそつくりで、程がよくつてお金があつて、切れ放れがいゝものだから、二階中が岡惚れで何だのかだのと騒々しい、然しお出での度毎に、御祝儀を貰ふので、こちとら始め惚れるもの、女郎衆の惚れるは尤もだ。が、噂をすれば影とやら、仲の町からお出でになつた。
　ト誂らへの唄になり、花道より○若い者にて、花勝見の紋附きし箱提灯を持ちて先に立ち、跡より禮三羽織着流し、一本差し、駒下駄、深雪染ものゝ着附、假宅ごしらへの傾城、駒下駄にて、禮三と、連れ立ち出來る、跡より雪野番頭新造のこしらへ、友平紺の合羽一本差し、黒鴨のこしらへ、お山茶屋の娘のこしらへ、茶屋女同じく下女にて白鳥の徳利を提げ出來り、皆々花道へ留り、
禮三　これお山、今そこで逢つたおいらんは、ありやあ何處のおいらんだ。

お山　あのおいらんが松葉屋の、今の粧さんでござります。
禮三　あれが今の粧か、話しに聞いたよりいゝ女だ。
雪野　器量がよいのに程がよいので、大層お客がありんすとさ。
下女　ほんにはひる芝居と同じことで、初會馴染ちやあ前びろから附込んでなくちやあいけません。
友平　もし旦那、流行ものは前が花、一間附込んでおきませうか。
禮三　さうよ一晩行つて見ようか。（ト是れを聞き深雪禮三を抓る。）あいたゝゝ、何をするのだ。
深雪　何をしますものか、腹が立ちいすからさ。
禮三　何が腹が立つか知らないが、惡い氣遣ひだ。
友平　もし、おいらん何がそんなに腹が立ちます。
深雪　友平さん、有難うざますよ。
友平　さあ、さつぱり譯が分らねえ、何も禮を言はれる覺えはないが。
お山　もし、お前さんが粧さんの所へ、旦那をお勸めなさるからさ。
友平　あゝそれでおいらんが。こいつァ一番しくじつた。
禮三　ついに出來した事のないやつさ。

雪野　さあ、癡話喧嘩は後にして、
下女　早う二階へ。
女皆々　ござんせいなあ。（ト右の唄にて舞臺へ來る、小助前へ出て、）
小助　これは八重垣さま、お早うございました。先づこれへお掛けなされませ。
禮三　おゝ、爰で一服呑んで行かう。
小助　それがよろしうございます。これお火を早く。
禿　あい――。

ト暖簾口より、禿煙草盆を持ち出來る、禮三深雪上手床几へかける、友平、お山、雪野、下女下手床几へかける、禮三思入あつて、

禮三　これ小助、今向うの家へはひつたのは。
小助　え、向うの家へ。（ト思入。）
友平　もし旦那、またおいらんに抓られますぜ。
禮三　何さ、今向うへはひつたのは、慥に壽六だと思ふからよ。
友平　へゝえ、太鼓持でござりますか、わしやあ又おいらんかと思つてハッとしました。

小助　何をそんなにびつくりしなさるのだ。
お山　今友平さんが旦那さまへ、粧さんをすゝめなさんしたので。
下女　おいらんをしくじりなさんしたのさ。
小助　道理でおいらんが、濟まない顏だと思ひましたが、それぢやあその一件でござりますかね。
深雪　何、さうぢやあないが、逆上るせるか頭痛がしてなりんせんからさ。
お山　ほんにおいらんの頭痛は、強い頭痛でござりますね。
雪野　それに八重垣さんがお出でなさんすと、岡惚れが多いから、おいらん始めわたしまでが、どんなに心配でありんせう。
禮三　そりやあお氣の毒な事だが、現在相方の深雪でさへも、よくしないおれを誰が惚手があるものか。
小助　もしおいらん、よくしないと言はれちやあ合ひませんね。
深雪　どうでわたしやあ意氣地がないから、心一杯よくする氣でも、ぬしの氣には入らぬゆゑ、それで頭痛がいたしいすのさ。
禮三　鍼でも打つて貰へばいゝに。
深雪　鍼くらるぢやあ利きいせん。

友平　然し旦那の鍼ぢやあ。おつと、またこんな事を言ふとしくじる。
お山　もし友平さん、默つておいでよ。
小助　鍼や藥で利きませずば、お呪禁はどうでござります。
深雪　何ぞいゝお呪禁がありんすか。
小助　それ、いつも格子先へ來る、いゝ女の呪禁屋、あれは不思議に利きますぜ。
下女　ほんに、よく利くさうだね。
○　あれは實によく利きます、私などはお呪禁で、すつぱり直りました。
禮三　直つたとは、寐小便か。
○　旦那、常談をおつしやるぜ。
小助　まあ物は試し、おいらんも呪禁つて貰つてはどうでござります。
深雪　さうさ、あんまり切ないから呪禁つて貰はうかね。
○　さうなさいまし、直になほります。
雪野　もういつも來る時分だがね。
禮三　それぢやあ爰で、待つて居るがいゝ。

ト又石の唄になり、花道よりお才、黒の頭巾好みの被布、異樣なるこしらへにて、小風呂敷包みを持ち出來り、花道にて、

お才 地藏さま御夢相のお呪禁、四百四病何病でも、日數七日の其うちに、速に直る希代な呪禁、お初穗はお心持ち次第、地藏尊御夢相のまじなひ。(ト呼びながら舞臺へ來る、小助出て、)

小助 あゝもしお呪禁屋さん、ちよつと待つて下さりませ。

お才 はい、何ぞ御用でござりますか。

小助 お願ひ申したい事がござりまする。

お才 お前さんでござりますか。

小助 いえ、わしぢやあござりませぬ、あのおいらんでござります。

お才 左樣でござりますか。御病症は何でござりまする。

深雪 あい、わたしや逆上性で、頭痛で難儀をいたします。

お才 それは嘸お困りなさいませう、どうも頭痛といふものはお藥の利かぬもの、地藏さまを御信心なすつて三日もお呪禁をなさいましたら、跡は根切りでござりませう。

深雪 さつきから下を見ると、目がまふ程でありんすから、早くお頼み申しいす。

お才　早速まじなうて上げたうござるが、生憎昨日から約束で參らねばならぬ所が、一二軒ござります
ゆゑ後までお待ち下さりませ、歸りにお寄り申しまして、直ぐ輕くなりますやう、呪禁うて上げ
ますわいな。

深雪　そんならどうぞお歸りに、お寄りなすつておくんなんし。

雪野　もし、此のお呪禁は病ばかりでありんすかえ。

お才　いえ〳〵病ばかりぢやあござりませぬ、お前方にもよい事は、好いたお客を呼ばうと、いやなお
客を歸さうと、お呪禁で自由になります。

雪野　それぢやあどうかお呪禁を、

お山　わたしもお賴み申しますわいな。

小助　大方お前の賴みは、わたしと情人になりたいのだらう。

お山　えゝもいやな、誰が散蓮華に。

下女　お山さんのいゝのは、此の友平さんさ。

お山　あれ又そんな事を。

お才　いゝえ、わたしが願ひの叶ふやう、呪禁うて上げませうわいな。

禮三　はてさて、世には希代な事が。（トお才へ目を附ける、お才も禮三を見て、）
お才　や、あなたは誰かに。
禮三　え。（ト思入。）
お才　いえ、誰でも願ひの叶ふやう、呪禁うて上げませう。
深雪　そんならどうぞ、間違ひなう。
お才　はて、後程きつと上ります。左樣ならどなたも、御免なされて下さりませ。
ト右の唄にて、お才思入あつて、上手へはひる。
友平　ときに、わつちらも、お座敷へ參りませうぢやござりませぬか。
禮三　こいつァ一杯遣りたくなつたな。
友平　なに、さうぢやあござりませぬが、二階でみんなが。
深雪　何だとえ。
友平　いえさ、見世先では邪魔になるゆゑ。
禮三　それぢやあ是れから、二階へ行き、
お山　鬱いで居なんすおいらんの、

下女　少しはお氣の晴れるやう、

雪野　いえ、おいらんならばそれよりか。

小助　直にこれからお床入り、

友平　美濃と近江でしつぽりと、

禮三　寐物語りとしようかい。

深雪　そりやほんまでありんすかえ。（トにつこり思入あつて）

友平　それ、おいらんの笑ひ顏。

禮三　またもや御意の替らぬうち。

女
皆々　さあ、ござんせいな。

ト又吉原雀の唄になり、禮三深雪先に、此人數殘らず暖簾口へはひる。跡誂への兩吟の唄になり、花道より數馬之助、頰冠り着流し大小にて出來り、

數馬　今更云ふも愚癡ながら、いつぞや長谷の觀音で家の重寶胡蝶の香合を盜まれ、兄上より勘氣を受け香合を詮議の爲に弓平諸共町家の住居、大事を抱へし身ながらも、花月に逢はねば心が濟まず忍び〳〵に通ひしが、遂には溜る揚代に此間から二階を堰れ、逢ふこと出來ねば猶逢ひたく、人

目を忍び格子から、ちよつとなと逢ひたいものぢやなア。（ト唄にて舞臺へ行きかけ、思入あつて、）花月の顏が見たけれど、揚代金の濟まぬうちは、決して行くなと弓平が言うたを隱れて出たゆゑにお爪や小助に見咎められでもした時には、弓平に言譯がない、こりや止しにして歸りませう〱（ト又唄になり、花道へ歸り思入あつて、）とはいふものゝ、折角來たにちよつと一目格子から。いやいや、切ひ切つて歸らうか。逢うて來ようか。歸らうか。（ト行きつ戻りつ思入あつて、）あゝ、どうでも逢はねば歸られぬわいの。

　トやはり右の唄にて、舞臺へ來る。此時以前のお山暖簾口より出來り、數馬を見て、

お山　あもし、あなたは數馬さまではござりませぬか。

數馬　や、こなたは岡田屋の娘か、見ぬ顏してくりやいの。

お山　いえ、其の御遠慮には及びませぬ、年もゆかいでませくるしいと思召しもございませうが、是れまで御恩に預かりし月本さまの若殿さま、三浦屋へは兎も角も、なぜわたし共へ此頃はお出でなされて下さりませぬぞいな。

數馬　それぢやというて揚代の、勘定濟まぬ其うちは。

お山　いゝえ〱そんな事を兎やかうと、やかましう言ふやうなおとつさんではござんせぬ、必ず御遠慮

なされませず、どうぞお出で下さりませいな。

數馬　見る影もない數馬之助を、親が親とてそなたまで、以前に替らず其やうにいうてくれるは嬉しいわいの、今にも寶が手に入つて、兄の勘氣がゆりたなら、きつとお禮をしますぞや。

お山　何のお禮に及びませう、以前の事を思ひますと、おいとしうござりますわいな。

（ト思入、此時暖簾口より、花川、番頭新造のこしらへにて出來り、）

花川　もし、數馬さま。

數馬　や、花川か。（ト大きくいふ。）

花川　あ、もし。（ト四邊へ思入あつて側へ寄り、）四五日お目にかゝらぬので、どうか斯うかとおいらんも案じ過して昨日から、持病の癪で見世を引き、鬱いでばつかり居さつしやります。

數馬　それでは見世を引いて居やるか、ちよつと逢うて行きたいものぢやが、逢ふ事は出來まいかの。

花川　さあおいらんも其通り、一目なりとも逢ひたいと、鬱いでばかり居さつしやるから、どうかお逢はせ申したいが。

お山　格子先きでは、人目もあり。

花川　仲の町へは出やしやんせねば、裏茶屋へ行かれもせず。

お山　いつそのこと、こつそりと、二階へお連れ申しては。
花川　ほんに今夜は、八重垣さんで、
お山　混雜するのが丁度幸ひ、
數馬　そんなら行ても大事ないかや。
お山　はい、わたしがお連れ申しませう。
數馬　何にも言はぬ。（ト手を合せるを、）
花川　あゝもし、人目に掛らぬ其うちに。
數馬　少しも早う。
お山　さあ、ござんせいな。

ト兩吟の唄の切れにて、花川先きに數馬之助手拭を冠り、お山附いて暖簾口へはひる。此唄を借りて花道より弓平、肩入れ木綿やつしなり、一本ざしにて出來り、

弓平　揚代金の濟まぬうちは廓へお出でなさるなと、お斷り申して置くに、間がな隙がな目顏を忍び、暇さへあれば廓へばかり、如何にお年が行かぬとて、さりとは困つた事だなあ。（ト合方になり、舞臺へ來り、暖簾口へ思入、）何にしろどこへお出でなされたか、跡先見ずに三浦屋へ忍んでお上りな

さらにやいゝが、あの意地惡のお爪や小助の、目にかゝつたらばお身の上、恥辱にでもなる事あらばお上屋敷へ下郎が濟まず、ちよつと樣子を聞きたいものだ。（ト內を覗き込む、暖簾口より禿彌生出來る、弓平是を見て、）これ〳〵、彌生ではないか。

彌生　さう言はんすは、弓平さんかえ。

弓平　これ靜かに言やれ、丁度いゝ所へ出て來てくれた。もしやおいらんの所へ數馬さまが、お出でなされはせなんだか。

彌生　あい、今花川さんがお連れ申して、二階へお出でなさんした。

弓平　えゝ、そんなら二階へ。（ト上へ思入あつて、）えゝ、情ない、お前さまはなあ。

ト思はず彌生の胸倉を取る。

彌生　あれ、何をしなさんすえ。

弓平　おゝ、うつかりおぬしを。（ト手を放し、引廻すを道具替りの知らせ、）堪忍しろや〳〵。

ト彌生の天窓を撫でる。此模樣よろしく、吉原雀の唄にて道具廻る。

（花月部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、向う床の間違ひ棚、本箱茶道具などの書割、下手夜具棚、

上の方障子の見切り、下手廊下の片遠見、下の方一面の障子、隣り部屋の體、よき所に二ッ蒲團、夜具六枚屏風を廻し、丸行燈、總て花月部屋の體、爰に花月傾城部屋着のなりにて、火鉢に寄りかゝり物思ひのこなし、一中節くらべ牡丹の唄にて道具廻る。

花月　辛い苦界の勤めの身は、間夫に逢ふのが樂しみなれど、戀し床しい數さんが二階をせかれてござんすゆゑ、晴れてお目にも掛られず、花川さんの働きで仲の町の裏茶屋で、逢ふのも鵜の目鷹の目のゆゑ、しみ〴〵話しをする間もなく、せり立てられて本意ない別れ、それさへならぬ此の四五日、どうか斯うかと案じられ、持病の癪にくよ〳〵と、思へば愚癡な涙の種、それに引替へ深雪さんは、命までもと惚れて居る八重垣さんが來なさんして、嘸嬉しうござんせう。いつあのやうに内證へも、晴れて逢はれる事ぢややら、あゝ羨しうござんすなあ。

ト花月ぢつと思入。此の以前より、下手廊下より花川出て窺ひ居て、

花川　もしおいらん、羨しいとは何ざますえ。

花月　さあ今聞いて居た深雪さんの所へ、八重垣さんが來なさんしたといふから、羨やましうおすと言つたのさ。

花川　それがそんなに羨しうおすなら、おいらんも數さんに逢つたらよいぢやありませんか。

花月　花川さんお前でもない、數さんに逢はれる位なら、羨しいと言はうかいなあ。

花川　その逢はれぬ數さんに、今にお逢はせ申しませう。

花月　え。そんならもしや格子へでも。

花川　いゝえ、二階へ來て居なさんす。

花月　そりやまあ、ほんまに。

花川　あもし。(ト四邊へ思入あつて、花月に囁く、花月嬉しき思入あつて、)

花月　おや、さうざますかえ。

花川　おいらん、嬉しうざますか。

花月　花川さん、拜みいんす。

花川　どれ、お連れ申して來ようか。

ト右の唄にて、花川下手へはひる。花月鼻紙にて顏を拭ひ、鬢のほつれを掻き上げ居る。花川數馬之助の手を取り、忍び足にて出で來るを花月見て、

花月　や、數馬さん。

數馬　花月。

花月　逢ひたかつた〳〵わいな。（トすがり附く。）
花川　あもし、静かにしなましな。（ト花川廊下に窺ひ居る、數馬之助花月寄添ひ。）
花月　逢ひたうて〳〵ならぬ所、よく逢ひに來ておくんなんした。
數馬　二階をせかれて表向き、逢はれぬやうになつてから、猶々逢ひたく片時も、家に居る氣はなけれども、揚代金の濟まぬ内は、決して行くなと弓平が留めるゆゑに、仕方なく〳〵家には居れどうはの空、目先におぬしの姿が見え、逢ひたうて〳〵ならぬゆゑ、日暮れからそつと拔け、格子へ來た所岡田屋の娘と花川の働きで、忍んで二階へ上つたわいの。
花月　そりやもうわたしも同じこと、逢はれぬやうになつてから外の客へ出る氣もなく、くよ〳〵思うて癪の種、この二三日は引込んで仲の町へも出ぬゆゑに、ちよつとなりとも逢ふことならず、せめての事に夢にでもと、思ふばかりでござんすわいなあ。
數馬　さうして三上一學は、足を近く來をるかいの。
花月　此秋から逢に一度、優しい詞も掛けねども、根強く通ふ一學づら、けふも晝から二階へ來て附けつ廻しろ兎やかうと、ほんに好かぬことばかり。
數馬　一學めが來て居るからは、定めて傳吾、五平太等も。

花月　いつも一緒に連れ立つて、苦界の譯も知らずして、とも〴〵口說く心なし。

數馬　何にせい一學の目にかゝつては此の身の上。

花川　人の心の附かぬうち、屛風の內でしつぽりと、

花月　積る話しの數々を、

數馬　言うたり聞いたり、

花川　何かは床で、

花月　そんなら早う。

數馬　どれ、ゆつくりと話さうか。

ト雪は巴の合方になり、花月數馬之助を連れて、下の屛風の內へはひる。花川殘り。

花川　やれ〳〵嬉しや、お爪どんが深雪さんの部屋へ、行つた隙を窺ひ、首尾ようはいつたけれど、こいりや斯うやつてはおかれぬ、爰で張番せうわいなあ。

ト此以前上手より、お爪小助、○△□若い者のこしらへにて附添ひ出來り、

お爪　花川さん、何の張番をしなさんすのだ。

花川　えゝ。（ト花川びつくりする。）

お爪　大事な物なら、わたしへでも預けなさんせ。

小助　人に見られて惡いものか、大層びつくりしなすつたね。

花川　なに、深雪さんから鰻をば持たしておくんなんしたから、泥坊猫に取られぬやうに。

小助　それで張番しなさるのか。

お爪　ほんに人の目玉をぬすみ、泥坊猫は油斷がならぬ。さうしておいらんは、何處に居なさる。

花川　あいおいらんは、例の癪でさつきから、寐て居さつしやいますよ。

お爪　ちよつと起してくんな。

花川　何の用かは知らないが、今すや／＼と寐てなれば。

お爪　寐て居ても起されないものか、旦那の用があつて來たのだ。

小助　お前が起しにくいなら。

若者三人　わつちらが行つて起しやせう。（ト立ち掛るを花川留めて、）

花川　あもし、お前を遣つては。（ト屏風の内にて、）

花月　あゝもしえ、何の用か騷々しい、折角とろ／＼と寐たところを。

と言ひながら屏風の内より、花月出來り、火鉢の側へ住ふ。

お爪　お目を覺してお氣の毒でござりますね。

花月　さうしてわたしに、用とはえ。

お爪　いつも替らぬお仕着ぜりふ、此秋から一學さんが、足を近くお出でなさるに、遂に一度床へも入らず、いつ來なすつても名代ばかり、そりや其頃は數馬さんも、お前の爲になつたから、見て見ぬ振りをして居たが、とう〳〵屋敷を追出され、斯かる始末に百兩から揚代金の滯り、二階を止めてしまうたからは、牛を馬に乘替へて、今夜から一學さんを大事にして勤めなさんせ。

小助　數馬さんがござつてから、惡い浮名がぱつと立ち、目星しい客は皆離れ、初會や裏の客ばかりぢやあ内證も詰らず、お前も詰らずわつちにも詰らねえ。

△　君を思ふも身を思ふだ、お爪どんなり小助どんなり、惡い事は言はねえから、

○　貧乏神の數馬さんは、死んだと思つて學さんに、

□　お前の身をば任しなせえ。

花月　そりやあもうお前方が言はずとも苦界の勤めをするからは、誰の彼れのはなけれども、わたしやどうした事ぢややら、あの學さんが心底から。

お爪　なに、心底から。

花川　いやで〳〵ならぬわいな。（トずつけりいふ。）

お爪　いやならいゝわと氣任せに、打ちやつてはおかないよ、酷い折檻してなりとも、大事なお客を勤めさせねば、高金出して抱へて置いた、旦那の米櫃に拘はるわ。

花川　そりやもう小さい時から、御恩になつた旦那さんの、爲ならお客も勤めませうが、何をいふにも癪ゆゑに、見世へ出るまで旦那さんへ、よういうておくんなんし。

お爪　そりやあ癪ゆゑにお客へは、出られぬと言ひなさるのだね。

花川　はて、病氣では、どうも勤めは。

お爪　出來ぬといふも御尤も。（ト言ひながらすつと行つて、屛風をあける、內に數馬之助びつくりして夜着を冠る、花月ぎつくり思入あつて、）もしおいらん、爰に寐て居るのは、誰でござります。

花川　あゝもし、それは。（ト行かうとするを留めて、）

小助　此の手引はおめえだね。

お爪　爲になる人でさへ、癪で出られぬ花月さん、よもやお客ぢやあるまいね。

小助　茶屋の息子か太鼓持、色戀ならば猶のこと、洗ひ立てをしにやあならねえ。

お爪　誰でもいゝ、引摺つて來さつせえ。

若者
三人　合點だ。（ト△〇口ツカ〳〵と行き數馬之助を引出し、眞中へ連れて來る、花月花川當惑の思入。）
小助　扨こそ内には、
三人　貧乏神の。
數馬　あゝこれ、どうぞ見のがしてくりやいの。
小助　どうして是れが、見のがせるものか。
お爪　さあ、誰が手引で二階へ上げた。
花川　あい、わたしがお揚げ申しいした。
お爪　なに、わたしが揚げたとは、どの口でいふのだ。（ト花川の口の端を抓りあげ、）これ、旦那さまのお目鏡で花月さんに附けておく其番頭が、二階を止めた客を上げて濟まうと思ふか。うぬ、どうするか見やあがれ。
花川　さあもう見附かつた其時は、折檻受けるは覺悟ざます。數馬さんも、おいらんも知つた事ではござんせん、わたしをどうなとなさんせいな。
お爪　おゝ、しねえでどうするものだ。（トお爪立ち掛ろ、此時上手より一學五平太傳吉出來り、）
一學　あいや、お爪待ちやれ。

お爪　一學さまでござりますか、なぜお留めなさいます。（ト合方替つて、一學三人共上手へ住ひ、）

一學　されば假令花川が手引にせよ、我が揚詰の花月をぬすんだは、數馬之助。

五平　三上氏の御所存ならば。

傳吾　かれを折檻するに及ばぬ。（トこれにてお爪控へる、一學數馬之助に向ひ、）

一學　いやなに、數馬どの、以前は身共も月本家で僅な扶持でも貰つて居たゆゑ、こなたとも主從だつたが、長の暇を幸ひに、今では他家へ仕官なし、以前に勝る知行取り、

五平　一學どのゝ推擧にて、路頭に迷ふわれ〳〵も、

傳吾　共に立身出世なし、榮耀榮華の仕度い三昧、

一學　他家へ參れば此くの如く用ゐらるゝ一學を、見出さぬ月本圓秋は、兩眼あつて盲同樣、恨みこそあれ恩はねえ、何で身共が揚詰めの、花月をこなたは偸ましつた。

數馬　さあそなたの揚げやら誰が揚げやら、知らずに參つた數馬之助、知つて來たなら盜人なれど、知らずに來たれば盜人と、そなたに言はれる覺えはない。

一學　假令知らうが知るまいが、橫ばん切れば盜人だ。

五平　君傾城は一夜妻、一學どのゝ相方を、

傳吾　ぬすめばこなた間男だ。
數馬　假令何と言はうとも、うきふし茂き勤めの身、こなたばかりが客ではない、密夫といはるゝ覺えもなければ、盗人と言はるゝ覺えもない。
お爪　覺えないとはあつかましい、揚代金の滯りで、二階を留めた數馬さん、誰に斷つて上んなすつた。
小助　いやさ、默つて二階へ忍び込み、勤めもさせぬ花月さんを、抱いて寐りやあ盗人だ。
數馬　さあ、それは。
お爪　但し盗まぬといふ言譯あるか。
數馬　さあそれは、
小助　言譯はあるめえ。
數馬　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〱〱。
小助　目串は拔けねえ、往生しなせえ。
數馬　ちえゝ。（トロ惜しきこなし、花月思入あつて）

花月　いえ、盗人はわたしでござんす。

一學　何と。（ト合方きつぱりとなり。）

花月　數馬さんに科はない、わたしがぬしを揚げたのぢや、堰かれた二階へ色男を揚げて惡くばどうなりと、わたしを勝手にしなさんせ、間夫は勤めの憂さはらし、見るからいやないけ好かない客へ出るのもありやうは、好いたお方があればこそ、科はわたしでござんすから、どうなりとしておくんなんし。

お爪　いや、いつの間に其やうなすてばちになんなすつた、二階を預かる此お爪を、只一口に遣り込めて、いや立派なおいらんだ、小刀針や食止めの野暮な折檻しないから、揚代金の百兩を、耳を揃へて出しなせえ。

花月　さあ、それは、

お爪　さあ、其の金を貰ひませうか。

花月　さあ、それは。

お爪　何と其金が出來ねえのか。

花月　さあ。（ト口惜しき思入。）

小助　いや口も立派に利きなさるが、馴染んだ客も段々放れ、病氣をいふも有やうは、仲の町へも出られぬ體、百兩の事は扨おいて、一分の工面もむづかしい。

一學　さあ金が出來ずば數馬は盜人、きり〳〵外へ叩き出せ。

小助
三人　合點でござります。

ト若い者四人數馬之助を引立てにかゝる。ばた〳〵になり、下手より弓平出來り皆々を掻きのけ、數馬之助を圍ひて、

弓平　あゝもし、暫く〳〵お待ちなされて下さりませ。

小助　何だ、暫く〳〵といふから、柿の素袍で出たかと思やあ、

△　數馬さんの御家來、

○　若葉屋の弓平どの。

□　何で爰へ出しやばつたのだ。（ト合方直つて、弓平前へ出て兩手を突き、）

弓平　はい、樣子は只今次の間で、殘らず聞いて居りましたが、一學さまを始めとしてお前方のおつしやるのは、一々尤も無理はない、斯ういふ事があらうと思ひ揚代金の濟まぬうちは、お出でなさるなとお留め申して置いたけれど、何をいふにもお年若、二階へござつたは、如何にもこつちの

誤りゆゑ、數馬さまになり代り、下郎がお詫びいたします。どうぞ御料簡なされて下さりませ。

五平　詫びるなら詫びろやうに、趣意を立つて、

傳吾
五平　詫びさつせえ。

弓平　して、其の趣意の立てやうは。

一學　數馬どのに金があれば、身共へ馳走に藝者でも呼んで誤るが、こりや遊里の習ひだが、其働らきはあるまいから、只一言許してくれと、兩手を突いて誤りやれ。

弓平　すりや、こなた樣へ數馬樣が。

一學
三人　誤ることは出來ねえのか。

弓平　今は兎もあれ其以前は、御家の御家來一學どの。

一學　ムウ、すりや其以前御家來ゆゑ、誤ることはいやだといへば、猶更誤らせねば、

三人　料簡ならぬ。（ト立ち掛るを、）

數馬　おこれ、何れも待つて下され、料簡ならぬとあるからは、如何にも手を下げ誤るから、どうぞ此場を許して下され。

一學　おゝ、誤るなら許してくれう。（ト弓平口惜しき思入あつて、數馬之助を留める。）

數馬　はて、誤れば事が濟む。
弓平　それぢやと申して。(ト息込むをぢつと留めて、)
數馬　爰が武士の堪忍だわ。(ト弓平是非なく控へる、數馬之助思入あつて泪を拭ひ、)一學どの數馬が粗忽、許してくりやれ。(ト手を突き誤る。)
花月　ても、おいとしい。(ト立ち掛るを、)
花川　あもし。(ト花川留める、一學見て、)
一學　何といづれも見さつせえ、如何に時世と言ひながら寶を失ひ勘氣を受け、現在家來に兩手を突き誤るなどゝは意氣地のねえ、見下げ果てた大腰拔け。
五平　女郎子供にやれこれと、可愛がられる替りには、
傳吾　武士に逢つちやあ意氣地がねえ、
三人　はゝゝゝゝ。(ト弓平きつとなるを、數馬之助留めて、)
弓平　さあ數馬さま、かういふ所に長居は恐れ、早くお歸りなされませ。
數馬　おゝ、如何にも直に歸らうわいの。
お爪　いや、お前方は歸されぬ。

弓平　なに、歸されぬとは。
お爪　さあ揚代金の滯りで、二階を止めた此家へ、踏込むからは料簡あらう。
小助　勘定をして行きなせえ。
弓平　さあ出來さへすれば勘定すれど、何をいふにも大枚百兩、そこをどうぞ料簡して。
お爪　おゝ勘定が出來ぬなら廓の掟、數馬さんを坊主にして歸してやらう。
弓平　そりや掟でもあらうけれど、是れまでの誼を思ひ、此儘無事に歸して下さい。
小助　いや、只は歸されぬ、坊主になるのがいやならば、揚代金の勘定をさつせえ。
弓平　それが出來る位なら、此の言譯はしませぬわ。
お爪　そんならやつぱり、坊主に仕ようか。
弓平　さあそれは、
小助　勘定するか。
弓平　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。

一學　え丶面倒な、坊主にしやれ。
小助
四人　合點でござります。（ト立ち掛る、此以前より下手障子を明け、深雪窺ひ居て、）
深雪　あもし、其掟はわたしが留めた、まあ／＼待つておくんなんし。
ト誂への合方になり、深雪、雪野附添ひ出て來る。
お爪　や、誰かと思へば深雪さん、二階の示しにならぬから。
小助　留めずに置いておくんなせえ。
深雪　い丶え留めずに居られない、人の難儀を見のがしにならぬがわたしの持前、朋輩喧嘩や色戀の縺れを結ぶおせつかい、出過ぎた奴とお叱りもかへり三ツ大花勝見、鼻の高いが俤にほんに親仁の聲色で、お職か夜食のかたまりも、どうやら斯うやら人並に、仲の町の數に入り、苦勞苦患も語り合ふ姉妹中の花月さん、難儀を見捨て丶居られうか、何であらうと此いさくさ二の字繫ぎの胴抜きに、親仁と思うて此場をば、わたしに預けておくんなんし。
お爪　何ぼお前の挨拶でも、揚代金の滯りが、立たねば此場は歸されぬ。
深雪　さあ其勘定をしたならば、野暮を言はずとよいではないか。
小助　そりやあ言はずと知れたこと、金さへ濟めば言分ないのさ。

深雪　その百兩の勘定は、わたしが拂つてあげやんせう。
お爪　そんならお前が。
若衆　皆々　其金を。
深雪　雪野さん、今のお金を。
雪野　あい。（ト百兩包みを出し、）後ともいはず小判で百兩、改めてお取りなんし。（トお爪取つて、）
お爪　ほんに、これはたしかな封金。
數馬　すりや百兩の、
花月　揚代を、
深雪　朋輩中の誼ゆゑ、わたしが勘定する程に、必ず氣遣ひしなさんすな。
花月　何にも言はぬ、深雪さん。
花川　有難うおざりんす。
弓平　さあ此百兩を取つたらば、もう言分はあるめえな。
お爪　勘定さへ濟みますれば、以前に替らぬやつぱりお客さま。
小助　御遠慮なしに幾日でも、ゆるりとお遊び。

皆々　なさりませ。

弓平　はて、薄情な事だなあ。（ト弓平思入。）

一學　いや折角うまくいつたのを、とんだ奴が出しやばつて、ぐれ蛤になつてしまうた。

五平　延喜直しに座敷へ參つて、

傳五　又もや酒といたしませうか。

一學　如何さま三ツ蒲團の其上に、一人寐るのはどつともしねえ、夜明しに呑み直さうか。

五平
傳吉　それがよろしうござります。

お爪　左樣なれば、一學さま。

小助　何かは後程。（ト一學立ち上り。）

一學　とはいへ、此儘。

深雪　何ざますとえ。

一學　えゝ、おせゝ女郎め。

五平　さあ、お出でなされませ。（ト所作の切にて一學、五平太、傳吉、お爪、小助、○△□上手へはひる。）

數馬　思ひがけない此場の難儀、憎い奴ではあるけれど、堰かれた二階へ來たのが誤り。

弓平　言ひたい事もあるけれど、何をいふにも大枚の、金の切羽に言はれもせず。
花川　ほんにわたしはどうなることゝ、大抵案じた事ではない。
花川　それも故なく深雪さんの、お蔭で濟みし此場の仕儀。
數馬　何と禮をば、
四人　言はうやら。
深雪　あもし、其お禮ならばわたしより、ぬしに言うておくんなんし。
數馬　それでは今の百兩は、
花川　お前のお客の、
花川　八重垣さんか。（ト此時下手障子を明け禮三出で、）
禮三　誰しも同じ廓の金、詰る習ひに失禮ながら、御用立て申しました。
ト言ひながら、眞中よき所へ住ふ。
數馬　すりや、こなた樣が。
弓平　八重垣どのとか。
禮三　左樣でござります。（ト誂への合方になり、）これはお初にお目に掛かりまする、八重垣禮三郎と申し

ましで、奥筋の者でござります。

數馬　かねてお名は聞き及びしが、お目に掛るは今日が初めて、則ち身共は。

禮三　あもし、其名前は存じてをります、花月さんと深雪さんとは、ほんの姉妹同様に睦じくいたしますれば、どうかあなたも是れを御縁に。

數馬　お知り人になるからは、

弓平　御懇意を結ぶで、

三人　ござりませう。

數馬　扨改めてお禮を申すは、只今此身の難儀をば、思ひ掛けなくお救ひ下され、

弓平　何とお禮を申さうやら、家來の身では取り分けて、

花月　ほんにしみ〴〵八重垣さん、

皆々　有難うござります。

禮三　これは〳〵改つて、何のお禮に及びませう、丁度折よく在所から持たしてよこした遣ひ料、今夜爰へ持つて來たのは、此の御難儀を救ふ約束、よい都合でござりました。

數馬　して奥筋と言はるゝが、形風俗から物の言ひやう。

弓平　鎌倉まさりの禮三どの。
禮三　いえ遠國者でござりますが、親仁のお蔭で田畑も多く、何不自由ない所から、國には三分鎌倉に七分住居の私ゆゑ、少しは訛りも抜けましたらうが、ほんの附燒刄でござります。
花月　ほんにぬしは鎌倉で、生れた人より訛りもなく、詞ばかりか氣性まで。
花川　それゆゑ二階で、ねえ雪野さん。
雪野　みんなが思ひ附きますよ。
禮三　いえ、あんな事を言つて、わたしに奢らせるのでござります。
深雪　其思ひ附かれるので、わたしや苦勞をするせるか、頭痛が起つてなりません。
花川　また頭痛がいたしますか。
弓平　いや頭痛といへば、一旦此場の難儀は濟んだけれど、あなたへ返す其金が。
禮三　あもし、あの金なれば私へお返しには及びませぬ、斯くお近附きになるからは少しはあなたのお力になります心でござります、もしも金子が御入用なら、まだ此上に御遠慮なしにおつしやりますやう。
數馬　すりや、それ程までに思うて下さる恩返しに。

弓平　今は勘氣の御身なれど、寶手に入る其時は、
數馬　小身なれども月本の、私も舍弟の數馬之助。
禮三　品に寄つたら御厄介に、なります事もござりませう。（ト此時引けの拍子木鳴る。）あゝもう引けか。
花川　おやもう引けでありんすか。
深雪　夜が短くなりんしたねえ。
禮三　又氣樂な事をいふか。冬至までは詰るのだわ。何にしろうか〳〵とお話し申すは大きな野暮、花月さん、堪忍しておくんなせえ。
花月　いえ〳〵それはこちらから、ぬしへ言はねばならぬこと。
數馬　思はぬことで引け過ぎまで、
弓平　嘸、睡うござりませう。
禮三　いえ、どうで明日も居りますれば、湯にでもはひつてゆつくりと、又お話しに參りませう。
數馬　左樣なれば、禮三どの。
禮三　數馬さま。
花月　定めて今夜は、

深雪　お前もしつぽり。

禮三　どれ、更けねえうち寐ようか。

ト誂への獨吟になり、深雪禮三の手を取り、雪野附いて障子屋體へはひる。

花川　さあ弓平さん、お前もこつちへお出でなんし。

弓平　いや、おれは直に歸らねばならね。

花川　もうお前、引け過ぎだのに。（ト泊れといふ思入。）

數馬　そちも今夜は泊つて行きやれ。

弓平　いえ、雨戸をあけておきましたれば。

數馬　はて、明けておいてもよいではないか。

弓平　いえ〳〵今夜は、どうか降りさうでござりますから。

花川　どうぞ降つてくれゝばよいが。

弓平　えゝ、めつさうな、降られてたまりますものか。

數馬　はて、野暮を言はずと、濡れて行きやれ。

弓平　えゝ、まゝよ、泊るとしよう。

花川　さあ、こつちへ早くお出でなんし。（ト獨吟になり、花川弓平の手を取り、上手廊下へはひろ。）

數馬　やれ〳〵嬉しや、八重垣どのゝ情にて、日本晴れがしたやうだ。

花月　もう勘定が濟む上は、明日も明後日もお出でなんし。

數馬　おゝ、また二階をせかれるまで、居續けと仕ようわいの。

花月　おやまあ、嬉しうおすね。

ト又獨吟になり、花月數馬之助に寄添ふ。獨吟にて此道具廻る。

（深雪部屋の場）＝本舞臺平舞臺、向う床の間、袋戸棚違ひ棚、地袋戸棚、簞笥茶道具などの書割よろしく。上の方大臣柱より九尺の障子屋體、隣りの部屋、下の方障子にて見切り、向う廊下の書割、眞中に二ツ蒲團夜着六枚屏風、二ツ枕、丸行燈、火鉢などよろしく、總て深雪部屋の模樣、床の上に禮三深雪住ひ、獨吟にて道具留る。

禮三　それぢやあ今の數馬さまは、月本さまの若殿か。

深雪　お大名の若殿樣だが、御兄いさまの御勘氣うけて、今ではあの弓平さんと、田中あたりに居なさんすさうな。

禮三　さういふ譯ぢやあ花月さんから、大方みんな仕送りだらうの。
深雪　あい、さうでござんす。
禮三　ほんに花月さんは親切ものだ。
深雪　いつそお前に惚れて居なさんす。
禮三　そりやあ本當にか。
深雪　あい、お前ゆゑなら死んでもいゝとさ。
禮三　あの花月さんがか。
深雪　いえ、わたしがさ。（ト禮三に寄り添ふ。）
禮三　おきやあがれ。

ト言ひながら手を取り、又獨吟になり、此うち上手障子を明ける。床の上に數馬之助、花月寄添ひ居て、花月横の障子を少し明け、此體を見て思入あつて、障子をしめ、數馬之助に寄り添ひ、獨吟の切れにて屏風を立廻す、端唄等は巴の合方になり、下手より友平出で、

友平　もうお休みなさいましたか、旦那々々明日も、氣の利かねえ話しだ。（ト屏風の側へ來り聞耳を立て、）
おや〳〵明けなくつて仕合せ、とんだ所へ出會した。（ト此時下手より以前のお山出て、）

お山　もし友平さん、まだお休みなさいませんか。
友平　おれよりやあおめえ、まだ歸らねえのか。
お山　今歸りますのだが、何ぞ御用はないかと、お聞き申しに參りましたのさ。
ト屏風を明けようとするを、
友平　おつと、明けちやあ大變だ。
お山　おや、さうでござりますか。
友平　まあ次の間へ來ねえ、話しがあるから。
お山　そりやあ本當にかえ。（ト嬉しき思入。）
友平　こいつア有卦に入つたわえ。
ト右の唄にて友平お山の手を取り下手へはひる。引違へて禿彌生出來り、屏風の外から、
彌生　もし、おいらんえ〳〵。
深雪　彌生か、何だえ。（ト屏風を明ける。）
彌生　頭痛のお呪禁をするお方が、お出でなんした。
深雪　あゝさうかえ、あんまり遲いから、明日にして貰はうか。

禮三　なに格別の手間も取れめえ、呪禁つて貰へばいゝ。
深雪　それぢやお彌生や、お連れ申してくんな。
彌生　あい――（ト下手へはひる。）
禮三　時代な返事をするぜ。
ト合方になり、兩人帶なしめ前へ出る、下手より彌生先きに、以前のお才風呂敷包みを提げ出來り、
彌生　さあ、こちらへお出でなんし。
お才　眞平、御免なさいまし。（ト下手へ住ふ。）
深雪　おや、よく來ておくんなんしたね。
お才　もつと早く上らうと存じましたが、つい宵に參つた先きで引留められ、大きに遲くなりました。
深雪　なに、今引けを打つたばかりさ。
お才　これは旦那さま、お邪魔をいたします、御免なされて下さりませ。
禮三　いや、大きに御苦勞でござります。
深雪　さうして頭痛の、お呪禁は。
お才　はい、お呪禁はこれでござります。（ト合方きつぱりとなり、お才風呂敷包みを前へ出す。）

深雪 こりや何でありんすえ。
お才 それが頭痛のお呪禁でござります。まあ明けて御覧じませ。
深雪 そんなら明けてもようざますか。
お才 よろしうございますとも。
深雪 どんな物でござんす。（ト深雪何心なく風呂敷を解き、内に生首あるゆゑ深雪びつくりして）あれえ。
ト深雪禮三に縋り附く、禿も是れにおどろき、廊下へ逃げてはひる。
禮三 何をそんなにびつくりするのだ。もし其風呂敷包みは、何でござります。
お才 はい、生首でござります。
禮三 や。（ト思入。）
お才 これが頭痛のお呪禁、ちよつとお藏きなされませ。（ト切首を持つて立ち掛る。）
深雪 あもし、そんなものは藏くには及ばぬから、早く持つて歸つておくんなんし。
お才 それ程おいやでござりますなら、直に持つて歸りますが、然したゞは歸られませぬ。お禮をお貰ひ申したうござります。
深雪 あい、たゞはお返し申しますまい、少しばかりでありんすが、是れを取つておくんなんし。

ト煙草箱の引出しから、金を出し鼻紙へ包み出す、お才取つて、
お才　これは有難うござります。（ト紙を開き思入あつて、）おいらん、たつた三兩でござりますか。
深雪　それぢやあ少なうざますか。
お才　左樣でござります、首代は昔から七兩二分と極つて居りますが、世間に幾らもあるもので又めつたに得難い品物、ちと三兩ではお安いかと存じます。（ト禮三思入あつて、）
禮三　その又得難い生首を、どこから持つて來なすつた。
お才　はい、さる所から切つて參りました。
お才　おいらんからのお賴みゆゑ、女の身にて大膽な、人を殺して切つた首。
禮三　や。
深雪　えゝ。
お才　これが知れねば身の仕合せ、もしまた知れゝば此首と共にころりと落ちる首、僅か二兩や三兩の金にはどうも代へられませぬ。
禮三　成程さういふ譯ならば、これが二兩や三兩の金ではお前も歸られまい、して其首の禮といふのは何程取らうと言ひなさるのだ。

お才　はい、もう引け過ぎにおよる邪魔、長い短い申しませぬから、百兩お貰ひ申しませう。

禮三　すりや、その首の禮に百兩、お前が取らうと言ひなさるのか。

お才　何とお安いものでござりませうね。

深雪　何でお安いものでござりませう。

お才　それは賣人と買人だから、高いと思ひなされうが、おいらんのお賴みゆゑ、人を殺して來ましたのだ、命がけゆゑ百兩ぢやあお安いものと存じます。もし一服お借り申しませう。

トいふ。禮三煙草箱の引出しを渡す。お才煙草を呑み居る。下手よりお爪、友平、小助出出り、

小助　もしお呪禁屋さん、ちよつと來ておくんなせえ。

お才　はい、何の御用か知らないが、わたしやおいらんに、用があるゆゑ。

小助　其の樣子も知つて居るから、まあこつちへ來なせえといふに。

お才　用があるなら、爰でお言ひな。

小助　いゝや、爰ぢやあ分らねえ、ちよつと會所へ來て下せえ。

お才　何でわたしを、會所とやらへ。

お爪　强請だから、連れて行くのだ。

お才　なに、強請とは、誰の事だえ。

小助　誰でもねえ、うぬが事だ。

お才　何でわたしが、強請だえ。

小助　どこから持つて來やあがつたか延喜生業の遊女屋へ、何でこんな物を持つて來やあがつた。

友平　お呪禁ならお定まり十二銅か當百一枚、百兩くれとはどの口から、そんな事をぬかしやあがる。強請も強請大ゆすりだ。

お才　もし、強請とは何が強請だえ。（ト合方になり）さつき然も見世先で、お前方も知つて居たらう、あのおいらんが頭痛の呪禁をしてくれろと言ひなさるから、仕度くもねえ殺生して此首を切つて來たのだ。露顯をすりやあ命づく、ちつと相場は高からうが此節安いものはねえ、默つて百兩出しなせえ、それともいやだと言ひなさりやあ、此おいらんを抱き込んで、闇い所へ行きませうが今三浦屋で一二のおいらん、百や二百で玉なしにしてしまつちやあ詰るめえぜ。

小助　てもまあ太え事ばかり、地藏さまの有難いお呪禁と思ひの外、定めて何の某といふ肩書のある女だな。

お才　そりやあおめえのお察し通り、地藏さまの御夢相と被布ごしらへも頭巾を脱ぎやあ、（トお才頭巾

を取ると、毬栗の延びし鬘、被布を脱ぎ〕いがぐり天窓の坊主ッけえり、毛の延びるうち旅を掛け、熊野比丘尼と姿を替へ哀れな地藏の話しから、强請騙りや筒持たせ、惡事が募つて淨玻璃の鏡や見る目嗅ぐ鼻に、此身にあぶねえ劍の山のがれて賽の河原から、地藏菩薩の御夢相にて四百四病のお呪禁、八百餘町や谷七鄕喰詰めものゝ船玉お才、わつちが船に乘つたが因果、おいらんお前が出來ねえなら、其の旦那から貰ひたい、器用に百兩おくんなせえ。

ト、づうづうしき思入、友平係へかれし思入にて、

友平　これこれ、そりやあ何をいふのだ、そんな凄味のいやがらせは、算盤玉で飯を喰ふ堅氣な所へ行つて言へ、奥州筋で大盡の息子と思つて强請るのか、そりやあ大きな目違へ、おらが旦那も。

ト言ひ掛けるを、

禮三　あゝこれ、何を無駄なことを言ふのだ。
友平　それでもあんまり江戸馬鹿に、旦那をこけにしやすから、默つて聞いちやあ居られねえ。
禮三　はて、おぬしが知つた事ぢやあねえ、金せえ出せば濟むことだ、口出しせずと默つて居やれさ。
友平　それだといつて、あんまり人を。
禮三　はておれがいゝと言つたらば、いゝにしておくがいゝ。（ト是れにて友平控へる。お才思入あつて）

お才　それぢやあ旦那、おめえさんからわたしに、百兩おくんなさるか。
禮三　むゝ、居合せた此のおれが不承、望みの通り、それ百兩。
　　ト百兩包みを胴卷より出し、投げてやる。お才取り上げ、
お才　流石は田舍育ちでも、大盡だけに氣前がいゝ、百兩といつたら半金と、思ひの外小判で百兩、御遠慮なしにお貰ひ申します。（トお才金包みを財布へ入れる。）
深雪　あもし、あれをお前に出させては。
禮三　はて、おぬしの難儀を見て居られようか。
お才　ほんに男といひ鎌倉勝りな旦那さま、是れぢやあおいらんが惚れる筈、もう十年も年が若いと、わつちも振込んで行くけれど。
禮三　えゝ、無駄な胡麻をすらずとも、金を取つたら早く行きねえ。
お才　はい、長居をすれば襤褸が出勝ち、それぢやあお暇いたしませう。
　　トお才首をおいて行き掛けるを、
お爪　あ、これ／＼此首を持つて行かねえのか。
お才　お金をお貰ひ申したから、其首はおいて行きませう。

お爪　それを置いて行かれてなるものか。
小助　きり〳〵持つて行かつしやい。
お才　邪魔なら持つて行きませう。（ト首を提げ）左樣なら旦那、大きに有難うござります。
禮三　さうしてこなたは、是れから何處へ。
お才　あい、これからわつちやあ片瀨の方へ歸りやす。
禮三　むゝ、もう今に八ツだらうぜ。
お才　更けねえうちに。
小助　えゝ、きり〳〵と歸らぬか。
お才　えゝやかましい、今歸るのだ。もし、おいらん又お頭痛なら參りますよ。
ト唄になり、お才思入あつて、風呂敷包みを提げ花道へはひろ。友平禮三うなづき思入あつて、
禮三　はて、人は見掛けに寄らぬものだ、今の女が强請とは、神佛でも御存じあるめえ。
深雪　ほんにわたしが頭痛をば、頼んだばかりで今のお金を。
禮三　なに百や二百の端た金、おぬしに遣らうと持つて來たのだ、其心配には及ばねえ。
深雪　さういふ事なら、よいけれど。

禮三　然しおぬしの小遣ひが、いや、又其うち持つて來よう。
お爪　詰らぬ奴が舞ひこんで、
小助　もうはや、八ツを打ちました。
深雪　ちつとも早く、お休みなんし。
禮三　おゝ、みんなも是れから。
小助　一寐入り遣りませう。
お爪　更けたせゐか、寒くなつた。

ト合方になり、お爪小助下手へはひる。時の鐘、誂への合方になり、禮三思入あつて、

禮三　おいらん、帶を出してくんな。
深雪　何處へ行かつしやるのだえ。
禮三　ちよつと仲の町まで行つて來にやあならねえ。
深雪　いゝえ、ぬしやあ遣られませぬよ。
禮三　これさ、ちよつと行つて來にやあならねえ、惡留めせずと出してくんな。
深雪　出せなら出してもおげませうが、仲の町ぢやあござんすまい、今の強請の跡追つかけ行かしやん

すのでござんせうね。

禮三 むゝ、どうしてそれを。

深雪 末はお前の女房になる氣で疾から約束して、亭主と思ふお前の心、何ぼわたしが間抜けでも少しは察して居りますのさ。

禮三 さう推量の上からは、何を隱さう今遣つた、あの百兩の封金は、通用しねえ極印金だ。

深雪 むゝ、通用しねえ其の金を、どこから盜んで來なさんしたのだ。

禮三 何と。

深雪 堅氣な金ではござんすまいね。

禮三 それぢやあおぬしは、疾からそれを。

深雪 知らなくつてどうするものかね。

禮三 流石はおいらん目水晶、さう知られたら隱しやあしねえ、如何にもおらあ泥坊だ。

ト此時上手障子を明け、數馬之助花月これを聞き、えゝとびつくり思入、時の鐘凄味の合方になり、

頭巾を脫ぎやあもう爰へ、二度と來られぬおれが身の上、おぬしの性根がさう据りやあ、今更未練に隱しやあしねえ、奧州筋で大盡の息子といつたも有りやうは、積る惡事の兇狀持ち、小狐

禮三といふおらあ盜人、斯うしらばけに打ちまけたら、よもや女房になる氣はあるめえ。

深雪　何のいやならお前をば、今日までわたしが呼ぶものか、初會の晩に泥坊と知つて心底惚れたのさ。

禮三　それぢやあおぬしやあ盜人に、愛憎もつかさず末始終。

深雪　鬼の女房に氣まぐれもの。

禮三　人の笑ひになるとても、

深雪　泣きをするなら一緒にする氣、

禮三　三尺高い木の空か、

深雪　野末の露と消えるとも、

禮三　濡れぬ先きこそ露をも厭へ、

深雪　破れかぶれの蓮の座に、

禮三　はて物好きな女だなあ。（ト此內數馬之助花月、盜人の金を借りしかといふ思入あつて、障子を明け、）

數馬　扨は八重垣、

花月　禮三さんは。

禮三　や、おいらん帶を出してくんな。

ト顔見合せる、數馬之助障子をぴつしやりしめる。此時下手より小助、△○□鉢卷尻端折りにて用心棒を持ち出で、

小助　樣子は聞いた、

四人　禮三め、覺悟。（ト棒で打つてかゝる、禮三ちよつと立廻り、深雪帶を出す、禮三しめながら）

禮三　そんなら深雪、當分廓へは、

深雪　あゝ此始末では。

禮三　來られぬわえ。

四人　何を。

ト早めたる合方ドロ〳〵になり、四人棒にて掛る、禮三印を結ぶと、舞臺一面の芒原の道具幕を振り冠せ、狐火を大分出す。

やゝ、これは。

トびつくりする間に、禮三當てる、四人うんと立ちすくみになり、禮三花道へ行く。

禮三　そんなら深雪、達者で居やれ。

トドロ〳〵にて、禮三すつぽんへ消える。これと一緒に四人かへり、これにて道具幕を切つて落し、

元の道具になる。

深雪　ても、恐ろしい。(ト火鉢のほこり立つ思入、これを木の頭、)塵埃だねえ。

ト紙にて炭をあふぐ思入にてよろしく、

ひやうし　幕

トツナギにて、直に引返す。

(八町縄手の場)——本舞臺後ろ黒幕、正面大樹の榊、向う藪疊、日覆より同じく釣枝、總て大磯八町縄手の體、時の鐘にて幕明く。と上下より歸り駕籠の駕舁兩人、夜番の火の廻り、弓張提灯割竹を持ち出來り、

火番　火のまはり〳〵。

○　かうへらぼうに寒くなつたぢやあねえか。

△　今八ッを打つたから、しん〳〵と冷えらあ。

火番　かご屋さん、寒くなつたね。

○　お前も寒いに御苦勞だね。

火番　もし今聞けば八ツを打つたさうだが、木茅も睡る丑滿で氣味が悪い、今通つて來なすつた所に何もなかつたかね。

○　いえ、何もござりません。

火番　それぢやあ廻つた積りで歸つて寐ませう。

○　それとも何かあるめえものでもねえから、廻つて來なさりやあいゝ。

火番　何かあつて堪るものか、そんな事を言はれると、猶々廻る氣がねえ。

△　然し外と違つて、此土手なざァ落し物がありませうね。

火番　そりやあ大有りさ、五十や百にならねえことはねえ。

○　棒組、今この先きの下り口に、ぴかりと光つたものは金物だぜ。

△　何でも、ありやあ紙入か、煙草入だ。

火番　そんな物が落してあつたかえ。

○　拾ひ物をすると損をするといふから、わつちらは見のがして來やした。

火番　そいつは打捨つてはおけねえ、落し物と聞いちやあ廻つて來ようか。

○　誰ぞ人の拾はぬうち、早く行つて拾ひなせえ。

火番　さうしませう〳〵、火の廻り〳〵。

△　いや慾張つた奴だ、何が落ちてゐるものか。

○　さう言つて廻らしたのだ。

△　お蔭で滅法寒くなつた。

○　早く歸つて一あたりあつたまらう。

ト時の鐘にて、兩人上手へはひる。時の鐘嚴しく、新内の前彈きの合方になり、以前のお才酒に醉ひたる思入にて、風呂敷包みを手拭にてかつぎ、跡より友平頰冠り、尻端折りにて附いて出來り、お才花道にて、

お才　宵の雨が風に替り、べらぼうに寒くなつたから、しやもで一杯やつたせゐか寒くはなし、あゝいゝ心持だなあ。（ト友平側へ寄り、刀を拔きかける、お才振り返り、）おや、今光つたのは。（ト友平下に居て隱れる。）人魂かしらぬ。（トまた拔き立ちかけるをお才振返りきツと見る、是れにて友平跡へ取つて返す）あの野郎はさつきから、跡になり先きになり、何だかきざな奴だが、おれの懷を覘つて來たのか大べらぼうめ。（ト言ひながら舞臺へ來り、）いや、べらぼうといやあ、地藏谷で拾つて來た此首を後生大事に持つて居たなあ、大べらぼうだ、どれ此川へ水葬としようか、やれ、南無阿彌陀佛。

ト首を川へ投り込む、どんと水の音をキッカケに、下手藪疊を押分け、以前の禮三尻端折り一本差しにて、半身出し窺ひ居る、お才この物音にぎつくりなし、行き掛るを、

禮三　あもし、ちよつと待つておくんなせえ。

お才　待てとは、わたしかえ。

禮三　あい、お前さ。

お才　道でも聞きなさるのかえ。

禮三　あい、御夢相の地藏さまは、どつちの方へ參ります。

お才　え、さういふ聲は。

禮三　深雪の客の田舍者さ。（トすかし見る、知らせに附き月出る。）

お才　ほんにお前はさつきの息子、何で跡を追つかけて來たのだ。

禮三　急に頭痛が起つたから、呪禁をして貰ひたさに、態々跡を附けさせ、わしが自身に來ましたのさ。

お才　あゝそりやあ惜しい事をしたが、其の頭痛をまじなふ首を、たつた今川へ流した。

禮三　いや、其の首は望みでねえ、わしが頭痛の呪禁にやあ、こなたの首を貰ひたい。

お才　そりやあお安い御用だが、もう二三十年上げにくい。おつなものを望みなさるが、跡から態々來

なすつたから、大方さつきの百兩を、歸してくれといふかと思つた。
禮三　なに、遣つた物を返せなどゝ未練な事をいふものか、まして遣へぬあの小判、石ころも同じことだ。
お才　なに、あの金が石ころとは。
禮三　さつき渡したあの金は、お觸のあつた足利小判、一兩づゝに三ツ引の極印ゆゑに使へぬ金。
お才　おゝ、そんならこりやあ足利小判で、遣ふことは出來ねえか。
禮三　遣へぬことはあるめえが、それを遣やあ首が飛ぶ。
お才　むゝ。
禮三　それと知らずに持つて來たのは、流石は女のあさはか、そんな事ぢやあ盜みは出來ねえ。
お才　扨は田舍大盡の、息子と化けしこなたも正しく。
禮三　やつぱりおぬしと一つ穴小狐禮三といふ者だ、人の入込む遊女屋ゆゑ壁に耳ある隣りを憚り、默つて百兩渡したは廓を離れて殺す氣だ、遣へぬ金の百兩で命を買つた船玉お才、爰で出逢ふが一六勝負、四の五の言はず覺悟しろ。
お才　素人ならば知らぬこと、同じ仲間と聞くからは入られねえ首でも遣られねえ、餓鬼の折から此年ま

で積る惡事の帳消しに、お上へあげる大事の首、百や二百の目腐れ金で賣買にやあしねえから、
又出直して買ひに來ねえ。

禮三　おゝ、賣買にせざあ買ひやすめえ、持つて生れた盜人根性、人の物は我が物とたゞ取るからさう思へ。

お才　女でこそあれ日本國中乘り廻して來た船玉お才、取らるゝものなら取つて見ねえ。

禮三　おゝ、取らねえでおくものか。

お才　何をしやらくせい。

ト禪の勤め合方になり、禮三刀を拔き掛けるをお才留め、兩人立廻り、爰へ花道より四ツ手駕籠一挺駕舁かつぎ來り、此中へはひり、わツといつて眞中へ駕籠を置き、逃げてはひる。禮三刀を拔いて切つてかゝる。お才も懷から匕首を出し立廻り、よき程に駕籠の垂をあげる。內に駄右衞門好みの鬘着流し、一本差し、小搔卷を引ツかけ駕籠に乘り居る、此體を見て思入あつて駕籠より出で、搔卷を脫ぎ、此中へはひり、

駄右　二人とも待つた〳〵。

ト言ひながら双方を留める立廻り、駄右衞門兩人の小手を打つ、是れにて手のしびれる思入にて刃物

を落すと、駄右衛門手早く刃物を取りあげ、

え丶待てといつたら、待つて下せえ。

ト双方を留めてきつと見得。兩人駄右衛門の手並に恐れし思入。

禮三　意趣あつて二人とも、命を賭けての果し合。

お才　顔も知らざるこなさんが、何ゆゑ留め立て。

兩人　さつしやるのだ。（ト是れにて兩人駄右衛門と思入あつて、）

駄右　おゝ、まだ近附きにやあならねえが、顔は疾から知つて居る。（ト兩人駄右衛門を見て、）

禮三　成程、さういふこなさんは。

お才　はて、何處やらで逢つた顔。

駄右　忘れたか、しかも所は伊豆相模の國界の足柄越。

兩人　やゝ、何と。（ト肥前節模様の合方になり、）

駄右　時しも冬の初めにて、里は小春に春めけど、所かはれば信濃路に、まさる深山の雪の暮。

禮三　軒端傾く一ツ家の火影たよりて一夜さの、宿り求むる尼法師、

お才　行方いづくと白妙の雪の振袖草束ね、主人と見えしは二八の娘。

駄右 野寺の鐘も小夜更けて鳴子に結ぶ寶物、それへ心も夜るの友、
禮三 慾には迷ふ狐罠、どつさり響く筒音に雪も消えゆく芒原、
お才 妖狐の術にぢつとして、身の毛もよだちさし昇る、月は最中の滿月に、
駄右 照りそふ蔦の座禪堂、面壁九年の禪家の祖師達磨大師も蘆の葉で、
禮三 浮世を渡る白浪や、緑の林夜働き、
お才 しばし爭ふ其うちに、又も櫻の花盛り、
駄右 月雪花を一時に、見せしに全く妖狐の仕業。
禮三 化す姿も崩れ壁、達磨と見えしはこなたであつたか。
お才 佛も鬼に娘から、男出立ちは正しくこなた。
駄右 心に針の毬栗の熊野比丘尼は慥におぬし、
禮三 取りも直さず三人は、雪に緣ある三ツ巴、
お才 廻り〳〵て又爰で、
駄右 逢ふも盡きせぬ月の夜や、
禮三 梢まばゆき花ならで、

お才　月雪花の顏見世に、
駄右　替つた趣向の、
三人　出合ぢやなあ。（ト三人よろしく思入あつて、）
駄右　さあ見ず知らずの者でもねえ、二人が捨てる命をば、おれに預けてくんなせえ。
禮三　斯う見たところが二人より、勝つたこなたの魂に。
お才　其名を何の某と名乘つたならば、
兩人　預けませう。
駄右　問はれて名乘るも鳴呼がましいが、おれも他生の遠州生れ、十歲の年から袂錢盜み習つて二十を越し夜盜かつさき屋尻切り、男の大厄二十五の曉までと思つたも、盜みはすれど非道はせず、貧者を救ふお蔭にか三十四十無難に越え、五十三次宿々で義賊と噂も高島屋、六十餘州に隱れのねえ、とさあ、小さな形で大きな事を、まき出す帆綱の七十五里、遠州灘の沖越えし、日本駄右衛門といふ白浪だ。
禮三　ムウ、扨は噂に聞き及びし、
お才　駄右衛門どので、

兩人　あつたるか。
駄右　して又おぬしら二人は。（ト端唄我ものの合方になり、）
禮三　名乘甲斐なき甲斐の國盜みに緣ある猿橋在、餓鬼の折から手が長く、人の物はわが物と慾には赤間法印が忘れ筐の狐を遣ひ、積る惡事の鳥居數、この身の果ては紙幟、額に記せし馬の上、どうで始終は高ものか高間が原で加持祈禱、人を惑はす神主の悴、稻荷小僧といはれたる化し習ひの小狐禮三。
お才　其法印か方圓の器に隨ふ人心、生れは紀州の和歌の浦廻船問屋の娘だが、十四の年に男と逃げ貧の盜みが元となり、强請かたりや筒持せ、旣に命も月の輪に熊野比丘尼と姿を替へ、旅を稼ぎの船玉お才。
駄右　むゝ、其名はかねて聞き及ぶ船玉お才に小狐禮三、二人がこの場の果し合は、深雪が頭痛の呪禁に首でゆすつた百兩が、遺恨の種であらうがな。
禮三　思ひがけねえ其事を。
お才　どうしてお前は。
兩人　其譯を。

駄右　おれも昨夜は三浦屋へ姿を替へて初會の客、しかも深雪が姉女郎、越路が部屋で聞いて居た。
禮三　如何にも、それが遺恨にて。
お才　此場で二人が、
兩人　命の取り遣り。
駄右　さあ、それをさせめえばつかりに、留めにはひつた野天の勝負、いらざるお世話と思はうが見て居られぬがおれが道樂、禮三が狐に緣あるお才、跡を追目の盆の上、一六勝負の首がけもどつちに手燒があつても悪い、爰は一番すつかりと岡へ賣る氣で此おれに、四の五のなしに預けてくりやれ、其替りにやアいざこざの其附錢は、これお才、强請つた金を爰へ出しやれ。
お才　そんなら是れを。（ト百兩包みを出し、）
駄右　此百兩は極印金、世間へ通用せぬからは、貴い金も石瓦。（ト後の川へ打ちこみ、）遺恨の元を水にして、二人へおれが挨拶は、それ。（ト百兩包みを二ッ出し左右へ出す、兩人取つて、）
兩人　これは。
駄右　禮三が强請とられた百兩、お才がゆすり取つたる百兩、双方地切れになつたらば、遺恨殘さず笑つて下せえ。（ト双方顏見合せ、）

禮三　流石は日本駄右衛門どの。

お才　驚き入つたる此場の捌き。

禮三　昨日今日まで名に聞けど、高が盗人何程の、事があらうと思つたも、

お才　聞くと見るとは大きな違ひ、所詮及ばぬ根性に。わたしも手下にして下さんせ。

禮三　おゝ、此の禮三も今日からは、こなたの手下になる心。

お才　頭とお前を、

兩人　頼みます。

駄右　ムウ、そんなら二人は遺恨も晴れ、おれが手下になりてえとか。

禮三　何の役にも立つまいが。

お才　仲間へ入れて下さんせ。

駄右　さういふ二人が心なら、手下と言はず兄弟分、先づ年嵩におれが兄、次はお才に禮三は弟。

禮三　これから二人が心を合せ、

お才　片腕となる其證據は、

禮三　足柄越で手に入つた、世にも稀なる胡蝶の香合、

お才　其時わたしも手に入つた、千鳥と銘あるこの篳篥。

禮三　これを頭へ讓るのが、

お才　貰つた金の、

兩人　恩返し。

駄右　志しの此の二品、慥に貰つた忝けない。

禮三　これでけふから兄弟の、

お才　緣を結びしわたしら二人、

駄右　然も引手は蝶千鳥、こいつァ春の種になるわえ。（ト爰へ非人二人窺び寄つて、）

非人　その二品を。

ト取りにかゝるを、突廻して投げ退け、また立廻るを禮三お才引附ける、此の時鷄笛。

駄右　今啼く鷄は、

お才　最早七ツか、

禮三　明けねえうちに。（ト非人兩人何をと刎ね返すを、兩人襟上を取つて一腰を拔き、切らうとするを、）

駄右　あこれ、益ねえ殺生、止しにしやれ。（ト言ひながら脱捨てし搔卷を取上げる、兩人むゝと白刃を口に啣

へ非人を投げのける、駄右衛門は掻巻を着るを一時に木の頭。）寒くなつたなあ。

ト掻巻の襟を持つて、寒いといふ思入。兩人は白刃を鞘へ納める。此の模樣よろしく、寺鐘、鷄笛にて、

ひやうし幕

四幕目　瀨田の里藤棚の場

〔役名――小狐禮三、下部弓平、法華修行者妙心坊、藪醫山井養仙、飛脚韋駄天飛助、神道者高間鈴成、惣嫁おくり、同おみち、同お八重、茶屋の亭主仁助、庄屋與九四郎、番太、幸兵衛妻お絹等〕

（勢田の里藤棚の場）――本舞臺三間の間、正面誂への藤棚、藤の花の盛り、此の上手に注連を張りたる楠の大樹、菱垣にて圍ひ、神木の楠と記したる高札、是れへも藤棚より藤の蔓からみ花盛りの模樣、此側に葭簀張りの出茶屋、燒火鉢にて團子を燒いて居る、下手に蓆を下げたる夜鷹小屋、床几を二脚並べ、總て勢田の里藤棚の體。爰に○△□◎の仕出し四人町人、百姓のこしらへにて、床几に掛り、茶を呑んで居る。此の見得、辻打ち在鄉唄にて、幕明く。

仁助　へい、どなたもお團子の燒立てが出來ましてござります。

○いや、これは有難い、近頃は附燒の大團子が流行だが、又この藤棚の團子は格別だの。
△それに爰の家では、醬油のよいのを遣ふによつて、なか〱に喰へますの。
□さうとも〱、爰の見世と大橋の醬油は龜甲萬だ、何でも代物さへ良くすれば、商ひは繁昌します。
◎商ひといへば、この藤の盛り、長いのは二尺三尺、それに又あの神木。
○楠へ藤のからんだ所は、いつまで見ても飽きないではないかの。
△さうぢや〱、あの鹽梅では傳はる所さへあれば、どこまで藤の花が登るか、止め途があるまいぞや。
◎此やうに登るのも、藤の花も室町さまにあやかつて、此樣に登る事ぢやと見えるわいの。
□さうぢや〱、是れが三國一のふぢの花といふものぢや、又室町樣には誰であらうと、楯をつくものがないてや、えらい事ではないか。
○これ〱皆も聞いたであらうが、元この瀨田は近江の領主、佐々木義鄉さまの城址で、尊氏さまに攻落されし其時分からある藤の花、よく年を經て枯れぬものぢやな。
△それにまたあの神木の楠は、えらい年經る楠ぢやといふことぢや、いつぞや室町さまが北國攻め

の其時に此楠へ祈誓を掛け、首尾よく戰に勝つたによつて、それから後はあの通り菱垣を結ひ廻し、さはる事は扨おいて、指でも附けることはならぬといふ事ぢや。なう御亭主、本當の事かいの。

仁助　それは誠の事でござりまする、それゆゑに此の高札、もし背いた者あらば、きつと曲事を申し附けると、嚴しい掟でござりまする。

◎　何であらうと室町さまに、肩を並べるものはないとは、えらい事ではないかの。

□　これ〳〵、そのえらいといふので思ひ出したが、これ茶店の此の藤棚へ、えらい器量の辻君が出るではござらぬか。

仁助　出ますとも〳〵、役者で例へて言はうなら、音羽屋の太夫を絹篩でふるひあげ、唐三盆の衣なかけたといふ、代物でござりまする。

皆々　いよ〳〵、本當でござるの。

仁助　ほんの噓のと爭ふよりは、爰でゆつくり日暮れを待つて御覽じませ、話しのやうなものぢやあござりませぬ、實にびつくりといふ代物でござりまする。此の諸式の高いのに、あゝいふ安い賣物が出來るとは、實に御褒美ものでござりまする。

○　そのやうに安い代物と聞いては、何事をおいても買ひ置きをしておかねばならぬ。
△　これ、そんなに乘込んで、よい器量の疵物であらうぞや。
仁助　どうして〳〵、卯の毛で突いた程も、疵などはござりませぬ。
△　いや〳〵、さうは言はれぬ、大方その女は心中の仕損ひかも知れぬぞや。
○　そりや又何で。
△　はて夜鷹のお勤め、四十四文ではないかといふ事ぢや。
仁助　何を言はつしやります。
皆　はゝゝゝゝ。
◎　ときに、一遍歸つて又出直しとしようぢやないか。
△　成程それがよからうわえ。
仁助　そんなら出直しでござりますか。
◎　また晩に來ますぞや。
仁　わしも今がお客の途切れ、水でも一つ汲んでおきませう。
○　さあ〳〵、皆の衆ござらつしやれ。

皆々　さあ、行きませう。

仁助　どれ、御一緒に出掛けませう。（トやはり在郷唄にて皆々上手へはひる。是れより床の淨瑠璃り、）

〽はや暮告ぐる寺々の、鐘の響きと諸共に、下駄の齒音もさわがしく。

ト四ツ竹の合方になり、花道よりおくり、おみち、お八重みな〳〵夜鷹のこしらへにて出來り、直に舞臺へ來て、

くり　おい〳〵おみちさんや、また今夜は曇つて來たぜ、いつもと違つて晦日前だから、みゝツちく働かなくちやあならねえぜ。

みち　そりやあおめえ出た日にやあ、一本や二本の錢は四ツ前の仕事だわな。

八重　何さ、此頃ぢやあ二本の錢を取るにやあ、なか〳〵骨が折れるよ。こんなこつちやあどぶろくも手をひろげちやあ呑めやあしねえわな。

くり　又泣きごとを始めるよ、何でもものは祝ひがらだ、錢になつてもならなくつても、ほん〳〵言つて居るがいゝぢやあねえか。

みち　そんなにほん〳〵言ひたけりやあ、夜鷹を止めて切見世を稼げばいゝ。

くり　なぜ〳〵。

みち　鐵砲がいゝといふことよ。

八重　そりやあさうと、今夜はまだお絹さんは出て來ねえの。

みち　さうさの、もう來さうなものぢやあねえか。

くり　なあにさ、あの人は亭主持で、おまけに亭主が病人だといふから、こちとらのやうにおいそれとは出ちやあ來られねえよ。

八重　何にしろ一服やつたら、そろ／＼見世を張らうぢやねえか。

くり　さうしよう／＼、今夜はいゝ人の來る晩だよ。

みち　おや、越後部屋か鼻息には恐れるよ。（ト皆々捨ぜりふに摺火打を出し、烟草を呑み居る。

〽同じ寐臥の勤めには、あたら器量の花の顔、色香ふくみし品ものゝ、お絹の胸の雨催ひ。

ト花道よりお絹、肩入れのある窶しなり、夜鷹のこしらへ手拭を吹流しに冠り、安下駄を抱へ、出來り花道にて、

お絹　日和癖か、また今夜も雲足の早いこと、どうぞ雨にならねばよいがなあ。

〽傘かゝへ息せきと、藤の木陰へ歩み來る。（ト舞臺へ來り、皆々を見て、）

皆さん、大分早うござんしたなあ。

くり　おゝお絹さん、今お出でかえ、今もお前の噂をして居たが、大層今夜は、
三人　遲かつたねえ。
お絹　さいなあ、早う出ようと思うても、何やかや手一つで、ほんに遣瀬がないわいなあ。
みち　ほんにさうであらうわいなあ、お前も傘を持つてお出でだねえ。
お絹　さあ、戻りに降られると困るによつて、用心に持つて來たわいなあ。
くり　もし〳〵皆さん、するのばれない其内に、見世を出さうぢやないかえ。
八重　それがいゝ〳〵、わたしら二人はいつもの立場。
みち　わたしが座敷は此の木蔭さ。
くり　お絹さんは、藤の下。
お絹　そんなら、皆さん。
くり　しつかりと、
三人　お拵ぎよ。
〽がさつ同士もそれ〴〵に、鳩の三枝にあらねども、夜鷹の禮儀つべこべと、おのが立場へ入りにける。（トおくりおみちお八重は捨ぜりふにて、下手の小屋へはひる。跡にお絹殘り思入あつて、）

お絹　ほんに氣さくなお方ではある、辛い苦界もあのやうな機嫌でなけりや出來ぬ筈、わたしが馴れぬと思ふゆゑ、あの衆たちがやれこれと親切にいうて下さる、あゝ人に人鬼はないものぢやなあ。
ト思入。
ト折から爰へひつくりひくり、所で功者な山井養仙、お絹が顔を差しのぞき。
ト上手より養仙、慈姑天窓羽織ばつち尻端折り、一本ざしにて出來り、お絹と行違ひ顔を覗き、
養仙　そこにござるは、お絹どのぢやあござらぬか。（ト是れにてお絹びつくりして、）
お絹　はい、あなたは養仙さま。
養仙　今頃どこへござらつしやる。
お絹　あい御存じの通りぬしの病氣、どうぞ本復がいたさせたく、瀬田明神さまへ參詣をいたしましてござりまするが、連れの者がそこまで參りましたゆゑ、それで爰に待合せて居りますのでござりまする。
養仙　さうでござるか、それは奇特の事ぢやが、これお絹どのや氣の毒なはあの病氣ぢや、わしも久しい馴染のこと、どうぞ達者にして遣りたいと思うて、いろ〳〵工夫をした所が、これ聞かつしやれ、あの書物に出てあるは、凡そ千年餘になる楠の空洞の中に生じた靈芝といふて、形は松露を

見たやうなもの、其一藥を呑ますれば、あの病氣は直さま本復。

お絹　そんなら其靈草とやらを、呑ませますれば、全快をいたしますかいなあ。

養仙　それはきつと全快するが、容易には得難い品ぢや、所で聞かつしやれ、其の靈草のある木の上には、風雨烈しき時には、火が燃ゆるといふ事ぢや、然し是からは運次第、隨分大事にさつしやるがよいぞや。

お絹　はい〳〵有難う存じまする、どうか心掛けまして、只今お話しのお藥を、どうか手に入れたいものでござりまする。

養仙　さ、それも運さへあれば手に入らぬ事もあるまい、何にしろ夜に入つて女子一人は物騷な、早う戻らつしやるがよいぞや。

お絹　はい、有難うござりまする。左樣なれば養仙さま。

養仙　氣を附けて歸らつしやれ。

〽言ひ捨てゝこそ別れ行く、お絹は見送り獨言。

トお絹は養仙を見送り思入あつて、合方になり、

お絹　あゝ世の盛衰とはいひながらおいとしいのは若殿樣、佞人どもの仕業にて香合紛失なせしより、

御浪々の憂き艱難、わたしら二人の命を助けて貰うた御恩報じ、どうぞ金を都合して御難儀救うてあげたいと、思へど大枚百兩の金、其の日の煙りも立て兼るしがない暮しで其金が何の出來やう筈はなし、とあつて最前届きたる此の手紙の趣きを、幸兵衞どのへ見せたなら、猶々病に障り勝ち、使ひの者にはわたし一人で受合うてはやつたれど、若し調達ならぬ其時は、數馬さまの御身の上、幾らあくせく思うても出來にくいは金の才覺、あゝ辛氣な事ではあるわいなあ。

〽彳む折柄ちん／＼と、鈴打ち鳴らし妙法蓮華經、陀羅尼題目唱へ打ち過ぎる、お絹は法衣の袖に縋り。

ト此うち上手より妙心、坊主鬘麻の茶の法衣、法華の修行者のこしらへにて、經をよみながら出で來る、お絹恥かしき思入にて袖に縋り、

モウシ／＼、お遊びなされて下さりませ。

〽お絹が顏を差しのぞき。

妙心　さて見事々々、はゝあ、かの噂のある惣嫁どのぢやな。

お絹　どうぞお遊びなされて下さりませ。

妙心　あゝ勿體ない、女犯戒を破つて遊べとのたまふは、あゝ嬉しいなあ。あ、妙法蓮華經は精進だが

遊ばうかの。

お絹　どうぞ遊んで下されませ。

妙心　どりや卽身成佛といたさうか。

〽人目忍ぶの木下蔭、小屋の内へと連れて行く。

ト お絹は妙心の手を取り、小屋の内へはひる。此時以前の仁助手桶を提げ出來り、

仁助　あゝ、こりやもうとつぷりと、日が暮れてしまうた、今夜は夜業を休んで講釋でも聞くと仕よう

どりやそろ〳〵片附けようか。

ト 捨ゼリフにて見世を片附ける。合方になり、上手より袴羽織庄屋のこしらへにて、與九四郎出來り

仁助を見て、

與九　これ〳〵仁助どの、人出入りの多いこなたの見世、嚴しいお觸のお尋ね者ぢや、隨分と氣を附け

ねばならぬぞや。

仁助　はい〳〵畏りましてござりますが、そりやあいつたい、何のお尋ね者でござりまする。

與九　されば貴樣も噂を聞いたであらうが、盜賊の親玉日本駄右衞門、この近鄕へ入込んだとあつて、

お代官樣から、これ、見やしやれ。（ト繪姿を出して、）此の繪姿を廻して、嚴しい御詮議、とつく

り人相を見ておかつしやれ。（ト仁助に給姿を渡す、仁助開き見て、）

仁助 庄屋さま、こりや立派なよい男でござりますな。何ぢや、黒い着るものに紋は橘、年の頃は三十四五、何でも強さうな顔附でござりますな。

與九 いやも強いとも〳〵、なか〳〵甘口なものには、手に入らぬといふ事ぢや。

仁助 こりやさうでござりませう。もし〳〵庄屋さま、此の給姿は誰やらに似て居りまするわい。おゝそれ〳〵、東村の幸兵衛ぢや、幸兵衛どのに似て居るではござらぬか。

與九 さうぢやてや、似たといはうか瓜二ツ、あの幸兵衛も長う煩らつてぢやが、是れで運が知れたわい。盗人に似て居るとは、いやな事ではないかの。

仁助 もし、いやな事には此邊の大家の家へは、押込みがはひるとの事、こちらもどうやらけんのんゆゑ、見世をしまひませう。

與九 さうさつしやれ〳〵、何でも用心に如くはない、わしもかゝの金箱へ、しつかり錠を下さにやならねえわえ。

仁助 又庄屋さまのおどけばつかり、左様なら庄屋さま、一足お先へ參りませう。

與九 お觸のことを忘れまいぞや。

仁助　呑込んで居ります。

〽茶屋の亭主は息せきと、手桶引提げ立ち歸る。

ト與九四郎殘り、仁助は下手へはひる。與九四郎繪姿を懷へ入れ、

與九　どれ、隣り村を觸れて來ようか。（ト與九四郎行きにかゝる。）

〽思ひがけなく後より、深編笠の浪人姿、ずつと寄りてそッ首摑み、ぐつと一しめ絶え入る

庄屋、〽死骸をあたりへ蹈み飛ばし、樣子窺ひ懷中の、〽繪姿取り出し、よく〲見て。

ト與九四郎繪姿を懷中して行きにかゝる。此の時上手桶の蔭より、禮三深編笠着附大小にて出來り、思入あつて與九四郎の後より手をかけ首をしめる。與九四郎アッと苦しみ落入る。禮三きつと見得。本釣鐘を打込み、與九四郎の懷中より、繪姿を引出し見て、

禮三　此繪姿が東村の幸兵衞に似たりとは、はて合點の行かぬ、むゝ。

〽四邊へ目配り繪姿を、懷中なして塵うち拂ひ、悠々として行き過ぎる。

ト禮三につたりと思入あつて、繪姿を懷中なし花道へはひる。跡禪の勤めになり、下手より仁助飛脚のこしらへ、狀箱を首に掛け、定飛脚と記せし提灯と笠を持ち出來り、

飛助　あゝ跡の立場で一杯氣を附けて居たら、大分暇取つたわえ、ちつと急がずばなるまい。

ト行き過ぎるを、此時小屋の内より以前のおくり出來り、

くり　もし飛脚さんえ、遊んで行つておくれいなあ。

飛助　何だ遊んでくれろ、どれ〳〵。（ト提灯にて顔を見て、）いや塗つたりな〳〵、此のくらゐ塗り附けるには饂飩粉がかれこれ三十振袖四十島田、五十か百のお勤めで、扨はわれらを迷はする所存だな。

くり　何ぢやいなあ、じやら〳〵言はずと、遊んでおくれよ。

飛助　おつと待つたり、急用、なか〳〵お山どころではないわい。

くり　はて、よいわいなあ、ついちよこ〳〵と。

飛助　えゝ、さうしては居られぬわえ。

くり　えゝも、ちよいと一切りお出でといふに。

ト捨ゼリフにておくり飛助を小屋の内へ引張り込む。跡さんげ〳〵になり、花道より鈴成神道者のこしらへにて、鈴を振りながら出來り、

鈴成　かんじんしんりんりごんだけん、拂ひたまへ清めたまへ。

ト花道にて捨ゼリフにて舞臺へ來り、爰へ以前のおみち、お八重の夜鷹出來り、

みち　もし、町人さん。

兩人　遊んでおくれ〱。（ト袖を引ッ張る、鈴成その手を拂ひ、）

鈴成　拂ひたまへ〱。

兩人　えゝも、遊んでおくれいなあ。（トお八重鈴成の顏を見て、）

八重　おや、お前は鈴成さんかえ、えゝ素通りしようとは、そりや胴慾だぞえ。

みち　これ鈴成さん、此間もお定まり三ツの上へもう二ツ負けてあげたをお忘れかえ。

八重　これおみちさん、鈴成さんはお前の自由にはならぬぞえ、わたしが屋敷勤めの其折に、ふつと見染めて忍び逢ひ、それから屋敷を駈落して、五十三次宿々でほんの旅寐の假枕、それから今では夜鷹の勤め、わたしといふ深い許嫁がござんすぞえ。

みち　いえ〱お八重さん、お前の自由にもならぬぞえ、わたしが夜鷹に出た其晩に鈴成天窓の松茸を一口喰つた味ひに、今夜も身揚り今夜も達引き、それが嵩じてわたしや此樣に、鼻の障子が取れたわえ。これ鈴成さん、こつちへ來なさんせ。

八重　いえ〱、何であらうと鈴成さん、來なさんせ。（ト兩人して鈴成の手を取り、左右へ引張る。）

鈴成　えゝこれ〱、さうぱッ〱とされては鼻持ちがならぬ靜かにしやれ、兩人が爭ふも此の鈴成の顏が美麗鮮かゆゑ無理ではない、然し二人が爭ふより上十五日はお八重が女房、下十五日はおみ

ちが女房、これで言分があるまいがなあ。

兩人　そんなら仲善う半分わけ。

鈴成　おゝ幸ひ今途中にて求めた、爰に二ツの饅頭あり、是れを渡すがわが誓紙。

ト鈴成懐中より饅頭を出し兩人へ渡す。

兩人　この饅頭が誓紙とはえ。

鈴成　外のは決して喰はぬといふ、是れが閨の誓紙ぢやわえ。

みち　皮も身もある饅頭の、

八重　二つに割れし戀の中。

みち　また元々へしつくりと、

八重　あんと時節があるならば、

みち　其時本妻、

八重　妾とも、

鈴成　又鼻かけともならぬやう。そんならかさ。

兩人　えゝ、

鈴成　かさねて逢はう。（ト唄になり、鈴成上手へはひる。）
みち　お八重さん、今夜は雨が降りさうになつて來たから、もう歸らうぢやあないかえ。
八重　あの例の立場で、鐵砲鍋で一杯やつて行かうねえ。
みち　おゝそれがいゝ〳〵。
ト是れにておみちお八重下手へはひる。直に上手の小屋より飛助逃げて出るを、おくり追つかけ出來り、
くり　これ〳〵〳〵、待つた〳〵、何處へ行くのだえ、これ何だつて喰ひ逃げをするのだえ。
飛助　こりや〳〵〳〵、必ず粗相を言ふまいぞ、盗みはせぬぞ、身共は上の急川だぞ、此の提灯が目にはひらぬか、御川なれば假橋でも船渡しでも錢を出さぬが御川の一德、貴樣が船へ乘つたりとも、御川先きなりや錢は拂はぬ、こりや〳〵女、大儀であつた。
ト言ひながら飛助逸散に下手へ走りはひる。おくり悔しき思入にて、
くり　これ飛脚め、待ちやあがれ〳〵、あの五十目掛の蠟燭で二丁程もとぼしなつて喰逃げしようとは、假令江戸まで行かうとも、跡追つかけて、おゝさうだ。（ト思入あつて下手へ逸散にはひる。）
〽引きは返さじ提灯の跡を慕うて追うて行く、傍の蔭より以前の坊主、涙片手になく〳〵も

お絹を連れて歩み出で。（ト以前の妙心、お絹の手を取りしな〳〵と出來り、合方になり、思入あつて、）

妙心　あゝさても〳〵、哀れな話しを聞きました、わしが寺を持つて居る坊主なら、一廉の合力しておまさうけれど、見やしやる通り見る影もない道心者、此間葬禮の世話して一七日が其間お經をあげた其布施が、爰に銀三匁と錢が百文、これをそなたに進ぜまする。またお布施が溜り次第持つて來て進ぜまするぞや。

ト金を渡せば押し戴き。

お絹　あゝ勿體ない、御出家に施してこそ道なるに、冥加ないお志し、有難うござりまする。

ト涙と共に手を合す。

妙心　あゝこれ〳〵、禮には及ばぬ、もう大概ならば早うしまうていなつしやれ、暗黑で怪我さつしやるなや。あゝ思へば兎角苦の世界。衆生 得入無上道速成 就佛身、南無妙法蓮華經〳〵。

ト題目太鼓の合方になり、妙心經を讀みながら花道へはひる。

トお絹は跡を見送りて、暫し萎れて居たりしが。

トお絹愁ひの思入、此間後より弓平紺の合羽、同じ脚絆、草鞋、奴のなりにて頬冠りをして出來り、

弓平　これ〳〵惣嫁、おれが買はう、まあ待て。

お絹　お遊びなら、遊んで下さんせ。

弓平　おゝ、客になつて遊ばうわえ。(ト頬冠を取る、此時知らせに附き日覆より月出る、お絹思入、

お絹　やあ、そなたはいつぞや別れたる、あの弓平。えゝ恥かしいわいなう。

へと逃げのくを、弓平わざと素知らぬ顔、

弓平　これ惣嫁、客を捨てゝ何處へ行く氣ぢや。さあ客にならう。よもやいやとは言はれまい。

お絹　これ弓平、わしや面目ないわいなう。

弓平　そりや何を言ふのぢや、おりや惣嫁に近附は持たぬわい、弓平といはるゝ覺えはないわい。

お絹　そりやあんまりな物の言ひやう、わしや幸兵衛が女房絹ぢやわいなう。

弓平　はゝゝゝ、そりや味をやられるわい、幸兵衛さまの奥さまが、惣嫁をしてたまるものかえ、わりや惣嫁ぢやわ、但し惣嫁でないと證據があるか、われが勤めは二十四文緡に通して持つて來た、さあ客になつて遊ばうわい。(ト弓平緡の二十四文を打附ける、お絹これに構はず摺寄つて、)

お絹　弓平、それ程までに此わしが憎いと思やるかいなう。

弓平　又してもく、弓平々々と隱しておくがこつちの情、人でなしのこなたに申すも馬の耳、穢らはしいが弓平が、冥加の爲に聞してやらん、これお絹さま。(トお絹の胸倉を取り、)

お絹　こりや、わしを何としやる。

弓平　おまへさまはなあ〳〵、言ふまいと思へど、堪忍袋の破れかぶれ、えゝこなたはなう。（ト合方になり）こなたのやうな性根の腐つた人に言ふも僻言なれど、いつぞや若殿數馬之助樣清水にて奉幣祈念の其砌り、寶紛失なしたるが、そは申さいでも承知なれど、それより殿には御浪々、此下郎めも御跡を慕ひ、朝な夕なの淋しいお姿、見るに附けても勿體なく、是れといふもお家をねらふ佞人共と、心はやたけに思へども、何をいふにも此の痩腕、荒木花田のお二人の御心勞はいかばかり、それに何だ、いやさ此なりはどうしたのだ、こりやあ何だな、此長い年月殿の御高恩を忘れての事だな。あゝ今が今まで祿盗人の幸兵衛どのとは露知らず、見下げ果てたる人畜だなあ。此事をちつとも早く若殿はじめ、御兩所へ申し上げん。

〽忠義に凝つたる弓平が、突つ立ち上るをお絹が引留め。（ト弓平行かうとするを、お絹留めて）

お絹　これ〳〵弓平どの、言譯ではなけれども心を鎭めて一通り、此わしが言ふことを恥かしながら聞いてたもいなう。そなたも知つて居る通り、幸兵衛どのは長の病氣に尾羽打ちからし、何を生計に仕様もなく恥しながら辻君の勤めはすれど今日までに、一度も帶紐解きはせず、ほんに世界に鬼はなく、侍を引止めて客にならうといふ時は、お主へ忠義の其爲と立通す詞詰め、出家と

見ては長々と帶は解かずにこつちから、談議を問ひの六字詰め、商人客には算盤の玉にあふ夜の水揚帳、消して言はさぬ口拍子、百姓客は律義な者、そこへ附込み年貢のはなし親をはぐゝむ手段といへば、ほんに田もやろ畑もやろと、鍬をぬかして親切な詞に縋つて合力うけ、一夜を千夜と思ひ佗び、早う夫を全快させ、大恩うけし御主人様の憂き艱難をのがさせたく、一つには寶の手掛りもあらんかと、口毎夜毎に夫婦の者が泣き暮し、涙の乾くことはござんせぬ。もし、推量して下さんせいなあ。

〽聲を忍びのしやくり泣き、道理と共に弓平も、浮む涙を押し隱し。（トよろしく思入あつて）

弓平　モウシお絹さまお許されて下さりませ、此の弓平が突詰めた根性から法外なる雜言過言、申し過せし故にこそ誠のお心聞きまして、下郎も滿足、左程貞女なあなたさまの胸倉取つた此腕やよく此口が曲りませぬ、あゝ流石玉島幸兵衞さまの奧さま程あつて、恐入りましてござります。へいへい〳〵お許されて下さりませ。

お絹　そんなら弓平どの、疑ひは晴れましたかいなう。

弓平　晴れいで何といたしませう、もう〳〵宜しうござりまする。失禮な事ではござりますれど、餘りおいとしうて、申し上げやう事もござりませぬ、かれこれいふうち夜も更けますれば、私はお別

れ申しまする。

お絹　どうぞ此事は、必ずともに幸兵衛どのに沙汰なしに。

弓平　何の言うてよいものでござりませう。（ト思入あつて、）まあ苦の世界とは言ひながら、世が世の時であるならば、絹布の夜具に身を纏ひ、夜風を厭ふ其お身が。

お絹　蓙を敷寐の草枕、體は雨露に濡れ果てゝ、涙でしぼる一ッ着も。

弓平　はぎ合せたる綿ぬきの、

お絹　薄き煙りも立てかぬる、世に捨てられし、

兩人　身の上ぢやなあ。（ト兩人ちつと思入あつて、弓平氣を替へ、）

弓平　あゝ又くり言に暫時の暇取り、あなたさまにも少しも早う。

お絹　わしも直に歸りませうわいなう。

弓平　御病人樣をお大事に、

お絹　そなたも隨分體を無事に、

弓平　へい、左樣ならばお暇申しまする。

〽別れを告げて弓平は、心殘して急ぎ行く。

ト双方よろしく思入あつて、弓平は花道へはひる。お絹跡を見送り、

お絹　忠義一途な弓平どの、まア頼もしい人ではあるわいなあ。（ト此時雨車）あゝ折の悪い、又ばら〳〵と降つて来た、大降りにならぬ内、早う行て、こちの人の悦び顔を見ようわいなあ。

ト傘をひらき、歩きかゝる。

〽用意の傘ふりかたげ、小褄引きあげ歩み行く、道の傍の叢よりくわつと光りし火の影に、はつと驚き見るうちに、一團の猛火盛んに燃えて、かしこに聚る神木に登ると見えしが、上よりもぱつと燃え立つ焰の玉、追ひつ追はれつ入り亂れ、音はとう〳〵鳴神の闇にもつれてさら〳〵、いぶかしくもまた怪しけれ。

ト此時上手の楠の許へ指金にて焼酎火出る、此途端に木の上よりも焼酎火をおろす、雷の音、雨車早め模様の合方になり、お絹きつと思入あつて、

はて心得ぬ、總じて人の膿血に穢れしもの、年經て雨に浸さるれば、あの如くに燃ゆる山、古戰場にては陰火とやら、又鬼火ともいふと聞く、爰は佐々木の城趾なれば、數多の武士が討死せし正しく無念の靈火ならん。

〽不思議と暫しながめしが、やゝあつて打ち首肯き、

おゝそれよ、最前聞いたる妙藥のある所には、風雨の夜には必ず猛火燃ゆること疑ひなしとの物語り、若しやあの木の空虚の中に其の妙藥があらんも知れず。というてさはる事さへもならぬ掟の此神木、えゝどうせうなあ。（ト又思入あつて、）

〽思案半にどう〳〵と、吹き來る風に、お絹は心をきつと替へ。

いや〳〵、こりや思案も何もいらぬ、其の藥が手に入つて、大事の夫を助ける時は、假令此身は切りきざまれ、どのやうな仕置に逢ふとも、夫の命にや替へられぬ、さうぢや。

〽さうぢやと見あぐる大木登るべき、便りも傍に幸ひのよき足代と、藤蔓傳ふ手足もわなわなく、顫ふ膝ふし危ふくも、枝に取附き手をかくれば、花はばら〳〵ばつと散りしく花浪のうつや、うつらうつら花房を手繰ば棚はめり〳〵〳〵、どうと落ちては又登る音は震動はたゝ神、篠をみだして降る雨を厭ふ氣色もやう〳〵と、楠に取附き這ひ登り一息ほつとつくも髮亂れ騷立つ葉を押分けて空虚の中、尋ぬる手先に太刀一振り。

ト讀への合方になり、お絹は褄を端折り手拭を腹帶となし、楠の許へ來りきつと上を見上げ、藤蔓を足代になして藤棚へ登り、大樹の空虚を尋ねる思入、空虚の中より錦の袋に入りし太刀を出し、手に取りあげてびつくり思入、

猛火を便りに、一藥を取り得んものと、楠の、空洞の中より思はずも、怪しき太刀の入れありし
は、はて合點の行かぬ。
〽これはと怪しむ其所へ、
トやはり雨車、雷の音、ばた／＼になり、以前の仁助先きに百姓四人、竹槍六尺棒鍬を持ち出來
り、
仁助　これ／＼皆の衆、何者ぢやか知らぬが、大切な御神木へ登つたぞよ。
四人　叩きしめろ／＼。
〽逃しはせずと左右より、荒くれ男が組附くを、物とも思はずずつてんどう、流石は武士の
女房ほど、奧床しくもまた目覺しき。
ト皆々打つてかゝろ、ちよつと立廻りになり、此時雷落ちる、是れにて五人は氣絶せし思入にて倒
れる、お絹も思はず舞臺へ飛びおり、きつとなりて太刀を納め思入あつて、
お絹　天の助けの今の雷。
〽危ふき難を忍び出で、龍虎の口をのがれし心地、素早く小褄かい端折り、行かんとするを
後より。（トお絹花道中程まで行く）

仁助　怪しい女め。（トお絹さし櫛を取つて仁助に投げる、仁助かへる。）

〽飛ぶが如くに。

ト三重風の音にて、花道へはひる、よろしく、

幕

大詰

江洲月輪村の場
矢走浦腹切の場

〔役名――賣卜者逸當實は玉島幸兵衛、盗賊の張本日本駄右衛門、百姓三太兵衛、盗賊小頭小狐禮三、あるきの番太、百姓畑六、同田五十、幸兵衛女房お絹、女盗賊船玉おオ、幸兵衛一子磯松、捕手八人、盗賊手下大勢。〕

（月輪村浪宅の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向う三尺の入口、上手押入戸棚、三尺の佛壇、内に誂への繰出し位牌、佛具よろしく飾り、下手鼠壁、よき所に棚をつり、此上に誂への白木の宮、此處に膳棚を釣り、いつもの所門口、これに周易玉島逸當と記せし札を掛け、上の方一間反故張りの障

子、下の方崩れ壁、二重上手に古びたる唐机、此上に算木筮竹天眼鏡を置き、總て瀬田の邊月の輪村浪宅の掛り、爰に磯松縞やつしなり、机に向ひ手習して居る、畑六田五十百姓なりにて鋤鍬を置き、煙草を呑み居る、此の仕組在郷唄にて幕明く。

畑六　これぼんち、よく精が出ますの。

田五　今は何を習つて居てぢや。

磯松　手習順を習つて居ます。

畑六　それは感心の事ぢや、今によい書手にならう。時に親仁どのは内にか。

磯松　あい、奥に居りますわいの。

田五　さうしてとつさんの病氣はどうぢやの。

磯松　やつぱり同じ事ぢやわいの。

畑六　それは困つたものぢやな、ちと失物があつて、見て貰ひに來ました。

田五　何にしろ親仁どんに逢ひたいものぢや、親仁どん／＼。（ト奥にて、）

三太　おい／＼、おれを呼ぶは誰ぢや。（ト合方になり奥より三太兵衛白髪鬘やつしにて出來り、）おゝ、是は村の衆、何ぞ用かいなう。

畑六　ちと見て貰ひたい事があつて來ましたが、親仁どん、ぼんちはよう出來ますッ
三太　さあ、わしが一字一句も讀めぬで六十年來不自由するゆゑ、孫子には目を明けて置きたく、去年から習はせますが、よく出來るといふことぢや。
田五　いやもう、出來るの何のと、大人は跣足ぢや。
三太　それはさうと、お前方が見て貰ひたいといふは。
畑六　失物を見て貰ひたいのぢや。
三太　むう、失物とは着類か道具かな。
田五　いえ〳〵着類や道具ではない、此の畑六が女房を取られました。
三太　なに、女房を取られた。
畑六　さあ情人があつて盜まれましたが、取戻すはむづかしい、所詮こつちのものになりませぬから。
田五　そこで死んだと思つて往生しろと、人樣が言はつしやりますれど、まさか捨ても置かれず、是れから尋ねに行きます積り。
畑六　あれが里は西の方ゆゑ、是れから六道の辻をかけ、地獄谷の方へ行つたと思ひます。
田五　それとも又往生がよく、極樂の方へ行つたかも知れませぬ、それ故ちよつと方角を見て貰ひたい

のぢや。

三太 あゝ、それは折角ござつたが、今すや〳〵と寐て居れば、後方に又ござらつしやれ。

畑六 そんならどうぞ頼みます、ほんに〳〵憎い奴、いつそ死んでくれゝばよい。

三太 えゝ忌はしい事言はずと、暮れぬうち行かつしやれ。

ト兩人を突き遣り〳〵、門口へ出す、兩人は空を見て、

田五 やあ、こりや今の間に泣き出しさうな天氣になつた。

畑六 明日は往生際と極つた。（トてんつゝになり、兩人下手へはひる）

三太 えゝ病人のある所へ、氣に掛る事ばかり、忌々しい奴等ぢや、えゝ鶴龜々々。（ト身ぶるひをして）

これ孫よ、かゝは何して居る、奥へいつて見て來やいの。

磯松 あい〳〵。（ト此時奥にて、）

お絹 來るには及ばぬ、今そこへ行くわいなあ。（ト合方になり奥より窶しなり、前垂にて藥鍋茶碗を盆へのせ持ち出來り、）おゝ磯松、もう手習はしまうたか。

磯松 あい、もう皆習うてしまうたわいの。

お絹 それはよう早う習うた、今に何ぞ買うてやらうわいなう。

三太　娘、聟どのは何ぞ喰べたかの。
お絹　喰べると直に吐きますので、此二三日は藥ばつかり。
三太　それは困つたものぢや、三年この方内障にて兩眼見えぬその上に、搗て加へて眼の病、百日の其内に直らぬ時はむづかしいと、養仙さまのお話し、どうぞしてよくしたいと、神佛へお願ひ申すが、何ぞ藥はないものか。
お絹　さあ、其藥があると聞き、昨夜思はず。
三太　え。(ト三太兵衞思入、お絹もこなしあつて、)
お絹　いやさ、夕飯のこしらへ前に上げようと思うて煎じました、どれ、上げて來ようわいなあ。
磯松　かゝさん、ぼんが持つて行かうわいなう。
お絹　いえ／＼、こぼすとならぬから、よしにしやいなう。
三太　あいや娘、そちが持つて行かうより孫が持つて行つた方が、聟どのが悦ばう。
お絹　ほんに、それもさうでござんす、ちつとは氣の晴れる事もござんせう、さあ曲げぬやうに持つて行きや。
磯松　あい／＼。

三太　とれ、障子を明けてやりませう。

ト合方にて三太兵衞上手障子を明けてやる、藥を持ち磯松奧へはひる。三太兵衞障子をしめ、

お絹　ほんに、さうでござんすわいな。娘、猫にはましだなあ。

ト てんつゝになり、花道より村の歩き、よれ股引尻からげにて出來り、直に舞臺へ來り、

歩き　さあ〳〵、事だ〳〵、どえらい事が出來たぞ〳〵。

ト門口を明け、内へはひろ、兩人氣を替へびつくりして、

お絹　あゝこれ〳〵、こちの内には病人がござんす、靜かに言うてござんせいな。

三太　ほんにこなたの大きな聲で、おりやびつくりしたわいなう。

歩き　其びつくりよりお觸の事を、聞かれたら猶びつくりするであらう。

三太　して、其お觸といふは。

歩き　先づお觸の第一はお尋ね者、日本駄右衞門、それに附添ふ小狐禮三、船玉お才などゝいふ泥坊が入込んで居るゆゑ、出口を圍つて嚴しい御詮議、又其外にお觸といふは、此の街道の楠は、切ることならぬ大事の神木、もし指でも附けるが最期、從類までも絕す掟、所で昨夜何者やら其楠へ

登つたゆゑ、それ逃すなと取卷くうち、何處へやら逃げたさうだが、何でも切つたは女かして劍花菱の蒔繪の櫛が、そこに落ちてあつたわいなう。（ト お絹これを聞きはツと思入、三太兵衛こなし、）

三太　そりやまあ少しも聞かなんだが、定めし騷ぎであつたらう、然しこちらは知らぬこと。なうお絹さうぢやないか。

お絹　ほんにさうでござんすとも、こつちに少しも覺えなけれど、もし其楠へ登つた者が、知れた時はどうなる事でござんすえ。

歩き　はて今もいふ通り、親があらうが子があらうが、お上の手から捉へらるれば、從類までもお絶しなさるゝ、又叶はぬ事と名乘つて出れば、當人ばかり外の者へはお構ひないのぢや。

お絹　そりや、こちらから名乘つて出れば。（ト思入。）

三太　當人ばかりでお構ひないとは、あゝ、お上はお慈悲なものぢやな。

歩き　其事につき村中殘らず、庄屋どのまで、たつた今、來いとの事でござるぞや。

ト お絹びつくりこなし。

お絹　え、そんなら此身の。

三太　や。

お絹　いやさ、此忙しない日暮時、今といふては誰も行き人が。
三太　いや〳〵、ないといふては居られぬ、聟どのが病氣ゆゑ、おれが代りに行きませう。
歩き　おゝ、誰でも村が一統揃へばよい。（ト門口へ出て、）そんなら、早く來て下され。
三太　直に跡から、行きますぞや。
歩き　どれ、村へ行きませう。（ト在郷唄にて下手へはひる、跡にお絹思案の思入、三太兵衞こなし、）
三太　あ年寄といふものは、人の事でも苦勞になつて、心掛りな今のお觸。いやこれ娘、異な事を聞くやうぢやが、そちや劍花菱の紋の附いた櫛をさして居やつたの。
お絹　え。
三太　見ればさして居やらぬが、あの櫛はどうしやつた。
お絹　さあ、あの櫛は、ほゝゝゝ、ほんにまあとゝさんとしたことが、知つての通りの今の身の上、恥しながら頭の物まで。
三太　ムウ、無いといふのか。
お絹　あいなあ。
三太　やれ嬉しやそれ聞いて落着いた。そんならおりや庄屋どのへ行つて來る程に病人に氣を附けよ。

お絹　あい／＼、跡は氣遣ひなさんすな、然し案じらるる、早う戻つて下さんせ。

三太　おゝ、お觸さへ聞きや、直に歸つて來る。

お絹　歸りには日が暮れやう、提灯を持つて行かしやんせ。

三太　いや／＼、天窓の光りで澤山ぢや、はゝゝゝゝ。（ト此うちお絹戸棚から羽織を出し、三太兵衞に着せる、門口へ出て、）これ／＼娘、いよ／＼櫛は疾から無いの。

お絹　現在のとゝさんに、何の嘘を言はうぞいの。

三太　おつとよし／＼、くどう言ふのは年寄の癖、氣に掛けてくりやるなよ。どりや行つて來ようか。

ト唄になり、三太兵衞思入あつて花道へはひる、時の鐘、床の淨瑠璃になる。

〽行空も袖に涙の雨催ひ、お絹は胸に兎やかうと、濟まぬ思ひに暮れかゝる、心の闇を行燈に照せど闇き身の罪を、覺悟極めて獨言。

トお絹三太兵衞の跡を見遣り、悄々として行燈を持ち來り、明りを附け、床のめりやすになり、

お絹　夫の命が助け度く、養仙さまのおつしやつた、彼の一藥を取り得んと、掟嚴しい楠の御法を破り登りしも、跡へ證據の殘りしからは、所詮のがれぬ此身の罪、年寄らしやんしたとゝさんや、夫や子に難儀を掛けようより、我と我が手に名乗り出で、お仕置とは思へども、明日をも知れぬ夫

の大病、どうまあ捨てゝ行かれうぞ、とはいへ追手に捕はるれば、從類までも絶すといふこと、
こりやもういつそ名乘つて出て。
〽いや〳〵、此身は覺悟の上なれど、
お仕置受けてあさましい憂き死恥を晒さうより、いつそ淵川へ身を沈め、親や夫や愛し子に難儀をかけぬにしくはなし。
〽常より狹き女氣の、外に思案は納戸より、以前の一腰取り出す、折から門へ來掛る侍、內の樣子を窺ふとも、知らぬお絹がとつおいつ。
トお絹奥より以前の太刀を持來り、此內花道より禮三袴ぶつさき羽織大小にて出來り、日覆より絹張り灯入りの月を出し、禮三門口へ來り窺ひ居る。
尋ぬる藥種はありもせで、思ひも寄らぬ此刀、不思議に我手に入りたるは、數馬樣の御身の上になければならぬ百兩の、金才覺の爲にもと天道さまから下されしか、それに附けても紛失なしたる御家の重寶胡蝶の香合、今において在所も知れず、是れまで幾瀬の苦勞はすれど其の甲斐なく、命捨てねばならぬ此身の切羽。それに附けても刀のことを、ぬしに知らする時は、我身にかかる科も知れ、却つて歎きを掛けねばならぬ。どうか內證で此刀、誰ぞに賣りたいものぢやなあ、

〽表に人の聞くぞとも知らぬお絹が物思ひ、刀の鯉口抜きかくれば、劍の光りに差込む月影薄曇る、奇特に扨はと表より。

トお絹思入あつて刀を抜きかける、是れにて月へ覆をかける、禮三門口を少し明け窺ひ出で、

禮三　その刀、求めたい。

お絹　え。

〽言ふにびつくり抜きかけし、お絹は刀を後へ隠す、笠脱ぎ捨てゝ内へ入る、顔見知らねば挨拶もさしかゝつて出ざりしが。

トお絹刀をうしろへ隠す、禮三笠を取り内へはひる、お絹思入あつて、

禮三　不審は尤も、拙者仕官の望みあるに附き、身の上の吉凶を占うて貰はんと、尋ね參りし門口にて計らず聞きし内の樣子、幸ひ一腰望む折柄、賣らうとあらば求めたいが、して此刀の出所は。

して、其御用とおつしやるは。

お絹　さあ、それは。

禮三　如何いたして、手に入りしぞ。

お絹　さあ、此刀は、拾ひましてござります。

禮三　むう、してそれは何處にて。
お絹　お望みとあるからは、お買ひなされた其上で、隱す事も打明けて、お話し申しませうわいなあ。
禮三　成程これも尤も至極、如何にも拙者が求めようが、其刀見せてくりやれ。
〽言ひつゝ傍へ差寄つて、刀をとくと打見遣り。
むう、目貫は元より緣頭、年經て雨露にひたさるれど朽ちても朽ちぬ黃金造り、疑ひも無き赤松の重寶旭の御劍、今其方が拔き放せば、劍の陽氣に暫しながらも月の光りを雲井に隱すは、世にも稀なる名劍、計らず我目に掛りしこと、此上もなき身の悅び。
お絹　してあなたさまの、お名前は。
禮三　仔細あつて世を忍べば、只今は名乘り難し。先づ差當り求めたく、其刀の價は何程。
お絹　さあ女子に知らぬ刀の價、何程でもと申したけれど餘儀なく百兩入りますれば、どうか是れなそれ程に、お買ひなされて下さりませ。
禮三　如何にも、望みの百兩に、身が求めて遣はさう。
お絹　それは有難うござりまする。なほ其上にお願ひは、ちと譯あつて連合に內證で賣りますゆゑ、お知らせなされて下さりまするな。

禮三　おゝそれも承知いたした。いざ金子を遣はさう。

〽いざと取出す金刀、互ひに取替へ押し戴き、底の心が上部から見えぬ障子の一間より、

ト此うち禮三懐中より、百兩包みを出し、お絹に渡す、お絹は刀を渡す、禮三取つておし戴く、此時上手障子の内にて、

幸兵　お絹〳〵。

禮三　やあ、あの聲は。

お絹　こちの人。

〽あたふた金は隱せども、其身のしがは隱されぬ病間の内より幸兵衞が、探りながら立出て

ト お絹金を懐へ入れる、禮三刀を脇へ置く、此内上手障子屋體より幸兵衞、病鉢卷やつしたる、目病みの體にて出で、

幸兵　これお絹そこに居るか、聞き馴れぬ聲がするぞ、誰ぞお出でなされたか。

お絹　あい、お客さまがござりまして。

幸兵　お客とは。

禮三　いや、拙者は旅の者なるが、仕官の望み身の上を、見て貰はんと參りしが、すりや其許が易を見

らるゝか。

幸兵　如何にも、玉島逸當でござる。

〽聞くにつく〴〵侍は、面體とくと打ちながめ。（ト禮三顔を見て思入）

禮三　見受けますれば、逸當どのには、御眼病でござるよな。

幸兵　三年この方眼を煩ひ、終に内障となつたる上、御覧の通りの病にて、くれ〴〵難儀をいたします
る。

禮三　それは嘸かし、御不自由でござらうな。

幸平　して其許さまには。

禮三　御病中を顧みず心なき事ながら、ちとそこ許へ御判斷を願ひたく、態々これへ參つてござる。

幸兵　それは折角のお頼みなれど、折惡しく今日は腹痛いたせば。

禮三　いや病苦とあれば是非もないが、拙者旅掛りの者なれば又明朝參るも難儀、一夜の宿りを御無心
申したいが、お聞き届け下さるまいか。

幸兵　拙者も以前は仕官の身、武士は相身互ひゆゑ、お貸し申したいものなれど、御覧の通りの此破家
親子夫婦の中でさへ、夜の物さへ足らぬ勝ち。

禮三　その御心配には決して及ばぬ、たゞ宿りをば賴むのみ、仕官の望みに少々の金子も貯へ罷りあれば、近頃侮りがましけれど、何かのお禮は、なう御內證。(ト禮三刀へ思入、お絹こなしあつて、)

お絹　いえもう、御不自由さへお構ひなくば、いつまでも御逗留。

幸兵　あこれ〳〵そりや何を言やる、何れのお方か知れもせぬに。

お絹　いえ〳〵大事ござんせぬ、見るから立派なお武家さま、ひよつとお前の爲になる事が、あらうも知れぬ。

幸兵　それぢやというて此中へ。

お絹　さ、出過ぎたやうぢやが、何もかもわたしが呑込んで居る程に、お宿申してあげたがよい。まあ何はなくとも酒一ッ、つい一走り行て來ようわいなあ。

〽獨り呑込みかい立つて、棚の隅から取り下す酒の德利におひ殿の、お宮の內へ以前の金、手早く隱す女房が、心の內は山々の、愁ひを掃ふ玉箒。

トお絹棚の德利を取りながら小宮の中へ金をしまひ、門口へ出掛け、

あなた、御ゆるりとなされませ。

〽言ひ捨て酒屋へ急ぎ行く。(トお絹思入あつて花道へはひる。幸兵衞思入。)

幸兵　えゝ女房とした事が、おれにもろく〳〵得心させず、めつた無性に馳走振り、はてたはけた奴ではある。

〽呟くうちに件の侍、懐中より繪姿取出し、幸兵衞と引き合せ。

ト懐中より繪姿を取出し、引き合せ見て思入あつて、

禮三　いやなに、逸當どの、折入つて其許へお願ひ申す儀がござるが、お聞き屆け下されうや。

幸兵　ムウ、折入つてお頼みとは。

禮三　求めたい品がござるが、賣つては下さるまいか。

幸兵　尾羽打ち枯らせし玉島逸當、着類とてもござらぬが、求めたいとおつしやるは。

禮三　外でもござらぬ、こなたの命。

幸兵　や、何と。（ト誂への合方になり、）

禮三　其驚きは尤も至極、所詮一應や再應では、御得心ござらぬは承知で頼みに參りしが、深き仔細あつてのこと、左言ふ御身も其の以前月本圓秋殿の家來にて、玉島幸兵衞どのといふ事まで知つて參つたは、今配符を以て尋ね搜す盜賊の張本、日本駄右衞門が使ひでござる、拙者は小狐禮三と申すもの、我々當地へ入込みしを計り知り、出口々々を取圍めば容易にのがれることならず、命を

捨てるは覺悟なれど義によつて捨てられず、それゆゑ貴殿の命をば仔細あつて求めに參つた、何と賣つては下さるまいか。

幸兵　ムウ、聞き及んだる日本駄右衞門、拙者が身の下を存ぜし上は言ふに及ばず、見らるゝ通りの内障にて兩眼見えぬ其上に、五穀も通らぬ癩の病、生き甲斐なき身體髮膚、手前が望みも叶ひなば如何にも命を赦し申す。が、何故にこの逸當を。

禮三　年齡といひ面體まで、駄右衞門どのに、その身その儘。

幸兵　あの、其人に似ましたとか。

禮三　さ、それゆゑに命の無心、その仔細と申すは、頭と賴む駄右衞門、先達て鎌倉にて月本殿に捕はれ既に刑罪受くる所、赦されし大恩のある月本殿、死する折には名乘つて出で、討たれんものと豫ての覺悟、今郡領に捉へられなば、一旦逃がせし月本殿の恥辱になるゆゑ此場を切拔け、名乘つて出る所存でござるが、計らず昨夜手に入りし此の繪姿に貴殿の面體、寸分違はず似たるを幸ひ、駄右衞門運盡きて切腹なせしと一通を殘し、命を捨てゝ下さらば、此圍みを引くは必定、然らば、頭は貴殿の古主月本殿の手へ捕へられ、受けたる恩義を返す心、假令價は何程でも、大事を明した上からは、理が非であらうとこなたの命、どうぞ素直に賣つて下され。

〽事を分けたる一言に、返答何と差しうつ向き、暫し思案にくれけるが、胸を定めて。

ト此うち幸兵衞ぢつと思入あつて、

幸兵　あゝさうぢやな、假令勘當御免あるとも歸參のならぬ此病、せめての事に若殿の手詰めの金をこしらへて、死するがまだしも一つの忠義。

禮三　して、御入用の金子の高は。

幸兵　望みの金は僅か百兩、

禮三　御承知さへ下さらば、價は貴殿のお望み通り、幸ひ是れに金子百兩。

幸兵　左樣なれば、其の金を。

禮三　あいや其替りには此方も、認め參りし此一書へ、血判が申し受けたうござる。

幸兵　何さま、御尤もなる其お詞、委細承知仕つれど、眼病の事なれば、御苦勞ながら御文面を。

禮三　承知いたした。（ト一札を開き、）『一、此度貴殿の一命を黄金に替て申受け候上は、眷族は申すに及ばず、決して異存是れあるまじく念の爲め一札件の如し、月日、』則ち御姓名を相記してござる。

幸兵　御文面承知仕つる。（ト一札へ血判をなし、）いざ、お受取り下されい。

禮三　早速のお聞き濟み忝なうござる。然らば金子お受取り下されい。（ト金と證文を引替に受取り、）

幸兵　然し駄右衛門どのに成替るに、人も知つたる此なりでは。

禮三　いや、着類は持參いたしてござる。

〽相圖の呼子吹き立つれば、藪押分けて手下の盗賊、着類一腰小脇に抱へ内に入り、

ト下手より、手下二人、誂への衣服大小を持ち出て内へ入り、

手下　小頭、首尾よく。

禮三　これ。（ト四邊へ思入、）その衣類をあのお人へ。

○　合點でござんす。

△　さあ、早く着替へなさんせ。

○　それ、刀も爰へ置きますぞや。

兩人　さあ、着替へさつしやれ。

〽お着替あれと立掛り、帶を解くやらほどくやら、手早く着せる黒羽二重の打小袖は妻や子に別れて先きへ立花の、三ツ紋附は幸兵衛が直に冥土へ經帷子、禮三は四邊見廻して、ふつと目に附く佛壇の、位牌を思はず打見遣り。

ト此うち、手下兩人手傳ひ、着物を着せる、禮三四邊を見廻し佛壇の位牌に目を附け、

禮三　此佛壇の繰出し位牌に、岩見太郎左衛門と記せしは。
幸兵　それぞ身共が實父でござる。
禮三　すりや、貴殿の御實父とな。（ト思入あつて、）
〽うなづく内に幸兵衛は、一腰流石武士の骨柄、其古を思ひ遣られて哀れなり。
ト禮三幸兵衛をつくづく見て、
あゝ人に勝れしこの骨柄、何とよく似たぢやあねえか。
兩人　ほんに、瓜を割つたを其儘。
幸兵　如何に憂き世に迫ればとて、武士たる者の一命を、黄金に替へて身代りに。
禮三　立つるもやつぱり義心の一ッ。
幸兵　暫し妻子に餘所ながら、別れを告ぐる其間。
禮三　我も一先づ立歸り、得心ありし趣きを、頭へ傳へて悦ばせん、何かは後程。
幸兵　左様なれば。
禮三　幸兵衛どの。
兩人　おいらも一緒に。

禮三　これ、靜かに言やれ。

〽一禮なして悠々と、禮三は手下を引連れて、隱れ家さして立ち歸る。

ト禮三先きに立ち、手下附いて花道へはひる。

〽跡に幸兵衞茫然と、暫し萎れて居たりしが、（ト誂への合方になり、幸兵衞思入あつて、）

幸兵　世にあさましい我が身の上、此百兩は手に入りしが、御家の重寶胡蝶の香合、今において手掛りなく、是ればかりが冥土の障り、又不便なは女房お絹、永の年月賴みなき我へ心を盡せし、其甲斐もなく死んだと聞けば、舅どのや坊主まで。

〽歎かん事の不便やと、勝手覺えし佛壇へ探り寄つて位牌を取り出し、押しいたゞき。

ト佛壇の位牌を取出し思入。

身の放埓ゆゑ御勘氣蒙り、人もあらうに盜賊の身に代つて相果つるは。

〽腑甲斐なしとも腰拔けとも。

父母は勿論御先祖の、其のお怒りは如何ならん、これも定まる宿業。

〽身を悔みたる詫び淚、哀れを添ふる夜嵐に、連れて聞ゆる山寺の鐘の音さへも深々と、いとゞ心も細道傳ひ、德利を提げて女房が悄々として內に入る、音に驚き以前の金あたふたと

位牌の裏へ押隱し。

ト此うち幸兵衛位牌へ向ひよろしく思入、時の鐘合方、花道よりお絹德利を提げて出來り、直に内へはひろ、幸兵衛びつくりなし、金を位牌の後へ手早く隱す。

お絹　こちの人、今戻つたわいなあ。

幸兵　や、誰かと思うたれば女房どのか。

お絹　何でまあお前は、其樣にびつくりしやさんすのぢやえ。

幸兵　さあ、是れもやつぱり病のせゐか、物驚きをしてならぬ。

お絹　其病のある身の上で、風に當るは何より毒、寐て居なさんすればよい事に。さうして磯松はどうしました。

幸兵　さつき藥を持つて來て、おれの床へちよつとはひり、いつの間にか寐てしまつた。

お絹　そんなら奥に寐て居ますか。や、お前は何時の間に、其樣なりにならしやんした。

幸兵　さあ、あのこれは、おゝそれ〳〵、わが身に言うて悦ばさんと思うて待つて居た所ぢや、其譯といふは、それ最前のお侍な、あのお方のお世話で、さる御大名へ有り附く筈ぢや。

お絹　えゝ。（ト誂への合方になり、）

幸兵　おゝびつくりであらうが、扨大名といふものは種々な望みのあるもの、病人でも大事ない、易學に長けた者を抱へたいとあつて、これ見やれ此樣に、身の廻りまで下された、爰らが夫の譬にもいふ通り、藝は身を助ける所であらうわえ。
お絹　そりやお前、ほんまでござんすかえ。
幸兵　何の嘘をいふものぞ。
お絹　さうして先きの國所は。
幸兵　ずつと遠い、しかも西方。
お絹　え。
幸兵　ありや、西國方のお大名樣、あちらへ行つて便りするまで、どうぞ煩はぬやうにして、坊主を賴むぞよ。
お絹　えゝもうわつけもない、其大病で有附く所か、ほんに又先きのお大名樣も物好きな、起居さへ不自由な病人を。いや〳〵、此相談はよしにして下さんせいなあ。
幸兵　それでも一旦武士と武士が、約束した上からは、どう變替がなるものぞ。
お絹　むう、そんならどうでも行かしやんすか。

幸兵　おゝ是非行かずばなるまいわえ。
〽死にゝ行くのを女房に、包めどこぼるゝ憂き涙。
お絹　行かねばならぬ事ならば、留めはせぬが幸兵衛どの、又逢ふまでの首途の杯、一口祝うて立たしやんせ。
〽思ひは同じ女房が、覺悟は胸に三ツ杯、別れ〱の物思ひ。
ト此うちお絹杯を膳に載せ、徳利を持ち來り、
さ、一ツ呑ましやんせ。
幸兵　おゝ久し振りでそなたの酌、そんなら一ツ。
〽杯取れば女房が、涙片手に徳利を持添へ。（ト幸兵衛杯を取る、お絹酌をする、）
お絹　やあ幸兵衛どの、七年跡に磯松をまうけてより昨夜までも、いとし可愛と幼子を、中に添寐の夫婦の縁も、今日が別れに。
幸兵　や。
お絹　さ、ならうも知れぬ浮世の習ひ、愚癡な女子の心から案じ過して、わたしや悲しうござんすわいな。

幸兵　何やら味な物の言ひやう。

〽案じる夫に身の上を、言ふに言はれず取る茶碗、受けては干し受けては干す酒は熱湯熱鐵を、呑むよりも猶苦しけれ、折柄表へ小頭が面體格好着類まで、繪圖に合せて領きて駄右衛門ならんと一人笑み、飛ぶが如くに引返す、内にはそれと心も附かず妻の惱みをそれとは知れど。

トお絹思入あつて茶碗に酒をつぎ續けて呑み、幸兵衛思入あつて、

これお絹、何をして居やるぞ、えゝこれは又酒臭いこと、いつの間に呑みやつたぞ。

お絹　さあ、久しぶりの女夫の杯、相も押へもたゞ一人、いつにない醉うたわいな。

幸兵　呑まぬ口で其やうに、呑まずともよいものを。

お絹　目出度い酒ゆゑつい醉うたが、こちの人肴を下さんせ。

幸兵　なに、肴をせいとは。

お絹　あい、わたしや肴に暇下さんせいなあ。

幸兵　えゝ、暇くれとは。

お絹　わたしに暇を下さんせいなあ。

へずつけり言へば。

幸兵　はゝゝゝ、ついに醉うた事もないが、扨は酒が惡いと見ゆる、これ醉うたら醉の覺めるまで、奥へ行て寐るがよい、えゝ、てんがうも事によるわえ。

お絹　えゝ、てんがうぢやない、ほんまぢやぞえ。

幸兵　すりや、こんがうぢやない、ほんまとは。

お絹　わたしやお前に愛憎が盡き、暇貰ふ氣になつたわいなあ。

幸兵　おい、愛憎の盡きるも無理ではない、殿の御勘氣蒙つて知邊を便りに町家の住ひ、三年この方引續き煩ひ勝に藥より、煎じ詰りし痩世帶、うんじ果てゝの事であらうが、差し詰めたる今日の仕儀今にもおれが遠い所へ。（ト幸兵壽愁ひの思入あつて、）行たその跡ではあの磯松、そちより外に便りはない、おれに愛憎の盡きたのは、そりや尤もぢや道理ぢやが、悴に何の科があらう、あの位牌の中には大事の金が、いやさ、かねて籠めたる忠義の魂、定めて此世におれが無いとても、先祖の舊功思召し、小祿にても見出しあらば、あの悴磯松に先祖の名前を繼がせてくれ。

お絹　いやでござんす。

幸兵　いやでもあらうが、これお絹、せめて十五になるまでも、あれが面倒見てくりやれ。

お絹　えゝもう知らぬ〳〵知らぬわいなあ、先の國から便りすると言はしやんしても、隔つて居れば何の當てにならうぞいな。何ぼ重い病でも、まだ老朽ちぬお前の身の上、のけば長者が二人出來ると、別れる方が互ひの身の爲め、ほんに獨り身になると思や、あまりの事で嬉し涙がほゝゝゝゝ何ぢや知らぬが、氣が浮き〳〵と、めつた無性にをかしうて〳〵ならぬわいなあ。ほゝゝゝ。

〽悲しさ隱す笑ひ聲、泣くよりも猶せつなけれ。（ト笑ひに紛らし泣き伏す。）

幸兵　是れほどいふに聞き入れぬ性根の腐つた女房に心は殘らぬ、さつぱりと望みの通り暇くれた。

お絹　えゝゝゝ。

幸兵　是れからこつちも晴れ〴〵と、追ッつけ凛々しい供廻り、馬に乘つて槍持たせ。

〽首になつたと聞くならば。

可愛や跡で坊主めが。いや坊主が憎けりや袈裟までと、そちに繋がる舅どの、手足纏ひを拂つてしまへば、こんな吉事なことはないわい。

お絹　おゝそりやこつちも同じ事、明日が日玉の輿に乘つて酒買ひに行かうと、又淺ましい死を仕ようとも、ほんやお前やとゝさんに、せめて難儀を

幸兵　やッ……

お絹　さ、何にも構うて下さんすな。男の子は男に附けば、あの子はわたしの子でなければど、おとなしう育つやうにお願ひ申した秋葉さま。

〽言ひつゝ立つて白木の宮、そつと下して傍に置き。

モウシ、爰にある此のお宮、どうぞあの磯松に信心させて下さんせ。それも他人のいらぬ世話、どうでも勝手にしなさんせえなあ。

幸兵　〽別るゝ機會の腹立上戸。（トお絹白木の宮を幸兵衞の側へ置き。）すりや、是れほどに頼んでも。（ト探り寄るをむごく突き放し。）

お絹　えゝもう、知らぬわいなあ。

〽底の心は泣上戸、涙呑み込み入りにけり。

トお絹泣かうとして口を押へ、せつなき思入にて奧へはひる。

幸兵　えゝこれ、七人の子はなすとも、女に肌を許すなと、お絹が性根、見下げ果てたる奴ぢやなあ。

〽暫し涙にくれにける。折柄爰へ三太兵衞、心あせりてすたすたと、急げど老の氣もわなわな門の戸明くるも涙にくれ。

ト此うちに幸兵衞思入、よき程に門口へ、黑四天の捕手八人出來り、門口に窺ひ、繪圖を出し見てう

なづく、花道へ一人走りはひる。ドン／＼になり、以前の三太兵衞出來り、直に内へはひる。

三太　これ／＼聟どの、大事ぢや／＼わいなう。

幸兵　え〻、大事とは氣遣はしい、何事でござりますぞ。

三太　何事どころの事ぢやない。昨夜御法度の神木を切つたは、娘のお絹ぢやといの。

幸兵　え〻〻〻。（トびつくりなす、）

三太　劍花菱の紋附と、蒔繪の櫛が證據となり、娘が仕業と事極り、おつ附け爰へ捕手が來るゆゑ、此事知らして落さうと、庄屋どの〻裏口から、やう／＼拔けて戻つて來た。

幸兵　そりや眞實か、どういふ譯で。

三太　お〻眞實どころか、娘はどこに、お絹／＼。

〽呼べど答へも納戸より、泣く／＼駈出る磯松に。（ト奥より磯松書置を持ち泣ながら出來り、）

これ／＼孫よ、か〻を知らぬか／＼。

磯松　い〻え、か〻さんは此書いた物を、と〻さまやぢ〻さまへ渡せと言うて、今裏道からどつちへか行かしやつたわいなあ。

幸兵　なに、書いた物とは氣遣はしい、親仁さま、ちよつと讀んで下さりませ。

三太　えゝ聟どの何を言はつしやる、わしが無筆を知つて居ながら、こなた讀まつしやれ。というた所がこなたは目病み、これ〳〵磯松、さゝ、われ讀め〳〵。

磯松　あい〳〵。『書置の』これとゝさま、下の字が讀めぬわいの。

幸兵　どゞ、どんな字ぢや〳〵。

磯松　あい、上の方が折れて丸く歪んで書いてある。

幸兵　むゝ、そりや事といふ字ぢや。

磯松　『書置の事』

三太　おゝ、さうして、跡はどうぢや〳〵。

磯松　あい、『お前の病氣を直す藥を取らうと思うて、法度の神木を。』これは何といふ字ぢやえ。

幸兵　おゝ、どういふ字ぢや。

磯松　あい、偏は十の字のやうにして造りは丸うして棒が引いてある。

三太　そりやまあ、何といふ字ぢやな。

幸兵　えゝそれでは知れぬ、とゝが手をとらまへて其字の上を撫でゝ見せい。

磯松　あい〳〵。（ト幸兵衞の手をとらへ、）それ、斯ういふ字ぢやわいの。

幸兵　おゝ、それは切るといふ字ぢや。
三太　えゝ切るといふ字か。
幸兵　扨は此身の難病を、助ける爲に大切な、神木を切つたるか。
三太　あの神木を切つたる時は、従類までも斷つとある嚴しい仰せであるけれど、我と我が手に名乘つて出れば、其身ばかりで従類に祟りはないとさつきの話し、書置とあるからは、何でも死ぬ氣に相違ない、胸騒ぎがしてならぬわえ。
幸兵　これ〳〵磯松、今の跡どうぢや〳〵。
磯松「神木を切り候ゆゑ、此身は死ぬる覺悟に御座候。」
三太　やあ、扨こそ娘は死にゝ行つたか。
磯松「又お宮の内の金を、お主樣へお上げ下さるべく候。」
幸兵　なに、お宮の内に金があるとな。
三太　すりや、此内に。（ト三太兵衞小宮を打ちかへす、以前の金出るを取上げて、）これ聟どの、内にあつたは小判で百兩。
幸兵　どうしてそれが手に入つたか、互ひに樣子を打明かさば、仕樣模樣もあらうもの、知らぬ事とて

我れも又、調達なせし此百兩。

三太 〽位牌の内より取出せば。(ト以前の位牌より百兩出し、前へ置く、三太兵衞見て、)

やゝ、こりや兩方とも、同じ封印。

幸兵 扨は女房が才覺も禮三どのであつたるか、なぜ打明けてくれなんだ、おれは元より此の病氣、おぬしばかりは殺さぬ〳〵。

〽氣も半亂に立ち上り、行くにも行かれぬ內障の悲しさ、尻邊にどうと倒れ伏し、暫し淚に暮れにけり。(ト幸兵衞行かうとして躓きどうとなる。)

三太 あこれ、危ない、どこぞ怪我はせなんだか。

磯松 これぢいさま、かゝさまが死なしやつたら、おいらはどうせう〳〵ぞいなう。

〽縋り泣くにぞ抱き上げ。

三太 おゝ尤もぢや〳〵、そちが歎きを見るにつけ、思へば不便な孫が身の上、賴みに思ふかゝに捨てられ。

幸兵 とゝはあつてもある甲斐なき、今をも知れぬ身の難病。

三太 又此ぢいも老の身の、彼の世へ近き年の上。

幸兵　もしもの事のある時は、路頭に迷ふこの坊主。

三太　かゝる憂き目を見するのも、跡に殘つて又見るも。

幸兵　因果同士の、

兩人　寄合ぢやなあ。

〽またも涙に伏し沈む、時しも四方を取圍む、合圖と見えて、知らせの法螺貝。

ト幸兵衛三太兵衛よろしく愁ひあつて、此時花道の揚幕にて、法螺の音聞える、三太兵衛驚き、

三太　あれ〳〵聟どの、お尋ね者を逃すまいと、出口を取卷くあの法螺の音。

幸兵　すりや駄右衛門を召取らんと、出口を固むる合圖とあれば、坊主を連れてこなたには、豫てお話し申したる、數馬樣の御座なさるゝ、坂本の隱れ家へ、此金をちつとも早う。

三太　合點ぢや〳〵、そんならこなたと引別れ、此の濱邊を行んで見て、もしやお絹に尋ね逢うたらどさくさ紛れ、親子四人こゝを駈落ち、數馬樣のお役に立てる此金はおれが預かつた、さあ〳〵早く支度をさつしやれ。（ト三太兵衛金を財布へ入れ懷中する。）

幸兵　病苦に此身は心に任せず、杖に縋つて參りますから、坊主を連れて先きへお出で下さりませ。

三太　それぢやというて目の見えぬ、そなたを跡に殘しては。

幸兵　はて、半時爭ふこの追手、わしに構はず少しも早く。
三太　そんなら聟どの。
幸兵　怪我せぬやうに。
三太　磯松、來やれ。
〽これが一世の別れとも、知らず白髮の三太兵衞、孫を背負うて急ぎ行く。
ト三太兵衞磯松を背負ひ、花道へはひる。
〽見えぬ目ながら伸び上り、二人が跡を見送りて。（ト幸兵衞思入）
幸兵　これにて一つの、我が安堵。
〽流石に武士の義も固く、病苦も厭はず幸兵衞が、今や遲しと待つ所へ群がり來る數多の捕手
トドン〳〵になり、花道より黑四天の捕手八人出來り、直に門口へ來り、
捕手　やあ、お尋ね者の日本駄右衞門、此家の内に忍び居ること、訴人あつて慥に知る、さあ尋常に、
それ。
〽ばら〳〵と込み入れば、
幸兵　斯くなる上は是非に及ばぬ、今こそ名乘る日本駄右衞門、うぬら如きが手に合はうや、觀念せよ。

捕手　何を小癪な。

〽打つて掛れば暗黑に、見やる目さへも幸兵衛が、內障と同じめつた打ち。

ト八人十手にて打つてかゝる、是れを相手に暗黑の立廻り、淨瑠璃の切れ竹笛入りの誂への合方になり、探り合ひ捕物の立廻りよろしくあつて、幸兵衛刀を拔き、めつた切りに切散らす立廻り、

〽病苦の疲れに幸兵衛が、よろめく足を踏みしめ〲、目は見えねども一心に、切先鋭く切り立てられ、濱邊をさして落行くを、跫音しるべに。

ト幸兵衛疲れし思入にて、六人を切り散らし皆々かなはず下手へ逃げ行く、二人殘り幸兵衛と立廻りの見得、三人を乘せし儘二重を前へ押し出し、欄間を引き上げ霞になり、蹴込打返し土手に替り、左右へ蘆原を押し出す、舞臺前波板、日覆より松の釣枝、向う打返し近江湖水八景の遠見、幸兵衛杖に縋り息をつき居る、三重になり道具納まる。

〽追うて行く、湖水の浪の滔々と、磯にうつゝの夢心地、さめ〲泪幸兵衛は、我子の行方案じられ。

ト此うち疲れし思入にて立上り、ひよろ〲となり、刀を杖に息をつき、

幸兵　磯松はどうしたか、親仁さまは何れにござる。磯松やアい、親仁さまイなう、磯松やアい——。

〽呼べど答も荒磯に、ほつと一息撞く鐘に。（ト七ツの時の鐘を打つ、幸兵衛思入あつて、）

や、あの鐘は最早七ツ、死におくれて駄右衛門を召捕らしては義が立たぬ、又も捕手の來ぬうちにさうだ〳〵。

〽以前の一通取出し、刀の柄に括し附け、諸肌脱いで傍なる、岩へどつかと腰打掛け、苦しき聲を張りあげて。

今ぞ日本駄右衛門が、運命盡きて覺悟の自殺、我と思はん者あらば、首打つて手柄にせよ。

〽言ふ聲さへもかれ〴〵に、ぐつと突き込む左りの肋、引き廻さんとあせれども、病苦の疲れに力なく、悶え苦しむ折柄に、娘の行方尋ねわび、孫を背負うて三太兵衛。

ト此うち幸兵衛よろしく思入あつて腹へ突き立てる。浪の音にて花道より三太兵衛出來り、

三太　お絹やアい。

磯松　かゝさまイなう。

三太　お絹やアい。〽尋ねあぐんで來掛る磯端、目早く見附ける磯松が。（ト兩人舞臺へ來り、磯松幸兵衛を見附け、）

磯松　や、とゝさまが爰に居てぢや。

三太　なに、幸兵衛どのが。（トつか〳〵と見て、）やゝゝゝ、こりや何故に腹を切つたのぢや。

磯松　あれ、とゝさまイなう〳〵。

〽すがる我子に目を見開き。

幸兵　や、磯松か舅どの。

三太　これ聟どの、どういふ譯で死ぬるのか、譯を聞かして下されいの。

〽言ふに苦しき息をつき。

幸兵　先立つ不孝の入譯を、申したけれど深手にて。

〽最早五音の呼吸狂ひ、心に思ふ十が一ッ。

武士の身にあるまじき金才覺のあてに盡き、我が面體が盗賊の日本駄右衛門に似たるゆゑ、一命捨てゝ黄金に替る賴みに相果つる此の幸兵衛、最前あなたへ渡したる金が則ち命の代、此身は拙く死ぬるとも此磯松を成人させ、失せし寶を詮議してそれを功に玉島の家名を顯はして下され、賴むは舅三太兵衛どの。

〽心ゆるめばがつくりと、打伏す死骸にぢいと孫、縋り歎けば今更に、替らぬ浪の磯端へ水の哀れや愛着に、引かれ寄り來るお絹の死骸。

ト此うち幸兵衛思入あつて、うつ伏しに落入る。三太兵衛磯松縋り泣く。浪の音になり、舞臺の切穴よりお絹の死骸流れて來る、磯松見て、

磯松　これぢゝさま、かゝさまが水の中に居やしやるわいなう。

三太　なに、お絹が水中に。

〽三太兵衛は狂氣の如く磯邊に駈寄り、お絹が死骸を抱き上げ、聲顫はして耳へ口寄せ。

ト三太兵衛死骸を抱き上げ、磯松三太兵衛介抱して、

磯松　かゝさまイなう。

三太　お絹やアい。えゝ斯ういふ憂き目を見まい爲め、一遍と尋ねたが、知れぬも道理此樣な、果敢ない形にならうとは、ほんに夢にも知らなんだ。これ、ま一度親と言ふてくれ、言ふてくれぬかいやい。（トよろしく思入、此うち幸兵衛吹替になる、三太兵衛側へ寄り、）これ聟どの、お絹が身を投げ死んだわいなう〳〵。

〽いへど返事も亡骸に、群がり集まる數多の烏、追へど傍へ取附くを。

ト此うち指金の烏上下へ數多出て、お絹の死骸の上へ下りる、磯松これを追ひながら、

磯松　あれ〳〵、かゝさまをあのやうに、惡い烏がいぢめるわいなう。

三太　おゝ、石を捨うて打附けやれ。

磯松　あい〳〵。（ト磯松石を拾ひ、烏に打附ける、これにて烏逃げる、磯松幸兵衛の側へ來て愁ひのこなし）

三太　今更いうて返らねど、斯ういふ事があるならば、なぜ打明けて言ふてくれぬ、役に立たずと相談したら、死なずと仕樣模樣もあらうのに、賴みに思ふ二人を月日も替らず一時に、非業な最期を遂げさせて。

〽逆まごとを見るのみか、孤兒の此孫をあすをも知れぬ老の身で、どうまあ是れが育てられよう。

生き甲斐のない體ゆゑ、因果者ぢやと人さまに後指さゝれうより、不便なれども孫諸共、此湖水へ身を投げて、共に彼の世へ行きたいけれど。

〽お主の爲に二人が、命を捨て才覺せし、此の金ゆゑに死なれもせず。

憂き目を見ねばならぬわえ。

〽聟と娘が亡骸へ縋り歎けば磯松が、わけも涙にくれ果てゝ、哀れを爰に湖の水嵩まさる如くなり。（ト三太兵衛左右の死骸に思入あつて、磯松を抱き、はツと泣く。）

〽折から爰へ幸兵衛が、死を止めんと馳せ來る禮三、それと見るより打ち驚き。

〵ばた〳〵になり、花道より以前の禮三、素網達附一本差しにて出來り、直に舞臺へ來り、幸兵衛を
見てびつくりなし、

禮三　あゝこりや幸兵衛どのには、最早切腹いたされしか、はて殘念な事いたしたよな。

〽齒嚙みをなすにいぶかしく。（ト禮三殘念の思入、三太兵衛不審さうに見て、）

三太　聟が自殺を惜しまるゝ、してこなたさまは。

禮三　おゝ何を隱さん我こそは、日本駄右衛門が手下にて、其名も小狐禮三といふ宵に命を求めし者、仔細あつて切腹を止めに取つて返せしが、暫時のおくれに間に合はず、果敢なく一命捨てさせたり。

三太　して〳〵一旦求めし命を、何故止めにござつたぞ。

禮三　されば最前佛前に、飾りありたる繰出し位牌に、俗名岩見太郎左衛門と記せしを目に附けしが、頭と頼む駄右衛門どのゝ實親も同じ姓名ゆゑ、もしやと思ひ立返り、仔細具に話せし所、幼年の折から別れたる我に双生の兄弟あり、位牌の姓名殊にまた面體似たるは心得ず、暫時覺悟を止めよと、頭よりの言ひ附けに、直さま取つて返せしが、僅かの違ひに止め得ず切腹させし殘念さ、我は元より駄右衛門どの、嘸や本意なく思はれん。

〽聞くに猶更惜しまれて。

三太　それは／＼、殘念な、お前さまがもう一足、早くおいでなされたら、聟が命は助かつたらうに、鵜となるも死ぬる時節、約束ごとでござりまする。

禮三　何にもせよ、今爰へ船に乘つて我が頭、駄右衞門どのがござる筈。

三太　え、すりや此所へ駄右衞門どのが。（トびつくりなす。）

〽三太兵衞は薄氣味惡く、孫を圍ひて待つ所へ、苫船一艘漕ぎ寄せて、上る跫音しと／＼と忍び頭巾に黑裝束、駄右衞門始め數多の手下、濱邊狹しと上り來る。

ト浪の音になり、下手より正面へ苫船一艘漕ぎ寄せ、船より手下大勢盜賊なり、思ひ／＼にて龕燈、獲物を持ち、跡より駄右衞門野袴、ぶつさき、大小、重ね草鞋、好みの裝、跡よりも手下大勢獲物を持ち出で、附添ひ出る。

手下　頭がごんした。

禮三　それ、床几を直しやれ。

手下　合點だや。

〽床几を直せば悠々と、駄右衞門は腰打掛け。

ト手下よき所へ床几を直す、駄右衛門よろしく腰を掛け、

駄右　して某が身代りに、命を求めし幸兵衛どのは。

禮三　僅か半時のおくれにて、自殺いたしてござりまする。

駄右　さて／＼それは殘念、して其の死骸は。

禮三　則ちこれに。

ト禮三手下へ目配せなす、手下心得幸兵衛の死骸を抱き起す、駄右衛門篤と見て、合方替つて、

駄右　はゝあ、成程よく似たり、面體恰好年配、我が見ても我に紛うばかり、他人の猿似といふ事あれど、斯くまでは似ざるもの。

三太　そんならこなたが大泥坊の、日本駄右衛門、さまでござりまするか。

駄右　如何にも日本駄右衛門なるが、さういふ老人は。

三太　はい私は、三太兵衛とて此の幸兵衛が女房の、親仁でござりまする。

禮三　はてさて、それは重ね／＼老人には愁傷千萬。

駄右　老人に聞きたきは、自殺なしたる幸兵衛どの、以前は月本圓秋どのゝ家來と聞いたるが、本國はいづくなるぞ。

三太　さあ委細の事は存じませぬが、生れは樵攝州の白旗山と申すこと。
駄右　して又位牌に記したる、岩見太郎左衛門とは。
三太　それは是れなる幸兵衛が、實の親仁にござりまする。
駄右　ムウ、さすれば守りの其内に、もしや金の三疋獅子の目貫の片々はあらざるか。
三太　おゝ、ござりますとも〳〵、則ちこれでござります。
ト三太兵衛死骸の首に掛けし守袋の中より、片々の目貫を出す、駄右衛門取つて見て、
駄右　ほゝお、此目貫を所持なすからは、我に面體似たる筈、疑ひもなき双生の兄弟
三太　そんなら聟は、お前さまの。
駄右　その證據は、則ち我も又同じ片々の此の目貫。（ト駄右衛門守袋より片々の目貫を出して見せ）
禮三　そんならいよ〳〵、幸兵衛どのは。
皆々　頭の弟であつたるか。（ト駄右衛門思入あつて、）
駄右　あゝ、別れ程經て三十年來、明暮れ尋ねし甲斐もなく、手はおろさねど我が爲に、あたら命を捨てさせて、たゞ一言の詞も交さず本意ない死骸に對面なし、實に譬にいふ如く、兄弟他人の始まりぢやなあ。

ト死骸に向ひ、よろしく愁ひの思入。

〽折しも四方に吹き立つる、法螺の音近く聞ゆれば、すは追人ぞといふ所へ、船玉お才が馳せ來り。

トばた〳〵になり、花道よりお才好みのこしらへ一本ざしにて出て來り、直に舞臺へ來り、

お才 頭、爰にござんしたか。

駄右 おゝ、船玉お才か。

禮三 して〳〵首尾は。

皆々 どうでごんした。

〽いふにお才はにつこと笑み。

お才 姿を窶し郡領が、人歩の中へまぎれ込み。

〽篤と様子を窺ふに、月の出汐を合圖にして。

頭を始めわれ〳〵まで、たゞ一網に打ち捕る所存。

〽沖も越えざる巧みゆゑ、こちらは頭の大船にひらりと乘つたる船子ども、風を喰つてえつつさ、隙を窺ひ帆をかけて。

これから直に北國へ、ふけて行くのが上分別、さあ／＼支度をしなさんせ。
駄右　むゝ、心よからぬ播磨郡領、一泡吹してやりたいが、月本殿の手に掛る大事の體に此場は此儘、一先づ越路へ落延びん。
禮三　何にもせよ老人には、其子を連れて片時も早く。
三太　とはいへ、二人のこの死骸。
駄右　それは此場で水葬禮。
禮三　それ、皆の者。
皆々　合點でごんす。（ト立ちかゝるを、）
三太　あもし、皆さん待つて下さりませ、娘は法を破りし罪、又聟どのは身代りに、命を賣つた上からは、二人の死骸は此儘に、置かねば役に立ちませぬ。
駄右　志しを無足にせず、死骸を此の儘役に立て、
お才　思ひ／＼の姿に替へ、一先づ當地を、
禮三　北國筋へ、
皆々　落延びん。（ト此時黒四天の捕手二人出で、）

捕手　駄右衛門捕つた。（トちよつと立廻り、捕手を投げのけ、寺鐘を打込む）

駄右　最早夜明けに程近し。
〽逃げるも海と陸地では、弓と弦なる矢走舟。

お才　不思議にめぐり近江路に。
〽今宵別れてまたいつか、粟津の浦の朝嵐。

三太　瀬田の長橋夕景の、
〽永き榮えを祈るとも、二ツ繫がる緣の端。

駄右　それも數年の舊惡に、
〽あふげば高き比良が嶽、雪より積る身の罪科。
〽隱すとすれど盗賊の、名は世の中へ鳴り響き、末の因果を三井の鐘。
〽誓ひは堅き石山の、石も碎ける時あれば、我身の秋に運のつき。
〽我から先に名乘り出で、刑罪受くると聞くならば、傍に淚の夜の雨。
ト此うち大小入りにて、捕手を相手に皆々よろしくあつて、

先づそれまでは兄弟の、

お才　敵も餘所に、
駄右　さいさき祝うて、
お才
皆々　打出の濱。（ト本釣鐘。）
　〽はや寺々の鐘の音に、東はしらむ東雲時。
駄右　夜明けぬうちに、
皆々　そんなら頭。
磯松　これ、伯父さま。（ト磯松つか〳〵と側へ行く。）
駄右　おゝ、（ト頭へ手をかけ、不便といふ思入あつて、）坊よ、さらば。
　〽引き別れ行く横雲や、鳥も塒を。
　ト捕手二人かゝるを、お才禮三立廻つて引附ける、駄右衛門死骸を見て愁ひの思入、三太兵衛磯松を圍ひ、名殘りを惜しむ、此の見得よろしく三重、浪の音カケリにて、

幕

小狐禮三（終り）

加賀見山再岩藤

かゞみやまごにちのいはふぢ

花見小袖の花車風流柳櫻を色縫のお柳の方に大領が日夜淫酒に丁子ぐるまその提灯の間違ひに忠義も仇に又助が隅田川原の奥方殺し誰白波の汐入堤へ捨てし局のよみがへりしかも小雨の古御殿に残る恨みの草履打計らず求女が本復に悦ぶお露が身の代の兼て謀叛の彈正へ一味なしたる一角が頼む主税の返り忠あつぱれ長谷部が捌にて惡人ほろび善人榮ふ細工は流々甚五郎がつくり上げたる彌生狂言

執權望月が
奸惡を照す
中老尾上が
烈女の光り

『骨寄せの岩藤』（加賀見山再岩藤）は南北の原作を改訂し、院本の鳥井又助の世話場を取合せたもので、安政七年（萬延元年）三月、作者四十五歳の時、市村座に上演された。明治の初めに『梅柳櫻幸染』なる名題によつて演ぜられたこともある。骨寄せの場の幕切で、岩藤の引込みがふわ〳〵と引込むので、ふわ〳〵とも稱される。

書卸しの時の役割は市川小團次（鳥井又助、局岩藤の亡靈）、岩井粂三郎（大領妾お柳、二代の中老尾上）、河原崎權十郎（多賀の大領、安田隼人、長谷部帶刀）、關三十郎（望月彈正、長橋右膳）、中村歌女之丞（息女花園姫、又助妹おつゆ）、右川白猿（花房主水、蟹江主税）、市村羽左衛門（花房求女）、市川米十郎（蟹江一角、若黨左五平）、吾妻市之丞（多賀の奥方梅の方、奥女中庵崎）、坂東村右衛門（醫者安達昌伯）、坂東又太郎（谷澤賴母）、關花助（谷澤數馬之助）、松本國五郎（柏木曾平太）等であつた。

挿繪にしたのは豐原國周筆、梅幸（五世菊五郎）百種の内の錦繪である。

大正十五年五月　　編者誌す


梅幸百種之内

加賀見山再岩藤（骨寄せの岩藤――七幕）

序幕

新清水花見の場

〔役名――多賀の大領、望月源藏、花房求女、谷澤賴母、同數馬、蟹江一角、同主税、柏木曾平太、小島勇藏、奴隅田平、近習大勢。奥方梅の方、妾お柳の方、奥女中牛島、同龜の戸、同木下川、同眞崎、腰元關屋、同待乳、同淺茅、同小梅等。〕

（新清水花見の場）――本舞臺三間の間、清水の舞臺、高欄附、見附彫物の扉、左右狐格子、上手石段、此脇山の張物、上下櫻の立木、是に段幕を張り、日覆より櫻の釣枝二段におろし、毛氈のかゝりし床几二脚並べあり、總て新清水花盛りの體。爰に奥女中龜の戸帽子つき　牛島供物を盛りし黑塗の三方を持ち、眞崎木下川同じなりにて立ちかゝり居る。腰元關屋同じ拵へ、待乳同じく供物の三方を持つて、小梅、淺茅立ちかゝりゐる見得、双盤入りの鳴物にて幕明く。と關屋龜の戸ちよつと立廻つて、

關屋　牛島殿、待たしやんせ。

牛島　こりや何故あつて私らを、さゝへこさへをしなさんすのぢや。
關屋　何故とは奧樣より、觀世音へ御奉納の此のお供物をさし置いて、先へ奉納しようとは、餘りといへば我儘ゆゑ。
待乳　誰が指圖で奧樣の、此の御供物をさし置いて、
淺茅　先へ奉納しようといふ、
小梅　其の供物の主といふは、
四人　誰さんでござんすえ。
牛島　誰でもない、殿樣の御意に入りにて、御殿では今飛鳥も地に落ちる、お妾のお柳樣。
龜の　たとひ奧樣であらうとも、殿樣よりの御指圖なれば、
木下　お前方の齒は立たぬ。
眞崎　悔しからうが私らの、跡から奉納。
四人　しなさんせいなあ。
關屋　さう聞いては猶の事、後へ引かれぬ此の供物、先へ奉納せねばならぬ。
牛島　いや、こなさん達が先へやつては、お柳樣が負も同然。

龜の　一ばんこつちが供物を持つて、引込ませねば、

木下　いとゞ低い鼻が、猶々低くなる故に、

眞崎　何でも供物はこちらが先、邪魔立てせずと、

四人　通しなさんせ。

闇屋　何ぞといふと我儘な、妾の癖に女中たち、常はともあれ此の供物は奥樣よりの捧げ物、負けて通すがお妾の風に柳の糸櫻、

牛島　所を通さぬ朋輩仲、寄るとさはるとけん〳〵と、雉子より猿と犬櫻、

龜の　その桃太郎の好みにも、花より團子各々は、日本一の若櫻。

木下　憎まれ役の私らは、花に嵐の鳥山櫻、

牛島　先へ行かねば、

四人　ならぬわいなあ。

闇屋　ならぬというてもやることとならぬ、此のお使を仕損じては、私ばかりか奥樣の第一お恥になることとなれば。

牛島　それはこつちも同じこと、お柳樣にひけは取らせぬ。

待乳　そんなら見事、こちらより、
甕の　先へ通つて見せませう。
淺茅　いえ／＼さうは、
腰元四人　ならぬわいなあ。
奥女四人　所を先へ。
腰元四人　やることならぬ。
奥女四人　なにを小癪な。
ト互ひに立廻りて、トゞ甕の戸閾屋を突き倒し、待乳が持つてゐる供物を引くり返す、
牛島　及ばぬことかさゝへ立て、それ見たことか肝腎の、
甕の　供物の花ぼろ引くり返せば、
木下　土に穢れた供へもの。
眞崎　御奉納にはなるまいが。
岡尾　これも誰ゆゑこなた衆が、あまりといへば狼藉故。
待乳　おゝ、申し、腹も立たうが。（ト留めるを見て、）

牛島　さあ、留めるなら、留めて見ぬか。

亀の　もう手出しは出來ないか。

木下　それでこちらが勝ちなれば、

眞崎　御寶前へ少しも早く、

奥女
四人　さあ、ござんせいなあ。

　　ト双盤にて、四人供物を持ち上手へはひる。跡皆々口惜しき思入にて。

關屋　お心を籠めし奥樣の御奉納物、

待乳　落花狼藉此の樣に、

淺茅　三方まで折り損ね、

小梅　あまりといへば不作法な。

關屋　此の仕返しは跡追つかけ、あの御供物を打返さん。

待乳　それで腹癒せ、少しも早う。

關屋　皆さん、ござんせ。

三人　心得ました。

ト皆々身拵へして行きかゝる、此の時奥にて、

梅の　皆のもの待ちやいなう。

關屋　あのお聲は、

皆々　御臺樣。

ト三味線入りの音樂になり、梅の方裲襠衣裳、奥方の拵らへ、腰元大勢附添ひ、谷澤頼母更けたる拵へ、上下大小谷澤數馬同じく上下大小にて附いて出來り、

頼母　枯れたる木にも花誘ふ、大悲の光り色添へて、

數馬　盛りまばゆき此寺の、花に嵐の落花狼藉、

頼母　腹も立たうが腰元衆、控へめされて御意を待たれよ。

四人　はアはツ。

ト控へる、梅の方思入あつて、

梅の　繰返しいへれどもおかぬ糸櫻、歸るさ知らぬ花のもと、立騒いではしたなう、たしなんだがよいわいなう。

關屋　御臺樣のお詞なれど、今朝程仰せ付けられましたる、御供物を奉納いたさんと、只今これへ參り

し所、お柳殿の召使が、是も供物を奉納に、跡からこゝへ參りながら、

待乳　御寵愛を笠に着て、先へ參らうといたせしゆゑ、

淺茅　さゝへましたを根に持つて、御奉納の御供物を、

小梅　打返したる慮外故、

關屋　見るに忍びず今の仕儀。

四人　お許しなされて下さりませ。（ト數馬これを聞き、きつとなつて）

數馬　すりや何と申す、奥樣御奉納の御供物を、跡から持參いたしながら先へ奉納いたさんと、かゝる狼藉いたせしとか。殿のお覺えよき儘に妾の身にて奥方をないがしろになすお柳ゆゑ、上を學ぶ下とやら、こりや打捨てゝは御恥辱、拙者が參つて此返報を。

と數馬立懸るを、

梅の　數馬待ちや。

數馬　てもあまりなる、無禮ゆゑ。

賴母　こりや〳〵悴控へぬか、奥樣のお詞なるぞ。

數馬　それぢやというて。

賴母　こりや、待てと申さば、まあ〳〵待ちや。
數馬　はあ。（ト控へる。）
梅の　かゝることを言ひ募りなば、自らがお柳を嫉み、悋氣のやうに聞ゆる間、たゞ只何事も我身一つに料簡すれば濟む程に、まあ穩便にしやいなう。
賴母　さすがは大家の奧方に、おなり遊ばす御器量備はり、寛仁大度の思召し、恐れながら谷澤賴母感心いたしてござりまする。

ト矢はり音樂になり、下手より蟹江一角上下大小にて出來り、同じく主税つかみ立の若衆、上下大小にて出來り下手に控へ、

一角　はツ、今日は快晴の仕り、花の眺めも又一入。
主税　日本晴の靑空、長閑な日和の御遊覽、
一角　恐悅至極に、
兩人　存じ奉りまする。
梅の　大悲の庭の花盛り、よい鬱散をしますわいの。
賴母　これは〳〵蟹江御親子、今日のお先固め。

數馬　お役目御苦勞に存じまする。

一角　谷澤氏にも御苦勞千萬。それはさておき、只今あれなる木蔭にて委細の樣子を承り、一角めも感心いたしてござる。が餘りといへば奥樣が御勸辨強いと申すもの。お柳殿とは申しながら、もとの起りは殿樣の御寵愛が過ぎる故、それを此儘打捨ておかば終には國家の亂れとなり、佞人讒者の世となりますれば、ちと殿樣へ御諫言をなされましたがよろしうござる、それが則ちお家のお爲め。

主税　こりや兄貴の言はるゝ如く、いつぞや我君鷹野の折柄、羽黒水の庵室より源藏諸共お柳殿を館へ引取りありしより、夜晝の分ちなく淫酒にふける殿の御身持ち、こりや御異見をなさらずば、相成りますまい。

梅の　一角の詞なれど、天子には十二の后、諸侯には七人ありといふ、妾狂ひは珍らしからず、そりや自らに悋氣をすゝめ、女子の操を破らすか。

一角　全くもつて。

梅の　强ひて殿へ申しなば、七去の一つ自らは離緣になるまいものでもない、それをみちは悦ぶか。

一角　さあ、それは。

梅の　國家のためにならぬこと、自らを待たずとも、なぜ其の方が御諫言申さぬ。

一角　さあ、それは。

梅の　はてさて、忠義な者ぢやなあ。

一角　へゝい。（ト一角是非なく控へる。）

賴は　それはしかれ、大領の御妹君花園姫樣、此程より御不例によつて、吉凶告ぐる多賀家の重寶、金鶏の香爐を寶前にさゝげ、則ち御病氣平癒の御祈念。

數馬　香爐は持參仕り、先刻寶前へさゝげましてござりまする。

主税　すりや香爐持參のその役目、求女殿が勤められしとな。

一角　大切なる香爐をば、なまぬるき求女が持參いたせしとは、あぶないものだ。

梅の　花園姫はその以前經元君と御許嫁、御縁を組みし上からは再縁なさで尼となり、義經公御親子の菩提を訪ひたい豫ての願ひ、そのお望みの屆かぬを思ひ煩ふ病の床。

關屋　折角お結びなされたる、互ひの御縁も淺黄櫻、

侍乳　お行方さへも白雲に、雪と見まがふ花の空、

淺茅　[illegible]に隔つの便り知れねば闇櫻、

小梅　その黒髪のお姿も、墨染櫻のお願ひとは、
關屋　まばゆき花も散りかゝる。
侍乳　花に嵐のお身の上、
皆々　おいとしいことでござりまする。
一角　まだなま若い御身にて、御剃髪とは悪い思召し、御再緣をなさるゝ方が、先づ當世と申すもの。
主税　左樣々々何んぼ當時切髮が、數多諸侯にござるとて、嫁入り盛りの姫君が御剃髮なさるとは、
一角　何ぼ莟の姫君でも、聞けぬことではござるわい。
主税　左樣でござる。
梅の　折角佛へさゝげし供物、受け給はぬはちかぐに、心にかゝる無常の嵐、
賴母　やあ。
梅の　無常菩提を祈念の香爐、寶前へ供へし上は、
賴母　御祈念の刻限まで、
一角　奥樣には暫時の間、

ト此時花道の揚幕より、絹羽織の侍出來り、花道にて、

皆々　御休息遊ばされませう。

侍　はッ、申し上げまする。

一角　何事なるぞ。

侍　只今殿樣、御柳の方源藏殿と共々に、御參詣にござりまする。（ト言ひ捨て、花道へはひる。）

梅の　最早我君、御入りとな。

一角　それ何れも、お出迎ひを

皆々　畏りました。

ト誂への賑かなる出の鳴物になり、梅の方始め皆々出迎へる。花道より多賀の大領、羽織着流し、小さ刀にて、お柳の方裲襠妾のなり、望月源藏上下大小、小島勇藏大領の刀を持ち、柏木曾平太、奴關田平、供廻りの侍大勢、中間附添ひ出て花道にて、

大領　花を踏んでは同じく惜しむ少年の春、峯も麓も白妙の。

お柳　花の吹雪のそれならで、踏み迷ひたる法の道、

源藏　そい雪山の雪なぶり、降り替りたる花衣、

勇藏　いつか霞と引きかへし、君が惠みの有明櫻。

會平　夕暮唄ふ隅田川、花に端唄の八重櫻。

隅田　その三味線の音の冴えた駒に三筋の糸櫻。（ト舞臺の皆々辭儀をなし、）

梅の　外に類ひも嵐山、吉野初瀬の眺めをも、

數馬　一つに一目千本の、

賴母　新清水の花盛り、

主税　花を主人の設けの席へ、

大領　皆も一緒に、

皆々　先づ入らせられませう。

ト大領源藏上の方へずつと通り、お柳の方、梅の方へ會釋して下手へ控へる。その外皆々は後ろへ住ふ。

お柳　これは〳〵奥様には、お早うお出で遊ばしました。

梅の　お柳殿にも今日は、ようこそ、さあ〳〵これへ〳〵。

お柳　いえもう、それでは高上り、憚り多うござります。（ト下手の方へ住ふ。）

大領　これお柳、そこにゐては話しが出來ぬ、予が側へ參れ。

お柳　それぢやと申して、奥様をさしおいて。
梅の　何んの、こちらに遠慮はない。
お柳　ぢやと申して。
大領　苦しうない、參れと申すに。
一角　殿のお召し、お柳どの。
才佐　斟酌せずと、
兩人　急いでこれへ。
お柳　左様なら、御免遊ばしませ。
ト誂への合方になり、お柳の方梅の方へ會釋なし、大領の側へ住ふ、腰元皆々思入、此の時奥女中出來り、
牛島　これは／＼お部屋様には、只今お出でなされましたか。
龜の　奉納のあなたのお供物。
木下　誰様よりも御寳前へ、
眞崎　第一番に私共が、

皆々　お供へ申してまゐりました。
關屋
皆々　ても、憎らしい。
梅の　あこれ。
ト押へる。腰元皆々口惜しき思入。奥女中、よい氣味だといふこなし。
源藏　我君御覽遊ばしませ、實に白雲と疑ひの今を盛りの櫻花、かやうな見晴しました所は、又お館のお庭と違ひ、餘程興が深うござりまする。
大領　いかさま春も麗かに、一入まさる此の風情、てもよう咲いたことではないか。
お柳　誠にこれが、咲きも殘らず散りもせず、花に花咲く此の眺め、
大領　これを題に歌俳の催し、皆も趣向いたさうぞ。
一角　畏つてござりまする、無風流なるわれ〳〵ども、
主稅　駄洒落か二字は附けようが、三十一文字は覺束ない。
賴母　日頃風流の我君樣、
數馬　及ばぬことではござりまするが、
勇藏　てにはの合はぬも又一興。

曾平　此の曾平太は風流の、歌は不得手なその替り、唄ふ唄なら大の得手もの、ちよつとした所がかやうでござる。

ト曾平太何か唄をうたひ、ちよつと踊る。女形皆々笑ふ。

隅田　曾平太樣の久しいもの、唄と踊りは持病と見える。

曾平　えゝ、何をおのれが。（ト立懸る。）

一角　こりやく隅田平、これより我君花屋敷へ御入りあれば、其の方にはかねて申附けたる手番ひ。

隅田　すりや下郎めは、是より直ぐに。

一角　心を附けて、な。

隅田　畏つてござりまする。

トやはり音樂にて、一角と顏見合せ思入あつて、隅田平下手へはひる。上手より花房求女、楊貴妃な書きたる額を持ち出來り、下手へ出て、

求女　我君樣には御機嫌の體、恐悅至極に存じ奉りまする。

大領　おゝ花房求女、見れば額を持參なし、奉納なすのか。

求女　いえ、誰人の奉納なるか、あまり見事な此の額面、君の御覽に供へんと持參仕つてござります

る。

ト大領の前へ出す、大領見て、

大領　ムヽ、こりや唐土の玄宗皇帝が、色香に迷ひし楊貴妃ならずや。

求女　とくと御賢覧下さりませう。

大領　何と。(ト誂への合方になり、)

求女　和漢の文に富み給ふ、我君様へ某が、嘴青き身を以て申すも恐れ多けれど、夫の白氏文集に、狐女に化したるはさまでの害はなさゞれども、女の狐になりたるは恐しとの古人の詞、既に唐土の玄宗皇帝楊貴妃が色香に迷ひ、諫言なせし忠臣の詞は却つて耳に逆らひ、日毎淫酒に耽りたる果は、安祿山の亂となる、これぞ女の狐の業。(トお柳の方へ思入あつて、)恐れながら我君様、御賢慮めぐらし下さりませう。

トよろしく思入にて言ふ。大領ムツとなし、

大領　生若輩の身を以て、我に向つて入らざる諫言。

求女　でも御家の御爲故。

大領　二言と申すな、聞く耳持たぬ。

求女　はッ。（ト求女控へる。源藏前へ出て、）

源藏　はッ、我君へ折入つて、源藏お願ひがござりまする。

大領　はて改まつたるそちが詞、してわれへの願ひとは。

源藏　今日よりお柳諸共、お暇願ひ奉る。

大領　何と申す。（ト本調子の合方になり、）

源藏　和漢に例ある事なれども、今求女殿の詞に、夫の楊貴妃にお柳をよそへ、君のお心迷はぬやう詞巧みに御諫言。まつた楊貴妃には楊國忠といふ拙者の如き兄ござれば、何とやら耳障り、我々兩人心を合せ、君へ忠義を盡せども新參の身の悲しさは、古參の衆には我君を迷はすやうに思はれませう、御取立の御恩をば報はぬは殘念ながら、身を引くが則ち潔白。

（トお柳の方へ目配せなする。）

お柳　賤しき身にて我君の、お寐間を穢す宮仕へ。今源藏殿の申す如く、今參りのお朋輩の心を兼ぬる氣苦勞も、唯お情にほだされて、今日までお伽をなしたれど、皆樣方の思召し。

源藏　下世話に申す玉の輿にて、此上もなき立身ながら、申さば黃金で作りたる籠におかれし鳥同然。

お柳　やはり野末の狹に住み馴れし、賤が伏家に浮世を避け。

源藏　暮しさへすれば口の端に、かゝる出世が則ち身の害。
お柳　故郷へ歸りていつの世か、
源藏　御恩を報じ奉らん。
お柳　何卒お暇給はるやう。
源藏　偏にお願ひ申しまする。（ト兩人よろしく思入にていふ。大領こなしあつて、）
大領　いや暇は遣はさぬ、彼等が何を申さうとも、心に叶ひしそち達兩人、片時も傍は放されぬ。
源藏　お詞返すは恐れあれども、賢き君の御眼識にて、御取立になりますれど、俄かに出世の拙者故、やゝともすれば古參の衆に、侮らるゝも何程か、口惜しうござりまする。
大領　すりや小祿故其の方を、古參の者が侮るとか。よいわ、只今加增申し附くるぞ。
源藏　え。
大領　誰そあるか、料紙持て。
近習　はッ。
ト近習硯箱に紙をのせ持參る。大領は墨附を書く、立役皆々顏見合せる。
大領　源藏近う。（ト投げてやる。源藏開き見て、）

源藏　や、こりや、百萬町のお墨附。
大領　おゝ今日より其方へ、國家を治める執權職を申附くるぞ。
源藏　はゝ、不肖の某へ大役仰せ蒙りしは、身に餘りたる御惠み、有難う存じ奉りまする。
賴母　すりや、源藏殿へ執權職を。
數馬　仰せつけられし其上に、百萬町の、
皆々　御加增とな。
大領　これでは暇は、取るまいがな。
源藏　はッ。（ト源藏につたり思入あつて、墨附をいたゞき懷中する。）
一角　さて／＼殿の御覺え目出度く、
主税　御加增ありし源藏殿。
皆々　恐悅申し上げまする。（トばた／＼になり、上手より近習の二走り出來り）
近二　はッ申上げまする。一大事にござりまする。
皆々　なに、一大事とは。
近二　只今迄寶前に供へありし、金鷄の香爐紛失いたしましてござりまする。

求女　なに金鷄の香爐紛失とや。
賴母　たやすからざる御家の重寶。
數馬　門戶を打つて出入を留め、
勇藏　きつと詮議いたしてよからう。
近二　はッ。（ト上手へはひる。）
求女　さうぢや。（ト求女立ちかゝる。）
一角　こりや、うろたえて何處へござる。
求女　寶の盜賊、捕へる爲め。
一角　これさ、それがうろたえだ、かゝる品を盜むものが、貴殿の尋ねに行くのをば、そこらにうろうろ待つて居らうや、たはけたことを。
主稅　求女殿は香爐を守護なす役目、あぶないものと思ひしが、案に違はず、やあやあお手柄々々。
一角　入らざる所へ口を出し、ちんぷんかんの長談義で、おのが守護なす大切の香爐を盜み取られしとは、いやはや感心仕つた。（トこれにて求女きつとなり）
求女　さうぢや。（ト腹を切らうとする。）

數馬　これ待つた、求女殿。（ト留める。）
梅の　こりや求女、うろたえしか、そちが命を捨つるとも、失ひし寶は出ぬぞよ。
求女　ぢやと申して。
梅の　はて、急く場所でない、何事も我君樣の思召し、ぢつと蟄して居ませうぞ。
求女　はツ。（ト是非なく控へる。）
大領　われに諫言なせしといひ、重器を失ふ憎くき求女、これにて成敗いたしてくれう。
源藏　して我君の、
敵役
皆々　御成敗は。
大領　予が是れにて手討にいたさん。
立役
皆々　お手討とな。（ト立役是非なき思入、求女しなく〳〵と前へ出て、）
求女　此身の越度に我君の、御手にかゝるは武士の冥加、有難く存じ奉る。
　　ト眞中に住ひて覺悟のこなし、大領刀を持ち立ちかゝり、求女を見て思入あつて、
大領　觀世音の靈地にて、血をあやなすは佛地の恐れ、憎きながら求女は此儘、追放申附くるぞ。
梅の　それぞ誠に觀世音の、大慈大悲の御なさけ。

關屋　我君樣の思召し。
皆々　有難う存じまする。
一角　それ、お暇の出た上からは、求女が大小取上げめされい。
主稅　心得ました。（ト諸士求女の大小を取上げ、一角の前へ置き。）
曾平　いざ求女殿、御法でござる。
求女　はツ。（ト肩衣をとる。）
賴母　たゞ此上は紛失なせし、香爐の行方を詮議が肝要。
求女　再び手に入り、時到らば、何卒君へ歸參の儀。
梅のお　はゝ、取成しいたし遣はさん。
求女　はゝ、仰せに從ひ、身を粉に碎いて詮議をなさん。
一角　いや、詮議などゝはかたはら痛い。
皆々　はゝゝゝ。（ト嘲り笑ふ。）
關屋　ても憎らしい。
腰元
皆々　蟹江樣。

敵役　皆々　求女殿の贔屓して、
お柳　君の御前で、
梅の　そち達までもはしたない、たしなんだがよいわいなう。
源藏　何はともあれ最前より、此の境内に餘程の間、
一角　最早夕景に及びますれば、
主税　花屋敷へ御座を移され、
脊平　御休息あつて、
皆々　然るべう存じまする。
大領　如何にも、休息いたすであらう。さあ、皆も一緒に。
お柳　先づ、奥樣より。
梅の　いや、そなたは先へ。
お柳　左樣なれば。（ト會釋する。）
源藏　我君には、先づお立ち遊ばしませう。
皆々　はア、、、。

ト唄になり、大領先に、お柳の方、源藏、一角、主税、佐平太、腰元上手へはひる。跡より梅の方求女へ思入あつて、腰元皆々頼母、數馬、勇藏附いてはひる。跡に求女一人殘り思入あつて、

求女　花開かんとすれば風に散し、忠臣諫めんとすれば讒者覆ふ、淫酒に長ぜし君の御身持、まつた香爐の紛失なせしも、佞人讒者の皆仕業。（ト此の時風の音、櫻の花散る、これを見て、）あ、嵐は花の敵ぢやなあ。

トぢつと思入、地藏經のやうなる鳴物になり、求女下手へはひる、音樂になり、石段より隅田平頰冠り、尻端折りにて出來り、あたりを窺ひ香爐を出し、

隅田　一角樣に頼まれて、此の内陣へ忍び込み、まんまと首尾よく奪ひとりし、多賀家の重寶金鷄の香爐、手渡しなさば褒美はずつしり、こいつはいゝまんが直つて來た。どれ、ちつとも早く、さうだ。

ト石段を下りて行きかける。此時石段の上へ以前の數馬出て、

數馬　隅田平、待て。（ト隅田平びつくりして、）

隅田　待てとは何ぞ、用でもあるか。

數馬　おゝ用も用、大事の用だ、隱し持つたる一包み、正しく中は金鷄の惡事を告ぐる一番鷄、その香爐を渡して行け。

隅田　いゝや、知らねえ、覺えはねえ。香爐とやら香具とやら、見世物ならば奥山だ、木戸へかゝつて聞いて見ろ。

數馬　その盛切りの晝鳶、香爐をさらつて高飛びと睨んでおいた鵜の目鷹の目、知らぬといへば羽がひじめ、息の根とめても取らねばおかぬ。

隅田　盜んだ覺えはねえけれど、さう言はれたらこつちも意地、高の知れたる椋鳥め、さゝへた手をば放し鳥、いやだなんぞとぬかすが最後、軍鷄の蹴合ひの一番勝負、けづめにかけるぞ覺悟なせ。

數馬　見事われしが。

隅田　おんでもないこと。

數馬　何を小癪な。

ト早き大拍子になり、ちよつと立廻つて誂への鳴物になり、石段の立廻りいろ〳〵あつて、よき程に上手より、以前の主税出來り、數馬隅田平の兩人と立廻りながら双方をきつと留め、

主税　そちや下部の隅田平。

隅田　主税樣。（ト隅田平手早く懷中より香爐を出し）此の香爐を、ちつとも早く。

主税　おゝ合點だ。

ト取りにかゝるを、數馬これを隔てゝ、

數馬　お家に仇なす蟹江主稅、やはかおのれに渡さうか。

主稅　何を小癪な。

ト是より大拍子になり、三人立廻りあつて見得、三味線入りになり、石段の立廻りよろしくあつて、

ト、主稅香爐を持つて、逸散に向うへはひる。跡より數馬隅田平やはり右の鳴物にて、立廻りながら花道へはひる。又大拍子になり、上手より以前の曾平太出て、あたりへ思入あつて、

曾平　やれ〳〵、けふは殿の御供にて、此の清水へ花見の遊山に參りしが、咲く花あれば散る花ありとあの求女は香爐の越度によつて屋敷は追放、それに引替へ源藏殿は一足飛びの執權職、身共も何ぞ手柄をなし、どうか出世がしたいものだ。

ト此内以前の源藏、よき程に二重の上手へ出て、求女の大小を風呂敷に包みて持ち、

源藏　こりや曾平太殿。（ト平舞臺へ來る、曾平太見て）

曾平　や、貴殿は望月源藏殿、いつの間に。

源藏　只今これへ參りし所、幸ひ御身にそれがしが、お頼み申すことこそあり。

曾平　扨こそ手蔓に。

源藏　や。

曾平　いやさ、扨は何ぞ急な御用でござるか。

源藏　さればでござる、最前殿に求女殿が追放仰せ附けられしが、御法とあつて此大小を取上げおきましたが、よく見れば我君よりの拜領物、御紋ぢらしを其儘に、粗略になすも恐れあり、それゆゑ身共が預かり申して、目立たぬやうに身が屋敷へ、何卒其許御持參なされては下さるまいか。

曾平　委細承知いたしてござる。して、貴殿には。

源藏　殿に附添ひ、程なく歸宅。（ト曾平太に件の大小を渡す。）

曾平　然らば身共は、これより直に。

源藏　御苦勞ながら。

曾平　いざ、お先へ參る。

ト大拍子にて、曾平太件の大小を持ち花道へはひる。源藏これを見て思入。此時本釣鐘を打込み、よろしくこなしあつて、

源藏　今鳴る鐘は最早入相、晝の櫻と事變り、夜櫻は又一興、盛りまばゆき清水の、花諸共にそれがしが開く武運も今日より、執權職の此の墨附、（ト以前の墨附を出して思入。）然し僅かな百萬町、こん

なことでは。（ト墨附を投げようとする、此時後ろにて、）

大勢 殿のお立ち。

　　トこれを聞き、墨附を頂き、懐中する。

源藏 ム丶丶（ト笑ふを、木の頭。）ハ丶丶丶丶。

　　ト此の模樣靜かなる行列三重にて、よろしく

ひやうし　幕

二幕目

汐入馬捨場の場
同　骨寄怪異の場

〔役名――長谷部帶刀、望月彈正、馬屋別當まや助、百姓鍬作、在所嚊おすぎ、花房求女、岩藤の亡靈、二代の中老尾上、又助妹おつゆ等。〕

（汐入村馬捨場の場）――本舞臺三間の間常足の二重、藁葺き屋根、竹の本緣附き、向う一間の押入戸棚、三尺の佛壇、崩れかゝりし鼠壁、下の方圍爐裡、自在に罐子をかけ、籠の中に茶碗入れあり、上手に一人釣りの紙帳を釣り、緣端に擂鉢の手水鉢、上の方丸太の木戸、多賀家馬捨場といふ榜示杭、

下の方、藁小屋、總て汐入村多賀家馬捨場番小屋の體、こゝに厩別當まや助、木綿やつしなり、よいよいになり、こゝへ來てゐる拵らへ、笑ひ本を見てゐる。緣端在所の嬶おすぎ、百姓鍬作、繻袢股引百姓なり、兩人ともはだしにて鋤鍬を持ち、農業に出たる拵らへ、煙草を呑み居る。臼挽唄、稽古囃子にて幕あく。

すぎ　これまや助どん、櫻が咲いたらめつきりと、日が長くなつて來たの。

鍬作　野良仕事にやあいゝけれど、こなたなざあ大儀だらう。

まや　さあ知つての通り足が利かず、櫻が咲いても見にも行かれず、寐たり起きたりしてゐるが、町と違つて藪蚊が多く、もう三月から蚊帳を釣らにやあ快く晝寐も出來ねえ。

すぎ　ほんにあつたかになつて來て、やれ嬉しやと思ふと蚊が出るし。

鍬作　又蚊が引込んで寐よくなると、筑波おろしでこたへられず、

すぎ　樂の出來ねえ世の中だね。

まや　違えねえ、樂は出來ねえ、おれなぞもその以前多賀の馬屋に居た時分は、朝も六つから馬場の掃除、夜も裾をつかつてやつたり、飼葉の世話や何やかやで、體に樂はなかつたが、錢が自由に遣へるから好きな酒をたらふく呑んだが、足が利かなくなつてから、この汐入の馬場へ馬同樣に捨

てられて、體は樂になつた代り、錢がねえので酒が吞めねえ。

すぎ　しかしお前の體にやあ、錢のねえのが却つてよからう、錢があつたらつい吞むので、猶々病か甲くならう。

鍬作　おれも始終は仲間だが、いつち利くからよさつしやい。

まや　なに、酒よりやあこゝへ來て、一と夏唐茄子を喰ひつゞけたので、それでよい〳〵になつたのだ。

すぎ　唐茄子を喰ひ通して、それでよい〳〵になるならば、御殿女中は皆よい〳〵だ。

鍬作　ほんに唐茄子と薩摩芋は好きなものだ。

まや　まだも、好きなのが此の本だ。（ト笑ひ本を出す。）

すぎ　おや〳〵、こりやあ氣の悪い本だ。（トおすぎ本を取つて見て。）

鍬作　よい〳〵にやあ大毒だ、錢もねえくせ高からうに、なんでこんな本を買つたのだ。

まや　なに、そりやあ買つたのぢやあねえ、此間庄屋の息子どんが、どこかの娘を引張つて來て、おれが内を貸せと言はつしやるから、いやとも言はれず貸したらば、紙帳の中へ娘を引込み、これを手本にさつしやつて、又來るまで置いてくれと、おれに預けて行かつしやつたのだ。

鍬作　はゝあ、それぢやあ庄屋どんのずぼけ息子が、出合をしたのか、いや油斷のならねえことだ。

すぎ　娘はどこの娘だか、何んぞおごらせて遣らねばならぬ。
鍬作　小中飯に一升買はせべい。
すぎ　それがい〻〳〵。(トやはりおすぎ本を見てゐる。)
まや　もし、一升買はせたら、二合ばかりわしにも呑ましてくんなせえ。
鍬作　足の利かねえのに、酒は毒だ。
まや　なに、これは大丈夫だ、これ此通りだ〳〵。(ト立上り、飛んで見せる。)
鍬作　あ〻危ねえ〳〵。(トまや助ひよろ〳〵して轉ぶ)　それ見たことか、轉んだわ。
まや　あ〻いたい〳〵、痛いのが知れるから大丈夫だ。
鍬作　痛いのが知れにやあ死んだのだ。
まや　なんでもい〻から、呑まして下さい〳〵。
鍬作　承知だ〳〵、寐酒に持つて來てやらう。さあ、おつかあ行かうぢやねえか。
すぎ　え〻今肝腎のところだに。
まや　又あした來て見さつしやいな。
すぎ　それぢやあ色氣より、呑氣とせうか。

鍬作　早く行つて一升買はせよう。

ト又臼挽唄、稽古囃子になり、兩人花道へかゝる。花道より花房求女五十日鬘、着流し大小、又助妹おつゆ櫻餅の籠を提げ出來り、花道にて行き合ひ、

求女　ちと物が尋ねたいが、多賀家の馬捨場はどこでござるな。

鍬作　あい、向うの小家の後ろでござります。

求女　そこに以前伯樂をいたしをつた、まや助といふものはをらぬかな。

すぎ　そりやあよい〳〵の男でござりませう。

求女　いかにも、左樣でござる。

すぎ　そんなら、向うの内でござりまする。

求女　それは忝うござる。（トおすぎ鍬作行きすぎ）

すぎ　これ、あの衆も出合ぢやあねえか。

鍬作　氣のわるい話しだ。

求女　えゝ、なんでござると。

兩人　いや、こつちのことさ。（ト兩人花道へはひる。）

つゆ　もし、こゝは何んといふ所でござりますえ。

求女　隅田川の向河岸で、汐入堤といふ所ぢや。

つゆ　淋しい所でござりますな。

求女　田舍はどこもこんなものぢや。

ト右の鳴物にて、兩人本舞臺へ來り、まや助を見て、

これ、そこにゐるのは、お厩のまや助ではないか。

ト　まや助求女を見て、

まや　や、さうおつしやりますは、求女樣でござりますか。ようお出で下さりました、先々これへ。

求女　然らば許しやれ。（ト合方になり、二重へ求女おつゆ上り、）さて、いつもながら替ることもなくて。

まや　いえ〳〵、替らぬどころか、只今では替り過ぎた一本杖、

求女　いや、そりや手前ばかりでない、身共は今では浪人なし、面目ない此の姿。

まや　そのことは此間馬屋の者に承はり、御恩になつたあなたゆゑ、お尋ね申しに參りましても、御存じのよい〳〵ゆゑ、思つたばかりで心に任せず、御免なされて下さりませ。して此の御娘御は、

求女　これはそちも存じて居る、以前我宅に勤め居つた鳥井又助が妹、

つゆ　いえもう、無調法ものにござりますれば、お心安くお願ひ申しまするわいな。

まや　お前の兄御とは、仲よしであつた。して旦那様には、唯今にては。

求女　主従の縁により、又助が宅に同居いたしをりまする。

まや　左様でござりまするか、して今日は、何處へお出でなされました。

求女　けふは去年はかなく死んだ、中老尾上が忌日ゆゑ、墓參りに參つたが、大分參詣があつた様子ちや。

まや　それはよくお參りなされました。同じ其の日に死なしやつても、善と惡とは仕方のないもの、尾上殿へはその様に多くの人が參らつしやれど、岩藤様は此裏の馬捨場へ死骸を捨てられ、誰一人その墓へ來るものがござりませぬ。

つゆ　え、すりやあの岩藤様とやらは、此の裏へ亡骸を。

求女　さあ、畜生同様な心ゆゑ、死骸は寺へ葬らず馬捨場へ捨てられて、鳶や烏の餌食になつた。

つゆ　はかないことでござりましたなあ。

まや　あのやうにされたのを、悔しく思ふ念が殘り、岩藤殿の骸骨から、雨の降る晩はほう〳〵と、青い火が燃えまする。

つゆ　あれ、氣味の悪いことを。(ト求女の傍へよる。)

求女　いかなる恨みの一念で、お家へ祟りをなすか知らぬ、思へば憎き悪人め。

つゆ　あもし、聞えると悪うござります。

まや　なに、背になつて居りますから、聞える氣遣ひはござりませぬ。つい話しに取り紛れ、まだお茶を上げませなんだ。(ト立懸るを、)

求女　あこれ、不自由な身でよしにしやれ。(トおつゆ櫻餅の籠を出し、)

つゆ　お珍らしくもござりませぬが、これはお土産でござります。

まや　これは〳〵、有難うござります。

求女　然し、そちには宗旨違ひだ。

まや　いえ、只今では此方でござります、まづお茶受けに開きませう。(ト籠をあけ、二人の前へ出し、)どれ、お茶を一杯入れて上げませう。(ト言ひながら立上り、下駄を履くを見て、)

求女　これまや助、何處へ行くのだ。

まや　はい、庄屋殿へ行つて、茶を貰つて來ます。

つゆ　あゝもし、それには及びませぬわいな。

まや　なに、すぐ隣りでござります。
求女　此の隣りに家は見えぬが。
まや　はい、隣りと言つても四五町ばかり。どれ、飛んで行つて參りませう。
ト稽古囃子にて、まや助杖を突き、ひよこ〳〵と花道へはひる。
求女　あ、よせばよいのにあの足で、急に行つても來られまいに。
トなまめきし合方になり、おつゆ思入あつて、
つゆ　遲い程がよいけれど、（ト求女へ思入あつて、）怖い話を聞いたので、後ろが見られてなりませぬわいな。（ト氣味の惡きこなし。）
求女　それ、白いものが。（ト求女おどす。）
つゆ　あれ、（ト求女の膝へ取り附き、）もし、白いものとは。
求女　紙帳が、釣つてあるといふことよ。
つゆ　びつくりいたしましたわいな。
求女　內には誰ぞ、寐てゞもゐるか。（ト紙帳の內を見て、）枕と蒲團があるばかり、こゝらは蚊が多いゆゑ、それで紙帳を釣つておいたか。

つゆ　ほんに藪蚊が參りますわいな。（トおつゆ求女の周りの蚊を追ふ。）

求女　ちよつとしても此樣に、心を附けてくりやる親切、兄又助はその以前、奉公なせし恩もあれど、さもない身にて厚い世話、實に嬉しう思ふわいの。

つゆ　いえ〳〵あなたのお世話をいたしますは、わたくしの身では嬉しいことでござります。

求女　いや嬉しいこともあるまいが、假令心でうつ〳〵と厭に思つて居ようとも、そなたの樣にいうてくれると、嘘僞りでも嬉しいわいの。

つゆ　何の嘘いつはりを申しませう、わたしやいつぞや觀音樣で扇を拾うたその時に、かういふ御緣のお方と知らず、ふつとお顏を見た時より。

求女　え。

つゆ　どうぞあなたのお側にゐて、せめて御膳のお給仕でも、したいものと思うたる念が屆いてわたしの嬉しさ。

求女　そんならほんまに、此のおれが。

つゆ　お世話が仕たうござりますわいな。

求女　おれも世話になりたいわいの。

ト求女おつゆへとんと背中を寄せる。おつゆぞつとして嬉しき思入れ

つゆ　もし、まや助殿とやらは、もう歸りませうかいな。

求女　まだめつたには歸るまいが、かうしてゐるも退屈ぢや。これ、そこに本があるではないか。

つゆ　はい、これでござりますか。（ト以前の笑ひ本を取つて出す、求女開き見て、）

求女　や、こりや見事な畫だわえ。

つゆ　もし、何の本でござります。

ト おつゆ求女の持つて居る本をのぞきびつくりなし、恥しき思入にて俯向き、

いやな本でござりますね。

求女　おぬしは嫌ひか。

つゆ　はい、嫌ひでござります。

求女　嘘ばかり。（ト背中を叩き、求女おつゆに寄りかゝり、）これ、ちよつとこゝを見や。

つゆ　いえ／＼、見たうござりませぬわいな。

求女　いやなればよしやれ、おれ一人で見る。成程これは蚊がさすわ、こゝで本は見て居られぬ、おつゆ紙帳の中へはひりやいの。

つゆ　いゝえ、わたしや蚊にさゝれても、こゝがよろしうございます。
求女　はて、まや助の歸るまで。（ト手を取る。）
つゆ　それぢやというて、あなたと二人。
求女　そんならいやか。（トおつゆ振拂ひ、）
つゆ　お恥しうございますわいな。
求女　いやなら藪蚊にさゝれたがよい。

ト求女紙帳の中へはひる。跡におつゆはほつと上氣せし思入。合方きつぱりとなり、おつゆ紙帳へはひらうか、よさうかといふはづかしきこなしあつて、思ひ切つて紙帳へ手をかける。これにて稽古囃子にて道具廻る。

（汐入堤多賀家馬捨場の場）――本舞臺一面小高きしゆろ伏せの土手、上の方折廻し玉椿の垣、卒塔婆を結ひ込み、内に崩れかゝりし藁屋根、鼠壁、柳の立木、同じく釣枝、向う同じく玉椿の垣、後ろ黑幕、下の方古き卒塔婆垣、草土手所々に誂らへの骨、腐れ切つたる小袖のきれあり、總て汐入堤多賀家馬捨場の體、道具半程より、捨鐘にて道具留る。と一ツ鉦凄味の合方になり、花道より二代の

尾上、丸髷八丈縞の着附、お納戸刺繍入りの帯、お初の拵へにて、短刀をさし襷の入りし花手桶、水晶の小さき珠数を持ち、白緒の草履にて出て來り、花道に留りこなしあつて、

尾上 替り行く浮世の様と淵瀬川、流れて早き月と日も廻り〱て早や一歳、旦那様の御一周忌、以前の初が姿にて供をも連れずたゞ一人、御墓參りの戻り道、同じ月日にお主の敵、御家の仇の岩藤殿、我手にかゝりし亡骸は、これなる野末に捨てしと聞く、せめてあの世を助かる爲め、回向をなさん、さうぢや〱。

ト思入あつて、本舞臺へ來り、土手の上、下の方にて、

惡人なれども岩藤殿、佛果菩提、南無阿彌陀佛々々々々。

ト小腰をかゞめ回向のこなし、大ドロ〱になり、尾上悶絶する、と直に唄淨瑠璃になり、

〽往事渺茫としてすべて夢に似たり、急端零落して半泉に歸す、往きては歸る世の中に本來假の地水火風、空より出て又空に歸る道さへ迷ひぬる、魂魄又も立戻り、歩むともなくよろよろ、イむともなくたよ〱と、風の間に間にうなづくは、實に野晒しのあな目の薄、

ト此の文句の内薄きドロ〱になり、舞臺の叢より陰火ひら〱とあちこち、立ち登りては消え、立ち登りては消え、よろしくあつて、あちこちにある白骨段々と一ところに寄つて、ト大ドロ〱にて

件の骨消えると、直ちに叢より岩藤の亡靈、髮おどろになり、黑絹の小袖、紅絹裏白の下着、奥庭仕返しのなり、日數經て腐れたる好み、肉脫したる拵へにて立上る。

〽小野とも言はん形容、あしたの白骨夕の紅顏、空にぞかへる人形や、怪しくも又不思議なる。

ト岩藤の亡靈よろしくあつて留る、これにて尾上心附き、あたりを見廻し、ふつと岩藤を見てぎよつと思入。

尾上　怪しき姿の、そなたは何もの。

岩藤　おゝ、岩藤ぢや。

尾上　や、なんと。

岩藤　初、よう來やつたなう。

尾上　さては惡念、此土に殘つて、

岩藤　おのれに恨みを、言はう〳〵と待つてゐたに、よう來たなあ。

尾上　えゝ、情なや、及ばぬ願ひの企みごと、その身に報ふ天の責、我手をかりて此の世を去りし岩藤どの。

岩藤　おゝ命數空しくおのれが手にかゝり、屍は野邊に捨てられて、此の身の恥を野晒しや、さがなき者の口の端にかゝる姿となり果てし、其の無念中有に迷ひ去りやらず、思ひ込んだる惡念の再び元へ立歸り、見よ／＼望月彈正が影身に附添ひ惡事を勸め、花園姫に憂き目を見せ、一旦企みし我が大望、願ひを叶へでおくべきか。

尾上　その惡念をひるがへし、成佛得脱なさしめ給へ。

岩藤　いゝや得脱思ひもよらぬ、魂魄再び此土に歸り、恨みを晴らさでおくべきか。ともに奈落へ連れ行かん、來れや／＼。

尾上　障碍を拂ふ刃の威德、幸ひこれなる守り刀で。

ト守り刀を拔き切拂ふ、岩藤たぢ／＼となつて、

岩藤　えゝ、守り刀の威德にて、近寄ることも叶はぬか、ちえゝ口惜しい。

ト切拂ふ、岩藤是に恐れ、ドロ／＼にて、上の方叢の茂りし所へ來り、

尾上　怨敵退散々々。

岩藤　今にぞ思ひ知らしてくれん。

ト大ドロ／＼岩藤の姿、仕掛にてこんもり高なる荒塚になり、卒塔婆を振り出す、大ドロ／＼打上げ

尾上ほつとこなし、

尾上　思ひも寄らぬ局の惡念、魂魄此の世に生を引き、恨みを殘すと今の一言、殊に常からお家を狙ふ望月彈正が影身に添うて、一念凝つたる岩藤が執念、此上はお家の大事、姫の身の上油斷ならざる奸惡邪、はて恐ろしい執念ぢやわいの。

トこなし、捨鐘の頭を打込み、正面の黒幕を切つて落す。向う一面在體、綾瀬川を見たる遠見、下の方卒塔婆垣をこはし、長谷部帶刀、武者拵付、大小好みの編笠をかざし出る。尾上身拵へをなし、ちよつとさぐり合ひの立廻りあつて、よろしく見得。是と一時に、上手の玉椿の生垣を押し分け、望月彈正、覆面頭巾黒地のぶつさき羽織、野袴大小にて出、きつと見得。これより誂への鳴物になり、三人ダンマリ模樣の立廻りよろしくあつて、ト帶刀彈正刀を抜き切り結ぶ。これにて尾上草土手へ上りかける、大ドロ〳〵にて、以前の荒塚碎け、内に腐れたる早桶、立廻りにてドンと當る、早桶ばらばらに碎け、内に岩藤の吹替への死骸、蛇惣身に夥しく纏ひ居る、燒酎火にて三人見て、ぎよつと思入、兩人切りつける。これにて吹替消える。彈正帶刀尾上を中にして兩方より切りかけるを、尾上押へる。兩人足れをぬき出す。尾上下に居る。双方一時に木の頭、三人引張りの見得、寺鐘にてよろしく、

ひやうし　幕

ト此幕黒幕にて、大ドロ〳〵になり、花道すつぽんへ、日覆より誂への人魂おり、知らせに付き、ドロ〳〵打上げ、うしろ黒幕切つて落すと、櫻の道具幕になる、淺敷の水引打返して、傍しだれ櫻になり、すつぽんより岩藤、羽二重片はづし、裲襠の裾をはしなり、花見のこしらへ、日傘をさし女扇を持ち、よき所まで引き上げる、日覆より誂への蝶二羽舞ふ。岩藤こなしあつて、

岩藤 咲きも亂れず散りもせず、八重九重に櫻の盛り、實に眺めある風情ぢやなあ。

ト「お先揃へて」の行列の鳴物、これへドロ〳〵を冠せ、相引の蝶々舞ふを、岩藤追ひながら宙乘りにて高くなり、低くなり、ふわ〳〵と向う揚幕の上へはひる。知らせに附き、調べのツナギにて、よき程に切つて落す。

三幕目

多賀家下館の場
同奥方詮議の場

竹木連中

〔役名——多賀大領、花房主水、望月源藏、蟹江一角、醫者藪醫寒竹、中間三人、中間作助、鳥井又助。愛妾お柳の方、腰元三人、腰元一人、奥方梅の方等。〕

（多賀家下館の場）——本舞臺三間の間、常足の二重、本緣附、上手一間塗骨障子屋體、正面銀地へ墨畫の襖、下手よき所に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、上下四ツ目垣、これへ山吹の盛りを見せ、舞臺より雨落花道へかけ、泉水の心にて浪板を出し、總て隅田川多賀家下館の體、爰に誂への巾席の床几二脚程並べ、紺香板の中間三人、箒水打手桶を持ち、庭の掃除をして居る、此の見得や囃子にて幕明く。

○ときに可内、これで掃除もあらかた出來たから、お庭の櫻を眺めながら、一服やつて行かうぢやねえか。

△お庭の櫻を眺めるといへば、今日此の下館へ來てござる、お柳の方といふお妾、なんと美しいものではござらぬか。

□さうとも／＼恐らく世界廣しといへども、あんな女は唐にもあらうかえ。殿樣がうつゝを拔かすも尤もだといふものだ。

○そのお柳樣の緣につながる兄御の望月源藏樣も、執權職に立身出世、これを思へば槍先で御馬前の功名より、長刀疵で組打の功名が早手廻しだ。

△さうだ／＼、なんでも當時の世の中は女のことだ。兎でさへも雄の方は直打がないといふこと

だ。
□ おれも早く女房を持つて、美しい娘を生ませ、出世の手蔓にあり附かねばならぬ。
○ どうで手前の女房なら、産んだ子供は紋散らし、さらさの様なぶちであらう。
□ なんぼおれの女房でも、犬か猫ぢやァあるめえし、ぶちの餓鬼を産むものか。
△ どうで人間並にやあ産れめえ。
□ 手前迄が同じ様に、悪口も大概にしろ。

ト此の時上手の障子屋體より、蟹江一角上下大小にて出で來り、

一角 喧しい、控へて居らぬか。

ト前へ出る、三人一角を見て、

○ や、あなたは蟹江、
三人 一角様。
一角 御庭先をも憚らず、下様の身で上のお噂さ、無禮の高聲慎しみをらう。
△ いやお上の噂はいたしませぬ。此の頃世間ではやります、兎の噂をいたして居りましたが、兎だけにお耳へはひり、目色をかへてのお叱りは、更紗らむりとは存じませぬ。

一角　こいつが／＼、下司下郎の分際で、詞を返す無禮な奴、あのこゝな、跳返りものめが。

〈　これ／＼詫助、兎盡しのお叱りだけ、跳ねたやつとは分つたお詞、

□　無駄な言譯せうよりは、恐入つたと天窓を搔いて、引込む方が本役だ。

○　成程、それもそんなもの。左樣ならば、

三人　一角樣。

一角　えゝ、早く部屋へ參らぬか。

三人　兎承知いたしました。

ト三人は下手へはひる、跡合方になり、一角思入あつて、

一角　下郎は口のさが無きものとやら申せば、打ちこぞり望月氏やお柳の方の噂こはさをいたすといふも、當時殿のお覺え目出度く、誠に旭の昇るが如く、立身登用召さるゝ故、かねて一味の某も望月氏の大望が、首尾よく成就いたしなば、一足飛びの家老職、どうか手立をめぐらして、早く出世がしたいものぢや。

ト思案の思入、右の合方にて下手より、藪際寒竹、くわゐあたま、羽織着流し・ばつちにて出來り一角を見て、

寒竹　それにお出でなされまするは、一角樣ではござりませぬか。（ト一角寒竹を見て、）
一角　誰かと思へば藪際寒竹、何用あつて參つたのぢや。
寒竹　今日此のお館へ殿樣を初めとして、望月樣がお越しと承り、御褒美を頂戴いたさうと、それでわざ／＼參りました。
一角　なに、褒美を貰ひに參りしとは、なんぞ出かしたことでもあつてか。
寒竹　外に出かしもいたしませぬが、いつぞや調合いたしました、南蠻祕方のあの毒藥、
一角　あゝこれ。

トおさへる、兩人あたりへ思入あつて、寒竹小聲になり、

寒竹　その御褒美を、頂戴に出ました。
一角　こりや／＼寒竹、何を申す、その褒美として先達て十兩金遣はしおいたに、又候今日褒美をくれと、この下館へ參るとは、いかに名前が寒竹でも、あまり根強いねだり事ぢや。
寒竹　なに、根強い事がござりませう。醫は仁術を基とすれば、毒藥調合いたすことは醫者仲間の堅い戒め、それを知りつゝ調合なすは、慾と道連れ命がけ、十兩ばかりの御褒美で追拂はれては此節柄三分禮を貰ふも同然、藥儲けは九層倍先百兩といふ處、そこを愚老が大負けに五十兩にします

から、手附に貰つた十兩を差引きあとが四十兩、三十日から待たした代り、耳を揃へて下さりませ。

一角　いや、それはあんまり高からう、いかに當節藥種が高く、醫者の相場が上つたとて、五分禮を一匁か二匁やれば豪氣なこと、僅か二服か三服の藥を盛つて五十兩とは、あんまり古法家過ぎるだらう、左樣なことを申さずと、物やはらかにかうせいと、褒美も細く長袖の身分を思つて品をよく、十五兩金で負けておきやれ。

寒竹　いえ／＼負けておかれませぬ、その本道の道に背き、祕法の藥を盛るからは、五十兩では安いもの。もし又それを今となり、玄關に長く待たしておいた藥取りを見るやうに、しびれを切らして出しなさらにやあ、愚老の方にも仕樣がある。（ト懷中より密書を出し、）然も上にはべつたり上書きして、「寒竹老へ蟹江一角」、お前から御頼みの密書を證據に訴人と出かけ、四十や五十の褒美なら、脇から取つてお目に掛け、褒美の金を下さらずば、これから訴人と出かけませうか。

一角　あゝこれ、それを言はれてたまるものか。

寒竹　そんなら褒美を、下さりまするか。

一角　さあ、それは。

寒竹　訴人をせうか。
一角　めつたなことを。
寒竹　さあ。
一角　さあ。
兩人　さあ〳〵。
寒竹　もし一角樣、どうでござりまする。（トきつといふ、一角思入あつて、）
一角　いかにも、褒美遣はさう。
寒竹　そりやさうなうては叶ひますまい、そんならどうか四十兩。
一角　いや、その金子は遣はさうが、只今こゝには持ち合はさねば、どうか明日手前の宅まで、出張つてはくれまいか。
寒竹　あなたが御所持でないにもせよ、望月樣へおつしやつたら四十や五十の金子なら、あしたと言はずに調ひませう、又出直すのも面倒故、ならうことならけふ中に。
一角　それも承知はいたしてをれど、いまだ望月源藏どのに、面會さへいたさぬ仕儀。
寒竹　さう言ふことなら後方まで、どこぞのお部屋を借用いたして。

一角　然らば御門の脇長屋、中間部屋にて待つてゐやれ。

寒竹　左樣なれば、一角樣。

一角　寒竹老。

寒竹　どれ、御返事を待ちませうか。

ト唄になり、寒竹下手へはひる。一角あとを見送り、

一角　あの寒竹といふ奴も、あれ程太くはあるまいと、身共が名前を記したる頼みの密書を遣はしたが、今となつては一つの誤り、どうか手立を廻らして、あの密書をば捲上げたいものぢや。

ト此の時浪の音になり、一角向うを見て、

最早向うの築山より、お柳の方をお連れなされ、殿には舟へ召されし樣子、こりやお出迎へをせずばなるまい。

ト一角は上手の障子屋體へはひる。浪の音打上げ、誂への淺妻樣の獨吟になり、よき程に花道の揚幕より誂への丸物の舟を押出し、是へお柳打掛衣裳、愛妾好みの拵らへにて、鼓を持つてよろしく仕ひ、多賀大領前茶筅羽織着流し、殿の拵へにて棹をさしながら出て來り、舟は花道よき所へ留り、兩人思入あつて、

大領　多賀といふ家もゆかりか古への潮湖が筆のそれならで、同じ流れの島の名に寫す姿の御かげ。

お柳　その淺妻の淺からぬ仰せを受けて是非なくも、浪の鼓の調べさへ拙なき業と夕汐に。

大領　さす手引く手も泉水に、棹は取れども水なれず、にぶき拳に漕ぐ舟も、

お柳　澤紫の色かへぬ、我君樣を力草、

大領　岩井の水の影清き、そちをよすがに乘合も、

お柳　人目はなれて此の樣に、鴛鴦のふすまのへだてなく、

大領　我庭ながら見渡せば、

お柳　樹木の梢は花盛り、

大領　はて風情ある、

兩人　眺めぢやなあ。

トこれより獨吟二の句になり。兩人花道にてよろしくあつて納まる。此の止り上手障子屋體より、以前の一角先に腰元三人、出來りよろしく出迎ひ、

一角　我君樣には築山より、お柳の方を御同船にて、

腰一　尊い御身が御手づから淺瀬深瀬の御案內、

腰二　舞の手ごとのそれならで、さす手引手のお舟の自在。
腰三　浪路の通ひ面白き、お柳樣が鼓の調べ、
一角　恐れながら蟹江一角、感心仕つてござりまする。
大領　そち達が申す通り、これなるお柳が鼓の調べに、よい慰みをいたしたわえ。
お柳　拙なき業をその樣に、お褒め下されては、お恥しう存じまする。
一角　何は格別我君樣には、
腰一　お柳樣と御同船にて、
腰二　少しも早う、此のお庭へ。
腰三　まづお越し、
皆々　遊ばされませう。
大領　然らばそれへ、參るであらう。

ト獨吟三の句になり、これにて舟は舞臺へ來る、腰元三人大領お柳の庭下駄を持ち行き、兩人に履かせ介抱してこちらへ連れ來る。これにて舟は揚幕へ引いてとる。獨吟の留りにて風の音になり、さしがねのつがひ蝶出て、下手四ツ目垣の山吹へ戲れ、よろしく舞ふ。此の内大領お柳は床几へかけ、

お柳蝶を見て、

お柳 我君様あれを御覽遊ばしませ、八重山吹の香を慕ひ、花に狂うて蝶々の番ひ放れぬ睦じさ、しほらしい事ではございませぬか。

大領 何樣そちが申す通り、虫でさへもあの通り、仲睦じう花に戯れ、よそには永き春の日も、暮るゝを惜しむあの風情、予はまたそちと此樣に、一緒に居るが樂しみぢやわえ。

お柳 ふつゝかな身をそれ程に、思召して下さりますとは、お嬉しう存じまする。

トこれより又獨吟になり、兩人蝶を見ながらなまめきしこなしよろしく、此の内一角大領お柳を見て羨ましき思入よろしく、此時正面の襖をあけ、腰元出來り、下手へ手をつかへ、

腰元 殿樣へ御機嫌を伺ひの爲め、奧方樣が只今是へ、お越しでございまする。

一角 なに、奧方樣がお出でとな。

大領 今日これなる下館へ保養に參りしその中へ、いらざる奧の機嫌聞き、面會いたすに及ばねば、直に館へ歸してよからう。

お柳 あゝ申しお待ち遊ばせ、左樣に御意遊ばしましては、お側に附添ふ私共の無調法になりますれば何卒これへ奧樣を。

大領　はて、そちは左様に申せども奥の顔をば見るのがいやさ。此の下館へ參りしに、思ひもよらず此處へ奥が來らば折角の、興をさますと申すものぢや。

お柳　左様ではござりませうが、我君様には此の程より御不快とのお觸れ出し故、奥方様にも御案じ遊ばし、君の御様子如何やと御見舞ひでがなござりませう、それをお逢ひ遊ばしませず、お館へお歸し申しては、私が濟みませぬ。

大領　そちが濟まぬと申すなら、暫し面會いたすであらう、然らば奥をこれへと申せ。

腰元　畏りました。（ト立たうとすると奥にて、）

梅の　あいや、參るに及ばぬ、只今それへ。

ト合方きつぱりとなり、奥より奥方梅の方裲襠衣裳、奥方の好みの拵らへにて、腰元菓子折を持ち、附添ひ出る。此の内大領お柳床几を放れる、腰元の二、二重の上の方へ褥を敷き、大領これへ住ひ、腰元の三、平舞臺下へ毛氈を敷き、お柳は梅の方へ會釋して、平舞臺下に住はうとする。

大領　こりやお柳、苦しうない、これへ參れ。

お柳　それではどうも、奥方様へ。

梅の　いや我君の仰せ故、わらはを兼ねず、まあ〱あれへ。

お柳　それでは、どうも。
大領　はて、參れと申すに。
お柳　はゝい。

トお柳、是非なく二重へ上り、大領の下手へ住ふ、梅の方は平舞臺毛氈の上へ住ひ。

梅の　御病氣と思ひの外、我君の麗しきその御樣子、伺ひましてお嬉しう存じまする。
大領　予も此程は心地惡しう打臥せしが、かうしてお柳と一つに居れば、忽ち快氣に趣きしが、そちが是へ參りし故、悋氣を致すであらうと思ひ、何とやら心惡いわえ。
梅の　是はしたり、我君のお詞とも覺えませぬ、何しにわらはが殿樣へ悋氣を申し上げませう、此程にては御不快と奧向へのお觸れ出しに、如何お渡り遊ばすかと心を痛め居りましたに、今日これなる下館へ花の盛りを御遊覽と承つてわらはが喜び、是と申すもお柳が心勞、此の上ともに我君の御介抱頼みますわいなう。
大領　して今日下館へ、予が保養に參りしを、誰が奧向へ知らせしぞ。
お柳　その儀は今朝私が、お知らせ申してござりまする。
大領　なに、すりやそちが奧の許へ。

お柳　はい、御前様が此程より御不快との御觸出しに、奥様にもそれは〳〵御心勞遊ばしましたを、御安心がさせましたさ、御前の御意も待たず、お知らせ申せし無調法、御免なされて下さりませ。

ト よろしく詫びる。これにて大領是非なき思入、一角も思入あつて、

大領　予が折角の遊興も、奥が參つて氣鬱いたした。こりや腰元共、銚子を持て〳〵。

梅の　いや我君には御病中、御酒は何よりのお毒故、まづ〳〵お待ち遊ばしませ。幸ひ今日自らが、御病氣御見舞ひに持參いたせし、御菓子がこれにござりますれば、御開きなされて下さりませ。

ト 腰元に持たせし折を大領の前へ出す。

大領　折角の見舞ながら、予も此節は上戶になり、菓子は見向く事もない、酒でなければ夜が明けぬ、銚子を持て〳〵。

お柳　おゝもし、左樣ではござりませうが、奥方樣よりの御見舞もの、お一つお上り遊ばしませ。

大領　いや〳〵、菓子は望みでない。

お柳　御前樣が召上らずば、失禮ながら私が、賞翫いたしませう。

大領　奥が持參の菓子ならば、どうで野暮な菓子であらう、蓋をあけずと止しにいたしやれ。

ト 是を聞き、梅の方こなしあつて、

梅の　是程までに、わらはをば。
ト恨めしさうに大領を見上げる。お柳これを紛らす心にて、
お柳　頂戴いたすでござりませう。
ト水引などとき、折の蓋を明ける、此の時風の音になり、下手より以前の蝶出て、件の菓子の上を舞ふ
ことあつて、ト、ばつたり落ちる。皆々これを見てびつくりして、
腰元　これは。
大領　折も折とて庭前より、舞ひ來る蝶が菓子折の、上に臨めば忽ちに、
お柳　羽がひをちゞめ目の前へ、落ちて苦しむ此の有樣、
一角　さてはそれなる菓子折へ、正しく毒を仕込みし樣子、
梅の　その疑ひを晴らすには、わらはが毒味、此の場の潔白。
ト菓子折の方へ行かうとするを、腰元皆々梅の方を留めて、
腰一　もし奧樣、まづ〳〵お待ち遊ばしませ。
腰二　何とも怪しい、その御菓子。
腰三　もし、毒でもござりましては、

腰四　お命にかゝはること。まづ〳〵お待ち。

皆々　遊ばしませ。

梅の　それぢやといふて此儘では、わらはの心が濟まぬわいなう。

ト又立ちかゝるを、一角隔てゝ、

一角　どっこい〳〵、毒害いたすをやり損じ、言譯なさに死なうとて、こりや滅多には殺されぬ。

ト折を抱へてきつとなる。此の時下手より、縫包みの犬出て來る、大領是を見て、

大領　幸ひあれへ手飼ひの犬、彼に與へて試みいたさん。

ト下手へ來り、件の菓子を投げてやる。これにて犬よろしく苦しむことあつて、トゞ毒に中りし思入よろしく苦しみ血を吐いて落入る。梅の方是を見てびつくりなし、

梅の　やゝゝゝゝ、正しく毒に中りし樣子、どうして持參の此の折に。

ト泣方に暮れしこなし、一角梅の方を引附け、

一角　こりや一詮議いたさにやならぬ。

梅の　はゝゝゝゝ。（ト泣伏す、大領思入あつて、）

大領　こいや奥、これへ出い。いやさ、つゝつッとこれへ出い。

ト合方きつぱりとなり、大領縁端へ進み出る、梅の方しなれしこなしにて前へ出る。

こりやヤイ、おのれの心が至らぬ故、これなるお柳に見返られしを嫉みに思うて、大それた見舞の菓子へ毒を仕込み、お柳は元よりかくいふ予まで、毒殺せんとなしたるは、言はうやうなき人非人。(トきつとなつていふ。梅の方額を上げ、)

梅の　コリヤお情ない我君様、悋氣嫉妬は女子の嗜み、左樣なことをいたしませうぞ。楊貴妃小町に劣りなきお柳殿の御器量故、御寵愛は無理ならず、元より及ばぬわらはが不束、何とてお恨み申しませうぞ。夢さら知らぬことながら、犬の最期に毒害と、お疑ひを受けたるも、元より足らはぬ身の誤り、察する處何ものか、御家を窺ふ曲者あつて、此の菓子折を竊に取替へ、わらはを罪に落さんとの深い企みであつたるか、えゝ口惜しいことぢやわいなあ。

一角　いや、その身の罪を脱れんと左樣な虚言をおつしやつても、天は見通し、まツその如く、計らず蝶が舞ひ來り、羽がひちゞめて落ちたるが、あなたの悪事の顯れ口、叶はぬ所と諦めて、白狀なしてお仕舞ひなされい。

梅の　假令何と言やつても、此の身にいさゝか覺えのないこと、何で罪に落ちようぞいの。

ト此の内お柳こなしあつて、形を改め、

お柳　我君様へ折入つて、お願ひがござりまする。

大領　なに、改めて願ひとは。

お柳　御家の大事と思ひまして。

大領　なんと言やる。（ト合方きつぱりとなり。）

お柳　さあ賤しい此の身を殿様が、一方ならぬ御寵愛、御不便かけて下さりまするは、冥加に餘ることながら、奥様のお心より終にはお家の亂れとならん、どうぞ御悋氣なきやうにと、それのみ心に祈りし故、今日とても御一緒にと、お誘ひ申して參る程、へだてぬ樣にいたしまするを、却つて深き御悋氣とは、てもお情ない思召し、思へば蝶の知らせにて、此身の難は脱れしも、君の御情淺からぬ、榮華の夢も今日限り、悟れば元の佛の御弟子、只此の上は御家の御武運、君の御壽命、祈る心でござりますれば、何卒お叶へなされて下さりませ。

大領　すりや今日まで寵愛せし予が詞を反故になし、そちは又候尼になりたいとか。

お柳　さあ殿様のお詞を背く樣ではござりまするが、是もやつぱり御家の爲め、尼になる身も心の内、恐れながら御前樣、御推察遊ばして下さりませ。

　ト　よろしく泣伏す、大領是を聞き。不便なといふ思入あつて、

大領　はて健氣なる志し、こりやお柳心配いたすことはない、家にかへてもその方は、予が側を放さぬ程に、尼には決していたさぬぞよ。

お柳　それ程までに私を。

大領　おゝ思はいでなんとせう、予を大切に思へばこそ、その身は尼になるとても、家を大事と思ふ其方、なんで見捨てゝ居られうぞ。（ト梅の方を見てきつとなり、）かゝる健氣な心に引替え、己が嫉妬のねたみより、毒害なさんといたせし女、奥とは思はぬ憎き奴めが。

梅の　すりや我君には、左程まで、わらはに御疑念晴れませぬか。

大領　無駄の言譯、聞く耳ないわい。

梅の　身の潔白は、此の場にて。

ト懷劒を取出して、自害をしにかゝるを一角留めて、

一角　いや、惡事に荷擔の奴輩を、白狀さするそれまでは、滅多にあなたは殺されぬ。

ト懷劒をもぎとる。

大領　こりや一角が申す通り、かゝる惡事を企つるは女の一存ばかりであるまい、そやつは汝に預ける間、櫻の元へくゝし附け、とくと吟味をいたしてよからう。

一角　委細承知いたしてござりまする。
お柳　すりや、奥様を此の場にて。
大領　責めさいなむもそちへの心中、よしなきことにて保養を妨げ、奥へ參つて一獻汲まん、腰元共、
　奥へ酒宴の用意いたせ。
腰一　御上意ではござりまするが、どうぞ是なる奥様の、
腰二　御疑ひをお晴らし遊ばし、此の事は此の場限り、
腰三　御内分に遊ばしまして、何卒お心柔らげられ、
腰四　御酒宴のお催しを偏にお願ひ、
皆々　申上げまする。
大領　やあ、いらぬ女の諫言立、予が詞を用ゐぬか。
皆々　ではござりませねど。
大領　然らば酒宴の用意いたせ。
皆々　畏りました。
一角　左様ござれば我君様、

大領　然らばお柳。

お柳　とは言へ、此の儘。（ト梅の方へこなしあるを、）

大領　はて、參れと申すに。

ト唄になり、大領先にお柳の手を取り、奥へはひる。腰元皆々梅の方へ會釋なする、一角せり立て、早く奥へ行けといふ思入、これにて腰元皆々奥へはひる。梅の方跡を見送り思入あつて、

梅の　えゝお情ない我君樣、あなたのお命絶つやうな、何でわらはが恐ろしい企みごとをばしませうぞ、みす〳〵無實の此の難儀、それと申すも此程より、お柳の色香にお迷ひ遊ばし、心に曇りもないものを、それ程までにお憎しみ、家來に言ひ附け身を縛め、折檻をなさるゝとは、そりや御胴慾でござりまするわいなあ。

ト奥へ向つてよろしくこなし。一角思入あつて、

一角　もし奥樣、何もその樣に惡事を包み、お悔みなさることはない、そりやもう女の悋氣、嫉妬、身の愼みとは言ひながら、てかけ狂ひにうつゝをぬかし、奥樣をあるがなしに殿樣の心替れば、毒害なされて恨みを晴らし、御家の主を失つてもと思召すのは御尤も、恐れ入つたる事ながらそれも女の御一存でお企てをなさるゝ故、忽ち露顯に及びまする、かういふ事には男の手をかり、御

相談をなされたら、またよい智慧も出るといふもの、まづこれきりの御話しながら、殿様ばかりを男と思ひ、悋氣をなされうより、外にいくらもお前樣の御話相手になりさうな、忠義な御家來もござりませう。それとひそかに通じ合せ、お柳の方を我君が、お樂しみなさるやうに、忍び男を夜毎に引入れ、お氣の保養を遊ばすが、悋氣をなさるよりはるかの御徳、あなたがさういふ御料簡なら、及ばずながら蟹江一角、横に這ふのが持前に、堅く見せたる石垣も穴ぱひりの功者もの、御返答は如何でござる。

ト一角此の内奥へこなし、よろしくあつて、奥方へしなだれかゝり、いやらしき思入。奥方これを聞き腹立ちのこなしにて、一角を突退け、

梅のえ　穢らはしいその詞、假令此の身は殿様にお疑ひを蒙むるとも、心の鏡は曇らぬわらは、いかに無實に落入るとも、現在家來のそちにまで、侮らるゝが口惜しい。

ト無念の思入、これにて一角氣を替へてきつとなり、

一角　家來の身として奥樣を、折檻なすは本意ならねど、嚴命なれば是非がない、いくら包み隠しても此の割竹で一角が、力任せに打つたなら、かぼそい體の骨々が忽ち微塵になるは必定、痛い目せぬ内有體に、早う言つておしまひなされい。言はずば折檻いたしてくれう。

梅の　不忠不義なる人たちが手で、折檻受けぬその先に、自害をなして、おゝさうぢや。

卜落ち散りある以前の懐劒にて死なうとする。一角これをきつと捉へ、

一角　いゝや、白状なさぬ内は、めつたにあなたは殺されぬ。

梅の　えゝ、言はうやうない人非人、留め立せずと、こゝ放しや。

一角　いや、放さぬ、大事の罪人。

梅の　なに、罪人とは。（卜兩人こなしあつて、）

一角　あなたの悋氣が、（卜刀をもぎ取る、道具替りの知せ、）深い故だ。

卜これにて、梅の方ハツと泣伏す。此の模樣、時の鐘の合方にて、よろしく此の道具廻る。

（下館塀外の場）＝本舞臺上の方、九尺屋根附の潜り附の門、出這入りあり、下の方練塀見越の松、日覆より同じく釣枝、總て下館、塀外の道具、合方かすめて雪おろしにて、道具留る。と冴の鳴物にて日覆よりちら／＼雪降り、花道より又助、やつしなり、尻端折り、草履にて出て來り、花道よき所に留り、

又助　今朝は明けると朝焼けで、いなさ東風が吹いたから、雨になるかと思つたら、北風に替つて時な

らねえ雪がちらちら降つて來たが、大雪にならにやあいゝが。

ト言ひながら舞臺へ來り、後ろの屋敷へ思入あつて、

此隅田川の御下屋敷へ、今日殿樣の御供にて求女樣の御兄樣主水樣がお出でと聞き、大旦那樣の御勘氣を御免なされて下さるやう、此の身の御詫びを願はんと、さつきから塀外を行きつ戻りつして居るも、以前の御恩で又助を力になさる求女樣、こゝぞ御恩の送り所と精一杯な御世話はなせど、御勘氣御免ない内は、お宅へ上ることも叶はず、何かにつけて不都合故、是非共けふはお願ひ申し、御免を願ふ心にて、お出でを御待ち申してをるが、首尾よく御聞濟みがあればよいが。

ト又助雪を拂ひ、門の屋根の下につくばひ居る、やはり右の鳴物にて、花道より花房主水、上下大小草履にて出來り、中間附添ひ出て花道にて、

主水　こりや佐助、思ひがけぬ俄の雪に、雨具の用意あらざれば、其の方は宿所へ歸り、雨具をこゝへ持參いたせ。

仲間　はッ、外に御用はござりませぬか。

主水　用事はない、急いで參れ。

仲間　はッ。（ト引返して花道へはひる。）

主水　今朝より時ならぬ寒さであつたが、彌生のこと故雪にならうとは思はなんだ。

ト舞臺へ來り、石に躓き、草履の前鼻緒を切る。主水困る思入あつて、

おゝ、石に躓き鼻緒を切りしが、作助を宅へ返し、困つた事をいたしたわえ。

ト又助これを聞き、俯向きながら前へ出て、

又助　御鼻緒が切れましたら、お立て申して上げませう。

主水　それは千萬忝いが、然しながら履物を。

又助　いえ、御遠慮なされず、お出しなされませ。

ト又助財布より、錢さしを出し、主水の草履を脫がせる、主水見て、

主水　や、そちは家來の、又助ではないか。

又助　ハツ。（ト平伏なし、）先年此の身のあやまりより、御勘氣を蒙りし鳥井又助めにござりまする。

主水　亡父の不興を蒙りし、又助であつたか。

又助　久々にてあなた樣の、御機嫌のよい體を拜し、恐悅至極にござりまする。

主水　只今にては如何せしかと、時折噂をいたしをつたが、替る事もなかりしか。

又助　以前に替る身の上ながら、譬にもいふ貧乏暇なし、體に替りはござりませぬ。

主水　それは何よりのことなるぞ。

　　ト此の内又助鼻緒をすげ、

又助　さあ、お召しなされませ。（ト草履を出す、主水是を履き、）

主水　是はさつそく忝い。

又助　計らず是へ參り合せ、切れた草履のお鼻緒を、結び合はすも主從御緣の切れぬ證かと、悅ばしうござりまする。（ト主水思入あつて、）

主水　して今日は、何れへ參りしぞ。

又助　御下館へ殿樣の、お供と聞いて先刻より、あなた樣のお出でなさるを、お待ち申してをりました。

主水　むゝ、亡父に受けし勘氣のお詫か。

又助　はッ、仰せの如く五年後、御不興受けし此の又助、（ト誂への合方になり、）今更申すに及ばねど、大旦那樣は御慈悲深く、常々犬をお愛しなされ、三度の御膳を下さる故、御膳時には御家中の數多の犬が集まりて、狂ひ遊ぶを御隣家の鱧江樣がうるさく思ひ、何がなあらばと思ふところ、わ

けて中にも御祕藏の熊と名附けし黑犬が、雨降り擧句の泥濘道、友と狂つて一角殿に泥を跳ねかけしを憎しと、只一刀に切つて捨て、聞いて居られぬ當こすり、家來の身にて殘念故、切られし犬を互鬪へ投げ込みしが喧嘩となり、隣家の家來に疵を負はせ、十分勝を取りしが誤り、大旦那樣の御勘氣受け、遂に此の身は永のお暇、是非なく町家の知るべを便り、今では微かな釣舟生業糸より細い煙りを立つれど、針と違つていさゝかも曲つた心を持たぬ故、うきより輕き身の上もどうなりかうなり其の口を送り、露命をつなぎ居りますも、御主樣の御恩故、寐た間も忘れはいたしませぬ、どうかあなたのお情にて、御勘氣御免下さるやう、偏にお願ひ申上げまする。

ト主水思入あつて、

主水　それ程に故主を慕ふその心底、許しやり度いものなれど、賢者と言はれし亡父故、何か一つの功を立て、それを規模に靈前へ、お詫びをなして遣はさん。

又助　すりや一つの功を立てざれば、御勘氣御免は下さりませぬか。

主水　如何にも、一つの功を立てし上では、勘當許し遣はすぞ。

又助　然らば是より私が、一つの功を立てましたら、

主水　時ならずして降る雪を、會稽山の昔になぞらへ、

又助　此の身の汚名を雪ぎなば、
主水　年月積る勘氣の詫も。
又助　あつき惠みの日影に解け、
主水　犯せし科も水となし、
又助　又もや結ぶ、
主水　主從三世、
又助　左樣なれば旦那樣。
主水　必ず一ツの、（ト立上る。）功を立ちやれ。
　ト又助はッと辭儀をなし、唄になり、主水思入あつて上手滑り門の内へはひる。又助跡を見送り思入あつて、
又助　今主水樣のお詞に、一つの功を立てさへすれば、此の身の御勘氣御免あつて、元の主人家來となり、大旦那樣の三年の御佛參のお供も出來、こんな嬉しいことはないが何を功に立てたものか。（ト思入あつて、）おゝ求女樣のお話に、望月蟹江が讒言に忠臣日々に遠ざけられ、佞人お側にはびこりて、淫酒を勸め殿樣の御身を惰弱になしたるも、元はといへばお柳の方、これを絶たねば亂

れたる御家は所詮納まらぬと、承りしはこれ幸ひ、此の又助が一命かけ、一ツの功を立つるは今宵、勝手知つたる御下屋敷、忍び込んで様子を窺ひ、此の身の手柄をしたいものだなあ。

ト雪おろしになり、又雪ちら／＼と降る、又助手拭にて拂ひながら、

又ちら／＼と降つて來たが、二月雪の降つたのは、久しいあとの事だつた、まだ此のおれが餓鬼の折、しかも五ツか六ツの時であつた。（ト此の屋敷の内で、）

聲　七ツでござい。（ト呼ぶ。）

又助　おきあがれし、時廻りか。

ト時の鐘、雪おろし、雪しきりに降る。又助門の内へ思入あつて、此の道具廻る。

（同　庭先の場）——本舞臺眞中に、一間の枝折門、誂への唐戸、大和葺き、左右網代塀、見越の松、上手に莫大なる石燈籠、下手書心に四ツ目垣、常磐木の植込、總て雪持ち舞臺、花道まで雪布を敷き日覆より雪つもりし松の釣枝をおろし、こゝに以前の梅の方眞中に佇ひ、上手に一角、路次笠をかざし、割竹を持ち立身、此の見得、雪おろし、床の淨瑠璃にて道具留る。

〽降りしきる雪に憐れを増す鏡、曇らぬ操奥方も、身の濡衣に苛責のしもと、

ト雪おろしにて、降る雪を梅の方袖にて拂ひゐる、一角は詰め寄り。

一角　はて時も時折も折、拷問なすには屈竟な、冬にも勝る此の大雪、久しくこゝにござつたら、凍え死をなさるでござらう、とても死ぬなら少しも早く、お柳の方を殺さんと、菓子の中へ毒を仕込み持參せしと白狀召されい。

梅の　そら恐しい何故に、露いさゝかも知らぬこと、菓子を調へし者を詮議いたしてくりやいなう。

一角　町人なれど御家來同樣、數代御家の御用を勤め、その家のはれとなす菓子屋が、何故毒を仕込ませうぞ、悋氣によつて毒害と、目串が立つに遁れはござらぬ。

梅の　どのやうそちが言やつても、身に覺えのない事故、自らは知らぬわいの。

一角　只知らぬとばかりでは申譯は立ちませぬ、家來の身にて奧方を、拷問なすは本意ならねど、殿の仰せは是非もなし、それたによつて一角が、いやさ、今更いつても返らぬことだ。

梅の　かほどまでに自らに、疑ひのかゝりし上は、假令いかやう申すとも、御聞入れはあるまい程に、打つなり叩くなりと、心任せにしやいなう。

一角　その御覺悟なら一角が、鞭にかけて御詮議いたさん。

〽割竹とつて振り上げれば、（ト一角割竹を取つて振上げる、此の時門の内にて、）

主水　一角殿、暫らく〳〵。

〽暫し〳〵と聲をかけ、主水は蟹江が振上げし、割竹しつかと押止め、

ト主水つか〳〵と出來り、一角とちよつと立廻つてきつと見得、

委細はあれにて承つたり、まづお待ち下されい。

一角　やあ、さいふは花房主水どの、殿の仰せを蒙つて、毒殺詮議の此の一角。

主水　假令殿の仰せにせよ、執成なすが臣下の役、さはあらずして奥方を、その割竹にて打擲せんとは餘りと云へば無常の計らひ、それ故とゞめ申してござる。

一角　すりや上と下なる主從故、打擲なすは失敬ながら、殿の仰せは背かれぬ。どちらも同じ御主人なら、殿に背いて奥方を、助けることは身共は出來ぬ。

主水　ではござらうが菓子折へ、毒をひそかに仕込みしは、無實の罪の奥方を、なきものにせん巧者の計らひ。（ト一角へ思入）

一角　や。

主水　拙者が愚眼で見る時は、毒を仕込みし曲者は、正しく外にござらうかと、存じまするが一角殿、貴殿は如何思召さるゝ。

一角　外にあるかは存ぜねど、奥方を詮議いたすが是れ近道。

主水　そこを貴殿(一)大才にて、御詮議あらば知れ申さん。

一角　いゝや拙者は愚昧故、詮議なすより外にござらぬ。

主水　すりや、どうあつても其許は、

一角　殿の上意は背かれぬ。

〽かさにかゝれば、

主水　あゝ、是非に及ばぬ。

〽嘆息なして控ゆれば、奥方涙を拭はせ給ひ、（トこれにて主水下手へ來る、梅の方こなしあつて）

梅の　これ主水、志しは嬉しいが必ず共に留めてたもるな、夢更覺えないことながら、疑ひ受けしは身の災難、汚名を受けて死するのは口惜しいとは思へども、殿の仰せとあるからは、罪を負はせしその者を、詮議仕出して覺えなき、疑ひ晴らしてたもいなう。

ト梅の方泣伏す。主水ハツと手を突き、

主水　仰せなくとも拙者めが、毒を仕込みし曲者を、詮議し出し奥方の、汚名をお雪ぎ申しまする。

梅の　どちらも同じ家來ながら、今降る雪と炭程に、かうも心の違ふものか。

一角　苗字も蟹江といふからは、直には行かぬ此の一角、とてもの事の憎まれついで。どれ、一詮議いたさうか。

梅の　そんならどうでも、其の方が、

一角　拷問なすも、上意故、

主水　此場に於て奥方を、

一角　おゝ、殿の仰せ猶豫はいたさぬ。

〽肩ひぢ張つて立ち懸れば、又も後ろに聲ありて、

ト一角思入あつて、割竹を持ち、梅の方へ立ちかゝる、此の時又奥にて、

源藏　蟹江氏、お待ちなされい。

一角　なんと。

〽蟹江が拷問押し止め、枝折戸開き靜々と、立出る執權、望月源藏。

ト枝折戸を開き、奥より前幕の望月源藏、上下大小下駄がけ、中間蛇の目の傘をさしかけ、一人床几を持ち出て來る。主水下にゐて、

主水　これは〱望月氏には、時ならぬ雪中に殿の御供、御苦勞千萬。

源藏　花房氏にも、御苦勞至極。
一角　して源藏殿には、拷問を何故御止めなされしぞ。
源藏　御邊が拷問とゞめしは、則ち殿の上意故。
一角　なに、上意とは。
源藏　先刻その場に居合せ、毒殺詮議を仰せつけられしが、只今改め此の詮議、餘人へ仰せつけられしぞ。
一角　一旦某蒙りし、此の詮議をば、
源藏　殿の仰せは花房氏、主水殿へ仰せなるぞ。
一角　ではござらうが、それがしに。
源藏　上意にもどくは、無禮でござるぞ。
一角　はッ。
〽はつとばかりにさし控ゆれば、（ト一角是非なく控へる、梅の方主水顏見合せ）
梅の　すりや自らが詮議をば。
主水　拙者に仰せ付けらるゝとか。

源藏　いかにも。
主水　上意をもどくは恐れあれど、此の儀は御免下されい。
源藏　すりや何故に主水殿、役目を厭ひめさるゝぞ。
主水　一旦詮議と蟹江氏が、仰せを蒙る上からは、何卒矢張り一角殿に。
源藏　その斟酌は入らぬこと、貴殿へ上意下りしは願うてもなきことならずや、蟹江殿が日頃の氣質、貴殿手酷い拷問いたしなば、たゞ一打に、（ト源藏思入あつて、）いやさ、一方ならぬ詮議の役目、へ上意下りしは、此の源藏が取り計らひ、辭退めされな、お受けあれよ。
　　へ胸に一物源藏が、目顏でそれと知らすれば、（ト源藏主水へ目で知らすと、思入あつて、）
主水　すりや、どうあつても拙者めに。
源藏　上意下りし上からは、此の場に於て詮議めされ。
主水　主命もだし難ければ、委細承知仕る。
　　へ是非もなく〳〵詮議の役目、禮儀を正して打向ひ、（ト主水眞中へ來り、梅の方へ思入あつて、）
　　上意を蒙り御詮議いたせば、お覺悟遊ばせ奥方樣。
梅の　假令此の身を打叩かれ、いかなる責めに逢はうとも、死ぬる覺悟で居る程に、役目の越度にな

ぬやう、遠慮いたさず拷問しや。忠義一途なその方に、打たれて早く死にたいわいなう。

〽又さめ／＼と泣き給へば、主水はとかくいらへもなく、差俯向けば源藏が。

ト梅の方ちつと思入、主水俯向きゐる、源藏思入あつて、

源藏　御尤もにはござれども、手づから御持參なされたる、御菓子の内に毒あれば、たゞ存ぜぬとばかりでは、申譯が立ち難し、妹お柳はともかくも、御前が御菓子を召上り、もしもの事がある時は御家の大事に御前にも、殊の外なる御立腹、それ故又も改めて、花房氏へ詮議の役目。

主水　御諚に依つて是非なくも、正しく主人の奥方へ、鞭を當つる拙者が苦しさ。

一角　定めて拙者にまさつたる、主水殿の手並の程、これにて見物いたすでござらう。

〽かたへに退き控ゆれば。

ト一角つッと上へ控へる。源藏思入あつて、

源藏　いざ、主水殿には、猶豫いたさず。

主水　はッ、畏つてござりまする。

〽君の上意に是非なくも、直なる心割竹に打たねばならぬ此の場のせつぱ、そばには鵜の目鷹の目の善惡知れぬ望月に、附添ふ蟹江こなたなる、垣の外面に又助が樣子いかゞと窺ひ居

ろ、主水は威儀をつくろひて、

ト此内主水切なき思入にて、割竹を持ち立ちかゝる、源藏上手へ來り窺ひ居る。これより床のメリヤスになり、主水梅の方の側へより、

君を毒殺なさんなどゝは、元よりお覺えなきことは申さずとものことながら、御持參ありし菓子折に毒のありしが御災難、それ故君の嚴命受け、據なく此の詮議、御身に覺えなき事の申開き立ちますやう、仰せ聞けられ下さりませう。

梅の 悋氣故に毒害せしと御疑ひを受けたれど、假令お柳が御意に入り御寵愛遊ばすとも、何故それを恨みませうぞ、かゝることゝも知らずして、持參なしたる菓子折に毒のありしは自らを、罪に落さん企みごと、推量してたもいなう。

主水 されば推量はいたせども、御身に覺えなき事の證據なければ御疑念晴れず、君の御心解けるやう、申譯はござりませぬか。

梅の おゝ御疑念を晴らす證據には、熊野山の牛王を呑み、まことわらはが企みなら立所に御罰を蒙り此の場で死するが何より證據、それより外に自らが申譯はないわいの。

主水 何樣それはよい證據、罪を犯して隱すものは血を吐き死すると申すこと、牛王を取り寄せ、證據

となさん。

へ言はせも果てず一角が、

一角　牛王なぞが何の證據、愚人をまどはす賣主の仕業、それより君の嚴命故、なぜ割竹で拷問せぬのだ。

主水　ではござれども、御存じなき證據とあれば、拷問なすにも及び申さぬ。

一角　何かにつけて猶豫召さるは、君の上意をもどき召さるか。

主水　さあ、全くもつて。

源藏　何はともあれ君命故、猶豫いたさず此場に於て。

主水　すりや、どうあつても。

源藏　打たずば君の御心解けまじ。

梅の　左程にまで自らを。

一角　憎み給ふもお柳の方な、毒害なさんとなせし故。

主水　はて、是非もなき君の御疑念。

源藏　疾く／＼此の場で打ち召され。

主水　ぢやと申して、

一角　打たずば身共が、替らうか。

主水　さあ、

一角　さあ、

兩人　さあ〳〵。

源藏　役目の表猶豫めされず。

主水　殿の嚴命　御免下され。

〽割竹とつて立ちかゝれば、打たうと御身を寄せ給ふ、御心根のいたはしく、打つに打たれず振上げし手も震はれて打ち兼ぬる、一角それと見るよりも、

ト源藏是非なき故打てといふ思入、一角詰め寄り居る、主水割竹を振上げ、打たうとして打兼ねる切なき思入、又助は打つなといふ思入、梅の方打つてくれといふ思入よろしくあつて、

一角　えゝまた〳〵と馬鹿々々しい、身共が替つて拷問せん。（ト立ちかゝるを）

源藏　いや一角殿、お待ちなされ。

一角　ぢやと申して、

源藏　はて、詮議の役目は主水殿、手出し召されず控へてござれ。
一角　えゝ、此の手がむづ〳〵いたすわえ。
源藏　いざ、主水どのには。
主水　はッ。

〽はつとばかりに振上ぐれば、氣をもみあせる又助が、垣を破つて入らんとなす、折しも又も降りつむ雪。

ト主水割竹を振上げる。又助御主人を打つては濟まぬといふ思入あつて、垣の内へはひらうとするに此の内雪おろしにて、しきりに雪降る、主水又助を見て、

こりや〳〵、出ては惡いぞ〳〵。
一角　なに、出ては惡いとは。
主水　詮議の役目は、かくいふ主水。（ト又助へこなしあつて）入らざる差出控へて居よ。（ト一角へ向ひ）いやさ、控へ召され。

〽千々に心を碎くにぞ、

一角　然らば疾く〳〵、なぜ打たぬ。

梅の　早う打つてくりやいなう。
主水　仰せに任せて。
〽身うちをいとひ打ちければ、（ト主水割竹にて梅の方をそつと打つ。）
一角　音のせざるは、手ぬるい拷問。
〽言ふに主水が又振上げ、打たんとなしてかたへなる、燈籠はツしと打ちければ、積りし雪の散亂なす、さてはと蟹江は目早くも、
やあ、今のは正しく。
ト一角立ちかゝるを、源藏手早く路次笠にて隔てることよろしく。
源藏　つゞけて打たれよ。
主水　言ふにや及ぶ。
〽折しも激しき雪吹雪、源藏さそくの路次笠を、かざせば一角かき退けんと、はずみに辷るそのすきに、又も燈籠つゞけ打ち、いたはる責めに奥方は嬉し涙にくれ給ふ。
ト源藏笠にてへだてる、一角見ようとし、雪に辷る思入。此の内主水燈籠の火袋を打ち、突おろしにて雪しきりに降る、梅の方よろしくあつて、主水きつと思入。

斯程拷問いたしても、たゞ一言のお答へなきは、御存じないに極まつたり。

〽此の場をくろむ拙こそあれ、爰へ駆け來る以前の醫者、見附けられじと又助は、しばし小蔭へ忍び入る。

ト ばたばたになり、花道より以前の寒竹出來る、又助見て下手へはひる。寒竹は下手へ來て窺ひ居る、一角思入あつて、

一角 やあ、合點行かざる今の拷問、身共が替つて拷問いたさん。

ト 此の時寒竹つかつかとはひる。

寒竹 あゝもし一角様、お前様を尋ねて居たのだ、さつきの褒美はどうして下さる。

一角 あゝこれこれ、こゝへこなたが出ては悪い。控へい。

寒竹 えゝ控へいも御大層だ、此の間から無駄足を、いく度したか知れやあしねえ。

源藏 これこれ、その方は何者なるか、大切なる詮議の場所、垣の外にて控へてをらう。

寒竹 何者だもねえものだ。そもそもの始めから大事を知つてる此の寒竹、器用に褒美をくれりやあよし、しびれを切らしやあ證據の密書を恐れながらと持出したら、忽ち知れる毒の仕込。

ト 密書を出す、主水これを引取る、寒竹びつくりして、

南無三、それを。

取りにかゝるを抜打ちに、はツしと首を打落せば、はツとばかりに驚く奥方、主水は刀を納めしが、心得がたく二人は見遣り、

卜寒竹密書を取りにかゝるを、主水寒竹の首を打落す。梅の方びつくりなし、主水は手紙にて血を拭ひ、さやに納める、源藏一角思入あつて、

源藏　こりや何故に、主水どのには。

主水　今御當家の柱と頼む、執權職の貴殿へ對し、失禮働く不屆き奴、身共が手討にいたしてござる。

源藏　仔細を聞かずに一刀に、醫者寒竹を討つて捨てしは、源藏感心いたしてござる。

一角　大事の詮議に邪魔が入り、腰折なしたが主水どの、跡は如何仕めさるぞ。

主水　時ならざりし此の雪に、最早夕暮近ければ、まづ今日は此儘に、詮議はいたさぬ所存でござる。

一角　そりや又何故。

主水　よき手がゝりを得たる故。

源藏　や。

一角　その手がゝりとは。

主水　今日只今手に入りし、醫者が持參の此の密書。

一角　おゝ。

主水　是を讀み上げなば、折へ仕込みし毒藥も、大概それと知れるは必定、それ故詮議仕らぬ。

源藏　成程貴殿の言はるゝ如く、此の大雪に夕景近く、最早殿の御歸館なれば、詮議は後してのことにめされ。

主水　すりや、御聞き屆け下さるとや。

源藏　いかにも、承知いたしてござる。

主水　是にて拙者も身の安堵。

源藏　此の源藏も、安堵なすやう。

主水　後刻御手へ入れるでござる。

源藏　左樣ござらば、主水どの。

主水　望月氏。

一角　とはいへ、此の儘。

源藏　まゝこれ。（ト一角を留めて）後刻面談。

主水
源藏　いたすでござらう。

〽心殘して望月は、蟹江を伴なひ靜々と、枝折の內へ入りにける。

ト息込む一角を制し、源藏思入あつて枝折の內へはひる。

主水　殿の上意と望月が、拙者へ詮議を言ひ附けしは、善惡分らぬ心の內、それはともあれ奥方へ、此の身のお詫をいたさにやならぬ。

ト主水梅の方を床几へ掛けさせ、跳への合方になり、

佞人共が讒言に君の御心あら〳〵しく、御諚に依つて是非なくも御身を厭ひ打つ苦しさ、我身へ熱湯さゝるゝより、こらへ兼ねたる拙者が切なさ、夫の辨慶が義經を山伏姿に出たちて都を落しそのきざみ、加賀の國安宅の關にて判官殿と見咎められ、是非なく主君を辨慶が、金剛杖にて打ちたるは、關守富樫をあざむく爲め、是は主君の嚴命に、科なき御身の奥方を此の割竹で打ちたるも、望月蟹江が檢使故、遁れがたなき事ながら、腕を上げる勿體なさ、實に辨慶もさこそあらんと、過ぎし昔を身に知りし、五體もしびるゝ苦しさを御推量下されて、無禮の段は幾重にも、御許しなされて下さりませ。

〽雪に頭をすり附けて、身の詫なせば奥方が。

梅の　その詫びよりも自らが禮を言はねばならぬのは、今も言ひしが一角が、手酷き責めに打たれなば疾くに命を捨てねばならぬ、危い所を助かりしは、主水そなたの蔭なれば、心で拜んで居るわいなう。

主水　こは勿體なきその仰せ、御扶持を受くる家來の拙者、何の御禮に及びませう。さはさりながら奥方が、かやうに御苦勞なされまするも、元の起りはお柳の方を君の寵愛深き故、遂には御家の亂れとなり。

梅の　佞人讒者の、

兩人　皆仕業。

〽恨みの涙はら／＼／＼、降り積む庭の白妙も、解けて流るゝ春の雪、忽ち消ゆる如くなり

ト兩人よろしく泣落す。主水思入あつて、

〽氣を取り直し雪打ちはらひ、

主水　御尤もなるその仰せ、お柳の方が取成しにて佞人讒者ははびこれど、いまだ帶刀隼人の兩人御家にあれば大丈夫、日限立てば我君にも、御改心遊ばすやういたしまするでござりませう。

梅の　賴みに思ふそなた達二人、御家の納まり二ツには、自らが身を賴むわいなう。

ト此の内主水梅の方のなりを見て心附きしこなし、

主水　何はともあれ奥様の、よごれ果てたるそのおなり、こりや腰元衆は居らざるか。

腰元　はゝはゝゝ。

ヘはッと答へて枝折より、腰元共が立ち出でゝ、（ト門の内より以前の腰元出て來り、）

腰一　奥様には、御別條なく。

皆々　御目出たう存じまする。

梅の　これなる主水が計らひにて、今日の難儀を脱れたわいなう。

腰二　主水様の御計らひ、

皆々　有難う存じまする。

主水　何はともあれ寸善尺魔、又もや障りのないうちに。

腰一　お召替えを遊ばして、

腰二　少しも早う、

皆々　御上屋敷へ、

梅の　返す〴〵も御家の納まりな。

主水　畏つてござりまする。

ト此の時雪おろしになり、雪ちら／＼降るを見て、

又もや降り來る、此の大雪。

梅の　積る恨みの白妙も、

主水　解けて跡なく笹の雪。

梅の　雪にすゝぐの。

主水　あいや、今宵は直樣。

梅の　そんなら主水。

主水　まう、御越し遊ばされませう。

〽此が名殘りと白雪に、心殘して奥方は腰元引きつれ入りにける。

ト梅の方思入あつて、腰元附添ひ門の内へはひる。

〽あとに主水は吐息をつき。

いかなる天魔の所爲なるか、聰明叡智の我君がお柳の方の色香になづみ、日夜淫酒に心亂れ、御家の政治もおろそかに、佞人讒者を寵し給ひ、身許知れざる望月を二なきやうに思召す故、遂に

は家中も二つわかれ、おだやかならぬ御家の浮沈、是皆元はお柳の方、その根を絶たねば泰平を諷ふ時節は來らぬ故、こりや一思案せにやならぬ。

〽御家の大事に花房が、吐息をつけば人影をあたりに窺ふ又助が、小蔭を立出でうなづき、

ト主水思入あつて上手へはひる。時の鐘、下手の蔭より以前の又助忍び出て來り、

又助　最前からの樣子をば、小蔭に忍んで聞いてゐたが、今主水樣のお詞に、その根を絶たねば、泰平を諷ふことのならぬとあれば、御勘氣御免のその種に、こゝぞ忠義の立て所、此の御屋敷からお歸りの道は一ト筋大川端、雪の降るのを幸ひに、窺ひよつて只一ト突。本望遂げれば此の身の大功、假令一命捨つるとも、御主を始め諸人の爲め、こゝらが命の捨てどころ。

〽一心極まる又助が、樣子窺ふ望月源藏。

ト此以前よき程に、門の內より以前の源藏出て、後ろに窺ひゐて、

源藏　あつぱれ忠義、感心いたした。（ト前へ出る。又助びつくりして）

又助　や、あなた樣は。

源藏　多賀家の執權、望月源藏。

又助　え。

源藏　いや、何も驚くことはない。（ト誂への合方になり、）新參なれどもそれがしは當時殿のお意に出度く立身登用いたすといへども、先達より我君には淫酒に耽り御身持ち惰弱、それに諂ふ佞臣一角御家を狙ふ曲者と、疾くより心の附きし故一味と見せて探索せしに、求女殿が科となりし、夫の金子の紛失も十が九ツかれが仕業、ひそかにそれを詮議いたし、再び御家へ歸參あるやう、此の源藏が取成しいたさん。既に最前も一角が毒害ありしを奧方に罪を負はして拷問なし、責殺さんといたせし故、殿の上意と僞つて主水殿に詮議をゆづり、お命お助け申したり。かほどに忠義を盡せばとて佞人讒者と交はる故、嘸や不忠とさみなさんが、火も盛んに燃ゆる時、水をもつてこれを防がばその火ます〳〵盛んになる故、火をもつて火を鎭むるそれがし、不忠と知つて不忠のものと同席いたすも、その機を計り再應殿をお諫め申し、御家を安くなさんが爲め。

ト源藏思入あつていふ。又助思入あつて、

又助　むゝ、さては御家を横領なさんと、殿の御心をはかす一角、御家の祿をはみながら、言はうやうない人非人。

源藏　その人非人を避けんには、殿の寵愛一方ならぬお召仕ひのお柳の方、實は身共が妹なれど、殿の大事に替へ難し、不便ながらもお柳の方を人知れず殺害なし、その根を絶たばおのづから御身持

墮弱も自然と納まり。是に上越す計略なき故、身共が手にかけ害せんと心は千々に碎けども、殿の御側を放れねば、今日まで心に任せず如何はせんと思ふ所、小蔭で聞きし汝が心底、下郎に似合はぬ天晴れ誠忠、今宵の歸館を幸ひに主人求女になり替り、首尾よくお柳を討つて捨て、御家を納めてくれまいか。

又助　すりや源藏樣には現在の、御妹御たるお柳の方を。

源藏　汝を賴み討たするは、此の源藏が忠義の潔白。（ト又助思入あつて、）

又助　成程人は添うて見よと、聞くとは大きな相違にて、現在實の妹御を殺して御家を納めるとは、誠に感心いたしました。してあなた樣の御賴み通り、お柳の方を殺害なさば。

源藏　多賀の御家は安泰に惡人自然と退く時は、そちが主人の求女殿、身が取りなしで再び歸參。

又助　すりや御主人求女樣にも、あの歸參がかなひませうか。

源藏　いかにも。

又助　御主人樣の御爲めといひ、御勘氣御詫に又助が一つの功を立てたい處、命をきりにその御役、勤めまするでござりまする。

源藏　ほゝお、出かす／＼、是より歸路は大川端、多勢に紛れて仕損ぜぬやう。

又助　見事討って御目にかけますが、刃物の用意がござりませねば。

源藏　おゝ、それぞ幸ひ、此の差添。（ト腰に差したる求女の紋ちらしの差添を拔いて、）求女殿が追放に、取上げ置きし此の一腰、これを汝に遣はさん。（ト出すを又助受取り、）

又助　これぞ覺えの紋ちらし。

源藏　それにて今宵仕果せなば、やはり求女が忠義も同然。

又助　えゝ有難う存じまする。（ト此の時奥にて、）

呼び　御歸館。

又助　御歸館とあれば、先へ廻って。

源藏　定めて夜道に提灯あらんが、紋は則ち菊唐草。

又助　その紋所を目當になし。

源藏　近よる場所は大川端、乘物越しにたゞ一と突。

又助　息の根留めて水中へ、飛込んだらば魚同然。

源藏　片時も早く。

又助　心得ました。

源藏　こりや〳〵、忠義の道を忘るゝなよ。

又助　はツ。

〽はツと心得又助が、降り積む雪を踏みかため、かしこをさして。

ト謡への雪おろしにて、きつと見得、三重へ寺鐘を冠せ、逸散に花道へはひる。源藏おとな見送り、

源藏　むゝ、これでこつちの目算も思ふつぼみの花房めは、香爐の科で屋敷は追放、その又家來の又助をお先に使ふ提灯も菊唐草を目印に、間違ひさせれば奥方を手も濡らさずに今宵の内、時ならざりし此の雪と共に消え行く此の世の引導、筑波おろしは無常の風、梅を去らして柳をば花の手活と眺めさせ、宿つた胤で多賀家の繼木、開く小口の花の陰、是から運の盛りだなあ。

ト向うを見込む。本釣鐘、此の時雪しきりに降る、よき程に後ろへ主水蛇の目傘、下駄がけにて出て來り、後ろへ窺ひゐて、源藏へさしかける。源藏は心得ずうなづきゐて、雪のかゝらぬに心づき、振り返り主水を見てびつくりなし、

や、主水殿。

主水　望月氏。（ト源藏そしらぬ體にて、）

源藏　時ならぬ雪でござるな。

主水　されば正午の頃迄は、かゝるけしきもござらぬに、俄に雪の降るといふは、油斷のならぬことでござる。（ト源藏へかけていふ。）

源藏　や。（トぎつくり思入。）

主水　用意は常に、いたさにやならぬ。

源藏　むゝ。（ト思入。主水氣を替へ、）

主水　ことに紛れて、はたと失念。

ト懐中より以前の寒竹の密書を出す。源藏手に取つて、

源藏　これは。

主水　貴殿の芳志を謝し申す。

源藏　忝い。

トにつたりとして密書を懐中する。雪おろし雪しきりに降る故、主水源藏へ傘をさしかける木の頭、源藏手を上げて禮をなす。主水は源藏へ目を附け、油斷のならぬといふ思入。兩人氣味合よろしく、本釣鐘誂への合方、雪おろしにて、

ひやうし　幕

ト幕引きつけると、雪おろしにてつなぎ、直ぐ引返す。

三幕目返し　　隅田川雪降の場

〔役名――鳥井又助、保田隼人、數馬、中間○△、同六人、供廻り大勢、股立侍四人。奥方梅の方腰元四人、陸尺等。〕

（隅田川雪降の場）――本舞臺上の方雪の積りし練塀にて見切り、下の方片附けし葭簀張りの出茶屋、向う枕橋より隅田川をはすに見たる雪降り、夜の遠見、日覆より雪の積りし松の釣枝、舞臺花道とも一面に雪布を敷き、時の鐘、雪おろしにて幕明く。と雪おろし合方にて上手より前幕の數馬、袴股立大小青漆の合羽にて、中間一人赤合羽竹笠にて、同じく中間、提灯を持ち、附添ひ出來り、

數馬　季候が早いと言ひながら、最早櫻の咲く時分に時ならぬ此の大雪、たんと積らぬその内に、大川端を越したいものだ。何にいたせ奥方樣の、御駕脇へ御提灯を遣るがよいぞ。

○　へい〳〵、畏りました。

トやはり右の鳴物にて、上手より赤羽羽の中間、竹笠箱提灯を入れし釣臺を擔ぎ、中間へ酒に醉ひた

ろこなしにて、菊唐草の紋附きの箱提灯をともし出て來り、花道にて、

△　えゝい、筑波おろしの雪風に寒くつてならねえから、さしで五合きめこんだが、べらぼうに醉ひが出た。えゝい、いゝ心持だ。（トふら／＼しながら舞臺へ來り、）さあ／＼、提灯はいくらもある、つけろ／＼。

中間皆々　合點だ／＼。（ト皆々提灯に灯りをつける。菊唐草の紋の附きあるを見て、）

數馬　えゝ、こりや皆お御殿の提灯ばかり、奧方のは如何いたした。

○　奧樣のお提灯は橋向うの、釣臺の上に澤山ござりまする。

△　僅かな内の間に合せ、これをお持ちなされませ。

數馬　僅かな内といひながら、御紋所が違つては。その方共今一度向う河岸迄取りに參れ。

中間皆々　畏つてござります。（ト此時ばた／＼になり、青漆の合羽、袴股立大小の侍出來り、）

侍　そこにござるは數馬殿か、追々雪も降り積む故、夜更けぬ内と奧樣には、殊の外お急ぎでござりまする。

△　さうお急ぎでは間に合せに、お持ちなされませ。（ト無理に提灯を突き付ける。）

數馬　然らば火急のこと故に、先づ此の提灯にて間に合はさん。これ早く。

中間
皆々　畏りました。（ト皆々提灯へ灯をつける。）

侍　最早お駕籠がお出でござらう。

數馬　お出でとあらば、少しも早うお提灯を持參いたせ。

皆々　畏りました。

ト數馬先に侍、中間提灯を持ち、花道へはひる。跡に△の中間一人殘り、

△　やい／＼、何んでおれ一人おいて行きやあがるのだ。おれを誰だと思やあがる。當時殿樣のお覺えも目出度く飛鳥も落す勢ひのお柳の方樣の中間だぞ、えゝいどこのお供先でも引けを取つたことのねえ男だ。やい氣を附けろ、馬鹿な奴らめ。えゝい。やい／＼なぜそこら中がこんなにぐるぐる廻るのだ、人を馬鹿にするな。えゝい。

ト提灯を持つてひよろ／＼とする。雪おろし合方にて、向うより鳥井又助、頬冠り尻端折りにて出で來り突當る。

えゝ、何をしやあがるのだ。

ト又助提灯を見てうなづき、赤合羽を脱がせる。

何んで合羽を脱がせるのだ。なんだ貸してくれ。いやだ／＼、貸すことはならねえ。それでも一

合買ふ氣なら貸してもいゝ、貸してやらう。

ト中間△ぐづ／＼言つてゐる内、又助赤合羽を着、竹笠を冠り、下手へ身を隱す。中間△はこれを知らず、

やい／＼、二合買はねえか、待ちやあがれ／＼。

ト右の鳴物にて、ひよろ／＼と上手へ追ひかけてはひる。又助花道へ出で、しめたといふ思入。此の時向うへ思入あつてよろしく忍ぶ。誂への合方になり、中間菊唐草の紋の附きし箱提灯を持ち、續いて乘物、黑の合羽の陸尺四人にてかゝぎ、是へ腰元四人蛇の目傘、塗下駄にて附添ひ出る。青漆、合羽の供、赤合羽の供大勢附添ひ出で來り舞臺にて、

腰一　今を盛りの櫻花、思ひがけないけふの雪。

同二　月雪花に春と秋、冬をかけての名所なる、

腰三　隅田川にて雪花を一と目に見ると申すことは、

同四　いつにない詠めゆゑ、お乘物から雪景色を、

皆々　御覽遊ばしませう。

ト誂への合方になり、川裝より雁をおろす。これにて乘物の戸を明ける、内に前幕の奥方梅の方乘つて

ゐる。

梅の　花の盛りに降る雪も、夜半の嵐に散る花かと見まがふ詠め雪景色、寒さは冬に替らねど、時か違えず故郷へ、花を見捨てゝ行く雁も、暫し休らう隅田川、心ありげにおり立ちしも、翼亂して飛び行くは、はて何とやら。

ト此の時下手より、鴨大分立つを見て、

又も流れに羽音して、一度に立ちし水鳥の物に驚くあの有樣、思はぬことで最前も、汚名を受けし我が身の上、あゝ心ならぬ事ぢやなあ。（ト心にかゝる思入。）

腰一　よしない事をそのやうに、御心配遊ばすは、御身の御毒にござりまする。

同二　お心にかゝりまするも、憚りながらお氣の持ちやう。

腰三　むら立つ鳥も詠めの一つ。

同四　只御機嫌よう御歸館を、

皆々　願はしう存じまする。

梅の　ほんに、さうであつたわいなう。

腰一　それ、お駕籠を早う。

供廻はあゝゝゝ。

ト乗物の戸をしめる。是をきつかけに、又助つか〳〵と舞臺へ來り、合羽を脱捨て、襷裸のこしらへにて提灯を切り落し、乗物へ白刃を突込む、供廻り皆々立ちかゝり、

皆々　狼藉者々々。

トこれにて乗物に腰元附添ひ上手へはひる。袴股立の侍四人又助に切つてかゝるを、又助これを相手に立廻り、誂への合方、雪おろしにて、烈しき立廻りあつて、上手へ追ひかけてはひる。やはりばた〳〵にて、狼藉者々々といひながら上手へはひる。跡知らせにつき、

此の道具廻る。

本舞臺一面雪の積りし高土手、上下雪持ちの樹木にて見切り、後ろ待乳山より今戸を見たる隅田川雪降り夜の遠見、上の方切り破りの蘆原あり、浪の音にて道具留る。と爰に中間二人立ちかゝり居て、

中一　こい〳〵作事。とんだ騒動がやあねえか、此の雪の降るので、合羽を着てゐた故、

同二　旦那方のお働きが、自由にならず、曲者を取り逃したが、太え奴ぢやあねえか。

ト供廻りの人數出來り、

供一　何者なるか奥方を、切害なして逃げ去る曲者。
同二　多勢の人數に取り圍まれ、土手より川へ飛び込みしが、
同三　川上から川下まで、此の川端を詮議なせば、
同一　行方が知れるに相違ござらぬ、何れもござれ。
皆々　狼藉者々々。

ト わや〳〵上下へ別れはひる。本釣鐘凄き合方になり、上手の蘆原を押分け、又助水入り好みの拵へにて出で來り、水を吐き絞りなど思入あつて行きかける。向うより保田隼人、上下大小、下駄穿きにて澁蛇の目傘を差し出來り、又助と行違ひ、ちよつと思入あつて、袖にて顏を隱し逸散に花道へはひる。隼人跡を見送り、本舞臺へ來る、此の時以前の數馬箱提灯を持ち出で來り、隼人を見て、

數馬　おゝ、あなたは隼人様、一大事でござります。
隼人　なに、一大事とは。
數馬　只今奥方御歸館の途中に曲者待伏せなし。乘物越しに差通し、それといふ間に川へ飛込み、逃げ失せましてござります。
隼人　容易ならざる一大事、してそのものゝ手がゝりは、

數馬　草を分けて詮議いたせど、一向に知れませぬ。

隼人　はてなあ。

ト行違ひし又助へ思入。ばた〳〵になり、下手より侍一人鞘を持ち出で、

侍　や、あなたは保田樣でござりまするか、先刻の騷動にてお乘物のその傍に、かやうな鞘が落ちてをりました。

數馬　それぞ幸ひ後日の證據。（ト取次いで出す。隼人手に取りて、）

隼人　向ふ梅の紋散し、此の持主は。（ト思入あつて、）たしかに花房。

ト此の時數馬提灯を出して、

數馬　求女殿。

隼人　こりや。（ト提灯を落す、木の頭。）粗相な奴め。

ト鞘を見てうなづき、波の音、合方にてよろしく、

ひやうし　幕

御殿草履打の場

四幕目

〔役名――望月彈正、柏木曾平太、局岩藤の靈、二代目中老尾上、息女花園姫、腰元關屋、同綾瀨奥女中牛島、同眞崎、同龜の戶、同木下川、腰元待乳、同淺茅、同梅田、同小梅、同宮戶等。〕

（多賀家別館大廣間の場）――本舞臺一面の平舞臺、正面銀張り大模樣の襖、上下折返して杉戶の出入りあり、大欄間をおろし、總て多賀家別館大廣間の體、爰に曾平太上下衣裳にて立身、此の傍に牛島、奥女中の拵へにて挑への額へ紅絹緒の附きたる草履の附きしを持ち居る。同じく眞崎、龜の戶、木下川、女形の拵へにて居並び、此模樣調べにて幕明く、と女形四人あたりへ思入あつて、

四人　曾平太さま。

曾平　これ。（ト三味線入り、序の舞になり、）

牛島　かね〲一角樣と心を合せ、此の奥殿の犬となり、

眞崎　晝夜分たずすみ〲まで、ある事ない事聞き出して、

龜戶　見る目嗅ぐ鼻地獄耳、一角樣へ日毎の文通。

木下　かう共々に心を碎けば、もう遠からずこつちの世界。

牛島　さうして何かい、

四人　手がひは。

曾平　いや、各々方も共々に皆此方の味方なれば、此の曾平太も何彼と安堵。それにつき此程隅田川の渡し場に於て、奥方梅の方には計らずも人手にかゝり、不慮の御最期、何者の仕業なるか寄り寄り詮議いたすといへども、今に於て手懸りなく、事荒立てなば御家の騷動、それに依つて御不例の體になし、ひそかに事を計らへども、その日のお供はかねてより遺恨重なる谷澤親子、差當つたるお供の越度、何かはなしにお上よりお疑ひの筋を言ひ立て、半of奪させしも何かにつけて忠義立てする彼等兩人、おツ片附けてしまつたれば、最早や表に邪魔立いたす者はなけれども、唯此上は彈正殿、一角殿の仰せにも奥を預かる尾上めを、遠ざける手段が肝要、きやつさへ一人片附けば、最早や望みもあらかた成就、どうか共々工風を凝らし、何ぞ好い智慧を出して見てくりやれ。

牛島　其の事なれば私等とても、日頃から唯邪魔になるあの尾上、しくじらさうと思へども、間がな隙がな姫君のお側放れず立廻り、忠義顏する面憎さ。

眞崎　姫君さまにも奥樣の、御變死をお歎きなされて泣いてばつかり、それが嵩じて重い御病氣、お匙の衆の伺ひには、物の怪ならんとあるゆゑに。

龜戸　羅漢ヶ谷の鬼子母神へ祈願をかけ、日毎々々の御代參、まだ其の上に上つ方にはあらう事か、百日法華の願を掛け、御殿の内はお寺同然。

木下　それといふのも成上りの二代の尾上、これ此の額へ願書を添へ、鬼子母神へ奉納なすと、姫君始め祈念の最中。

牛島　なんぼ神へ捧げるとて、常談らしい草履をば、額へ附けるの願書のと、

三人　本氣の沙汰ではないわいなあ。

倉平　それぞ幸ひ彈正殿の計らひにて、かねて認め置きたる此の願書。（ト懐中より願書を出して、）額に添へたる其願書を、是とすり替え元の通りに直しておきやれ。

眞崎　そんなら是れとすり替えて。

倉平　それなる願書は尾上めが、呪咀調伏なす企みと言ひ立て、御殿を拂ふ深い仕事だ。

四人　ほんにあなたは、楠孔明。

倉平　あまり褒めるなおれ一人の智慧ではないわえ、然し人目にかゝらぬ其の内、元の所へ知れぬやう。

牛島　そんなら早う。

三人　牛島さん。

牛島　合點でござんす。

ト牛島額を打ち、奥へはひる、曾平太思入あつて、

曾平　あの願書にて罪に落し尾上めはまづ梵天國、大領樣の弟御大清殿もこれから片附け、心にかゝる雲もなく、さうなる時はお柳のかは、奥方同然彈正殿は執權職、此の曾平太は家老職。

三人　我等とてもさうなれば。

曾平　さしづめ局お中老。

三人　此の儀を外さず、曾平太さま。

曾平　猶此上の謀計は、源藏殿の指圖を受け、

龍崎　私共も此の事を、お部屋樣へ内々に。

瀨戸　申上げるで、

三人　ござりませう。

曾平　左樣ござればな中々。

龍崎　後程お口に、

三人　かゝりませう。

ト上下へ別れてはひる。右の鳴物にて、此道具廻る。

（多賀家別館御殿の場）――本舞臺三間の間黒塗り上段の御殿、うしろ銀張り、花鳥を書きたる襖、二重上下塗骨の障子、上下杉戸、大欄間をおろし、二重一面に御簾をかけ、此道具仕掛あり、總て多賀家別館御殿の體、管絃にて道具納まる。と管絃の三味線ばかりになり、花道より腰元大勢、花筒へ桃の花を入れ、これを持ち出で來り、直に本舞臺へ來りよろしく居並び。

待乳　姫君樣の御氣鬱を、何がなお慰め申さん爲め、

淺茅　今を盛りの桃の一枝、お惱み遊ばす御病氣の、

梅田　やがて御本復遊ばせば、心も開く莟の花、

小梅　東方朔のためしに習ひ、

宮戸　心ばかりの捧げ物、御笑覽下さらば、

待乳　有難う、

皆々　存じまする。（ト御簾の内にて、）

花園　過ぎし日の暮るゝを急ぐ夕顏の、花の便りを誰か聞かまじ。

待乳　あい、お聲は。

皆々　姫君さま。

ト琴唄になり、一面の御簾を捲上げる。内に花園姫、廣袖姫君の拵へにて、病ひ鉢巻にて褥の上に住ゐ、脇息に凭れゐる。此の左右に女小姓兩人並びゐる。

花園　おゝ皆の者、わらはが心を慰めんと、心をこめし桃の花のたまもの、喜ばしう思ふわいの。

待乳　お姫樣の御意に叶ひ、

皆々　有難う存じまする。

淺茅　又今日は尾上樣には、お上屋敷へ御使者とのこと、嘸お淋しうござりませう。

梅川　もうおッつけお歸りで、

皆々　ござりませう。

花園　さあ今にも尾上が歸りなば、雜司ケ谷へ奉納なす、草履の額へ祈念をなさん。腰元共これへと申しや。

皆々　畏りました。（ト奥にて綾瀬、）

綾瀬　唯今それへ、持參いたしまするでござりまする。（ト以前の草履の附きたる額を持ち來り、）今日は姫君樣の御容體は、如何にござりまする。

侍乳　さあ、晝夜分たぬ熱氣の差引、たゞ事ならぬ御病症故。

花園　中老尾上が心遣ひ、それ故にこそ雜司ヶ谷の鬼子母神へ此の願籠め。

侍乳　兎角御病氣はお氣の持やう、いつ〳〵よりも、お顏もち色艶とてもよろしいやうに見えますれば。

淺茅　お氣をお落し遊ばさず、いつもお好きの花合せ、双六でも遊ばしましたら、

梅田　少しは御苦痛を、お忘れ遊ばしませう。

花園　いやなう、心を盡す皆の者の其の親切、龍田の紅葉吉野の花と、今此の庭へ植ゑさせても、何の心が浮かうぞいの、只樂しみは剃髮染衣の此の身の願ひ、今にも尾上が歸りなば、其の左右聞くのが何よりぢやわいなう。

綾瀬　そんならどうござりましても、姫君樣には御剃髮を。

花園　たゞ朝夕に、其の事ばかり、

綾瀬　恐れながらお心の內が、おいたはしう存じまする。

ト此の時下手の杉戸より、以前の牛島其他三人の奥女中出來り、下手へ居並び、

牛島　お姫樣の御病氣の、お見舞に上りました。

眞崎　今日はお快う、

四人　ござりますか。

綾瀬　矢張り御同へんでござりまする。（ト牛島は綾瀬の傍にある額を見て、）

牛島　もうし綾瀬さま、其の額に附けたるお草履は、いづれへの御奉納でござりまする。

綾瀬　是は姫君さまの御立願にて、雜司ケ谷の鬼子母神樣へ。

眞崎　左樣でござりますか、いかに御信心なればとて、むさくるしい其の草履を、うやうやしく額につけ。

鵜戸　私や桃緘草履の、看板かと思つたわいなあ。

木下　近い頃は昔の風儀もどこへやら、御殿の内は、

三人　亂脈ぢやわいなあ。

花園　又しても入らぬ口出し、控へて居やいなう。

四人　へえい。（ト大きく言ふ。）

花園　これ綾瀬、まだ尾上は歸りやらぬか。

綾瀬　まだお歸りではござりませぬが、もう程なくお歸りでござりませう。

ト調べになり、上手より以前の曾平太出て來り、皆々をねめ廻し、

骨平　これは〳〵いづれもには居眠り半分、晝夜の看病御苦勞に存ずる。姫君樣、只今もお次にて承はりましたれば、やゝともすればお美しい盛りの花の黑髮を剃り落し、剃髮染衣をお好みなさるゝが、そりや御不延喜と申すもの。一えん合點がまゐりませぬ。

花園　自らが此の願は昨日や今日のことではない。をさない時より親々が言號けせし經久樣、御父義經公御兄弟不和となり、御一門にて鎬を削り、此の世を見限り陸奥の高館にて、父御諸共經久樣にも御落命と聞きし故、菩提の爲めに剃髮なし、亡き姉上や夫へ追善。

骨平　いや〳〵それは惡い御料簡、お言號とは申しながら、杯を取交したといふではなし、勿論一度も逢ひはなさらず、言號といふはほんの名ばかり、入らぬ心中立てようより、かね〴〵お勸め申したる賴朝公の御媒介にて、陸奥の太守へ御再緣なさるゝが御身の爲め、第一は兄上樣へ御孝養でござりまする。

花園　假令杯なさずとも一旦夫と定めたる經久樣、貞女を立つるが女の操、此の上とても其樣な、再緣なぞといふ事は、必ず共に言うてたもんなや。

骨平　これ程までに申すのも、あなたのお爲めを思へばこそ、忠義に凝つたる骨平太め、惡い事は申し上げませぬ。今一度御思案なされて御覽じませ。なう、腰元衆。

ト　むやみに勸める、姫はうるさいといふ思入、腰元皆々默つてゐる。奥女中曾平太と顏見合せ思入。

花園　これ綾瀬、いまだ尾上は歸らぬか。

綾瀬　まだお歸りではござりませぬ。もう程なくお歸りでござりませう。

ト此の時花道の揚幕にて、

尾上　中老尾上、只今歸館いたしてござりまする。

綾瀬　なに、尾上様の、

皆々　お歸りとや。

ト三味線入り、誂への鳴物になり、尾上裲襠衣裳、中老の拵へにて出來り、花道にて、

尾上　只今歸りましてござりまする。姫君様さぞお待ち久しうござりませう。

花園　おゝ尾上、待ち兼ねました。

綾瀬　さあ／＼早う。

皆々　尾上さま。

尾上　いづれも様、御免なされて下さりませ。

ト右の鳴物にて、本舞臺へ來り、上手へ通り、曾平太を見て思入あつて住ふ。

曾平　これは〳〵尾上殿には、今日はお上館へお使者との事、御苦勞千萬に存じまする。

尾上　これは〳〵曾平太さま、何御用ござりまして、此所へは御出でござりまする。

曾平　姬君樣の御見舞に、わざ〳〵伺候いたしてござる。

尾上　それはまあ御親切に、有難うござりまする。然しながら此の御殿、男たいせし者は堅く戒めたる此のお住ひ、誰が許しでお出でなされました。

曾平　いやさ、誰も許しはいたさねど、女中方にも御主人なれば、身共が爲めにもお主樣、其の御主人が御病氣故、お尋ね申しにまゐつた拙者、別して咎めるにも及ばぬことだ。

尾上　いえ左樣ではござりませぬ。其のお主樣が大切故、私初め皆樣もお附き申す奧御殿、お許しもなく濫りに男の來りなば、不義同然の重いお咎め、あなた樣にも譜代の御家來、奧の掟はよも御存じないことはござりますまい。

曾平　その儀は身共も、心得ゐれど、

尾上　御存じならば、濫りにお出では叶ひませぬ。

曾平　さあ、それは。

尾上　さあ、

曾平　さあ、

尾上　おさがりなされ、曾平太様。

二人　さあ〱。

曾平　ふむ。

綾瀬　さ、お咎めない内、少しもお早う。

曾平　いや歸るとも〱、大事に使へば一生ある此の命、さう粗末にはいたされぬわ。

牛島　どれ〱、私等も長居をして、お羽振りのよい風ひいて、

眞崎　嚏の出ぬ内お次ぎへいて、噂話しでお煮花の、

綱戸　お臍でお茶でも、

四人　沸しませうわいなあ。

曾平　身共も一緒に、どれ、參らうか。

ト調べになり、姫君に辭儀をして、曾平太先きに奥女中附添ひ下手へはひる。尾上思入あつて、

尾上　餘事のことにて姫君さまにも、嘸お氣鬱に入らせられませう。

花園　これ尾上、兄上様の御機嫌は如何ありしぞ、様子が聞きたい、早う聞かせてたもいなう。

ト合方になり。

尾上　さあ、お兄上大領樣へ剃髮染衣のお願ひ、直々申上げましたれば、以ての外の御憤り、押してお詞返してはと、心を碎き一旦お次へ身退き、又も御機嫌よろしき折を見合せてもう一度お願ひ申さんと思ふ所へ殿樣より、否やの仔細は此方より使者を以て申送る、立歸れとのお言葉にたのみの綱も切れ果てゝ、すご〳〵戻りましてござります。

花園　そんなら願ひは叶はぬとか、はあゝゝ。（ト泣落す。）

尾上　日頃お慈悲深い大領樣が、打つて替つて亂酒を好み、お身持とても荒々しく、お心までが亂れゝも、近頃お抱へ遊ばした彈正殿や、お柳の方がお勸め申すに違ひはない。

綾瀨　奧方梅の方樣の御落命の樣子といひ、どうもたゞ事ではござりませぬ。

尾上　それとても彼等が仕業と思へども、是ぞといふ確かな證據もあらざれば、迂濶にそれと詮義もならず、然しながら一大事の事なれば、必ず共に御沙汰なしに。

皆々　心得ましてござりまする。（ト皆々愁ひの思入、此の時花道の揚幕にて、）

呼び　上使。（ト尾上思入あつて、）

尾上　最早御上使の御入來とや。皆さんにもお出迎ひ。

皆々　畏りました。

呼び　上使。

ト誂への鳴物になり、花道より彈正燕手長上下、大小にて出來り、花道にとまる。

尾上　これは〳〵彈正様、お役目とは申しながら、御苦勞千萬に存じまする。いざまづ、これへ。

皆々　お通り下さりませう。

彈正　役目なれば罷り通る、許しめされ。

ト右の鳴物にて本舞臺へ來り、二重上手へ通りて床几にかゝる。

尾上　御上使様へ申上げまする。姫君には病苦に勞れ居られますれば、身不肖ながら中老尾上、御上使の趣き私へ仰せ聞けられ下さりませうならば、有難う存じ奉りまする。

彈正　姫君には御病氣の由、略承つて承知いたす。大領よりの上意。

尾上　はゝあ。（ト管絃になり、尾上初め皆々平伏する。）

彈正　上意の趣き餘の儀にあらず、先達て將軍賴朝公、御媒介にて陸奥の太守へ婚姻取り結ぶべき條、仰せ出されし所、姫には其の儀をいなみ嫌ひ、剃髮染衣の御願ひ、まつた聟引出に渡すべき金鶏の香爐が紛失なせしも尾上が業にて、大領殿へ鎌倉より御疑ひを蒙らせ、其の虚につけ入り家國

を横領なさん彼れが隱謀、事の實否を糺せよと仰せを蒙むる此の彈正、返答あるや、なゝ何と。

尾上　是程までに姫君の、大事を思ふ尾上をば。

彈正　いかにも、不審重なる尾上が心底、言葉巧みに言ひぬけなば、鎌倉表へ疑念の潔白、繩打つて引來れと、大領殿より嚴しき御諚。

尾上　すりや、繩打つて引けとある。大領樣の仰せとな。

花園　えゝお情ない兄上さま、わらはは此世に望みはなけれど、忠臣厚き尾上にまで、濡衣着せるも自ら故、えゝ早う死にたい、死にたいわいなう。

尾上　あゝ申し姫君樣、必ず其樣な事おつしやりますな。此身に曇りのないことは、神樣かけて心は潔白、兄上樣へ申譯はいかやうともいたしまする、必ずお氣遣ひ遊ばしまするな。

彈正　兄君への申譯は口賢く申すとも、鎌倉表へ言譯あるか。

尾上　はツ、姫君樣の御病氣は物の怪の業にて時を切つての御惱み、まつた金鷄の香爐は先達て、新清水に於て御病氣平癒祈念の砌り、紛失なして行方知れず、其の金鷄の香爐は多賀家重代の名器にして如何なる妖魔妖怪なりとも近寄ることの叶はざる、吉凶告ぐる黄金の鷄、其の香爐のあるならば、物の怪の御惱みを信心祈禱、これぞ香爐のないといふ、慥かな證據にござりまする。

彈正　むゝはゝゝゝゝ、事をかしき尾上が言葉、君を諫め奉るに汝等如きにならはうか、花園姫の大事をかこつけ、おのれへ掛くる御不審を、よそに聞きなす橫道者、科は脱れぬ重き大罪。

尾上　すりや、いかやうに申しても、大領さまの御疑念は。

彈正　いつかな晴れぬ天下の政事、但しそちが祕めおきし、香爐の在所白狀なすか。

尾上　否々以て。

彈正　知れぬとあれば、謀叛の根ざしに。

尾上　左樣なことを。

彈正　然らば繩打つて、引立てようか。

尾上　さあ、それは。

彈正　さあ。

尾上　さあ。

二人　さあ〳〵〳〵。

トこれにて大ドロ〳〵になり、此の道具殘らず荒れ果てたる道具に變り、彈正をせり下げる、これと一時に岩藤をせり上げる。舞臺雨窓をおろし、薄暗くなる。皆々びつくり思入。

花園　あれえ。

ト驚く思入、腰元皆々姫を圍ふ。尾上きつとなる、岩藤こなしあつて、

岩藤　其の返答はなるまいがな。

尾上　はて心得ぬ、俄に鳴動なすと其の儘、

綾瀬　斯く荒果てし、

皆々　御殿の内。

尾上　やゝ、いつの間にやらあなたは、お局。

皆々　岩藤さま。

尾上　扨は怨念中有に迷ひ、尾上が忠義の妨げなすか。

岩藤　初、だまれ。今は二代の中老尾上、假令死んでも大恩ある主家の大事を見るに忍びず、露の草葉の蔭よりも、姫君樣が猶大切、殊には御剃髪の御望みの、時日をのばすもわしが一念、たゞ一筋を千筋と願ふ由縁の黒髪、さば〳〵と剃り落さうといふお爲めこがしの佛なぶり、其の邪を遂さけんと、晝夜放れぬ姫のお傍、其忠義を思ふ一念を物の性なりと披露して、力及ばぬ神のいのり。（ト綾瀬の前にある草履を見て）いやなに、尾上どの。奉納のお草履は、何者が持參いたしました。

尾上　其のお草履は祈念の上、私が持參いたしましてござりまする。

岩藤　はてなう。（ト願書を見て。）それなる額の草履の裏に、何やら書いたものがござんすが、拜見しても大事ござんせぬか。

尾上　其の書きものは、御病氣御全快を祈念の願文、御覽なされても、何の大事がござりませう。

岩藤　左樣ならば、（ト願文をひらき、口の內にて讀み思入、びつくりして又氣を替へ、）尾上殿、ちよと御意得ませう。

尾上　あの私に。

岩藤　其許樣の奉納の願書に、相違ござんせぬか、さあ改めて御覽なされ。

尾上　え。（ト手早く取上げ見て、びつくりなし、）やゝゝゝ、いつの間にやら、こりや恐ろしい姬君樣を調伏の此の願書。

皆々　えゝゝゝゝ。（トびつくりする。岩藤思入あつて、）

岩藤　これ〳〵、お前方も靜かに〳〵。姬君樣を調伏の願書は、尾上殿、こなたの企みでござんせうがの。

尾上　えゝ、そりや又何故でござりまする。

岩藤　此の手跡は寺澤流、此の御殿にてはこなさん一人。

尾上　えゝ。

岩藤　それ女中方、讀み上げめされい。

綾瀬　畏りました。（ト願書を取上げ）「呪咀調伏願文の事、一ッ我深き大望あるに依つて、當館へ賤しき奉公いたし、立身出世なすと雖も、折を伺ひ姫君を亡き者にせんと思へども、かしづきの者多く心に任せず、これに依つて、藁を以つて草履を造り、神前にて呪咀の禱りをなし、神も納受なすならば速かに姫の一命を斷ち切りたまへ、念願成就の上は當館の巽に宮居造立あるべきものなり、願主中老二代の尾上謹んで敬白。」

皆々　えゝゝゝ。

尾上　やゝ身に覺えもない調伏の此の願書、こりやまあどうして此の内には。どうも合點がゆかぬわいの。

岩藤　これ尾上殿、覺えないとは言はしやんすが、一體此の額は誰が誂へて、誰がこゝへ持つて來たのでござんす。

尾上　さあ姫君が御病氣と聞くよりも、何卒平癒あるやうに、雜司ヶ谷へ日毎の大願、人手に掛けず私が造り上げたる額のお草履、願書は元より御病苦を避けんが爲めの祈念の誓文、どうして替つた

この願書。

岩藤　ほんに聞くさへ恐しい、調伏の此の願書、覺えがないと言はしやんすが、常々姫君の御病氣を直さん爲め、手づからしつらひ雜司ケ谷へ納めて御代參、其の折御祈念なさんす尾上殿なりや、お前より外に此内は知る人のない此の草履、此程より樣子を聞けば姫君を剃髮させ、家國をも我物にせんこなたの企み。成程人手に掛けぬのも、こりや尤も、姫君樣を調伏の願書、どうして人手に掛けられう、さうとは知らずうつそりな女中方、なんで姫君の御病氣、なんの御全快あらう筈がない、ほんにまあ大それた企みごと、それといふのも根が部屋方者から成り上り、ツベコベツベコベと言ひ廻し、お首尾の好きを笠に着て、姫君に剃髮を勸め、深い企みをなさつたなう。

尾上　大恩受けし姫君樣を、何でまあ左樣な企みを。

岩藤　左樣でなくば、なぜ此の樣な、願書を書きなさんした。

尾上　どうして、その願書をば。

岩藤　人手にかけぬ奉納の此の額に、誰が願書を入れて置きました。

尾上　さあ、それは。

岩藤　言譯がござんすか。

尾上　さあ、その言譯は。

岩藤　さあ、言譯は。

尾上　さあ。

兩人　さあ〳〵〳〵。（ト尾上ウムとつまる。）

岩藤　なんとして言譯があるものぞ、こりやよう聞けよ、おのれが主の尾上めも、御朱印を預かり紛失させ、其科を此のやうに岩藤に塗り附けようとした尾上ぢやに依つて。

トあり合ふ草履を取つて、尾上を打つ、皆々思ひ入。

なんぢや、其の顏は、かう〳〵〳〵。

尾上　此身に覺えのないことながら、僞筆の願書も尾上が名宛に、言譯なさに無念を忍び、ぢつと蟄してゐるものを、品もあらうに草履を以つて。

岩藤　ぶつたがどうした。（トきつとなつて、）叩いたが何とした。元は尾上が召使、主の敵を討つたとて、成上りの中老役、其のまゝ尾上が名をついで姫君のお側役、調伏なさん企みとは草葉の陰より見拔いておいた女の淺はか企み事、主が主なら二代の尾上、ま、よく〳〵草履に緣のある、不忠の天罰今目前、かう〳〵〳〵、何と骨身にこたへたか。（トさん〴〵に打つ、皆々無念のこなしあつて、）

皆々　こりや尾上様を。

岩藤　事によつたらこなさん方も、同類ぢやがや。

皆々　それぢやといふて。

尾上　これ〳〵騒ぐまい女中方、姫君様を調伏とは、身に覺えのない事なれど、お局様の御難題、それな兎やかうおつしやると、同類になりますぞや。

皆々　それぢやと申して。

尾上　はて、お控へなされませ。

岩藤　お主様を失はんと、おのれが企みでおのれが恥辱、まだ〳〵腹のいるやうに、かう〳〵〳〵。

（トさん〴〵に打据ゑ、）何と骨身にこたえたか。

トばた〳〵になり、花道より關屋、腰元の拵へにて鬼子母神の厨子を持ち、急ぎ出來り、

關屋　はッ姫君樣へ申上げまする。今日御代參に參りし處、雜司ケ谷の貫首樣、御祈念終ると其の儘に急ぎ此の厨子お館へ早う持つて立歸れとの仰せつけ、何かは知らず乘物を急がしまして、只今戻りましてござりまする。則ち尊神の御厨子、尾上さま、お取次ぎお願ひ申しまする。

ト厨子を出す。尾上受取り、

花園　有難き鬼子母尊神、幸ひ尾上に預ける間、曇り霞の障碍を拂ふ其の尊像、早く〳〵。

尾上　すりや、此の尊像を、えゝ有難うござりまする。

岩藤　すりや、これが鬼子母神の。

尾上　此の尊像の功力にて、お家に仇なす恨みの惡念。

綾瀬　佞人讒者の計らひにて、跡形もなき此の願書、

尾上　障碍を退散なさしめたまへ。

ト尾上は廚子を差附ける、綾瀬は願書を火中する。これにて掛け煙硝ぱッと立ち、大ドロ〳〵になり、岩藤は欄間へ消える。これにて道具元の御殿へ戻る。これと一時に、元のすつぽんより彈正をせり上げる。皆々びつくりして、

尾上　やゝ、常に變らぬ奧御殿、局と見えしは、彈正樣。

關屋　狐狸妖怪の業なるか。

綾瀬　何とも怪しい。

皆々　御上使さま。

彈正　やあ、だまり居らう。上使へ對して奇怪千萬。さあ御不審蒙むる中老尾上、其の身の言譯相立つ

か、但しは姫に婚姻さすか、二つに一つの返答おしやれ。

ト尾上思入あつて、あり合ふ花筒にさしたる桃の花枝を取つて、

尾上　御上使様へ一つのお願ひ、雜司ヶ谷鬼子母神へ姫君様の御病氣にて、大願こめし三七日、何卒祈願の果てますまで、御經讀誦いたし度うござりまする。今暫くのお日延を。

彈正　いゝや其儀は罷りならぬ。上使の役目に猶豫があらうや。

尾上　情は人の爲ならず、これ此の花の散らぬやう、お上へよしなにお日延を。

彈正　いゝや叶はぬ、日延などゝは。

尾上　すりや、どうあつても。

彈正　武士の言葉に、二言はない。

尾上　そこを何卒。

彈正　むゝ。（ト花を引取り、尾上に突附け、）落花再び。

尾上　えゝ。

ト思入、彈正花の枝を舞臺へ打附ける。花パッと散る、これを木の頭。

彈正　返らぬ事だわ。

トきつと言ふ。尾上當惑のこなし、此の見得よろしく、中の舞にて、

ひやうし　幕

五幕目

鳥井又助切腹の場

〔役名〕――鳥井又助、保田隼人、家主八兵衛、米屋九郎助、紺看板の仁三實は奴隅田平、三浦屋若い者、判人小助、中間市助、同仁六、丁稚長太、花房求女、安達昌伯、又助妹おつゆ、弟志賀市等。

（深川洲崎、鳥井又助内の場）――本舞臺三間の間、平舞臺、向う暖簾口、上手一間押入戸棚下手鼠壁、此壁に投網を掛け、上の方一間障子屋體、いつもの處門口、此脇に餌を入れし桶を積重ね、下の方跡へ下げて一間三尺の入口、餌屋と記せし腰障子、ずつと下に隣二階家の前側、總て深川洲崎邊、餌堀り又助内の體。爰に判人小助、半合羽尻端折りの拵へにて、釣竿を持ち、餌箱を出し、餌を買つてゐる、又助妹おつゆ餌を賣つてゐる、門口に三浦屋の若い者、齊流し、羽織をたゝみ肩へかけ、煙草を呑み居る、此見得隣のさらひの唄にて幕あく。

小助　お露さん、兄さんは留守かえ。

つゆ　はい、今朝早く洲崎へ參りましたわいな。
小助　餌堀もこれからはいゝが、氷のある時分はつめてえの。
つゆ　小助さん、釣にお出でなさんすか。
小助　あい、けふは此の大崎町に奉公人があるので、吉原から此のお方がお出でなすつたから、親仁が留守で晩でなくちやわからねえ故、そこで汐待の內、鮒でも釣るのさ。
つゆ　それでは岡餌の方がようござりませうわいな。
小助　どうで釣れやあしねえから、何んでもいゝ。（ト此の內三浦屋の番頭おつゆを見て、）
番頭　これ小助、かういふ奉公人をほしいものだな。
小助　もし、此子なぞは話が出來ると、五年百兩がものはありますね。
番頭　さうさ、そこらで出來るなら、直に相談したいものだ。
つゆ　もし小助さん、わたしのやうな不器量なものでも、女郎衆になられますかね。
小助　なられるどころか、大なりさ。こゝにゐなさるのは吉原の三浦屋の番頭さんだが、今もお前なら五年百兩で買ひたいといひなさる。
つゆ　えゝ、大まいの。（ト思入あつて、）そりやあ美しい娘のこと、あんまり弄つて下さんすな。

番頭　いや弄るのぢやあねえ、ほんのことさ。そんな事もあるめえが、もしなんぞ金の入る事で勤めでもする氣なら、一つ長家の事だから、此の小助に話しなせえ、いつでも百兩なら抱へませう。
つゆ　それはまあ、有難うござります。又お願ひ申す事がありませうかも知れませぬわいな。
小助　どうして〳〵、餌堀はしてゐるが、此の子の兄貴は以前が武家出で、堅藏だから妹を賣るなぞといふ事はねえのだ。ときに志賀市はどうしたの。
つゆ　お師匠さんの所へ稽古に參りましたわいな。
小助　稽古といやあ、けふは隣の唄の御師匠さんのおさらひだな。
つゆ　はい、左樣でござりますわいな。
番頭　これ小助、汐のいゝ内に出かけようか。
小助　なんぞ大きなものが掛りやあいゝが。
番頭　あゝいふ獲物をしたいものだ。
小助　違えござりません。
番頭　姉さん、お世話でござりました。
つゆ　はい、ようお出でなさいました。

トさらひの唄になり、小助番頭は下手へはひる。おつゆ四邊を片附ける。此の唄をかり、花道より安達昌伯、くわゐ鬘、羽織着流し一本ざし、醫者の拵へにて出來り、花道にて、

昌伯　さて、鳥なき里の蝙蝠と、此の洲崎で愚老をば生藥師のやうに人が言ひ、砂村きつて療治をするが仕合せと匙が廻り、おんまり人を殺さぬやう段々功者になつて來たが、病と違つて色の道は、いまだに匙が廻らぬが、此の又助の妹をどうか妻にしたいものと、内に病人があるを幸ひ、醫は仁術と行く度に金を遣つて口說いて見るが、たかくぴんしやん〳〵と、さつぱり藥を受附けぬ、これにはほとんと困つたて。

ト昌伯思入あつて、本舞臺へ來り、衣紋を作り、門口にて咳拂ひをなし、

頼まう〳〵、安達昌伯お見舞ひ申す。

ト内へはひる、浮いた合方になり、

つゆ　これは〳〵昌伯樣、ようお見舞ひ下さりました。

昌伯　おゝおつゆばうか、御病人はどうぢやな。

つゆ　同へんでござりますわいな。

昌伯　少しづゝはよい筈ぢやが。(ト思入あつて、)や、おぬしは顏の色が惡いが、血の道でもおこつたか

な。

つゆ　いゝえ、なんともござりませぬわいな。

昌伯　はて、どうかしてゐる筈だが。（トおつゆの手を取り引寄せる。）

つゆ　あれ、何をなされますぞいな。

昌伯　ちよと脈を見てやるのぢや、此のまあ手のやは〳〵と、定めてどこも此の様であらうと思ふと、
　こたへられぬ。（トおつゆの手を頰へ當てる、おつゆ振拂ひ、）

つゆ　えゝも、その様なことは存じませぬわいな。

昌伯　なに存ぜぬ事があるものか、今時の娘御は、十二三から存じてをるわ。

つゆ　餘所の娘御は存じてをりませうが、わたしやほんまに存じませぬわいなあ。

昌伯　そんならほんまに存ぜぬか。（ト昌伯手をとるを、）

つゆ　まあ、こゝをお放しなされませいな。

昌伯　いや〳〵、放さぬ〳〵。（ト引寄せる。）

つゆ　あれ、昌伯さまが。

昌伯　あこれ、靜かに〳〵。（ト一間の内にて、）

求女　なに、昌伯樣が。

昌伯　それ見たか、聞えたわ。えへん〳〵。

ト昌伯咳拂ひをして眞面目になる。おつゆよい氣味といふ思入。合方になり、一間の内より花房求女着流し五十日鬘、病人の拵へ、刀を杖にいざりながら出來り、よき處へ住ひ。

求女　これは〳〵昌伯樣、毎日お見舞ひ下され、御苦勞にござりまする。

昌伯　いや、毎日見舞ふは醫者の役、それも外に、（トおつゆに思入あつて、）いやさ、外に病人もござりませねば、ならう事なら泊つて居つて、貴殿の療治がいたしたい。

つゆ　いえ〳〵、それには及びませぬわいな。

求女　これはしたり、昌伯樣へ。

つゆ　それでもあなたは。

昌伯　ドレ〳〵、ちよつとお脈を。（ト昌伯まぎらして求女の脈を見る。）ときにどうでござるな。

求女　いまだ腰が立ちませぬ、その上胸へさし込みまして、時刻を切つて苦しみます。

昌伯　それは、風毒のなすわざでござる。

ト此の内おつゆ小搔卷を持つて來て、求女に着せる。

求女　御免下さいませ。（ト呂伯羨しき思入。）

呂伯　いや貴殿の病は元風毒、それから虚勞となりし故心を調へねば全快いたさぬ、まづ第一が養生でござる。女に手出しをさつしやると、直に變が參りますぞ。

求女　其の儀は御案じ下さるな、命が大事にござりますれば、よう愼んでをりまする。

呂伯　貴殿はさうでもござらうが、介抱いたすが娘御故、どうも安心がならぬて。

つゆ　そんなら女子は、毒でござりますかいな。

呂伯　毒も毒大毒だ、たゞまづ虚勞といふ病症は早くて一年、遲くても三年、急に全快いたさぬ故、えてその内には、女などに手出しをして死にますて。

つゆ　どうかその樣に長引かず、直るお藥はござりませぬかいな。

呂伯　ない事もなけれども、名におふ朝鮮の大人蔘を盛らねば急に直らぬて。

つゆ　話しに聞いて居りましたが、高いものでござりますかいな。

呂伯　高いとも／＼、まづ此の節の相場では七八十兩、百兩近く取らずば、急に全快はござらぬて。

求女　以前ならば兎も角も、今浪々の身の上に、假令此まゝ死すればとて、大枚金百兩といふ、金が所詮出來よう當もなし。（トふさぐ思入。）

つゆ　あゝもし、金は世界の湧きもの故、一夜の内にも、金が出來まいものでもござりませぬわいな。

昌伯　まだ其上に立所に直す祕法は師匠の家傳、申の年月日時揃つた男の血汐を服する時は、夢の醒めたる如くに全快、これは猶更得がたい藥だ。

求女　すりや、申の年月日時揃ひし男の血汐に卽功あるとか。

つゆ　どうか、手に入れることはござりますまいか。

昌伯　なかなかもつて容易に得難い藥に、十が九ツ醫者も虛勞は直らぬものと、まづ極めてをりますて。

卜此の時下手より隣りの召使○出來り。

○　はい御免下さりませ、隣りから上りましたが、志賀市さんが御歸りなすつたら、早うお出で下さりませ。

つゆ　はい、歸りましたら、直に上りませうわいな。

○　昌伯樣、これにお出でなさいましたか、今お宅へお迎ひに上りました。

昌伯　ほんに、さらひに呼ばれてをつた。

○　もう、あなたの番でござります。

昌伯　然らば、直に參らうか。（卜昌伯立上る。）

求女　左樣なら、もうお歸りでござりまするか。
昌伯　又歸りに寄りませう。
　　トやはりさらひ唄にて、昌伯に〇附いて下手へはひる。おつゆ跡を見送り、
つゆ　えゝも、來ずともよい事を。
求女　何故その樣なことをいやる。
つゆ　それでも、厭らしい事ばかり、
求女　さう聞いては油斷がならぬ、手放して置かれぬわえ。（トおつゆの手を取り引寄せる。）
つゆ　あゝもし、そのやうな事をなされては。
求女　ほんに、病の毒であつた。
　　ト手を振り拂ひ眞面目になる。おつゆ是を見て笑ふ。此の前花道より、紺看板の仁三、中間のなりに頰冠り、尻端折り、跡より中間市助、同じく仁六、中間にて出來り、門口にて頷き合ひ。
仁六　はい、御免なさいまし。（ト門口を明ける、おつゆ二枚折りの屛風にて、求女を圍ひ、）
つゆ　どちらからお出でなさいました。（ト仁六門口につくばひ、）
仁六　わつちやア御近所の屋敷のものでござりまするが、瘡をかいて奉公が出來ず、こんど草津へ湯治

に行きまするが、どうぞ御合力なすつて下さいまし。

つゆ　それはお氣の毒でござりますが、兄さんが留守でござりますれば。

仁三　お留守ならお前さんの、お心持次第でようござります、どうぞたゞ貰ふ錢だから、いくらかくらとは言ひませぬ。

つゆ　それでもあのわたしには、幾ら上げてよいことやら。

市助　知れざあ臺を出しやせう、まづ多けりやあ百貫さ。

仁六　少なけりやあ一文だが、はした錢ぢやあ路用にならねえ。

仁三　お氣の毒だがもし姉さん、四百ばかりおくんなせえ。

つゆ　えゝ見ず知らずのお前方に、何の好みで其の樣に。

仁三　好みがねえから四百といふのだ、好みがありやあ二分と三分貰はにやあ歸らねえ、さ早くくんねえ、先づ急ぎだ。

つゆ　假令なんと言はしやんしても、兄さんが留守なれば。

求女　あこれおつゆ、折角無心にござつたもの、少しなりとも上げたがよい。

三人　それは、有難うござります。

ト三人内を見廻し、求女を見て思入、おつゆ求女に聞き、十二文紙に包み。

つゆ　少しばかりでござりますが、是はわたしの志し。

仁三　何だ、たつた十二文か厄拂ひぢやァあるめえし、目腐れ錢が入るものかえ。これ人を見そこなやあがつたか、此の鎌倉の大小名、上總部屋を渡つて歩いた紺看板のごろつきだ、言はずと知れた無宿者だが、菰ツ冠りと譯が違ふぞ。

トおつゆに放り附ける。

つゆ　えゝ。

トおつゆ氣味惡く、求女の傍へ來る。

求女　あまりといへば。(トきつと思入。)

つゆ　あもし。(トおつゆ留める。)

仁三　さあ、くれるともくれねえとも、返事をしねえ〳〵。(ト門口の兩人思入あつて、)

市助　これ〳〵兄貴や、娘が一人で困つてをらう。

仁六　錢にやあならねえ、隣へ行かう、

仁三　えゝこいつらが、いゝびかに引けやあがるな。

兩人 何でもいゝから來いといふに。(ト仁三の手を持ち引立てる。)

仁三 うぬ、覺えてゐやあがれ。(ト門口をしめ、仁三兩人に引張られ、花道へ行き思入あつて、)

兩人 隅田平。

仁六 これ。(トあたりへ思入あつて、)望月樣から賴まれて、求女主從をばらしに來たが、又助めは内にをらぬが、屏風の蔭にをつたのは求女、ちよつと見たが病氣の樣子。

市助 何んでもこゝらにまごついて、夜に入つたらば忍び込み、

仁六 首尾よく二人をばらした日には。

仁三 望月樣から褒美の金。

市助 命をきりに。

兩人 働かにやあならねえ。

仁三 さあ、裏から忍ばう。

兩人 合點だ。(ト右の鳴物にて、三人は下手へはひる。)

求女 今來たものは其以前、我屋敷にをつた中間、何しにこゝらに來をつたか。

つゆ 何だやら、きよろ〳〵と家の内を見廻して、氣味の惡い奴でござんす。

求女　どうやら合點の行かぬことぢや。
つゆ　早う兄さんが、歸らしやんすりやよいが。
求女　えゝ、又肩が凝つて來たわえ。
つゆ　ちつと、擦つて上げませうわいな。

ト又さらひの唄になり、おつゆ求女の肩を擦り居る。花道より丁稚長太、若衆鬘、やつしなり、餓鬼大將にて竹馬の先へ又助の弟志賀市の下駄を片々引つ懸け、これを持ち出來る。跡より志賀市、小座頭の拵へにて下駄を片々履き、杖を突き出來り、跡より○△□等三四人の子役附き出て來る。

子役皆々　取つたら遣ろな〳〵。
志賀　あゝこれ〳〵、どうぞ下駄をわしに下され、無くすと家で叱られるわいの。
長太　おゝ、内へ歸つて叱られては、可愛さうだから、返してやらう。
志賀　はい、こゝへ下さいまし。（ト手を出す、長太志賀市の頭を打つ。）
長太　それ、やるぞ。
志賀　あいたゝゝゝゝ、こりや何とするのだ。
長太　下駄をやらぬその替り、頭のかけをやるのだ。

子役丁〇　やあ、つぶれた目でも涙があらあ。
同△　こいつアをかしい、盲が泣かあ。
三人　笑つてやれ／＼。
志賀　これ手を合はして拜むから、どうぞ下駄を渡して下され。
長太　持つてゐりやお返してやるが、おいらは下駄は持つてはゐるねえ。
志賀　さうして何處へやつたのだ。
長太　そゝ、溝の中へぶち込んでやつた。
志賀　えゝ、目の見えぬものをお前達は、なんでそんなにいじめるのぢや。
〇　おゝ、見えねえからいじめたいのだ。
三人　それ、いじめてやれ／＼。
ト下駄を放りつけ、皆々舞臺下手へ逃げはてひる。此内花道より若黨鳥井又助、さしつこの長半纏、股掛け、股引を上へはしをり、草鞋、餌堀の熊手と岡持桶を肩へかけ出來る。志賀市友達と思ひ、
志賀　うぬ、覺えてゐろよ。（ト打つて掛るを留め、）
又助　あゝこれ、危ねえ、どうしたのだ。

志賀　やあ、さういふ聲は兄さんか、悔しい〳〵わいなう。（ト又助に縋り泣く。）
又助　何でそのやうに悔しいのだ。
志賀　あの餅屋の長太が、大勢連れて、わしが石に躓いて下駄を片々脱いだらば、それを取つて返さぬ故、返してくれと頼んだら、寄つてたかつてわしを打ち、ひどい目に逢はせました。あゝ目が見えれば負けはせぬに、わしや悔しい〳〵わいの。（ト又助ほろりと思入。）
又助　おゝ尤もだ〳〵、如何に子供と言ひながら、目も見えねえものを捕へ、いじめるといふことがあるものか。
ト腹の立つ思入。
えゝ、おれが内へ斷つて、ひどい目に逢はせてやらう。さあ、もう〳〵泣くな〳〵。
志賀　あい〳〵。（ト涙を拭く。）
又助　さうしてけふは、療治はどうであつた。
志賀　上下揉んで十六文のところ、人がよけい下さる故、これだけありましたわいなう。
ト懐より財布を出し、又助に渡す。
又助　おゝ、こりや百四五十ありさうだ、よう稼いでくれる、忝い〳〵。おれが方へ一緒にしておかう。

ト懐より財布を出して、錢を一つになし、あたりの石を拾ひ、此の中へ入れる。

志賀　もし兄さん、そこらに下駄はありませぬか。

又助　おゝ、兩方ともこゝにある。（ト下駄を取つて、志賀市に履かせながら、）三ツの年に目が潰れ、便りに思ふ楫もなく、（トほろりと思入あつて、）さあ、泣顔せずと、家へ來やれ。

志賀　あい／＼。

トやはりさらひの唄にて、又助志賀市の手を引き、本舞臺へ來り、門口から、

又助　おつゆ今歸つたよ。

求女　おゝ、又助が歸つて來た。早う水でも汲んでやりやれ。

トおつゆ門口へ來り、

つゆ　兄さん、歸りなさんしたか。おゝ志賀市も一緒にか。

又助　今そこから連立つて來た。

つゆ　さあ、足を洗ひなさんせいな。

ト半切へ水を入れて出し、戸棚より着替の布子を出す。此の内捨ゼリフにて志賀市の足を洗ひ、我が足も洗ひ内へはひる。

求女　おゝ又助、歸つたか。

又助　これは〳〵、そこにおいでなされましたか。風が當つてはお惡うござりませうに。

求女　寐てばかりも忘屈故。

又助　嘸左樣でござりませう。（ト此内又助着物を着替へ）さて旦那、お悅び下さりませ、けふの樣にごかひを又たんと掘つたことはござりませぬ。所が問屋へ持つて參りましたら、よい時にはよい事の重なるもので、仕切りも滅法ようございまして、此頃にない、錢儲けをいたしました。

求女　それは仕合せなことであつた、全くそなたが正直故、天の惠みであらうわいの。

又助　けふは何んぞお口に合ふ、お好きなものを差上げませう。

つゆ　もし兄さん、餘分があらば大家樣や、いつも來る米屋さんへ。

又助　あゝこれ、その衆は歸りがけにみんなおれが拂ひをして來た。これ妹、此の財布を持つて見やれ。

（ト又助重さうに財布をおつゆに渡す。）

つゆ　成程、こりや大層おあしが。（ト財布の中の石を探り見て）もし、此の丸いものは、何んでござんす。

又助　おゝ、その丸いものは、そりや百錢のかたまりだ、はゝゝゝ。

（トおつゆ財布を返す、志賀市前へ出て、

志賀　旦那様、ちとお肩でもさすりませうか。

求女　いや／＼、おつゆがさすつてくれたゆゑ、草臥れたらうにそなたはよい。

ト　おつゆの顔を見る、おつゆ恥しき思入にて、顔をそむける。求女思入あつて、

求女　いや、おれもちつと横にならうか。

つゆ　およるならば、お夜着をば。

又助　いや、おれがお掛け申して上げませう。

求女　どれ一と寐入りいたさうか。

ト唄になり、求女いざりながら又助介抱して、上の屋體へはひる。

つゆ　これ志賀市、お隣りの御師匠様から、お迎ひが參つたわいの。

志賀　けふは月並のおさらひ故、妹背山を彈く約束。

つゆ　そんなら早う、行きやいなう。

志賀　行つてもようござりますか。

つゆ　よいとも／＼、怪我せぬやうに行つて來や。

志賀　あい／＼。（ト門口へ出る。）

つゆ　おゝ、兄さんはまだ御膳前。どれ、お茶を沸して上げませう。

トさらひの唄になり、おつゆは奥へ、志賀市は下手へ杖をつきはひる。此の唄をかり、花道より家主八兵衞、米屋九郎助、古着屋女房捨ゼリフにて出來り、直に門口へ來り。

三人　又助殿は、内でござるか〳〵。

又助　あゝ、手が塞がつてゐる、通らつしやい〳〵。

八兵　や、あの聲は又助が聲でござります。

九郎　構はずとはひりませう。

女房　それがようござんす。（ト門口を明けて、三人はひる。又助びつくりなし、）

又助　やあ、お前さん方は、掛取衆。（ト逃げようとするを、八兵衞捕へる。）萬歳樂々々。

八兵　しめたぞ〳〵、内にゐるを見附けたからは、

九郎　けふは是非とも、取らねばならぬ。

女房　さあ、耳を揃へて、

三人　勘定さつしやい〳〵。

又助　其の御催促は御尤もでござりますが、どうぞ御勘辨下さりませ。（ト又助詫びる、三人思入あつて、）

八兵　これ又助殿、いつ來ても〱留守をつかひ、店請を呼びにやれば、晩に參りませうと言つたばかりで來たことはなし、けふで幾日になると思はつしやる、五月六月店賃の勘定なしに知らぬ顏、脇は知らずおれが店子に、此方の樣なものは一人もない、これ地主へおれが濟まぬわい。

九郎　いや、わしは又正直さうに見えるこなた衆同胞故、よもやと思つて貸しこんだは、三人四人が命を繫ぐ米の代から味噌薪、積り〱て十四五貫、金に直して二兩餘り。

女房　もし米屋さん、わたしにも言はして下さんせ。まづ又助殿に貸したのは、明くれば一昨年冬のとり附き、夜具蒲團の代に布子の代、盆になつても勘定なし、大晦日にも挨拶なし、これまでござれで拂はぬは、女と思つて馬鹿にするのか。

八兵　家主はじめ二人の勘定。

九郎　拂ふ氣か拂はぬ氣か。

三人　どうするつもりだ。（ト三人やかましくいふ內、又助思入あつて、）

又助　御尤もでござります〱。段々これまで延び〱になりまして、お氣の毒でござりますが、仕樣もやうもござりませねば、天道樣のお助けでひよつと金でも掘出さうかと、朝の六つから夜に入るまで、餌を掘つて賣りますが、高の知れた端た錢、皆米櫃へはひりますれば、どうぞもう少し

お待ちなさつて下さりませ。

八兵　いつも／＼お定まりの言譯、もう／＼けふは聞かぬ／＼。いや人は見掛けに寄らぬもの、律儀さうな此方衆兄弟、こんな不義理はさつしやるまいと、思ひ込んだが此方の見違ひ。

九郎　左樣さ、わしも正直者と見たゆゑ、よもや／＼と思ひの外、あんまり太い奴ぢやあないか、なう古着屋のお上さん。

女房　左樣々々、男と違つて女のものを、借ッ放しで返さぬとは、さりとは／＼憎い奴。

八兵　どうで素直に行くまいから、此家を明けて下さい／＼。

又助　はい、今此處をおつ立てられましては、宿なしにならねばなりませぬ。又、私共は仕方もござりますが、煩うてござる御主樣へ御苦勞かけねばなりませぬ、どうぞ御勘辨をお願ひ申しまする。

九郎　お家主が店立なら、何處へ行くやら知れぬこなた、こりや少しも待たれぬわえ。

女房　いつそのことかうしませう。百貫の方に編笠とやら、なんと手當り次第に家財かざいを持つて行かうぢやござんせぬか。

八兵　成程、それがよい／＼。

九郎　まあ、奥の方から、

三人　片附けませう／＼。（ト三人奥へ行かうとするを、又助留めて、）

又助　まあ／＼待つて下さりませ、此の事を奥にござるお主の耳へ入れましては、どうも私が濟みませぬ。

三人　そんなら、勘定さつしやるか。

又助　さあ、その勘定が出來ます位なら。

三人　これぢやあやつぱり。（ト奥へ行きにかゝる。）

又助　どうぞそこの所をば。

三人　拂ひをするか。

又助　さあ、それは。

三人　さあ。

又助　さあ。

皆々　さあ／＼／＼。

又助　すりや、これ程にお願ひ申しても。

三人　待つことはなりませぬぞ。

ト思入、合力になり、又助着てゐる布子を脱ぎ、肌着の猿ッ子一つになり、以前の長半纏股引と一つになし、三人の前へ出す。

又助　うむゝ。

三人　やい／＼、こりや何だ／＼。（ト大きくいふ。）

又助　さあ、足りますまいが、世に申す百貫の方に編笠とやら、元私は相模鎌倉の濱邊にて、鎌田又八と申す漁師の倅でござりますが、小さい折親仁の言ふには、おれは仕慣れた家業だが、漁師の業は身の殺生、どうぞ手前は人らしい繁華な江戸で人になれと、母が勤めた縁により、知るべを頼んで屋敷奉公、運に叶つて御氣に入り、やれ又助よ／＼と非番の時もお話し相手、其のお惠みで有難く、暑さ寒さも厭はずに、奉公大事と勤める内、國の親仁が病氣で死に、それから旦那へお暇願ひ、母兄弟を引取つて、四人暮しの共稼ぎ、ほんの事だが是程でも、惡い心は持ちませぬが重なる不幸に母の大病、ついに果敢なくなるやいな、つゞいて弟が疱瘡で生れもつかぬ盲となり、かてゝ加へて大恩の御主樣にも横死をなされ、せめての事の御恩返しと御世話いたす御舎弟は、藥の利かぬ處勞の煩ひ、どうぞ御不自由のないやうと、思つて見ても貧乏暮し、此永の日を朝から晩まで餌を掘つて歩いても、僅か二百か三百にて、一朱にならぬはした錢、妹がすゝ

洗濯も、日雇ひ仕事に五十か六十、弟が稽古の揉療治も上下揉んで十六文、寐る目も寐ずに三人で稼ぎましても僅かな錢、それで三度の米、薪、味噌にも酢にもする程な、せつない譯を御主へは包み隠して不自由なく、借錢などのないやうに詞を飾つて嘘を言ひ、又あなた方の勘定も、けふの明日のと言ひ延し、こゝまでござれこ一囘のがれ、嘸かしお腹も立ちませうが、此上のお情にて、着古しました古布子、針持もないさしつこの長半纏にその股引、錢になるなら命でもお持ちなすつて此事を、お主の耳へ聞かせずに、わしを打つとも叩くとも御存分になされまして、お待ち下さりませ、もし力業にも才覺にも叶はぬ金に憎まれし、此の又助が身の上を、御推量なされて下さりませ。

　　トよろしく思入にていふ。此内三人顔見合せて、可愛さうにといふこなしあつて、涙をふきながら。

八兵　あゝこれ〳〵又助殿、もうなんにも言はつしやるな、聞きわけましたく〳〵、聞けば聞くほど忠義な又助どの、涙がこぼれて悲しくなつて、胸が一杯になりましたわいなう。

九郎　お家主様のいふ通り、それ程迄にお主大事に思はつしやる、忠義な人の着物が何で持つて行かれませう。

女房　はんにさうでござんす。なんぼいかい物を賣る古着屋でも、さう聞いては持つて行かれない、まあ

其の着物を着たがよい。

又助　はい〳〵有難うござりますが、これまでの言譯に、度々嘘を申しましたが、今申した言譯はありやあ嘘ではござりませぬ程に、どうぞこれを取つておいて下さりませ。

八兵　はて、正直な男でござるわえ、もう〳〵こなたの正直な心が分かつたから、この末催促はしませぬわいなう。

九郎　又此上に、不自由な事があるならなんなりと、遠慮なしにいうてござるがよいぞや。

女房　さあ〳〵、風でも引いてはならぬ、早く着物を、

三人　着さつしやい〳〵。（ト三人手傳ひ、又助に着物を着せる。）

又助　へい〳〵、有難いと申しませうか、私はもう〳〵嬉し涙がこぼれます。えゝ有難うござります。

八兵　今に御褒美が出るであらうが、かういふ店子を持つたのは、まづ家主の仕合せだ、少々ながら持合せ、これをこなたに進ぜませう。（ト家主は紙入より、金を出し、紙に包んでやる。）

九郎　いや大家様がさうなさるなら、わしも見ては居られませぬ。あるッたけおいて行かう
　　ト財布を出して、錢と金のまざりしを出す。

女房　おゝ米屋さん、よう上げなすつた、ほんにわたしは顔と違つて、へこんでゐるのが大嫌い、生憎持合せがないので、身ぐるみ脱いでやりませう。

ト古着屋帯を解き、着物を脱いで長襦袢一つになる。

又助　あゝもし。これをわたしに下すつたら、お前樣がお困りなされませう。

女房　なに内へ歸れば生業もの、いくらも古着の小袖があるわいな。

又助　これは〱、誠に有難い仕合せ、何とも御禮の申しやうもござりませぬ。

八郎　何の、その禮に及ぶものか。なう、ときにもう歸らうではござらぬか。

兩人　さうしませう〱。

八兵　それはさうと古着屋のおかみさん、お前内へ歸つて御亭主に叱られはしねえか。

女房　なに宿六は結構人、湯屋泥棒にでもあつたと、間に合せを言つておきませう。

九郎　成程、それは御趣向だ。（ト言ひながら三人門口へ出る。）

女房　然し晝日中往來中を、襦袢一つでも歩かれない。

九郎　おつとそこはわしが思ひ附がある、此の米袋の中へへひんなせえ。米の積りで擔いで行かう。

八兵　こいつはいゝ思ひ附だ。

女房　それぢやァさうしようね。（ト古着屋米袋の中へはひる。米屋よろしく口を結へ、）

九郎　こりやあ一人で持てればいゝが。

八兵　持てずばこゝに棒がある、これを通して戻り駕とせう。（ト門口にある棒をとつて袋へさす。）

又助　これは、大きに、御苦勞樣でござります。

八兵　おゝ、もう構はつしやるな〳〵。（ト八兵衛門口をしめる。）

九郎　さあ大家さま、やッつけませう。

八兵　合點だ。

ト兩人して擔がうとして、重いといふ思入。トぐつと擔ぎ上げる。これにて袋破れて古着屋の足二本ぐつと出る、兩人駕籠屋の思入にて、

兩人　ほい、かご〳〵。

ト無器用に掛聲して、花道へ行く。古着屋矢張り足を出したまゝ歩いて行く。

八兵　あゝ重い〳〵、ちよつと一と休みして行かう。

九郎　もう休みなさるのかえ。

八兵　日は永い、一服しなせえ。

ト兩人花道の前の方へしやがむ。古着屋は立つたまゝ袋の内より兩手を出して棒をおさへ、後ろの方から歩いて向うへはひる。兩人汗を拭きなどして、

八兵　さあ、大家さんやりませう。

九郎　おつと合點だ。や、こりや駕籠がなくなつた。

八兵　あれ〳〵、向うへ行きます。

兩人　ほいかご〳〵。（ト右の鳴物、駕籠屋の身ぶりにて、花道へ追駈けてはひる。又助跡を見送り、）

又助　やれ〳〵嬉しや〳〵、毎日掛取り衆が來る度に、此の五體がすくむ樣であつたが、けふといふけふは、日本晴れがしたやうだ。

ト合方になり、奥よりおつゆしな〳〵と出來り、

つゆ　兄さん。

又助　おゝ、おつゆか。

つゆ　世間に鬼はござんせぬな。（トおつゆ傍へ來る。）

又助　そんなら、今の樣子をば。

つゆ　出るに出られず臺所で、わたしや泣いて居ましたわいな。

又助　明暮心にかゝつた、借もすつぱり濟んだれば、どうぞかういふ鹽梅に、若旦那の御病氣が直るやうにしたいものだ。

つゆ　それに附いて兄さん、わたしやお願ひがござんすが、聞き屆けて下さんすか。

又助　改まつて頼みとは、何だか知らぬが、言つて見やれ。

つゆ　外の事でもござんせぬが、勤めをさして下さんせいな。

又助　えゝ、藪から棒に、そりや何ゆゑ。（ト誂へのしんみりとした合方になり。）

つゆ　若旦那樣の御病氣は人參とやらを用ゐねば、所詮お直りなさらぬと、昌伯樣のお話しゆゑ、價を問へば百兩程、わづかな借さへ返されぬ、しがない暮しにその金の出來やう手だてのない所、さつき裏の小助さんと、餌を買ふ内へ來た吉原の女郎屋さん、ついした事の話しから、もし金でも入るならばわたしを大枚百兩に買ふといふ事聞いたから、この身を賣つて若旦那樣の御病氣が直すやう、神や佛の正しく御告げ、それゆゑわたしや身を賣つて、御病氣が直したい。どうぞ聞き屆けて下さんせいなあ。

又助　おゝ妹、よく言つた、出來した〳〵。實はおれも人參でなければ所詮直らぬと、聞いてゐた故どうがなと、心は逸れど出來ぬは金、いつそおぬしを賣つてとは、おれも思ひ附いたけれど親と違

つて兄の身で、苦界へ沈めと言はれもせず、どうしたものかと思つた處、よく身を賣らうと言つてくれた。

つゆ　そんならお前は叱らずに、願ひを叶へて下さんすか。

又助　何の叱らう褒めねばならぬ。

つゆ　それで私の願ひも叶ひ、兄さん嬉しうござんすわいな。

又助　して女郎屋の御亭主は。

つゆ　奉公人の相談で、晩迄待たねばならぬゆゑ、川岸で釣をして待つてゐると、小助さんが言はしやんしたれば、ちよつとわたしが川岸へ行き、お目にかゝつてお願ひ申しますわいな。

又助　おゝさういふ事なら川岸へ行き、小助さんに頼んで來やれ、しかし賣物には花とやら、幸ひ貰うた此の小袖、これを着替へて行つたがよい。

つゆ　ほんに、これはよい都合でござんしたなあ。（ト言ひながらおつゆ衣裳を着換へる。）

又助　あゝ、よい衆は知らぬ事、貧乏人は女の子だ、いくらあくせく思つても男の手では出來ぬ金、ああおれも女に生れたら、引張りにでも出ようものを。

ト此の内おつゆ着物を着替へ帯をしめて、

つゆ　え〻もう、何を言はしやんすぞいなあ。もし、ゆき丈も丁度ようござんす。

又助　おゝ、馬上にも衣裳、美しうなつた〳〵。

つゆ　そんなら兄さん、行つて參ります。

又助　え〻これ、其の美しい處を、若旦那樣に見せて行きやれ。

つゆ　え〻、そんならお前は。

又助　何にも知らぬが此樣に、一つにゐるも深い御緣、お暇乞ひをしたがよい。

つゆ　嬉しうござんす。

又助　然し御病氣には、毒なれど。

つゆ　え〻。

又助　少し位はよからうな。

ト唄になり、又助思入あつて。奥へはひる。おつゆ後ろ影を拜む。この時上手障子を明け、求女いざりながら出、あたりへ思入あつて、

求女　おつゆ。

つゆ　若旦那樣。

求女　これ。（ト又替つた合方になり、）樣子は一間で殘らず聞いた。よしないおれゆゑ又助が、貧苦を隱すさつきの心配、今またおぬしが人參代に、その身を苦界へ沈める覺悟、志しは忝いが、おぬしがゐねば又助が、あの志賀市の世話に困らう。紛失なした金鷄の香爐が我が手に入らぬ内は、生きてせんない體ゆゑ、その身を賣るは止しにして兄の手助けしたがよいぞ。

つゆ　いえ〳〵、その御遠慮には及びませぬ。人と道具はあり隨ひ、なければないで濟みますもの、あなたは明日にも紛失の、寶が手に入る其の時は、直に御歸參なさる體、もしもの事のあつた時は、誰が御家を立てませう、元より家來のその上に、お情受けし此の身故、御遠慮なされず人參代のお役に立てゝ下さりませ。

求女　すりやどうあつても、その身をば、おぬしは苦界に沈める心か。

つゆ　二世をかけたるあなたの爲め、命を惜しみはいたしませぬ。

求女　それ程迄に思ふなら、辛い勤めをしてくりやれ、そちが影にて全快なさば、身を粉に碎いて金調へ、身請けをなして女房にせん。

つゆ　嬉しうはござんすが、今其の樣におつしやれど、賤しい勤めをしたならば、定めて愛想が盡きようと、それが私の心掛り。

求女　なんの愛想が盡きようぞ、それはこつちで言ふ詞、夜毎に替る仇枕、此身に愛想が盡きようかと、
そちよりおれが心掛り。

つゆ　そのやうな事おつしやりまして、わたしや參りともなうござりまする。

求女　おれもやりともないわいの。

つゆ　とあつて廓へ行かぬ日には、

求女　藥を求むる價もなし。

つゆ　辛い別れもあなたのお爲め。

求女　やがて寶が手にいらば、

つゆ　今の歎きを、

求女　昔語りに、

つゆ　まづそれ迄は、

求女　暫しの別れ。

ト求女おつゆを引寄せるを、おつゆ拂ひ退けて、

つゆ　あゝもし、その樣なことをなされては。

求女　悪いといやるか。
つゆ　悪くはないが、御病氣ゆゑ。
求女　それも薬が手に入れば。
つゆ　お毒と知れど、
求女　少し位は。（ト又引きよせる。）
つゆ　ほんに、さつき兄さんも。
求女　よいと言うたか。
つゆ　あいなあ。（トおつゆも寄り添ふ。）
求女　でも又助は粋ぢやなあ。
　　ト兩人寄り添ふ。此の内門口に安達昌伯尻端折り、鉢卷をして肌をぬぎ、内へずつとはひり。
昌伯　えゝ腹が立つて〳〵ならぬわい。（ト兩人を引退ける、兩人びつくりして、）
つゆ　誰かと思へば、昌伯樣。
求女　こりやどうなされたのだし
昌伯　いや、どうもかうもあるものか。今表から見てゐれば、病人のくせに若い女の傍へ寄つたり、い

やらしい目附をしたり、腹が立つて〳〵ならぬわい。

求女　そのお腹立ちは御尤もでござりますが、なか〳〵不養生はいたしませぬ。病のせゐか體がぞくぞく、胴震ひがいたしますゆゑ。

つゆ　それでわたしがしつかりと、押へてをりましたわいな。

昌伯　えゝ言ふな〳〵、胴震ひのするものが、なんで厭らしい目をした、腹が立つ〳〵。

ト此の時奥より又助、八寸の膳に杯をのせ、燗鍋を提げ出來り、

又助　あゝもし〳〵昌伯さま、どういふ譯か存じませぬが、何でそのやうにお腹が立ちまする。

昌伯　又助どのか、聞いてくりやれ。（ト昌伯下にゐて、）藥はやれど藥禮を鐚三文せぬのも承知で、毎日毎日見舞に來て、藥をやつたその上に、脇から貰つた藥禮を一分二分づゝ遣つたのを、こなた衆は慈悲深いと思つてゐるか知らないが、愚老は慈悲は少しもない、お露を女房にしたさゆゑ、恩に恩を重ねた上、否應なしに貰はうと、あの川端の祖師様へ日に千遍のお題目、願ひ叶ひて女房にしたら、相合傘で歩いたら、あれ道行を見るやうなと、世間の人に言はしたく思つてゐるに情ない、愚老が心を推しもせず、この病人と深い仲、毒だといふに寄添つて、いやはや腹が立つて〳〵こたへられぬ。（トたゝき立つていひ、）あゝ、あんまりしやべつて、咽喉が渇いた。

又助　まあ、お茶でも、お上りなされませ。

ト又助茶を汲み出す。昌伯あわてゝ火入をとり、顔へ火をあびる。

昌伯　あッつゝゝゝ、あゝ熱い茶ぢや。（ト皆々顔を見て、）

三人　ほゝゝゝ、はゝゝゝ。（ト笑ふ。）

昌伯　えゝ、何がそんなにをかしいのだ。

又助　なに、をかしいことがござりませう。お前様の御心は疾うから存じてをります故、妹にも内々で話しをしておきましたが、女は氏なくて玉の輿、御新造様になることゆゑ、どんなに悦んでをりませう。

つゆ　あゝもし、兄さん、なんでわたしが。

又助　恥かしいか、知つてゐる。まあ默つてゐやいの。（ト昌伯に向ひ、）いやも、釣合はぬ縁組ながら、好き合うたことなれば、持つてさへ下さるなら、妹を女房に上げたい心。（ト求女へ思入。）

求女　なりや、そなたも承知で。

つゆ　嬉しうござんす。

昌伯　左様に愚老を思ひながら、なんで今寄り添つたのだ。

又助　さあ、あれはかうでござります。高が私風情の妹ゆゑ、禮儀作法も存じませねば、若旦那樣へお願ひ申し、婚禮の夜の諸禮をば稽古いたしてをりましたのだ。（ト兩人に呑み込ませる。）なう妹、若旦那、左樣でござりますな。

求女　如何にも、婚禮の夜の諸禮をば、教へてをつたのぢや。

つゆ　ほんに、むづかしいものでござりますわいな。

昌伯　はゝあ、それでは二人は色ではないか。

又助　よく物を積つて御覽じませ、お前樣と若旦那と、どちらが男がようござりませう。

昌伯　そりや愚老の方がよい恰幅。

又助　よいの惡いのと、比べものにはなりませぬ。

昌伯　おれもさう思うて、

つゆ　ほんにまあ己惚な。

昌伯　何ぢやと。

又助　あゝこれ、これ程わしが骨を折り、婚禮の稽古をさすが、お前樣の氣には入りませぬか。

昌伯　まゝこれ〳〵、何の氣に入らぬ事があるものか。

又助　大方お氣にいらぬのだらう。此のお世話は止めにしよう。
昌伯　あゝこれ〳〵、又助先生大明神、どうぞ頼む〳〵。
又助　人に物を頼むなら、まあ尻でもおろさつしやりませ。
昌伯　ほんに、こりや失禮だ。眞平々々。
又助　ついでに肌も入れさつしやりませ。
昌伯　さうだ〳〵。(ト肌を入れる。)
又助　何んだ、くわゐ天窓へ鉢卷をして、
昌伯　これは粗相。(ト手拭をとる。)
又助　今稽古をさせますから、そつちの方へ寄つてござれ。
昌伯　承知々々。(ト下の方へ來て住ふ。)
又助　必ずこつちを、向かつしやるな。
昌伯　はい〳〵。

ト門口の方を向いて居る。又助兩人の中へ燗銚子と杯を持ち出て。

又助　さあ若旦那、妹、目出度く杯。

兩人　なに、杯とは。

又助　稽古によそへて、二世の固め。

求女　すりや、何事も言はず語らず。

つゆ　若旦那様と。

又助　そちが望みであらうがなあ。

つゆ　えゝ嬉しうござんす。

昌伯　いや、嬉しいとは忝ない。

又助　さあ、邪魔のない内、少しも早く。

昌伯　おゝ杯ならば、肴をしませう。「千秋萬歳の千箱の玉を奉る。」

ト此内おつゆ杯をとる。又助酌をなし求女へ差し、ふろしく杯事あつて、

又助　あゝお目出度うござりまする。

昌伯　あゝお目出度うござりまする。

又助　さあ、杯濟んだら少しも早く。

つゆ　そんならわたしや、

求女　もう行きやるか。

ト兩人顏見合せ、名殘り惜しき思入、昌伯こちらへ來て、

昌伯　まだ床入りもせぬ内に、行くとは何處へ。

又助　はて、お定まりの色直し。

ト又助は昌伯に目隱しをする。

兩人　これは。

又助　見まい、聞くまい、言はぬが花。(ト求女には一間へ、おつゆには外へ行けといふ思入。)少しも早く。

兩人　おゝさうぢや。(ト早き唄になり、求女は一間、おつゆは外へ出る。)

昌伯　おむすはどうした／＼。

又助　妹は外へ。

ト門口をしめる。唄になり、又助つい奥へはひる。

昌伯　やあ、おむすはどつちへ行つた知らぬ。西へ行つたか東へ行つたか、西か東か南か北か。(トうそうそして草履を投げ。)いしやどつち。

ト所作の切にて、逸散に花道へ走りはひる。鳴物打上げ、時の鐘、床の淨瑠璃になり。

〽鐘の音の響きも長き春の日の、日影も西へ傾きし、軒端目當に尋ね來る、武威も輝く金拵へ、二腰目立つ武士が、道のかたへに彳みて、

ト此内花道より保田隼人、袴ぶつさきの羽織、大小武張りたる拵へ、若黨袱紗包みの鞘を持ち出で來り花道にて、

隼人 こりや杢内、又助が宅はあれなるか。

若黨 只今あれにて承りましたが、向うの小家に相違ござりませぬ。

隼人 む〻、然らば其方は後刻迎ひに參れ。

若黨 畏つてござりまする。

ト若黨鞘を渡し、引返してはひる。

〽家來を返し靜々と、門へ來りて樣子を窺ひ、

ト隼人本舞臺へ來り、内の樣子を窺ひ思入あつて、

隼人 賴まう〳〵。

〽案内乞ふに又助が、はッと奥より立出で〻、

ト奥より又助出來り。

又助　へい、どちらからお出でなされました。

隼人　ちと物を尋ねたいが、鳥井又助が宅はこれなるか。

又助　や、さう言ふお聲は。（ト門口を明けて隼人を見て、）あなたは、保田隼人樣ではござりませぬか。

隼人　又助、在宅であつたか。

又助　こりやまあ、思ひがけない。まづ〳〵是へ。

隼人　然らば許しやれ。

〽禮儀正しく座に附くも、袴のひだの折目高。

ト隼人おたいへ思入あつて、上手へ通り住ふ。此内に又助茶を汲み、茶臺へ載せて持ち來り。

又助　もし、出ふるしてはをりまするが。

〽澁茶一つとさし出し、（ト隼人茶碗をとる、又助思入あつて、）

今日は思ひがけなき御自身の御出向き、むさくるしい此の荒家へ恐入りましてござります。早速ながら伺ひまするは、定めし今日の御入來は、主人求女が歸館の御沙汰でござりませうな。

隼人　先達身が屋敷迄、求女歸參の其方が頼み、早速殿へ願はんと存ぜし處、何かと繁用に取り紛れ、大きに延引の段、必ず惡しう思やるな。

又助　どう仕りまして、その様に仰せられましては、却つて恐入りまする。
ト思入、隼人は始終又助に目を附け居る。
隼人　して求女殿には、如何召されたな。
又助　お聞き下さりませ。若旦那には御身の上の御苦勞より、何かに付けて御氣の結ぼれ、しかと病根も分りませぬが、虚勞と申す醫者の見立、只今にては歩行さへ、自由ならざる御大病。
ト愁ひのこなし。
隼人　それは早や、其方も嘸心配であらうな。
又助　御推量なされて下さりませ。
隼人　して求女どのには、病所に寐てをらるゝか。
又助　左樣にござりまする。どれ、あなた樣がお出での事。
隼人　あいや、歩行叶はぬ病ひとあれば、其儘にいたしておきやれ。
又助　でも、あまり失禮ゆゑ。
隼人　あゝ、苦しうない。
又助　左樣なれば、御免なされて下さりませ。（ト隼人又助思入あつて、）

隼人　如何に主從とは申しながら、病人の介抱ばかりは大抵な事ではないに、よう世話をいたしてやる。其の方が忠義、保田隼人感心いたした。

又助　是はまた別してもない事を、お褒めのお詞、面目次第もござりませぬ。

隼人　それに付き、又助、主人求女が御扶助を受けし多賀の御恩は、その方よもや忘れはいたすまいな。

又助　何でそれを忘れませう。朝夕とも申し暮らし、寐てさへ足は向けませぬ。

隼人　左樣に思ふ其方へ、初めて參りし保田隼人、褒美代りの則ち土產。

〽仔細を包む袱紗のもの。

ト隼人又助の前へ袱紗に包みし鞘を出し、

心を籠めし土產の品、とつくりと披見しやれ。

又助　はッ。(ト袱紗を開き鞘を見てびつくり、)や、此の鞘は。

隼人　是を其方存じてをるか。

又助　存じた段ではござりませぬ。中身は則ち、こゝに。

〽何心なく戶棚の內、取出す刀の中身、しつくり合ひて詮議の割符、隼人はきつと目を附け、

ト此內又助押入の戶棚より、風呂敷に包みし差添を出し、鞘へ納める、隼人扨はといふ思入。

隼人　蠟色塗りに蒔繪にて、向う梅の紋ぢらし、その差添は花房求女、拜領ありし祕藏の一腰。
又助　これぞ下郎が一世の忠義、御家に仇する惡人の、根を絶ちましたる其時に。
隼人　橋場の邊で失ひしか。
又助　それがどうして、あなた樣の。
隼人　仔細あつて其の鞘は、それがしが手に入りしゆゑ、求女に對面いたさん爲め、わざ〳〵參りし保田隼人。
又助　はゝ、すりや惡人をしとめたる、其の功により御歸參の、大方御免でござりませうがな。
隼人　主人求女が歸參をば、其の方は願はうぢや迄。
又助　いえもう、春の日は長くおぼえ、夜はろく〳〵に目も合はず、指折り算へ若旦那の御歸參なさるを今日まで、お待ち申してをりました。
隼人　いよ〳〵もつて、むゝ。
〽滅多無性に悦ぶ又助、隼人は濟まぬ顔色に、あたり窺ひ小膝を進め、
トやはり合方、又助は悦ぶ思入、隼人合點の行かぬこなしにて、
又助これへ。

又助　はツ。（ト前へ出る。）
隼人　すりや、其の方が先達、隅田川にて。
又助　御家の仇と思ふ一心、その差添で何の苦もなく。
隼人　仕留めしと申すか。
又助　へい、私ながら出來しましてござりまする。
隼人　然らば又助、白狀しやれ。（ト又助心得ぬ思入にて、）
又助　えゝ。
隼人　他聞を憚る直の尋問、尋常に白狀いたせ。
又助　お家の爲めに盡せし忠義、白狀せよとは。
隼人　こりや、是れを見よ。（ト懷より誂への位牌、淺黄袱紗に包みしを出し、）
〽袱紗包みの位牌をとり出し、
「梅雪院殿春山薫香大姉」
又助　此の位牌は。
隼人　隅田川にて汝が手にかけ、御逝去ありし多賀の奥方、則ちこれぞ梅の方樣。

又助　えゝゝゝゝ。（トびつくりなす。）

隼人　あの、こゝな不忠ものめが。

〽聞くにびつくり又助は、しなしたり情なやと、五臟六腑を裂かるゝ如く、炎の吐息つくばかり、隼人は猶も聲あらゝげ、

ト又助あきれて顫えゐる、誂への合方になり、

いつぞや奥方、隅田川御遊覽の其折しも、俄の雪に右往左往、橋場へ渡る船中に、曲者あつて奥方を殺害なして逃げ行く蘆原、その日は殿の御用にて、拙者夜に入り參りし途中、すれ違ひたる曲者の跡へ追手の家中の者ども、仔細を問へばまツかくと、聞いて驚くその折しも、落ち散りありしそれなる鞘、求女が所持の品なるが、奥方討ちし曲者は、朧に見たる形かたち、又助そちであらうがな。その場はその儘御病氣と事穩便にひそかの詮議、汝一人の仕業ゆゑ、多賀のお家の瑕瑾となり、家中の騷動あまつさへ、その日の御供いたしたる谷澤親子に疑ひかゝり、無實の罪に日毎の拷問、これ皆汝がなす仕業。（ト又助を引附ける。）まだしも證據の此鞘が、我が手に入りしばつかりに、生き延はりしそちが命、もし佞人の手に入らば、汝ばかりか求女まで、死刑に逢ふは目のあたり、主を殺すが望みなるか、言はうやうなき人非人めが。

〽襟上とつて突放せば、何と詮方又助は、身を顫はして伏しづむ、隼人は威儀を改めて、

ト此の内隼人又助を突放し、又助其の儘うつ伏しになりゐる。隼人思入あつて、

おのれが樣な不屆き奴、八ツ裂きにしても飽きたらぬ奴なれども、乳兄弟のよしみあれば、暮六ツ合圖に繩打つて引く、言譯あらば屋敷で申せ、暫時の猶豫は身の情、見るもなか／＼けがらはしい。

〽刀おつとり立上り、（ト立上り、思入あつて、）

こりやい、世俗の譬にも死すべき時に死なずんば、死にまさる恥とやら、汝も武士の扶持を喰んだでないか。あゝこれ、誠の道を思ひなば、武士らしう言譯もあるべきに、生面さげて其の言譯、ちえゝ詞交すも身の穢れ、見下げ果てたるうつけぢやなあ。

〽鋭き詞も心の謎、とく／＼立つて納戸口、心殘して入りにける。

ト隼人思入あつて、暖簾口へはひる。又助殘り、其儘うつ伏しになり居る。

〽跡には一人しよんぼりと、思案にくるゝ入相の無常を告ぐる遠寺の鐘、心細くもやう／＼と火打取出し打つ火さへ、涙にほくちしめり勝、胸の焔を行燈へともせど暗き一間より、煩らう求女は刀を杖、いざりながらに進み出で、

求女　又助々々。

ト此内又助行燈のあかしなともす。よき程に上手屋體より、求女いざりながら出來り、

又助　おゝ、こりやお目が覺めましたか、早速ながら申上げまする。先刻保田隼人樣がお出でござりました。

求女　むゝ、夢うつゝの樣に聞いてをつたが、すりや保田どのがお出であつたか。

又助　それゆゑあなたへ御藥を上げますのを、いゝはたと失念仕りました。どれ、あらためて差上げませう。

ト立ちかけるを求女留めて、

求女　いやもう、藥には及ばぬわい。

又助　左樣なら、ちとお背中でもおさすりをいたしませう。

〽言ひつゝ立寄る又助が、襟上とつてぐつと引附け。

ト又助立上るを、求女引附け、きつとなり、

求女　こりや、知るまいと思ひをるか、最前よりの一部始終一間の内で聞いてびつくり、始めて知つたおのれが惡心、證據の鞘にて求女が濡衣、かゝる企みをなさんが爲か先日それがし追放の砌り、

佞人共の計らひにて取上げられしその一腰。

〽御臺様を殺害の其場へ落し置きたるは、主殺しの惡名を、われに負はさん企みよな。察する所此程より、御家を窺ふ惡人に、一味荷擔の汝が底意、われに自滅をさせん企み、言はう樣なき人非人めが。

〽目鼻もわかぬめつた打ち、（ト又助をさん〴〵に打ち突放す。）

又助　さゝ、人非人とも畜生とも思召すは無理ならねど、是れには段々譯のあること。

求女　やあ、此の期に及び何の言譯、おのれが樣な不忠もの、家來に持ちしは求女が不運、疑ひ掛くるも理の當然、此上は切腹なし、保田殿への申譯、さうぢや。

〽傍なる刀とり上げれば、

又助　あゝこりや、御短慮な若旦那、何事でござりまする。（ト求女をとめる。）

求女　えゝ、放せ〳〵。

又助　どうしてこれが放されませう。まあ〳〵、待つて下さりませ。

求女　まだ此の上に妨げいたさば、不忠の成敗手は見せぬぞ。

又助　さゝ、假令ずた〳〵にされましても、少しも厭はぬ下郎が體、あなたに切腹させましては、罪に

求女　罪を重ぬる道理、あはれ不便と思召し、もし若旦那、どうぞ思ひ止まつて下さりませ。
〽縋り止むる求女の白刃、心はやれど是非なくも、
ト又助求女の白刃をもぎ取る。求女思入あつて、
求女　不忠ものゝ汝が詞、用ふるにはあらねども。
〽死後に此の身の悪名を、殘さん事の口惜しやと、氣をとりなほし涙を拂ひ。
思へば如何なる報いにや、寶詮議もならざる足なへ。
ト愁ひの思入、又助も思入あつて。
又助　その御病氣を直さんと、心を碎く甲斐もなく、けふにつゞまる此身の因果。
求女　おのれが罪おのれを責むる譬の通り、人非人の又助兄弟、妻でない家來でないぞ。
又助　えゝ。
〽言葉鋭く言ひ放し、いざりながらに病の床。
ト求女いざりながら、上手の屋體へ行くを、又助引き留めるを突き放し、障子を立て切る。
求女　七生迄の勘當ぢやぞ。
〽はたと立て切る破れ障子、跡に殘りし又助は、胸に浪打つ一世の大難、觸椙も立たずうろ

うろと。

又助　あゝ知らなんだ〳〵。こんな事とは氣も附かず、彈正めにたばかられ、お柳の方と思ひ詰め、例體ない奥樣を。あゝこりや夢ではないか、何たる因果で又助が、忠義と思つてした事も、惡人めらの企みにて、却つて御家の大事となり。

へまだ其の上に此の鞘が、後の證據になる時は、求女樣の御身の上。

これがほんの猿智慧で、主人の仇となつたるか、こりやなんとしたらよからうなあ。

へ暫し途方に暮れるたる、歎きのうちに心附き。

おゝ最前隼人さまのお詞に、不忠不義な下郎の又助、誠の道を思ひなば、武士らしう言譯もあるべきにとおつしやつたが。（ト傍の刀に思入あつて、）此の一腰は殿樣より、拜領なせし御紋附、これで、い、どん腹切る時は、多賀の御家の手にかゝり、死ぬるも同じ此の又助。

へ思ひ極めし身の覺悟、折から歸る志賀市は、歎きも知らずいそ〳〵と。

ト下手より以前の志賀市先に、○半與な擔ぎ出來り、

志賀　はい、兄さん、今歸りました。

又助　おゝ志賀市、歸つたか、

○いや申し又助さん、志賀市さんの妹脊川が、大層よう出來ましたゆゑ、お前さんにお聞かせ申さうと、師匠が琴をよこしました。(ト琴をよき所へおき、)左樣なら、しつかりお渡し申しました。

兩人 大きに、お世話樣でござりました。

〽言ひ捨てとつかは急ぎ行く。

ト○引返して路地口へはひる。志賀市袂より紙に包みし菓子を出し、

志賀 もし兄さん、此の菓子はお師匠樣から御褒美に貰うたゆゑ、お土產に內へ持つて來ました。

〽目かいも見えぬ其上に、たよりに思ふ兄は死に姉は苦界へ沈みしを、知らぬ妹のいぢらしさ。

又助 おゝ親切によう持つて來てくれた。そして今夜は一人で彈いたかや。

志賀 あい、此やうに一人して琴を彈くやうになつたのも、お前のお蔭ゆゑ、ちよつとお前に聞かせたい。用がなくば聞いて下され。(ト又助思入あつて、)

又助 おゝ、聞かうとも〳〵、今日に限つて此の兄に、聞いてくれとは子心にも、蟲が知らして言はすのか。

〽今彈く琴の絲よりも、いとし可愛の血筋にからまれ、調子も狂ふ我こゝろ。

志賀 あい〳〵。

〽松風通ふ琴の音も、是ぞ此世の聞き納め。

ト此の内志賀市琴へ向ひ調子を合せる、又助肌をぬぎ、腹を切らうといふこなし。文句のきれ、妹背川の獨吟になり、志賀市琴を彈く。

〽子を捨つる藪においたつむら烏、父よ母よと鳴くからす、森の小がらす夜の鶴。

ト志賀市琴を引く、又助差添を手拭にまき、腹を切らうといふこなし、此の時下手より以前の紺屋板の仁三實は奴隅田平、窺ひ出て、又助へうぬと掛るを立廻つて引附け、

又助 唄ふ唱歌は妹脊川、やすからざりし我子より血を吐く兄が苦しさは、まゝどの樣であらうぞい。

ト隅田平はねかへすを投げのける。此の音に志賀市びつくりして、

志賀 やあ、今の音は。

又助 なんでもない、さあ唄や〳〵。

志賀 あい〳〵。

又助 いまはの別れも知らずして、唄ふ姿のいぢらしさ、思へば不便な。（ト隅田平かゝるを引附け、）ものうやなあ。

〽子は安方のやすからぬ、親は空にて血の涙、誰が節附けて世をうとう、さてこそうられやすかた。

ト此内隅田平を相手に又助立廻り、唄一杯に隅田平を見事に投げる。本釣鐘の暮六つをうつ。

又助びつくりして、

ありやもう暮六つ、南無阿彌陀佛。

〽弓手へがばと突立つる、音にびつくり志賀市が、めくら探りに這ひ寄つて。

ト又助腹へ突立てる。志賀市縋り附き、

志賀 やあ、こりや兄さん。

〽言ふに一間を立出る隼人、求女も傍へはひよつて、

ト上手の屋體より、隼人手燭を持ち、跡より求女いざりながら出來る。隅田平それを見てびつくりなし、下手へ忍ぶ、求女傍へ寄り、

求女 やゝ、こりや又助には、切腹なしたか。

隼人 ほゝお、あつぱれ出來したく。

志賀 えゝ、そんなら兄さんは、死なつしやるのか、はゝゝゝはあ。

へはつとばかりに泣伏せば、手負は苦しき息をつき、

又助　求女樣のお身の惡名、これにて疑ひ晴れませうがな。

作人　最前よりそちが實心、推量なせど主人の仇、助けおかれずかゝる仕儀。

求女　御臺樣を討つたるは、定めて仔細のあることならん。

作人　其夜の樣子一通り、包まず申せ、こりや又助。

又助　お尋ねなくとも又助が、申さにやならぬ身の言譯。（ト誂へ竹笛入りの合方になり、）此程觀世音の境内にて、求女樣の御追放、主水さまの御最期も蟹江親子が勸めにて、殿の御心まどはする、お柳の方がなす業と、聞くに心も張弓の弦一筋に彼等をば、お主の敵と思ふ矢先き、的は違つて彈正が現在身寄りのお柳をさみなし、御家を亂す大惡人討つて捨なば國家の納まり、これで殺せと渡せし一腰、下郎が淺い心から深い企みと白鬚の神ならざれば誠と思ひ、手立に乘りし渡し舟、此の身の運も月代の雲間隱れの隅田川、忍び果せし舟の中、丁字車の提灯は、お家を亂すお柳の方。

へ思ひ知れやとさし通し、息の根留めて逃げうせしが、なぜ其時に此の腕が、罰があたつて折れざりし、

知らぬ事とは言ひながら、御臺樣を殺せしと聞いた時の又助が、胸は早鐘氣は顚倒、言譯なさに腹切れど、又助如きが命をば假令十萬捨てたりとて、尊き一人の御臺樣、其のお命に替へられうか。

〽先非を悔いし又助を、見るに求女は忍び兼ね、

ト此の内又助よろしく思入、求女もこなしあつて。

求女　仔細を聞けば皆理、それと申すも此の求女を思ふが故のそちが忠節、惡人共の仕業といへど、御臺樣の御逝去も、元の起りはそれがし故、又助ばかりが科ならず、われもともども此場に於いて、

〽刀の柄へ手を掛くれば、（ト求女死なうとするを隼人すぐに留め、）

隼人　こりやうろたえて何故切腹、貴殿は香爐詮議の役目、それ故命を全うせんため、切腹なせよと又助に言はぬばかりの言葉の謎、あつぱれ解いて捨てたる命、家來の忠義を無駄になすか。

求女　とは言へ虚勞の病にて、存命難き此の求女、おめおめ此儘死なんより、切腹なすは身の本懐。

又助　あいや、その御病氣も全快なす、藥は今に妹が。

〽言ふ間あらせず駈け來るおつゆ、それと見るよりびつくりなし、

ト ばた〳〵になり、下の方よりおつゆ出來り、直に門口へはひる。

つゆ 兄さん、今戻つたわいなあ。(ト又助を見て、)やゝ、こりや何故に。

〽はつとばかりに泣き伏せば、志賀市なく〳〵取りついて、

志賀 これ姉さん、わたしは見えぬが兄さんの、助かりやうはないかいなう。

つゆ どういふ譯か知らねども、死ぬ程切ない事なれば、なぜに私へ一言も相談しては下さんせぬ、頼りに思ふ兄さんに死別れ、わたしの身は勤奉公、跡に殘る志賀市を、世話する人がござんすか、あんまりつれないお前の心、かういふ事と露知らず、求女樣の御病氣を直したいばつかりに、つらい苦界へ此身を沈め、やう〳〵手に入る此の百兩、やれ嬉しやと思ひしに、打つて替つて此の樣な、今の歎きを見ることぞ。

〽思へば因果な身の上と、手負ひの膝に取縋り、恨み嘆くぞ同理なり。

ト又助へ縋りて嘆く、此内求女思入あつて、

求女 その嘆きはさる事ながら、最前聞きし希代の一藥、申の年月日時揃ひし男の血汐を服する時は、忽ち全快なすとの事。

又助 これぞ幸ひ此の又助、申の年度の則ち產れ。

隼人　すりやその方は、年度の産れか。

求女　これぞ天より授かる良薬。

隼人　物は試し、少しも早く。

〽いふに妹が心得て、あり合ふ器とり出せば、手負は血汐をしぼり込み、求女にすゝめ呑ますれば、薬の利目かその儘に、うんとばかりに息絶えたり。

ト此内井へ又助の血汐を絞り、求女に呑ます。うすドロ〳〵になり、求女はウンと氣を失ふ。

隼人　や、こりや、めんけんなせしか。

つゆ　心を確かに、求女様。

トおつゆ縋り付く、この時後ろより、以前の中間仁六、忍び出て、

中間 両人　求女觀念。

トおつゆ引退け、求女の両手をとつて引立る。

〽小がひな取つて引立つる忍びの曲者右左へ、もんどりうつてづでんどう、すつくと立つたる求女が有様。（ト求女両人を突き廻し、左右へ投げ退け、きつとなる。）

隼人　やゝ、うつて替りし此の體は、

つゆ　扨は、血汐の奇特にて。

求女　如何にも、夢の醒めたる如く。

又助　全快ありしか。

求女　ちえゝ忝い。

〽天を拜し地を拜し、悦び勇む其の内に、打ちしをれたる兄妹が、

ト此の内又兩人掛るを立廻り、左右へ當てる。おつゆ志賀市手を取りかはす。

つゆ　その悦びに引替へて、たゞ不便なは此の志賀市。

又助　おゝ、こればかりが、よみぢのさはり。

求女　志賀市事は身の代の、此の百兩を官金に、官位をとらば生涯の樂。

隼人　またおつゆが廓へ行くをば、この隼人が身請なし、また改めて求女が妻。

又助　ちえゝ、それにて思ひおく事なし。

〽心ゆるめばがつくりと、近づく血死期衰ふれば、おつゆを迎ひの廓の者。

ト又助嬉しき思入、此時下手より、幕明きの判人小助、三浦屋の若い者兩人出來り、

小助　さあおつゆさん、支度はいゝかえ。

若者
兩人 支度がよくば、これから直に。

ト門口をあけ、又助を見てびつくりなし、

や、この體は。

〽はツと驚く兩人が、あかりを消せば内は闇。

ト隼人あかりを消す、門口の兩人囁く。

又助 最早近づく此身の知死期。

つゆ そんなら是が。

隼人
求女
市助
仁六 此世の別れ。觀念。

ト隼人求女に組附くを振拂つて立廻り、三浦屋の番頭、判人小助内へはひり、志賀市を小助、おつゆを番頭が引立てる。此の内又助は引廻し。

又助 はや、おさらば。（ト本釣鐘）

〽あはれはかなく。

ト隼人求女兩人を投のけ、又來るを引附ける。番頭寄らうとするをおつゆ隔てる、小助は危いといふ

思入にて志賀市を庇ふ。又助笛をかき、落入る。よろしく三重本釣鐘にて、

幕

大詰

多賀家問注所の場
同　奥庭の場

〔役名――多賀大領、舍弟大淸、長谷部帶刀、望月彈正、谷澤數馬、蟹江一角、同主税、柏木曾平太、近習彌源治、同軍治、小島勇藏。岩藤の亡靈、愛妾お柳の方實は帶刀の妹お柳、二代の中老尾上腰元待乳、同宮戸、同小梅、同淺茅等。〕

（多賀家問注所の場）――本舞臺三間の間、高足の二重、向う銀襖、軒に釜敷桐鉢の紫の幕を張り、左右に同じ紋の高張、諸所に燭臺を灯し上下綱代塀、櫻の立木、日覆より同じく釣枝、こゝに彌源治軍松、袴股立にて二重の下に控へ、此の見得管絃にて幕明く。

彌源　何と軍次殿、羨しきは彈正どの、大領樣の御意に入るお柳の方の勸めにて、百萬町のお墨附頂戴なされたとの事。

軍次　ただ其の上に先達てより、當多賀家の執權職、上見ぬ鷲の一足飛び、泰平の世の立身は兎角女の

ことでござる。

彌源 それに引替へ我々は、主命とは申しながら此度谷澤親子の者、不屆ござつて獄につながれ、

軍次 其の御詮議落着までは、貴殿と拙者は見張りの役目、誠に迷惑なものでござる。

彌源 兎角いふ內一角さまの、御出席に間もござるまい。

軍次 然らばこれにて我々は、詮議の時刻を。

二人 相待ち申さう。

トやはり管絃にて、奥より一角、主税、大小にて出來り、よろしく住ふ。

彌源 これは〳〵一角さま、主税樣には、終日のお役目。

二人 御苦勞千萬に存じまする。

一角 其方共も役目大儀。

二人 はあゝゝ。

一角 それにつき先達てより、牢舍させし谷澤數馬、種々吟味いたすと雖も、申し陳ずるしぶとき奴、最早今日は詮議の落着。

主税 假令如何程陳ずるとも、只今火水の拷問なし、今日こそは白狀させん。

一角　やあ／＼誰かある、谷澤數馬を引出せ。（ト下手にて）
曾平　畏つてござりまする。
ト時の太鼓、說教がゝりの合方になり、數馬袴なり、腰繩にかゝり、曾平太袴股立大小にて、繩を取り、足輕二人菖蒲革にて附添ひ出で來り。
それ、引据ゑさつせえ。
足輕　はッ、下に居らう。（ト數馬を引すゑる。）
曾平　お召しによつて谷澤數馬、召連れましてござりまする。（ト一角思入あつて）
一角　こりや數馬、面を上げい。（トきつといふ。これを管絃になり）先達て隅田川遊覽の砌り、奧方梅の方を殺害なせし者行方知れず、其の日のお供は汝等兩人、それを知らぬは役目の怠り、故に牢舍を申附けたり。察する所お柳の方が殿のお覺え目出度きを妬み、遺恨に思ふやからの仕業、既に其の折提灯の取違へしを知らずして、船中に於いて奧方を殺害なせしが、是れ全くお柳の方を怨みに思ひ、何者をか賴み込み殺害なせしに相違ない。さあ有體に白狀いたせ。
數馬　其のお疑ひにて先日より、此數馬へ御詮議なれど、毛頭存ぜぬ此の身の濡衣、勿體ない奧方を人違ひにせよ害しなば申さずとも主殺し、何のめ／＼と永へん、左程不忠の所存にあらず、假令い

かなる拷問受け、此儘命終るとも存ぜぬ事は白狀ならず、弓矢神も照覧あれ、左樣な事は身に取りて、露聊も覺えござらぬ。

一角　又しても／＼、同じやうなる申譯、今日こそは是非共に、白狀させねばおかぬぞよ。

主稅　然ししぶとい彼れめが性根、一通りではぬかすまい。（ト二重より下りて割竹を持ち、數馬の傍へ行き）どれ、身共が言はしてくれう。（ト割竹にて散々に打つ、數馬苦しき思入。）さあ、苦しくば白狀しろ。如何にも奥方を殺しましたと、言ひさへすれば濟むことだ。永く痛い目しようより、手短かに言つてしまへ。さあ言へ、ぬかせ。えゝ面倒な、かう／＼。（ト又さん／＼打つことあつて）これでもわれは、白狀せぬか。

數馬　假令如何程打たるゝとも、此の身に覺えないことを、何故白狀いたしませう。

主稅　さりとてはしぶとい奴、白狀せずばいつ迄も、打つて／＼ぶちのめし、憂目を見せて白狀させるわ。それ曾平太、我に代つて打据ゑい。

曾平　心得ました。（ト數馬の傍へ寄り、）さあ數馬、此の苦痛が助かり度くば、われが口から白狀しろ、言はぬに於ては、かう／＼。（ト散々に打ち、數馬苦痛のこなし。）

數馬　知らぬことゝは言ひながら、疑ひ受けし身の不運、打殺さるゝも是非なけれど、餘りと言へば手

酷き折檻。

倉平　まだ〳〵こんな事ではねえ、打殺しても言はさにやおかぬ。
數馬　すりや、此の上に又候や。
倉平　我が此の腕の續くだけ、拷問なしてほざかしくれう。（ト又立ちかゝる。）
一角　あいや、倉平太待ちやれ。
倉平　だやと申して、餘りしぶとき數馬故。（ト又立ちかゝるをとめて、）
一角　はて、一筋繩では行かぬやつ、白狀せぬとて此儘にいたしおかうか。やあ〳〵、申附けたる品をこれへ。（ト奥にて、）
侍　はゝあ。

ト管絃にて、奥より侍一人塗盆の上へ銀ばりの水呑と湯桶とを持ち出來り、好き所に置き、すぐにはひる。

一角　これまで數度の拷問に、白狀せざるしぶとき奴、身共が工風の責道具、柏木氏此の品それへ。
倉平　心得ました。（ト湯桶の水を鉢へつぐ、一角二重より下りて、）
一角　こりや數馬、それへ出い。（ト誂への合方になり、水を數馬の目先へ突きつけ。）

こりやよく聞けよ、人間の五體は五行を表し、則ち木火土金水五ツの内にも火勢強し、然るに今日迄七日が間、湯水を止められ嚥かし苦痛、さ、此の水が飲みたいか。

ト突附ける。數馬ちつと思入あつて、目を閉ちる。

數馬　いや飛び附く程に思はうが、陳じ立てする其の内は、いつかな飲まさぬ。さ、此の水が呑みたくば梅の方を殺したと、さあ眞直に白状ひろげ。（ト又さし附ける。）

一角　假令渇死いたせばとて、此の身に覺えなき事を。（ト水鉢を打落す。）

一角　やあ、白狀いたさぬのみならず、身共が持ちし此の器、打落したる囚人數馬。それ悴討つて捨てい。

主税　心得ました。（ト刀に手をかける。此の時奥にて、）

犬清　主税控へい。

主税　なんと。（ト管絃になり、奥より犬清長上下、小さ刀、勇藏袴一本さしにて附添ひ出來り、住ふ。）

一角　あなたは御舍弟。

三人　犬清樣。

一角　詮議いたすは身共が役目、何故お止めなされまする。

犬清　予が止めしはこれなる數馬、いまだ詮議分明ならず、それぢやに依つて迂濶には、よも成敗は相成るまい。
主税　ぢやと申して。（ト立ちかゝる。）
犬清　詞を背くか。
主税　全く以て。
勇藏　犬清樣のお詞なるぞ。控へめされ、主税どの。
主税　はゝあ。（ト控へる、犬清數馬に向ひ。）
犬清　誠や孔聖だにも一度獄屋に繫がれたまふ、忠臣無二の谷澤數馬、かゝる無實の惡名受け、假令縲目に逢へばとて、其の方共の仕業でなく、惡人共の企みの罠に懸りし事は、知れてはあれど、何を申すも忠臣衰へ、佞人はびこる此の世の中、さぞ口惜しう思ふであらうが、天道誠を照したまへば、苦痛をこらへて時節を待ちやれ。
數馬　はゝあ有難き其のお言葉、此の身に思はぬ濡衣着て、日每にかゝる拷問うけ、居所の羊の隙行く駒、少しも早く死にのぞみ、今の苦痛を脫れんと思へど死後に身の恥辱殘さんことの口惜しく、惜しからぬ命永へる心の內の苦しさを、御推量なされて下さりませ。

犬清　おゝさもあらん、此の程より數度の拷問嘸かし難儀、其の苦痛を助かるやう、余が許して水をつかはすッ　こりや勇藏、谷澤數馬に水を與へい。

勇藏　畏りました。(ト水を鉢に入れ數馬の傍へ來て)さて數馬殿、其許にも思ひがけなき疑ひうけ、繩目の恥辱、それのみか日毎に替る嚴しき拷問、犬清樣のお情にて苦痛を助かる此の水を有難く頂戴めされ。

數馬　はゝつ、有難き御惠み、これにて一命助かる數馬。

犬清　誰に遠慮もない程に、心置きなく其の水飲みやれ。

數馬　えゝ有難う存じまする。(ト犬清に一禮なし、水を飲まうとする、此の時奥にて。)

彈正　あいや其の水、罷りならぬ。

ト管絃になり、奥より彈正上下大小にて、三方に墨附九寸五分を載せ持ち出來り、

一角　貴殿は望月。

皆々　彈正どの。

彈正　蟹江氏には、お役目御苦勞。(ト彈正上座に住ふ。)

犬清　いやなに彈正、是なる數馬に犬清が、許せし水をならぬとは。

彈正　大領さまの仰せでござる。

大淸　なに、兄上の仰せとな。

彈正　奥方逝去のその砌り、御供なしてありながら、討ちたる者を逃せしは、豫てお家を亂さん正しく彼等が企み事、それ故白狀いたさせんと、大領樣の仰せを受け、止め置きたる數馬が水責め、吞まする事は罷りならぬ。

大淸　假令兄上の仰せにせよ、我々も當家の連枝にて、そちが爲めには主ならずや。詮議の役目を蒙りし一角さへ其の意に任すに、なぜ余が詞を用ひぬぞ。

彈正　いかにも、彈正用ひませぬ。

大淸　主に用ひぬとは。

彈正　今日よりしてお主にあらず。

大淸　とは又何故。

彈正　大淸樣、御切腹召され。（ト三方を据へける。）

大淸　やゝ、此の大淸に切腹とは。

彈正　則ち殿の上意でござる。

犬清　えゝ。（ト驚く。）

彈正　科の次第を承られよ。（ト管絃になり、墨附を開き。）「一、弟犬清事、身持放埒惰弱にして、我妾お柳へ戀慕なし、竊に艶書を贈りし段、不義の科輕からず、切腹申し附くる者也」、則ち殿のお袖判、かくの通り、

犬清　やゝ、お柳へ艶書を送りしとは、更々覺えぬ無實の難題。

勇藏　假令疑ひあるとても、詮議も遂げぬは無成敗。

彈正　やあ、小癪な一言。それ、勇藏を引立てい。

曾平　心得ました、勇藏、お立ちやれ。

勇藏　こりや、何科あつて某を。

彈正　放埒惰弱の其の上に、お柳の方へ戀慕の一條、そばに附添ふ汝が勸め、科は脱れぬ覺悟いたせ。

勇藏　こは、思ひもよらぬ御疑ひ。

彈正　まだ〱申すか、不屆き者め。それ、大小取上げ、追放いたせ。

勇藏　すりや、拙者めを。

曾平　執權職の仰せなれば、脱れぬ所だ、往生しやれ。

彈正　戀慕の次第逐一に、お柳が殿へ言上なせば、是非に及ばず犬淸さま、お覺悟あつて切腹あされ。
犬淸　扨は奸婦が讒言を、誠と心得兄上も、我に切腹なせよとか。
主税　はて、それとても身から出た銹、今更言つて返らぬ事。
數馬　すりや無實の罪に犬淸さまを。あまりと言へば無成敗。
彈正　やあ、入らぬ口出し、其方も白狀なさねば役目の越度、則ち死罪申附くるぞ。
數馬　此身の死罪は是非なけれど、犬淸樣の御切腹。
勇藏　あまりと言へば、お情ない。
犬淸　これ、皆讒者のなす仕業。
一角　なに、讒者とは、誰が事なるぞ。（トきつとなる。）
彈正　はて、お構ひあるな、蟹江氏、引かれ者の小唄とやら、もう半時とない命、勝手な事を申すがよい。いさ、犬淸樣には疾々切腹。
犬淸　とは言へ、みす〳〵。
彈正　殿の仰せがお背きあるか。
犬淸　さあそれは。

一角　数馬も罪に服するか。
数馬　さあ、それは。
主税　不忠の勇藏、大小渡せ。
勇藏　さあ、それは。
彈正　切腹あるか。
犬清　さあ、
彈正　さあ、
皆々　さあ〱〱。
彈正　最早脱れぬ其身の大罪、さあ尋常に覺悟をおしやれ。（トきつといふ。此時花道揚幕の内にて、）
帶刀　何れも待つた、長谷部帶刀、それにて裁斷いたすでござらう。
　ト三味線入り、中の舞になり、花道より帶刀、上下大小にて花筒に櫻を入れたるを持ち出來り、花道にとまる。
一角　貴殿は、長谷部帶刀どの。
主税　何故夜陰に、

皆々　出仕でござる。
帯刀　散る花に心持ちたき武士の、古歌にならひて此の櫻、殿へ御覽に供へん爲め、所存あつて持參の帯刀、夜陰の出仕も何とやら、例の無骨とお許しめされい。
一角　何は然れ、殿へ御覽の品とあれば、
皆々　先づ〳〵これへ。
帯刀　罷り通るでござらう。

ト右の鳴物にて、帯刀本舞臺へ來り二重の下手へ住ふ。

彈正　すりや其許が多賀のお家の、音に聞えし長谷部帯刀どのよな。（ト帯刀思入あつて）
帯刀　これ迄館に見なれぬ侍、さ言ふ貴殿は、
彈正　某事は先達て、召出されし望月彈正、
帯刀　すりやお手前が、かねて噂の、
彈正　一徹無意氣の長谷部氏、
帯刀　出頭第一の望月氏、
彈正　以後は互ひに、

帶刀　別懇に、

二人　申し譯するでござらう。

帶刀　見受けますればお白洲に、引据ゑられしは谷澤數馬。犬淸さまにも何とやら、御氣むづかしき御顏色、夜中に不意の御評議は、こりや何事でござるな。

一角　長谷部殿には、定めて樣子も御存じならん、谷澤數馬は隅田川にて、奧方が手にかけし大罪人。

帶刀　それ故の糺明ならば、其の繩解いて赦しめされい。

主稅　でも大切なる奧方を、殺害なしたる谷澤數馬。

帶刀　いや其科人は外にござる。

皆々　なんと。

帶刀　お騷ぎあるな奧方を、害せし曲者は鳥井又助とて、以前は花房主膳が小者、深川洲崎に幽な世渡り、きやつ何者にか賴まれ、隅田川にて奧方を殺害なせし事、證據の鞘にて天命のがれず、切腹なして相果てしを詮議に參りし役目の隼人、とくと見屆け歸りし故、花に事寄せ大領へ言上なさんと夜陰の出仕、是程確かな科人あるに、何を證據に谷澤數馬、手きびしき拷問おしやるのだ。

倉本　でも數馬ことは奧方の附人、假令又助が仕業にもせよ、大事の主人を失ひしは、これ附人の越度

故、數馬は則ち死罪の科。

帶刀　やお默れ曾平太、先達て隅田川御遊覽の砌り、奥方附きの供人は谷澤數馬一人ならず、外に附添ふ數多の同勢、なぜ餘人にはお咎めない。

曾平　むゝ。

帶刀　さやうな事に心もつかず、嗚呼がましき詮議呼はり、控へて居らうぞ。（ト敵役へあてゝ言ふ思入）して、犬清樣へのお咎めは。

彈正　身持放埒墮弱の上、殿の愛妾お柳の方へ、竊に艶書を送りたる、不義の科故御切腹。

帶刀　よもやお身持放埒墮弱の上、お柳の方へ戀慕ありしか。はて、以ての外なる御行跡。

犬清　此身に覺えなき事を。

帶刀　いや、なき事を大領樣が、よもや仰せはござるまい。いやなに一角殿、犬清さまのお傅役は誰人でござつたな。

一角　則ち斯くいふ、老臣一角。

帶刀　然らば此場で御舍弟諸共、貴殿も切腹めさるゝか。

一角　なに、此の一角に切腹とな。

帶刀　はて奥方の附人故、役目の越度に數馬が死罪、放埓懦弱は誰が科、これ傅役の科ならずや。
一角　さあ、それは。
帶刀　切腹せずばなりますまい。
一角　でも某は、存ぜぬ事故。
帶刀　貴殿が切腹いたされずば、死罪の沙汰もまづそれまで。
一角　むゝ。
帶刀　左樣なものではござらぬか。
一角　いかにも。
帶刀　して又犬清樣へ切腹せよと、此の采配は何者が。
皆々　執權職の則ちお指圖。
帶刀　なに、執權職とは。
彈正　餘人でござらぬ則ち拙者、多賀家の政務取り行へと、お許し受けし此の彈正。
帶刀　すりや執權にお取立とな、いつの間にやらのし〳〵と、是れが桂馬の高上り、はて羨しい貴殿の出世。

彈正　長谷部氏には何とやら、拙者が役目を疑念の御樣子、相違ござらぬ殿の墨附、拜見めされ。

（ト墨附を出す。帶刀開き見て、）

帶刀　いかにも、相違なき我君のお袖判、御舍弟たる犬清樣へ切腹せよとの此の文言、今一通は今宵彈正に國家の政務ゆるしの墨附。

彈正　何とそれでも長谷部氏、貴殿は疑念おしやるか。

帶刀　なか〳〵以て恐れ多い、はて結構なるお袖判。（ト墨附を返す。）

彈正　斯く我君よりお許し受け、國家の政務取り行ふ、此彈正をないがしろに、帶刀殿の今の振舞。

帶刀　いやないがしろにはいたさねど、不分明なる御成敗ゆゑ。

彈正　假令分明ならずとも、犬清さまの御切腹、數馬が死罪勇藏が追放、皆殿よりの上意なるに、それを違背なす今の一言、此の墨附を反故にめさるか。

帶刀　全く以て。

彈正　左なくば政務に入らぬ口出し。

帶刀　さ、それは。

彈正　上意を背くか。

帶刀　さあ、

彈正　さあ、

二人　さあ〳〵。

彈正　控へてござれ、長谷部氏。（トきつといふ。）

帶刀　いゝや控へては罷り居らぬ、政務に邪ある時は、遂に國家の亂れとなる。殿の墨附反故にいたす。

皆々　なんと。

帶刀　御上意背くも、お家の爲め。

彈正　善惡共に臣たる者は君に隨ふがこれ忠臣、我意に誇つて殿の墨附反故にいたすはこれ大罪、一角殿より其許が、我非を知つて切腹召され。

帶刀　いふ迄もない今日ッた御諫言を申上げ、お聞入れなき其時は、切腹なさん兼ての覺悟、なれども此の場でむざ〳〵と、拙者めは犬死は仕らぬ。

一角　殿の墨附反故になせば、國法破りの長谷部帶刀。

主稅　從類絶すが多賀の掟。

一角　最早のがれぬ汝が罪、さあ尋常に。

二人　覺悟いたせ。

帶刀　うはゝゝゝゝ、長谷部長兵衞信連が妻は殿大領のお乳の人、此の帶刀が母なれば、世俗に申す乳兄弟從類絶さば絶しておみやれ。

皆々　さ、それは。

帶刀　帶刀は祖父の代より槍先を以て知行頂戴、家中の武士も其の通り、身共が持參の此櫻、實に散る時は潔く、一命惜しまず華々しく、各々手柄の知行取り、それに引きかへ口先にて高祿取つて執權職、武道の掟何を存じて政務などゝは、かたはら痛いわ。むゝはゝゝゝゝ。これは〳〵、執權職へ對し無禮の言葉、御免下されい。(ト此の内彈正思入あつて、)

彈正　流石はお家數代の忠臣、帶刀殿の叡智のほど、彈正感心仕る。執權職とは言ひながら武道の掟存ぜぬ某。以後は貴殿を見習ひて、國家の政務執り行はん。

帶刀　許しめされい彈正殿、貴殿の役儀は拒まねども、何かと申すはお家の爲め、犬淸さまのお命乞ひ何卒貴殿も共々に。

彈正　身共も跡より出仕なし、よしなに言上いたすでござらう。

帶刀　兎角此事は慈悲が第一。それ、數馬が繩目をゆるせ。

勇藏　はッ。（ト數馬の繩を解く。）
犬清　思へば無實の罪により、既に切腹なす所、
數馬　危き命助かりしも、帶刀殿が計らひゆゑ。
勇藏　何から何まで。
數馬
勇藏　有難う存じまする。（ト時計の音になり、）
會平　あの時計は、戌の上刻。
彈正　君御寢所へ入らせられぬ、
帶刀　其間に參つてお命乞ひ。
犬清　何卒よしなに兄上へ。
一角　犬清さまには、一先づ奥へ。
帶刀　左樣ござらば、彈正どの。
彈正　帶刀殿。
帶刀　後刻、御意得申しませう。
ト唄になり、犬清先きに帶刀奥へはいひ。數馬勇藏は上手へ、主税會平太は下手へはひる。跡彈正一

角兩人殘り、思入あつて、

一角　彈正どの。

彈正　これ。（ト中の舞になり、あたりへ思入。）

一角　かねて書きし大望も、十が九つ仕果せしに、帯刀めが出しやばつて鶍となりしけふの仕儀、して此上は、如何召さるな。

彈正　是迄所勞と言ひ立て引籠りたる帯刀が、出仕なしたる上からは、最早猶豫いたされず、お柳を以て讒言なし、罪に落して命を絶たねば、大望成就覺束なし。若し又反逆露顯なし、思ふ手筈に行かぬ時は、時日を延ばさず短兵急に、事を計らふ拙者が所存。

一角　假令帯刀何程に利口ぶるとも若輩者、お柳の方の色香にて殿へ讒言なすならば、罪に落すは瞬く内、急いては事の破れがち、惡は延べろといふからは、まあゆる／＼と思案をめされ。

彈正　此の期に及んで思案はござらぬ、帯刀めを罪に落し、片附ければ知らぬ事、彼が御前に附添ひ居れば、ぐづ／＼いたして虜となり、死後に恥辱を殘さんより、大領始め片ッ端、忠義立てする奴原を、切つて／＼斬りまくり、多年の恨み晴らせし上、潔く切腹なさん。

一角　そりや貴殿には今宵にも、露顯の萠しある時は、短兵急に切つて出で、命を捨てる覺悟なるか。

彈正　いかにも、生者必滅の理、命を棄つるは武門の習ひ、其時こそは一角殿、豫て徒黨の一筆に、此彈正と諸共に、命を捨て下さらうな。

一角　やあ。（ト思入あつて、）義を金鐵と結びしからは、如何にも一命捨つるでござらう。

彈正　それ承つて、先は安堵。さつきの返報。

ト此の以前より帶刀、上手の障子を明け窺ふ。彈正これを見てぎつくり思入あつて、

ト小柄を手裏劍に打つ、帶刀手早く受留め、

帶刀　たしかに落手。

ト顔見合せ、ぴツしやりと障子をしめる。此の内彈正懐中より連判狀を落す。一角これを拾ひ、思入あつて懐中なし立上る、彈正これを見て、刀を拔き一角の脇腹へ突込む、一角アツと苦しみ、どうとなる。

一角　やゝ、こりや何故にそれがしを。（ト彈正立ちかゝり、きつとなり、）

彈正　何故とは蟹江一角、汝は裏切る所存であらうが。

一角　なんと。（ト三味線入り、中の舞になり、）

彈正　今それがしが落したる一味徒黨の連判狀、取隱せしは是を證據に、反謀の企て訴人なし、それを功に命延はる二股武士と見た故に、大望成就の血祭りに、此の彈正が殺すのだ。

ト一角苦しき思入あつて、

一角　流石は彈正よく見拔いた。いかにも汝が推量の通り、この連判を證據となし、反逆謀叛の訴人なし、此の身を全うする所存、元より一味合體なせど、事起りなば其時は汝を害し家國を、横領なさん我企み、手盛りを喰ひしか口惜しや。

彈正　さある所存とかねてより、知つてはゐれど故老故、味方に附けねば何彼に邪魔、我が片腕と賴めども、心許せぬ蟹江一角、今帶刀に密事をば悟られたれば惡事露顯、今宵の内に日頃の大望、此彈正が働きを、草葉の陰から見物なせ。

一角　計る〱と思ひの外、やみ〱汝の手にかゝり命を捨つるか口惜しい、我も共々冥土の道連れ。

彈正　こま事ぬかさず、往生なせ。（ト刀を拔く、一角立上り、）

一角　何を小癪な。

ト早舞になり、立廻り。一角たぢ〱と上手屋體の際へ行く、此の時障子の内より、槍を突出し、一角を差し貫き、以前の主税上手屋體より出來る。兩人これを見て、

彈正　やゝこりや主税には、現在親を。
一角　何故あつて貫きしぞ。
主税　一旦惡事に與しながら、卑怯未練な親一角、露顯なしたる主人でも殺す心の此の主税、親子一つでねえ證據に、突き留めたるは身の潔白。
彈正　ほゝう、親にまさりし汝の心底、今よりしては我が片腕。
主税　すりや、疑ひ晴れしか忝ない。
一角　えゝ、言はうやうなき極重惡人め。（ト立ちかゝらうとする。）
主税　最早叶はぬ、往生さつせえ。（ト又一角を突く。）
一角　ちえゝゝゝ口惜しい。（ト苦しみどうと俯伏になる。）
主税　いで此の上は諸共に、奥へ踏ごみ大領を。
彈正　いや汝はこれより館をぬけ、豫て語らふ野武士等と、夜半の鐘を合圖となし、裏手の門より奥庭へ。
主税　心得ました、然らば是より。
彈正　野武士を集むる合紋に、多賀家の重寶金鷄の、此の香爐を汝に預くる。

ト懐中より袱紗包みの香爐を出し、主税に渡す。

主税　すりや此香爐をそれがしに、確かに落手仕る。(ト懐に入れることあつて、)左様ござらば彈正どの。

彈正　妨げなき内、片時も早く。

主税　おゝ、合點だ。

ト早舞になり、主税逸散に花道へはひる。彈正跡を見送る、此の時一角よろぼひ寄つて、

一角　おのれ彈正、(ト立掛らうとするを、彈正蹴倒し、向うを見て、)

彈正　はて、勇ましい、(ト槍にて一角を突く、一角苦しみ落入る。)若者ぢやなあ。

トよろしく思入、早舞にて此の道具廻る。

(別間の場)――本舞臺三間の間、高足の二重上手一間塗骨障子屋體、本庇、本緣附向う銀襖、上下網代塀、櫻の立木日覆より同じく釣枝、爰に以前の帶刀彈正小柄を見てゐる、管絃にて道具納まる。

帶刀　保元平治の亂より、やゝともすると叛逆謀叛及はぬ事に家國を横領なさんと、蟹江親子、望月彈正が逆意の企て、高の知れたる彼等が計ひ、そも何程の事あらん。さるにも合點行かぬは今それ

だしへ打掛けし小柄の模様は、世にも稀なる漢の武帝の出世鯉、いかなる仔細で此の小柄を所持なしをつたか、はてなあ。

ト思案の思入、誂への合方薄き風の音になり、日覆より櫻ちら／＼と散る。上手よりお柳の方、裲襠衣裳にて手燭を持ち出來り、落花を見て思入、

お柳　散りかゝる花は無常の誡めと、敎へは知れど淺ましや、悟り得難き人毎に、やがて散らん小夜嵐、定めがたなき浮世ぢやなあ。

ト思入あつて、下手へ行かうとする。此の時帶刀二重より下りて來り、

帶刀　あいや女中、暫くお待ち下され。

お柳　あの、私に。

帶刀　いかにも左樣。

トお柳の方合點の行かぬ思入、合方になり、帶刀お柳の方を見て、

誰人と思ひしに、音に聞えしお柳の方、花の顔柳の眉、實に嬋娟たる楊貴妃に現をぬかせし玄宗も、かくやとばかり君御寵愛のお柳の方、外に類も。

ト刀を拔きかけ、お柳と顔見合せ、手早く納めて、

はて、あでやかなものぢやなあ。
お柳　して私への御用とは。
帶刀　用事と申すは、あかしをちよつとお貸し下され。
ト手雪洞を取り、先の小柄を見る、お柳の方も小柄を見て、
お柳　や、此の小柄は。
帶刀　模樣は世に類なき、漢の武帝の出世鯉。
お柳　たしかに覺えの此の小柄、是をどうしてお前には。
帶刀　以前はこなたの夫とやら、望月殿より申し受けた。
お柳　そんならいよ〱、私が所持の。
帶刀　覺えがござるか。
お柳　さあ、故あつて大事の品、望月殿へ讓りしを。
帶刀　所持する長谷部帶刀より、合點の行かぬはこなたの身許、若しや以前は捨兒にて、幼き時の物語り心覺えはあらざるや。
お柳　えゝゝゝゝ、深くも包む此の身の素性、どうして捨兒といふ事を。

帶刀　知つたる證據は此の小柄、常々父の物語り、出生以前のあらましを語り聞かせん承はれ。（ト小鼓入り、誂への合方になり、）未だ平治のその昔、高倉の宮の令旨を得て、父信連が東路に旅の寢覺のもの憂きに、とある女と語らひしが計らずも懷胎なし産み落せしは女の兒、國は陸奧其の時は諸國全く穩ならず、戰場に赴く足手まとひと下野茅野に年を經る、遊行柳の片邊りへ流石恩愛行末を壽ぐ色繪の出世鯉の、小柄を添へて捨ておきしと、遙かの後に物語り。

お柳　そんなら私が父さんは、

帶刀　長谷部長兵衞信連どの。

お柳　拾ひ取りしは陸奧にて、樋爪の兵衞何某とて、佐藤一家の名たゝる勇士。

帶刀　遊行柳の縁により、其の名もお柳と名附けしが。

お柳　幼き時に父さんが、詳しい素性の物語り、扨はお前は現在の、

帶刀　血筋の兄ぢやわ。

お柳　もし兄さん、あゝ、お懷しうございますわいなあ。（ト取り附くを突放して、）

帶刀　いや、心の穢れた同胞持たぬ。

お柳　でも、眞實の妹の私。

帶刀　ぬかすまい、不所存者め、夫ある身で不義同然な汝が身の上、親兄にまで恥辱を與ふる不孝者、兄が折檻かう〳〵。（トお柳の方を引きのけ、扇にて打つ。）

お柳　こりや何故に、私を折檻。

帶刀　何故とは不屆きやつ、操を破る不忠不義の妹を持つた覺えはないわい。（トきつと言ふ。）

お柳　道理でござんす、尤もぢやが、惡人なれども夫につれ、儘にならぬが女の常、孝を立つれば夫へ立たず、いかなる宿世の因果やら、味氣ない身の上ぢやなあ。

帶刀　とはいふもの丶不便やなあ、たま〳〵巡り逢ひながら、心に思はぬ惡口雜言、無道の夫に添うたが誤り。

お柳　いえ〳〵、心に曇りはない。

帶刀　なんと。

お柳　私も元は長谷部の娘、忠孝二つ立つならば、

帶刀　其の時こそは、實の妹。

お柳　嬉しうござんす、とは言ひ願ひの叶はねば。

帶刀　國家を亂す望月彈正、品に依つたら此兄が。

お柳　なんとおつしやる。

帯刀　いやさ、泰平の世に。

お柳　えゝ。

帯刀　こりや、兜を着ずばなるまい。

ト思入、お柳の方『もし』と寄るを振切り、唄になり、帯刀思入あつて奥へはひる。お柳の方殘り思案のこなし、合方時の鐘にて、下手より彈正窺ひながら出て、目釘をしめし思入あつて、奥へ行かうとする。お柳驚き留めて、

お柳　これ待つた彈正殿、たゞならぬお前の樣子、早まる場所ではあるまいぞえ。

彈正　やあ入らざる留め立て、べんべんと時をのばし、もし悟られなば事の破れ、手短かに奥へ踏込み大領の首取つて、片時も早く鎌倉へ立越える、邪魔せずとそこ放せ。

お柳　いえいえ大事は時を得て、不意を討つのが味方の勝利、十の階子を九つまで昇り果せし今宵の手筈。

彈正　いゝや、支へる汝も物蔭にて、樣子を聞けば長谷部が妹。

お柳　えゝ。

彈正　それ故今更心變り、妨げなさば容赦はないぞ。
お柳　成程樣子を御存じの上は、そのお疑ひは無理ならねど、親を捨てても夫へ附くが女の道。
彈正　其の心底にてありながら、何故あつて妨げいたす。
お柳　さあ、お前に手柄がさせたさに。
彈正　なに、身共に手柄とは。
お柳　今宵の内に手引なし、殿樣を討たせませう。
彈正　すりや其の方が、いや早合點呑込めぬ。
お柳　成程其の疑ひは尤もながら、お腹のやゝを闇路より奈落に落す法もあれ。
彈正　出來した女房、して又手引の其の合圖は。
お柳　さ、其の合圖は、おゝそれ〳〵、幸ひ寢所の軒端の燈籠、あかしの消えるを合圖の礫。
彈正　闇を幸ひ手槍を以て、
お柳　日頃の本望。
彈正　たつた一討。（トきつと思入。）
お柳　必ず首尾よう。

彈正　これ。（ト押へゐた木の頭。）

ト兩人あたりを窺ひ、早き合方にてよろしく、

ト跡しらべにてツナギ、直に引返す。

幕

（奥殿の場）――本舞臺三間の中足、本緣附の二重、向う金襖、前側障子を建切りあり、上の方一間の障子屋體、上下とも柴垣、櫻の立木、日覆より同じく釣枝、管絃にて幕明く。と下手より、腰元四人、庭下駄手ぼんぼりを持ち出來り、

淺茅　皆さん御覽遊ばせ、殿樣のお物好きにておしつらへの此のお庭、四季の詠めに見あかねど、取分け櫻は又格別、見事ではござんせぬか。

待乳　それ故今夜殿樣には、此の亭座敷へ御寢なると仰付けにてお床のしつらへ、あの御意に入りのお柳さまと、花見ながらのお睦言。

宮戶　其のお供ゆゑ私等迄、今を盛りの此の櫻、夜の詠めは又一入、好い慰みではござりませぬか。

小梅　ほんにあなたの仰せの通り、上野や隅田の花とは違ひ、いつ迄見ても見飽かぬ景色。

淺茅　お召しのない内、さあ皆さん。
四人　どれ、お夜詰に上りませう。
　ト時の鐘にて、腰元四人上手へはひる。時の鐘打上げ、獨吟になり、よき程に前側の障子引ぬく、爰に結構なる夜具屛風を立廻し、よき所に香盆香爐、爰にお柳の方香をたき、合掌回向のこなし、此内獨吟一ぱいに切れ、合方彈流し、お柳の方思入あつて、
お柳　はじめて聞いた此の身の素性、長谷部信連殿の忘れ形見とあるからは、お殿樣は三代相恩の御主人樣、その御主人を勿體ない、いかに夫の爲ぢやとて假にも僞はる此の身の罪、知らぬ昔は兎も角も、知れてはどうも永へをられず、死んで冥土で父上さま、不孝のお詫びはいたしまする。お許しなされて下さりませ。
　ト泣伏す。此時奧より多賀の大領殿の拵へにて出來り、此體を見て、
大領　こりやお柳、何を其の樣にいたしをる。（トお柳の方こなしあつて、）
お柳　あなたは殿さま。
大領　見れば何やら濟まぬ顏色。はゝあこりや何か、予が遲うなりしを、外に增す花でもあらうかと思ひ詰めての廻り氣か、はて悋氣深い女ぢやなあ。

お柳　勿體ないことおつしやりませ。何程辛う遊ばすとも、更々お怨みには存じませぬ。

大領　左樣申すは未だ心が解けぬと相見ゆる、これ迄そちが申す事、一つでもならぬと言はぬ予が心、假令家國捨つればとて、そちに見替る花はないわい。

ト　お柳に寄り添ふ。

お柳　冥加ない其の仰せ、賤しいわらはをそれ程に思召しての御寵愛、思へば思ひまはす程、猶々此身は。

ト　術なきこなし。

大領　はて、まだつれなういたしをるか、これ予が惡ければ詫する程に、心を直して寢所へ參れ。

ト　手を取る、お柳の方愁ひの思入にて、

お柳　今宵一夜のお情が、永の別れと死なねばならず。

大領　何と申す。

お柳　いえ、假令死んでもあなたの事は。

大領　忘れぬと言やるか。

お柳　はい。（トうつむく。）

大領　おゝ、過分に思ふぞよ。

ト又獨吟になり、此内兩人よろしくあつて思入。此の時上手柴垣を押分け、以前の彈正半身を出して窺ふ。此の途端、獨吟の切れにて兩人ほぐれ、お柳の方は彈正を見て思入あつて、立上るを、大領、お柳の方の帶を解き引寄せる。お柳の方短檠の明りを消し、大領に寄添ひ、はあゝと泣く。大領其のまゝ抱きしめ、

はて、うい奴ぢやなあ。

ト獨吟になり、大領屏風を建廻す。時の鐘凄き合方になり、彈正手槍を持ち、柴垣より窺ひ出來り、あたりへ思入あつて、槍をしごき、そろ／＼と二重へ上り、屏風へ突込む、内にてお柳の方ワッと苦痛の聲する、彈正思入あつて槍をひき、屏風をのける。内にお柳の方、手負のこなし、彈正びつくり思入、

彈正　や、そなたは女房。

お柳　彈正どの。

彈正　すりや、大領と思ひの外、女房お柳が此の最期、いで此上は。

ト奧へ行かうとする。お柳これを止めて、

お柳　もし、まあ〳〵待つて。
彈正　やあ入らざる妨げ、扨は、身共を僞つて、
お柳　殿の御身に代りし最期。
彈正　すりや、たばかられたか。えゝ、あのこゝな道知らずめが。

ト　お柳の方を引付け思入、お柳彈正の顏をぢつと見て、

お柳　もし、道知らずとは誰がこと、これ我夫、えゝお前はなあ。（ト思入、篠笛入りの合方になり、）昔が今に到るまで反逆謀叛の榮えたる例少なき事ながら、夫へ附くが女の道、惡と知りつゝ隨うて當家へ入り込み其の日より、操を捨てゝ心をゆるさせ、手引きせよとのお前の言葉、肌身は汚せど情なや寬仁大度の我君へあてる刄があるものぞ、折を見合せ異見なし聞入れなくば自害して死ぬる覺悟で期を延し、今日思はずも此身の素性長谷部が胤と聞くからは、殿はやつぱりお主筋、夫の爲めとは言ひながら、心にもなき褄重ね、比翼の床は劍の山、粧ひに向う姿見へ心の鬼の淨玻璃の鏡にかゝる罪科は、我身一つに報い來て、忠と操の二道に、殿に代つて此の最期、不便と思ひたまはらば、何卒大望思ひ止まり、お心改めこれ我夫、善心になつて下さりませいなあ。

ト思入にて言ふ。

彈正　やあ、小しやくな汝が諫言立て、一旦思ひ立ちたる大望今更思ひ止まるべきか、馬鹿なことを。よし／＼此の上は奥へ踏込み、大領が素頭落して日頃の本望。（ト行かうとするを留めて、）

お柳　すりや、どのやうに言うても、思ひ止りはござりませぬか。

彈正　繰言いふな、聞く耳ないわ。（ト振り切るを又とめて、）

お柳　さう聞いては猶の事、息ある内は放さぬ／＼。

彈正　やあ、妨げひろがば、大望の血祭り、覺悟なせ。

お柳　そりや又あんまり。

彈正　えい。

ト　ぬき打ちにお柳の首を打落す。此の時上下より、花四天の捕手、六人槍を持ち、ばら／＼と出て、彈正を取巻き、

捕手　動くな。

彈正　こりや、うぬ等はなんとする。

捕手　やあ館を覗ふ大悪人、さあ尋常に。

六人　覺悟なせ。

彈正　何を小しやくな。

ト鳴物になり、ちよつと立廻つて、此の道具廻る。

（奥庭の場）――本舞臺三間後ろ黒幕、向う一面の山吹を結びし柴垣、よき所に井筒、人の出はひり、所々に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、總て奥庭の模樣。靜かなる寄太鼓にて道具納まる。とドン〳〵ばた〳〵にて、花道より以前の曾平太、勇藏肌脱ぎ股立にて切結びながら出來り、花道にてちよつと立廻り、本舞臺へ來り、

勇藏　叛逆人の彈正に荷擔なしたる柏木曾平太、命を貰つた、覺悟なせ。

曾平　えゝ、しやらつくせえ覺悟呼はり、望月殿の大望が露顯なしたる上からは、どうで取らるゝ我命ならば手柄に取つて見よ。

勇藏　おんでもないこと。

曾平　何を小しやくな。

ト ドン〳〵、大小の鳴物にて、兩人立廻りよろしくあつて、又切結びながら上手へはひる。本釣鐘、凄き合方になり、井筒の内より彈正好みの拵へにてぬッと出る。此時下手柴垣の蔭より捕手一人窺ふ、

彈正きつと見得、捕手つか〳〵と來て、

捕手　彈正覺悟。

ト槍を突きかける、彈正これを捉へ井筒より出て突放す。捕手たぢ〳〵となり、こゝへ上手より又一人出て、うぬと槍を突きかける。ちよつと立廻りドロ〳〵になり、日覆より七星顯はれる、これを見て、

彈正　はて、怪しやなあ。

ト小太鼓の樂になり、一人をふまへ一人を槍にて引附け、きつと見得。

頃も彌生の中空に、祥星月曜の光を顯し、鬼宿妖星の影を奪ふは、味方のものに變あつて、我大望の挫けるしるしか、されども未だけいゝ星の光晃々と盛んなるは、我武運の盡きざる吉瑞、何にもせよ、凶事か吉事か、奇異なる此の場の振舞ぢやなあ。

トドロ〳〵にて、星かくれる。此内立廻りよろしくあつて、投げのけ、

いで此の上は死物狂ひ、これより奥殿へ切入つて、大領が首ひッさげくれん。

捕手　彈正やらぬ。（ト捕手六人槍にて取卷く。）

彈正　何を小しやくな。

ト誂への鳴物になり、六人を相手に井筒を遣ひ、花々しき立廻りよろしくあつて、トゞ上下へ切倒

し、彈正井筒へ踏みかけ、刀の血を拭ひ、ホツと思入。此時井筒の内より槍を突出す、彈正身をかはし、槍を捉へ引上げる。内より以前の數馬、袴股立、肌ぬぎ、襷がけ、凛々しき拵へにて出來り、兩人ちよつと立廻つて、

數馬　叛逆人の望月彈正、梟木にかける汝が首は、かくいふ數馬が受取るぞ。

彈正　なま若輩な身を以て、小しやくな事を。

ト大小早き合方にて、槍と刀にて烈しき立廻り、よき見得にて、柴垣を其まゝにして、兩人を下手へぶん廻す、是にて上手より岩藤、蛇の目傘を擔ぎ、尾上短刀をさし附けゐる見得にて廻り來り、よろしく留り、ドロ〳〵、六段の合方にて、ちよつと立廻り、尾上を引附け、

岩藤　生き變り死に變り、恨みを晴らさんと、思ふに邪魔な下司女め、冥土へ連れ行く、觀念しや。

尾上　飽く迄凝つたる局岩藤、惡念發起し、成佛あれ。

岩藤　いゝや浮かばぬ、取殺さいでおかうか。

尾上　成佛得脫。

ト兩人立廻りあつて、トヾばた〳〵になり、上手より以前の犬淸、勇藏、三方へ厨子をのせたるを持ち出來り、

犬清　又もや局が死靈の祟り、尾上に仇なす此の有樣、障碍を拂ふは鬼子母神。

ト尊像をさしつける、是にてドロ／＼になり、

岩藤　えゝ口惜しや恨めしや、多賀の一家の奴原を、取殺さんと思ひしに、此の尊像の奇特にて、近寄る事の叶はぬか、えゝ殘念やなあ。

犬清　怨敵退散。

ト大ドロ／＼になり、一面に黑幕を振落す。これと一時に岩藤の五體骸骨となる。猶も犬清尊像をさしつける。これにて大ドロ／＼、骸骨ばら／＼に碎けて落ちる。黑幕を切つて落し、兩窓を明ける。

實に恐ろしき局の姿、忽ち消えて屍となるは、

尾上　これも正しく、此の尊像の奇特にて、

犬清　中有に迷ふ魂魄の、

重藏　一念此土を立去るとは、

犬清　希代な事を、

皆々　見るものだやなあ。

ト此時正面の淺黃幕を切つて落す。

（奥庭別の場）――本舞臺一面奥庭、打拔きの遠見、殘らず灯入り、日覆より櫻の釣枝二段におろし爰に彈正以前の裝にて拔身にてなり、大領、壺折衣裳、下手に數馬詰寄り、女形皆々同じく長刀をかい込み、捕手大勢槍にて取卷きゐる、此の見得遠寄せにて、皆々前へ出る。と大小入りの合方になり、

大領　いかに彈正、過ぎつる春鷹野の折柄、外れ鷹の跡を慕ひ、汝が讀誦の草庵にて我目にかゝりし怪しの位牌、賤にあらぬ文字の院號、正しく先年亡びたる義經が身寄りならんと推量なし、

犬清　汝等二人が手立にのりし體にもてなし、館へ招き立身出世。

尾上　妻のお柳が色香に迷ひ、婬酒に亂るゝ御身持に、俗性見出す君の御明智。

數馬　まツた汝へ荷擔の者は、先非を悔いて殘らず降參。

勇藏　かく顯れし上からは、

大領　最早脱れぬ望月彈正。

犬清　俗姓明かして、

皆々　繩にかゝれ。

彈正　やあ小ざかしき大領、あざとき手立に年月の、大望破れやみ〳〵と網裡の魚、えゝ口惜しやなあさりながら今我を打取りなば、多賀家の重寶金鷄の、香爐は手に入らぬぞ。

大領　おろかや彈正、其の香爐は既に手に入り、所持なしをるわ。
彈正　なんと。
大領　やあ〳〵主稅、早來れ。
主稅　畏つてござりまする。（ト下手より主稅、上下大小にて出來る。）
彈正　やゝ、扨は汝も裏返つたか。
主稅　おゝ深手を負ひし父一角、所詮存命叶はぬ故、我手に掛けて香爐を受取り、首尾よく上へ差し上げし、其功によつて惡事は御免。
數馬　此上は一本立の望月彈正、俗姓あかして、
皆々　繩にかゝれ。
彈正　小癪なる其の一言、うぬ等如きに易々と、名乘る名前は持たざるわ。
大領　逹てあらがふ上からは、英雄院殿の此の位牌、今目前で破却なさうか。（ト位牌を出す。）
彈正　さ、それは。
大淸　俗姓名乘るか。
彈正　さあ、それは。

皆々　さあ〳〵〳〵。
大領　疾と俗姓。
皆々　名乘つた〳〵。
彈正　えゝ殘念や口惜しや、計る〳〵と思ひしに裏をかゝれし我が無念、今ぞ名乘るぞよッく聞け、先年奥州高館にて無念の最期遂げられし、義經公の忘れがたみを守り育て、旗上げなさん我こそは黄金花咲く陸奥に鬼神なりと呼ばれたる、泉の小次郎親衡、間近く寄つて、面相拜み奉れえゝ。
トきつといふ。
皆々　扨こそな。
彈正　もう此上は破れかぶれ、片ッ端から死人の山だ。覺悟しろ。
皆々　何を小しやくな。
大領　やれ待て者共、今打ち取るは易けれども、此の場は一旦見のがし得させん。
彈正　假令此場は別るゝとも、思ひ立つたる多年の大望、又旗上げなすそれまでは、うぬ等が首はうぬらに預けた。
皆々　先づそれまでは。

彈正　かたゝ、

皆々　さらば〳〵

ト彈正眞中にきつと見得、大領、尾上、犬清、數馬其他のこらず左右より詰めより、捕手大勢前へ棹に列び、引張りの見得、片シヤギリ遠寄せにてよろしく、

幕

骨寄せの岩藤（終り）

上總綿小紋單地

阿須波の神に小柴さすとも妹は返さじ宗次郎お隅が戀に仇と鳴子の引綱へ甚九郎と岩崎が脅しの詞も小島の罪科次郎兵衛が牢舍の苦患に身を枠らんと木鼠忠次先非を悔む歎願も義理と掟に萩原主水楫取り兼し九左衛門貞婦お賤が主思ひ夫待兼ね磯際に今ぞ遠流の出船へ比類なき忠義市兵衛が總る友綱押切つて荒磯島の物語俊寛僧都も斯やらんと思ひ寢の夢に蟻王が形見の袖に涙の梅雨夫の五元集の晋子が吟泣かざるまい虎が雨出所をたづね大磯に東金茂右衛門筑波屋のむらさきが軒の燈籠にいきぢの達入しがなき貧家の飯炊は雀の歌の忠孝にまさる夫婦がうき年月にやうやく遂げし德入の病苦と主の歸國をば梵字ケ瀧の荒行明王の利益のゆるしぶみは姉ケ崎の市兵衛がいさほし國もゆたか國もゆたかの實米

棄穗米豐作躍濯

「上總市兵衞」は慶應元年八月、作者五十歳の時、中村座に於て稿下された。「起きて聞け山ほとゝぎす市兵衞記」といふ其角の句もある上總市兵衞を書いたもの。默阿彌とは近しい關係のあつた津藤が千葉の在寒川に謫居中、土地の人々から上總市兵衞の事を聞き、それを綴つて「市兵衞記」なる數葉の隨筆に物して作者の許へ送り、舞臺に掛けるには是非小團次に演ぜしめたいと申し越した。卽ちそれを骨子として構案せられたものである。全篇色彩に乏しい憾みはあるが、哀切な人情味を描いた、小團次中心の世話物として世に聞えてゐる。嘗て坪内逍遙先生、饗庭篁村翁等の需によりて「本讀み」をした時に、この作の五幕目の世話場を讀んだといふことが傳へられてゐる。

書卸しの時の役割は市川小團次（姉ケ崎百姓市兵衞、俊寬僧都）、岩井粂若（粂太夫、次郎兵衞悴千之助）、河原崎權十郎（萩原主水、木鼠忠次）、市川左團次（黑谷蟻王丸、東金茂右衞門）、坂東龜藏（小島次郎兵衞、隱居德入）、市川米十郎（百姓九左衞門、市兵衞母おなぎ）、尾上榮三郎（九左衞門娘おすみ、市兵衞女房おしづ）、松本錦升（百姓宗次郎）、中山現十郎（家主德右衞門、岩崎運藏）等であつた。

口繪にした着色木版畫は、大蘇芳年筆の錦繪であり、挿繪にしたのは、二世國貞筆の錦繪である。

大正十五年五月　　　　編者誌す



上總綿小紋單地（上總市兵衛――七幕）

序幕

市原明神の場
大須林猪小屋の場

【役名――百姓九左衛門、宗兵衛悴宗次郎、岩崎運藏、村長甚九郎、藪際の虎藏、百姓米作、同杢兵衛、同畔六、同稲葉、同五郎作、同與次平。宗兵衛後家お澤、在所娘お千代、同お留、九左衛門娘お隅等。】

（市原明神の場）――本舞臺三間の間上下石垣、此上へ石の鳥居、玉垣、左右に石燈籠、眞中奥深に張物、赤塗りの本社、上下杉の立木、是れへ幟大分建てある、諸所に紅葉の立木、同じく釣枝、總て總州市原明神鳥居先の體、爰に畔六、稲藏、五郎作、與次平百姓のこしらへにて、莚を敷き竹の皮包み、徳利など並べ、酒盛りをして居る。此の仕組よろしく、大拍子にて幕明く。

稲藏　これ〳〵五郎作、ちつと杯を廻さねえか。

五郎　せはしない手合だ、今畔六の所から來たばかりだ、おれが貴様にさゝうといつても、お手許拜見

とか何とか、言はにやあならねえ譯だ。

與次　これ〳〵杯のまた揉めか、けふは目出度い鎭守さまのお祭り日ぢや、誰の彼れのと言はず、思ひれ呑んだがよい。

五郎　さうぢや〳〵、來る年も〳〵豐年が續いて、今年なんぞは取分けて田地も畑も大出來ぢや、所で鎭守さまの神主どのが張込んで二十五座を上げるのぢや、こんな目出度いことはないではあるまいかえ。

稻藏　さうとも〳〵何も爭ひといふではない、こりや酒呑みの口説も時の興といふものぢや、なあ五郎作よ。

五郎　さうぢや〳〵、何の酒の二杯や三杯、爭ひ事をするやうな男ではないわえ。

與次　これさ〳〵、分つたよ〳〵。そりやあ貴様が言はいでも、みんなが知つて居ることだ。

五郎　それだによつて、待て酒ぐらゐに、びり〳〵する男ぢやねえや。

稻藏　まあ〳〵いゝわ、又晩には庄屋どので、お振舞ぢや。

畔六　今夜は村の若い衆が、藝盡しをやらかすのだ。

五郎　藝事なら何でもござれだ。

稻藏　まあ〳〵いゝわ〳〵、此の茶碗でぐる〳〵廻しておつもりぢや、さあ〳〵ついだり〳〵。

ト四人捨ぜりふにて酒盛りをして居る、右の鳴物にて上手より杢兵衞、傳十百姓のこしらへにて出來る。四人見て、

五郎　イヨウ杢兵衞どのに、傳十どの、どこへござつたのぢや。

稻藏　鎭守さまへ、參詣にござつたのか、まあ〳〵一つ。

四人　やらつしやい〳〵。

杢兵　いや〳〵、まだ用を抱へて居るゆゑ。落着いては居られぬ、又晩に庄屋どので逢ひませう。

五郎　はあ、用といふのは、何ぞお觸でもござるのか。

傳十　其用といふのは、斯ういふ譯だ、今名主どのゝ所へ杢兵衞と一緒に呼ばれたが、又阿納山から猪が出て折角實つた田や畑を荒すによつて、此間から猪小屋は所々へ立てたが、是れからは村中の者が一晩替りに番をするぢや、皆の衆の所へも、順々に番が廻つて行くぢや。

杢兵　何でも猪が出て來たら、二ツ玉でも籠めて、鐵砲をどん〳〵放すのぢや。

五郎　これ〳〵杢兵衞どの、鐵砲を放すのなら、杢兵衞どのが一番ぢや。

杢兵　何でおれが、鐵砲が一番ぢや。

五郎　それ、去年もお地頭へ出た時に、鎌倉の三日月長屋で一貫二百の鐵砲を放したではないか。
杢兵　何を言はつしやる、
皆々　はゝゝゝ。
與次　それはさうと、順々わし等が所へも、役が廻るのぢやな。
畔六　番に當ると一晩中の夜業は休みぢや、何で損をするか知れぬものぢや。
稻藏　さうして今夜は、誰が番に當つたのぢや。
傳十　さうさ、今夜は誰であつたなア杢兵衞。
杢兵　今夜の番は宗兵衞後家の息子どの、宗次郎が番に當つたのぢや。
傳十　さうだ〳〵、宗次郎であつた。
稻藏　これ傳十どの、あの宗次郎はうまい事をして居るではないか。
五郎　さうぢや〳〵、九左衞門どんのお孃のお隅女郎と、念頃して居るではないか。
杢兵　おゝ、そんな話しも聞いて居たわえ、然しおら達と違つて、百姓にはちつと男が好過ぎるわえ。
傳十　所へお隅女郎が、打込んだと見えるわえ。
五郎　何ぼ宗次郎がいゝ男でも、おれにはかなふまい。

稻藏 えゝ、われが色事の自慢か。

五郎 又口を出しやあがるか。

四人 はゝゝゝゝ。

杢兵 これ〱皆の衆や、おどけを退けて聞かつしやれ、脇村と違つて此姉ヶ崎村は、名主どのゝ次郎兵衞さまが、慈悲深いお人ぢや、番に當つて猪小屋へ出るものに、辨當を炊いてくれさつしやるわ。あのやうな名主どのは、此の近郷にはあるまい。

傳十 さうとも〱、又目の寄る所へ玉とやら、あそこに長く奉公して居る市兵衞、あの位な正直者は又とはあるまいな。

五郎 さうぢや〱、次郎兵衞どのも辛抱を見屆けたゆゑ、今では新田の小屋を貰うて別宅ぢや、是れが正直の頭に神宿るといふのぢや。

杢兵 さうぢや、別に家を貰つても、次郎兵衞どのゝ所へ毎日々々農業の間には、機嫌を聞きに行くとの事、あれがほんの佛といふのぢや。

傳十 あの男ばかりぢやない、女房のお賤がいゝ氣立てゞはないか、市兵衞のお袋を孝行にして、何を言つても詞を返した事がない、今時の女には鐵の草鞋で尋ねても、今一人とはあるまいわえ。

杢兵　さうとも〳〵、何でも此村では次郎兵衞どのと、あの市兵衞が一村の心棒ぢや、又それに引替へて御領主さまの御陣代、萩原主水さまは理非の分つたよいお方ぢやが、相役の岩崎運藏、あのくらゐ底意地惡い、慾張つた人もないものぢや。

五郎　いや、慾張りとも〳〵、あれがほんの强慾者といふのぢや、おまけに皮肉で色氣があつて、取り所のない奴だ。

稻藏　それに又同氣相求むるとやらで、こちの村の組頭甚九郎と運藏どのとは、仲がよいぢやないか。

杢兵　あの男も性惡ぢやによつて、陣代へごまを摺つて、名主にでもなる氣であらう。

傳十　そんな事のないやうに、皆の衆も惡魔除けの御祈禱でも賴むがよいわえ。

ト此うち五郎作、稻藏向うを見て、

五郎　これ〳〵杢兵衞どの、噂をすれば影とやらで、向うから運藏どのが來るぞや〳〵。

稻藏　おゝ、甚九郎も一緒に見えるわ。

杢兵　けふは大方話しのあつた、田地の檢地を打つとのこと。

傳十　一尺でも除地があるとやかましく言つて、運上を取りあげるといふ事ぢや。

五郎　いやはや、惡い奴が出て來るものぢや。

與次　あんな奴こそ、猪にでも喰してやりたいものぢや。

杢兵　あれ〳〵こつちへ出て來るわ。噂が聞えると、捩り込まれる、靜かに〳〵。

ト杢兵衛皆々を制し、やはり在郷唄の合方に大拍子を冠せ、花道より運藏、野袴ぶつさき、大小、此跡より甚九郎羽織ふん込み、此跡へ若い衆中間竹の尺杖をかつぎ出て、直に舞臺へ來る、百姓みなみな平伏する、運藏床几へかけ思入あつて、

運藏　やい〳〵百姓ども、今日は田畑に限らず、横領のある地へは、棹を入れて改める。これ〳〵それに居る杢兵衛、是れへ出ろ。

杢兵　へい〳〵。（ト前と出る。）

運藏　只今われが田地を相改めしに、書上げには一反と二合五勺とあれど、棹を入れて改めると、三尺程の除地があるわえ、當年より三尺だけの年貢を増し滯りなく相納めよ、躊躇あると其分には許さぬぞ。やい〳〵何を申す。親代々より三尺の横領があると申すか、親の代と申せば永々の間であらう。年數を積つて、是れまでの横領を一度に納めろ。

杢兵　へい〳〵、恐入りましてござりまするが、少々除地はござりまするが、承はれば私の親の代からお目こぼしでござりまするゆゑ、其儀はどうぞ御勘辨の程を。

甚九　えゝ何をぐづ／＼申すのだ、次に居るは傳十どのか。

傳十　へい、左樣にござりまする。

甚九　跡の手合も、皆是れへ出さつしやれ。

四人　へい／＼。（ト皆々よろしく居並ぶ。）

甚九　これ傳十どん、こなたの田地も二尺餘の除地がある、それだけの御年貢の增を差出さねば相成らぬ。外々の衆も是れから御陣代さまが御檢分をなさるから、粗相があつては相成らぬ、此度は運藏さまがお廻りゆゑ、なか／＼お慈悲な事で、御無理なお取計らひはちつともない。お上の通りもよく又皆の衆の爲にもなるやうにと、此の甚九郎が心配といふものは、一通りではない。いやまつたく組頭などを勤めるは、なか／＼容易な事では勤まらぬて。

運藏　やい／＼百姓ども、只今申し附けた通り、假令五分でも一寸でも除地のある所へは棹を入れて相糺す、僞りを申しても此通りの手で改むれば猶豫はないぞ、きつと申し渡したぞ。

四人　へい／＼、畏まりましてござりまする。（ト甚九郎思入あつて、）

甚九　へい／＼、運藏さま、お役目とは申しながら、嘸はや御心勞の儀とお察し申し上げまする。

運藏　いや／＼、役目なれば左のみとも思はぬが、是れも上への御奉公と申すものだ。

甚九　御意の通りにござりまする、段々と是れからは山手の方へ御案内をいたしまするが定めてお疲れでござりませう、暫時是れにて御休息がよろしうござりませう。これ〳〵皆の衆、お煙草の火なと差上げぬか、心の附かぬ人達ぢや。それ〳〵そこに火があるではないか。（ト甚九郎あちこちと追從を言ひながら火入を持ち來り、）へい〳〵、途中でござりまするゆゑ、お茶の支度も調ひませぬ、お煙草なと上りませ。（ト運藏の前へ火入を出す。）

運藏　いや〳〵、構やるな〳〵。

甚九　これ〳〵皆の衆、どうしたものだ、そこらの塵でも拂はぬか、えゝ氣の附かぬ。

ト追從をいふ。百姓皆々只うろ〳〵して莚を片附ける、合方になり、花道より虎藏褞袍に尺帶藁草履、田舍の道樂者のこしらへにて、女持ちの筒ざし煙草入を持ち出來る。跡よりお澤木綿やつし、丸髷、少し更けたる在所女房のなりにて、跡より呼びかけながら出來る。

お澤　これ〳〵虎藏どの、わしが煙草入をどこまで持つて行かしやる、こつちへ返して下され、てんがうもよい加減にしたがよいわいなあ。

虎藏　おい〳〵、何もそんなに愛想のねえことを言ふにやあ及ばねえ、お前の煙草入をかりてお前の煙草で一服呑みてえから、持つて來たのだ。おめえだといつて老朽ちたといふ體ではなし、後家ッ

ぶりがいゝから、一人で寐かすは惜しいものだ、うんと言つて、おれが女房になる氣はねえか。

お澤　えゝも、又しても其樣なてんがうばつかり、宗次郎といふ成人した悴のあるわたし、人さまの御厄介にならずとも、悴が大事にしてくれる程に、お前の世話にはならぬわいなあ。

虎藏　さうでもあらうが、餓鬼に苦勞をさせるのが、本望でもあるめえぢやあねえか。さうして宗次郎の親とは見えねえ、まるで兄弟のやうだぜ、おめえも若い時の子持だと見えやすね。（トしなだれる）

お澤　えゝも、其樣なことはどうでもよい程に、早う煙草入を返して下さんせ。（ト取りにかゝる。）

虎藏　どつこい、是れは遣られねえ。

お澤　どうぞ返して下さんせ。

虎藏　少しの間借りたい〳〵。

ト兩人煙草入を引合つて、爭ひながら舞臺へ來り、奪ひ合ふはずみ、煙草入飛んで運藏の天窓へ當る、運藏取上げきつとなり、

運藏　やい〳〵、おのれ等は何者だ、陣代たる某の天窓へ此の煙草入を打附けて、相濟まうと思ふか、おのれ憎い奴め。

お澤　どうぞ御免なされて下さりませ、其の煙草入は私のでござりまするが、あれに居りまする虎藏ど

のが無理に貸せと申しまするゆゑ、さうはならぬと爭ふはずみ手が外れて此の粗相、お許しなされて下さりませ。
運藏　いゝや料簡相成らぬ、斯く投げ打ちをいたすからは、身共に遺恨があつてならん。何の意趣で打ち附けた。
お澤　さあ、あの、それは。
運藏　して、われは何れの者だ、名所を吐かし居らう。
甚九　いや運藏さま、あの者はやはり當村の百姓、昨年死去いたしました宗兵衞が後家でござりまする。
お澤　もし〳〵甚九郎さま、只今のは私の粗相ではござりませぬ、虎藏どのゝ粗相でござります。
虎藏　これさ〳〵、おれが何を知るものか。おめえが爰へ投げたのだ、おらア知らねえ〳〵。
お澤　いや〳〵、お前が投げたのぢや。
虎藏　何でおれが知るものだ。
お澤　いや〳〵、そなたぢや〳〵。（ト兩人爭ふを、運藏きつとなり、）
運藏　やい〳〵〳〵、かしましい控へ居らう、これ女承はれ、假令どちらの粗相にもせよ、其の煙草入の主はわれではないか。左すれば其方が仕業に相違はないわえ。

お澤　それはあなた御無體と申すもの。

運藏　默れ女郎め、無體とは何が無體だ、武士たる者の面體へ投げ打ちをいたしおいて、無體とは憎さ一言、女子にもせよ容赦はならぬ、以後の見せしめ。

杢兵　お腹立は御尤もではござりまするが、

傳十　かよわい女でござりますれば、

杢兵　お慈悲をもちまして、御料簡の程、へい〳〵〳〵。

皆々　お願ひ申し上げまする。

運藏　いゝや料簡相成らぬ、武士たる者の刀の手前、眞ッ二つにいたさねば、此運藏の腹が癒ぬわ、きり〳〵それへ直り居らう。

ト刀の柄へ手を掛ける、百姓皆々これを留める。早めたる合方、ばた〳〵になり、花道より九左衛門更けたるこしらへ、羽織着流しにて走り出來り、

九左　先々お待ちなされて下さりませ、暫く〳〵〳〵。（ト言ひながら舞臺へ來り、お澤を圍ひ、下手に住ひ）へい〳〵、何事かは存じませぬが、此女は私が預るべの者、如何なる粗相がござりましたか、其儀は幾重にもお詫事を申し上げまする、只管に御勘辨の程、お願ひ申し上げまする。

運藏　えゝ、入らざる老耄の支へ立て、して、其方は何者だ。
九左　へい、私は當村に居りまする、百姓九左衞門と申す者でござりまする。
杢兵　おゝ、九左衞門どの、よう來て下すつた。
傳十　宗兵衞後家の詫事を、
五郎　早うしてやつて、
四人　下されや。
九左　おゝ皆の衆も共々に、口を添へて下され、頼みますぞえ。
運藏　其方詫事いたすと申すが、事の仔細を存じて居るか。
九左　さあ樣子は何も存じませぬが。（ト此時甚九郎前へ出て、）
甚九　これ〳〵九左衞門どの、何も樣子を知らぬものが、口出しするは無駄なこと、樣子を知つては一口でも口が利かれるものではないぞや。
九左　おゝ誰かと思うたら組頭の甚九郎どの、それはもうあのお澤どのが惡からうが、そこが取るにも足らぬ女の事、お前ぢやとて同村の者、小前のものを助けて遣るが組頭の役ぢやないか、どうぞ共々詫事を。

甚九　そなたのやうに言はつしやると、わしが行居かぬやうに聞えるが、事の始末が悪いからだ。

運藏　これ〳〵甚九郎、其方は控へて居れ。（ト思入あつて控へる。）やい老耄、身に慮外せし其の女、何ゆゑ支へて邪魔いたす。（ト是れにて九左衞門ぢつと思入あつて、合方になり、）

九左　へい、あなたさまへ對しましてお邪魔をいたす心では、更々以てござりませねど、是れなる女の夫と申しまするは、去年此世を去りまして、只今では後家の身の上、一人の悴が痩腕で、鋤鍬持つて今日を送りまする小前の百姓、もし此者に凶事でもあれば跡に殘つた一人の悴が、どのやうに悲しみませう、愛の所を思召し、お助けなされて下さるやう、お願ひ申し上げまする。

ト此内虎藏出て、

虎藏　おい〳〵九左衞門どん、おつウ女の肩を持つが、はゝア亭主のねえのを附込んで、此の若後家をせしめて居るな。へい〳〵、申し上げまする、此の親仁と此の女は念頃いたして居りまする。

ト是れにて九左衞門むつとせし思入にて、

九左　えゝ、何を言ひ居るのぢや、おのれが心に引きくらべ、人に難癖を附けようとて、貴樣の知つた事ではないわえ。

虎藏　いゝや知つて居るわえ、念頃でもせぬものが、入らざる口出し、何でするものだ。

ト九左衛門をきめつける、此の時杢兵衛等へかれし思入にて、

杢兵　え〻虎藏の惡者め、おのれが惡いによつて、こんな事が出來たのぢや。

傳十　さうぢや〳〵、村を荒らす惡者め。

五郎　おのれにはみんなが酷い目に逢うて居るわえ。

稻藏　構ふことはない、簀卷にしろ〳〵。

杢兵　さうだ〳〵、やらかせ〳〵。（ト捨ぜりふにて虎藏を押へつける。）

虎藏　え〻何をしやあがる、簀卷にされてたまるものか。

ト振拂ふを皆々寄つて引倒す、此中へ甚九郎はひつて留めるを、構はず縫包にて虎藏を打ち据ゑる、是れにて叶はず下手へ逃げてはひる。是れを中通りの百姓四人追ひ掛け下手へはひる。

お澤　もし九左衛門どの、こりやアどうしたらよからうぞいなあ。

運藏　もう此上は、身が手をおろして。（ト運藏拔きかける。）

九左　どうぞ、御料簡なされて。

甚九　もし〳〵運藏さま、もう許して遣はされませ。

運藏　何でそちまでが、詫びをいたすのだ。（ト又立ち掛る、甚九郎袖を控へ、ちよつと思入あつて小指を出して、）

甚九　な、それ、お許しなされたが、よからうやうに存じまする。（ト運藏存込んで、）

運藏　ムウ、外の奴が挨拶なら料簡ならぬ所なれど、九左衛門其方が挨拶ゆゑ、今日の所は差許すぞ。

九左　え、すりや御料簡下さりまするか。

運藏　如何にも、そちに免じて料簡いたすわ。

九左　それははや有難うございまする。これ〳〵お澤どの、お許しなさるとおつしやるから、又もや御意の替らぬうち、早う行かつしやれ〳〵。

お澤　それはまあ、有難うございまする。どなたさまも、御免なされてくだされませ。

九左　さゝゝ長居をすると爲にならぬ、早う〳〵。（トお澤をせり立てる、お澤は思入あつて合方にて下手へはひる。）へい〳〵、誠に有難い仕合せでございまする。（ト運藏思入あつて、）

運藏　こりや宅内、其方は名主方へ參り、相待ち居れ。

中間　お先きへ參るのでございまするか。

運藏　身共はちと用事もあれば、先きへ參れ。

中間　はッ、畏つてございまする。（ト中間上手へはひる。）

九左　失禮ながら私はお暇を申し上げまする、御免なされて下さりませ。

ト行きにかゝろを、甚九郎思入あつて、

甚九　あゝこれ〳〵九左衛門どの、ちよつと待つて下され。

九左　まだ、御用があるかの。

甚九　お前もよい年をして、大概推量したがよい、あの後家が急難をそなたの詫で其儘に許して遣つたも、旦那さまにちつと御料簡のあることだ。なあ申し、運藏さま。

運藏　如何にも九左衛門とやら、ちと其方に無心がある、何と聞いてはくれまいか。

九左　何とおつしやりまする、御大身のあなたさまが、百姓風情の私に。

運藏　頼みといふは外でもない、其方の娘お隅とやらを、身が愛妾に申し受けたい、何と身共にくれまいか。

九左　えゝ、すりやあの、娘を。

運藏　面目ないが此の運藏、是非とも所望いたしたい。

甚九　九左衛門どの、そなたは仕合せものだ、御陣代さまを聟に取れば、此村は申すに及ばず、此近郷近村で天窓の上るものは一人もない、そなたの心たゞ一つで、うんとさへ得心すれば直に願つて名主さまだ、女の子は持ちたいものだ、あゝ羨しい事だなあ。

ト此内九左衛門じゆつなき思入にて、

九左　いやも不束な私の娘を、御陣代さまが御所望なさらうとは、こりや願うてもないこと、一ッ返事で直さまに、差上げませうと申したけれど。

甚九　なに、差上げませうと申したけれど。

九左　へい、あれには定まりました、主がございます。

運藏　なに、主がある、主があるとはいづくの何者だ。（ト急きこんで言ふ。）

甚九　これさ〳〵九左衛門どの、與左衛門が悴と許嫁だと言はつしやるか、そりや何でもないことだ、御陣代の勢ひで權柄押しに變替させるわ。そんな事は心配には及ばぬが、そなたが得心すればよい事だ。

運藏　さうだ〳〵、甚九郎が申す通り、名主であらうが庄屋であらうが、此の運藏が勢ひを以て變替させるに、誰が點の打ち手があらう、其儀なれば安心いたして、娘を身共に遣はすがよいわさ。

九左　さあ其儀はそれでよいにいたせ、娘が耳へ入れませず、親甲斐にそんなら直に差上げませうと、お返事もなりませぬ、篤とあれにも話した上、否やの御返事申し上げまする。

甚九　これさ、物堅いも程がある、お隅どのだといつて、運藏さまが御所望だといつたらば、悦びこそ

すれ、否やはあるまいではないか。

九左　さうではあれど、一應話しを。

甚九　また此の緣談を變替すれば、御陣代のお詞一つで、こなたの田地の橫領も、な、これ、疫病神で何とやらいふ事があるぞや。

九左　へい、篤と娘に言ひ聞かせ、明朝までに御返事をば。

甚九　挨拶次第で田地のお祟り。

九左　それも承知でござりまする。

運藏　そんなら九左衞門。

九左　そんなら御陣代さま。

甚九　色よい返事を待つて居るぞや。

運藏　えゝ、無駄を言はずと身共と同道。

甚九　さゝ、お越しなされませ。(ト唄になり、鳥居の内へはひる。跡合方になり、九左衞門思入あつて)

九左　扨々とんだ難儀が出て來るものぢやわいなう。否ぢやといへば田地の檢地で、どんな目に逢はうも知れぬ、こりやまあどうか仕樣はない事か。(ト思入あつて)是れに附けてもお隅は、此頃の素

振りといひ、よう目を附けて見る所、お澤どのゝ悴宗次郎と何か譯のある樣子、此事でもあの甚九郎めが耳にでもはひつた日には、宗兵衞後家のお澤どのまでどのやうな目に逢はうも知れぬ。どうかぱつとせぬうちに、二人が仲をさきたいもの。あゝ是れを思へば譬の通り、子は三界の首枷ぢやなあ。

ト唄になり、思案をしながら上手へはひる。直に在鄕唄の大拍子を冠せ、花道よりお隅島田鬘振袖在所娘のこしらへにて、日傘をさし出來り、跡よりお留、お稻友達娘にて出で、

お留　もしお隅さん、其樣に急がずともよいわいなあ。

お隅　それぢやというて、明神さまの二十五座がお仕舞になるといかぬによつて、それで急いで行くのぢやわいなあ。

お稻　いえ／＼さうではござんせぬ、お隅さんは彼の御方に逢はうと思うて、それで急ぐのでござんすわいな。

お隅　あれ又そのやうな事を言うて、わたしや知らぬわいなあ。

お留　早う明神さまへお參りなして、よう拜んでござんせいなあ。

お隅　そりや何をえ。

お留　早う女夫になるやうに。

お隅　知らぬわいなあ。（ト右の鳴物、唄にて、本舞臺へ來る。）

お稲　もし、此まあ紅葉が、よう色附いたぢやござんせぬかいなあ。

お留　ほんに美しい色でござんすわいな。もし色といへばお隅さん、お前のさつきの話しは、ほんまでござんすかえ。

お隅　さあお前もお稲さんも同胞のやうにするによつて、何もかも隠しはせぬが、わたしやどのやうな事があらうとも、宗次郎さんは大事の殿御でござんすわいな。

お留　そんならお前に、よい物を上げようかえ。

お隅　何でござんす、早う見せて下さんせいなあ。

お留　さあ、是れぢやわいなあ。（トお留懐より手紙を出し見せる。）

お隅　お留さん、ほんまでござんすかえ。

お留　早う開いて見やしやんせ、中を見れば分るわいなあ、さつきわたしが川端の茶家まで買物に行つたらば、宗さんがわたしを呼んで、密々お前に渡してくれと、頼ましやんしたのでござんす。

お稲　ほんにお隅さんは、あやかりものでござんすわいな。（トお隅手紙を開き見て、）

お隅　ほんに、こりや宗さんの手でござんす。お留さん、本當に嬉しいわいなあ。
お留　何と書いてござんすえ。
お隅　あの今夜は、大須の猪小屋へ番に當つて行く程に、忍んで來いと知らせの手紙。
お稻　そんなら今宵はわたしらも、お前が家を出よいやうに。
お留　明神さまへお籠りに、行くというて誘ひに行くぞえ。
お隅　どうぞさうして下さんせ、もしお留さん、お稻さん、これでござんすわいなあ。

ト手を合せて拜む。

お留　えゝ何を言はしやんすやら、友達仲に何の禮を、それはさうとお隅さん、お前は隣り村の名主さまの所へ許嫁があるぢやないかえ。
お隅　さあ、それぢやによつて苦勞になつてならぬわいなあ、もしひよつと此事が、あちらの耳へはひつた時は、わたしばかりか宗次郎さんの難儀になること、どんな事があるとも必ず言うて下さんすなえ、是ればかりがお賴みでござんすわいなあ。
お稻　何でわたしが、お前の爲にならぬことを、人に言うてよいものかいなあ。
お留　案じることはない程に、晩にはたんと。

お隅　え。
お留　よい夢を、
お稲
お留　見やしやんせいなあ。
トお隅の背中を叩く、お隅恥かしき思入、此時ドロンと大拍子の頭を打込み、以前の運藏、甚九郎、虎藏出來る、お隅これを見て、
お隅　さ、早うお參り申さうわいなあ。（ト鳥居の内へ行きにかゝる、運藏外兩人思入あつて、）
運藏　こりや待て女。（ト是れにて三人氣味の惡き思入。）
お隅　はい、何ぞ御用で、
三人　ござりまするか。
運藏　いや外の者には用はない、九左衛門が娘隅、其方に用がある、二人の者は早く參れ。
虎藏　さあ二人のお娘、おめえ達には御用はないとおつしやるから、早く行くがいゝ。えゝ戀を知らねえ無粹な手合だ。
お留　はい〳〵參りまする。そんならお隅さん、先きへ行くぞえ。
お稲　お前も早うござんせいな。

甚九　えゝ、いらざる事を申さずとも、きり〳〵と行かぬかえ。（ト大きくいふ、是れにて兩人びつくりして）

お留
お稻　はい、參りますわいなあ。（トお隅に心を殘して上手へはひる。）

お隅　あ、わたしも一緒に行かうわいな。（ト行かんとするを、甚九郎引留める。）

甚九　これさお隅坊、何もびく〳〵する事はない、御陣代さまが御用があるとおつしやる、早うお側へ參るがよいぞ。いつ見てもあでやかなものだなあ。（ト振切り逃げんとするお隅の袖を運藏捉へ）

運藏　これお隅、さう行きたがるには及ばぬわ、まそつとこちらへ寄つたがよいわえ。（ト替つた合方になり。）これ甚九郎、身共はとんと女を口說くのは、大の不得手だ、其方そこでよいやうに、おれがせりふを言うてくりやれ。

甚九　へい〳〵、承知仕りました。私なども餘り手馴れた事はござりませぬが、御當人の口からは言ひにくいこともござりまする、そこが岡目八目で助言は出來るものでござりまする。これ、お隅女郎、あのやうなお氣の小さい運藏さまだ、そなたがうんと得心してあなたの御新造さまとなる時は、榮耀榮華は心の儘、是れがほんの玉の輿、もし又いやと言ふ時は九左衞門の身の上に拘はる、そこがお役柄の旦那さまゆゑ、年來田地の橫領を言ひ立てた日には、そちが親仁は盜人同然どんなお祟りがあらうも知れぬ、そこはそなたの心一つで、得心さへすればこなたの仕合せ、親

仁の出世、こりや胸へ手を當てとつくりと、思案をせずばなるまいぞや。

虎藏 さうだ〳〵、是れはいやとは言はれまい、名を取らうより徳の世の中、あんまり話しが旨過ぎるこんな旦那のお目に留るは、こんたもよつ程仕合せものだぜ。（ト是れにてお隅思入あつて、）

お隅 もう不束な私を、そのやうにおつしやつて下さりまするは、有難うござりまするが、又とゝさんにもとつくりと、相談をいたしました上御返事を。

甚九 これさ親仁もさつきそんな事、同じセリフはだれてしまふわな、相談も何もいるものか、おぬしさへうんとせえ言へば、直に話しが極ることだ。

お隅 それでも一應話しをせねば。

甚九 それぢやあこなたは、運藏さまを。

虎藏 いやだといふのか。

甚九 但しは好いたか。

虎藏 色よい返事か。

甚九 さあ、其の返事は。

お隅 わたしやあの、運藏さんは。

蓮藏　や。

お隅　いやだやわいなあ。

ト詰めかけるを、お隅振切つてついと上手へはひる。蓮藏始終見惚れて居る、お隅はひる時以前の戀文を落しはひる。

甚九　年が行かぬとは言ひながら、餘り慾を知らねえ女だわえ。（ト此時虎藏お隅の落したる文を取上げ、）

虎藏　もし、こんな手紙が落ちてございまするぜ。何だ、「お隅どのへ宗次郎より。」はゝあ、扨はきやつめは後家の悴と。（ト蓮藏心附き、）

蓮藏　なに、手紙が落ちてゐる、何と書いてある、早く讀んで見ろ〳〵。（ト急いで言ふ。）

虎藏　へい〳〵、只今讀みまする。何々、「一筆しめし參らせ候、此程は誠に〳〵首尾あしくゆる〳〵お話しも相成らず候所、結ぶの神のお引合せにや、今宵猪小屋の番に當り候まゝ、日暮を相圖に御忍びなされ候やうくれ〴〵相待ち居り候、積る話しはお目もじにて、山々いたすべく候、先はあら〳〵目出たくかしこ。」（ト是れを聞いて蓮藏むつとせし思入にて、）

蓮藏　これ甚九郎途方もないこと仕出し居つたわ。えゝ悔しいわえ、口惜しいわえ。よい〳〵此上は大貫山の猪小屋へ馳せ向ひ、戀の敵の宗次郎、かねて覺えの無敵流の腕前を以て、切り立て〳〵切

りまくり、花々しく勝負なし、名を天下に輝かさん、者共續け。

ト勢ひ込んで行きにかゝるを、虎藏甚九郎留めて、

虎藏　さゝ、お腹の立つは御尤も、御無理ではござりませぬが、そこがいつも言ふ通り木折りで行かぬが戀の道、せいては事を仕損じる、先々お氣長になされませい。

甚九　はて、又忽ちに靡かせる工夫はさま〴〵、まあ私にお任せなされませ、此の手紙を玉に遣ひ、此の返報は私がきつといたして見せまする。

運藏　身共が恥辱を雪いでくれるか。

虎藏　あなたの武士は立てまする。

運藏　きつとよいか、萬事其方に頼んだぞ。

甚九　もし運藏さま、二人が仲を引きさいて、お隅をお手に入れますれば、何の仔細はござりますまい。

運藏　さうさへなれば、言分ないわえ。

甚九　うまく遣つたら、しつかり規摸はござりませうね。

運藏　直さまそちは當所の名主。

虎藏　片棒かついだ私には。

運藏　そちへ褒美は元手を遣るわ。
虎藏　そんなら狐の元手をば。
甚九　貴樣が狐で、おれが名主だ。
運藏　娘をねらつたおれは獵人。
甚九　前祝ひに一拳こゝで、
運藏　遣つて見ようか。（ト三人三つ打をする、甚九郎虎藏は狐、運藏鐵砲を出し、兩人負けること。）
虎藏 甚九　南無三負けた。
運藏　負ける筈だ、身共は武士だ。
兩人　そりや又何で。
運藏　はて、けん道には。（ト床几へ掛けるを知らせ、）達して居るわえ。
ト兩人は天窓をかく、運藏扇遣ひをする。此模樣よろしく、大拍子にて道具廻る。
（大貧在田甫道の場）――本舞臺三間の間上下山の張物、眞中少し上寄りに一間の猪小屋、中足藁葺き、前へ菰を掛け出這入りあり、此上下薄の土手、上手に栂附き浪板、後一面に田畑在體の遠見、紅葉の

立木同じく釣枝、花道へも薄の土手板を出し、總て大須在田甫道の模樣、水の音にて道具納まる。と水の音打上げ、直に田舍めいたる雨吟になり、花道より宗次郎、着流し、おしよぼからげ、草履にて鐵砲をかつぎ、百姓のこしらへにて出來る、花道よき所へ留り、雨吟の合方、蟲笛をあしらひ思入あつて、

宗次　今夜は八月十二日、もう月は上つて居れば明るい筈ぢやが、曇つたせゐか霧が深うて向うが見通せぬ、然しまあ戀には心おく露の濡れる心を打明けて猪打役の番小屋へ、鹿の命手斯う／＼と文で知らせて遣つたれば、今宵は何かの。（ト一寸つまづき思入、）直に浮れてしまうたわえ。（ト又雨吟になり本舞臺へ來り、あちこち見廻して、）おゝもう爰が番小屋ぢや、うか／＼と歩いて來た、宵の内は猪も出ぬゆゑ、先づ一服しようわえ。（ト捨石へ腰を掛けて鐵砲を下に置き思入、）此鐵砲は邪魔なものぢや、猪を脅す爲ではあれど、玉をこめて打つのは御法度、然し小屋の側へでも若しひよつと來た時は、打殺さねばならぬゆゑ、玉も藥も持つては來たが、先づ今の内は片附けて。（ト鐵砲を小屋の內へ入れ、火繩を出して煙草を呑みながら向うへ思入あつて、）あれ程賴んで遣つたれば、文の屆かぬ事はあるまいが、もう見えさうなものぢやなあ。

トよろしく思入、又雨吟になり花道より以前のお隅、手拭を吹流しに冠り出來り、花道にて、

お隅　お稻さんやお留さんの働きで、家は首尾よう出たなれど、嘸まあ宗次郎さんが待つてゞあらうわいなあ。（トこれを宗次郎聞き附けて、）
宗次　暗うて姿は見えねども、そこへ來たのはお隅どのではないか。
お隅　宗次郎さんでござんすか。
宗次　さつきから待つて居たわいの。（ト又兩吟になり、お隅は舞臺へ行き、宗次郎も附際まで來てお隅の手を取り、猪小屋の緣へ腰をかけ、）これお隅どの、晝間の文は屆きましたかな。
お隅　あい、お稻さんがお前の文を屆けて下さんせ、今日は明神さまのお神樂ゆゑお參りに行く途中で、お前も知つてゞ居やしやんす、御陣代の運藏面がわたしを捉へていやらしい事ばかり、それにあの組頭の甚九郎までがともぐ\に、いやぢやと言へば、とゝさんの身の上ぢやの、何のかのと言うて、わたしや悔しうてならぬわいなあ。
宗次　ほんにまあ憎い奴ぢや、又あの甚九郎といふ奴が大抵な奴ぢやない、然し長いものには卷かれろとやら、よい加減にあしらうておいたがよいわいの。
お隅　それに附いて氣が揉めてならぬのは、其時わたしが逃げるはずみ、お前が書いてよこさんした、

文を落してしまうたわいなあ。

宗次　え、それはまあひよんな事をしやつた、誰ぞ悪い人に拾はれねばよいがなあ。

お隅　それぢやによつて、苦勞になつてならぬわいなあ、それに附けても宗次郎さん、今更言ふでもござんせぬが、お前も知つての通り許嫁のあるわたしの身の上、ひよつと二人の仲を知られた時には濟まぬ譯、わたしや最う思案を極めて來た程に、どうぞ今宵どこへなと連れて退いて下さんせいなあ。（ト思入。合方。）

宗次　成程お前なりわしなり、是れが知れゝば互ひの身の上、一緒に連立ち逃げた上いづくの浦でも二人して、末長く添ひたいけれど、お前もたつた一人の親御、わしとても年寄つた親を捨て立退けば、跡で二人の親々がどんな難儀にならうも知れぬ、まあ〳〵今宵は共々によう思案をした上で又分別もあらうわいの。

お隅　わたしやお前に添はれぬ時は、死ぬる覺悟でござんすわいなあ。

宗次　えゝも、わつけもない、大事の命を澤山さうに、死ぬるなどゝいふ事は、必ず言はぬものぢやわいの。

お隅　そんならお前は此末に、別れるやうな事があつたら、わたしを捨てる心でござんすか。

宗次　何のまあ、さういふ心はないけれど、死ぬのはいつでも死なれること、わしは死ぬといふ事は、いつたい蟲が好かぬわいの。

お隅　そりやお前水臭いといふもの、そんならわたし一人死んでも、お前は構はぬのでござんすかえ、そりや胴慾でござんすわいなあ。（ト泣き伏して、宗次郎に縋る、宗次郎も困りし思入にて、）

宗次　えゝも何を言やるのぢや、今のはそなたの氣を引いて見たのぢや、お前が死なばとも〴〵に、わしも死ないで何とせう、これお隅どの。（トお隅を抱きしめて、）そんな仲ではないわいの。

ト お隅も顔を上げ、

お隅　そのお詞は嬉しいけれど、つく〴〵思ひ廻すほど、どうやら今にも別るゝやうで。（トぢつと思入）

宗次　又そのやうな心細いこと。

お隅　是れが名殘りになるやうで。（ト宗次郎お隅に寄添ふ、此時お隅の簪ばつたり落ちて、差込み取れる事、）

三つ銀杏の差込みが。

宗次　どこぞへ行つたかや。

お隅　大事にかけた差込みが、取れるといふは、もしや是れぎり。

宗次　や。

お隅　あゝ、氣に掛る事ぢやなあ。（ト氣にかゝる思入れ）

宗次　何の其樣に案じること、其銀杏よりこちは又、離れぬ仲の心のたけを、今宵しつぽり。

ト お隅の手を取り、顏をぢつと見て、

お隈　宗次郎さん、嬉しいやうで。

宗次　いやぢやといふのか。

お隅　いゝえ、可愛いわいなあ。

ト兩人其儘二重へ上り、ひつたり寄添ふ、是れにて前の莚をおろす、合方浪の音になり、花道より以前のお澤、小田原提灯を提げ出來る、上手より以前の九左衞門出て、舞臺にて入れ違ひ互ひに見て、

お澤　もし、そこへお出でなさるは、九左衞門さまではござりませぬか。

九左　おゝ誰かと思うたら宗兵衞どのゝ後家御どの、さうして夜に入つてどこへ行かつしやる。

お澤　はい、今日ひよんな災難にて、既に憂き目にも逢ふ所を、お前さまの御親切で事無に宿へ歸りましたゆゑ、其お禮に只今お宅へ參る所でござりまする。

九左　えゝ物堅い、何の禮に及ぶこと、世話になるもならるゝも、互ひの事でござるわいの。いやはやあの陣代の運藏どのは、なか〳〵一通りなものではござらぬ、あゝいふ人に長く御陣代を勤めら

れては、小前の者は今日が暮されませぬ、あゝ困つた事ぢやなう。困つたといへばお澤どの、丁度よい所で逢うた、お前にちと相談せにやならぬ事があるわいの。

お澤　何事かは存じませぬが、わたしもあなたにお話しが。

九左　むゝ其話しも、わしがお前に相談も、大概同じ話しであらう、まあわしのを先きに聞いて下され（ト小田原を下に置き、兩人よろしく居並び、思入あつて合方になる。）そなたも薄々知つての通り、わしが娘のあのお隅は、隣村の名主與左衞門どのゝ悴とは小さい時からの許嫁、もう年頃にもなつたれば、遠からぬうち婚姻を取り結ばねばならぬ譯。ところで聞いて下され、搗てゝ加へて難儀といふは、さつきこなたが歸つた跡で、陣代の運藏どのが權柄押にお隅をば、是非とも女房に貰はにやならぬ、いやといへば田地の除地を改めると疫病神で敵とやら、其座は時の間に合せで言ひくろめては戻つたが、こなたも知つてござるか知らぬが、お前の息子の宗次郎どのと、どうやら味な仲の樣子、是れが世間へ知れた日には、こなたもわしも此村に居られぬやうな難儀にならう、わしも娘に異見をいうて別れさせる工夫をするゆゑ、こなたも内々宗次郎どのに異見を加へて下さりませ。（ト思入あつて言ふ、お澤もじゆつなき思入にて、）

お澤　いやもう。面目ない悴が不所存、わしも疾から二人の素振り心附いては居たれど、何ぞ慥な手證

を見たら、言はう〳〵と思うた所、とつくりあれにも異見を加へ、お隅どのと二人の仲はきつと
わたしが別れさせせます。
九左　おゝ、よう言うて下さつた、それでわしも少しは安堵、然し似合うた二人が年配、自由にならば
好いた同士、女夫にさせて遣りたいもの。
お澤　浮世の義理を捨てるなら、此世に苦勞はなけれども。
九左　捨てられぬも人間、是れも一つの役ぢやわいの。
お澤　子供がなくば泣く者のないと譬にいふ通り。
九左　こちらが思ふ半分も、我が子が思うてくれるなら。
お澤　こんな苦勞は、
兩人　あるまいわいなう。（ト兩人ぢつと思入、此時五ツの鐘鳴る、思入あつて）
九左　ありやもう初夜ぢや、夜更けぬうちにお澤どの。
お澤　いづれ明日、何かのお話し、
九左　ゆるりと相談いたしませう。
お澤　左樣なれば、九左衞門さま。

九左　氣を附けて行かつしやれ。

お澤　はい、有難うござりまする。

ト、やはり合方、水の音にて、上下へ別れてはひろ。又時の鐘兩吟になり、莚の蔭より宗次郎お隅しどけなきなりにて出で、よろしく思案の思入。

宗次　お二人さまの話しを聞けば、疾から譯のあることを御存じあつて、わたしゆゑ御難儀なさると聞いては、こなたもわしも親々の、難儀を知つて此儘に。

お隅　添ふに添はれぬ今宵の仕儀、何ぼ親へは不孝でも、わたしや別れてしまふなら、所詮生きては居ぬわいなあ。

宗次　さう思やるも尤もなれど、先づ一旦は別れた上親々にも安心させ、さうした上で互ひに心に替りがないならば、一緒にならるゝ事もある、いやでもあらうが今夜は此儘、早う歸つて親仁さまに安心させるがよいわいの。

お隅　それおやというて此儘に、別れたならばとゝさんが、又許嫁の何のというて。

宗次　はて、其時はとも〴〵に、よい思案も出よう程に、わしが言ふ事を聞き分けて、今宵はどうぞ歸つてたも。

お隅　そんならどうでも、歸らねばならぬかいなあ。

宗次　少しの內でも親達に、安心させるが孝行といふものぢや。さ、夜の更けぬ內に。

ト手を取つてせり立てる。

お隅　あい。（ト泣く〳〵立ち上り、）宗次郞さん、そんなら是れが。

宗次　えゝも、死に別れでもするやうに、今別れても朝夕見る顏、必ず短氣を出さぬやう。

お隅　早う顏見せて下さんせえ。

ト はアと泣き落す。又兩吟の上げになり、名殘惜しき思入にて、お隅花道の中程まで行き、逸散に花道へはひる、宗次郞跡を見送り思入あつて、

宗次　あゝ可愛さうに、嘸や歸るが苦患であらう、とあつて此儘連退けば、お袋ばかりかお世話になる九左衞門どのへ濟まぬ義理、夜が明ければ家へ歸り、ふッつり思ひ切つたといふ誓紙を見せてお袋に、安心させるが是れまでの、少しは罪ほろぼし。と斯ういふうち肝腎の役に當つた猪の防ぎもうそろ〳〵と來る時分、打たぬまでも鐵砲の用意をせねばならぬわえ。（ト鐵砲を出し火繩へ火をうつし、）愚癡なことをいふやうぢやが、別れて見るとまんざらに、よい心持も。（ト二重へ腰をかけ鐵砲を突くを木の頭、）せぬものぢやなあ。

卜水の音、時の鐘の送りにて此道具廻る。

(大須林山麓の場) ― 本舞臺三間の間後黑幕、此前一面の蘆原、上下山の張物、眞中に松の大樹、日覆より同じく釣枝、諸所に蘆原の土手板、總て大須林山麓の體、鳴物山おろしにて、道具納まる。

と直にばた〲になり、以前のお隅上手より走り出て來る、跡より以前の甚九郎追つかけ出で、直にお隅を捉へて、

お隅　えゝも、こゝ放して下さんせいなあ。

甚九　どうして放してなるものか、此原中で逢うたのは結ぶの神の引合せ、といつておれが口說くのではない、蓮藏さまに隨へばおれが出世の種になる、うんと言つておれと一緒に。

お隅　えゝ穢はしい、假令死んでも蓮藏面に隨ふことはいやぢや〱、いやぢやわいなう。

甚九　いやだといへば仕樣がある、さつきおぬしが落した手紙、是れを證據に御陣代樣へ持出す日にやあ、宗次郞は親子諸共命がないが、それでも否だと強情張るか。

お隅　それをどうして。(卜手紙を取らうとするを、)

甚九　どつこい、こいつは大事の代物、表向きにする時は許嫁あるそなたのこと、宗次郞は間男同然、

可愛い男の命を取つても、やはり返事はせぬか。

お隅　さあ、それは。

甚九　運藏さまには、隨はぬか。

お隅　それぢやと言うて。

甚九　可愛い男の命を取るか。

お隅　さあ、それは。

甚九　さあ、

お隅　さあ、

兩人　さあ〳〵、

甚九　これぢやあいやとは、言はれめえがな。

お隅　はあゝゝゝ。

ト泣き落すを、甚九郎お隅の帶の端を取る、是れにて帶くる〳〵と解け、振切つて逃げるを、甚九郎追ひかけながら、薄の中を廻る、此時上手より猪出來り、花道よき所へ行く折、どんと本鐵砲の音して、お隅の胸板をつらぬく、この途端に芒の中より甚九郎おどろき、足を踏み出すを、時に木の頭、

猪は花道へ逃げてはひろ、お隅苦しみ倒れる。是れをよろしく、

ひやうし幕

二幕目

姉ヶ崎濱邊の場
次郎兵衛門前の場

〔役名――作男市兵衛、萩原主水、木鼠忠次、大庄屋次郎兵衛、組頭九左衛門、岩崎運藏、姉ヶ崎村宗次郎、甚九郎、藪際の虎藏、百姓、役人、漁師、捕手、中間。市兵衛女房お賤、宗次郎母お澤、次郎兵衛悴千之助。〕

（陣代白洲の場）――本舞臺三間の間高足の二重、見附銀襖、紗綾形、下手突棒袖搦みな飾り、白洲階子、上手板塀、眞中に引戸附き、軒口に龜甲の幕を張り、總て陣代白洲の體よろしく、二重に運藏、着附上下大小にて居り、二重前に上下の侍控へ、○△□◎船頭四人の倚ぼうにて願書を持ち控へ居る見得、時の太鼓にて幕明く。

○　へい〳〵、私は濱方の者でござりまするが、

△　當年は殊の外に豐作でござりますれば、一同村方の者が濱祭りをいたしたうござりまする。

○何卒お聞き濟み下さるやう、偏に、
兩人　お願ひ申し上げまする。
役一　なに、其方共が、濱祭りがいたしたいと申し居るのか。
兩人　左樣でござりまする。
役二　むう、われ等は船頭の身分を以て、假令田畑が豐作であらうとも、いはゞ入らぬ世話と申すもの
役一　それよりはわれ達が、生業の漁を精出して、濱の運上怠りなく上納いたすが、其方共の働きと申すもの。
○へい〳〵田畑ばかりではござりませぬ、濱も大漁でござりますれば、御運上は申すに及ばず、それ〳〵お役人さま方へも。
△漁師仲間より、一同献上の品々も調へ置きましてござりまする。
○滅多に斯樣なことはござりませねば、どうぞ祭禮の出來ますやう。
兩人　お願ひ申し上げまする。
運藏　おゝ左樣まで心を盡して願ふことなら、隨分聞き屆けても遣はさうが、若し心附けの行屆かぬ時は直に差留めを申し附くるぞ。

○△　へい〳〵、それは有難うござりまする。
運藏　今日は先達てお召捕りに相成りし、宗次郎一件落着なれば、其方どもは早く下れ。
○△　へい〳〵、此上ともよろしうお願ひ申し上げまする。
　ト船頭は四人とも下手へはひる、此時花道の揚幕にて、
一二　下れ〳〵、下り居らう。
　ト一、二、菖蒲革の棒突き二人、九左衞門お澤序幕のなりにて出來り、花道にて、
一　下れと申すに、
二　聞入れぬか。
九左　へい〳〵、少々お願ひの筋がござりまして、是れまで參りました者でござりまする。
お澤　どうぞお慈悲に、御陣代さまの御目通りを、お許しなされて下さりませ。
　ト言ひながら舞臺へ來る、運藏これを見て、
運藏　やあ、足輕共の止めるをも聞き入れず、押して此場へ推參いたす不屆者。
九左　へい〳〵、今日是れまでお願ひに出ましたるは、今日御仕置に相成りまする宗次郎儀でござりまするが、是れへ召連れましたるは母の澤めにござりまするが、何卒御仕置に相成りまする前

方、今生の暇乞がいたさせたうござりますれば、御陣代さまのお慈悲を持ちまして、御聞き濟み下さりまするやう、偏に願ひ奉りまする。

お澤　只今九左衞門が申し上げまする通り、親子二人の其外に、便りもなき此の身の上、せめて生き顔に一日逢ひまして別れたうござります、どうぞ御慈悲と思召し、お逢はせなされて下さりませ。

運藏　やあ何事かと思へば、今日死罪を仰せ附けらるゝ宗次郎が母の澤、それに附添ふ九左衞門、暇乞がいたし度いとか、はゝゝゝ、いや、不便な事だが己の中刻には首をぶち落し、諸人の見せしめにするのだわ。それに何ぞや逢ひたいなどゝは、叶はぬことだ、きり〳〵爰をすさり居らう。

役一　此場に置く事は相成らぬ。

役二　兩人共に下り居らう。

九左　へい〳〵、そりやもうお咎めを蒙りました宗次郎ではござりますれど、なか〳〵人をあやめる所存は少しもござりませねども、私の娘を猪と取違へ打殺しましたも、ほんの間違ひと申すもの。

お澤　御無理なお願ひではござりますれど、親子と生れし一生のお暇乞。

九左　御聞届け下されまするやう、願ひ上げ奉りまする。

運藏　さ、それといふのも九左衛門、われが胸にある事だわ、予が執心のあのお隅、いやさ、われが娘のお隅と密通なした、惡事の報いは早いものだ、獄屋の苛責に火水の責め、憂き目を見せた其上に、首ぶち落すが腹癒せだわ、叶はぬ願ひだ、早く歸れ。

九左
お澤　すりや、どうあつても。

役人
二人　叶はぬ事だ、早く立て。(ト九左衛門お澤立ちかけるを、此時襖の内にて萩原主水の聲にて、)

主水　兩人とも、暫く控へい。

九左
お澤　やゝ、あの御聲は。(ト時の太鼓にて奥より上下大小の萩原主水出來り、眞中へ住ふ。)

主水　これは／＼、岩瀬氏にはお早い御出仕、今朝兄主計が參るべき筈の所、公用にて他出いたし、それゆゑ拙者名代として是れまで參上仕つる、貴殿にも何かと御苦勞千萬に存じまする。

運藏　役目の儀なれば相互ひの事、貴殿にも御苦勞千萬に存ずる。して、只今兩人の者を、止められし其仔細は。

主水　外でもござらぬが死罪と事極りし宗次郎なれども、元より猪と取違へ人をあやめし其身の不覺、事を好みし譯にもあらねば、親子の對面差許すとも、越度には相成りますまい。

運藏　すりや宗次郎と、此場に於て。

主水　差許さぬ其時は、君の仁惠薄きに似て、民百姓の恨みの基。

運藏　然らばどうとも、貴殿の勝手。（トこれにて主水こなしあつて、）

主水　こりや澤、差添九左衛門、其方共嘸かし本意なう思はんなれど、上の御法を破りし上は、不便ながらも是非に及ばぬ、只今是れへ引出す間、親子一世の暇乞。それ、科人を引出せ。

役一　姉ケ崎村宗次郎、急いで是れへ。（ト上手板塀の内にて、）

若衆兩人　はあゝゝゝ。（ト黑四天の足輕、宗次郎の繩附きを引立て出來り、）下に居らう。

　　　ト是にて宗次郎上手前へ住ふ。

運藏　べん〳〵と親子の別れ見物しても居られまい、拙者はこれより濱邊へ罷り越し、名主次郎兵衛が遠島の出船、改めてくれう。

主水　御用相濟む上からは、貴殿には御苦勞ながら、

運藏　然らば後刻、

兩人　お目に掛るでござりませう。（ト運藏奥へはひる、主水跡を見送りこなし、）

主水　宗次郎、今生の暇乞、母と靜かに別れを惜しめ。あゝ、とは言ひながら不便な有樣、正しく猪と思ひ詰め打殺せしは九左衛門が娘の隅、許嫁のあるとはいへど、遠くて近きは男女の閒と淸女が

筆にも言へる如く、兩腰たばさむ家筋にも往々ある習ひ、ましてや朝夕農業の互ひに助けいたす中、嘸不便にも思ふらん、是れも宿世の業因と、上の御法は犯されず、死骸を葬る上からは、定めて申し置くべき事あらん。巳の刻までには暫時の猶豫、心置きなく名殘りをいたせ。（トこなし）

宗次　はゝあ有難きそのお詞、死んでも忘れはいたしませぬ。

九左　御仁惠の思召しにて、親子名殘りをいたしまするも、萩原さまの御情。

お澤　有難う存じまする。

主水　おゝ、さもあらん、仕置の刻限までには今暫し、左源次右源次、其方共も休息いたせ。

役人二人　はッ、畏つてござりまする。

主水　親子の者の胸中を、察しながらも役目の表、心殘りのないやうに。（ト愁ひのこなしあつて、氣を替へ）手間取ることは相成らぬぞ。（ト時の太鼓にて主水奥へはひる。）

宗次　母者人、九左衞門さま、面目ない〳〵、御免なされて下さりませ。

ト お澤九左衞門に取縋らんとして、ちよつと控へ、泣き伏すを、

お澤　これ宗次郎、情ない身になつたなう、それといふも爰にござる九左衞門どのゝ娘御を、そゝのかしいたづらかはした罰が當り、間違ひとは言ひながら人をあやめし極重罪人、なれども可愛い我が

子ぢやもの、おりや不便でならぬわいなう。とはいふものゝ、もし九左衞門さま、お前さまの爲には娘の敵、こいつを存分に斬りさいなんでも慊らぬと思召しませうが、まだ生ひ先きのある體を、今日が死刑と聞く悲しさ、それをあなたの腹癒せに、どうぞ御料簡なされて下さりませ。

九左　これお澤どの、そりやそなた聞えぬぞや。わしが娘のお隅ぢやとて許嫁さへないならば水の出端の二人のもの、一緒にせいで何とせう、現在娘を殺されても、おりや憎くも何ともない、なほ可愛さが彌增して、夜も寢られずに苦勞になり助けたいのが一倍なれど、お上の掟は是非もなし。

宗次　たつた一人の母者人に御苦勞かけし上ならず、お隅どのを殺せしは、間違ひとは言ひながら此身の不覺、たゞ此上は一時も早うお仕置うけ、未來へ行つてお隅どのへの言譯、必ず恨んで下さりまするな。

九左　あの世へ行つたお隅めが、未來で嘸や其の心根を聞いたなら、何ぼうか不便に思はう、まだ其上にそなたが死罪になつた跡、次郎兵衞どのゝ鐵砲を、借りた所から次郎兵衞殿も、伊豆の國へ遠島にされるとの事。

お澤　是れまで村中永らくの間、お世話になつた名主どの、せめて濱邊へ見送りに行かうとは思へども元はといへば宗次郎より事起り、お顏を見るも面目ない。

宗次　わしとても先達てお噂を聞きましたゆゑ、科犯せしはみんな此の宗次郎がなせし業、此身一つに引受けようと、願へど甲斐なきお上の掟。
九左　次郎兵衛さま、お隅といひ、そなたまで、みんな定まる宿世の因果。
宗次　たゞこの上は母者人、隨分おまめで。
お澤　おゝ、わしもそなたのない後は、なに樂しみに苦の娑婆に、未來を急いでこなたの側へ。
九左　跡弔ふが老の役。
宗次　とかういふうち最早刻限、名殘りは盡きぬ、早う此場を、又お叱りを受けぬうち。
九左　お澤どのにも思ひ切り、濱邊へ行つて次郎兵衛どのに。
お澤　いつまで言うても同じこと、そんなら是れが。
宗次　隨分御無事で。（ト此時お澤立ち掛るを、どんと時の太鼓の頭を打込む。）
九左　ありやもう四ツの、
宗次　この身の知死期、
お澤　これ。（トお澤宗次郎の側へ行き掛ける、九左衛門隔てる、此の仕組よろしく、道具廻る。）

（姉ヶ崎濱邊の場）――本舞臺正面打寄せの浪手摺、二の手三の手同じく浪手摺、上總沖遠見の書割り上の方岩山の書割り、五大力船の艫を見せ、下の方蘆原磯馴の松、同じく釣枝、總て上總國姉ヶ崎濱邊の體、爰に幕明きの船頭四人立ち掛り居て、波の音にて道具納まる。

○まあ、おら達の願ひは叶つたが、けふは次郎兵衞どのが流しものになるので、船頭の衆が此濱邊へ暇乞ひに來るとの事。

◎さうよ、何でも役人や名主をすると、かういふ時にやあ目處に取られるからいやだなう。

△何でもこちとのやうに、錢もなけりやあ苦勞もなし、極樂とんぼが一番だ。

□手めえ達は苦勞がなからうが、女の惚れるのでそればかりが苦勞で、夜るもろく〳〵寐られねえやあ。

○はゝゝゝ、手めえの顔色で、女も凄じいやあ。

◎砂めりを見るやうな面構で。

△大方鮫でも惚れるであらう。

□何とでも言つて嫉め〳〵、今にびつくりするやうな、女を引張つて來て見せるわ。

○われが女房を引つ張つて來りやあ、煮豆に花が咲くわ。

◎　時に網親の家へ行つて、さつきの事を言はうか。

△　それがいゝ〳〵。

四人　さ、行かう〳〵。

ト浪の音になり、四人の船頭上手へはひる。と濱唄、波の音になり、花道より九左衞門泣き居るお澤を宥めながら、次に百姓四人附添ひ出來り、花道にて、

九左　これ〳〵宗兵衞後家、その歎きは尤もだが、次郎兵衞か遠島にならつしやるのも約束事、氣を取り直して、

皆々　泣かつしやるな〳〵。（トお澤涙を拭ひ、）

お澤　それぢやといふてあのやうな慈悲深い名主どのを、遠い所へ遣るといふも、元はといへば忰が粗相、猪と間違へお隅どのを鐵砲で打つたが誤り、怪我とはいへど九左衞門樣、こなたへも氣の毒で、顏向けがならぬわいな。

九左　いや、何も是れが殺す氣で撃つたといふではなし、田畑を荒す手負ひ猪、打殺せば村々の助けになるといふゆゑ、殺さうと御法度の玉を籠めて打たが誤り、とう〳〵昨日宗次郎どのも不便や死罪、嘸殘り多い事でござらう。

お澤　何をいふにも、親一人子一人の宗次郎なれば、誰を力にいたしませうか、心細うてなりませぬ。

九左　おゝ、そりやおれとても同じ事、便りにする者がないゆゑ、そなたの心は察して居ます、まあ〳〵其樣に泣かつしやるな。（ト百姓皆々本舞臺へ來る。）

一　村中毎日々々猪小屋へ出る番人も、あの日の役に當つたのが、宗次郎どのゝ身の不運。

二　情が却つて仇となり、まだ年若なお隅女郎、宗次郎どのも非業の最期。

三　其の鐵砲に小島といふ、名主どのゝ燒印が、押してあつたで免れぬ科。

四　既に同罪にもなる所、萩原さまのお慈悲にて遠い所へ流しもの。

五　何が惜しいといつたとて、こんな惜しいことはない、又と二人はない人ぢや。

九左　そりやこなた衆の言ふ通り、又と二人はないお人、名主はすれど見識振らず、下を憐み慈悲深く實に所の柱ゆゑ、どうか疵の附かぬやう、村中擧つて代官所へ御慈悲願ひに出たれども、何をいふにも人一人殺したゆゑお上でも、お助けなされる譯にもいかず、宗次郎どのは死罪になり、次郎兵衞どのは流しもの。

お澤　此身につまされ御隱居の、德入さまや、お上さまが、おいとしうござりまする、聞けば今日の船出が濟むと、直に跡は引拂つてこの土地に置かぬとやら。

一　さあそれゆゑどうか此の土地に、ござるやうにと村中で、度々願ひに出たれども、何をいふにも代官の運藏どのが底意地惡く、たつて願へば同罪に、獄屋へ入れると權柄押し。

二　同じ御役の御方だが、運藏どのに引替へて物和らかな主水さま、お年は若いが慈悲深く、下を憐れむよいお方。

三　何の事はない、あの、お二人は、一の宮の芝居で見た、三曲の岩永に重忠のやうだ。

四　恐らく世界に意地の惡いといつたら、あんな惡い人はない。

五　いや、何とも言はれぬ、組頭の甚九郎が意地の惡さ。

九左　ほんに同氣求むるとやら、運藏どのと仲のよさ、

一　ひよつとあいつが名主にでもなつたら、わしらはこつぱいだ。

二　いや噂をすれば影とやら、あれ〳〵、向うから運藏と甚九郎に虎藏が附いて爰へ來ます。

一　又何か見附け出して、小言をいふに違ひない、片隅へ寄つて居よう。

皆々　それがよい〳〵。

ト皆々下手へつくばひ居る、時の太鼓になり、花道より甚九郎、運藏、野袴ぶつ裂羽織、大小なり虎藏羽織ふん込み、庄屋のなり、中間革床几を持ち附添ひ出來り、花道にて、

運藏　甚九郎未だ主水殿は見えぬやうぢやな。

九左　左樣でござりまする、氣の長いお人ゆゑ、めつたにお出ではござりますまい。

藏虎　それに名主の次郎兵衛が不斷から、御贔屓ゆゑ、今日の船出も遲くなるやう、態と延してござりませう。

運藏　所を身共がせり立てゝ、手酷い仕置を見せてくれる。

甚九　實にそれでござりませねば、いけ強情な百姓共言ふことは聞きませぬ。

虎藏　何にいたせ、向うへ參つて。

運藏　休息いたすであらう。

九左　これは〱岩崎さまには、お役目御苦勞に存じまする。

運藏　おゝ、九左衛門始め其方どもは、組頭の者どもだな。

皆々　左樣でござりまする。

運藏　丁度幸ひよい所だ、其方達に申し渡すが、次郎兵衛お咎め蒙る上は、今日名主役を甚九郎に申し附ける、左樣相心得い。

九左　へえゝゝゝ、すりや甚九郎どのが。

皆々　名主役に。

甚九　今日から名主を仰せ附れば、今までとは格が違ふぞ。

二　そりやこそ、言はぬ事ではない。

一　難儀な事が出來たなあ。

甚九　何だと。

一　いやさ、何かに附けて慈悲深い甚九郎どのが、跡役になられたは、村中の仕合せ。

ト皆々顔見合せ、困つた事だといふこなし。

甚九　いや、次郎兵衛は間拔けゆゑ村の締りも忽だが、是れからおれが洗ひ替へ、目玉の飛出るやう嚴しくするから、さう心得い。

皆々　へい〳〵、畏まりましてござりまする。

虎藏　御代官の岩崎さまと心の合つた甚九郎さま、ごまを摺らねば身の上だぞ、是れから村の隅から隅まで惡い事をほぢくり出すは、ごけへ堀のおれが役、宗兵衛後家おれに一ツ睨まれたら、もう村にやお居られねえぞ。(ト虎藏お澤の袖を引つ張るを振拂ふ。)

お澤　はい、どうで忰が死んだからは、跡を讓る者もなし、僅な田地を賣つてしまひ、廻國にでも出る

心、村に居る氣はござりませぬ。

虎藏　そりや惡い料簡だ。先祖から持ち傳はる家を捨てずと、おれを入夫にして跡を立つたがいゝぢやあねえか。

お澤　いえ〳〵悴がないからは、家も何も入りませぬ。

運藏　いや、高梁強く家は倒るゝと、人が兎やかういふ時に、うんといふのが其身の德、九左衞門なども其通り、おれに娘をくれる時は、代官職の舅御さま、名主格で居られるもの、くれぬばかりで罸が當り、猪と間違へ打殺され、義理立てなした宗次郎も、人を殺せし科によつて、是れも死罪に非業な最期、何と運藏の罸は覿面だらう。

甚九　運藏さまはいふに及ばず、今日から名主の甚九郎、おれが言ふ事をきかぬ奴は、片ッ端から憂き目に逢はすぞ、九左衞門始め小前の者ども、盆暮五節句三ヶ日には目出度うござると祝儀に來り土産は身分相應に、魚心ありや水心、惡いやうには計らはぬぞ。

運藏　いや、土産といへば隣村の六右衞門が氣の毒な、上總木綿の三丈もの、三反織つて來たが、小前の者にいたしては、小間心の附く奴だわえ。

甚九　いや誰でもさうせにやあならぬのに、此村などには其樣な小間心の附いた奴が、たゞの一人もご

ざりませぬ。

運藏　何も貰ひたい事もないが、あゝされてはつい言ふ小言も、それなりに言はずにしまひ、田畑の除地も、つい見のがして遣る心になる。

虎藏　そこが人情でござります。物を貰つて腹を立つ者は、間抜け名主の次郎兵衛ばかりさ。これ村の衆、人事だと思はずに、耳をほじつて聞け。

皆々　へい〳〵、畏りましてござります。

運藏　扨小間心の附く奴等は、世の中に少ないものだ。

甚九　左樣でござります。

虎藏

九左　へい〳〵、岩瀨さまへお願ひがござりまする。

運藏　願ひとは、何だ。

甚九　これ〳〵九左衞門、爰に名主が控へて居るに、直々に願ふとは失禮千萬、なぜおれに願はぬのだ。

九左　これは粗相をいたしました。扨お願ひ申しまするは。

甚九　これ〳〵天窓が高い〳〵、もつと天窓を下げて願へ、えゝ失禮千萬な奴だ。

二　いや〳〵、諸式が高うござりますから。

甚九　何をこいつが。（トきつとなるを留めて）

九左　お願ひと申しまするは、只今是れへ次郎兵衛どのが參りましたら、一同に暇乞がいたしたうござりまするゆゑ、お願ひなされて下さりませ。

甚九　いや其儀は罷りならぬ、願ふなら願ふやうに。な、もウし運藏さま。

運藏　おゝ筋道立つて願ひなば、許してくれまいものでもない、其方どもは許されぬ。

九左　すりや、暇乞は。

皆々　叶ひませぬか。

虎藏　素手の孫三で叶ふものか。

九左　はて、是非もない。

皆々　事たなあ。

ト皆々思入、時の太鼓になり、花道より主水、野袴ぶつ割羽織、大小、中間床几を持ち出來り、跡よりお賤、世話女房好みのこしらへにて抱子を抱き、子役やつしなり、抱子を背負ひ、千之助の子役絹やつしにて、附添ひ出て花道にて、

お賤　へいへい、お願ひの者でござりまする。

主水　むう、其方は先達て姉ヶ崎の次郎兵衛が慈悲願ひに出でし、召使ひの市兵衛が妻ぢやな。

お賤　左樣にござりまする、市兵衛が妻賤と申す者でござります。

主水　して、願ひとは、如何なる仔細だ。

お賤　今日主人次郎兵衛こと、此濱より伊豆の國へ流されまするを承はり、何卒悴千之助、これなる水子にも、親子の別れ暇乞いたさせ度く、召し連れましてござりまするが、お許しなされて下さりませうならば、有難う存じまする。

主水　流罪の者に對面は叶はぬ事であるなれど、役柄の次郎兵衛ゆゑ、そちが願ひは聞き屆けた。

お賤　すりや、お聞き屆け下さりまするか。

皆々　えゝ、有難うござります。

主水　して、夫市兵衛は如何いたした。

お賤　かゝる事とは存じませず、餘儀なく下總まで參りましてござりまする。

主水　すりや、市兵衛は他出とな。

お賤　囘歸りまして承はり、殘念がるでござりませう。

主水　最早これへ引き出せば、濱邊へ參つて待つて居やれ。

ト此一件本舞臺へ來る。百姓みな〳〵はよく來て下さつたと悦ぶこなし。

主水　これは〳〵岩瀬氏にはお早き御出張、御苦勞千萬に存じまする。

運藏　先達てより是れへ參り、貴殿のお出でを相待ち居つた。

甚九　萩原さまには、いざ先づあれへ。

主水　岩瀬氏、御免下され。（ト主水次へ床几に掛る。）

運藏　して、只今あれへ召連れられし、乳呑みを連れしあの女は。

主水　今日流罪申し附けし、次郎兵衞が召使ひ、市兵衞が妻でござる。

甚九　して、又市兵衞が女房を。

虎藏　何故お連れなされましたな。

主水　主人次郎兵衞船出と聞き、暇乞を願ふゆゑ、差許して召連れました。

運藏　いや、其儀は罷り成らぬ。

主水　なぜなりませぬな。

運藏　大罪人の次郎兵衞に仕へし者、いはゞ同類、曲事に申し附くべきを、情を以て許しくれるに、それに暇乞の何のかのと、慈悲をすれば何とやら、其儀は無用にいたされい、それとも又鎌倉殿よ

りよいといふ仰せがござつたかな。

主水　仰せはなくとも些細なこと、取計らふが検視の役目。

九左　へい／＼、萩原さまへ御願ひがござりまする。

主水　何事ぢや。

九左　今日流罪になりまする、村名主次郎兵衛には、年來世話になりましたれば、役の者一同暇乞をないたしたうござりまする、何卒お許し下されまするやう。

皆々　お願ひ申し上げまする。

主水　おゝ苦しうない、暇乞いたせ。

皆々　有難うござりまする。

運藏　あいや／＼、身寄りの者さへなり難きに、何ゆゑあつて村の者まで。

主水　ではござりませうが、次郎兵衛も舊來當地に住居なし村役をも勤めし者、暇乞許し遣はしてもよろしうござらう、まつた舊恩あつて次郎兵衛に、暇乞をいたしたいと、百姓共が我等への願ひ、人は斯くこそ有りたきもの、神妙なる願ひゆゑ、拙者が許し遣はします。

運藏　でもお咎めあらば、如何召さるな。

主水　はて、拙者が切腹いたすまで。御介錯をばお願ひ申す。

運藏　むゝ、勝手にさつせえ。（ト運藏甚九郎と顔見合せ、馬鹿な奴といふ思入、此時花道にて、）

捕手　歩め。（ト此聲をみな〳〵聞いて、）

お騰　最早旦那さまが。

九左　あれ〳〵、曳かれて、

皆々　ござらつしやるわ。

甚九　え、かしましい、鎭まり居らぬか。

ト皆々情ないといふ思入、時の太鼓、説經模樣の合方にて、花道より次郎兵衞、好みのこしらへ、小手を許し繩に掛り、黑四天の捕手二人繩を取り、同じく半纏股引、大小の侍二人附添ひ出て、花道に留り思入あつて、

次郎　實に人間の一生は、いつ何時禍の其身にかゝるか知れぬもの、譬にもいふ月に村雲、悟しの闇に猪と思ひ違へて、お隅をば打つたる科に宗次郎、あすひの神の助けもなく、冥土の旅へ立ちしと聞く、我もそれゆゑ波濤を越え、生れし土地を離れ島、けふ船出して又いつか故郷へ歸るも白波の哀れ身に知る秋の暮、袖さへしめる汐風に見馴れし濱の見納めなるか。（トよろしく、愁ひの思

入あつて、）當所の名殘りに思はずも、皆樣の御足を留め、御免なされて下さりませ。

役一　最早今日出船なせば、御赦のあるまで當地の名殘り。

役二　心任せにいたせよと、主人よりの申し附け。

次郎　萩原さまの厚きお情、有難うござりまする。（ト時の太鼓にて本舞臺へ來る。）

千之　や、とゝさまか。（ト行かうとするを）

お暖　もし、お靜になされませ。（ト次郎兵衞兩人を見て思入、みなみな下手へ出で、）

九左　次郎兵衞どの、みんな爰に、

皆々　居りまする。

甚九　えゝ、又してもくく出しやばらずと、すつこんで居れ。

ト此内次郎兵衞みなみなを見て、市兵衞はなぜ居らぬといふ思入。

捕手　下に居らう。（ト是れにて舞臺へ莚を敷き、是れへ次郎兵衞住ふ、主水思入あつて前へ出て、）

主水　こりや、次郎兵衞。

次郎　はツ。

主水　其方儀、かねぐ在方にて玉籠めいたし候鐵砲を禁じ置くを、猪脅しとは申しながら、宗次郎に

玉薬とも鐵砲相渡し候段不埒の至りに候、右宗次郎存ぜざる事ながら、丸左衛門娘關を打殺し候所、死罪に相行ひ候、其方も同罪たるべきを、格別の御慈悲を以て、伊豆の國へ流罪申し附くる者也、有難く御受けいたせ。

次郎　はッ、そも〳〵お召捕りに相成りしより、一命はなき事と覺悟いたし居りましたる所、格別の御慈悲にて一命をお助け下され、流罪仰せ附けられまする段、有難き仕合せに存じ奉りまする。

主水　流罪の趣き申し渡せば、繩目を許し遣れ。

捕手　はッ。（ト繩を解く。）

主水　それ次郎兵衛、身寄りの者どもそれへ出て暇乞いたせ。

お賤　はッ、有難うございまする。（ト誂への合方になり、子役の千之助、お梅跡に皆々附いて前へ出る。）旦那さま、賤めでございまする。

次郎　おゝお賤か、よく來てくれたな。

千之　とゝさま。（ト側へ行き兼ねるを。）

主水　苦しうない、側へ行きやれ。

お賤　それ、お許しなれば御側へ早う。

千之　えゝ、お懐しうござりまする。（ト千之助次郎兵衞へ縋る。）

次郎　こりや千之助、御隱居さまは一緒ではなかつたか。

お賤　はい、御隱居さまは旦那さまが、獄へお出でなされてより、それを氣病みに御煩ひ、御大病ではござりまするがお暇乞と存じまして、御駕籠の支度もいたしましたが、なまじ逢うたら病の障り、逢ひ度いは山々なれど行かぬ程に、くれ〴〵も體を大事に命を保ち、再び故郷へ立歸り、まめな顔を見せてくれいと、おつしやつてゞござりました。

次郎　むゝ、すりや親仁さまには御大病とか、其の煩ひも皆わしゆゑ、老先き短いお年寄りに御苦勞かける不行跡、あゝ濟まぬことではある。して、市兵衞が見えぬが、是れもどうかいたしたか。

お賤　いえ、夫は達者でござりまするが、かゝる事とは存じませず、御新造さまのお里まで一昨日參りまして、是非今日は歸りまする筈、今にも途中で聞きましたら、宙を飛んで參りませう、どうぞあなたのおいでのうちに、市兵衞も御暇乞ひをいたさせたう存じまする。

次郎　おゝ、わしも逢うた其上で賴み置くこともあれば、早く歸つて來ればよいが。

お賤　遅くも今日の晝までには、歸りますると申しましたれば、もう只今に歸りませう。

次郎　どうか逢うて行きたいものぢや。（ト次郎兵衞伸び上り。向うを見る。皆々も思入。）

九左　いやなに、次郎兵衛どの、跡々の事なら、必ず案じさつしやるな。
一　これまで長の御恩送り。
二　悪いやうには、
皆々　いたしませぬ。
次郎　おゝ十左衛門どの始め皆の衆、何分共に頼みます。（ト思入あつて、）
甚九　いや岩瀬さま、俄に風が追手に替り、御出船には屈竟、早いがよろしうござる。
運藏　何さま、船路は風次第、順風とあるならば、それ者共、次郎兵衛をば元船へ。
捕手　はツ。（ト立ち兼ねる。）えゝ、きり〳〵といたさぬか。
主水　あいや岩瀬氏、お待ちなされい。
運藏　又留めさつしやるか。
主水　當所より流罪の者は、申の刻に出船なすが古例なれば、今半時猶豫いたす其内には、いやさ、猶豫いたすも上の情。
運藏　そりや、古例もござらうが、陸路と違つて海上は、風に任さにやならぬもの。
主水　其儀も一理ござれども、古例は則ち鎌倉天下、頼朝公の嚴命なるが、それをもどいて濟みまする

か。

運藏　さあそれは。

主水　公の政道は、古例を守るが御法でござる。

運藏　むう。（ト此時主水袂時計を出し、日に晒し見て、）

主水　これ、見られよ運藏どの。時刻はいまだ未の中刻、まづゆる〳〵と休息召され。

運藏　いや、御念の入つた事でござる。

甚九　それでは今日の出船は、

虎藏　七ツとあれば、まだ半時。

運藏　爰に居るのも退屈だ。小屋へ參つて休息いたさう。

甚九　それがよろしうございませう。

運藏　二人も一緒に、

虎藏　お供いたすでございませう。

運藏　然らば、萩原氏。

主水　岩瀨氏。

運藏　後刻御意得ませう。（ト時の太鼓になり、運藏先きに甚九郎虎藏附いて上手へはひる。）

主水　こりや次郎兵衛、申し置くべき事でもあらば、年頃入懇にいたせし某、何なりとも遠慮なく。

次郎　はゝ有難き其の仰せ、斯くなりましては別段に、お願ひ申す事とてもござりませぬ。此の次郎兵衛跡々の事頼むべき市兵衛に逢ひませぬのが、たゞ殘念にござりまする。

主水　それとても只今にも歸らぬとも申されぬ、申すべき事あらば、身共が居らば何かと遠慮、暫時休息いたす間、暫しなりとも心置きなく、暇乞をいたしたがよい。

次郎　有難うござりまする。

主水　こりや九左衛門始め皆の者、そち達も遠慮なく。

皆々　はゝ、有難うござりまする。

主水　いざ、警固のものは身共と一緒に。

侍　でも囚人を一人置き。

主水　はて、放し飼ひにいたし置いても、逃げ隠るゝやうな次郎兵衛ではないぞ。

侍　はッ。

主水　心配いたさず、休息いたせ。

次郎　左樣なれば萩原さま。

主水　心靜かに名殘りを惜しめ。

ト時の太鼓にて、主水先きに侍附き、捕手二人附き上手へはひる。皆々は跡を伏し拜み〱、

次郎　あゝ、お慈悲深い主水さま。

皆々　有難うござりする。（ト是れより誂への合方、皆々一つに寄り思入あつて、）

丸左　扨次郎兵衞どの、此度はとんだ事になりまして、申さうやうもござりませぬ。

次郎　猪脅しの鐵砲から、二人まで命を捨て、數代名主を勤めたる、此の次郎兵衞も今日限り、遠い島へ行かねばならぬ。

お澤　それも悴が粗忽にてお隣どのを打つたるゆゑ、御恩になつた旦那さまが、爰にお出でなされぬやうに、いたしましたかと思ひますると、何ともかとも申さうやうがござりませぬ。

ト泣く、次郎兵衞こなし。

次郎　いや〱それもこれも皆約束、宗次郎どのも其科ゆゑ、昨日命を取られたさうな、嘸そなたも悲しうござらう。

お澤　はい、悲しうもござりまするが、私などは一人身ゆゑどうなつてもよろしうござりまするが。

九左　あゝこれ〳〵宗兵衛後家、その言譯を言つた日には、いつまで言つても果てしがない、却つてお歎きを増すやうなものだ。（ト此うち次郎兵衛思入あつて、）

次郎　お賤、まだ市兵衛は戻つて來ぬか。

お賤　何で遲い事でござりまするか。生憎とも何とも、申しやうがござりませぬ。

一　村境まで來たならば、もう話しがござりますから、

二　一足飛びに歸られませうが、まだ境まで、來ぬと見えます。

次郎　此身が流罪になる上は、もう此土地の住居もならぬ、今夜直に引拂ひ、いづれへなりとも行かねばならぬ、是れといふ緣者もなければ、賴みに思ふは市兵衛ばかり、跡の事をば賴みたいが、なぜ歸つてはくれぬ事だぞ。

お賤　いえ其事ならばお案じなされまするな、此間も市兵衛がもしもの事のあつた時は、どうで爰にも居られねば、御家内のお供をして先づ鎌倉へ立越えて、以前村のお人ゆゑ、長谷小路で人入れ生業東金茂右衛門さまへ何かの事をお賴み申して、旦那さまの御免になるまで、御不自由はさせ申さぬと、申してゞござりますれば、跡はお案じなされまするな。

次郎　忠義者の市兵衛どの、定めてさうとは思へども、一言賴んで置きたい。いや、千之助もお梅もよ

う來てくれたな。親仁は病氣とあるゆゑ、來られぬも尤もぢやが、女房は如何したな。
千之　あい、おつかさんは。（ト言はうとするを、）
お賤　あもし。（ト千之助を留める、）お上さまは。（トほろりとこなしあつて、）
次郎　しかも當月臨月であつたが、身二つになつたかな。
お賤　はい、當月七日に御安産でござりました。
次郎　あれが事が苦勞になり、産後のなやみはなからうな。
お賤　え。（トお賤びつくりして、）
次郎　いやさ、お光は死んだであらうがな。（ト皆々愁ひの思入。）
お賤　御存じの上は何をお隱し申しませう、御産は首尾よくありましたれども、其夜のうちに血が上り、果敢なくおなりなされました。
次郎　おゝさうあらう、死んだはしかも七日の夜、七ツ前であらうの。
お賤　えゝ、誰があなたへ其事を。
次郎　誰も言はぬが獄屋のうち、過越し方を思ひ寢に夢ともなく現ともなく、あり〳〵見たる女房のお光、たゞ一言の詞もなくさめ〴〵泣いて居たるゆゑ、如何なる譯か樣子をば、問はんとなしたる

其折柄、七ツの鐘に夢覺めて四邊を見れば何もなし、扨は女房は產後にて死んだと思ひ朝夕に、念佛唱へて遣つたるわ。

お賤　あなたに逢度い〳〵と、そればかりおつしやつて、果敢なくおなりなされましたが、やつぱり此世に氣が殘り、獄屋へお出でなされたか。

九左　迷うてお出でなされたも、

お澤　さら〳〵無理ではござりませぬ。

皆々　おいとしい事でござりまするなあ。

次郎　して抱いて居る、其の水子は。

お賤　あなたのお胤でござりまする。（トお賤抱子を見せる。）

次郎　そんなら是れが。（ト抱子をだき取り、）こりや女か男か。

お賤　はい、お孃さまでござりまする。（ト次郎兵衞見て、愁ひの思入。）

次郎　不便やよしない所へ宿り、生れながらに母に別れ、又もや父に別れる不運、再びそちにも逢はれるか、又是れ限りに逢はれぬか。生死知れざる我が身の上、今日が則ち親と子の逢ひ初めの逢ひ納め。（ト涙を拭ひ氣を替へて、）お賤、お光によく似て居るな。

お賤　お小さいと大きいばかり、瓜を二つでござりまする。（ト お賤抱子を抱き取り思入あつて、）さあ千之助さま、おとなしうおとつさまへ、お暇乞ひをなされませ。
千之　あい、おとつさま、御機嫌よろしう、御身を大事になされませ。
次郎　おゝおれも、身を大事にするから、そちも體を大事にして煩はぬやうにしや、是れからは市兵衛やお賤を、實の親と思ひ、よう言ふことを聞かうぞ。
千之　あいく。
次郎　又そち夫婦も主人と思はず、我が子と思ひ、惡い事があつたら、遠慮なく小言を言ひ、成人の後不埒でも仕をつたら、其時は勘當なしても苦しうないぞ。
お賤　はいく、畏りましてござりまする。
次郎　お賤、市兵衛はまだかな。
お賤　はい、まだ見えませぬわいな。
次郎　あゝ市兵衛も厄介だが、取分けお賤が難儀、親仁さまは御老體、御手の掛る其上に水子は二人、悴と娘、よまんどしかゝんどしに、其の世話はどのくらゐ、ひよんな所へ緣を組み、よしない苦勞をしやるなう。

お賤　勿體ないことおつしやりませ、是れまで長々旦那さまのお世話になつたはどの位、今日着て參りましたこの小袖、ほんに帶から下までもお上樣よりいたゞき物、わたしばかりか娘まで御主人さまのお蔭にて人となつたる市兵衞夫婦、御恩を送るは是れから先き、假令どのやうな事がござりましても、命の限り私共がお世話をきつといたしまするわいな。

次郎　その志しは忝けないが、貯へとても僅な市兵衞、わがなき跡に多くの厄介、これが一年か二年のことならどうかならうが、今日を限り五年で御免になることか、十年經つて御免になるか、限りの知れぬ我が身の上。

お賤　言うて返らぬ事ながら、これが爰に居さつしやるなら田畑もあれば一生涯、樂に暮せる御身分なれど。

次郎　家は元より田畑まで、科ある身ゆゑ召し上げられ。

お賤　着のみ着のまゝ立ち退けば、

次郎　木から落ちた猿同然。

お賤　主從親子一時に、

次郎　便りもならぬ此別れ。

お賤　哀れましらの悲しみは、

次郎　腸を斷つ。

兩人　思ひぢやなあ。

トよろしく思入、時の太鼓になり、上手より以前の運藏侍二人捕手二人甚九郎虎藏附添ひ出來り、

運藏　最早未の下刻なれば、きり〳〵乘船いたすやう、次郎兵衛へ申し渡せ。

役一 役二　はツ。さ、岩瀨さまの御詞、少しも早く乘船いたせ。

次郎　畏つてござりまする。

役人二人　きり〳〵と立ち居らう。

お賤　そんなら是れが、お別れでござりまするか。

百姓皆々　お名殘り惜しうござりまする。

次郎　左程の世話もいたさぬに、我を慕うて村の人々。これに附けても市兵衛に。（ト向うへ思入、）

運藏　えゝ、何をぐづ〳〵よまひ言、疾く〳〵乘船いたさぬか。（ト此時揚幕にて。）

忠次　暫く〳〵、暫く待つておくんなせえまし。

運藏　何と。

ト波の音、ばた〱になり、花道より忠次、紺の腹掛、脚絆、草鞋、三尺帶、尻端折り、旅なり菅笠を持ち出來る、これを黑四天二人掛りにて、立掛りながら出て、

〇　こりや、願ひあればわれ〱に申せ。

△　直訴は叶はぬ跡へ歸れ。

忠次　どうぞ通して下さりませ。

〇△　いやならぬ、叶はぬ事だ。

忠次　えゝ意地の悪い、退きなせえ。（ト兩人を突きのけ立廻りながら舞臺へ來り、兩人を突き倒し下手へ住ひ、）へい、お願ひの者でござりまする。

虎藏　誰かと思へば木鼠忠次、何ゆゑ爰へうせたのだ。

忠次　旦那さま、とんだ事でござりましたな。

次郎　思ひ掛けない木鼠忠次、そちは上總一國を、お構ひの身でありながら、御免もなきに此所へは。

忠次　さあ、來られぬ所へ旅姿、脚絆草鞋で參りましたは、ちと折入つてお願ひがござりますゆゑ。

甚九　なに、願ひとは、何の願ひだ。

虎藏　早く言やれ。

忠次　言ふなと言つても言ひに來たのだ、まあ靜かに聞いて下せえ。（ト誂への合方になり、）外の事でもございませね、爰に居なさる次郎兵衛さま、猪脅しの一件で法螺の貝を聞いたゆゑ、お構ひ場所も合點で脚絆草鞋で參りましたは、先年芥場の野天から大喧嘩をいたしまして、簀卷にされてどんぶりと沖へ沈めに掛けられるのを、次郎兵衛さまのお情で危ない命を助かつた、御恩送りの百分の一、遠い所へ私を代りに遣つて下さりませ。科といふのも次郎兵衛さまが、なした事ではございませぬが、御法度の事なれば、どんなお仕置うけようとも、そりやあ仕方がございませぬが、此近鄕で御慈悲深いなくてならねえ名主どの。土地の難儀になりませうから、お助けなされて下さりませ、それに引替へ、わつちやあ生れは可なりでございましたが、勘當うけて只今ぢやあ親兄弟もねえ體、惡い事なら一から六まですべたの馬の剗返り、喧嘩が好きで惣身に痣のたえねえわしが、一枚なけりやあ此土地で多くの人が悅びます。御面倒でもお役人さま。蒔き直しにして下さりませ。

甚九　やあ科ある身にてお構ひの、場所へ立入るのみならず、次郎兵衛が流罪の代りになしくれと、大それた用願ひ、叶はぬことだ。早く歸れ。

忠次　それぢやあわつちが、お願ひは。

運藏　人代りの儀は罷りならぬ、先達てより次郎兵衛が召使ひの市兵衛と申す者、主人の代りになしくれと再度願ひ出でたれども、罪科の仕置を代りにて、濟むといふがあらうと思ふか、大戯氣めが。

忠次　そりやさうでもござりませうが、わつちと違つて次郎兵衛さまが、船に乘つて御覽じませ、半年命は續きますまい。五穀の少ねえ放れ島、どうして木の實や海草を喰つてばかり居られますものか。

運藏　その艱難をさせるが仕置、衣食に不自由ない所なら、何しに島へ遣るものだ。西を見ても東を見ても、便りも波の沖中だ、草でも喰つて命を繋げ。

ト忠次に向ひ憎くいふ、次郎兵衛是れを聞き思入れ

忠次　その御苦勞をわつちが代り、御恩送りをしたさゆゑ、無理合點の此お願ひ、どうぞ代りに遣つて下せえ。

運藏　假令いかやう申すとも、此儀ばかりは叶はぬわえ。

忠次　そんならどうでも。

甚九　えゝ、しちくどい、ならぬといふに。

忠次　え〻、お前さまに賴みはしませぬ。
次郞　あ〻これ〳〵忠次どの、其志しは嬉しいが、所詮それは叶はぬこと、お構ひ場所に長居は恐れ、早く爰を歸つて下され。
忠次　いえ、お構ひ場所へ來るからは、覺悟をして參りました、代りの願ひが叶はずば、お供をしてあつちへ參り、お世話でもいたしませう。
次郞　いや、それまでもお上の掟、科なき者は行かれぬわ。
忠次　え〻、羽根でも欲しいものだなあ。（ト次郞兵衞思入あつて、）
次郞　一旦の恩を忘れずして、其身を惜しまず次郞兵衞が、代りに島へ行かうとは、忘れは置かぬ忝けない、それに引替へ是れまでに、世話をいたせし甚九郞、其の恩をも辨へず。
甚九　なに世話をしたとは何が世話、是れまでこなたのい〻やうに籠められて居た甚九郞、人に情をかけるものか、こんな憂き目に逢ふものか。
庄藏　さうだ〳〵、村の司を笠に着て、小前の者を籠めるから、果ては報いで島へ行き、喰ふものさへも喰へねえのは、みんな其身のなしたる罪だ。
甚九　人を恨むな、わが身を恨め。（ト此時七つの鐘鳴る。）

運藏　そりやこそ七ツだ、船出の時刻、最早猶豫は相成らぬぞ。
お睦　そんなら、是れが。
九左　お別れでござりますか。
皆々　あゝ、別れともない〳〵。（ト皆々はツと泣く、次郎兵衞もこなしあつて、）
次郎　皆の衆にさう言はれると、わしも名殘りが惜しうござる。
運藏　えゝ又しても〳〵、ぐづ〳〵とよまひ言、疾く〳〵乘船いたさぬか。
虎藏　これといふも百姓共、わいらが名殘りを惜しむからだ、下れ〳〵。
　　ト虎藏は皆々を追つ立て、忠次の肩を引き立てるを振拂ひ、
忠次　何を意地惡を言やアがる。（ト虎藏をくらはす。）
虎藏　あいたゝゝゝ、うぬ、おれを打ちやあがつたな。
　　ト虎藏立ちかゝるを次郎兵衞睨める、是れにて控へる。
運藏　それ者共、猶豫いたすな。
捕手　はツ。（ト立ちかゝる。）
お澤　そんなら、是れが。

皆々　お別れでございまするか。

次郎　時節があらば、又逢ひませう。

蓮蔵　えゝ、きり／＼引立てい。

捕手　はッ、立ちをらう。

ト時の太鼓になり、誂への合方にて捕手次郎兵衛を引立てる、千之助袖へ縋り、お賤抱子を突附け、名残りを惜しむ思入、これにて捕手拂ひのけ、次郎兵衛を追ひ立て／＼船へ連れてはひる。双方名殘を惜しむ、次郎兵衛船の艫へ出て愁ひの思入。

お賤　左樣なれば、旦那さま。

千之　おとッさま。

九左　次郎兵衛どの。

皆々　達者でおいで下さりませ。

次郎　もう何にも言うて下さるな。

侍　えゝ百姓ども、下らぬか。

皆々　はあゝゝゝゝ。

ト此時千之助つか〱と行くを、甚九郎襟上を取り、酷く引退ける、忠次ウヌと立ちかゝるを、九左衞門留める。次郎兵衞これを見て、ハアと小縁へ出るを、

捕手　下に居らう。

ト引き据ゑる。次郎兵衞どうとなる。波の音の頭をきびしく打込み、船を上手の岩の蔭へ引き込む。皆々ハアと泣き伏す。

運藏　次郎兵衞出船の上からは、最早當所の住居はならぬ、今宵のうちに引拂へ。

甚九　はッ、畏りましてござりまする。

運藏　猶豫はならぬぞ。

虎藏
甚九　はッ。

甚九　岩瀬さまには、お役目御苦勞に存じまする。常願寺へ御入りあつて、御休息遊ばされませう。

運藏　いかさま、次郎兵衞をほッ拂へば、休息なして立ち歸らん。

虎藏　私もお供をいたして參りませう。

運藏　おゝ、案内いたせ。

虎藏　へい。

ト時の太鼓になり、虎藏先きに運藏甚九郎附いて下手へはひる。跡皆々見送り、かすめし波の音になる。

一　何と、あの岩瀬さまの、あの憎體なことわいの。

二　御陣代は御陣代とも思ふが、あの甚九郎が意地の惡さ。

三　これから名主を笠に着て、

四　どのやうな事を言はうも知れず。

五　あんな奴は疫病でも煩つて、

六　くたばつてしまうたら、

皆々　村中がのウ〳〵するであらう。

九左　あゝこれ〳〵、壁に耳、めつたな事を言はぬがよい。

皆々　ほんに、さうでござるなう。

ト波の音ばた〳〵になり、花道より市兵衞、木綿やつし、肌脫ぎかけ、脚絆草鞋にて、扇遣ひをしながら急ぎ出で來り、お賤を見て、

市兵　そこに居るは、お賤か。

お賤　おゝ、市兵衞どのか。

皆々　おゝ、待つて居たく〳〵。（ト市兵衛息の切れたる思入よろしくあつて、）

市兵　これ、水を一つ呉れ〳〵。

お賤　あい〳〵。（ト番手桶の水を柄杓に汲み來る、市兵衛一口呑み、胸を撫でおろし　ほつと思入。）

皆々　これ市兵衛どの、遲かつた〳〵わいなう。

市兵　なに遲かつた。こゝ、おそかつたと言ふからは、旦那さまは。

お澤　一足違ひで、たつた今。

市兵　え。（トぎつくり思入。）

お賤　御乘船なされましたわいなあ。

市兵　すりや、御出船なされたとか、ほゝほい。（ト當惑の思入。）

九左　これ〳〵市兵衛どの、沖の方を見さつしやれ。あれ〳〵、あの船が。

皆々　そでござるわいの。（ト是れにて向う正面へ、以前の遠島船見ゆる、是れをきつと見て。）

市兵　あの船でござりまするか。もう一足早く來たならば、旦那さまのお目に掛られたのに、僅かな遲れで鵜となつたか。此上は跡追かけて。（ト海へ飛込まうとするを、忠次九左衛門あわてゝ留めて、）

忠次　これ、滅法けえな事をする、おめえの體にもしもの事があつた時にやあ、殘つた人がどうなるも

のか。

九左　これが五丁か十丁なら、泳いでも行けやうが、丁度追手を受けたれば、最早船は一里から走つたわいの。

一　何ぼこなたが、泳ぎが達者でも、

二　なか〳〵追つ附かれる事ではない。

皆々　思ひ留つたがよいわいの。（ト忠次を始め皆々留める、市兵衞みな〳〵を見て、）

市兵　おゝ、こりや九左衞門さま始め村の衆。おゝ、こなたは思ひがけない忠次どの。

忠次　これ市兵衞どの、嘸殘念に思はつしやらうが、是れからこなさんの體が猶大切。

九左　必ず早まつた事をさつしやるな。

お賤　もしこちの人、氣を落着けて下さんせいなあ。

市兵　いかさま、追手に船足早く、今まで向うへ見えた帆も、入日と共に影もなく、一里と思ふ其うちにもう二里の餘も、あれ〳〵〳〵。（ト本意なき思入、ちつとこなしあつて、）今更言つても返らぬが昨夜立つたら晝までか、遲くとも八ツを打つまでには、歸れるのを殘念な、一時おくれたばかりに、旦那さまのお目に掛らず、暇乞さへならぬとは、皆の衆。

皆々　尤もぢや〳〵。

市兵　お賤。

お賤　道理でござんす。

市兵　皆の衆。

皆々　尤もぢや〳〵、道理でございますわいなう。（ト市兵衛思入あつて、）

市兵　斯うも因果の重なるものか、旦那さまには獄屋の呻き、御隱居さまにはお年病み、搗て加へて産後にて亡くならしやつたお上さま、御戒名と齒骨をお屆け申しに下總のお里へ參つた序、成田さまから周坊の宮へ、旦那さまのお身の上を一心籠めてお願ひ申し、御鬮を取れば百番の大凶といふ此お鬮。（ト提げ煙草入より鬮を出し、）神佛を疑ふは勿體ないと思へども、大事の旦那のお身の上、無難に落着あるやうと、一心籠めて又願ひ、いたゞく鬮も又百番、詮方盡きて取つて返し、急ぐ途中で持病の脚氣、心は急けど道はか行かず、一晩餘計に泊つたばかり、旦那にお目に掛らぬのが、殘念でござるわいなう。

お賤　おゝ嘸さうでござんせう、旦那さまもお前に逢はぬを、殘り惜しう思召したか、幾度となく市兵衛はまだ歸らぬか、市兵衛はまだ歸らぬかとおつしやりましたわいなあ。

市兵　おゝ、そんなに市兵衛々々々と、おつしやつて下さつたか。
九左　いやもう、言はれた所ではない。一言いうては向うを見、二言いうては向うを見、逢ひたい樣子でござつたわいの。
○　おゝ、九左衛門どのゝいふ通り、市兵衛々々々とあんまりたんと言はつしやるから、指を折つてかぞへたら、二十四五度言はつしやつた。
□　それを手めえは數へて居たのか。
忠次　後生樂な野郎め、此中でそんな事を數へる奴があるものか。
九左　えゝ馬鹿々々しい。（ト市兵衛忠次へ思入あつて、）
市兵　それに忠次どの、所構ひの身の上で、こなたが爰にござるも不思議。
忠次　おめえも知つて居る通り、芥捨場の野天から大喧嘩のあつた時、簀卷にされて流されるところ、次郎兵衛さまの一言で危ひ命を助けられ所構ひで濟みましたが、あの時どんぶりやられりやあ、流れ次第に土となり、水死佛となりやあいゝが鳥の餌食になる體、旦那のお陰ばかりであれから仕てえ事をして、身分に過ぎた女郎も買ひ、日に五合と積つたら酒も幾樽呑んだか知れねえ、其恩返しを仕ようと思つて。

お賤　旦那さまの身代りに、行かうというて下さんした。これこちの人、よく禮をいうて下さんせいなあ。

市兵　そんなら、こなたが。

忠次　わつちが代つて行かうと思つて、態々來たがそれも叶はぬ上の御法、嘸お前も本意なからうが、又旦那もどのくらゐ、本意ねえ事だか知れやあしねえ。

九左　人は見掛けに寄らぬもの。

お澤　よく其恩を忘れずに、代りに來て下すつた。

市兵　假令代りに行かずとも其志しが何よりか、忝なうござります。これお賤、旦那は何とおつしやつた。

お賤　お前がお目に掛つたら、お話しもあらうけれど、わたしゆゑ別に斯うともおつしやりもせなんだが、只御隱居さまとお二人のお子を、くれぐ〵頼むとおつしやりましたわいなあ。

市兵　そりやあ頼むとおつしやらずとも、是れまで長の御恩送り、跡はおれが引受けて何處がどこまでお世話せにやならぬ。

九左　此村にござるなら、及ばずながら、わしらも共々。

皆々　お手助けを仕ようもの。

お賤　地面は元より諸道具まで、殘らずお上へお取りあげ。

市兵　それでは殘りの主從も。

九左　明日ともいはず、今日限り。

お賤　もう此國には居られぬといなあ。

忠次　あゝ、お氣の毒な事だなあ。（ト皆々愁ひの思入、波の音になり、下手より甚九郎出來り、）

甚九　まだぐづ〳〵して居るのか、たつた今立退けと、運藏さまが嚴しい言附け、きり〳〵と立退かぬか。

市兵　馴染甲斐もない甚九郎どん、こなたもおれも同じ百姓、入らぬ指圖をさつしやるな。

忠次　よく四文と出やあがるなア。

甚九　いや同じ百姓とは何のこと、われは知らぬが今日からは、次郎兵衞が跡役で村の司の甚九郎、當所の者はどいつでも、おれが支配を受けねばならぬぞ。

市兵　えゝ、そんならこなたが今日からして。

甚九　姉ケ崎の名主だわ。

市兵　皆の衆、ほんの事か。
皆々　おいなう。
市兵　ムウ、名主とあれば、聞かねばならぬ。
甚九　さあきり／＼と、立ち退かぬか。（ト市兵衞を突倒す。）
忠次　えゝ、餘りといへば。（ト立ちかゝる。）
甚九　これ、運藏さまの仰せだわ。
皆々　むゝ。
甚九　おれに指でもさすが最期、此村には置かぬぞよ。
皆々　それだといつて。（ト立ち掛るを市兵衞留めて、）
市兵　これ、泣く子と地頭。
甚九　是非があるめえ。
忠次　そんなら是れから。
皆々　夫婦の衆は、
市兵　一先づ家へ立歸り。

お賤　直に今宵の其うちに。
市兵　御家内連れて當地の名殘り。
九左　えゝ、殘り多い、
皆々　事ぢやなあ。
甚九　えゝ、きり〳〵行かぬかい。
市兵　はい、只今參ります。

ト波の音、合方になり、市兵衛千之助の手を引き、お賤お梅の手を引き、九左衛門、お澤、百姓みなみな附添ひ、花道へはひる。忠次甚九郎殘る。

甚九　やい、無頼漢の木鼠、おのれも當所を立退かぬか。
忠次　えゝやかましいわえ、打捨つておけ、行きてえ時分に勝手に行く。
甚九　いや、こいつが〳〵、名主に向つて無禮千萬。
忠次　おらア上總のお構ひもの、名主に義理も絲瓜もねえ。
甚九　何だと。
忠次　いはゞ無宿の此の忠次、こんたの支配は受けねえぞ。

甚九　いや、受けようが受けまいが、以前は當所の生れの者、お構ひ場所へ置く事はならぬ。

ト引ッ立てにかゝるを、附廻して、

忠次　爰へ寐泊りしやあしめえし、草鞋脚絆が見えねえか。

甚九　何と。

忠次　さつきから疳癪の、蟲を怺えた意趣晴らし。

ト傍にある汐木を取つて、甚九郎の天窓を打割る、甚九郎糊紅になり、

甚九　や、こりやあおれが天窓を。（ト忠次にかゝる。）

忠次　これで蟲が。（ト甚九郎を投げ退けて、）納まつたわえ。

ト三度笠をかつぐを木の頭、濱唄、波の音にて、甚九郎天窓を押へる見得、此の仕組よろしく。

ひやうし　幕

（次郎兵衛宅門外の場）――本舞臺正面冠木門生垣、内に茅屋根、土藏並びて名主の宅、是れに續いて百姓家、田甫の書割り、夜るの遠見、上手に掛稻、道祖神の石碑、村境の榜示杭、松の釣枝、同じく立木、下手一面の藪疊、總て次郎兵衛宅門外の體。時の鐘、合方にて、右の道具幕切つて落す。と

右の鳴物にて、上手より九左衛門先きに、お澤百姓皆々出來り。

九左　扨氣の毒千萬な、次郎兵衛どのゝ家財は殘らず上へ上り物、主水さまの御口こぼしで、手廻りの物を下されしゆゑ、それを持つて夜の内に、木更津まで行けとのこと。

お澤　年頃お世話になつたわたし等、殊に倅が粗相から、斯ういふ事になつたゆゑ、道までお送り申さうと、連れ立つて來ましたが、跡には見えませぬかな。（ト百姓の一二上手へ思入あつて、）

一　あれ〳〵、あの駕籠が御隱居さま、ま、小供衆が無心ゆゑに、お氣の毒でもないけれど。

二　それ〳〵、お氣の毒なは御隱居さま、是れまで何の御不自由なく、

三　樂なお暮しなされたも、是れから先きは不自由勝ち、

四　何をいふにも、市兵衛どの夫婦の衆の厄介ゆゑ、

五　以前に替る事ばかり、

六　次郎兵衛さまをお案じなされ、此間から御病氣ぢやといふが、

皆々　御全快があればよいが。

九左　あれ〳〵、もう市兵衛どのも出てござる。

皆々　是れから一緒に行きませう。

ト在郷唄、合方になり、上手より風呂敷の附きしあんぽつ駕籠を、百姓二人にてかつぎ、お賤抱子を抱き、背中に抱子を背負ひ、千之助の手を引き、市兵衛大風呂敷を背負ひ、傘、行燈を附け下駄雪踏類をまとめて繩にて引ッ提げ、お梅抱子を背負ひ、何れも旅なり好みの通り。

九左　市兵衛どの。

皆々　もう支度が出來ましたか。

市兵　これは／＼皆の衆、御苦勞でござりまする。

お澤　市兵衛どの、御隱居さまはどうでござる。

市兵　どうも御苦勞が增すので、たゞ御病氣が重るばかり。

九左　それはまあ困つたもの、さうしてけふは、何處まで立退かつしやる。

市兵　所拂ひの事なれば、何處へお願ひ申す事もなりませぬゆゑ、先づお駕籠で村境まで參ります積りでござります。

百姓皆々　それではちよつと御隱居さまへ。（ト百姓みな／＼行き掛る。）

九左　あゝこれ、靜かにさつしやれ／＼。御挨拶を申しましたら、却つて御迷惑でござりませうから、御挨拶は申さぬがよい。

お澤　よろしうおつしやつて下さりませ。

市兵　畏りました、皆さまの思召しは私から申し上げまする。さあどこまでお出でなされても同じ事もう爰が村境でござりますれば、これでお別れ申しませう。

お賤　お送り下さるのは有難うござりまするが、お別れ申すのが思ひでござりますから、もうお歸り下さりませ。

九左　皆の者は兎も角、わしらはせめて隣村まで。

市兵　左樣でもござりませうが、お前さまも娘御はなし、御一緒にお歸り下さりませ。

九左　是非お送り申す氣で參つたが、然し迷惑になつても惡うござるから。

お澤　市兵衛どの〻詞に從ひ。

一　それぢやあ、これで、

皆々　別れませうか。

市兵　どうぞさうして下さりませ。

九左　そんなら是れで別れまする。住所がどこと極つたら、早速便りをして下され。

市兵　是非お知らせ申しまする。

お賤 左様なれば御機嫌よろしう。
九左 おまへの方も、
皆々 達者でござれ。
九左 おゝ、別れともないなあ。
一 さあ、名殘りは盡きぬ。
皆々 さあ〳〵、ござれ〳〵。
ト右の合方になり、九左衞門お澤を皆々せり立て〳〵、上の方へはひる。お賤跡を見てはツと泣く、市兵衞思入あつて。
市兵 これお賤、何を泣くのだ。
お賤 皆さんに別れたら、心細くなりましたわいなあ。
市兵 さうさ、大風の吹いた跡のやうだ。(ト愁ひの思入)
千之 これお賤、睡くなつたわいの。
お賤 おゝさうでござりませう〳〵、もう少しでござりますから、御辛抱なされませ。
ト知らせにつき日覆より月出る、砧入り誂への合方になり、市兵衞後へ思入ある。此時次郎兵衞の

一構少し遠くなる。

市兵　お賤見やれ、月が煌々と冴えたので、旦那さまのお家が見えるが、今見るのが見納めだ。

お賤　ほんにあのお家も今日かぎり、もう見ることはならぬかいなあ。

市兵　今見るのが見納めぢやわい。（ト お賤ほろりと思入）これおれも跡から行く程に、坊つちやんとお梅を連れて、先きへ行きやれ。（ト お梅抱子ないぶり附けながら）

お梅　とつさん、赤が泣いていけないよ。

市兵　おゝ、泣くなら小僧は爰へよこせ。（ト抱子を取り懐へ入れる）さあ、おつかあと早く一緒に行け。

お梅　おらお睡くなつたから、早く家へ行きたいよ。

お賤　もう歸る家はないわいなう。

お梅　あすこの家は。

市兵　もうあすこへは行かれぬわえ。

お梅　はあゝゝゝゝ。

千之　さうして何處へ行くのだえ。

市兵　あれ、あのお家より、又よいお家へ參りまする。
千之　おゝ、そりや嬉しい〳〵。
お梅　わたしも嬉しうござります。（ト子役兩人悦ぶを見て、愁ひの思入）
市兵　これお賤、何にも知らず。
お賤　あい、おいとしうござりますわいなあ。
かごさあ、お上さん參りませう。
お賤　あゝもう是れが。（ト名殘り惜しき思入）
市兵　これ、早う行かぬか。
お賤　どれ、參りませうわいな。
ト時の鐘、合方かすめて波の音になり、お賤跡へ心の殘る思入にて、見返り〳〵駕籠に附き千之助の手を引き花道へはひる、跡に市兵衞殘り、抱子の泣くをいぶり附け、田舍の子守唄を唄ひながら跡を振返り、
市兵　あゝ、あのお家もけふ限り、誰が住居になる事か、名殘り惜しいことだ。（ト是れにて花道へかゝるを、向うの遠見打返して、又少し遠くなり、市兵衞見て思入）この姉ケ崎に年久しく、相續なしたる

名主の家、田地は元より松林、畑もそれ〴〵貯へしも、不圖した事の越度より、旦那は流島の島守りと朽果てたまふも計られず、お家は元より家財とも、みんなお上の上り物、如何なる宿世の業報か、小島の家名の滅しる時節、あゝ此田も二月種をおろし、これ此やうに實つても、此儘捨てゝ行かねばならぬ、死ぬる子は眉目よきと、今年の稻の出來のよさ、長の夏中田の草を、取つたも今は無駄となつたか。

　ト四邊を見廻しながら跡すさりに行く、此内遠見打返し極遠く見える、市兵衛石につまづきよろめく、赤子泣く、市兵衛こなしあつて、

えゝ、こいつはしまつた。

　ト懐の抱子をゆすり上げるを、木の頭。

こりやあぐつすりと、やりをつたわえ。

　ト氣味の惡きこなし、本釣鐘三重にて、

ト幕外、波の音、誂への砧入合方にて、市兵衛花道へはひる。

幕

三幕目

筑波屋格子先の場
二階座敷の場

〔役名〕━東金茂右衞門、紫太夫親勘八、岩淵運藏、東金子分鷲の長吉、姉ヶ崎村の甚九郎、運藏下部關平、太鼓持壽作、若い者十吉。傾城紫太夫、市兵衞娘お梅、新造葉山、同茂山、茶屋女房其他。

（格子先の場）━本舞臺向う一面庇附の赤壁、惣格子、上の方江戸町一町目の木戸口、人の出入り、片揚戸飾り附き、是れに續いて千本格子一間の入口、筑波屋と記したる紺木綿の暖簾、下の方片蓋の用水桶、此上へ番手桶を積み重ね、よき所へ茶屋床几二脚、鳴物すがきにて幕明く。と爰に〇△□の仕出し思ひ〳〵のこしらへにて行き違ひ、よき時分に臺屋の若い者一人大臺を天窓に載せて出來り、

〇　こウ〳〵ひやかしたばかりで歸るのも氣が利かねえ、押し上つてもいゝぢやあねえか。

△　是れから河岸へ行つて、遊ばうぢやあねえか。

□　常談いつちやあいかねえ、花彦が居殘りに居やあがるから、連れて歸らにやあ親父へ濟まねえ。

〇　それだと言つて居所を突き留めにやあ、此儘は歸られねえ、何處に居るだらう。

□　べらぼうめ、人を尋ねるに居所の當りを、聞かねえ奴があるものかえ。

臺屋　もし〳〵、花屋の彦さんを、お尋ねなさるのかえ。

三人　お前知つて居るのかえ。

臺屋　達磨横丁の彦さんだらう。

○　そりやあ逢つた、あの男はひよこ／＼と歩くから極りはねえ、水道尻の方に居るだらう。

△　此内が永くならあ。

三人　さあ行かう／＼。

ト皆々下手へはひる。誂への鳴物にて花道より運藏、羽織、大小、重ね草履、勘八着流し、羽織、更けたるこしらへにて秋草を持ち、跡より關内角字の紋附捻切り奴、一本差しにて出で花道にて、

運藏　月と花雨手に提げて此廓で、呑めや諷へやうつゝなく、戀に心を惹かされて。

勘八　色の世界へ來て見れば、見世すががきの格子先、連立ち覗く俤は花ふり渡る天人の、

關門　音樂ならぬ三味線の、絲にからんだ爪彈きは、

運藏　端唄で心やはらぐる、實と情の二子山、峯を並ぶる筑波根の、

勘八　同じ名に呼ぶ紫は、親仁に過ぎた鳶が鷹、

運藏　髭も自慢か果報者、寐て待つ床の、

勘八　よウ／＼、お樂しみ／＼。

運藏　又おだてるか、うるさい奴の。

ト是れにて三人舞臺へ來る、暖簾口より仲居一、二中間のこしらへにて葉山、繁山新造のなり、子役二人禿にて、十吉若い者のなりにて出て來る。

十吉　これはく、紫が大盡の御來臨、太夫さまもお待兼ねなされてござりませう。

女皆々　もし紫さん、ようござんしたなあ。

運藏　葉山繁山みなのもの、いつくまでも顏揃ひ、身共も夕刻より參らんと存じて、蔦屋まで手紙を出せしが、此勘八に出逢ひ、思はず爰へ釣りこまれた。

仲一　勘八さんは、昔とつた杵柄で、

仲二　紫さんのお氣に入り。

勘八　御案内申せしは、又もや風の替らぬうち、お前方にも落着かせ、又笑はせて樂しまうと、親方さんへの手土産は此の秋草。（ト取交ぜたる草花を出す。）

十吉　もしく、その七草なら、唐土の鳥の渡らぬさき、七草の御祝儀を。勘八さま如在はないな。

勘八　だまつて居ろよ。

運藏　幸ひその草花を取分けて、太夫が床へ入れておきやれ。

紫山　もし紫さん、床入りとは、人聞きが惡うござりますぞえ。
仲一　お大盡の口癖で、寐て花遣らうと心の謎々。
運藏　あはゝゝゝ、廻り氣な奴ではある、葉山そちへ賴んだぞ。
葉山　あい〳〵、そんなら半分紫さんのお部屋へ上げて。
勘八　跡は內證へお目に掛けて下せえ。
禿一　其花は、わたしが持つて行かうわいなあ。
葉山　いや〳〵、子供に花はあぶない〳〵。
禿二　いえ〳〵、散らしはせぬぞえ。
運藏　散らさぬとは出來す〳〵、關內は供部屋で休息いたしやれ。
仲二　そりや、十吉どんがよいやうに。
十吉　其の案內はわしが。
關內　そんなら下郞も、共々に。
皆々　さあ、ござんせいなあ。（ト流行唄になり、女形、禿、關內、十吉暖簾口へはひる。運藏勘八殘り）
勘八　旦那、お賴みの一條とおつしやるは、何の事でございます。（ト合方になり）

運藏　それには深い樣子のあること、先年我が國許にて九左衞門と申す者の娘に、隅と申す美婦があるおや、尤も身共は代官の役目を勤め居れば、迂濶に口外ならねども、隅が容色に迷ひ、かれを女房にいたさんと存ずれども、一人娘の事なれば、兎やかう申して應對せず、それゆゑ猶更身共が執心。

勘八　して〳〵、其の娘を、お手にお入れなさいましたか。

運藏　なか〳〵一應や再應で、心の儘に參らばこそ、手延びになりし其内に月に叢雲花に嵐と申すは、同村に宗次郎と申す者が猪脅しの役に當り、折々筒音をいたし彼の猪を追はんとせし鐵砲が外れて、不便や娘お隅をたつた一撃ち。

勘八　すりや、其の娘を。南無阿彌陀佛々々。定めし親許ぢやあ下手人を取らねば承知しますまい。

運藏　其の科により宗次郎は、下手人の刑に行ひ、又猪おどしを言附けしは、其村の名主小島次郎兵衞ゆゑ、これも流罪にいたしたが、其のくらゐな事では身共なか〳〵腹が癒ぬ、其の當座といふものは、寐た間も忘れた事はないわえ。

勘八　それは〳〵、お力落しでござりませう。

運藏　其頃は何一ツ手に附かなんだけれども、去るものは日々に疎しとやら、其後この鎌倉へ御年貢納

めの砌り、諸役人同道にて廓中へ參りしが、爰に不思議と申すは筑波屋の紫が面差し樣子、鐵砲で相果てたるお隅が顏に瓜を割らずと其儘、寸分違はぬのみならず、山家育ちと廓の全盛、それゆゑ身共が外ならず、執心いたすも無理はあるまい。（ト車輪になつて勘八を叩く。）

勘八　あいたゝゝゝゝ。

運藏　これは粗相、許しやれ〳〵。

勘八　其位あつくなつてのりが來にやあ、面白い話しも出來ない、實にあなたはお優しい御氣性ゆゑ、太夫も仕合せ、私も悅んで居ります。

運藏　たゞ情ないは、我がものならぬ傾城の憂き勤め、手前ばかりを客とも情夫とも存じ居れば忽ち身請けいたして宿の妻といたせども、彼れが間夫と申すは諸侯方へ人入れいたす、東金茂右衛門と申す奴、馴染を重ねて紫とは深い情交、この東金の手さへ切らば、貴樣は假にも親許なれば、望みの通り引取るとも、一生涯樂にいたしてくれるわ。

勘八　そりやお願つたり叶つたり、その東金の茂右衛門が、人入れでも人喰ひ馬でも、わしが一番こだはりやお挺でも動かぬ要石、地震ぢやあねえが、屋體骨を引ツぷるはしてお目に掛けませう。

運藏　いや〳〵其一言は慥な誓言、賴みの印に持合せたる五十兩、どうで入費もかゝるであらう。其の

勘八　それぢやあ此のお金を私へ、有難うござります、是れまでは旦那なれど娘が爲にはおとつさん、外入用身請の代金、またゆる／＼と談合いたし。（ト運藏胴卷より五十兩包の金を出して勘八へ渡す。）眞身になつて働きませう。

トテンツヽ、角兵衞獅子になり、花道よ□甚九郎、着附、羽織、前幕の名主のなり、お梅切繼ぎ窶しなり、娘のこしらへ、甚九郎引立てられて出來る、跡より東金の子分長吉、派手なるこしらへ、表附きの下駄、手拭を摑んで出來り、

甚九　うしやあがれ／＼。

お梅　はい／＼、お許しなされて下さりませ。

長吉　おい、田舍の伯父さん、其娘ツ子は何の仔細があるか知らねえが、こづき廻して引立てねえでも高が女だ、殊に大門の内で折檻するのを見ちやあ居られねえ、まあ許してやんなせえ。

トお梅を引き分ける。

甚九　お前は見ず知らずの往來の人さうなが、此女めは耳口でいける奴か、其の譯も知らねえで口出しをしなさると、掛り合ひになるぜ。

お梅　もし／＼、何もおつしやつて下さりまするな。

長吉　氣の弱い事を言はねえもんだ。さあ是れからはおれが相手だ、先きへ立つて行かッし。
甚九　行かなくつてどうするものか。（ト甚九郎先きに長吉お梅をいたはつて舞臺へ來る。）
運藏　これ〳〵、それへ參るは甚九郎ではないか。
甚九　これは旦那、よい所でお目に掛りました。此の女を御存じでござりますか。
運藏　はあ〳〵、どうか見たやうでもあるが、いづれの何者ぢや。
甚九　此女はいつぞや遠島になつた、名主次郎兵衛が召使ひの、市兵衛が娘でござります。
運藏　その市兵衛が、何うして是れへ。
甚九　さ、如何に女子供とはいひながら私への惡口、うぬら親子が貧乏から難儀をするのを、あなたさまと私どもが計らひで、喰ふや喰はずになつたと、口から出放題を申しました。
運藏　こりや女、わいら親子の難儀をするのを、おのが主人の名主次郎兵衛が越度によつて、主従ともにちり〳〵ばら〳〵、身共らを恨むとは料簡違ひ、重ねて申さば其分にはいたさぬぞ。
甚九　まだ〳〵そればかりぢやあござりませぬ。彼れが申すを承はりまするに、御領主さまの御家老黒出濱之進さまより、次郎兵衛が預かりある東雲の茶碗を虛妄せしと言ひ觸らし、出る儘の僞り騙り、憎い奴ぢやあござりませぬか。

運藏　跡方もなき盗賊呼はり、こりや此分にはおかれまい。

甚九　それゆゑ御同然に役儀を抱へて居りますれば、それなりに聞き捨てにもならぬから、家へ引きずつて親の市兵衞へ斷らうと思ひましたら、大膽な奴ぢやあござりませぬか、次郎兵衞が悴の千之助とちよくり合ひ、家出して居りますとのこと、どうでこんな奴は僞りを申して、御地頭樣へ投込むまいものでもないから、あなたさまへお届け申して、お指圖次第にいたさうと、是れまで連れて參りました。

運藏　何もかも聞き届けた、左程身共を恨むなら、其の潔白を見せてくれう。

甚九　さあ旦那の前で、何とでも言つて見ろ。うぬ、此口でほざいたか。

ト扇の要でお梅の顏を突く、お梅はツと泣落す。

長吉　こウ往來中で女の折檻、此の鎌倉ぢやあ通らねえ。

勘八　これさ甚九郎さん、挨拶は時の氏神とやら、お前も旦那もお腹立もござりませうが、わしが詞もちつとは立て。

運藏　いや〳〵勘八、此儀は其方の知らぬこと、口出しいたすな。

勘八　それもさうだが、年寄つては見るが大儀だ。

運藏　はて、そち達は筑波屋へ參つて、何かの密談。

勘八　そんなら旦那、お先きへ參りませう。（ト暖簾口へはひる、此時關内うかゞひ出て、）

長吉　さあ姉さん、こんな所に居ちやあ面倒だ、早く歸んなせえ。

お梅　はい〳〵、有難うございますが、お許しも出ぬ其うちに、歸りたうても、此の儘ではさ

長吉　はて氣の弱いこと、盜み騙りぢやアあるめえし、おとなしくなぐられりやあ、それで此場は帳消しだ。

關内　いや、それはなるめえ。

長吉　なぜならねえのだ、國で起つたうぬ等がいきさつ、所もあらうに御免の場所で、女を手籠めにするからは、おれが相手だ。

關内　さう言や、うぬを。（ト長吉へ掛るを、立廻つてきつと捻ぢ上げ、）

長吉　人脅しな刃物三昧、誰を切らうと拔きかけた、鈍刀刃金の木刀めら、一寸試しに何處から切る、柄ッとあいやお切腹りでも、血の氣の多い鷲の長吉、富士と筑波は向う前、千里一飛び羽がひにかけ、うぬらが命も根腐れに、おれが蹴爪で蹴殺さうか。

トきつとなつて關内を投げる、運藏甚九郎拔きかける、これを見得よく留める、此時花道の揚幕にて、

茂右　まあ〳〵待つた。
運藏
甚九　なに、待てとは。
ト摺鉦入りの鳴物になり、花道より東金茂右衛門、着流し一本差し、くさりの烟草入、柾の下駄、手拭を肩へかけて出來り、
茂右　稻妻やきのふは東けふは西、ごろつき仲間の魁にお先き眞ツ闇あぶない所、どうした縺れか知らねえが、其善惡を東金がさらりと流す大車輛、それへ行つて洗つて見ようか。
ト右鳴物にて舞臺へ來り、三人思入、お梅下手へ寄つてうつ向き居る、長吉きつとなる、茂右衛門ぢろりとねめ附ける、是れにて控へる。
運藏　待てと留めたる、其の方は。
關内　何者なるか知らねえが、留め立ていたして怪我まくるな。
茂右　怪我も合點飛込んで、留めるは東金茂右衛門といふ、小鬢ながら男の端くれ、相手といふは子分の長吉、こなさんは御大身、しかも上總で代官職。
運藏　や。
茂右　いやさ、岩淵さまともあらう身が、拔いた切つたと仰山に、いふは廓の仲の町、遊里で人をあや

めては、やつぱり御身のすたること、それだによつて私へお預けなされて下さりませ。

運藏　合點がゆかぬ身共が姓名、岩淵などゝは思ひ違ひの知つた顏。

關內　お旦那さまは誰あらう、廓で其名も紫大盡。

甚九　迂濶な事を申したら、却て其身の爲にならぬぞ。

茂右　こりや面白い、本名隱すも仔細があらう、こつちは根こそげ見拔いた面體、此の長吉が手向ひのお詫びをするも五本の指、切つて捨てちやあ行かれめえ、わしも廓で東金と人に知られた男一疋大盡風を吹かされちやあ、相手替つて此場の一埓跡へは引かねえ、それとも本名隱さうと打たんこに岩淵と、ざつくばらんに解けて出りやあ、詫びてこなたの顏を立て、野郎が越度はわしが誤り脛骨立つて言はうより、笑つて仲よく遊ぶのが、廓の中ぢや通と言ひやす。

甚九　旦那、今東金が言ふ通り、大盡に負けたとありやあ男の恥と廓の聞え。男と見掛けて御身分を、明かして互ひに隔心なく、ざつくな話しに紫の、いや、村雨の霽れてさつぱり奥底なし。

運藏　こりや甚九郎の詞に一理あり、岩淵と見拔いた黑星、その名を忍ぶも役目を兼ね、それゆゑ紫と名に呼んで紫太夫を相方に、誰白露と思ひしが身共が心置き所、ふとした事の口論で引くに引かれぬ武士の意地。

茂右　張りと意氣地は吉原の掟も同じ廓の附合ひ、袖摺り逢ふも他生の縁、岩淵さんなら東金が、お心安くなつてもよし。

運藏　又東金と知るからは子分の事は汝にめで、言はぬが花の格子先き、義理に絡んで蔦屋から折々通ふそれがしも、頼みもあれば交易に。

甚九　左樣々々、詞多きは品少なし。

長吉　どうなる事と思つたが、先きで解けりやこつちでも、まんざら角も立てられめえ。

運藏　申さば廓で爭ふは、岡目から見て色戀と、思はるゝも面目次第。

甚九　心も此座も丸くして、

關内　一座に出逢ふ杯と、

茂右　とつくりと納めて下さりまするか。

長吉　どうやら絡んだ緣口を、

甚九　解いたもこつちに。

運藏　はて、何事も水魚の因み、

茂右　そんなら旦那、

運藏　東金茂右衞門。
茂右　紫　大盡。
運藏　其うち逢はう。（ト唄になり、運藏甚九郎暖簾口へはひる。茂右衞門思入あつて）
茂右　長吉手めえも氣の早い、喧嘩の相手はいつでもわれだ、もういゝ加減に丸くなれ。
長吉　親分、喧嘩といふとおれのやうだが、あの侍の相手といふは、此中から家へ來て居るお梅さんだ。
茂右　なに、お梅坊がどこでどうした。
長吉　それ、そこに居るわな。あの百姓に引ッ立てられ、踏んだり蹴たり、哀れな事と思つたから、四文とおれが買ひに出たのよ。
茂右　そりやあよかつた。おぬしが文句でごたつくと想ひの外。（トお梅を見て、）まあ〳〵爰へ掛けなせえ、人が見てもみつともねえ、可愛さうに女子供を引つ立てゝ、酷いことをしやあがる。然しおれがいふのは爰のことだ、おぬしも千さんも家出してから、おれが家へ匿つておくのも、こなたの親御市兵衞どのへ、詫言して家へ戻した其跡で、千之助どのが尋ねる千葉家の重寶東雲の茶碗首尾よく手に入るそれまでは、人目に掛らぬやうにして、出歩くことは惡いといふに、どうして

あの野郎に出逢つたのだ。

お梅　さあ其譯は、わたしが姉ヶ崎屋の世話になつて居るうち、千さんと言交し樣子を聞きましたが親旦那次郎兵衛さまは常にお茶がお好きゆゑ、黑出濱之進樣より預かり置きしお家の重寶、東雲のお茶碗大切になされしが、御流罪闕所の折に紛れ、代官の運藏が虛妄せしと若旦那のお話し、それがどうして漏れたやら、わたしが諸方へ話したと、あの甚九郎が代官に告口して辱しめ、爰まで無理に引ッ立てゝ、道々ぶつたり叩いたり、擧句の果に手荒い折檻、あの長吉さんがわたしを庇うて下さんしたを、腹立つて怖しい刃物三昧。

茂右　そんなら代官の運藏と甚九郎が、うぬらの惡事を隱さうため、女と侮り手荒い折檻、それで樣子がさらりと知れた。

長吉　それぢやあ家に居なさる千さんの父御は、いつぞや流罪になつた次郎兵衛さまとおつしやるお人が、千葉家より預かつた東雲の茶碗を、闕所の時に代官と、あの百姓の甚九郎が言ひ合せて、其寶物を引摺りこんだか、太え奴等だ。

茂右　やう〳〵當りが附いたゆゑ、是れから瀨越して寶の在所、首尾よく手に入る上からは、直樣濱之進樣へ納めなば、此程のお心遣ひお命は恙なし。

お梅　大旦那の御流罪も、御赦免願ふ傳手にもならう。

茂右　今日の難儀が其方の仕合せ、とはいふものゝ、首尾よく調ふそれまでは、必ず身許を知られぬやうに、隨分內輪にするがいゝぜ。

トお梅へ囁く、お梅思入あつて茂右衞門に囁く。此時暖簾口より葉山、繁山、新造のこしらへ○△仲居の裝。□◎禿にて出て、茂右衞門お梅の兩人を見て、悋氣のこなしあつて、

葉山　えへん〳〵。（ト咳拂ひする。茂右衞門びつくりして、）

茂右　誰かと思へば、葉山さん繁山さん、大分お盛んだね。

葉山　あい、おまはんも御盛んでありますよ。

繁山　おいらん始めわたしらは、何にも知らぬと思つて、

○　お察し心の東金さん。

△　たんとお樂しみなさんせ。

茂右　これさ、藪から棒のやうに、常談言つちやあいけねえ、何を言ふのだ、ちつとも分らねえ。

葉山　あい、知つて居りますよ。（トつんとする。）

茂右　何を知つて居る。待ちねえよ。（ト考へてお梅の事を思ひ出し、）はゝあ、此子の事かえ、可愛さうに

こりやあおれが國の者で、今しがたふつと爰で逢つたのだ、何と、かう女一人で、はる〴〵の所を來たが、可愛さうなものぢやあねえか。

葉山 あい、可愛さうざませう、察し心で居りますよ。(ト茂右衛門の肩を突くと、すぐに、)

繁山 あい、知つて居りますよ。

○ あい、知つて居りますよ。

△ あい、知つて居りますよ。

□ あい、知つて居りますよ。

◎ あい、知つて居りますよ。

トみな〳〵順に茂右衛門の方へ押寄せる。此見得目白の押合になつて、茂右衛門下手へ寄りながら、

茂右 おい〳〵、何うする〳〵。(トこなし。)

葉山 其のやうにじらを切んなましても、疾に知れてあるわいな。おいらんに言譯をしなまし。

繁山 ほんに惡性も大概がようござんす、晝日中見世先で、浮氣な事ばかりして、

○ おいらんの身にもなつて見なまし。

葉山 素人衆といふ者は、あつかましい。

繁山　大方この仲立ちは、長吉さんでござんせう。

△　それ〳〵、最前から何にも言はずにござんすから、覺えがござんせう。

長吉　こウ〳〵、おらあ何にも知らねえ〳〵。

葉山　おや、あつかましい、隱れんぼウして、爰へ出なまし。

□　さあ〳〵、出なまし〳〵。

長吉　これさ、常談ぢやあねえ、親分何とか言ひなせえな。

茂右　手前が言ふがいゝぢやあねえか。

長吉　それだといつて。

茂右　それだといつて。（ト兩人困つた思入、此時暖簾口より紫太夫花魁のこしらへにて出來り、）

紫　あゝもうよござんす、聞きたうござんせぬ。もし茂右衞門さん。

茂右　おめえは太夫。

紫　お前がさういふ心なら、わたしも今から目が覺めました、ほんに今までは賴もしいお人ぢやと、心底取されたのがわたしの誤り、何かの事まで打明けて、賴んだ事も水の泡、深入りしたのは覺悟の前、愚癡もいふまい是れからは、茂右衞門さんとはたゞの附合、お前の方も深い罠にかゝら

ぬやう、氣を附けたがよいわいなあ。（トつんとする、長吉思入）

長吉　こウ親分、大分風が替つて浪が荒い、氣を揉ませずと、あの子の種を言つてしまやあ分る事だ。

茂右　何さ、うつちやつて置け、これしきを廉にしてもうそろ〳〵と引込思案、おれの方でも目が覺めた。

葉山　東金さん、おいらんはともあれ、お前さんが目が覺めたと言ひなますは、見附けられてかえ、さあ其譯を。

皆々　言はしやんせえ〳〵。（トロ々に言ふ。）

長吉　これさ親分、痛くねえ腹を探られちやあ、連衆の面がみつともねえ、命を捨てりやあいゝぢやあねえか。

茂右　なにさ。打捨つておけ、先きから仕掛ける喧嘩なら買ひもするのだ。

長吉　それぢやあ困らあ。こウ姉さん。氣の毒だがおめえの店卸しをしねえと、爰のいさくさの勘定が合はねえから、正直な事さへ言やあ、おいらんの腹も解けるだらう。又おれが喋べるから、腹もいるだらう。おめえの國はどこだッけの。

お梅　はい、上總の國でとゝさんの名は、市兵衛と申します、段々の不仕合せで、此の鎌倉へ參りまし

たのでござります。」

長吉　さつきおめえの難儀をおれが引受けて、肩を持つたが縁となり、親分が來合せて子供の時分の話しが合ひ、その千之助といふ人は、お前と一緒に居なさるのだらう。

お梅　其の千之助さまもわたしゆゑに、いかい苦勞、人さんのお世話になれど、どうぞ二人とも、とゝさんの家へ、詫びして歸りたう存じますわいなあ。

長吉　そりやあ案じなさんな、親分の替りにおれが行つて詫言すらあ。

繁山　さうとは知らず、聞けば聞くほど困つた身の上、その千之助さまとやらいふお人も、お前のことを嘸苦勞して居やしやんせう。

○　移ればかはる人の身の上。

葉山　何事も世の成行き、七轉び八起きとやらで、

皆々　ありませうぞえ。

ト皆々氣の毒なる思入、紫太夫もこれを聞いて氣の毒に思ひ、茂右衞門にこなしあつて行かうとする、茂右衞門は脇見をする、是れにて紫太夫思ひ切つてお梅の側へ行き、手を突き、

紫　これ女中さん、堪忍して下さんせ。

お梅　はい、どなたやら、あのわたしへ。（ト言ひながら紫太夫の衣裳に心を留めて、見惚れるこなし）
長吉　親分々々、おいらんがあの通り、もう是れで腹の勘定はさらりと解けたらうね。
紫　茂右衛門さん、段々の不調法、
皆々　堪忍して上げなましえ。
茂右　いゝやならねえ、料簡しねえと言ひてえが、あんまり呆れて門違ひ。コウおいらんならいゝが、人を見て怒るがいゝ、おめえの相場が安くなる、葉山さん灸でもすゑてやんねえ、蟲が起るとどんな事を言ひ出すかも知れねえ。
□　お灸なら、堪忍してあげなまし。
茂右　コウ、しほらしいことを言ふものだ、なう長吉。
長吉　左樣さ、子供は憎めねえものだ。
ト此うち紫太夫、葉山に囁き、簪を抜いて出す、葉山是れを持つてお梅の側へ行き、
葉山　もしあの子え、おいらんが簪を上げようと言はしやんすが、貰うて下さんすかえ。
お梅　はい〳〵、こりや何よりよい簪、大事に持つて歸りませう。
皆々　よう貰うて下さんしたなあ。

長吉　それで双方仲吉原。
茂右　姉えは早く歸るがいゝ。
お梅　はい、何から何まで、
皆々　これも御緣に、
繁山　又遊びに、
お梅　そんなら皆さん。
皆々　靜かにござんせ。
お梅　有難う存じます。（ト唄になり、簪をめづらしさうに見ながら花道へはひる。）
長吉　さつきから腹が重てえと思つたが、さつぱり忘れて居た、成田講の寄り金が五十兩屆けられた、慥に渡しましたぜ。（ト懷中より胴卷包みを出して。）
茂右　さうか、そりやあ明日勘定しにやあならねえが、よし／＼慥に預かつた。（ト封じ金五十兩を取る。）
長吉　それで用は片附いたが、是れから花屋敷へ行つて、晝席があらば聞かうか。
葉山　長吉さん、久しぶりで二階へござんせ、何ぞして酒事を。
長吉　それもいゝが、おいらん。

紫　わたしはいゝから、皆さん一緒に。

皆々　そんなら長吉さん。

長吉　どりや、行きやせう。

ト唄になり、長吉、繁山、葉山、○、△、禿兩人暖簾口へはひる。跡に茂右衛門紫太夫殘り、なまめいたる合方。

紫　茂右衛門さん、今のはわたしが近年の大誤り、それにお前は堪忍して遣らうとも言はず、新造衆へ當附けて、灸をするゐいと言はしやんしたなあ。

茂右　おぬしのやうな蟲持ちは、灸でもするゐにやあ根が切れねえ。

紫　わたしの蟲は疳積でぢれつたい程氣を揉ませ、其曉は雲隱れ、闇になつても螢火の、その身を焦すわたしの思ひ。

茂右　その氣休めは聞きたくねえ、おれもちつとは疳積の蟲に障るはあの岩崎、高の知れた代官が大盡とは仰山に、身請けするとか引かすのと金びら切つても其手は喰はぬ、然しおぬしやあ金のある御新造さんになりたからう。

紫　其言譯を門中でとやかういうてもついちよつと、言はれぬ譯は義理あるとゝさん、あの岩崎と密々

話し、禿のみどりが聞き出して、これぢやわいなあ。(ト囁き合ふこなし、)

茂右　そんなら親父も、一ッ穴。

紫　どうも油斷がならぬぞえ。(ト此時暖簾口より、お文茶屋の女房のこしらへにて出來り、)

お文　おいらん、爰に居なさんしたかえ。

紫　あい、たつた今東金さんと。

茂右　お文さん、またお世話になりますよ。

お文　お座敷も明けて待つて居りますのに、なぜお上りなさんせぬ。太夫さん、お連れ申して下さんせ。さうしてあの紫お大盡さんも、いつもの通りやかましう。

茂右　やかましいもねえものだ、あの侍は紫といふが、ありやあ上總の代官で岩崎蓮藏といふ者だ。

お文　さうとも知らずふとしたことで家のお客、どう言へば斯ういふと、氣むづかしいお人ぢやわいなあ。

茂右　さうだらう、案じなさんな、おれが來て居るからは、おいらんを引き揚げて、思ひ入れじらして遊ぶがいゝ。

紫　わたしもきつと見せ附けて、それがいやならこつちも幸ひ。

茂右 賣らず買はずにたつた一口。

お文 一杯喰はせる鼠取りか。

茂右 悪戯者は爰に居らあ。（ト紫太夫の肩を叩く。）

紫 えゝ憎らしい、そりやお前ぢやわいなあ。（ト抓るをお文割つてはひり。）

お文 又始まつた、是れから跡が、喧嘩の種蒔き。

茂右 身の用心をさつしやりませう。

ト手拭を肩へ掛ける、紫太夫お文思入、流行唄になり、此の道具よろしく廻る。

（筑波屋二階座敷の場）＝＝本舞臺三間の間、銀張り墨繪の雁と薄の襖、上手繪心に九尺の塗骨障子屋體、下の方床の間、夜具棚の書割り、是れへ續けて手摺の内より篠竹の穗先を見せ、後廊下、軒釣の燈籠、總て筑波屋の二階座敷、爰に運藏、勘八、酒肴、臺の物を取散らし、葉山、繁山新造にて紅のくけ紐をわなにして持つて居る、前の杯臺の上に杯を載せ、關内立身にて杯を取らうとして居る。○、△、□、◎酌をして居る、釣狐の合方にて、賑かに道具納まる。

皆々 釣ろよ〱、信田の森の狐を釣ろよ。（ト關内いろ〱こなしあつて、杯を取りにかゝるを、左右より紐

を引く、これにて關内手先きを括られる、壽作紐を解き、さあ／＼、吞ましやんせ／＼。

葉山　是れからは、旦那の番でござんすぞえ。

蓮藏　いや／＼、身共は狐になるは大禁物ぢや。

壽作　それでもなが／＼狸ばかりなされまして、

關内　家來は貉で女郎衆は獺。

壽作　かやう申す壽作などは、雷獸の見立、わッちがおッこちると相方が恐れるやつさ。

勘八　此勘八も獸仲間へ、はひつた時には獅子であらう、是れからあつさり吞み直し、壽作が振事、花柳流を仕分けて、問屋卸し並みといふ面白い滑稽。

蓮藏　その振事はまた近日、あの紫は何をいたして居る事やら、葉山、繁山大概に連れて參らぬかえ。

葉山　それは承知して居りますけれど、勘八さんが御一座ゆゑ、ちつとの間賴むと言はしやんした。

繁山　わたしらの心配がおとつさん、お前には知れぬかいなあ。

勘八　これ／＼、切ない時に親を出せといふ事はあれど、今まで顏出しせぬといふ事があるものかな。

○　あれ、お座なりばかりいうて、又べんちやら言はしやんしても、

繁山　お前からそんな事言ひ出すと、旦那の思惑が違ひませうぞえ。

蓮藏　思惑違ひといふは、それがしをあげほし同然、勘八がなられば一時も待たれねども、たと内々に談ずる儀もあれば。

勘八　おつと皆までおつしやりまするな、東金でも座頭金でも、此の親仁が胸にあるのぢや、とはいふものゝ、是れまで度々の無心といひ、切羽詰つた其時に娘が身の上引當に、自筆で書いた手紙の端くれ、それをこつちへ取返し、證據なければ跡腹痛めず。

蓮藏　そんなら茂右衛門へ、無心の金を。

勘八　苦しい時の間に合せ、書いて遣つたが今ぢやあ後悔、何でもあの東金が懐中して、持つて居るに違ひなし。

闕內　もし〳〵さう事が極つたら。奥の座敷で東金を、ちらりと見たのがよい附目。

蓮藏　扨は茂右衛門が、紫の部屋に居るとは氣が附かぬ、道理で座敷へうせぬといひ。

勘八　これさ旦那、そりやアあなたの先繰りさ、今となつては達引を知らねえ娘ぢやござりませぬ。

蓮藏　いや〳〵、そりやあ身贔屓、いつそ身共が手短かに、紫に逢うてくれう。（ト奥へ行き掛ける。）

薬山　まあ待ちなまし、それではわたしら二人とも、あつてないのも同じこと。

○　わざとみんなに氣を揉ませ、

紫山　遊びを知らぬと笑はれ草。

壽作　壽作が座敷の梶を取り、

關内　下郎もこれから紙入に、所持なす手紙を掴り取り。

勘八　さうさへなれば納まる波風、爰に居ては仕事の邪魔。

運藏　これから奥で呑み直さう。

皆々　さあ、ござんせいなあ。（ト唄になり、運藏先きへ此一件殘らず奥へはひる。關内殘り、）

關内　犬も歩けば棒に當ると、危ない事と知りながら、東金が紙入にあるのは親仁の自筆の書附、取つて渡しやあ褒美の金、おらが旦那は紫太夫を宿の妻、下郎はふぢ色おツこち絞りを身請けして、やがて女房に鳴海絞りの中底傳ひに。（ト中の中庭を覗き思入あつて、上手障子屋體へ心附き、）またいい智慧も出るものだ、うまい／＼。

トそつと障子を明けてはひる。ばた／＼になり、内より茂右衛門、關内の腕を捻ぢ上げ出る、後より紫太夫出る。

茂右　晝日中戸惑ひして、何の用で踏んごんだ。

關内　おらあ旦那の御用があつて。

紫　お前は見馴れぬ奴さん、旦那といふは。

茂右　何さ、おれがよッく知つて居る、この紙入を尋ねるのか。（ト紙入を見せる。）

關内　南無三。（ト取りに掛る、立廻つて投げ退ける。）

茂右　始終の樣子を聞くとも知らず、人におぢねえ盲蛇、斯うしてしまへば是れからだ。

ト立廻つて、障子のうちへ投げ込む。

紫　さうして置いても、大事ないかえ。

茂右　こんな野郎は何でもねえこと。おれとおぬしと言ひ約束、今となつて勘八が、金がほしさにくろめられ不手勝手を言はれちやあ、義理ある親ぢやあ猶のこと、合せ物は離れ物、眞實おれを思ふなら、野暮なことだが誓紙を見せやれ。

紫　粹ほど野暮になるといふ此の色里の仇口も、起請誓紙は吳服屋の引札らしく思はれてわたしの心が濟まぬゆゑ、お前に見せたい心のたけ。（ト思入あつて、床の間に掛けたる足附の籠花活を見て思入、替つた合方になり、右の女郎花を取つて、）あい、投入れの草花が、わたしのお返事、これ見て下さんせ。（ト茂右衛門思入あつて。）

茂右　言はず語らず投入れの、花物言はぬ女郎花、遊女の誠を目先きへ見せ、花はあれども實らねど盡

きぬ契りは根分けして、此東金へ靡かうとおぬしが早速も感に堪へ、是れでやう〳〵根じめが極つた。

紫　これからわたしが悪留めも、ふッつり止めて堅氣となり。

茂右　見得も飾りも今のうち、

紫　それも承知で此花の。

茂右　謎も心も。

紫　解けましたかえ。(ト茂右衛門へ寄添ふ、兩人思入、この時奥にて、)

運藏　若い者は居らねか、彌助々々。(ト此聲にて兩人離れて、紫太夫花活を元の所へ掛け直す、運藏奥より出來る、)いつの間にやら、紫も參りしか、それを知らせぬは不所存な奴等ぢや。

紫　岩崎さんでござんしたか、わたしや座敷へ出られぬわいなあ。

運藏　そりや又なぜに。

紫　氣合が悪うござんすわいなあ。

運藏　氣合の悪いものならば、廻し座敷へ出られぬ筈、得手勝手なる俄の作病、その病根も存じて居るわえ。

茂右　人は病の器とやら、上から見えぬ人心、命あつての苦界の勤め、養生するにしくはないもの。

運藏　折も幸ひ手短かに、今改めてそれがしが、東金へ頼みがある。

茂右　其のお頼みは、座敷を明けろと言はしやるか、こりやお察し心がなかつたわえ。

運藏　いや左にあらず、そちも豫て存じの如く紫太夫は身共が執心、馴染重ねし上からは根引いたして宿の妻、そちも彼れを相方と人も知つたる仲なりしが、只今紫が身請けのそれがし。目障りなれば縁を切つて貰ひたい。

茂右　成程傾城遊女は賣物買物、身請けなさるは御勝手なれど、紫とは夫婦の約束、わしが方は兎も角も義理ある中の紫が、よもや得心はいたしますまい。

運藏　一旦武士が申せし詞、反故にはならぬ。得心の行くまでは意地を立てぬく岩崎運藏、手荒くいたさぬ計らひは、汝が子分の長吉を其儘許せし堪辨も、魚心ありや水心、互ひに立つる男の意氣地よも知らぬとは申されまい。

茂右　そりやアあなたの勝手づく、あの野郎めがこなさんを相手にしたのは情の道、其根を糺しやお泥水に濁つた中の惡巧み、それらを枷に紫の手を切らうとは淺慮な、ちと思召しが違ひませう、

運藏　ある事ない事言ひこしらへ、不承知なれば元々子分の越度は汝が誤り、料簡いたさぬ、それへ出

い。

茂右　身不肖なれど東金を、相手にせうと再返らば、胴腰するてどこまでも、御存分になりませう。

　　トきつとなる、運藏誂への鐵扇を取つて、

運藏　この鐵扇の平骨が、汝が肌身へめり込むまで、かう〳〵。

　　ト鐵扇にて茂右衞門を打ちすゑる。紫太夫口惜しきこなしにて、此中を割つて引き退け、

紫　まあ〳〵、待つて下さんせ。

運藏　退け〳〵〳〵。（ト入替つて打ちかゝる、紫太夫きつとなつて、）

紫　いえ〳〵退きはいたしませぬ、元の起りはわたしゆゑ、お前の心の納まるまで、わたしをどうなとなさんせえなあ。

茂右　こりや男同士の出入りの最中、女の知つた事ぢやあねえ、怪我でもあつては東金が、世間へ面が出しにくい、斯うなるからは岩崎が鼻を曲げるか鐵扇の、肝腎要の碎けるまで、さあ十分にやらつしやれ、びくともするのぢやござりやせん。

　　トきつとなる、上手よりばた〳〵にて、甚九郎勘八を引立て來り、

甚九　もし旦那、これにござりましたか。

運藏　そちや甚九郎、何故あつて勘八を、手籠めにして引立て參つた。

甚九　其の御不審は御尤も、いけッ太えは此の勘八、紫太夫が親で候のと客人の懐を當てにして、たんまり金を取りながら、いつの間にやら紫はこの東金と夫婦約束、小刀細工をする奴を、頼みにするのはこつちの誤り、此身請けはすつぱりと、思ひ切つておしまひなせえ。

運藏　それ聞くからは論は無益、深みへはまらぬ其先きに、身請けはさつぱり思ひ切つた。

甚九　もし旦那、斯うなるからは勘八とはあかの他人、恩でもなけりやあ貸した金は取返し、さつさと勘定なされませ。（ト運藏居直つて、）

運藏　やい勘八、今聞いた通り、身請けをせねば其方に恩義はないぞ、さうとは知らず最前貸した五十兩、後とも言はず、耳を揃へて返金いたせ。

勘八　へい／＼、其の五十兩は心得て居りますが、今といつてはござりませぬ、何卒少々御堪辨を。

甚九　貴樣も蟲のいゝ男だ、娘を當に東金へ、女房約束したからは、いゝ聟さんを持つたが仕合せ、岩崎さまの五十兩、だまつて居てもお返し申すが人情だ。

勘八　成程借りたに違ひない、いつまで握つて居るものか、四五日待つて下さいまし。

甚九　待つてくれろとよく出來た。たつた今返しやあがれ。

勘八　それだといつて無理なこと。
甚九　金はないか。
勘八　どうして爰に。
甚九　貴様は金を踏む氣だな、出來にやあ斯うして。（ト胸倉をしつかと取り）
勘八　あいたゝゝゝゝ。
甚九　痛きやあ出せ。
勘八　さあ〳〵出すよ。まあ、爰を放して下せえ。
甚九　太え奴だ、四の五のいはずと出しやあがれ。（ト突き放す。勘八咽喉の痛むこなし、）
運藏　現在娘の見る前で、命ゆゑ困る親も子も、口出しならぬは不便なものだ、紫を女房に極めるからは、いはゞ聟なり舅の難儀、そら吹く風で見て居るとは、よつぽど肚胸な東金茂右衛門。
甚九　いやさ、旦那、これが世にいふ色男、金と力はなかりける。
運藏　何さま首のないのにや劣つたものだ、はツはゝゝゝゝ。（ト運藏態と蔑む、勘八思入あつて、）
勘八　あゝ悔しいなあ〳〵、他人となりやあどうでもいゝが、娘に連添ふ聟の茂右衛門。あゝこの胸が裂けるやうだ、言ふめえとは思へども膝とも談合、運藏さまから貰つたものと思ひの外、娘の縁

が切れたに附け、返さにやならぬ五十兩、どうか工面は出來まいか。

茂右　成程御尤もではございますが、大枚の五十兩、今といつては不都合ゆゑ、口出しならぬ此の場の仕儀、約束變替する覺悟に、今でなくても大事あるまい。

勘八　いやさ、さうでない、金びら切つて意氣地の張合ひ、こんたも爰ぢやあ顏のきく東金茂右衞門と人に呼ばれ、聟にさせたはおれが仕合せ、手詰めを働く男の魂、爰らが一番達來の性根だ、おれが顏を洗つて下げて、かう此通りだ〳〵。

ト手を合せて茂右衞門を拜む、茂右衞門迷惑なる思入、

茂右　お前のいふのは尤もだが所もあらうに見得の場所、五十兩の金高ぢやあおれが口から言ひにくい、家へ歸れば百兩でも、右から左りへ渡しもせう、此譯合をあの衆へ頼んで見なせえ、まんざらいやとも言ひますめえ。

勘八　そんならこなたは出來ねえか、頼みに思つた東金茂右衞門、心許ない聟を持ち、名ばかり立派な看板男、大事な娘は添はされねえ。

甚九　舅の難儀を構はぬか。

茂右　なに、親とは。

勘八　親なら夫婦の約束しねえか。
茂右　さあ。
甚九　情婦でもなけりやあ身請けせうか。
紫　それではわたしが。
勘八　貧乏野郎を亭主にしたいか。
紫　さあ。
皆々　さあ〳〵〳〵。
勘八　金がなけりやあ遊びを止めろ、見かけ倒しなかすり取り、うぬがあるゆゑ娘が出世の邪魔になたのだ、さあ、きり〳〵金を出しやあがれ。
ト立ちかゝる、此時下より以前の長吉出で、むつとして勘八を突退け、握拳にて打たんとするを茂右衛門きつと留めて、
茂右　これ長吉、喧嘩に花を咲かすのか、世話のやけた野郎だなあ。（ト下手へはかす、長吉口惜しき思入）茂右衛門以前の成田講の積金を出して、さあ、おめえの困る五十兩、これで濟み方附けなせえ。
ト勘八の前へ出す、勘八思入あつて、

勘八　なに、五十兩出してくれるか。（ト包み金を取つて、）こりや成田山の積金だな、おぬしが金でもねえものを、遣つた跡で澁ぢやあねえかえ。

茂右　五十兩の通用だ、案じることがあるものか。

勘八　いや、けんのんだ止しにせう、危いことは嫌ひな勘八、間違へば盜人同然、掛り合ひに成田山詣當りの大盜人め、こんな金なら石瓦、何の役に立つものか。（ト金を投返す。）今改めて言つて聞かせう、娘はうぬに遣られねえ、運藏さまへ片附けりやあ左り團扇で一生安樂、うぬが口に合ふものかえ。

運藏　正直正路な勘八が、末の事まで思ふゆゑ、預かり金を遣はぬも堅氣な所が頼もしい、五十兩は扨置いて、身共が所持なす此の品は。（ト懷中より箱入りの茶碗を出して、）大金になる代物なれど、引手替りに預けておく。（ト勘八箱入りの儘取つて、）

勘八　こりやあ、何でござります。

運藏　それこそ千葉家の、東雲の。

茂右　や。

運藏　いやいや、暫く人目に見せぬが祕密。

甚九　そんな茶碗を。
蓮藏　割つて言はれぬ此の場の仕儀、勘八貴樣にしかと預けた。
勘八　金になると聞くからは、命よりも大切に、慥にわしが預かりました。
茂右　それ程金が貴いとは、慾に限りのねえものだ。
勘八　慾に放れて捨てた金、其の出所が氣に喰はねえ、あぶないことは眞ッ平だ。
甚九　親の難儀を構はぬ聟、これぢやあ夫婦の約束も。
勘八　いや、こつちからお斷り。
蓮藏　また相談を改めて。
甚九　紫太夫は心のまゝ。
勘八　そりやあ旦那の御勝手次第。
蓮藏　悦びあれば悲しみと、目前見るも氣の毒ゆゑ、蔦屋へ參つて何かの熟談。（ト言ひながら下手へ來り）
勘八　所を替へてあつさりと。
甚九　愁ひを拂ふ玉帚。
蓮藏　それも一興、二人のもの。

勘八 甚九 そんな旦那。
運藏 爰らが廓の意氣地だなあ。

ト唄になり、三人思入あつて花道へはひる。紫太夫跡先きを見送りて茂右衛門の傍へ行き、

紫 茂右衛門さん、堪忍して下さんせ、さうぢや。（ト刀の柄へ手を掛け、自害せんとするを留めて、）
茂右 これおいらん、何をするのだ。
紫 満座の中であのやうに、恥辱をかけたはわたしゆゑ、それぢやによつて。
茂右 はて、こなたを殺して、天晴男と言はれもせず、みんなきやつらが企み事。
長吉 企みと聞いちやあ猶のこと、三人共に命の遣り取り。（ト行かうとするを留めて、）
茂右 長吉待ちやれ、悪い奴等に與する親仁、もし又怪我をさせる時はこつちの弱身、今運藏が負けたは慥に尋ねる東雲の茶碗と言はねど口走つたが、人手に渡らぬ其先きに、おれが頼んで取返す。
紫 そんならあれが。
長吉 お梅さんの話しに聞く、千葉家の寶の茶碗とやら。
茂右 黑出さまへ納めねば、お命にも拘はるもの、手延びならねば跡追つかけ。（ト立上る。）
長吉 おれも一緒に。（ト此時以前の關内うかゞひ出で、）

關内　うぬを遣つては。（ト茂右衞門に掛るを立廻つて投げ退ける。長吉其儘引附けて、）
長吉　こゝ構はずと、
紫　怪我せぬやうに、
茂右　合點だ。
ト尻をからげる、長吉關内の天窓へ杯臺を冠せると、關内紫太夫の裾を引く、これを拂ふ、三方一時に木の頭、キザミに附吉原雀の唄になり、茂右衞門花道へはひる、この模樣よろしく、
ひやうし　幕

四幕目

鬼界ヶ島配所の場
蔦飾縛れ地藏の場

〔役名――俊寛僧都後に百姓市兵衞、島人頭、蟻王、島人六人、俊寛一子德壽丸、子役の娘等。〕
（鬼界ヶ島の場）――本舞臺上の方に二間の屋體、皮附きの丸太柱、石を載せたる板屋根、上手一間網代張り、下手一間入口、ちぎれる繩簾を掛け、出這入りあり、よき所に松の立木、日覆より同じく

釣枝、舞臺前打寄せの浪板、後硫黄の燃出し山の書割り、總て鬼界ヶ島の體、爰に島人六人、島人のこしらへにて、昆布を繩にて結へ居る、浪の音、島唄にて幕明く。

一 これ源太、さつき船が着いたさうだが、赦免船ぢやアあるまいな。

二 いや〳〵、赦免船ではないさうだ、大方きのふの暴風に逢ひ、吹き流されて來たのだらう。

三 どこの者だか知らぬけれど、秋のうちに歸ればよし、冬になつては浪が高く、容易に渡海のならぬ所だ。

四 山が白くなつて來ては、雁の歸る時分でなけりやあ、歸ることは出來ぬわえ。

五 米の用意があればいゝが、ない日には困るであらう。

六 爰で生れた者なりやこそ、海草ばかりで居られるけれど、脇の者では命が續かぬ。

一 大概三月か四月居ると、ころり〳〵と死んでしまふが、よく流されて來た人は、長く生きて居るものだ。

二 そこが習はうより馴れろとやらで、一年居れば物に馴れ、海草や生魚で命を繫ぐやうになる。

三 ほんに貴樣の言ふ通り、六年跡に都から流されて來た人達も、二人赦免になつたれど。

四 あとに一人殘されて、みぢめを見て居る俊寛どの。

五 此項は業じみて、漁場で魚を貰つたり、藻屑を拾つて喰つたりして、

六 汐風で黒くなり、しつかい島人同様だ、あゝなつては滅多には死なぬ。

一 時に今日ははかが行き、もう仕舞だから、手造りの酒でもやらうぢやあないか。

二 酒と聞いちやあお辭儀なしだ。

三 なんぞ肴の當があるかな。

四 曾鯨がのけてあつた、昆布と炊いて喰はうかい。

五 さう聞いては仕事はしまひ。

六 ちつとも早く呑まうかい。

一 さあ〳〵、みんなござんせ〳〵。

ト昆布を上手へ積んで、皆々屋體の内へ捨ゼリフにてはひる。波の音打上げ、床の淨瑠璃になり、

〽はるけき船路海山を、隔つや爰は九國の果て、千島の磯に捨てられし父の安否を問はんとて、旅の哀れを身に知りし、徳壽丸は蟻王諸共、濱の眞砂のまさな〳〵も磯邊傳ひに歩み來て。

ト此内浪の音、小鼓のあしらひ、花道より徳壽丸兒鬘振袖さし貫、小さ刀草鞋、紫の袱紗包を斜に背

負ひ杖を突き出來り、跡より蟻王後ろ茶筅、着流し半合羽、大小手ッ甲脚絆割掛の荷を肩へかけ、菅笠を持ち出で、花道にて、

蟻王　もし和子さま、爰がお尋ねなさる、鬼界ヶ島にござりまする。

德壽　して、父上にはいづれにお出でなさるゝや。

蟻王　いづれにおいでなされまするか、島人に承はり、お逢はせ申すでござりまする。

德壽　早う逢ひたい、逢はしてたも。

蟻王　六年が間御主君には、斯かる孤島の御住居、あなたをお逢はせ申さんと、蟻王が一心で參つてさへも物憂きに、又五穀さへなき放れ島、もしや此世を去りたまふか。

德壽　はる〴〵來る甲斐もなう、さうなる時は何とせう。

蟻王　いや〳〵左樣な事もござりますまい、何にもせよ向うなる苫屋へ參つてお尋ね申さん。

〽行方いづくと白砂の、いさご踏み分け主從は、苫屋の門に佇みて。

ト右の鳴物にて、兩人舞臺へ來り、

暫くお待ちなされませ。賴みませう〳〵。

〽おとなふ聲に島人立出で、見れば見馴れぬ旅人に、心を得ざる面持にて。

ト是れにて内より、島人一、二出で、

一　見れば島には見なれぬ旅人、賴みたいとは何事ぢや。

〽いふに蟻王小腰を屈め。

蟻王　お尋ね申すは餘の儀にあらず、六年あと都より、此の島へ流されし法勝寺の執行俊寛は、恙なくこの島におはするや。

二　むう、俊寛僧都を尋ねるからは、

一　さては身寄りの者ぢやよな。

蟻王　則ち是れにをりまするは俊寛僧都が一子にて、斯くいふ我は家臣なり、いづれいづくに在するや、御存じならば教へて下され。

〽聞くより兩人うなづき合ひ、

一　これ、みんな來い〳〵。（ト内にて、）

皆々　おゝい〳〵、何ぢや〳〵。

〽小屋の内よりどや〳〵と。

これ、呼び出したは何の用ぢや。

一　外でもない、此和郎は俊寛僧都に由縁の者。

二　二人ともに搦め取れ。

五人　おゝ合點だ〳〵。

〽おゝ合點と島人が、德壽丸を引捉へ、繩を掛けんとなしけるにぞ、蟻王見るより二三人、かい摑んで左右へ投げ、德壽丸を助けんと、なすを島人さゝゆれば、蟻王ますます〳〵氣をいらち。

ト島人有り合ふ繩を取り、德壽丸を捉へ、縛らうとするを蟻王びつくりなし、左右へ投げのけちよつと立廻つて、

蟻王　やあ、何科もなき若君に、繩を掛けんと此の狼藉。

〽言はせも果てず眼を光らし。

一　おゝ其の仔細言つて聞かさん、去年の秋平家の侍、難波の三郎經房さまが此の島へ押渡り。

二　我々どもを呼び出し、あまたの金を下されて。若し都より俊寛が由縁の者が尋ね來らば、速かに打ち殺せ。

三　若し忽せにいたし置き、後日に事の顯はれなば、罪は同罪たるべしと、返す〳〵も嚴しい言附け。

四　經房さまの仰せゆゑ、其の俊寛が身寄りの者と聞く上は、

五　百人力ある勇士でも、手出しのならぬ其の爲に、この童を質に取り。

六　われが手出しをするが最後、立所に童めを刺し殺すが。

六人　合點か。

〽聞くに蟻王齒噛みをなし、主を取られて如何とも、詮方渚にどうと座し、思案なせしが、

御を和け。(ト蟻王思入あつて、)

蟻王　さう聞けば無理ならねど、假令經房の言附にもせよ、何科もなき其の稚子を不愛で赦すとも、船の往來も稀なる島、誰が都へ告げ知らさん、さすれば勞して効なき業、成經、康賴、俊寛と三人一つに流されて、既に二人は大赦に逢ひ、再び故都の都へ歸り其悦びに引替へて、跡に一人赦に漏れて島に殘りし親を慕ひ、はる〴〵遠き波濤を越し、雨に吹かれいくせの思ひでやう〳〵と爰へ來りし其の稚子が、勝れし孝子の志しを憐れまぬは鬼畜に劣れり、島人とて同じ人情を知らば此儘に、どうぞ見のがして下さりませ、生々世々の御高恩、偏にお願ひ申上げまする。

一　いやそなたの言ふは一理あれど、經房さまより賴まれたれば、見のがすことは、

六人　ならぬわえ。

蟻王　さゝ、主從諸共許されずば、我れを代りに縛り置き、和子ばかり許して下され。

二　假令何と言はうとも、仰せを受けし上からは、

六人　許すことはならぬ〳〵。

〽ならぬ〳〵と犇けば、蟻王きつと思案なし。

蟻王　いかに孤島なればとて、理非辨へぬ人畜めら、主人を擒にせられしからは、此の蟻王が絶體絶命、鬼神たりとも一々に、刀の切れ味鐵拳、片ッ端から見せてくれん。

〽勢ひ込んで蟻王が、柄に手を掛け立ちかゝる。

ト蟻王島人を投げのけ、刀を拔かうとする。此內屋體のうちより、島長更けたる島人にて、走り出で、蟻王を留め、

島長　あゝこれ、若う人、待つちやれ〳〵。

蟻王　えゝ、留立ていたすな。

島長　兎も角もわしに任せて、待てといつたら待たつしやれ、惡いやうにはしませぬから、必ず共に早まらつしやるな。

〽留めるをしほに蟻王が、差控へれば島長が。

上總市兵衞

トこれにて蟻王思入あつて、下に居る。島長みな〳〵に向ひ、

これ、誰も彼れも若う人が今言うたを聞いたであらうな、其身が代りに縛られて和子を助けてくれといふは、神妙の言ひ方、殊に親を慕つてはる〴〵と、遠き島まで來たといふは、是れも稀な親孝行、若う人を縛り童を許して遣るがよい。

〽鄙も都もおしなべて、情は人の寶なり、人には鬼も涙ぐみ。

一　そりやわしらとて恨みはなし、許して遣りたいものなれど、

六人　難波さまの仰せゆゑ。

島長　はて難波さまの仰せでも、今その童を許さぬ時は、若う人も一生懸命、命づくにも拘はることゆゑ、何事も年役に、おれに任しておかつしやいの。これ若う人、皆の者にも言ひ聞かしたれば、こなたさへ繩に掛らば、此童は許してやりませう。

蟻王　すりや、和子さま許して下さらば、如何にも繩にかゝりませう。

島長　なに許さいで置きませう。

蟻王　然らば繩を掛けられよ。

〽どつかと座して手を廻せば、荒繩取つて蟻王を門へ繋げば德壽丸、島人に打向ひ、

徳壽　これ島人、都を出てゝ片時も、側を放れぬ蟻王が、此やうに縛められ、道さへ知れぬ此島に、在する父をたゞ一人、どうして尋ねて行かれうぞ。

〽とても許さぬ事ならば、我も共々いましめよと、かよわき手をば後へ廻し、涙さしぐみ在すにぞ、蟻王も押へかねたる目をしばたゝき。

ト徳壽丸よろしく思入あつて、よき所へ坐り後へ手を廻す。島人もこれを見て思入、蟻王涙を振拂ひ、

蟻王　其お歎きは御尤も、明けても暮れても蟻王を力となされし和子さまゆゑ、たゞお一人にて島山をお出でなさるは傷しけれど、それも僧都の御爲なれば、蟻王が事お案じなく、片時も早く遠近を日の暮れぬうちお尋ねなされ、やがて跡より追附いて、お供いたすでござりまする。

徳壽　きつと蟻王來てくりやるか。

蟻王　島人の許しを受けなば、宙をかけて參りまする。

〽言ふをばしほに徳壽丸。

徳壽　どうぞ早う蟻王を、許して遣つて下されいの。

島長　おゝ跡でとつくり若う人から、樣子を聞いて許しませう。

蟻王　さあ、この詞を力となされ、和子さまには日の暮れぬうち。

へいそがし立つれば是非なくも。

徳壽　そんなら蟻王。

蟻王　徳壽丸さま、少しも早く怪我なきやう。

徳壽　道にて待つて居るぞよ。

へ笠さへそげし長旅に、力なく〱出でたまへば、見送り見返り主從が、槇の小蔭に隔てられ。

ト此うち浪の音にて、徳壽丸是非なき思入にて、笠と杖を持ち花道へかゝる。蟻王跡を見送り島人繩をとらへ、皆々氣の毒だといふ思入。徳壽丸後ずさりに躓きよろめくを、蟻王見て思はず行かうとするを引き据ゑ、

皆々　歩まつしやい。

へ目さへ霞みて。

ト時の太鼓やうに波の音を打込む、徳壽丸思入あつてつか〱と走りはひる、蟻王島人に引かれ、上の方へ三重にてはひる。跡浪の音になり、知せに附き此の屋體を上の方へ引いて取り、向う眞中より割れ、上の方は霞になり、下は打ち寄せの浪手摺になる。

（浪打際の場）――本舞臺三間の間三の手まで誂への波手摺、上の方岩の張物にて見切り、振りよき磯馴松、日覆より松に蔦のからみし釣枝、上手よき所に腰を掛ける誂への岩臺、下の方一面に蘆原、總て浪打際の模樣よろしく、一聲、浪の音にて道具納まる。と知せに附き、上手出語り臺の霞幕を切つて落し、爰に竹本連中居並び、

〽抑々鬼界が島といへるは、東は漫々たる蒼海にて、白浪天と共に高く、西は屹々と巖石聳え、峰には黑煙立ち登り、南はうるまの國かとよ、北杳渺として跡もなし、わが身に負けぬ憂き島の巣守りとなりて果しなく、法勝寺の執行俊寬が、身の成る果てぞ哀れなり。

ト浪の音、誂への鳴物になり、花道より俊寬白髮かづら、そぼろなる衣裳、腰のまはりへ荒布の如き磯草をまとひ、蘆の枝に雜魚を三つばかりさしたるを提げ、誂への杖を突き出來り花道にて、

俊寬　秋の日の暮れやすく、まだ七ツにはなるまいと、思ひの外に西山へ、日の傾くは最う七ツ、僅かな道も身の疲れ。

〽よろめき來たる磯端に、十足行つては一息つき、幾度となく腰打ち延し。

ト右の合方をあしらひ、俊寬舞臺へ來り、

ほつと息つき傍なる、岩根にしばし休らひぬ。

ト俊寛こなしあつて、岩臺へ腰かけ、右のメリヤス、浪の音、鼓のあしらひあつて、

實に光陰は矢の如く、六歳あとに此の島へ流罪になりたる三人のうち、成經康賴二人は赦免、跡に一人殘されし、我が身の上の腑甲斐なく、既に死なんとなしたりしが、

〽流石命の惜しまれて、今日まではながらへしが、

もし妻や子に逢ふよしの、有磯に幾夜なき盡し、明石も須磨も外ならぬ月は昔に替らねど、替り果てたる我が面影、

〽憔悴枯稿と痩せ衰へ、剃らねば髮は肩に垂れ。

彼の淩雲の額を書き、一夜のうちに千字文を選みし窓に猶勝る、わが身をなくか山烏、頭眞白になりぬれど、歸る日ぞなき沖津波、

〽過ぎし都の妻や子の、其の面影がちら〳〵と。

うつゝともなく夢ともなく、忘れがたなき恩愛の迷ひの雲の晴れやらず、思へば果敢なき身の上おゝやなあ。

〽執行驗者にあるまじき、今更愚癡の述懷と、歎息限りなかりける。（ト宜しくあつて、）

〽引く杖の短くなりぬ秋の日の、はや暮近き磯端を覺束なくもたゞ一人、德壽丸は島山をそこよ爰よと尋ね佗び。

ト此うち以前の德壽丸、右のこしらへにて、腰へ誂への小袱紗包みを結附け、菅笠を持ち、杖を突き出て來り、

德壽　爰までさまよひ來りしが、道を問ふにも家はなし。

〽いかゞはせんと、とつおいつ。（トこなしあつて俊寛を見遣り）おゝ幸ひ、あれなる島人に、父の在所を尋ねて見ん。（ト浪の音、床のメリヤスにて舞臺へ來り）なう〳〵島人、物問はん、此わたりに法勝寺の執行俊寛僧都はおはさずや。

俊寛　見れば島には見馴れぬ童、渡海稀なる此島へ、尋ね來るは何人なるぞ。

德壽　わが身は僧都が一子にて、德壽丸と申すもの。

〽聞いて思はずのけさまに、扨はわが子か懐しやと、飛び立つ胸を押し鎭め。

ト俊寛思入あつて、

われ孤島に埋もれて、妻子を思ふ愛執の、心の空虚附込んで、若しや天魔の所爲なるか、よしやわが子にあるとても、長くもあらぬ我が命數、世になき親と知るならば、思ひの念も絶

えなんと、態と其場を餘所々々しく。（ト俊寛思ひ入あつて、）

俊寛　今御身が尋ねられし法勝寺の執行といふは、去年の秋の赦に漏れて、剩さへ難波といふ平家の武士に討たるべきを、辛うじて命助かり、潮の滿瀨の小夜千鳥啼く音も細く哀れにも、島にて果敢なくなりしぞよ。

德壽　えゝ、すりや父上には、此の島で。

俊寛　おゝ、空しくなりしは去年の春、今はこの世になき人なれば、思ひあきらめ都へ歸り、父なき上は猶の事、母御に孝行盡されよ。

德壽　えゝ、すりや此の世には在さぬか。

俊寛　如何にも。

德壽　はあゝゝゝ。

〽それは誠か悲しやと、起つたり居たりうろ／＼と、入水ありしか埋まりしか、よしや磯邊に捨てられて、鳥の餌食となるとても。

御骨は殘りてありつらん、いづれにあるか教へてたべ。

俊寛　さあ、墓もなければ骨もなし、空しくなりし夢の跡、爰ぞとしめす方もなし。

〽我れとわが身の偽りも、親子恩愛の輪廻をば、切らましものと言ひ諭せば、徳壽は思ひも知らぬことなれば、精も力も弱り果て、其儘そこに伏し轉び、悶え焦れて歎きける。

ト兩人よろしくあつて徳壽丸泣伏す。

おゝ、左もあらん、さもさうず。左程までに悲しくば、六歳が間この島に、僧都がおはせし有樣を、わが見聞きなしたるをば、物語つて聞かすべし。

〽僧都は巖に居直りて、(ト俊寛思入あつて、)

元この島には五穀實らず、草木さへも稀にして轟くものは山の猛火、吼えるものは沖の勇魚。

〽白きものは磯打つ浪、黑きものは峰の煙り、茜さす日は海より登れど、青天黃土風雨時なく。

かゝる孤島に住む人の、山に入つては硫黃を掘り、磯に出ては藻屑を拾ひ、漁る人に手を合し一つ二つの魚を得て、其日の餓を凌ぎつゝ。(ト以前の蘆にさしたる魚を出しよろしくあつて、)

〽罪障深くて三人が中に、一人は殘んの雪の宿、消えやらぬ身は空蟬の、から撫子ぞなつかしく。

春過ぎ秋をふる里の、軒のつま梨、妻や子が、嘸や待ち侘びおはさんと、明け暮れそれを歎きか

こち、

〽四大おとろへ三魂まどひ、終にあるにも荒海の底果敢なくもなりたまふと、涙ながらに物語れり、德壽丸は身も世もあられず。（ト俊寛よろしく思入あつて、目をしばたゝき此方に向ひ）

德壽　すりや、父上には左程まで、艱難辛苦なされし上、妻子のことを思召し、終に入水したまひしとか、情ない事なされましたなあ。

俊寛　さるにても、少年の供をも連れず、如何して一人此の地へ來りしぞ。

德壽　都を出でしは家の子蟻王と二人にて、此島までは渡れども、平家方の言附けとて、僧都が身寄りの者と聞き、からめ捕れよと島人に、既に繩目に逢ふべきを、我れに代つて蟻王が人質となり縛められ。

〽心細くもたゞ一人。

俊寛　すりや蟻王といふ家の子が、御身替りに縛められしか。むゝ、して都には俊寛が、妻や娘の在すらん。

〽問はれて又も德壽丸、浮む涙をおし拭ひ、

德壽　その母上は此の如月、少將判官諸共に我が父歸洛したまふと聞きて、母上姉上も鳥羽の湊へ出

迎ひし、其の甲斐もなく父上の。

〽歸洛と言ひしは難波が僞り、母上さまを清盛へ參らせんとの巧みごと。

俊寛　成親卿の敵といひ、重なる恨み遣る方なく、たゞ一刀に難波を討ち、其の身も刃に伏したまふ。

德壽　やゝ、すりや母御には難波を討ち、其身も自殺なしたるとか。してく、御身等兄弟は。

俊寛　丹左衞門が情により蟻王夫婦に助けられ、丹後の國とかいふ所で惡者に出逢ひ、姉上安郞子諸共に、是れも入水と聞き及ぶ。

德壽　むゝ、母のみならず姉御前や安郞子とやらまでも、果敢ない死をば遂げたるか、父が都にありたればば左ある事もあるまいに、あゝ親といひ子といひ、斯かる艱難辛苦に逢ふは、如何なる前世の宿業にや。

〽泣かじと奧齒かみしむれど、忍びがたみの袖の雨、晴間は絕えてなかりけり、幼心に德壽丸、不思議さうに打ちながめ。（ト兩人愁ひのこなしよろしく）

德壽　五歲の時お別れ申し、お顏はしかと覺えねども、最前からの樣子といひ、此島の人にはあらず、若しや父上にてはおはさずや。

俊寛　えゝ。

德壽　海山越えてはる〴〵と、折角尋ね參りしに。

〽なぜ名乘つてはたまはらぬと、袖に縋りてかき口說けば、淚と共に振拂ひ。

俊寬　こは少年には何を言はるゝ、親に逢ひたい〳〵と思ふ心の迷ひより、其の疑ひは無理ならねど、仄かに聞く俊寬僧都は、先帝の寵恩受け、勅願の大御寺にて權少僧都の官位に昇り、十八ケ所の莊園を領したまふと聞き及ぶ、さすれば配所に在するとも、荒布の如き布を纏ひ、斯かる姿であるべきや、また僧都が年の頃、四十の上を多くも過ぎず、剃らねば髮は長くなるとも、僅か五歲六歲のうちに雪をあざむく白髮とならんや、それを僧都と疑ひたまふは、牛を愛して牡丹とし鹿を馬とするの類ひ、よしなき事を思はずと、少しも早く都へ歸り、亡き父母や姉御前の菩提を弔ひたまひなば、それに上越す孝行なし。さゝ、暮れぬうちに早く〳〵。さは言へ最早黃昏時、道に疲れし少年を、一人遣らんも不便の至り。

德壽　どうぞ今宵は、主人して。

俊寬　泊めるはいとより安けれど、岩間を流るゝ苔淸水にたゞ咽喉を潤ほすのみ、夕餉の用意もあらざれば、其不自由さへ厭はずば。

德壽　お泊めなされて下さりまするとな。

俊寛 おゝ。（ト思入、太夫座のメリヤスにかゝり、）

〽先に立つ父後に附く、子は親なりとしら濱の、砂子も黒む黄昏に、足許闇き燈臺鬼、輕の大臣を異國に問ひし、弼の宰相が悲しみも、斯くやとばかり。

● ト波の音を冠せ、俊寛立上り、徳壽丸跡に附き不審の思入、俊寛は名乘らずに歸すは不便なといふ思入にて上手へはひる。上手の岩組廻り、居所替りに此道具替る。

（俊寛住家の場）――本舞臺上手に振りよき松の立木、是れをやとひて竹の柱、昆布で葺附けし屋根後島筵をさげ、内に木の葉を敷き、浪手摺打返し、半分ほど打交ぜになりし茸割り、ずつと上の方へ高き誂への岩臺を出し、俊寛住家の體、好みの通りよろしく、浪の音にて道具納まる。

〽問ふ人も誰荒磯の岩蔭に、竹を柱に松を軒、屋根は藻屑で葺きたれど、雨はさらなり漏る月の、影さへいとゞいぶせくて、夢も結ばぬ繩すだれ、臥猪の床にも劣りける、苔の岩屋へ伴へり。

此うち浪の音を冠せ、花道より俊寛先きに、徳壽丸附添ひ出來り、よろしく舞臺へ來り、

俊寛 これ〳〵、犬の小屋にも劣りし住居、ほんの夜露を凌ぐのみ、むさくるしくも是れへ來て、道の

疲れを。

德壽　有難うござりまする、是れまで參る道々も、野に伏し山に伏したれば。

俊寛　かれし木の葉を蒲團となし、

〽月を灯しに夜もすがら。

德壽　都の話し。

島物語り。

俊寛　詞がたきになり申さん。

〽乾ける木の葉かき出し、我が子をそこに勞りて。

ト此文句の內、浪の音をあしらひ、灯入りの月を出す、俊寛これを見遣り思入あつて、

少年、あれ見られよ、都も鄙も替らぬは海より上る月ばかり、あの月の上りし方が、都の空でござりまするぞ。

德壽　あの月を見るにつけ、父上が世にありし頃言ひ殘されし事あらば、心ゆかしに聞かしてたべ。

俊寛　幸ひ僧都に親しければ、覺えしだけは語り聞かさん。（ト謡への合方になり、）

德壽　早速ながら聞きたきは、そも〳〵成經康賴は島に來りし始めより、熊野權現を祈られて遂に歸洛

なせしと聞く、又わが父上には諫めも聞かず、あざみ笑ひて顧を掛けず、誓ひに漏れ、〽島の巣守りになりたまふと、浮世の人の口の端に、かゝりや繋がる口惜しさ。

俊寛 如何にも僧都が熊野を祈らぬは、恐るゝ事のあればこそ。そも〳〵成親卿に賴まれて平家の一門亡ぼさんと、隱謀に一味なし、其の職にもあらずして兵と肩を並べ、世を亂さんと目論見しは、是れ自らなせる禍、今生の悪法を今生に果しなば來世にては賴みあり、絶えて歎くに及ばずと、僧都は常に言はれたり、神も人も恨まれな。〽聞きし話しになぞらへて、いと懇に說き示せば、徳壽丸は始終を聞き。

徳壽 其の話しを聞くにつけ、父上へ參らせんと、九州にて求めし菓子、幸ひこゝに。〽これを參れと懐より、包みし菓子の花紅葉、僧都は是れを手にも取らず。

ト徳壽丸こなしあつて、菓子包みを取り出し、

ト俊寛思入あつて、

俊寛 お志しは忝ないが、浮世に遠き島人に斯かる菓子を下さるとも、口に馴れねば味ひなし、それは御身の用意に持ち、山道にて食もなく饑えたる折に喰べられよ。〽ひらに〳〵にと差し戻す、徳壽丸はいとゞ本意なげに、

徳壽　左樣にのたまへど、御身を親とも思ふにぞ、母上が今際の時父上へ手渡せよと姉上よりの此のお文。

〽涙ながらに襟の内に隱せし玉章に、肌身はなさぬ法名と、形見の袖を取り添へて。

ト徳壽丸件の文を襟より引出し、又肌の内より取出せし袱紗包みより折表具の位牌、腰に纏ひし袱紗より形見の袖を出し、懷より出せし位牌にこなし、

これは母さまの御戒名、何卒これをとつくり見て、兄弟の志し、

〽哀れと見よや島人と、かき口說きつゝ差出せば。

ト徳壽丸右の品々を俊寬へ差附ける、俊寬件の折表具の位牌をちよつと取りて、こなしあつて、

俊寬　なに、すりや是れが先立たれし、御身が母の戒名とや、斯くあさましき島人に、都人の其文が一字でも讀めやうか、最前から見る所、年に似合ず賢しき御身、人も憐れみ行末は、天晴其名も揚げられんが、同じくならば名利を捨て菩提の道へ分け入つて、親兄弟が地獄の苦患、のがるゝやうに出家して其跡を弔はれよ、夜が明けたれば苫屋へ行て、擒となりし蟻王に繩目を詫びて救はれよ。

徳壽　有難うござりまする、とてもの事のお情に、共々詞を添へてたべ。

俊寛　おゝ、茅花の穗にも怖る身の、心細いは無理ならねど。

〽鬼界ヶ島に鬼はなし。

鬼は都に鵜の目鷹の目、いや島人はさにあらず、よく其譯を打明けて、とつくりと言はれたら、心も解けて許すであらう。

〽言ひつゝ空を打ちながめ、

おゝ、いつの間にか月も傾き、夜も餘程更けたれば、早く疲れを休められよ。

德壽　まだ宵の內と思ひましたが、其樣にも更けましたか。

俊寛　月の廻りで見る時は、最早丑滿過ぎでもあらう。いや思ひ掛けない話しに紛れ。

德壽　旅路の憂さを忘れました。

俊寛　さあ、早くこなたも休まつしやれ。

德壽　おしづまりなされませ。（ト會釋する、俊寛思入あつて、誂への鮑貝を出し）

俊寛　さあ、ないにはましかや、是れなりと。

〽枕にせよと差寄する、鮑の貝の片親はありと告げねば白波の、音沒まじく魂も、消ゆるばかりの旅寢には、夢もさだかに結ばねど、身さへ心の疲れてや、德壽は枕引き寄せて、假し

まどろみたまひけり、様子考へ俊寛は、やをら其身を起き返り。

ト かすめし波の音、俊寛鮑の貝を出し、枕にせよと徳壽丸へ渡しいたはる思入、屋體の内へ二人とも寐る。波の音千鳥笛になり、よき時分に起返り、徳壽丸を窺ひ思入あつて、

これ少年、もう寢られたか〳〵。

〽木の間をもるゝ月影に。

浪の音が耳に附き、寐られまいと思ひの外、餘程道に疲れしか、枕に附くと他愛がなく、賢しいやうでも、まだ子供。

〽幼顏をつく〴〵見て、落つる涙を押しぬぐひ。

ト 床のメリヤス。俊寛立上り徳壽丸の顏をつく〴〵見て涙を拭ひ、

遙々尋ね來たものを名乘らぬ父が心の苦しみ。そも〳〵西八條に捕はれて呵責の笞に打ち懲らされ、終に鬼界ヶ島に流され、餓鬼道にこの身を置き憂き艱難も共々にせし、成經康頼兩人は赦免になつて漕ぎ歸る、船ぞ妬まし恨めしく。

〽出て行く船のしとゞ綱に、縋れど甲斐なき痩腕に、船に引かれて磯端を轉び狂ひし悲しみより、今恩愛の絆に引かれ。

弘誓の船に乘りおくれ、年頃願ひし彼岸へ至らで、生死の境に立迷ひ。

〽愛着の奴煩惱の犬と身をなす憂き苦しみ。

言ひ甲斐なき俊寛には、遙に勝りし松の前、佞人難波を討果し、成親卿の讐を報い、其身も自殺なせしとは、流石德壽が、

〽母なりき。（ト以前の紙位牌へこなしあつて、）

又いとしきは鶴の前、許嫁せし牛若にたゞの一夜も添ひ臥しせず、底に沈みし硯の海に、筆の命毛こと切れて、

〽墨干しあへぬ島津鳥、あとは鬼界に通へども。

今は主なき玉章も、形見となりしか情なや。（ト封を開き、）

〽文取上げて封押し切り、月を明りに讀み下す。

『此文に記せしは大悲山の麓、寺谷に假住なし、蟻王安郎子夫婦の者、これが姑に助けられ、日は日ねもす葎の宿の壁に向つて泣暮し、夜はよもすがら行燈の火影に向つて泣明かし、母が最期に姉弟の身の行末も覺束なく。此の便宜に島を出で竊に登りくれとある、鶴の前が哀れな玉章。鹿ケ谷の屋敷も平氏のあらびに追拂はれ、母上童兄弟も、露の命をやう〳〵に、家の子蟻王夫婦

の者の深き忠義の介抱に、大悲山の麓に世を忍ぶ假住の葎の宿に、夏蟲の壁に向ひてなき暮らし身に知る秋の長き夜を、心も細きともし火の下に涙の乾くまもなく、明かし暮らしまゐらせ候へど、此身の憂きに比べこし候得ば、父上がましますは鬼界ケ島と聞き侍れば恐しき鬼ぞ住むらん、今生よりの冥土にやと思ひ續け候へば、悲しさは遣る方なく何卒御命恙なう、早くも歸洛あれかしと、唯々神佛を念じまゐらせし其うちに、去年の秋の大赦の沙汰、五歳振りにて父上のお顔拜しまゐらせ候はゞ、嬉しくと悦ぶ甲斐なき空頼み、横紙破る平氏の政道、母さまの御最期より同胞が身もいかゞぞと、德壽を伴ひやたけ心の蟻王が、父君の御先途見屆けんと、竊に船出まゐらせ候』（ト文をよろしく讀み取る思入）この、此の便宜に島を出で、竊に登りくれよとある。福壽海無量大姉と書附けしは、これ正しく鶴の前、知覺院貞心大姉、妻といひ娘といひ、見るもなか〳〵涙の種。

〽右に戒名左に我が子、我を慕ひし亡魂は、鬼界ケ島をうろ〳〵と名乘らぬ胸の苦しさは、阿鼻の焰に身を燒きし、紅蓮の水の烈しきに、まさる思ひの血の涙も理せめて哀れなり。—

ト德壽丸が寐たる側へ寄り抱かんとして心附き、又愁ひの思入あつて泣落し、心附きちつとなり氣を替へて、

あゝ、我ながら迷うたり、老木若木の差別なく、終に薪となるものを。
〽喜怒哀樂に繋がれて歎くは愚癡の至りなり、妻子の契り世の寶、王の位も後の世の身に添ひがたき佛の教へ。
われなまじひに現身の、息あればこそ此憂き目、
〽いでや最期を急がんと、しやれたる牡蠣の殼を拾ひ、竹の柱へかすかにも一首の歌を書き遺し。
ト俊寛牡蠣殼を拾ひ、屋體の竹の柱へ歌を書く思入、仕掛けにて柱へ白く歌のこゝろ、俊寛德壽丸へいろ〳〵思入あつて、
嘸や目覺めて德壽丸が、此歌を見たならば、我を誠の親と知り、邪險とも胴慾とも其歎きはいかばかり、
〽思へば不便いぢらしく、是れが一世の別れかと先きへ一足また跡へ、二足戻り磯際に、寄りては返す浪ならで、離れがたなく見返り〳〵、行き惱みたる山の端に、東雲近く啼く烏、心弱くて叶はじと杖を力に。
ト此内俊寛德壽丸を見て愁ひの思入あつて、杖に縋り花道へ行きかけては戻り、よろしく此程に烏

笛になり、俊寛きつと思入あつて杖を下へ置き、草履を脱ぎ棄て、つか〱と揚幕の際へ行き、振返り舞臺を見返り、揚幕へはひる。

〽はや明方の磯山おろし、そよと身に泌み徳壽丸、忽然と目を覺し。

ト徳壽丸目を覺し思入、起きかへり四邊を見て、

徳壽　や、主人は何れへ行かれたるか、岩屋の内に見えざるは、島人いなう〱。

〽身を起してをちこちを、聲を限りに呼はる折柄、苫屋に殘りし蟻王が尋ね來りて見るよりも。

ト此内徳壽丸上下を尋ね歩く、浪の音ばた〱になり、上手高き岩の上より、以前の蟻王出で、徳壽丸を見て、

蟻王　やあ、そこにおいでなされまするは、和子さまでござりましたか。

〽主從かたみに手を取りて、恙なきを打ち悅び。

よく御無事で居て下さりましたなあ。（ト蟻王飛び下りてよろしくこなし）

徳壽　さうしてそちは、どうして爰へ。

蟻王　それがし一旦島人に縛められしが、和子の御身が心許なく縛めの繩引ッ切りお跡を慕ひ參つたり

して〳〵未だ父君には、廻り逢ひたまはずや。

蟻王　むう。

徳壽　宵に爰へ泊りしが、どうやら尋ぬる父上と、一つには寐たれども、何れへ行きしか影さへ見えず

〽四邊見廻し蟻王が、右手の柱を見返りて。

や、、此柱に記しあるは『見せばやな哀れと思ふ人もあらん、たゞ獨り住む苫の岩屋を』。やゝ、

朧ながらも筆ずさみは、疑ひもなき主君の手跡。

徳壽　すりや父上の手跡とな、現在廻り逢ひながら、しかとお顔を知らざるゆゑ。

蟻王　其お歎きは無理ならねど、兎かういふ内暫時のおくれ、いざお行方をお尋ね申さん。

〽主從四邊打廻り。尋ね求むる磯際に、僧都が杖と履物の、あるを徳壽は目早く見附け。

徳壽　やゝ、こりや昨日まで父上の、縋りたまへる杖と履物。

蟻王　此の磯端にあるからは、若しや入水したまひしか。

兩人　えゝゝゝゝ。

〽なう情なや主從が、尋ね來るは何故ぞ。

蟻王　お心强きも事によれ、夢や幻の境にも、俤見せて只一言、蟻王とも、

徳壽　徳壽とも、

蟻王　お呼びなされて、

兩人　下さりませ。

〽泣きつ叫びつ忠臣孝士、何と詮方なかりけり。(ト此内以前の島人二、四出來り、)

二　うぬ、見附けたぞ、引ッくゝれ。

四　合點だ。

〽合點々々と立ち塞がり、打つて掛ればずでんどう、又立ち掛かるを左右へ投げ退け、昇る旭に磯端を。

ト立上りよろしくあつて、三重波の音カケリになり、兩人こなしあつて花道へはひる。大ドロ〳〵、此の道具居所替りにて、よろしく替る。

(地藏堂の場)――本舞臺松の立木、釣枝殘り、上手岩組、九尺の地藏堂、藁葺き、正面狐格子、軒口に地藏尊といふ額、左右に誰袖の額、文な附けし額などあり、下手一面、波手摺打返し、玉椿の生垣、向う在所の遠見に替る。やはりドロ〳〵にて道具納まる。とやはりドロ〳〵にて、日覆より心と

いふ字を堂の内へ引いて取る、ドロ〳〵打上げる。本釣鐘誂への合方になり、正面の狐格子を明ける。正面に繩にて縛りし石地藏、此前の賽錢箱にもたれ、市兵衛好みのこしらへにて、坐睡り居る、側に次郎兵衛の末子お蝶、娘やつしのこしらへにて市兵衛を起して居る。

お蝶 市兵衛、起きてくりやいなう〳〵。(トこれにて目を覺し、四邊を見て、)

市兵 あゝぐつすりと寐ましたが、そんなら今のは夢であつたか。(トほつと思入。)

お蝶 何ぞこはい夢でも見たか、大層魘されたわいの。

市兵 魘されましたでござりませう。旦那さまが御免になるやう不動樣へお參り申し、歸る途中で雨に逢ひ、此辻堂へ駈込んで晴間を待つうちお前さまが、膝にもたれて寐てしまひ、賽錢箱へ寄りかゝり御相伴をするうちに、とんだ夢を見ましたが、旦那さまが嘸島で御難儀なされてござりませうと、明け暮れ心に忘れぬせゐか、德壽丸といふ稚兒がはる〴〵島へ尋ね行き、現在父御に逢ひながら、名乘りもせずに本意ない別れ、剩さへ僧都には一首の歌を書きのこし、終に入水なしたるをまざ〳〵夢に見たる悲しさ、あゝお前さまが德壽丸にて、蟻王のやうにわしが島へお供をいたしまして、あんな事がござりましたら、どのやうでござりませう。(ト市兵衛涙を拭ひ思入。)

お蝶 お顏は知らぬがとゝさまに、早う逢はしてくりやいの。(ト市兵衛に縋る。)

市兵　おゝやがてこの爺やァが一心で、御免になるやうお願ひ申し、目出度くお逢はせ申しまする。

お蝶　えゝ、嬉しい／＼。（ト悦ぶ思入、市兵衛あたりを見て、）

市兵　夢に見たる片袖は、額に附けたる誰袖か、文の附いたる額もあり、蟻王が縛られしは御本尊の地藏さま。（ト言ひつゝ傍に掛けし歸命頂禮地藏尊と記したる提灯を取り、）幸先きよきは提灯に、記したる歸命頂禮、歸り來るといふ文字に語呂も通へば、旦那が御赦になる夢の知らせか。（ト思はず提灯をぴつしやり疊むを、木の頭、此音に左右より指金の雀を飛ばす、）但しはまた、是れが五臟の煩ひか知らん。

トよろしくこなし、是れをキザミ、お蝶手を上げ雀を見上げる、此の模樣よろしく寺鐘にて、

ひやうし幕

五幕目

大磯埋堀田圃の場

雪の下質屋の場

〔役名――雨鉦の勘八、木鼠忠次、東金茂右衛門、岩崎運藏、村長甚九郎、茶飯屋、質屋の手代、地廻りの辰、同じく熊、駕籠舁二人、次郎兵衛忰千之助、市兵衛娘お梅。〕

（埋堀田圃の場）――本舞臺三間の間、眞中石地藏、榎の大樹、上下とも植込み、上へ寄せ開帳札、同じく榎の釣枝、總て埋堀田圃の體、爰に夜商人茶飯屋のこしらへにて御膳籠を前へおろし、○△□の仕出し三人、飯を食つて居る、茶飯屋飯を盛り、はやり唄にて幕明く。

○ おい飯屋さん、いくらだえ。

茶飯 五十六文でございます。

○ そら文久で遣るよ。（ト錢を出して拂ふ。）

茶飯 有難うございます。こりやあ多くはございませんか。

△ 茶飯屋さんも人がいゝぜ、四文だつてたんと出す氣遣ひはねえ。

茶飯 成程こりやあ鐚錢だ、事馴れねえ夜商人は、困りますのさ。

△ 此節は大分賑かだから、飯屋さんもしつかりだらう。

飯屋 お天氣が極つたら、いつもより素見が出ますのさ。

○ 一しきりは降りが勝つたから、此生業はあがつたりさ。

□ 其替りに米が下つたわな。

飯屋 そいつアいゝ辻占でございまするな。

ト此時上手より地廻りの辰、熊、着流し、三尺帶職人の拵へにて出て、

辰　熊や、茶飯を喰はうぢやねえか。

熊　手めえ最う腹がへつたのか。

辰　人が喰つて居ると、何だか蟲がぐう／＼言はあ。

熊　附合つて喰はうか。

辰　こゝの錢はてん／＼こだぞよ。

熊　引けた事を言ふねえ。おい飯屋さん、二人前くんねえ。

茶飯　はい／＼、今豆腐が入れたてだ、一服お上んなせえ。

辰　豆腐ばかりか。

茶飯　左樣さ、いつもはけんちんがござりますが、最うみんなにしました。

辰　何でもよいわい。

茶飯　はい／＼、直に出來まする。

ト言ひながら飯を盛る、流行唄になり、花道より駕籠舁二人駕籠をかつぎ、勘八派手な浴衣にて兩足を外へ出して駕籠に乘つて出て、花道にて駕籠を立てる。

駕一　おい棒組、旦那は素敵だ。
駕二　さうよ、御機嫌はいゝが、眞ッ直に乘替へてお貰ひ申さう。
駕一　もし旦那、おみ足が痛みますかね。
勘八　なに足が痛むか、べらぼう、足に不足があるものか。
駕二　どうでもなけりやあ、眞ッ直に、
兩人　乘つておくんなせえ。
勘八　馬鹿をいふなえ、足を樂にしてえから辻駕籠でも乘つて遣るのだ。
駕一　困りものぢやあねえか。
駕二　向うまで行かうか。（ト此儘舞臺へ來り、駕籠をおろして、）
駕一　長い丁場をこんな風で乘られちやあ、仕事の捗行きがしねえ。
駕二　爰で下りておくんなせえ。
勘八　手めえ達ア慰みに生業をするのか、おりて遣らあ。
駕二　さうぢやあございませぬが、足をぶら／＼出されちやあ、擔がれねえからさ。
勘八　不自由な駕籠屋だ、そんならおりてやらう、草履を出せ。（ト駕籠の二後の草履を前へ直す、勘八駕籠

より出で、）なまなか乘つたら、氣持が惡くなつた。
駕一　棒組貰はうぢやあねえか。
駕二　極りまで行きませぬが、割りを附けておくんなせえ。
勘八　上げたり下したりといふは、手めえ達のことだ、錢ならこつちへ貰ひてえやあ。
駕一　錢を出して勝手に乘るなら、おれも出さあ、擔げるならかついで見ろ。
勘八　何時かつぐと言つた、ふざけた事を言やあがるな。（トきつとなる、兩人押へて、）
駕二　もし〳〵、そりやあ詞の間違ひだ、わつちも稼業だから、無理な事は申しません。
駕一　喰ふと喰はねえ境だ、こんな事をされちやあ、水も呑めねえやあ。
勘八　水が呑まれにやあ、けんつくか目なますでも喰つて居ろ、雨鉦の勘八だ、うぬらにやあ籠められねえ。
駕一
駕二　何がどうした。
　ト兩人なぐらうとする、勘八手早く息杖を取つて打つてかゝる、仕出し皆々びつくりして、
仕出　どうしたのだ〳〵。
勘八　相手はおれだ、見そくなやあがつたか椋鳥めら。

辰熊　お前はとつさん、
勘八　眞闇で知れねえが、兀辰に闇熊か、打捨つておけ。
熊　まあ、おれ達に任せねえ。
辰　こウ駕籠屋さん、どういふ譯か知らねえが、相手が惡いから。
駕一　それだつて、乘りやうが惡いからの事だ。
駕二　おりて貰つたから酒手ぢやあねえ、割を附けて貰ふのだ。
勘八　まだ吐かしやあがらあ、五町や十町は蠟燭の錢で澤山だ、言草言はれて堪るものかえ。
駕一駕二　言はなくつてよ。
辰熊　聞きわけのねえ、待てといふに。
勘八　いゝや、小面倒な、猿松めら。（ト言ひながら杖で無性になぐり廻ろ。）
皆々　そりや、喧嘩だ〳〵。
ト禪の勤めになり、皆々ごつちやになつて逃げ廻ろ、仕出しは丼を持つてあちこち逃廻りながら喰ふ、茶飯屋は仕出しを引留め、丼をひつくり返し、茶飯屋天秤棒を取つて荷を圍ふ、駕籠舁仕出し皆々下手へ逃げてはひる、勘八追つかけ行くを、兩人して留めながら、

辰　これさ、とつさん、おれだよ。
熊　辰が留めて居るのだ、まあ待ちねえ。
辰　たうとう逃げて行きやあがつた。
勘八　さあ、どいつでも來やあがれ。
茶飯　もし〱、どうで先きは分らねえ奴らだ、二人の衆にお任せなされませ。
勘八　おめえは茶飯屋さんか、生業の邪魔をした堪忍しねえ、道具でも割りやあしねえか。
茶飯　道具は氣遣ひござりませんが、一人や二人は喰ひ逃げのあるやつさ。
勘八　そりやあ氣の毒な、おれが出してやらう。
茶飯　こりやあ夜商人の運上だ、時々あることさ。（ト此うち勘八財布から天保を二枚出して、）
勘八　まあ是れを取つて置きねえ。
茶飯　どうして〱、そんな事をしちやあいけません。
勘八　そんなら、湯でも呑ませねえ。（ト錢を出す、茶飯屋取つて、）
茶飯　お氣の毒だねえ。（ト丼へ湯を汲んで、だしをさして勘八に出す。）
辰　これ勘八、おめえ此節は工面が直つたかして、氣のきいたこしらへだが、何處へ行くのだ。

勘八　聞いて下ッし、たうとう娘を請出す客が附いて、今夜親方の家へ相談に行くのだ。

熊辰　道理でいゝなりだと思つた。

勘八　いつまでかぶつて居るものか。

熊　儲け口があるなら乘りてえ。

勘八　手めえ達二人して、娘の所へ行つて、今にちやんが來ると言やあ、酒位は吞ませらあ。

熊辰　ひやかしながら行つて來よう。

勘八　行くなら、一足先きへ行つてくれ。

熊　おい合點だ、辰や明けでも追ふのぢやあねえか。

辰　引けきつて居やあがる。

兩人　とつさん行つて來るよ。（ト唄になり、兩人上手へはひる、茶飯屋後の駕籠を見て、）

茶飯　爰へ駕籠を置いて逃げたさうだ。

勘八　なに駕籠がある、馬鹿野郎だ。おれが今から行くにやあちと早し、運藏どのゝ來るのを待つて居よう。

茶飯　一服おやんなせえ。（ト火を挾んで出す。）

勘八　そりやあ有難い。（ト煙草入を出して吞み居る。）
茶飯　もし旦那、今の二人の衆は、吉原へ行きなすつたのかえ。
勘八　江戸まで使ひにやつたが、何ぞ用があるか。
茶飯　なにさ、二人の衆の錢を取らなかつた。
勘八　喰ひ逃げぢやあねえ、おれがやらうよ。
茶飯　さう度々出してお貰ひ申しては濟みませぬ。どれ、跡から行つてお貰ひ申しませう。
勘八　直に行くのか。
茶飯　御免なせえ、是から仲町へ行くのさ。（ト荷ごしらへして擔ぎ上げ、）茶めし餡かけ〳〵。
ト呼びながら上手へはひる、勘八駕籠を探り見て、
勘八　いゝ所へ置いて行きやあがつた、駕籠に科はねえ、爰でゆつくり待合さう。
ト流行唄になり、花道より運藏、羽織大小、甚九郎羽織着流し、ぶら提灯を持つて出來る、勘八煙草を吞みながら蚊を追ひ、四邊を扇にて拂ひ居る。
甚九　もし岩淵さま、勘八も一足先きへ出掛ける積りで行きましたが、もう今時分は行きつきましたらう。

運藏　隨分性急ゆゑ、先きへ參つて居るは必定、夫の東雲の茶入を、首尾よくやつてくれゝばよいが。

甚九　お氣遣ひなされまするな、ばつたりに賣るといふではなし、手許にあるも不用なゆゑ、四五十兩の抵當に預け置くとおつしやるなら、其位の働きは出來ませう。

運藏　それもさうだ、何にしても蔦屋へ參らば、樣子が知れやう。

甚九　大方先きへ參つて居りませう。

運藏　急いで行かうか。

甚九　おつと道が惡うござります。（ト甚九郎先きに兩人舞臺へ來り、上手へ行き掛るを勘八見て、）

勘八　おい、甚九郎さん〳〵。

運藏　さういふ聲は、勘八か。

甚九　お前、爰まで迎ひに來たのか。

運藏　はゝあ、駕籠で參つたか、定めて上首尾と見えるな。

勘八　何さ、辻駕籠に乘つたら間違ひをこしらへて、其居殘りの駕籠でござります。

運藏　いつもながら負けぬ氣性、然し喧嘩をいたして、夫の品を損じはせぬか。

勘八　どうして〳〵、鬼の子のやうにして懷へ入れて來ました、お前さん方を爰で待合せるうち、一服

やつて居ましたが、よい所で逢ひました、爰らに茶見世はなし、一服あがりませ。

ト駕籠より出る。

甚九　旦那、この駕籠へお掛けなせえ。

運藏　これでは廂を借りて、母屋を取るやうなものだ。

ト言ひながら駕籠の内へ腰を掛ける。唄になり、花道より茂右衛門着流し、一本差し、銀鎖りの煙草入、東金と記したる板の金物ある提灯を提げて出來り。

茂右　淵瀬と替るは人心、手延びにならぬ千葉家の重寶、四五日あとから附け覘ひ、親仁をせぐつて取り返す手段は今宵、さうだ〳〵。

ト舞臺へ來る、此時三人煙草を呑居る、茂右衛門三人の顔を見て思入、是を三人は知らぬこなし、

勘八　おめえは東金茂右衛門さん、今時分どこへ行くのだ。

そこに居るは勘八さんか。

茂右　わしやお廓へ行かうと思つて來たが、いゝ所で逢ひました、そしてお前は。

勘八　なにおれか、おゝ、おれは根岸の方へ用があつて行くのだが、爰に少し話しがあつて。

運藏　勘八、身共は用事あれば、そろ〳〵參る。

茂右　お連れの衆は、運藏さまと甚九郎さん、お顔揃ひでござりますね。
運藏　今宵廓へ參つて、立ち歸りにいたすのぢや。
甚九　心も急けば又ゆる〳〵。
勘八　一緒に行きませう。（ト三人とも思入あつて行き掛ける。）
茂右　あいや勘八さん、おめえにやあ外に用があるから、ちよつと待つてくんなせえ。
勘八　用ありさうに引き留めて、小田原相談なら直平だぜ。
茂右　夜る夜中おめえを突き止めようと思つて來たのだ。まんざら惡い話しぢやねえのさ。
甚九　もし旦那、爰に居ちやあお邪魔だらう。
運藏　それも合點、勘八夫の品はよいか。（ト呑み込ませる）
勘八　大丈夫でござります。
運藏　どれ、待合さうか。
ト唄になり、運藏勘八へ思入、甚九郎も提灯を殘して、兩人忍び〳〵に上手へはひる。時の鐘、蟲笛。
勘八　さうしておれに、話しといふは。

茂右　外でもねえ、いつぞや筑波屋で噯甲斐ない野郎と思ひもせうが、知つての通り場所が惡さに敵對もならず、持合せたる集め金、それぢやあおめえの氣に合ず愛敬こぼした其日の別れ、それなり顏も見ねえぢやあ、わしが心も濟まねえから、度々行つてもいつも留守、又といつても逢へねえから、今夜は是非々々逢ひたいと、思つた念が屆いたか、いゝ所で逢ひました。あの紫とはお前も承知で、書附までおれに出した仲なれば、あれなりにもなるめえし、詑言半分其事も、實は聞きてえこんたの腹、其座の事は其場ぎり根も葉もないと思つて下せえ。

勘八　何の事だ用がありさうに引き止めて、根も葉もねえと思へといふのか、おぬしやそれでよからうが、おらあそれぢやあ詰らねえ、知つての通り金錢は人より綺麗な勘八だ、不淨な金なら欲しかあねえ。

茂右　そりやあおれも知つて居る、そこをこんたに折入つて、

勘八　娘をくれろか、金を返せか。

茂右　それより外に、望みがある。

勘八　望みがあるとは。

茂右　蓮藏から預かつた、千葉家の重寶東雲の茶碗、おれに讓つちやあくれめえか。

勘八　おれが物でもねえ物を、どうして〳〵遣られるものか。
茂右　いや、たゞは貰はぬ、金で買はう。
勘八　何だと、どうしたと。
茂右　あの寶がねえ時は、人の命に拘はる品、その出所が知れたゆゑ、手籠めにすりやあ造作もねえが、なまじこんたが所持するゆゑ、金を出して買ひ受けませう。
勘八　始めて聞いた茶碗の由來、金になるとあらば岩淵さまへ話した上、賣つてやるめえものでもねえが、其の袋物は金と引替へ。
茂右　そりやあ東金、おめえに難儀を掛けるものか。
勘八　面白い、それ程ほしがる茶碗なら、おれが爰に持つて居る。
茂右　どうぞ、見せて貰ひたい。
勘八　望みとあれば。（ト懐中より出し掛ける、此前より運藏甚九郎小戻りして始終を窺ひ居る）
運藏　いや勘八、その持主は身共だから。
甚九　直賣りにやあなるめえが。
勘八　知れた事よ、どの道金にしてくれろと、頼んだ主は運藏さま、見せる位はいゝぢやあねえかえ。

蓮藏　おぬしが承知でする事なら、望み掛つた東金のちつとは、顏も立てゝ遣らうわ。

茂右　そりやあ何より忝けない。

勘八　いゝ、ぶッけ晴れて、よく見さッし。

ト此時木鼠忠次の吹替へ、頰冠りにて上手より出で様子を窺ひ、勘八は懷より箱入り誂への茶碗を出して見せる、茂右衞門取つて、提灯にすかしよく見て、

茂右　是れが千葉家の重寶、東雲の茶碗であつたるか、成程古物なものだ。

勘八　價の代金極るまで、預り居るのはおれが役。（ト茶碗を取つて箱へ入れる。）

蓮藏　今宵買の期に望み、即金なれば右左り、安くとも茂右衞門へ賣つて遣らう。

甚九　それだが此節は、荒神松まで値上げの世界だ。

ト此うち蓮藏後の石地藏へ、手向けたる茶碗を取つて、東雲の茶碗と入替へ、箱へ手向け茶碗を入替へる。茂右衞門は是れを知らず、紙入の書附を尋ねるうちに、木鼠の吹替へ地藏の前の東雲の茶碗を取つて、懷中し、茶飯の丼を直して置き、其儘拔足して上手へはひる。

勘八　これ東金聞いたか、蓮藏さまが賣つて遣らうと、言はつしやるから思ひ切つて、引取り値段をいふがいゝ。

茂右 有難い、金といつちやあ爰にねえ、其の代物と引替へに是れでとつさん賣つてくんねえ。

ト端書の書附を出す、

勘八 なに、是れで賣れとは、こりやあ自筆の書附。

茂右 こんたに貸した二十兩、娘をくれた證文で其東雲の茶碗と引替へ、請出す客も運藏どの、望みの品を取持ちするも運藏どの、いやと言はれぬ不淨の品、元は千葉家の重寶なれど次郎兵衞どのが預かつたを、闕所に紛れてずり込んだを、今爰へ吐き出しやあ二十兩の實入であらう、何にも言はずに東金へ渡した方が其身の爲だ。默つておれに賣んなせえ。

運藏 やい東金、證文金は身共は知らぬ、品によつたら其茶碗、たゞでも遣るめえものでもないが、盜んだ品と言はれちやあ。此の運藏は賣られねえ。

甚九 こりや旦那のいふ通り、反故になつた證文を生して茶碗を取らうとは、鰹で鯛を釣るのだな。

ト勘八思入あつて、

勘八 成程茂右衞門は見上げたものだ、紫がチアイダデ亞米利加紅でまうける積り、役にも立たねえ書附で茶碗と交易しようとは、あんまり酷い見倒し野郎め、それでも達衆か東金か、古金買が呆れらあ。

茂右　其の東金も紙屑で、物をいつた其時にやあ、うぬらの首はあるめえが。

ト勘八きつとなり、茂右衞門を引附けて、

勘八　こりや野郎め、其證文が物を言やあ、言はずと知れた親子の契約、われが爲にやあ舅親、首がねえとはおれが事か。（ト引廻して、）これ親だぞよ。鵜の毛で突いた疵でも附けりやあ、うぬが體へ穴があくぞよ、逆礫になりてえか、其證文で物をぬかせ、惡口も切れねえ分際で、戲言つきやあ踏殺すぞ。面を見るも癪に障らあ。（ト足にて突き飛ばす。）

蓮藏　勘八が言ふ通りだ、おれが女房でないうちは、紫とは間夫でもあらう、見りやあ見る程小胸の惡い、しやッ面だ。

甚九　さあ東金、寄つて掛つて言はれても、答へ返しは出來めえが、三文なしの癖として大束ぬかしやあがるな、金がなけりやあきらめろ、いらざる苦勞を東雲の茶碗も元は土塊だ、泥に醉つたる生根を附けろ。

蓮藏　自身が茶碗を取持ちするゆゑ、手取らぬうちはあきらめられめえ、おぬしが迷ひを晴らす爲、紫大夫も思ひ切れ、是れが證據に東雲の茶碗がほしきやあ、斯うしてくれるわ。

ト箱より茶碗を出して茂右衞門の前へ叩き附け打割る、茂右衞門びつくりして、三人は顏を見合せ、

茂右　やゝゝ、千葉家の重寶微塵になれば、心を碎きし甲斐もなく、二人のものは一生埋れ木。もう此上はうぬらに義理も絲瓜もねえ、生れは郷在贅六でも、餓鬼の時から東育してと、無理な願ひも鹿野の峯の、是れでも男の上總山、鋸山と引つかけたら、跡へは引かぬ鋸屑めら、運の筑波とあきらめて、念佛ほざえて覺悟なせ。

運藏　それ、ぶツちめろ。

兩人　合點だ。

ト誂への鳴物になり、茂右衞門拔打ちに運藏へ切附け、勘八、甚九郎開帳札を取つて、打つて掛るを立廻り、勘八駕籠の内へ飛び込む、後より一かせ切附け、甚九郎茂右衞門の後へ組附き立廻り、振り解く、運藏茂右衞門兩人烈しく立廻る所へ、上の方より以前の辰、傀出で、兩人直に茂右衞門の左右へかゝると、甚九郎駕籠を眞中へ引出す、勘八よろぼひ出るを、見事に切倒す、鳴物替つて運藏茂右衞門と立廻るうち、月チョンと隱れる。爰へ木鼠の吹替出て探り合ひ、爰へ運藏割つてはひると、木鼠の吹替は、茂右衞門の煙草入を取つて、花道へ逃げてはひる。月の出になり、運藏茂右衞門立廻つて運藏の脇腹へ刀を突き通し、くる／＼廻つて刀を引き拔き止めを刺す、此時甚九郎溝へ落ち心にて眞黒になつて這ひ出で、よろ／＼と花道へのがれ、

甚九　溝へ落ちて眞黑になつたゞけにのがれた、何分にも鼻もちがならねえ、眞ツ暗闇で方角が知れねえ。鼻がくさいから、はなくさ通りか知らん。

ト時の鐘、合方になり、逃げて花道へはひる。茂右衞門血をぬぐひ、

茂右　一日男と思ひたる勘八どのも、我が手に掛けては言譯なし、この運藏は寶の盜賊、いつかは刀の錆となる惡人なれども東金が、人殺しはのがれぬ所、取り逃したは甚九郎、紫が聞いたら歎くも道理、猶豫はならぬ人殺し、ちつとも早く駈け込んで、おゝさうだ。

ト花道より、ばた〳〵にて上手より三幕目のお梅、手拭を冠り、男の羽織を引つかけ走り出來り、茂右衞門に行き當り、時の鐘、忍び三重にて双方びつくりなし、透し見る。此の見得よろしく、道具廻る。

（雪の下近江屋見世先の場）——本舞臺三間の間二階家商人見世先き、戸をおろしてある道具、眞中大戸の潜り、明け立て、左右上げ緣、此外へ竹の駒寄せを立掛け、下手土藏の後を見せ、是れより下手土藏の横手、町内の木戸、出口の所に用水、總て雪の下、近江屋見世先夜更の體、爰に以前の茶飯屋茶飯の荷をおろし居る模樣、割竹の音四ツ竹の合方にて道具納まる。

茶飯 茶めし、餡かけ豆腐、今宵は雨で俄がねえから、土手を早く切りあげて來たが、今駕籠屋の話しで聞きやあ、人殺しがあつたさうだ。早くこつちへ來ていゝ事をした。茶めし餡かけ豆腐。

ト呼んで居る、濟りを明けて○△若い者のなりにて出で、

○ おい〳〵、茶めし屋さん。

△ 餡かけにして、二杯おくれ。

茶飯 畏りました。毎晩有難うござります。(ト御膳籠のうちでこしらへ居る。)

○ おらの家は夜食が早いから、四ツ過ぎになると、腹が來た山だ。

△ 二兩や三兩の給金は、買ひ喰ひに入りあげてしまふ。(ト茶飯屋こしらへて兩人へ持ち來り。)

茶飯 へい、お待遠さまでござりました。

○ もう、何時だの。

茶飯 へい、かれこれ九ツでござりませう。

○ 夜は長くなつたの。(ト兩人家を憚り、小聲をして喰ふ。)

茶飯 お前さん方も、お風邪でござりまするか。

○ なあに、風邪ぢやあないが、奥へ内證だから、小聲をするのだ。

茶飯　わしは又お風邪のせゐかと存じました。（ト此うち兩人喰ひじまひ盆の上へ錢を置き、）

△　おい、錢がのつて居るよ。

茶飯　へい、有難うござります。又明晩お願ひ申します。（ト是れにて兩人は潜りの内へはひり、戸をしめる時、少し明けかけあること、）どりや、もう少しだ、歸りながら賣れざアよし、減らざア明日喰ふとしよう。茶飯あんかけ豆腐。

ト呼びながら下手の土藏の横へはひる。矢張り四ツ竹の合方にて花道より千之助、やつし、以前のお梅娘にて連れ立ち出で、花道にて、

千之　これお梅、今日はそなた何處へ行きやつたのぢや。

お梅　さあ、少し此の身の願ひがあつて、毘沙門さまへお參り申し、歸りに道を間違へて、廓の方へ參りましたる所。

千之　さうとは知らず日が暮れても、家へ歸つて來ぬゆゑ、東金の内儀も案じ、人を出すと言はつしやるゆゑ、わしが尋ねに來たのぢやわいなあ。

お梅　よい所でお目にかゝり、道が違はいでようござんしたな。

千之　もう九ツでもあらうから、少しも早う行かうわいの。（ト本舞臺へ來り。）

お梅　ほんに今日廓にて、陣代の運藏と甚九郎に出逢うて、思はぬ難儀に逢つた所、東金の茂右衞門さんが、丁度折よく來合せて、危い所をのがれたわいな。

千之　それは危ない事であつた、わしは又土手下で、そなたの母に逢つたゆゑ、市兵衞へ身の詫びをしてくれと頼んだれば、何ぞ一ツの功が立つたら、詫びを仕ようと言つたわいの。

お梅　それは、よい所で逢はしやんした。

千之　何ぞ功を立てようと、道々も考へたが、知つての通りの不都合ゆゑ、どうか金でもこしらへて、市兵衞夫婦の難儀を救ひ、それを功に家出せし、二人が詫びをしたいわいの。

お梅　さあわたしも實はさう思ひ、廓へいつたは此身を賣つてなりとも金こしらへ、それを功にお前さまの詫びを仕ようと思うたわいな。

千之　それはまあめつさうな、そなたに廓の勤めをさせては、市兵衞夫婦へ濟まぬ、決してそんな事をしやんな、金は世界の湧物ゆゑ、一寸延びれば尋とやら、又明日にもなつたらば、拾ふまいものでもない。

お梅　こんな苦勞をするならば、いつそ死ぬのがましであらう。

千之　生き甲斐のない二人の身の上、わが身ながらも愛想が盡き、死なうと心で思ふは度々、さすれば

不孝の上塗りゆゑ、思ひ直して今日までも。

お梅　命は繋いで居たけれど、

千之　是れぞといふ當もなし、

お梅　どうしたらよからうな。（ト此時お梅土藏を見て思入ある）もし／＼、爰の家は今時分、何で戸が明いて居るのでござんせうな。

千之　何で戸が明いて居るものか。（ト千之助よく／＼見て）成程細目に明いて居る、大方誰ぞ出た時に忘れた事と見えるわえ。（トこは／＼覗いて見て、）皆よう寢入つて居るわいの。

お梅　さうでござんすか。（ト兩人ほつと思入、時の鐘、誂への合方になり）

千之　市兵衛夫婦が艱難辛苦も、元はといへば親仁さまの、災難より起つた事、假令この身はどうなるとも、是れまでの恩返しに、盜みをしても。

お梅　え。

千之　道ならぬ事ながら、貧の盜み戀の敵、此身を捨てゝ。（ト思入）

お梅　そんならお前は、あの、盜みをば。

千之　戸の明いてあることこそ幸ひ、爰の家で十兩や二十兩取られたとて、事の缺けることもあるまい。

お梅　そんならどうでも爰の家で。

千之　さあ、ふつと心に浮んだも盗みをせいと天道さまが、お教へなされたのかも知れぬわいの。

お梅　お前に盗みが出來るかえ。

千之　覺束ない事なれど、そろ〳〵やつて見ようわいの。（ト始終時の鐘、犬の聲する。千之助拔足なして顫へながら門口まで來て咳の出る思入にて、又跡へ戻り。）意地の惡いもので、あそこまで行くと咳が出てならぬ、もう一遍やつて見ようか、（トそろ〳〵と行き掛けて、ぶる〳〵顫へるゆゑ、又跡戻りなし、）どうも顫へてならぬ、どうして〳〵、盗人といふものはなか〳〵むづかしいものぢや。

お梅　そんならわたしが、今度は行つて見ようわいな。

ト此時以前の木鼠忠次、頰冠りなして、花道よりぶら〳〵出て、舞臺をすかし見て、

忠次　はてな、向うの門から明りがすけて見えるが、戸が明いて居るか知らん。（ト見て、）誰か人が居るやうだ。（ト窺ひ〳〵、舞臺へ來り、下手に窺ひ居て、兩人やはりふる〳〵這入らうといふ心持ある、忠次これを見て前へ出て、）おい〳〵、おめえ方何をするのだ。（ト是れにて兩人びつくりして。）

千之　え〳〵〳〵。（トべつたりうづくまる、）お許しなされて下さりませ。

忠次　こう〳〵、許すも許さねえもありやあしねえ。おらア通り掛りの者だ、お前方の素振がをかしい

から、何をするか見て居たのよ。

千之　へい／＼お目立ちまする上からは、何をお隠し申しませう。泥坊をいたしまする所でござりまする。

忠次　何だ、泥坊をする、面白くもねえ、そんな事で盗人が出來るものか。

千之　そんならあなたは、取りやうを御存じでござりまするか。

お梅　御存じなら、敎へて下さりませ。

忠次　盗みやうを敎へてやらうか。

千之　よく御存じでござりまするな。

忠次　知らねえでどうするものだ、おらア泥坊が生業だ。

兩人　えゝゝゝ。（トびつくりして顫へる。）

忠次　何もびつくりする事はねえ。かう見たところが二人とも、初心の素人の様子だが、何で盗みをしなさるのだえ。

千之　はい、袖振りあふも他生の縁、お話し申すも私ことは、近國の生れの者でござりますが、ふとした事の災難で奉公人もあつたれど、只今にては零落いたし、以前勤めた奉公人に親切な者がござ

りまして、六七人の厄介を引受けて艱難辛苦、その日〳〵に困るゆゑ、どうぞ少しも貢ぎたいと心で思へど腑甲斐ない生業とてもない私、思ひがけなく此門を通り掛つて見ますれば、細目に明いた大戸の潜り、貧に迫つた出來心、様子といふは此の通り、御推量なされて下さりませ。

ト思入にていふ、忠次も氣の毒なる思入にて、

忠次　さうかい、そりやあ嘸困りなさる事だらう。なに造作もねえ事だ、おれが金を盗んでやるから、おめえ方二人は爰の前を行つたり來たりして、往來の者の積りで、頑張つてくんなせえ。

千之　はい、頑張ると申しまするは、どのやうな事をいたしまするのでござりまする。

忠次　頑張るといふのは、四邊に氣を附ける事よ、それで盗みを仕ようといふのはあぶねえ仕事だ。

千之　へい分りました。きつと頑張りますでござります。

お梅　あなた大丈夫でござりますかえ。

忠次　生業だ、案じなさんな。

ト忠次頬冠りをして尻を端折り直し、潜りを明けてそつとはひる、千之助見て、

千之　うまいものぢやなあ。（ト感心の思入あつて、頬冠りをして尻を端折り、忠次のまねをしてあちこち窺ひながら、）お梅、そなたも頑張りやあいなう。

お梅　あい／＼、今頑張りますわいなあ。

ト　お梅も手拭を冠りあちこちまご／＼する、此時縫包みの犬出て吠える、是れにて兩人びつくりして犬を追ひ廻す、此うちいろ／＼をかしみよろしくあつて、

もし／＼、向うから誰やら人が來るわいなあ。

千之　何ぢや人が來る、それは大變ぢや／＼。（トまご／＼して用水桶の蔭へ隱れたり、いろ／＼あつて、此うち向うより按摩出て上手へはひる。）やれ／＼嬉しや、ありや盲目の按摩ぢやわいな。

お梅　ほんにわたしも落着いたわいな、今夜通る人は、みんな盲目ならようござんすなあ。

千之　ほんに自由にならぬものぢやな。（ト此時忠次そつと潛りを明けて出來る、兩人あちこち見て居る。）

忠次　おゝい／＼、もういゝぜ。（ト兩人こちらへ來て、）

千之　もう泥坊を、

お梅　なされましたか。（ト大きく言ふ。）

忠次　これさ、大きな聲をしなさんな。

千之
お梅　ほんに、さうでござりました。

忠次　それ、是れでよからうの。（ト懷より百兩包みを出して遣る、千之助びつくりして、）

千之　こりやまあ、餘程の。
忠次　それをやるから、早く行きねえ。
千之　有難うございますが、此様には入りませぬ。
忠次　何さ、餘つた所が無駄にやあならねえ、そつくり持つて行きなせえ。
お梅　有難うござりまする、是れで二人が人間に、
千之
お梅　なられまするでござりませう。
忠次　口數きかずと、早く此の場を。
千之　さうしてあなたは、何れのお住居。
お梅　お名は何とおつしやります。
忠次　盜人の名所が、何で極つてゐるものか。
千之　それでもお禮に。
忠次　たゞ取る金だ、何の禮が入るものか。
千之　左樣なれば、
お梅　お泥坊さま。（ト小さく言ふ。）

忠次　そのうち逢ひやせう。

　ト是れにて千之助、お梅花道へ行く。此時瀞りより以前の〇、△窺ひ出で、

〇△　うぬ盗人め。（ト忠次に組附くを振拂つて、ちよつと立廻り、花道の兩人びつくりしてへたる。）

忠次　こゝ構はずと、早く行きねえ。

兩人　はい。（ト兩人立ち上る、忠次此時懷から以前の銀鎖りの煙草入を落す、是れを〇拾ひ、）

〇　これが證據だ。

忠次　や。

　ト立廻り、△を投げ退け踏まへるを木の頭、時の鐘、誂への合方、千之助お梅ふるへ〳〵花道へはひる。忠次跡を見送る、〇煙草入を見物に見せ、懷へ入れる。此の仕組よろしく、時の鐘の送りにて、

ひやうし　幕

六幕目

笹目ケ谷市兵衞内の場

〔役名――小間物屋市兵衞、小島隱居德入、木鼠忠次、市兵衞母、家主德右衞門、金貸三八、座頭市

六、紙屑買、町内の歩き、下男、小島惣領千之助。市兵衛女房お賤、同娘お梅、小島末娘お蝶、市兵衛末娘お稻等。」

(市兵衛内の場)——本舞臺三間の間常足の二重、上手反故張りの障子屋體、見附押入戸棚、佛壇、暖簾口へ障子を建て出這入り、屋根引窓附き、下の方葺きおろしの下家、内に一つ竈置き流し、四斗樽の水桶、臺所道具よろしく飾り附。檽子窓提灯の皮、いつもの所門口、此の外井戸、爰にお賤洗濯なして居る、軒下の竿竹に古足袋、繻絆掛けある、よき所に市兵衛の母洗ひ晒せし浴衣なりの世話の母にて、絲車を控へて絲を取り居る、四ツ竹節、合方にて幕明く。とやはり右の合方にて、下手より德右衛門、羽織着流しにて出來り、

德右　お賤さん、いゝ天氣でござるの。(トお賤洗濯をしながら、)

お賤　これは、どなたかと思ひましたら、德右衛門さま。

德右　今日は洗濯には、風がなうてようござる。

お賤　左樣でござりまする、僅かな賃錢でござりまするが、少しでも鹽噌の足しに仕ようと存じまして。

ト德右衛門洗つて居る、着物を見て、

徳右　さうして其の浴衣は、どこから賴まれなすつた。

お賤　これは横町の、古着屋さんのでござりまする。

徳右　はゝあ、それぢやアあの湯灌場買の善八が所のか、あゝそれで内で洗ふのが汚ないから、そこで爰の家へ賴んだのだな、慥に一件ものに違ひねえ。

お賤　えゝ、何とおつしやりまする。

徳右　いやさ、何でも錢を取るには、骨が折れる世の中ぢやなう。

お賤　内に母が居りますから、おはひりなさいまして、一服お上りなされませ。

徳右　おゝ、さうしませう。（ト内へはひる、母中腰になりこなし、）

母　はい、何でござります。（ト耳の聞えぬ思入、徳右衛門上座へ住ひ、煙草を呑みながら、）

徳右　いゝ天氣だといふ事よ。

母　疝氣なら灸がようござります。

徳右　市兵衛どのゝお袋も結構人だが、金聾で何をいうても話しが出來ねえ。

母　なに、鼻血が出ますえ、それは逆上のせるでござりませう、やつぱり灸がようござります。

徳右　いやさ、お前が聾ゆゑ、話しをする事が出來ねえよ。（ト大きくいふ。）

母　へえ、お上さんがてんぽで、芥子をかく事が出來ませぬか、それは御不自由でござりませう。

徳右　いや、如何に聾たつて、人の女房をてんぽだの何のとあんまりな事で馬鹿らしいわえ。

母　なに若々しい事がござりませう。今年で六十三になります。（ト母やはり絲を取つて居る。）

徳右　いや、是れは口を利くだけ無駄だ。これ、市兵衞どのは何處へ行かれた。

母　葛籠稈なら、何處にもあります。

徳右　いやさ、市兵衞は何處へ行つたよ。（ト耳の側で大きくいふ。）

母　へえ、忰でござりまするか。

徳右　やつと聞えた。

母　忰は何か用があつて、今朝早く出掛けました。

徳右　市兵衞が留守ならば、外へ行つてお賤どのに話して歸らう。

ト立ち掛かる、此時お賤も洗濯をしまつて內へはひる。

お賤　これは〳〵徳右衞門さま、お構ひ申しませんで、御免なされませ。

徳右　いやお賤どの、もう洗うてしまつたのか、今もお袋に聞けば、市兵衞どのは留守とのこと、別の用でもないが、お定まりの店賃だて。

お賤　いえもう段々と延び〳〵になりまして、申譯もござりませぬが、此間から降り續きまして、日雇ひにも商ひにも出られませぬゆゑ、存じながら御無沙汰になりました。

徳右　いやも、貴樣夫婦の衆が正直なのも知つて居るし、貧乏世帶の其中へ、お主を引取つて厄介多の市兵衛どの、なか〳〵容易なことで此の高い諸式を買ひ、所詮喰へやう譯がないから、催促するも氣の毒ゆゑ、三月地主へ立替へたが、段々溜るほど嵩が登つて出來まいから、少しづゝでも入れるがいゝ。

お賤　どうか都合いたしまして、納めまするでござりませう。

徳右　實に僅かな挊ぎでは米の錢にも足らぬ世の中、いや、米といへば醤油伊勢屋で目出度いことがあつて、施行を出すといふ事だ。

お賤　それは有難い事でござりまする。

徳右　出たれば直に持つて來てやりませう。ときに隱居はどうだな。

お賤　何というてもお年の上に、お目が不自由でござりますから、引き籠つてばかり居ります。

徳右　それに引替へ、このお袋は、達者な代りに遠通寺で、嘸困らつしやるであらう。

お賤　大きな聲もいたさねばなりませぬ、少しも聞えませぬゆゑ、內證の事に困ります。

徳右　いや、目の悪いのもいかないが、耳の聞えぬも、不自由なことだ。

母　誠に不自由でござります。

徳右　や、こりやお袋聞えたか、これがつんぼの早耳といふのだ。

母　いえ、不自由な代りに、此の邊は火事沙汰がなくて、ようござりまする。

徳右　おや又間違つた。はゝゝゝ。(ト煙草入をしまひ、立ち上り。)市兵衞どのが歸つたら、よく言つて下さい。

お賤　畏まりました。

徳右　どれ、自身番へ行つて碁でも打たうか。(ト右の合方にて、花道へはひる。)

お賤　ほんに上總から鎌倉へ、引越して來てもう八年、東金茂右衞門さまの厚い世話、其のお蔭でどうなりかうなり今日までは凌いだれど、微塵積つて山の譬へ、次第に溜る世間の借り、それゆゑ今日も朝から市兵衞どのが行かれしが、どうぞ都合が出來ればよいが。

ト思入、此内母は聞えぬ思入にて、絲を取り居る、上手屋體にて、

徳入　お賤〳〵、障子を明けてくりやれ。

お賤　はい〳〵、畏りましてござりまする。(ト合方にて障子を明ける、内に徳入、坊主頭、切繼ぎなりにて、

目病の思入、床の上に凭れて居る。）御隱居さま、お目覺めでござりまするか。

德入　いやも、兩眼ともに見えぬので、寢ても覺めても同じ事ぢやが、降り續いた雨あがり、暑いので鬱陶しい。

お賤　左樣でござりまする、俄か天氣で暑うござります、ちとこちらへお出でなされまして、お庭の花でも。（ト德入へ惡い事言つたといふ思入。）いえ、お煮花でも入れますからお氣晴らしをなされませ。

ト德入の手を取り。

德入　あゝも、手のないのに、煮花の何のと、必ずおれに構うてくれるな。（ト德入手を取られ前へ出る。）何ほ以前仕へた者とて、倅次郎兵衞がお咎めにて遠い所へ行つてより、生れ故鄕の上總を立退き甲斐性もない體にて八年この方二人の厄介、氣の毒でならぬゆゑ、いつそのこと淵川へ身でも投げて死なうかと、思うた事もあつたれど、是れまで永々世話になり、難儀を掛けるも本意でないゆゑ、生きながらへて居る德入、然しもう永い事もあるまいから、面倒を見てくりやれ。

お賤　又しても其樣な事おつしやりまする、お主のお世話をば、召使ひがいたしまするは、御恩送りでござりまする。市兵衞も私も、どうぞして旦那さまのお歸りなさるゝまで、あなたをお置き申したく、御壽命のあるやうにと、神や佛へ明け暮れに、お願ひ申して居りまする。

徳入　其親切も疾うからして聞いて居るゆゑ、おれも御先祖樣を拜んだ跡で、そち達二人を拜んで居るわい。

お賤　えゝ勿體ない、是れがまあお樂でもさせまする事か、有る無いまでもお聞かせ申し、お世話の仕甲斐もない身の上、したが正直にするお蔭ゆゑ、あちらこちらのお情で喰べる事に困りはいたしませぬから、決してお案じなされまするな、今に天のお惠みで、旦那さまもお歸りなされば、泣きの涙に引替へて、笑ふこともござりませう、お氣を長うお持ちなされませ。

徳入　實の事、悴に一目おれも逢うて死にたいわいの。（ト此時母徳入を見て、）

母　おゝ、こりや何時の間にか御隱居さまには、是れへお出でなされました。

徳入　一間のうちも鬱陶しいから、氣を晴らしに是れへ出た。

母　なに、蜩がもう出ました、蟬の音も聞えませぬに。わしの耳へは、聞えぬのか知らん。

お賤　又かゝさんが、聞き違ひかいなあ、はゝゝゝゝ。

ト臼挽唄になり、花道よりお稻、染返しの浴衣、けし坊主、笊を抱へ枝豆を入れしを持ち出で、

お稻　枝豆や〳〵。（ト呼びながら出來る、跡よりお蝶、女郎花の枝を持ちこなしあつて、）

お蝶　お稻や〳〵。（ト呼ぶゆゑ振返り、）

お稻　おやお蝶さん、どこへ行つて遊んでお出でだ。

お蝶　わたしは今まで、植木屋へ行つて、盆踊りの稽古を見て居たわいなあ。

お稻　わたしも商ひをして、もう豆が一把になつたから、家へ歸るのぢや。

お蝶　お稻、豆があるならわたしにおくれ。

お稻　いえ〳〵、家へ行つておつかあにお貰ひ。（ト兩人舞臺へ來て、）

お蝶　おつかア、今歸つたよ。

お賤　お蝶さま、お歸りなされましたか。

お蝶　もうちつと遊んで居ようと思つたけれど、飽きたゆゑ歸つて來たわいの。

お賤　いやもう、日暮れでござりますから、お歸りなされた方がよろしうござりまする。

德人　お蝶、どこへ遊びに行きやつた。

お蝶　植木屋へ遊びに行つたら、こんな花をくれたわいの。

お賤　おゝ、是れはよい花でござりまするな。

德入　よい花とあるからは、おもちやにせずと、如來樣のおッかあに供へたがよい。

お蝶　あい〳〵、是れを上げてくりやいの。

お賤　おゝ、これはおとなしいこと、惜しいともおつしやらず、嘸お悦びなされませう。

ト女郎花を取つて、佛檀の花立へ供へる。

お稻　おつかあ、おまんまはまだかえ。

お賤　生憎御膳が都合が惡く、お夜食炊きになつたゆゑ、もう少し待つて居や。

お稻　おいらは早くたべたい。

お賤　又そんな事を言やる。（ト叱る、母絲車を止めて、）

母　もしお蝶さま、婆アやが絲を取つて、單衣を織つて上げます。

お蝶　そりや嬉しいわいな。

お稻　おいらにも、早く織つておくれよ。

母　何だ芋を掘つてくれ、まだお芋は大きくなりはせぬわいの。

お稻　おいらにも、織つておくれよ。

母　えゝ、此子はしつこい、まだお芋は大きくなりはせぬ。

お稻　分らないお婆アさんだ。

お賤　あゝこれ、そちにも織つて貰つて遣らうわいの。

德入　そんなら孫めに浴衣を織つて遣つてくれるとか、それは忝ないが、年寄りの大儀であらう。
お賤　なに、仕馴れました事でござりますから、大儀な事はござりませぬ。
德入　さうして市兵衞は、まだ歸らぬか。
お賤　もう、今歸りますでござりませう。
　　　トやはり右鳴物にて、花道より市兵衞、肴流し腕を組み、思案の思入にて出來り、下手より屑屋紙屑買ひにて、鐵砲笊の中へはかりを入れて出て、花道の方へ行きかけ、互ひに行き違ひ、
屑屋　いや市兵衞さん、何處へ行きなすつた。
市兵　是れは屑屋さん、いつもながら精が出ますな。（ト互ひに入替り。）
屑屋　けふは何ぞありませんかな。
市兵　いやもう、大抵賣り盡しました。
屑屋　もし、此間の襤褸襦袢は、ありやあ買ひかぶりだぜ。
市兵　はゝあ、左樣でござりまするか。
屑屋　お前に泣いて口說かれるので、五十か六十いつでも買ひかぶらあ。
市兵　それはお氣の毒でござりまする。

屑屋　埋め合せに、何ぞ見附けておいておくんなせえ。
市兵　もう家にはござりませぬが、又人さまのでもお世話いたしませう。
屑屋　どれ、隣り裏で約束があつたッけ。（ト別れて屑屋は花道へはひる。市兵衞は門口へ來て、）
市兵　お賤、今歸つた。
お賤　おゝこちの人、今歸らしやんしたか。
お蝶　それ、市兵衞が歸つて來た。
お稻　何ぞお土産を買つて來たかえ。
市兵　今日は土産をさつぱり忘れた、其の代り此のお芋を、晩のおかづに煮て遣りますぞ。
子役　嬉しい〳〵。（ト徳入を見てこなし、）
市兵　これは〳〵御隱居さまには、端近うお出なされましたな。
徳入　目は見えぬけれど一間では、氣が屈してならぬゆゑ、氣晴らしに爰へ。
市兵　それはよろしうござりました、暑い時分には一間にばかりは毒でござりまする。
母　おゝ市兵衞か、いつの間に歸つた。
市兵　へい、只今歸りました。（ト耳の傍にて言ふ。）

母　おゝ、それは大分遲かつた、向うの榎の木で夕日は除けるが、其替りには日の暮れるのが早い、もう手許が見えなくなつた。

市兵　また明日のことになされませ。

母　なに、秋の事にしろ。氣の長い事を言はつしやんな。（ト合方にて絲車を持ち、母奥へはひる。）

德入　又お袋の聞き違へか、はゝゝゝゝ。わしも、一間へ行つて横にならうか。

お賤　お休みなされますなら、私が紙帳を釣つて上げませう。

德入　まだ、早いではないか。

お賤　町とはいへど片田舍。

市兵　日の暮れぬに蚊が出てなりませぬが、どれ、蚊いぶしをいたしませう。（ト唄になり、德入お蝶に手を引かれ、是れな市兵衞お賤介抱し、紙帳の内へはひる。跡合方市兵衞思入。）やれ〳〵、けふは草臥れた草臥れた。

お賤　大分遲うござんしたが、何處へ廻つてござんした。

市兵　さあ、市六と二八から借りた金が日限りになり、此間から日々の催促、所詮丸では返せぬが、半分も返さうと金の無心に東金親方の所へ行つた所が、間の悪いといふものは、とんだ事がお家に

あつた。

お賤　えゝ、案じる事ぢやござんせぬか。

市兵　いやもう、案じる所か大變だ、人を殺したとか、盜みをしたとかいふ事で。

お賤　えゝ、そりやあまあ何で。（トびつくりなし、）

市兵　委しい話しは聞かぬけれど、茂右衞門さまの言交した筑波屋の紫どのゝ事につき、人をあやめたとかいふこと、まだ外にも取込みの事があつて、上を下とお家の騷ぎ、心なしに金の事を言はれもせねば、悄々とそこを出て、

お賤　そんなら外で、借りてござんしたか。

市兵　それから方々歩いたが、扨て錢金の無心ほど、言ひ憎いものはない、たうとう言はずに歸つて來た。

ト是れを聞きがつかりしたるこなし、

お賤　そんなら少しも出來ぬのかいなあ、さういふ事とは知らぬゆゑ、お前が歸つてござんしたら、お米を買はうと思うて居たに、差當つて困るはお夜食。

市兵　米屋さまにも下義理をして、又其上にとも言はれもせず、娘が今日の賣揚げと、おれが財布をふ

るつた所が、僅か四十か五十ばかり。（ト お賤笊を出して見て、）

お賤　わたしの小遣ひの殘りが、爰に二三十。

市兵　一ツに寄せて是れだけで、今夜は粥でも炊いておかう、然し行燈の油があるか。

お賤　下皿をしぼつたら、宵の内はあるであらうが、年寄り子供もあるなれば。

市兵　それでは油も買はずばなるまい。（ト此うちお賤錢を集めて見て、）

お賤　これで、そんなに買へるかいなあ。

市兵　質を置くにも置き盡し、はて、困つたわえ。（ト思案のうち戸棚より古襦袢を出して、）お賤、これで幾らでも附くだけ、伊勢太へ行つて借りて來てくりやれ。

お賤　それぢやというて、何ぼ暑い時分でも、裸では問屋へ行くことが出來まいわいな。

市兵　まあ、差掛つて今夜の所を、明日は明日の風が吹けば。

お賤　ほんにさうでござんす、一寸延びれば尋とやら、又よい風もござんせう。（ト言ひながら門口へ出て、）お前草臥れて居やさんせうが、竈の下を焚きつけて置いて下さんせ。

市兵　おゝ合點ぢや〳〵、其の歸りに油も買つて來やれ。

お賤　もし、御隱居さまのお藥も、温めて上げて下さんせ。

ト言ひながらお賤門口へ出る、市兵衞こなしあつて、

市兵 あの市六に去年から、借りたる金も日限の手詰め。
お賤 今日の所は僅かでも、どうか凌ぎは附けようけれども。
市兵 力づくにも思案にも。
お賤 屆きかねたるしがない暮し。
市兵 夫婦が心を碎けども、
お賤 廻りかねたる絲車、
市兵 瘦田もかれて追々に、
お賤 つゞまる日足も水無月の、
市兵 昔は出來秋待ちし身が、
お賤 今は其日の煙りさへ、
市兵 立つる願ひも四ツ限り、
お賤 谷七鄕の鎌倉に、
市兵 又あるまじき此身の不運、

お賤　思へば因果な、

市兵　まだ行かぬか。

お賤　あい。（トこなしあつて門口をしめ、）

兩人　身の上ぢやなあ。

ト唄になり、兩人心々の思入よろしくあつて、お賤花道へはひる。市兵衞思入あつて、

市兵　あゝ貧乏人の女房ほど忙しないものはない、年寄子供のかんがくから、質屋の使ひ何やかや、其間には賃仕事、定めて一日ほつとするであらうなあ。（ト時の鐘、）あゝ、今日は曇つたせるか日暮れが早い、どれ、行燈でも附けようか。（ト入相の鐘を打ちあげ、直に床の淨瑠璃にかゝる。）

〽秋近き雨知る軒や濕り勝ち、つかぬ附木に行燈へうつす燈火市兵衞が、忠義の筋も燈心の細き身過ぎの佗住居、門口明けて家主が、慈悲も施行の米を徳右衞門。

ト此うち市兵衞古行燈を出し、下皿をしぼり火打箱より附木を出し、蚊遣りの火を移し、行燈へ附ける。下手より以前の徳右衞門、袋へ入れし米を提げ出來り、門口をあけ、

徳右　おゝ、市兵衞歸られたか。

市兵　これは大屋さまでござりまするか、此樣ななりをいたして、眞平御免下さりませ。

ト襦袢の前を合せる。

徳右　あゝ構はつしやるな〳〵。（ト言ひながら内へはひり、）ときに市兵衛どの、悦ばつしやれ、醤油伊勢屋でな、男の子の跡取りが生れたによつて、其お目出たに、笹目ケ谷の左手右手八ケ町の其間、一軒前軒並みに米が五升に錢が三百、今受取つたから持つて來た。（ト袋と錢を出す。）

市兵　それは〳〵有難い。然しまあ、それはお目出度いことでござります。

徳右　米かし桶でも出さつしやい。

市兵　畏りました。

〽桶にも事を缺け摺鉢、目も當てられぬ瘦世帶。

徳右　これさ、そんなものよりか、桶を出さつしやいな。

市兵　いえもう、桶は箍が切れて、ばら〳〵になつたから、是れへお入れなされて下さりませ。

〽詞にあくるしらげ米。（ト徳右衛門米をあけて、）

徳右　それ、こぼれたわ、よく拾はつせえ。

市兵　へい〳〵。（ト米粒を摺鉢へ入れ、）えゝ、斯ういふ事と早く知つたら、今の質は置くまいもの。

徳右　何と言はつしやるな。

市兵　いや、置き買ひにすることを早く知つたら、是れから二晩三晩は米を買はずにしまひます、有難うお貰ひ申します。(ト錢を取り、これを戴く。)

德右　ときに市兵衞や、さつきも御内儀に言つて置いたが、僅かな錢でも店賃が今月で四月になる、所詮一度にや出來まいから、少しづゝでも入れて下さい。

市兵　いえ、心に油斷はございませぬが何をいふにも其日に追はれ、つい遲なはりましてございまする思ひがけない此の三百、どうぞ是れを内取りに、お取りなされて下さりませ。

ト件の三百文を、德右衞門の前へ出す。

德右　いや〳〵、人の施行に出した錢、何ぼ店賃の抵當ぢやとて、わしが取つては先きへ濟まぬ、此米や錢のあるうち、挊いで儲けがあつたらば、少しでも入れたがよい。

市兵　えゝ有難うございます、あなたのやうなお慈悲深い、大屋さまはございませぬ。

德右　いや店子といへば親子も同然、他人のやうには思ひませぬ。いや、つかぬ事をいふやうぢやが、お前も上總の姉ヶ崎では相應に暮した身の果さうなが、身貧な中で目の不自由なあのお人は、慥かお前の御主人さま、耳の遠いお袋から主人の孫やら子供やら、諸式の高い中で、嘸骨が折れるであらう、正直なこなた衆なればと、心では思うて居るが、知つての通り場末の家主、言うては

惡いが祿な店子といふはなし、只氣の毒に思ふばかり、いやもわしの家のかゝなどは、お前の事を佛市兵衛といつて居りますわいの、やがて天道さまのお惠みで、此の苦勞をば昔語りにする事もあらうわいなう。

〽店子思ひの家主が、情も厚き夏の暮。（トほろりとこなしあつて氣を替へ、）

昨夜の雨は漏りはせなんだかの、もし漏るやうなら、直に屋根屋を寄越します、あゝ大分長話しをしたので、大層蚊が出た、どれ、お暇と仕ようかえ。

市兵　まあ、よろしいではござりませぬか。

德右　いや〳〵、まだ二三軒廻らにやならぬ、これ市兵衛どん、人は七轉び八起きといへば、必ず氣を落さずに、枠がつしやれや。

〽煙りにむせて德右衛門、涙拭うて立歸る。

ト德右衛門市兵衛を見て、不便だといふ思入にて、下手へはひる。市兵衛跡を見送り思入あつて、

市兵　もう一足これが早いと、質を置かずにしまつたものを、利息を一月ひかせにやならぬ。

〽呟く所へ立ち出る二人。（ト奥よりお稻出來り、）

お稻　とつさん、おつかアは何處へ行つたえ。

市兵　おつかァは今そこまでお使ひに行つた程に、おとなしうして居や。これ見や、こんなにお米とお錢を貰うたわ。

お稻　やあ、こりやあ大層お米がある。

〳〵お稻が聲にお蝶は立ち出で。（ト屋體よりお蝶出來り。）

お蝶　市兵衛、米を貰うたか。

市兵　へい、只今これを貰ひました、おとなしうしておいでなされ。只今爺が御膳を炊いて上げまする。

お稻 お蝶　うれしい〳〵。

お稻　とつさん早く喰べさしてや。

市兵　早くといつても是れから炊くのだ。

お稻　それでもひもじくつてならないもの。

市兵　行儀の惡い、同じ年でもお蝶さまは、そちよりも跡からお生れなすつたがおとなしい事を見ろ、喰べたいともおつしやらぬわ。

お稻　いや、お蝶さんもさつきから、喰べたい〳〵とおつしやつたよ。

お蝶　いえ〳〵、わたしやそんな事は。

お稻 でも植木屋から歸る時、わたしの荷の枝豆を。

お蝶 さあ、あの時は食べたかつたが、怺へて居たら、今はそんなに喰べたい事も。

〽ないといふ詞も潤む目に涙、世が世の時は上總にて、村の束ねの名主役、俵で積んである米も、其日に困れば三升か五升の米を打ち悦ぶ、幼な心のいぢらしく。

ト此うち子役兩人、米を手で掬ひ悅び居る、

市兵 これはしたりどうしたものだ、御膳を喰べる時分には誰でも喰べたくなるものだ、お蝶さまばかりぢやない、嘸隱居さまもおひもじからう、今炊いて上げませう、あゝ何にしろ夥しい蚊だ。（ト團扇にてお蝶に取附く蚊を追ふ思入あつて）どれ、男政岡と出掛けようか。

ト是れより獨吟のかゝり、

獨〽星影もくもり勝ちなる夏の空、子ゆゑの闇に米かしぐ、

床〽水の流れと人の身は、

獨〽うきしづみある浮雲や、

床〽いつ花の咲く事もやと、

獨〽かこち涙に袖ぬらす、雨に音を啼く時鳥、

床〽わが身に憂きを賤が軒、
〽その俤もにはたづみ、晴れぬ思ひの胸の夕霞。

ト此内市兵衞釜をおろし、そばや丼にて米をはかり、釜の中へ入れ置き、流しで米を磨ぐ、子役兩人膳棚より膳をおろし膳立てをする、市兵衞釜を掛け、焚き附け、始終蚊の喰ふ思入、

お稻　とつさん、まだ出來ぬかえ。

市兵　えゝ、せはしない奴だ、今からそんな事言つては、待遠でなりやあせぬ、此間から毎日見た踊りの稽古、盆には近所の子供衆と、一緒になつて踊らにやならぬ、どうぢや、ちつとは覺えたかの。

お蝶　おゝ、そりやよく覺えて居るわいの。

お稻　わしも覺えて居るわいの。

市兵　おゝそりやお豪氣だ〳〵、其の踊りをば、此爺やアにお見せなされませ。

兩人　そんなら二人で。

市兵　所望だ〳〵。（ト床にて音頭にかゝる）

〽おらが國にも名所がござる、千代と契りしあの鶴卷の、よいとなあ、辛苦重ねう、やれ蟻の塔。

ト音頭文句よろしくあつて、子役兩人踊ること、市兵衞團扇にて拍子を取る、跡合方、子役兩人飯の出來る方を延上り、見たき思入、市兵衞これを留める、此内釜の蓋吹き上がる、煙り立つを蓋を明けて見て、

それ、出來ましたぞ。

お蝶　嬉しい〳〵。

兩人　早く喰べたいわいなう。

市兵　まだまあ、蒸れるに間があれば、もう一遍今の唄を。

お蝶　そんなら、ま一度。

お稻　それでもわしや。

市兵　これ。

〽叱つても又泣聲に、〽〽おんらが國にも名所がござる、千代と契りしあの鶴卷の、よいとなあ、辛苦重ねしやれ蟻の塔。

ト此内市兵衞團扇にて拍子を取り、お蝶蚊に喰はれる思入、此唄をかりて、花道より六市、金貸し座頭、盲人のこしらへ、三八、羽織尻端折り、金貸しのこしらへにて出來り、花道にて兩人思入あつて、

六市　おい三八どん、今日は市兵衞の口は、是非片を附けにやあならねえぜ。
三八　そりやあわしも其氣で居まするが、あいつが何だかぐづ〳〵して分らねえ奴で困ります。
六市　もし片を附けねえといふならば、此間相談した通り、やッつけてしまふがいゝ。
三八　左樣さ、それがようございます、然しお前さんが程よく遣つてくれねえぢやあ段取りが附きませんて。
六市　そりやあ盲目めつぼう界にやつ附けるわ。
三八　そんなら其積りで、早く行きやせう。
〽三八が世間知らずのどつちよ聲。（ト門口より、）
市兵衞どのは内にかな、けふは是非々々片を附けて貰はにやならぬ。
六市　もう言譯は聞かぬぞ〳〵。（ト大聲をする、市兵衞びつくりして、）
市兵　これは〳〵、六市さまに三八さま、只今申譯にお家へ參りまする所、まあ〳〵お靜かになされて下さりませ。（ト市兵衞兩人を門口へ押し出す、三八、六市不承のこなし、）
三八　こウ〳〵、往來で借金の催促をすれば、家へ來てくれろといふのが、世間一統のお定り。
六市　それに態々内から外へ押し出すとは、こなたは氣でも違ひはせぬか。

市兵　いえもう、さう思召しまするも御尤もでござりまするが、何をお隠し申しませう、あの紙帳の内に居られまするは、目の不自由な私の主人、かやうに有る無いの事が聞えますると、御病氣の障りにもなりまするゆゑ、どうぞお靜かにお話しを下さりまするやうに、お願ひ申しまする。

六市　そりやあ片さへ附きやあ、こつちも愛敬をこぼし度くもねえ、なう三八。

三八　いやも其通り、靜かにしろといへば、いくらでも靜かにしてやるわ。

市兵　御得心下されましたら、まあ〳〵内へおはひりなされて下さりませ。

〽心ゆるみし門の口、天窓打ち附け。

ト是れにて市兵衞先きに、六市三八はひる。六市門口にて天窓を打ち附け、

六市　あいたゝゝゝ。

市兵　しつ。

〽しかみ面して打ち通り。（トこれにて上座へ兩人通り）

三八　所で市兵衞さん、どう片を附けてくれる氣だの。

市兵　いえもう段々との延引ゆゑ、どうぞして今日の所は、丸で出來ずとも半分でもお返し申す心にて今朝から金の才覺に參りましたが、先きの家に取込み事がござりまして、申し出さずに歸りまし

たが、其うちにはきつと都合をいたしますから、永い事ではござりませねば、どうぞ二三日お待ちなされて下さりませ。

六市　いや其二三日も紺屋の明後日で、幾度聞いたか知れやあしねえ、おめえ方のやうな人に貸したはこつちの不調法だが、利息は入れず元は返さず、これまで四五度書替へて、僅か元は三兩だが、鰻登りに段々積つて今ぢやあ十兩だよ。

三八　ちよつと聞くと三兩が七兩利息で、十兩に書替へたはいゝやうだが、二年この方着物の裾と履物の切れたのをおめえに見せてえやうだ、ほんに唇が切れるものなら、無駄な口を度々きいたので疾に綿でも出る時分だ。

六市　これ貴公そんな無駄な事を言ふにやあ及ばねえ、おれはもう市兵衞にやあ掛合はねえ、元この口入れはおぬしがしたのだから、貴樣は市兵衞から取るとも取らねえとも勝手にするがいゝ、おれは何でも貴樣から、今返して貰はにやあならねえ。さ、どうだ、どうしてくれるのだ〳〵。

三八　まあ〳〵よろしうござりまするゝ。これ市兵衞、あの通り言はつしやる。さ、直に片を附けて貰ひてえ。

六市　これさ三八、おれは何でも貴樣から取らにやあならぬぞ〳〵。

三八　只今片を附けますする。
六市　いや〳〵、今片を附けさつせえ。
ト大聲にて云ふ、市兵衞氣扱ひのこなし、トヾ茶を汲み來り　六市の前へ出し、
市兵　まあ〳〵、お茶を一つお上りなされませ。（ト六市探りながら取つて、ぐつと呑み咽せる。）
六市　おほん〳〵。
ト市兵衞氣の毒だといふこなしにて、團扇にて蚊遣りを煽ぐ、是れにて三八また煙りにむせるこなし。
三八　おほん〳〵、おゝ苦しい〳〵。狸ぢやアあるめえし、べらぼうに燻すぢやあねえか。（ト言ひながら煙草盆を引寄せ、煙草を附け、さかさまに煙管を口へ入れて、）あツつゝゝゝ、えゝそゝツかしい男だ。
市兵　これは〳〵御免なされませ。
ト市兵衞思入あつて以前の三百文の錢を三八の前へ出し、跡へ下つて辭儀をする、三八見て、
三八　何だ、こりやたつた三百。
市兵　しツ。（ト奥へ氣兼のこなしにて制す、三八呆れしこなし、誂への合方、）さ、六市さま、三八さま、嘸お腹も立ちませう、一朱に足らぬ端た錢、わが物顏に出しましたも、それさへ旅行の貰ひもの、腑甲斐ないとも思召さうが、八年この方年々に不仕合せとも不運とも、貧すりや鈍な市兵衞に引

く元結の細腕も、束ねの合ぬ世帶ゆゑ、問屋々々へ借りが出來、くらし詰めたる昨日今日、明日の事は扨置いて御主に進める夜食さへ、みんな人さまのお情で、主従親子がやう／＼に、泣く音哀れな蓑蟲の人と思はゞお腹が立たう、どうぞ不便と思召し、僅かの錢も此身には、小判の端とも思召し、少しの間の御堪辨、どうぞお願ひ申しまする。殊に今宵は御主人の御武運祈りの大願に、梵字が瀧で取る垢離も、今日が七日の滿願ゆゑ、慈悲ぢや情ぢやお二人さま、明日まで待つて下さりませ。

〽お慈悲々々と手を突いて、詫びるも聞かぬ三八が。

三八　これさ／＼市兵衛どの、無駄な口をきかせるな、十兩といふ金高だよ、僅か五兩か六兩の利息を取つて待たれるものか、金が出來ずば仕方がねえ、娘を抵當に渡しなせえ。

市兵　それぢやと申して、娘を金の抵當に上げませうと、お約束はいたしませぬ。

六市　こつちも達て娘を連れて行かうといふ氣はねえ。

三八　金せえ返しやあ譯はねえのだ、さあ、耳を揃へて返しなせえ。

市兵　さあ、お返し申す心なれど、今といふては。

六市　金は返さず娘は渡さず、それぢやあ十兩踏む氣だの。

市兵　どういたしまして、踏むの何のと。
三八　踏まにやあ娘を渡しなせえな。
市兵　そこをお慈悲に、もう二三日、
三八　そりやあ無駄だ、それぢやあ金を揃へて返すか。
市兵　さあ、
六市　娘を渡すか。
市兵　さあ、
六市
三八　さあ、
三人　さあ〳〵〳〵。
三八
六市　えゝ面倒な、お娘來やれ。（ト お蝶の手を取り、引立てゝやらじと支へる。）
お蝶　あれい――。（ト市兵衞は兩人に縋り、留めて、）
市兵　あゝもし、それは大事の主人の娘。（ト此時お稻も縋つて、）
お稻　お蝶さんを堪忍して、どうぞわたしを連れて行て。
〽下されと誰が敎へねど子心に。

市兵　出來した娘、よく言つてくれたなあ。

〽奥へ憚る忍び泣き、三八娘をつく〴〵見て。

三八　鼻筋といひ目許と云ひ、女郎にするにはこつちがいゝわえ。

六市　おれにやあ分らぬから、貴公よく見て下ッし。

三八　そりやあ元は判方もしたもんだ、間違ひはござんせん。さ、お娘來やれ。

市兵　あゝもし、ちよつと待つて下さりませ。

六市　えゝ、しつこい、又待てか。

市兵　娘が承知の上からは、ちよつと支度を。

三八　少しのうちなら待つて遣らう、何にしても恐ろしい蚊だ、早くしてくんなせえ。

市兵　畏りました。

〽淚片手に市兵衛が、釜より直に盛る飯も、厚き禮儀の主從に、初穗を取りて我が子にも、揃へる膳さへ緣取れて、親子離るゝ身の切羽。

ト此内市兵衛釜をおろして、以前の膳の茶碗へ飯を盛り、お蝶にすゝめ、又お稻にもすゝめて、

さあお蝶さま、お上りなされませ、お稻そちも喰べやれ。

お稻　とゝさん、お前も。
市兵　いや〳〵、おれは信心で喰べぬのだから、遠慮なしにたんと喰べやれ。
お蝶 お稻　あい〳〵。
〽あいとお稻が取る箸も、片々短かき夏の夜に心ぜはしく、胸も碎くるばかりなり。
ト子役四人飯を喰ふことあつて、トヾお稻胴につかへる。
市兵　おゝ胸に支へたか、惜しみはせぬから、靜かに喰べやれ。
三八　あゝ、まだ夜食前と見えるな。
市兵　左樣でござりまする。さゝ、もう一膳替へてくりやれ。
お稻　いえもう、わたしは。
市兵　まだ一膳も喰はぬのに。
お稻　何だか咽喉へ通らぬもの。
市兵　おゝ、さうであらう〳〵、親に別れて行くのぢやもの。
〽不便の者やと喰ひしばり、跡は詞も泣くばかり。
六市 三八　さあ、飯がいやなら早く行かう。

お稻　それでも、わたしやおつかァに。

市兵　おつかァは又明日でも、逢ひにやるから行つてくれ。

　　　ト此うちお稻に着物を着せることよろしくあつて、

お稻　そんならとつさん。

市兵　おゝ、煩はぬやうにしてくりやれ。

お稻　あい。

お蝶　そんならお稻。

お稻　お蝶さん、あばよ。

　　　〽いふも曇りし泣聲に。（ト市兵衞愁ひのこなしあつて、）

市兵　あゝ、如何に貧苦に迫ればとて、現在娘を金の抵當。

三八　それも七日か十日のうち、金を揃へて持つて來れば、娘は直に返して遣るわ。

六市　もし又出來ねえ其時は、可愛さうだが年期一杯、苦界の勤め。

市兵　邪慳な鬼に連れられて、地獄へ落ちるも同じ事。

三八　貧乏ぐらしをするよりは、女郎になりやあ浮み上らあ。

市兵　末は苛責の小刀針。
六市　蠶ぐるみで。
三八　氣樂なものだ。
市兵　あゝ思へば不便な。
三八　小僧と盲目だ。
六市
三八　はゝゝゝゝ。
〽急いでこそは、連れて行く。
ト三八お稻を背負ひ、六市附いて花道へはひる、市兵衛思入、
〽跡打ち見やり市兵衛は、涙呑み込み胸撫でおろし。
市兵　さあ〳〵お蝶さま、まあ奥へお出でなされませ、永い事ではござりませぬ、直にお稻は戻ります
る、まあお出でなされませ。
〽連れて一間へ入りにける。（ト市兵衛お蝶をつれて奥へはひる、兩吟になる。）
〽村雨の晴るゝをいとゞ宵闇の、空頼みなく軒くらき、若葉のお梅千之助。
ト時の鐘、風の音になり、右の合方にて花道より、前幕の千之助若衆鬘、お梅好みのこしらへにて連

れ立ち出で、お梅こなしあつて、

千之　若氣の至りとは言ひながら、親の難儀も餘所に見て、そなたと共に家出なし、

お梅　委やかしこにさまようて、苦勞するのも親の罰、

千之　せめて不孝の言譯に、身貧に暮す市兵衞へ、貢の爲のこの百兩。

お梅　思ひがけなく手に入りしは、神や佛のお惠みにて、

千之　これにて詫びをせよとの賜、

お梅　少しも早く家へ行き、

千之　そなたの母を呼び出して、

お梅　二人の詫びを、

千之　頼まうわいの。

〽火影も細き行燈に、飛びかふ蝶のそれならで、暫し軒端に迷ふ蚊柱。

ト此内兩人舞臺へ來り、門口より内を覗き、よろしく思入

お梅　お稻を頼んで、かゝさんを呼び出して貰ひませう。

これお梅、頼みに思ふお孃が見えぬが、奥にではあるまいか。

千之　おゝ、それがよい〳〵。（ト　お梅門口へ行き、）

お梅　お稻〳〵。

〽呼ぶ聲も内外の人目憚るお梅、それと聞き附け納戸より、市兵衞は立ち出でゝ。

ト此うちお梅憚る思入にて呼ぶ、奧より市兵衞以前のなり、帶をしめながら出來り、

市兵　はい、お稻は脇へ行きましたが、何ぞ御用でござりまするか。

〽いふは親仁に二人はびつくり、見附けられじと傍なる藪の小蔭へ身を忍ぶ。

ト千之助お梅びつくりして、下手の藪へ隱れる、市兵衞門口へ來て、門の戸を明け。

娘をお呼びなされたは、誰だ知らん、隣りの子でも遊びに來たか。それに附けても女房が、歸つて來たら聞くであらうが、明らさまにも言はれぬ譯、何と言うたらよからうなあ。

ト此うち千之助立ち出で、

千之　はい、御免下さりませ。（ト此聲を聞いて、扨はとこなしあつて、）

市兵　どちらからでござりました。

千之　市兵衞、わしぢやわいなう。

市兵　わしぢやとは、誰ぢや。

千之　千之助ぢや程に、ちよつと爰を明けて下され。

市兵　なに、若旦那さまか。（ト門口を明けて、）さうして、何故こゝに。

千之　家出なしたる不孝の詫を、そなたに頼まうばつかりに。

市兵　そこは門中、ともあれこちらへ、おはひりなされませ。

〽詞を機會に千之助、跡にお梅がおづ〳〵と、見合す顔に門の戸ぴつしやり。

ト千之助内へはひる、跡よりお梅も續いてはひらうとする、顔見合せて、市兵衛門口をぴつしやりしめ、戸尻へ薪をかひ置く。

お梅　もし、わたしでござんす、明けて下さんせいな。

市兵　わたしとは、若旦那のお連れの衆か。

お梅　もしとゝさん、梅でござんすわいなあ。

市兵　いや、おれはそんな子は持たぬ、親子の義理も辨へぬ、人でなしに馴染はない、そりや大方門違ひ、餘所へ行つて聞かつせえ。

千之　さゝ其腹立ちは尤もなれど、お梅を許してくれぬ時は、わが身の勘當ゆりればとて、お梅を捨て置かれうか、祖父さまそなた衆が少しは樂に暮すやう、貧苦を貢いだ一包み、せめては是れを

規模と思ひ、どうぞ二人を許して下され。

お梅　これから心を入替へて、親へ孝行いたしますから。

千之　御料簡なされて、

兩人　下さりませ。

〽詫びる詞も内と外、尻目にかけて金を取りあげ。

ト市兵衛金を見、合點の行かぬ思入にて金を取つて、

市兵　見ればそぼろの形容、僅かの金でもある事か、恥かしながら市兵衛は、見たこともない此の百兩どうして是れが出來ましたぞ。

千之　さあ不孝の詫びが仕度いゆゑ、三度の食も二度となし、夜の目も寐ずに溜めて、漸く纏めた此の百兩。

市兵　いや、此の百兩は受け取られませぬ。

千之　なぜ、その百兩が受取られぬとは。

市兵　さゝ是れが二分か三分なら受けまいものでもなけれども、大枚百兩といふ金ゆゑ、出所が知れねば貰はれませぬ。さあ、何れから手に入りました。

千之
お梅　えゝ。
市兵　天から降つたか地から湧いたか、其の出所を言はつしやれ。
兩人　むう。（トつかへる思入。）
市兵　よもや言はれまい、其日の煙りも立兼ねる貧乏なせど是れまでに、人樣の物箸片々盗んだ事のない市兵衛、そでない金は受取られぬ。
千之　すりや、どうあつても此金は。
市兵　はて、知れた事、盗みものゆゑ。
千之　や。
市兵　一昨日の晩雪の下の、近江屋へ盗賊がはひり、金を百兩盗みしと、昨日からの世間の噂。
兩人　えゝ。（ト兩人ぎつくり。）
市兵　これ、此の百兩の封じめに近左と記せし封印は、こりや近江屋の包み金、どうして是れが手に入りました。
千之　さあ、それは。
市兵　いやさ、こなた是れを盗ましやつたか。

千之　さあ、それは。
市兵　言譯がござりますか。
千之　さあ。
市兵　盜ましやつたか。
千之　さあ。
市兵　さあ。
市兵 千之　さあ〳〵。
市兵　その日の煙りも立兼ねる貧乏なせど、是れまで人様の物を奢片々盜んだ事のない市兵衞、そでない金は受け取らぬ。（ト金を投げ出す。）
お梅　あゝもしとゝさん、其金はさるお人から貰ひました。
市兵　なに、此の百兩を人に貰つた、して〳〵それは、何くの誰に。
お梅　さあ貰うたに違ひなけれど、お名を聞かねば、いづくの誰やら。
〽言ふにこたへず、市兵衞は、
市兵　えゝ言ふなやい〳〵、盜みものに違ひあるまい。

千之　えゝこれ、めつさうなことを、世間の手前。

市兵　えゝ聞えても大事ない。親子でもない奴に言うて聞かすは無駄なれど、良藥は口に苦しと、うるさからうが若旦那、お前さまも聞いて下され。（ト千之助へこなし）これ、性根があらばよう聞けよ。ト誂への合方になり）小島といはれる旦那でも、時の災難のがれ難く、遠い島へ流しゝの、所は拂はれ生活もなく、此鎌倉の片邊り、貧苦の中をそれ程に育てられた恩義を忘れ、親や主人の隱居を捨てゝ家出をしたるのみならず、貢の爲と人がましく持つてうせた此の金は、噂の高い盗みもの、産みの恩ある此親に、まだも難儀を掛け足らず盗人にまで仕居る氣か、其の日の煙りも立兼ねて可愛い子を賣り身をそいでも、盗み所か往來に、落ちた物さへ拾はぬ市兵衛、どうしてこんな子が出來たか、是れから見れば年齢も半分下ではあるがお稻が孝行、あの金貸しの六市や、三八が來てお蝶さまを、金の抵當に連れて行くと、いふのを聞いてわしをば代りに、連れて行つてくれと。

〽わづか八つか九つでも、お主を大事親を大事と、思ふ心があればこそ。

末は女郎に賣られるも、承知で行つたお稻が健氣さ。こりや恥かしくも思はぬか、言はうやうない不孝者めが。

〽主の悴へ聞けがしに、當てこすりたる詞の端、千之助はあるにあられず。

ト市兵衛お梅を引附け、散々に打つ、千之助留め兼ねる思入、トヾ市兵衛を縋り留め、

千之　あゝ、其の腹立は尤もぢやがお梅が知つた事ではない、此の千之助が悪いゆゑ、親仁さまもござつたら、今のやうにおつしやらう、身にしみ／＼と面目ないが、不孝の罪を詫びの種、其日を樂にさせようと持つて來た其の百兩、何でそなたに難儀を掛ける心で持つて來やう、打つて腹がいるならば、さ、此の千之助を打つてくりやれ。

〽體をひしと突附けられ、打つに打たれぬ主家來。（ト千之助市兵衛へ體を突附け、こなし、）

市兵　勿體ないお前さんは、小島の家の惣領、祖父様の大事のお孫、譬にもいふ雌雞すゝめて時を告ぐると、娘が憎うござりまする。

〽娘が憎いと男泣き、お梅涙と諸共に。

お梅　親の目顔を忍びしは、濟まぬことではあるけれど、

〽お主様と添伏しは、女子冥利に叶ひしゆゑ、つい跡先きの考へなく、家出なせしも今となり、不孝な事と知つたるゆゑ。

お詫びの種のその金も。

〽包むとすれど封印に、顯れたれば隱しはせぬ。

いかにもそれは近江屋から、盜みし金でござりまする。

千之　さあ二人の詫びの其の金も、道ならざる事ゆゑに、貢も却つて仇となり不孝に不孝を重ねしか。

〽先非を悔いし千之助、市兵衞も呆れ果て、詞もなかりし折からに。

ト此うちよき程に前幕の忠次、手拭頰冠りにて花道より出で、門口に窺ひ居て、

忠次　いや、其百兩は、わつちが盜んであげやした。

始終を窺ふ若者が。

〽手拭取つて內に入り。(ト忠次內へはひる)

千之　さういふ、お前は。(ト行燈の灯影に市兵衞忠次を見て、)

お梅

市兵　やあ、忠次どのか。

忠次　元は上總の姉ヶ崎で、所を構はれ鎌倉へ、流れて來たる木鼠忠次、

市兵　思ひがけないこなさんが、どういふ譯でこの二人へ。

忠次　なに譯も絲瓜もねえ事さ、一昨日の晚四つ過ぎに、ぶら〳〵歸る雪の下、星さへ見えぬ眞つ闇黑

角近江屋の戶の隙の明りで見りやあ軒下に、若い男と女の二人、こいつア色で駈落と思ひの外親

の爲に、金がほしさに此家へ盜みにはひると聞いたゆゑ、そいつア惡い料簡だ足手まとひの女を連れ喰ひ込むのは知れたこと、おれが盜んで來て遣らうと、入らざるお世話に忍び込み、百兩盜んで遣つたれど、影も見えねえ闇黑に、店の者に見附けられ、名さへ聞かずに別れたが、思はず來かゝる門口で聞いてびつくり上總にて、御恩になつた次郎兵衞さまの御子息さまに、諸事の雜儀を背負ひ込む市兵衞さんの、娘ッ子とは知らなんだ、金はわつちが盜んだ金、御厄介は掛けねえから、折角二人が持つて來た貢の金の其の百兩、心置きなく市兵衞さん、遣つて上げてくんなせえ。

〽盜みはすれど慈悲深く、義理も籠りし親切に。

市兵　八年跡も主人の代りに、行かうと言ひし忠次どの、今に始めぬ親切は、忘れはせぬ忝ないが、此の金は使はれぬ。

忠次　そりやあ正直な料簡では、けんのんにも思はうが、盜んだわつちが受合ふから、氣遣ひなしに使ひなせえ。

市兵　さうでもあらうが此の金の、使はれぬのは一昨日の晩、角近江屋の門口で、人手に入し煙草入、東金といふ角字の金物、此の持主が盜人と疑ひ受けし茂右衞門どの、恩義を受けた其のお人に、

難儀の掛るを知りながら、どうまあ是れが使はれませう。
〽語るを聞いて忠次もおどろき。（トびつくりこなしあつて）

忠次　それぢやアあの晩大磯の、八町堤の夕まぐれ、ちよつと目に附く銀鎖り、持つて生れた惡心にちよつとさらつて廓内を、涼みながらにひやかして、ぶら〳〵歸る雪の下、金を盜んだ其時に、見世の奴等が見咎めて、組附くやつを引ッ拂ふはずみに落した煙草入、何にも知らねえ東金の、難儀と聞いちやあ、うか〳〵しちやあ居られねえ、是れから直に代官所へ。

市兵　えゝ、そんならこなたは、

千之
お梅　名乘つて出て、

忠次　むう、惡事はすれど生れ附き、人の難儀が見て居られず、假令命は捨てればとて、何年も榮耀をした罪亡しだと思やあいゝのさ。

千之　それもこれも、わたしらが賴みし金の百兩ゆゑ。

お梅　お前に命を捨てさせては。

忠次　はて是れまで積る身の惡事、どうで一度は切られる體、爰らで死ぬのが死花さ。

市兵　とはいへそれも此金を、盜んだ家へ返したら、命を捨てるに及ばぬこと。（ト百兩包みを出す。）

忠次　いゝや、此の百兩は貢いだ爲、二人の衆の志し、

市兵　假令何と言はうとも、こなたが命を捨てると聞いては、猶々これは受けとれぬ、今は二人は扨置いてこなたへ是れは返します。若旦那は兎も角も、娘は親を捨てたる奴、七生までの勘當ぢや、親でない子でないぞよ。

忠次　そいつアあんまり强情だあ。

市兵　おゝ、曲つた事は嫌ひでござる。

〽切つて放せし一言に。

忠次　はゝゝゝ、是れ程言つても分らざあ、儘よとしようよ。二人とも捨てるといやあ是れからおれが引揚げて、樂に二人は暮らさせらあ、市兵衞さん、跡で兎やかうあるめえの。

千之
お梅　でも、此儘わたしら二人が。

忠次　はて案じずと、おれと一緒に來なせえといふに。

〽口と心は裏表、仕方なく〳〵千之助、お梅を伴なひ立ち出れば、忠次も共に門の外、囁き合うて傍なる、藪の小蔭へ身を忍ぶ。

ト千之助お梅外へ出る、忠次件の金を持ち、兩人へ囁き下手藪の蔭へ忍ぶ、兩人も同じく小隱れする

こと。

〽折柄一間を駈け出るお蝶、見えぬ目ながら德入が、脇差携へおつかけ出で。

ト ばた〳〵になり、上の屋體よりお蝶逃げて出來る、跡より德入、短き脇指を拔き追掛け出で、

お蝶　あれ、ぢゞさまが。

德入　不便ながらも、覺悟せよ。

〽探り寄つて胸許を、突かんとなすを見るよりも、市兵衞驚き押し止め、

ト 德入お蝶を突かんとするを、市兵衞手早く留め、

市兵　や、こりや御隱居さまには、血迷うてし。

德入　おゝ血迷ひもせぬ德入は、孫を殺して死ぬるのぢや。

市兵　そりやまあ、何ゆゑ、如何なる譯で。

〽いふに德入涙を拂ひ、（ト誂への合方になり、）

德入　さ、最前からの一部始終、寐たふりをして聞く苦しさ、少しは暮らしの手助けにも、ならねばならぬ千之助は、若氣の至りに、そちが娘のお梅と共に家出なし、苦勞を掛けし身の詫びに、貧苦な貢ぎ百兩の金を持つて來居つたは、出來した事と思ひの外、盜みし金にてそれゆゑに、多くの

人に難儀とやら。

〽聞くもうるさき娑婆世界、孫とおれがない事なら、か程貧苦はさせまいもの。孫を殺してわれも死に、そなた衆二人の苦勞をば、助ける心のこの德入。

ト德入振りはらひ、死なうとするを、市兵衞留めて、

市兵　そりや情ない御隱居さま、お前さまやお蝶さまにお命を捨てさせる位ならこんな苦勞はいたしませぬ、暮しも細き身代ながら、五日に一度小魚でもあなたばかりに上げまするは、其の御壽命が延ばしたさ、あなたがお命捨てたとて、娘が歸るといふではなし、金は世界の廻りもの、散る秋あれば花の咲く再び春に廻り逢ふ、どうぞ旦那の御赦のあるまで、御命大事に御隱居さま、お待ちなされて下さりませ。

〽事を分けたる一言に、德入も是非なく刃を置き。（ト德入刃物を置き、）

德入　あゝ誤つた〳〵、そなた衆の親切を無足になして命をば捨てようと思つたは、切ない譯に閉ぢられて、死んだが增しと今の仕儀、實は是れまで幾度か死なうと思つたも、悴が再び歸るまで生延はつて逢ひたいゆゑ、左程そち達が思うてくれる志し、無足になして死なれうか、ふッつり死ぬのは思ひ留つた。

市兵　すりや、お聞き届け下さりましたか、えゝ有難うござりまする。

〽宥むる詞のその中へ、風呂敷抱へ、お稲は足早に。

ト ばた〳〵になり、お稲お賤が以前持行きし風呂敷包みを抱へて逸散に出來り、門口を明けて、

お稲　とつさん、そこにか。

市兵　やあ、そちやお稲、どうして戻つて來やつたぞ。

お稲　さあさつきおッかあに逢つたらば、知らぬ家へ連れて行き、此の包みを寄越したわいなう。

〽心ならずも市兵衛が、結び目解けば落ちゝる手紙。

ト是れを利き市兵衛、件の包みを解く、中より手紙と金包み出る、取上げ見て、

市兵　や『書置きの事』やゝゝゝ。

〽封じ押切りくり開き、

『何々先刻使ひに參り候折から、途中にてお稲に出逢ひ、六市より樣子承り候處、金子の抵當に連れ行き候やう申し候ゆゑ、生ひ先き永き子供のこと、得心いたし參り候心根を察し候ては、猶更不便相増し、殊には十兩の金は濟み候ても、跡々の暮しにも差支へ候儘、お前さまにもお斷り申さず、此身を三歳苦界へ沈め、金子調へ差上げ、娘に代り參らせ候。』

徳入　やゝ、そんならお賤も貢ぎの爲に、身を沈めたか、ほゝほい。

市兵『猶々御隱居さまの御合藥は、わたしの針箱の中に御座候。お蝶さま始め子供には、折々灸治お願ひ申し上げ參らせ候、申し上げ度きことは山々候へども、お稻の歸りも案じ候儘、申し殘し參らせ候』

〽讀む文言に市兵衞も、涙を浮め。

これお賤、よく行つてくれたなあ、僅か一日片時も樂々させた事もなく、末は流れの憂き川竹、これ料簡してくれいやい。

ト市兵衞よろしく愁ひの思入あつて、泣き落さんとしてこなし、是れにて時の鐘、はつと氣を替へ、

や、あの鐘は祈念の刻限。

徳入　そんならこなたは、梵字が瀧へ。

〽身ごしらへする奥の間より、癪氣に惱む母親が。

ト市兵衞白布へ梵字散らし書きの着附を出し、立ち上る。此時奥より母親胸を押へ出來り、

母　あゝ苦しや〳〵、俄に癪が差込んで。

市兵　なに、癪が差込みますとか。

徳入　時候のせゐか、おれも共々。

市兵　え丶、すりや御隱居さまも。
德人　胸へ差込む、この苦痛。
市兵　え丶折も折とて二人の御病氣、けふで七日の斷食も、今結願の時に至り、行くに行かれぬ此場の仕儀。（ト市兵衞當惑のこなし、此時表に忍ぶ千之助お梅出で、思入あつて門口を明け、）
千之　その、御介抱は、
お梅　わたしら、
兩人　二人が。
市兵　お丶、許し難き事ながら、一人で出來ぬ御介抱、
千之　そんなら許して、
兩人　下さりまするか。
市兵　お丶、お主と親には替へられぬわ。
兩人　え丶、お嬉しう存じまする。
ト此以前より、忠次下手の松より登り、屋根の上に窺ひ居て、以前の金を手拭に包み、引窓を明け、エイと打ち込むを、其儘拾ひ取り、手拭の内の封じ紙を見て、

市兵　これは。
忠次　天より惠む、身請けの金。
市兵　さういふ聲は、忠次どのか。
忠次　盗んだ金は忠次が科、封の替つた其金は、市兵衞どのには惠まねど、お賤どのへ天より賜。
千之　まだ其上に寶の茶碗も、忠次どのが。（ト千之助懷より忠次が以前手に入りし茶碗を出す。）
徳入　すりや、此の品も、ちえゝ忝ない。（ト徳入茶碗を取つて思入。）
市兵　われは是れより、梵字が瀧へ。（ト忠次屋根より飛び下りて、）
忠次　少しも早く、救ふは東金。
市兵　大赦の願ひ。
忠次　盗みの訴人。
千之　お二人さま。
徳入　急いで此場を。
市兵
忠次　むう、さうだ。
〽善と惡との二筋も、忠義の道の一筋に。

ト三重、曲撥を冠せ、市兵衛は花道へ、忠次は東のあゆみへ掛る、舞臺は、お梅は市兵衛の母を介抱しながら向うを見送る、德入は僞りだといふ思入、千之助これにて手を合せ拜むこなし、兩花道の兩人は、逸散に花道へはひろ。

ト引き附けると、時の鐘、瀧の音にてつなぎ引返す。

幕

大詰

朝比奈切通しの場
梵字ヶ瀧荒行の場

〔役名――小間物屋市兵衛、百姓九左衞門、宗兵衛悴宗次郎、家主德右衞門、不動院同宿二人、小島次郎兵衛、同悴千之助、市兵衛娘お梅、宗兵衛後家お澤。〕

（朝比奈切通しの場）――本舞臺一面の黑幕、上下杉林の植込み、日覆より杉の釣枝、總て朝比奈切通しの體、爰に〇、〈坊主鬘鼠の着附、尻端折り、同宿にて、松明を持ち立ち掛り居る、山おろしにて幕明く。

〇ときに雲念、此の山内の梵字が瀧へ今日で七日斷食なし、荒行をなす市兵衛は、元上總の姉ヶ崎

村、名主の次郎兵衛が所に居つた召使ひ。
△猪おどしの鐵砲から、のがれぬ科で波濤を越え、主人が遠國へ流され、其跡の厄介を市兵衛一人が引受けて、艱難をする忠義もの。
○主人の赦免になるやうにと、不動尊へ大願掛け、七日の行も今日が滿願。
△折惡しく此程より、降り續いたる五月雨に、瀧の内も太くなり。
○岩をも貫く水勢ゆゑ、怪我のないやう警固しろと、師の坊よりの二人へ言附け。
△あれ〳〵、かすかに聞ゆる鈴の音は、市兵衛に違ひない。
○最早瀧にかゝりし樣子。
△是れより參つて、
兩人 警固なさん。（ト山颪にて兩人上手へはひる、山おろし打ちあげ、大薩摩にかゝる。）
〽それ松柏長へに聳え、巍々たる巖の絕頂より、落ち來る梵字ケ瀧の音、谷に響きてさながらに、鳴雷に異ならず。（ト大薩摩の切れ、知らせに附き黑幕切つて落す。）

（梵字ケ瀧の場）――本舞臺向う誂への瀧、銀にて二段におろし、好みの岩組、瀧の下誂への岩臺、是

れより瀧左右へ流れ、上の舞臺前瀧壺の流れよき所に、梵字ヶ瀧と記せし榜示杭、古びたる常明燈の木燈籠、上下一面に蔦の絡みし松杉の林、同じく釣枝、總て御輿ヶ嶽不動院梵字ヶ瀧の體、爰に市兵衞、好みの行衣、梵字散らし書のなり、荒繩にて腹を卷き、白の鉢卷水入の鬘、鈴を振り、瀧にかゝり居る見得、誂への鳴物にて道具納まる。

〽頃しも皐月廿八日、今日滿願に市兵衞が、主人の御赦を祈りの大願。

ト市兵衞よろしく瀧に掛り、思入あつて、

市兵　南無大聖不動明王、忍辱慈悲の利益を以て、孤島に苦しむ我が主人次郎兵衞、再び御赦免あるやう、愛愍納受なさしめたまへ〳〵。

〽なうまくさまんだばさらだと唱ふる呪文の聲絶え〴〵、降り續きたる五月雨に、水勢強く打ち流され、岩に縋れど斷食の疲れに足もよろ〳〵〳〵、なゝめの苔に打ちすべり、どうと落ちたる瀧壺に、四邊も見えぬ水煙り、行場を照らす常燈の、灯影を目當に同宿が、それと見るより走り寄り。

ト此うち誂への鳴物にて、市兵衞瀧にかゝり、水勢強く流される思入よろしくあつて、トヾ其儘岩にすがり、息をつき居る、此時下手より、ばた〳〵にて、以前の〇、△出來り、此の體を見て、

○やあ市兵衞、降り續いたる雨上り、水勢強き梵字ヶ瀧。〽

△今日で七日の斷食なし、身體疲れし身を以て。

○今半時かゝりなば、汝が命は危ふし〲。

△はや〲下山、

兩人 いたすべし。

〽止むる詞を、耳にも掛けず。

市兵 あいや〲、不動明王へ一命掛け斷食なしての大願も、今日は七日の則ち結願、今宵九ッの鐘までに大聖明王の利益もなく、主人の赦免なき時は、生きて詮なき我が體、落ち來る瀧に身を打ち碎き、此瀧壺にて死する心。

〽命惜しまず岩頭へ、又も登るに同宿が。

○汝に命を捨てさすなと、師の坊よりの言附けなれば、

△最早瀧には掛けさせられぬ。

〽有合ふ注連に掛け罠結び、市兵衞が腕を取つて引き卸すを、えゝ邪魔すなと振拂ひ、岩に縋りてよぢ登れば、どつこいさうはと足首を、捉へて跡へたぢ〲〲、妨けあるは大願の

叶はぬしるしか殘念やと、眼血走り髮逆立ち、五穀を斷ちし疲れさへ、我を忘れて白絲の瀧を目掛けて一心不亂、止むる同宿突きのけ蹴のけ。

ト此うち床のメリヤス、誂への鳴物にて、市兵衛○、△の同宿を相手に、よろしく立廻りあつて、又瀧の前の岩へ登り、瀧にうたるゝこなし、○、△支へるを兩方へかゝる、是れにて兩人の額へ瀧の掛る思入にて、苦しむを左右へ突き倒す、兩人此儘倒れ居る、市兵衛きつとなつて、

市兵　南無大聖不動明王、大願成就なさしめたまへ〳〵。

〽瀧にうたるゝ市兵衛が心は皐月の時鳥、啼く音血を吐く如くなり、折から告ぐる子の刻の鐘かう〳〵と響くにぞ、思はず知らず滑り落ち。

やゝ、あの鐘は最早九ツ、今日結願の刻限なるに、今に赦免の沙汰なきは、不動明王の利益もなく願望叶はぬ上からは、梵字ヶ瀧に身を打ち碎き、爰に一命捨つるとも、我が魂魄は波濤を越えて島守りとなり、御主人の影身に添うて守護なさん。

〽死ぬる覺悟に身を惜しまず、息も絕え〳〵なる折柄、灯影を見當てに次郎兵衛親子、附添ふ者も勇ましく、宙を飛んで馳せ來り。

ト市兵衛死ぬる覺悟にて瀧にかゝる、水音烈しく、ばた〳〵になり、花道より德右衛門先きに弓張提

灯を持ち、次郎兵衛、千之助、お梅、九左衛門附いて出來り、直に舞臺へ來り、

徳右　や、市兵衛、爰にござつたか。

九左　これ悦ばつしやれ、次郎兵衛さまが、御赦免になつた。

千之　親仁さまが、お歸りなされたわいなう。

市兵　なに、旦那さまが御赦免になつた、あの旦那さまが、お歸りなすつた。

〽嬉しさ餘つて足腰立たず。

次郎　これ市兵衛、ようまあ無事で、居てくれたなあ。

市兵　あなたも御無事で、よくお歸りなされましたなあ。

次郎　おゝ、おれも嬉しい。

市兵　わしも嬉しい。

兩人　有難い／＼。

〽餘りの事の嬉しさに、互ひに暫し詞なく、譯も涙にくれけるが。

九左　一昨日次郎兵衛さまが御赦になり、姉ケ崎へお歸りなされ、隱居さまや市兵衛どのが、此の鎌倉にと聞くと、直に上總を發足して、唯今御着でござるわいなう。

徳右　これといふのも市兵衛どの、そなたの忠義が屆きしゆゑ。
次郎　多くの流人の其中で、赦免の數に入りたる次郎兵衛。
千之　知らぬ事とて今までも、家出して居つたなら。
お梅　此悅びは知るまいもの。
九左　親子主從一時に。
市兵　これもやつぱり、不動の御利益。
〽悅び勇むその所へ、お澤を伴ひ宗次郎、息せき切つて馳せ來り。
お澤　次郎兵衛さま、皆の衆。
宗次　お久しうござりました。
〽言ふに皆々、不審の思ひ。
次郎　や、死罪と聞きし宗次郎が、どうして爰へ。
九左　ほんにこなたは宗次郎、こりやまあ夢ぢやござらぬか。（ト不審のこなし、徳右衛門弓張を差出し、）
宗次　これ皆の衆、不審は尤も、八年跡の騷動に既に死罪となるべき所、主水さまの仰せには、汝は人をあやめしなれども、全く事の間違ひゆゑ、一先づ此場を立ち退き、やがて次郎兵衛歸鄕まで、

姿をやつし忍び居り、母にも便りいたすなと、殊に幸ひわれに似たりし科人を宗次郎なりと死罪に行ひ、掟を立つると有難い情のお詞、萩原さまの仰せには、命を助け遣す上は、九左衛門を親とも思ひ、生涯養育せよとのお詞。

徳右　双方承知の上からは、其の仲人は徳右衛門。

千之　これといふのも、萩原さまの、

市兵　仁心深き皆お情、

皆々　えゝ、有難う存じまする。（ト皆々悦ぶこなし。）

〽時しも異香四方に薫じ、漲る瀧に金色の、梵字あり〳〵拝まるれば。

ト音樂ドロ〳〵になり、瀧の間へ誂への不動の梵字顯はれる。

次郎　あれ、あの、漲る瀧にあり〳〵と、浮びし梵字は不動明王。

市兵　一度降魔の利劍にて、

九左　其身を貫く苦しみも、

宗次　忽ち障碍退散なし、

徳右　多年の歎きも一時に晴れし、

千之　忠孝慈悲の御恵みゆゑ、

お梅　結ぶ縁の親子主從、

お澤　世の憂き事を墨染と、

次郎　救はせたまふ縛の繩、

市兵　あら有難や、（ト此時仕掛にて梵字へ光明さす。）

皆々　忝けなや。

〽梵字の光り諸共に、忠義は世々に輝けり。

ト大ドロ／＼、樂にて、双方引つぱりの見得よろしく。これにて、

目出度く打出し

上總市兵衛（終り）

（附錄）主なる興行年表

兒雷也

年月	座名	名題	兒雷也	勇美之助	夜叉五郎	鹿六	富貴太郎	仙素道人	菖蒲太夫	越路
嘉永五年七月	河原崎座	兒雷也豪傑譚話（じらいやがうけつものがたり）	八世市川團十郎	嵐璃寛	市川九藏	淺尾奥山	市川九藏	市川九藏	岩井粂三郎	岩井粂三郎
元治元年一月	大阪角座	けいせい兒雷也譚話（じらいやものがたり）	尾上多見藏	三桝梅吉	嵐鱗子	淺尾奥山	市川流十郎	淺尾奥山	市川團之助	中村千之助
明治三年一月	大阪堀江座	けいせい兒雷傑譚話（じらいやものがたり）	尾上多見藏	嵐和三郎	片岡我童	中村翫九郎	中村芝雀	嵐壽珏	片岡銀杏丸	なし
明治四年一月	守田座	三國一山曾我鏡（ほうらいさんそがのかほみせ）	河原崎權之助	中村翫雀	市川左團次	市川左團次	市川左團次	中村仲藏	岩井紫若	岩井紫若
明治七年一月	大阪筑後座	けいせい兒雷也譚話（じっいやものがたり）	實川延若	中村七賀助	嵐雛助	嵐義三郎	嵐雛助	中村七賀助	嵐三右衛門	嵐三右衛門
明治十四年八月	新富座	兒雷也豪傑物語（じらいやがうけつものがたり）	九世市川團十郎	坂東家橋	中村芝翫	中村鶴藏	坂東家橋	中村芝翫	なし	岩井半四郎
明治十六年一月	久松座	兒雷也豪傑物語（じらいやがうけつものがたり）	坂東家橋	市川照藏	坂東彦十郎	坂東彦十郎	市川照之助	坂東彦十郎	なし	中村かほる
明治二十九年一月	春木座	兒雷也豪傑物語（じらいやがうけつものがたり）	市川八百藏	市川猿之助	實川延鶴	市川猿之助	市川八百藏	市川助壽郎	實川延鶴	中村福芝

年月	座名	名題								
明治三十一年六月	明治座	兒雷也豪傑物語	市川團十郎	市川左團次	市川權十郎	市川左團次	市川權十郎	なし	岩井松之助	なし
明治三十六年一月	東京座	兒雷也豪傑物語	中村芝翫	坂東八十助	市川染五郎	尾上松助	市川染五郎	片岡市藏	なし	市川染五郎
大正三年六月	市村座	兒雷也豪傑物語	中村吉右衛門	尾上榮三郎	尾上菊五郎	中村東藏	坂東三津五郎	中村東藏	なし	なし
大正七年七月	歌舞伎座	兒雷也豪傑譚話	市村羽左衛門	中村福助	市川八百藏	市川段四郎	市川八百藏	なし	なし	なし

小狐禮三

年月	座名	名題＼役割	禮三	幸兵衛	駄右衛門	おオ	お絹	三太兵衛	弓平
元治元年十一月	市村座	小春穩沖津白浪	市村家橘	市川小團次	市川小團次	尾上菊次郎	尾上菊次郎	關三十郎	市川米五郎
明治四年九月	中村座	東海寄談首兒館	中村壽三郎	尾上菊五郎	尾上菊五郎	坂東三津五郎	坂東三津五郎	坂東太郎	坂東蓑助
明治十一年九月	中島座	東海名所噂珍猫	尾上幸藏	中村壽三郎	中村壽三郎	澤村曙山	澤村曙山	吉川路鳥	嵐桂子

骨よせ岩藤

年月	座名	名題＼役割	岩藤亡靈	又助	尾上	お柳	望月	求女	安田	大領	お露
萬延元年三月	市村座	加賀見山再岩藤	市川小團次	市川小團次	岩井粂三郎	岩井粂三郎	關三十郎	市村羽左衛門	河原崎權十郎	河原崎權十郎	中村歌女之丞

年月	座名	名題									
明治六年四月	中村座	梅柳櫻幸染（うめやなぎさくらのかざそめ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	岩井半四郎	岩井半四郎	中村仲藏	中村壽三郎	中村仲藏	澤村訥升	岩井紫若
明治二十九年五月	大阪角座	梅柳櫻幸染（うめやなぎさくらのかざそめ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村福助	尾上榮三郎	片岡我童	尾上菊之助	坂東彦十郎	中村鴈治郎	尾上榮三郎
明治二十八年四月	新富座	加賀見山再岩藤（かゞみやまごにちのいはふぢ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	中村福助	尾上榮三郎	尾上菊五郎	尾上菊之助	片岡市藏	尾上菊之助	中村福助
明治四十二年三月	歌舞伎座	梅柳櫻幸染（うめやなぎさくらのかざそめ）	尾上梅幸	市村羽左衛門	中村芝翫	尾上梅幸	市川八百藏	尾上菊五郎	市川猿之助	尾上榮三郎	澤村宗十郎
大正六年四月	市村座	加賀見山再岩藤（かゞみやまごにちのいはふぢ）	尾上菊五郎	尾上菊五郎	尾上菊次郎	尾上菊次郎	中村吉右衛門	守田勘彌	中村吉右衛門	中村東藏	河原崎權十郎
大正九年二月	歌舞伎座	加賀見山霞花道（かゞみやまかすみのはなみち）	尾上梅幸	市村羽左衛門	中村歌右衛門	吾妻市之丞	片岡市藏	市村龜藏	市川中車	市川三升	中村福助

上總市兵衛

年月	座名	名題	市兵衛	忠次	主水	茂右衛門	紫	次郎兵衛	お朧	宗次郎
慶應元年八月	中村座	上總棉小紋單地（かづさもめんこもんひとへおび）	市川小團次	河原崎權十郎	河原崎權十郎	市川左團次	岩井紫若	坂東龜藏	尾上榮三郎	松本錦升
明治三十年九月	大阪中座	上總木棉蔦單地（かづさもめんつたのひとへおび）	市川右團治	實川延三郎	實川延三郎	中村玉七	中村芝雀	嵐吉三郎	中村玉七	中村芝雀

大正十五年五月二十八日印刷
大正十五年五月三十日發行

著作權者印

『默阿彌全集第二十一卷』 非賣品

補修 河竹糸女

校訂編纂者 河竹繁俊

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者 和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者 堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所 常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所 春陽堂



